鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　11

平成６年度発掘調査報告

（第２分冊）

平成７年３月

鎌倉市教育委員会

総　目　次

（第１分冊）

序文 …… Ⅰ
例言 …… Ⅱ
平成６年度の概観 …… Ⅴ

１．名越ケ谷遺跡（大町四丁目1880番６外地点）
第一章　歴史的環境 …… 5
第二章　検出した遺構の概要 …… 5
第三章　出土した遺構と遺物 …… 7
第四章　まとめ …… 9
２．笹目遺跡（笹目町302番5地点）
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 19
第二章　検出した遺構と出土した遺物 …… 19
第三章　まとめ …… 40
３．米町遺跡（大町二丁目2315番外地点）
第一章　調査地点概観 …… 55
第二章　調査の概要 …… 61
第三章　調査結果 …… 65
第１節　遺構面の概要と層序 …… 65
第２節　検出遺構と出土遺物 …… 67
第四章　まとめ …… 120
４．名越ケ谷遺跡（大町三丁目1217番1地点）
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 145
第二章　調査の概要 …… 146
第三章　検出された遺構 …… 149
第四章　出土遺物 …… 158
第五章　まとめ …… 175
５．由比ケ浜南遺跡（長谷二丁目118番2外地点）
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 193
第二章　調査の経過と堆積土層 …… 196
第１節　調査の経過 …… 196
第２節　堆積土層 …… 197

第三章　検出された遺構と出土した遺物 ……198
第１節　中世の遺構と遺物 ……198
第２節　古代の遺構と遺物 ……207
第四章　まとめと考察 ……214
6．若宮大路周辺遺跡群（由比ガ浜一丁目123番5地点）
第一章　調査地点の位置と歴史的環境 ……231
第二章　調査の概要 ……234
第三章　調査結果 ……237
第四章　まとめ ……246

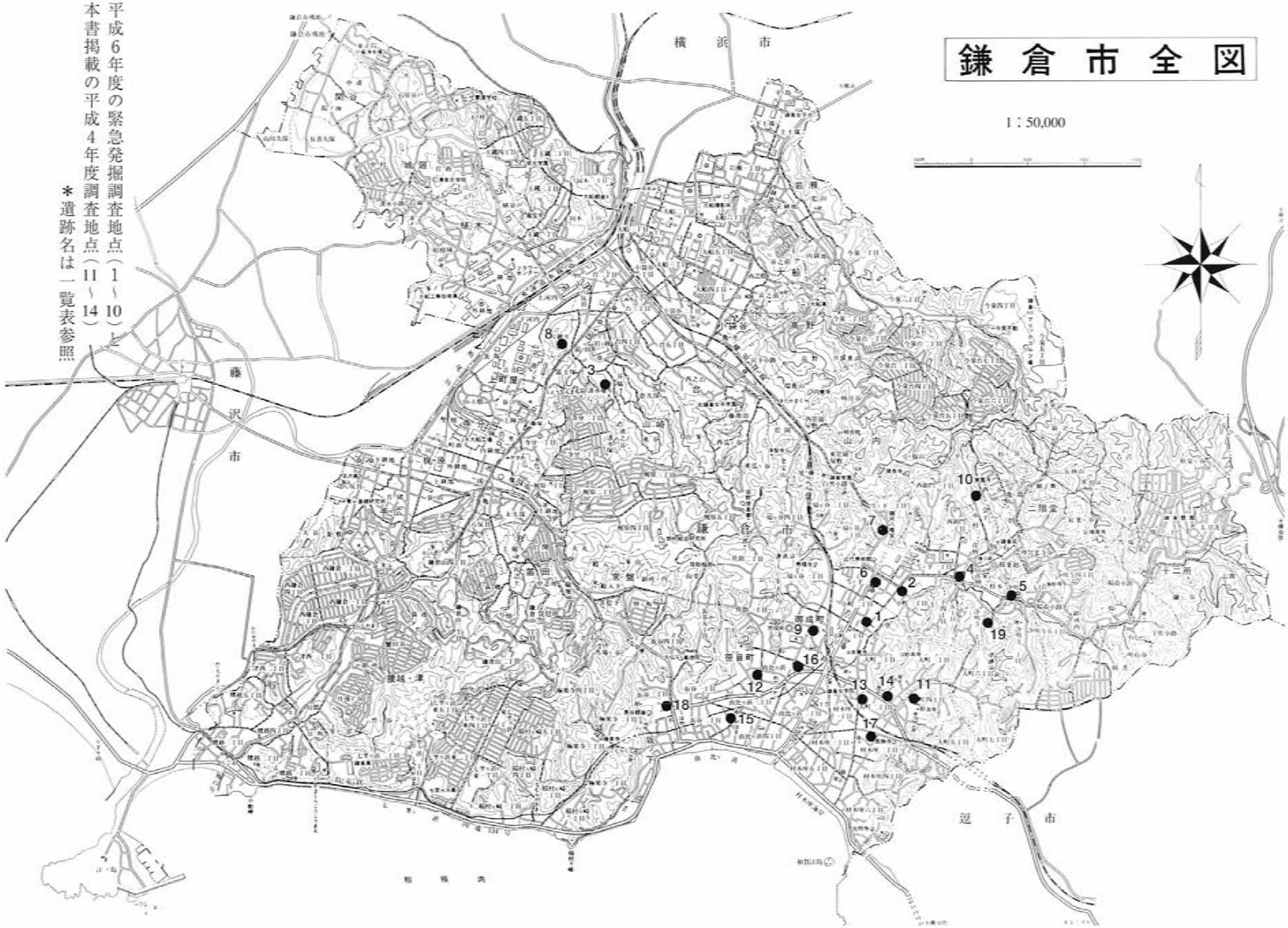
（第２分冊）

7．材木座町屋遺跡（材木座二丁目217番6地点）
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 12
第二章　調査の経過と堆積土層 …… 15
第１節　調査の経過 …… 15
第２節　堆積土層 …… 16
第三章　検出された遺構と出土した遺物 …… 18
第１節　検出され遺構 …… 18
第２節　出土した遺物 …… 34
第四章　まとめと考察 …… 65
8．長谷観音堂周辺遺跡（長谷三丁目97番4地点）
第一章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 87
第二章　発見された遺構と遺物 …… 92
第１節　中世（第４面） …… 92
第２節　近世（第３面） ……100
第３節　近代（幕末～明治　第２面） ……133
第４節　近代（明治～大正　第１面） ……141
第５節　その他の出土遺物 ……157
第６節　出土動物遺存体 ……160
第７節　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石 ……186
第８節　長谷観音堂周辺遺跡の粒度分析 ……196
第三章　まとめ ……204
9．上杉氏憲邸跡（浄明寺一丁目699番外地点）
第一章　調査地点概要 ……219
第二章　調査の概要 ……224
第三章　調査結果 ……226
第四章　まとめ ……268

鎌倉市全図

1：50,000

平成6年度の緊急発掘調査地点（1～10）と
本書掲載の平成4年度調査地点（11～14）
＊遺跡名は一覧表参照



7．材木座町屋遺跡（Ｎｏ．２６１）

鎌倉市材木座二丁目217番6外地点

例　言

1．本報は鎌倉市材木座二丁目217番６外に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は平成５年９月10日～10月16日である。

3．本報の執筆・編集は瀬田哲夫が行った。また、検出遺構・出土遺物の実測、トレース、拓本には吉田桂子の協力を得た。

4．本報に使用した写真は遺構、遺物ともに瀬田が撮影した。遺構全景写真はリモコン式高所撮影装置により木村美代治が撮影した。

5．調査体制

調　査　員　瀬田哲夫

調査補助員　根本志保、辻きよ子、八杉陽子、松原康子、宮本宣子、吉田桂子

作　業　員　西川秋雄、岸名富雄、山口一義、増田保、川村四志男、石渡辰男

6．発掘調査、及び、報告書作成にあたり次の諸氏に御協力、御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

中野晴久（常滑市民族資料館）、後藤建一（湖西市教育委員会）、藤沢良祐（瀬戸市教育委員会）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、手塚直樹、河野眞知郎、斉木秀雄、大河内勉、菊川英政、汐見一夫（鎌倉考古学研究所）

7．本遺跡に関する発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……12

第二章　調査の経過と堆積土層……15

第１節　調査の経過……15

第２節　堆積土層……16

第三章　検出された遺構と出土した遺物……18

第１節　検出された遺構……18

Ⅰ．第１面検出遺構……18

Ⅱ．第２面検出遺構……20

Ⅲ．第３面検出遺構……28

第２節　出土した遺物……34

Ⅰ．イコウ出土遺物……34

Ⅱ．トレンチ掘り下げ出土遺物……46

第四章　まとめと考察……65

表　目　次

表１．検出遺構一覧表（１）……30

表２．検出遺構一覧表（２）……31

表３．検出遺構一覧表（３）……32

表４．検出遺構一覧表（４）……33

挿　図　目　次

図１．鎌倉市全図と調査地点……11

図２．調査地点、及び、周辺の遺跡……13

図３．グリット軸設定模式図……15

図４．グリット割付図……16

図５．遺構全体図（第２面）、及び、セクション図……19

図６．調査区北部遺構群（第１面）……20

図７．Ａ・Ｂ－６・７・８かわらけ出土状況（第１面）……21

図８．Ａ・Ｂ－２・３・４遺構図（第２面）……22

図９．Ａ・Ｂ－３・４・５・６遺構図（第２面）……23

図10．Ａ・Ｂ－６・７・８遺構図（第２面）……24

図11．Ａ・Ｂ・Ｃ－８遺構図（第２面）……25

図12．Ｃ・Ｄ・Ｅ－８・９遺構図（第２面）……26

図13．第２面遺構エレベーション……27

図14．Ａ・Ｂ－３・４・５・６・７遺構図（第３面）……28

図15. A・B－3・4炭範囲（第3面）……29
図16. イコウ出土遺物（1）……35
図17. イコウ出土遺物（2）……36
図18. イコウ出土遺物（3）……38
図19. イコウ出土遺物（4）……40
図20. イコウ出土遺物（5）……42
図21. イコウ出土遺物（6）……44
図22. イコウ出土遺物（7）……46
図23. Wトレンチ北・中部1・2次掘り下げ出土遺物……47
図24. Wトレンチ北部3・4・5次掘り下げ出土遺物……49
図25. Wトレンチ中部3・4次掘り下げ出土遺物……50
図26. Wトレンチ中部5次、南部1次掘り下げ出土遺物……52
図27. Wトレンチ南部2次掘り下げ出土遺物（1）……54
図28. Wトレンチ南部2（2）・3次掘り下げ出土遺物……55
図29. Wトレンチ南部4・5次掘り下げ出土遺物……57
図30. Sトレンチ1・2・3次掘り下げ出土遺物……58
図31. Sトレンチ4次掘り下げ出土遺物……60
図32. Sトレンチ5次掘り下げ出土遺物……61
図33. Wトレンチ風成砂層掘り下げ、及び、炭範囲出土遺物……62
図34. 表採遺物、及び、貝類……64
図35. 出土遺物構成……66

写真図版目次

図版1 1．調査区近景。2．第1面、A・B－1～3。3．同、かわらけ出土状況。……67
図版2 1．第2面遠景スナップ。2．第2面全景（北から）。3．同、南から。……68
図版3 1．Sトレンチ（西から）。2．同、東から。3．E－9、鎌倉石出土状況。……69
図版4 1．イコウ48（北から）。2．同、セクション。3．イコウ19セクション。……70
図版5 1．イコウ75。2．イコウ25・50。3．イコウ24……71
図版6 1．イコウ25・65・73。2．イコウ80。3．同、セクション。……72
図版7 1．A・B－8検出状況。2．イコウ39。3．A～C－8検出状況。……73
図版8 1．B－8検出状況。2．イコウ95。3．イコウ99。……74
図版9 1．南壁セクション。2．西壁セクション。3．第3面ピット列セクション。……75
図版10 1．第3面ピット列。2．同、炭範囲。3．炭範囲セクション。……76
図版11 出土遺物（1）……77
図版12 出土遺物（2）……78

図１　鎌倉市全図と調査地点

第一章　遺跡の位置と歴史的環境（図１、２）

本調査地点は材木座町屋遺跡（No.261）と呼称される区域に所在する。地番は鎌倉市材木座二丁目217番６他（図１－１）である。鎌倉旧市街地の南東部に位置しており、JR鎌倉駅から南へ1.5Km、材木座海岸から北へ約750mの距離にある。現在の若宮大路下馬四つ角から逗子へ向かう国道134号線は大町大路と推定されており、名越の切通しをぬけ、三浦へと通じる重要な道筋であった。本地点はこの名越の切通しを含む、西に大きく開口する谷戸の南部入り口付近、国道134号線の南を東西に走る横須賀水道路に面し、由比若宮と長勝寺とのほぼ中間に位置している。

名越坂は鎌倉七切通しの一つであり、三浦へとぬける重要な道筋である。これは相模の国より海を越えて安房へ通じる旧東海道と考えられている。鎌倉～逗子間の北東側尾根には、約800mにおよぶ大切岸が構築されている。鎌倉における他の切通しと同様に、外敵に対する防御施設としての機能が考えられている。

由比若宮は康平６年（1063)、源頼義が勅定により奥州の安倍貞任征伐の後に石水八幡宮を勧請し、瑞籬を由比郷に建て鶴岡若宮と称し、永保元年（1081）源義家が修復を加えた。治承四年（1180）源頼朝が現在地の小林郷北山に遷座するまで当地で祀られ、遷座後も当地に社壇の祭祀は続けられ、下ノ若宮とも、元八幡とも称された。

長勝寺は石井山長勝寺と号す。京都本圀寺旧地に日静が貞和元年（1345）に寺を再興し、石井山長勝寺と名づけたとも、或いは、石井長勝が日蓮に帰依して長勝寺を建立したとも伝える。祖師堂は室町時代の唐様建築であり、県重要文化財に指定されている。他に、大壇・燭台・鰐口が県重要文化財、懸盤が市指定文化財となっている。

本遺跡の北側は米町遺跡と称される区域である。『吾妻鏡』建長３年（1251）と文永２年（1265）に町屋免許の地のひとつとして挙げられており、商業の中心的な地域と考えられる。

また、南方約1.1kmには当時の交易港である和賀江島が所在している。和賀江島は往阿弥陀仏が築島を発心し、執権北条泰時の援助により貞永元年（1232）に完成した。島の維持・管理は忍性以来、極楽寺の長老があたっており、前浜一帯の権利を極楽寺が掌握していたことがわかる。

材木座町屋遺跡と称される遺跡群内では、すでに４地点で調査が行われている。いずれも、小規模な範囲の調査であるが、以下、各調査地点を概観していきたい。

「長勝寺遺跡（材木座二丁目12番17地点)」(図２－２）は、本地点の東方約250mに位置している。14世紀後半から15世紀中頃の土壙墓群と、13世紀末～14世紀前半の掘立柱建物址と土間状遺構を検出している。土間状遺構は短期間に造り替えられ、「簡単な小屋がけ」の建物と考えられている。「屋敷内に営まれた小町屋のものである可能性はかなり強い」と指摘されており、町屋として使われていた空間が、墓域へと変貌していくという調査成果が得られている。

本地点から西へ約250mに所在する「材木座一丁目144 番 3地点」(図２－３）では、路地的な小路に伴う小規模な溝や、柵列状の柱穴列、土壙、井戸などを検出している。狭いトレンチ調査であり、部分的な検出であるが、町屋的な性格を有する遺構群と考えられる。13世紀中頃～14世紀代に営まれた遺構群と考えられている。

「材木座四丁目260番１外地点」(図２－４）は、本地点の南方約350mに位置している。鎌倉市内で今までに調査された遺跡の中で、最も和賀江島に近接している。狭いトレンチ調査ではあるが、溝、土

1. 材木座二丁目217番6他地点（本調査地点）
2. 材木座二丁目12番17地点
3. 材木座一丁目144番3地点
4. 材木座四丁目260番1外地点
5. 由比ケ浜二丁目1034番1外地点（若宮ハイツ）

図2　調査地点、及び、周辺の遺跡

壙、方形土壙、そして、方形竪穴建築址などの遺構が検出されている。15世紀末～16世紀代の遺物も出土しており、本遺跡群における当該期の遺構の広がりについては、今後の課題である。

材木座町屋遺跡ではないが、本遺跡の約700m西、滑川西岸に所在する「由比ケ浜二丁目1034番１外地点（若宮ハイツ）」（図２－５）では、7000㎡という広大な敷地の発掘調査が行われている。中世の遺構群はⅠ期（14世紀代）・Ⅱ期（13世紀代）に区分されており、Ⅰ期では道路状遺構と方形竪穴建築址を主体とする建物群が、Ⅱ期では柵状遺構と掘立柱建物が検出されている。中世集団墓地遺跡群と称される区域内の遺跡であり、埋葬された人骨も多数検出されている。Ⅰ期で検出された道路状遺構は、現在の若宮大路とほぼ同じ位置にあり、主要道として機能していたものと考えられる。

以上、周辺遺跡の調査結果を概観してきた。材木座町屋遺跡からは、町屋的な性格の強い遺構群が検出されていると考えられる。

【参考文献】

『鎌倉事典』　白井永二編　東京堂出版　1986年５月
『長勝寺遺跡』　長勝寺遺跡発掘調査団　㈱かまくら春秋社　1978年10月
『中世鎌倉の発掘』　大三輪龍彦他　㈱有隣堂　1983年９月
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書６』　鎌倉市教育委員会　1990年３月
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書７』　鎌倉市教育委員会　1991年３月
『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書９』　鎌倉市教育委員会　1993年３月

第二章　調査の経過と堆積土層

第１節　調査の経過（図３・４）

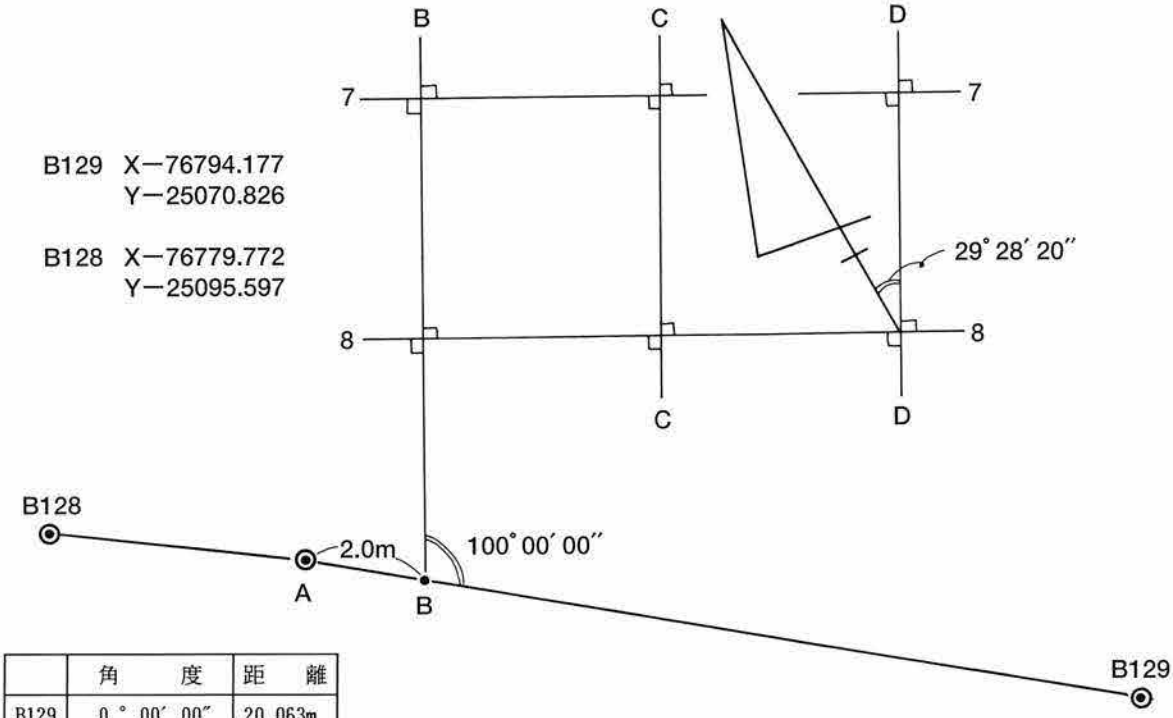
本調査は開発事業に伴う道路の拡幅に係る国庫補助事業緊急調査として平成５年９月10日から10月16日にかけて実施された。調査区は2.4m×26.0mと、1.2m×13.0mとの２本のトレンチがＬ字形に連なっており、調査総面積は約80㎡である。現地表の海抜レベルは8.0m前後であり、西に向かい緩やかに傾斜している。

調査は表土掘削から人力により行った。40～50cm程堆積する表土層を除去すると中世遺物包含層となり、一部では風成砂層である灰黄色砂を確認している。この時点で遺構検出を行い、ピット：５口、土壙：１基、及び、かわらけ一括廃棄遺構を検出した（第１面）。

次に、調査区内全体を風成砂層の上面まで掘り下げ、ピット：約40口、土壙：26基、方形土壙：２基、方形竪穴建築址：２棟、溝状土壙：８基を検出した（第２面）。各遺構の配置は方形竪穴建築址が集中する場所と、土壙が集中する場所とに分かれるようだが、狭い調査範囲内では判断し難い。

さらに、風成砂層を掘り下げ遺構の確認を行った結果、６口のピットと炭が集中する範囲を検出した（第３面）。第２面とは明らかに間層をはさんでおり、確実に時期差を掴むことができた。

また、風成砂層は地下水が湧く深度（海抜6.8m前後）までに８層ほどに分けることができ、南から北へ向かい緩やかに傾斜している。調査区南部では明黄色を呈し、道路のように硬く締まっている。今回の調査では中世以前の遺構は確認されていない。



	角　　度	距　離
B129	0 ° 00′ 00″	20.063m
B128	176 ° 18′ 13″	7.437m
B	0 ° 00′ 00″	2.000m

図３　グリット軸設定模式図

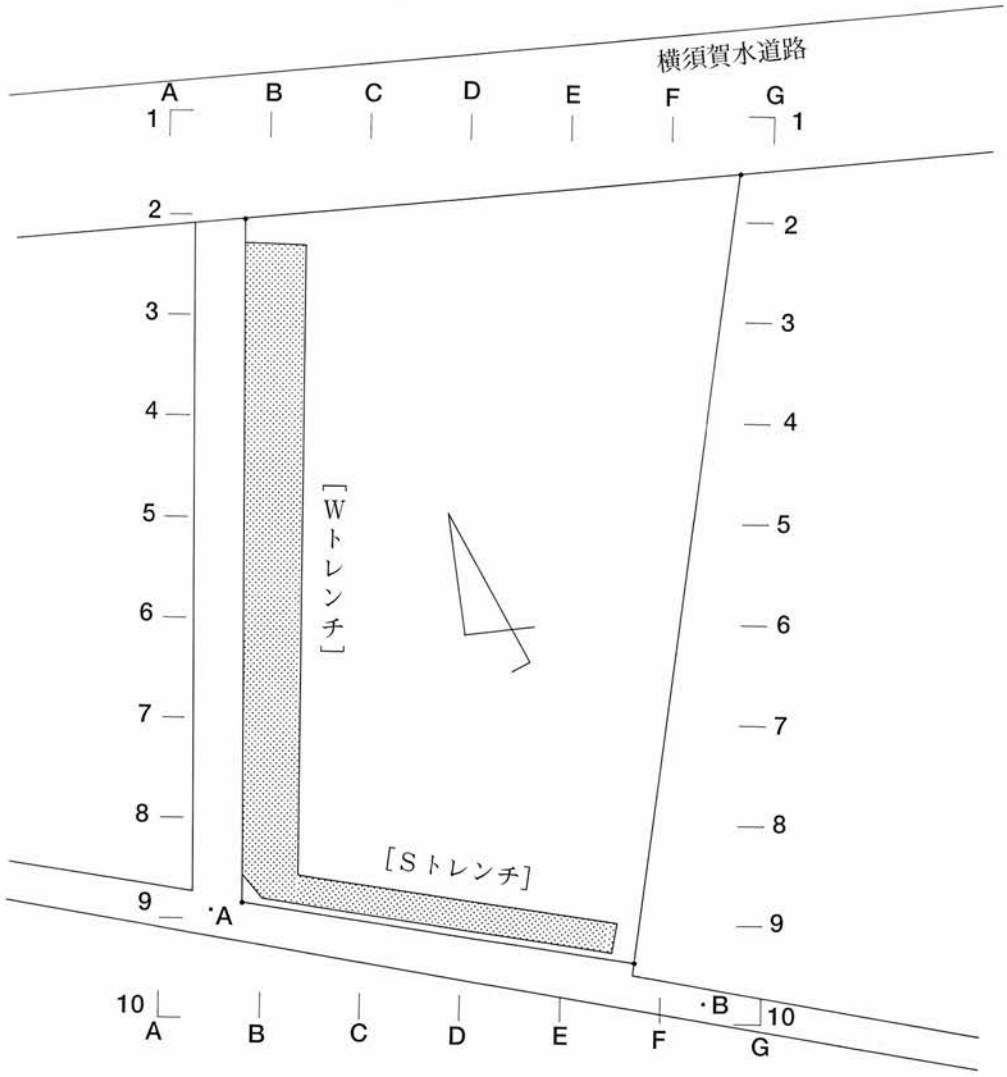


図4　グリット割付図

調査にあたり、調査敷地内に4.0mの方眼を設定した。設定の基準には鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市4級基準点を使用した。まず、任意のA点を基準に、鎌倉市4級基準点B129（X－76794.177、Y－25070.826）とB128（X－76779.772、Y－25095.597）との距離・角度を測定した。測定値は図3に示した。次に、A点とB129とを結んだ直線を基準とし、A点から東へ2.0mの場所にB点を設けた。B点を中心に反時計回りに100°00′00″振り、北へ4.0mの地点をB－8グリット・ポイントとした。方眼は4.0mとし、東西方向にはアルファベットを、南北方向には算用数字を付し、それぞれの方眼区画の呼称には北西角の軸線交点を使用した。尚、このグリット南北基準軸は磁北に対して29°28′20″東に傾いている。

第2節　堆積土層（図5）

本地点において検出された堆積土は、以下に挙げる18の土層に大分することが可能である。以下、個々の土層について説明を加えていきたい。

A．暗褐色粘質土。ガラス、炭粒etc.を含む。（表土）
B．明褐色粘質土。少量の土丹粒を含む。（以下、中世遺物包含層）
C．暗褐色粘質土。土丹粒、炭粒を含む。
D．黒褐色粘質土。土丹粒ほか遺物多し。
E．暗褐色粘質砂。少量の土丹粒を含む。
F．暗褐色細砂。有機質腐食土。少量の炭粒を含む。
G．灰黄色中砂。
H．暗灰褐色中砂。
I．明黄色粗～中砂。（やや硬化）
J．暗灰褐色中砂。
K．黒灰褐色中砂。
L．明黄色粗～中砂。
M．灰白色細砂。
N．灰白色粗砂。
O．明黄色中砂。硬化層。
P．灰黄色中砂。硬化層。
Q．明黄色細砂。硬化層。少量ではあるが炭粒、かわらけ（手づくね）片を含む。
R．明黄色粗砂。硬化層。貝殻細粒を含む。

図5に示した通り、上記の土層以外は全て、活発に営まれた遺構の覆土であり、G層以下の堆積層はは風成砂層と考えられる。I層以下は北へ向かい緩やかに傾斜している。

第1面の遺構は調査区北部で確認されたものであり、方形竪穴建築址であるイコウ19、48の覆土を掘り込んでいる。6～8グリットで検出されたかわらけ群は、表土直下から出土している。第1面の確認レベルは海抜7.5m前後である。

第2面の遺構群は風成砂層上面において検出されたものである。方形竪穴建築址、土壙、ピット、方形土壙、溝状土壙など数多くの遺構が検出されている。第2面の確認レベルは海抜7.4m前後である。

第3面の遺構はJ層上面で確認された柱穴と、A・B－3・4グリットで検出された炭範囲である。詳細は後で詳しく触れるが、第2面とは間層を挟み明らかに時期を画している。第3面の確認レベルは海抜6.9m前後であり、海抜6.7mほどで水が湧き、調査不可能となった。

第三章　検出された遺構と出土した遺物

今回の調査では第１～３面にわたる遺構面を検出することができた。表土掘削時から人力で行い、掘り下げ時の遺物の取り上げに関しても、細心の注意を払ってきた。狭いトレンチ調査であるが故に、各遺構群の帰属する面に関しては、セクション観察に重点を置いた。第３面に関しては特に平面的な調査は不可能であり推測の域を免れないが、今後の周辺地域における調査の参考のために提示するものである。本章では各面において検出された遺構・遺物について説明を加えていくが、Ｌ字形を呈する調査区を便宜上、Ｗトレンチ（南北方向）・Ｓトレンチ（東西方向）と称していく。また、出土遺物の法量は口径－底径－器高（単位cm）を図版中に掲載した。（　）内は復元数値である。

第１節　検出された遺構（図５～15）

本調査で検出された遺構群は第１～３面に区分することができる。以下、各遺構の検出状況について述べていくが、各遺構の形態、規模、覆土注記、新旧関係等については検出遺構一覧表として提示した（表１～４）。尚、遺構図版における丸付きの数字は遺構ナンバーを示している。

Ⅰ．第１面検出遺構（図６・７）

第１面の遺構は、40～50cmほど堆積した表土層を除去した段階で検出された。中世遺物包含層の上面において確認されている。調査区の全体から確認されたのではなく、Ｗトレンチの北部、及び南部においての検出である。確認レベルは海抜7.5m前後であり、検出された遺構はピット：５口、土壙：１基、そして、かわらけ一括廃棄遺構である。

１．ピット

平面形は隅丸方形、もしくは楕円形を呈しており、直径20～40cm、深さは20～30cm程である。柱穴と考えられるが、狭い範囲からの検出であり、建物を復元することは不可能である。

２．土壙

大半を試掘壙により失うが、平面形は楕円を呈するものと考えられる。直径1.2m前後と考えられる。底面からは鎌倉石（凝灰岩切り石）が検出されているが、本址に伴うものではない。

３．かわらけ一括廃棄遺構（図７）

Ｗトレンチ南部（Ａ・Ｂ－６～８グリット）において検出された。17点のかわらけと、砥石、研磨痕を有する常滑窯甕胴部片を出土している。試掘壙により削平を受けており、Ｂ－７グリットの状況は不詳である。本址の掘り形は確認されず、また、範囲についても不詳である。遺物は海抜7.4m～7.6mのレベルから検出されており、緩やかな傾斜面に投棄されたものと考えられる。

出土したかわらけは図７－３～12である。３～10は大皿、11・12は小皿であり、全てロクロ成形である。大皿は口径11.0～12.0cm程であり、体部はやや薄くなっている。図７－８は底部に穿孔を有している。穿孔は焼成後に行われている。

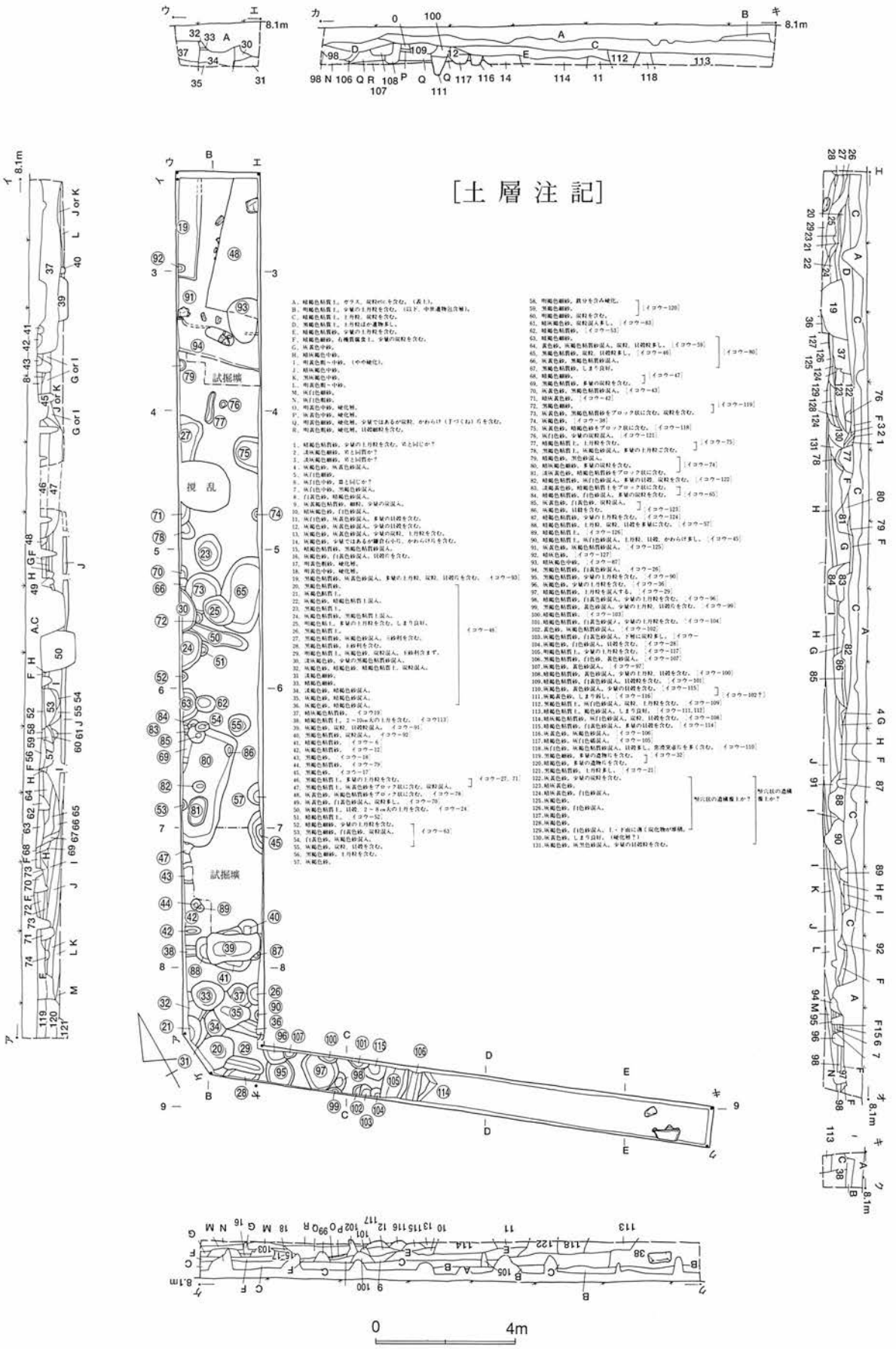


図5　遺構全体図（第2面）、及び、セクション図

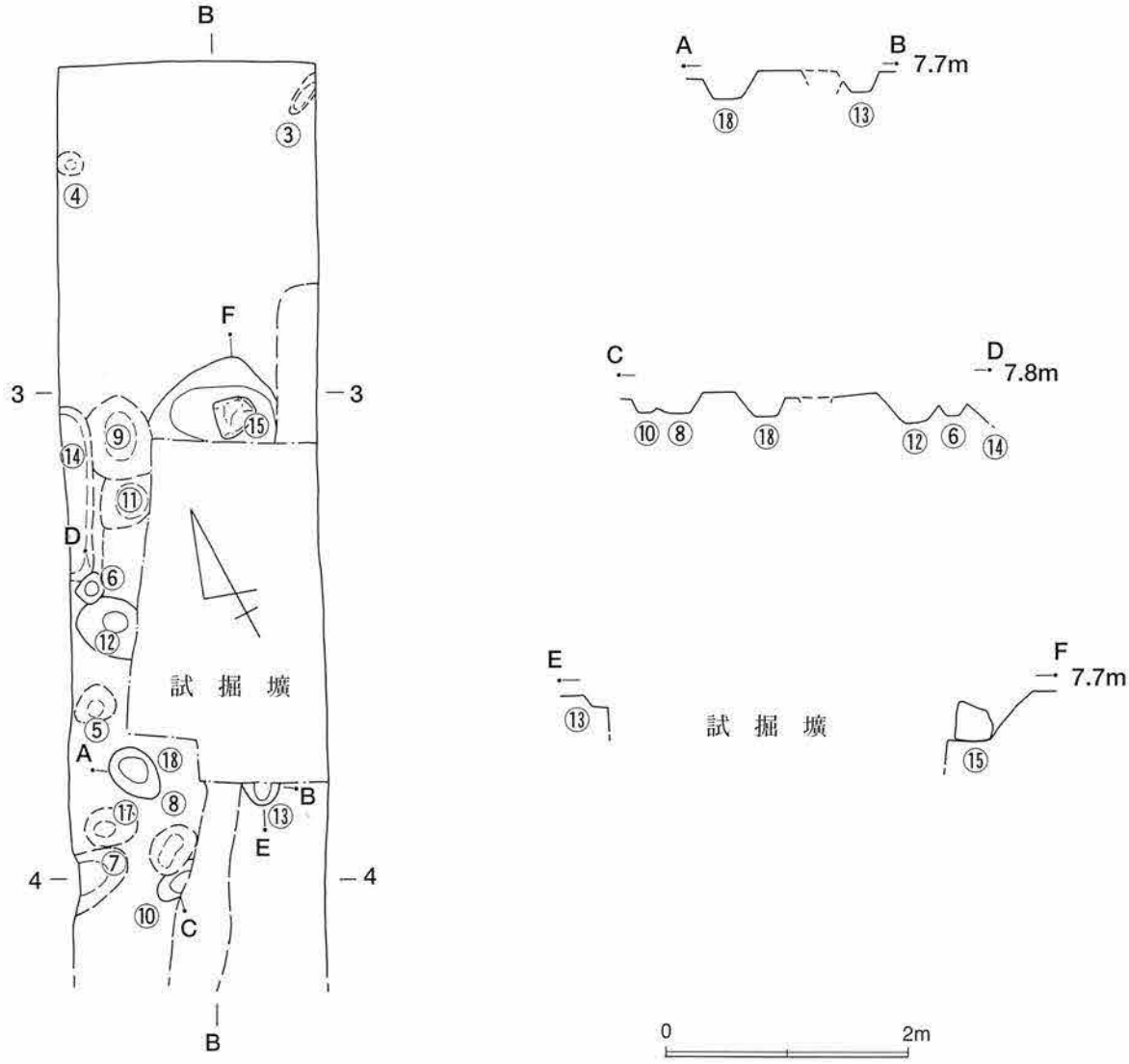


図６　調査区北部遺構群（第１面）

図７－１は研磨痕を有する常滑窯甕胴部片である。全外周が研磨され、曲面を呈している。

図７－２は砥石である。仕上げ砥と考えられる。

Ⅱ．第２面検出遺構（図５・８～13）

第２面は調査区内全体を風成砂層上面まで掘り下げ遺構確認を行った。検出された遺構はピット：約40口、土壙：26基、方形土壙：２基、方形竪穴建築址：２棟、溝状土壙：６基であり、本調査地点において最も盛んに遺構群が営まれた時期と考えられる。

１．ピット

約40口のピットを検出している。平面形は隅丸方形・楕円・不整円などであり、直径20～50cm程、深さは様々である。柱穴と考えられるが、狭い範囲の検出であり建物を復元することは不可能である。

２．土壙

調査区内において、土壙が集中的に検出されのはＡ・Ｂ－５グリットとＡ・Ｂ－８グリットの２箇所

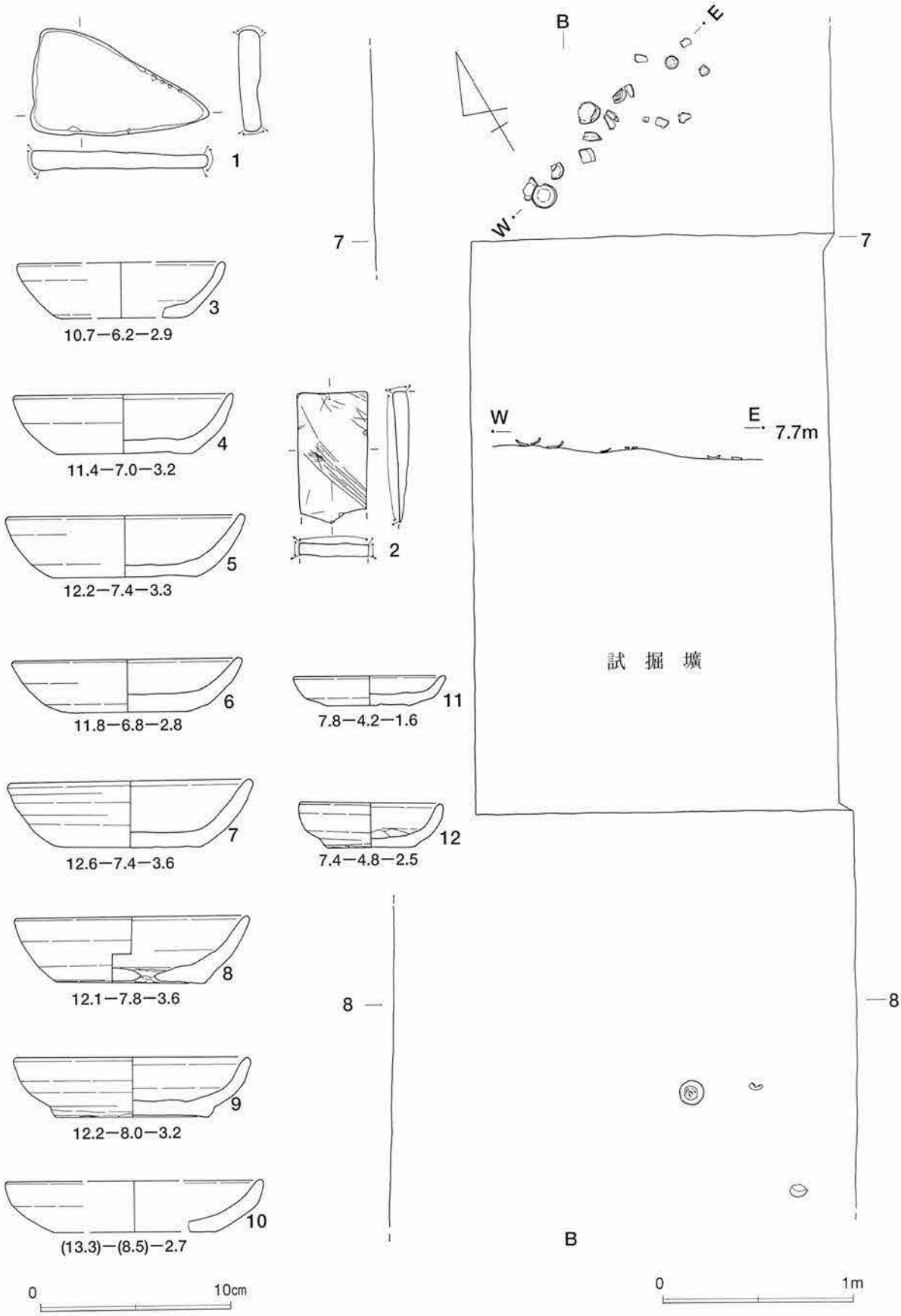


図7　A・B－6・7・8かわらけ出土状況（第1面）

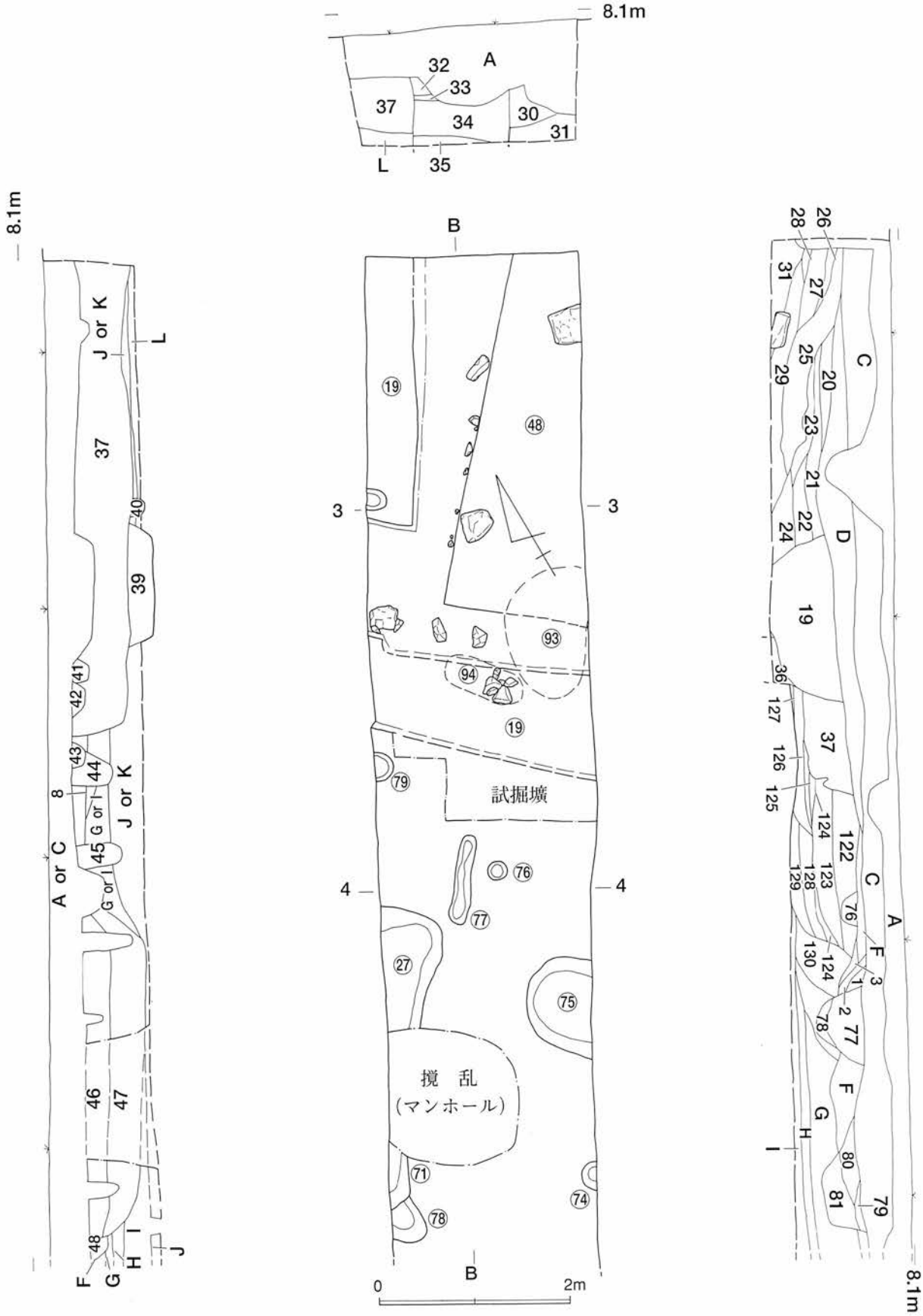


図8　A・B－2・3・4遺構図（第2面）

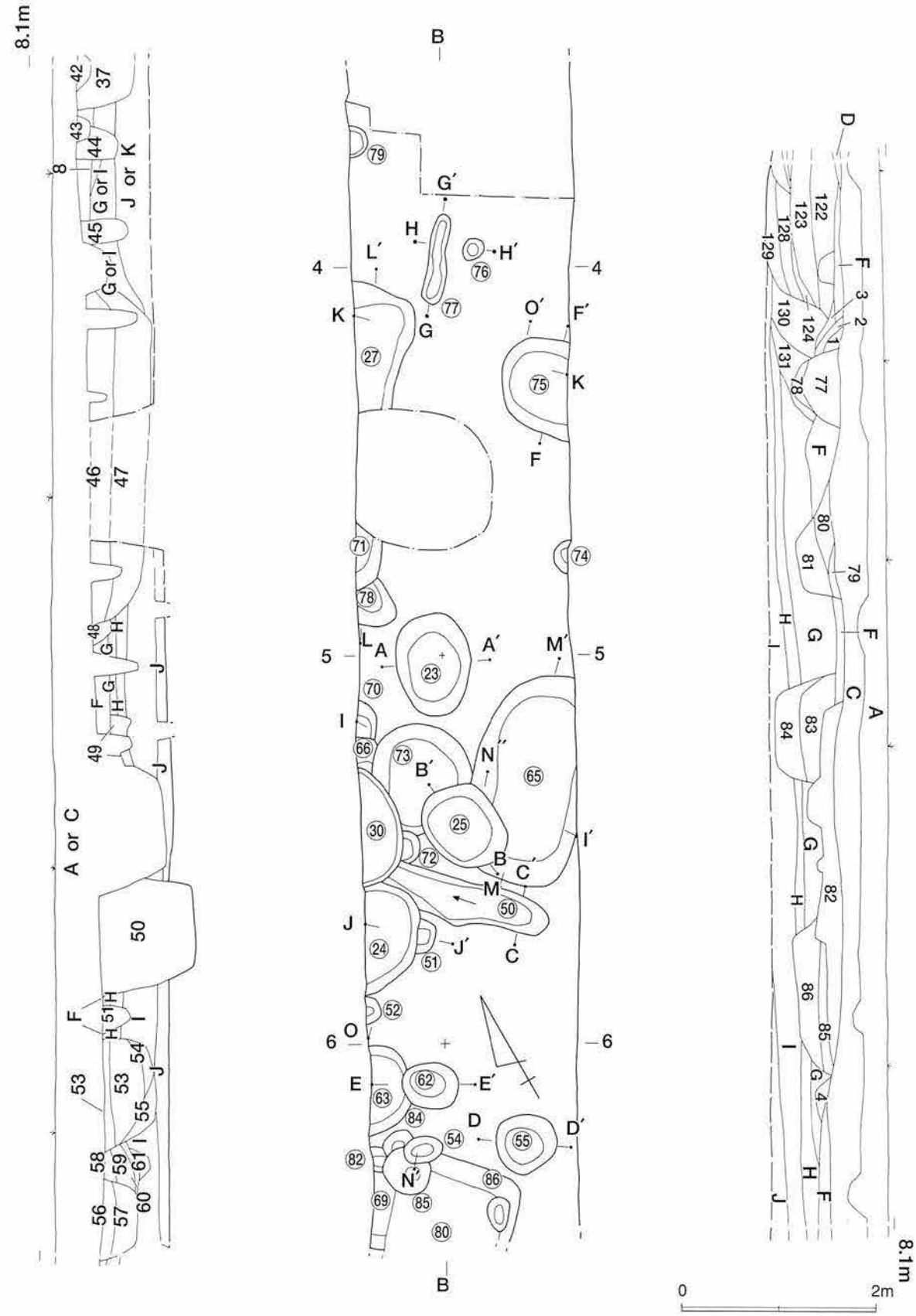


図9　A・B－3・4・5・6遺構図（第2面）

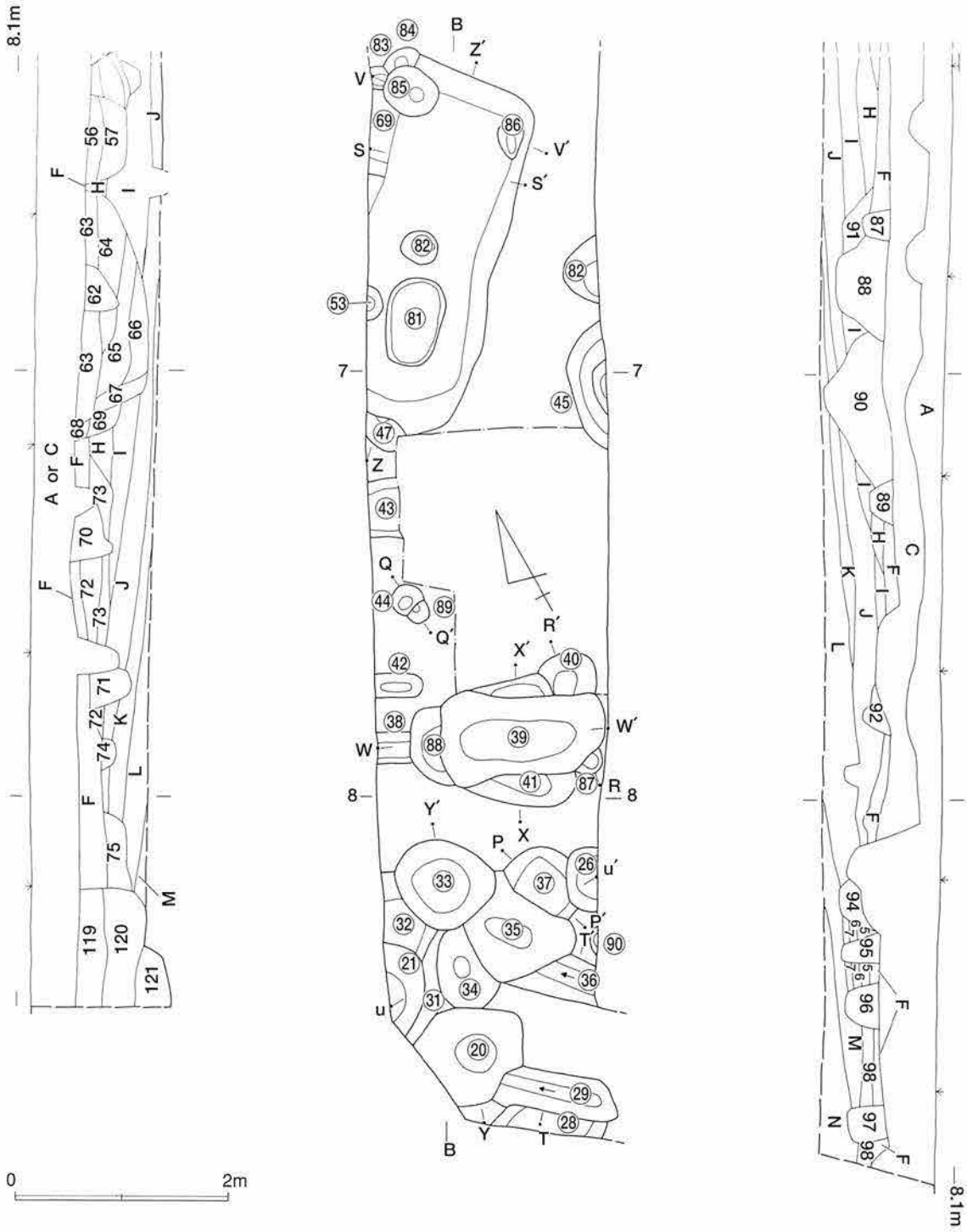


図10　A・B－6・7・8遺構図（第2面）

である。平面形は楕円・不整円・隅丸方形などであり、規模・深さも多様である。切り合い関係を有するものがほとんどであり、頻繁に作り替えが行われたと考えられる。検出された土壙のうち、軸方位と磁北との関係を計測できたものは以下の4基である。

・イコウ75（B－4グリット）：N－42°－E
・イコウ65（B－5グリット）：N－42°－E
・イコウ39（B－7グリット）：N－29°－E
・イコウ35（B－8グリット）：N－53°－E

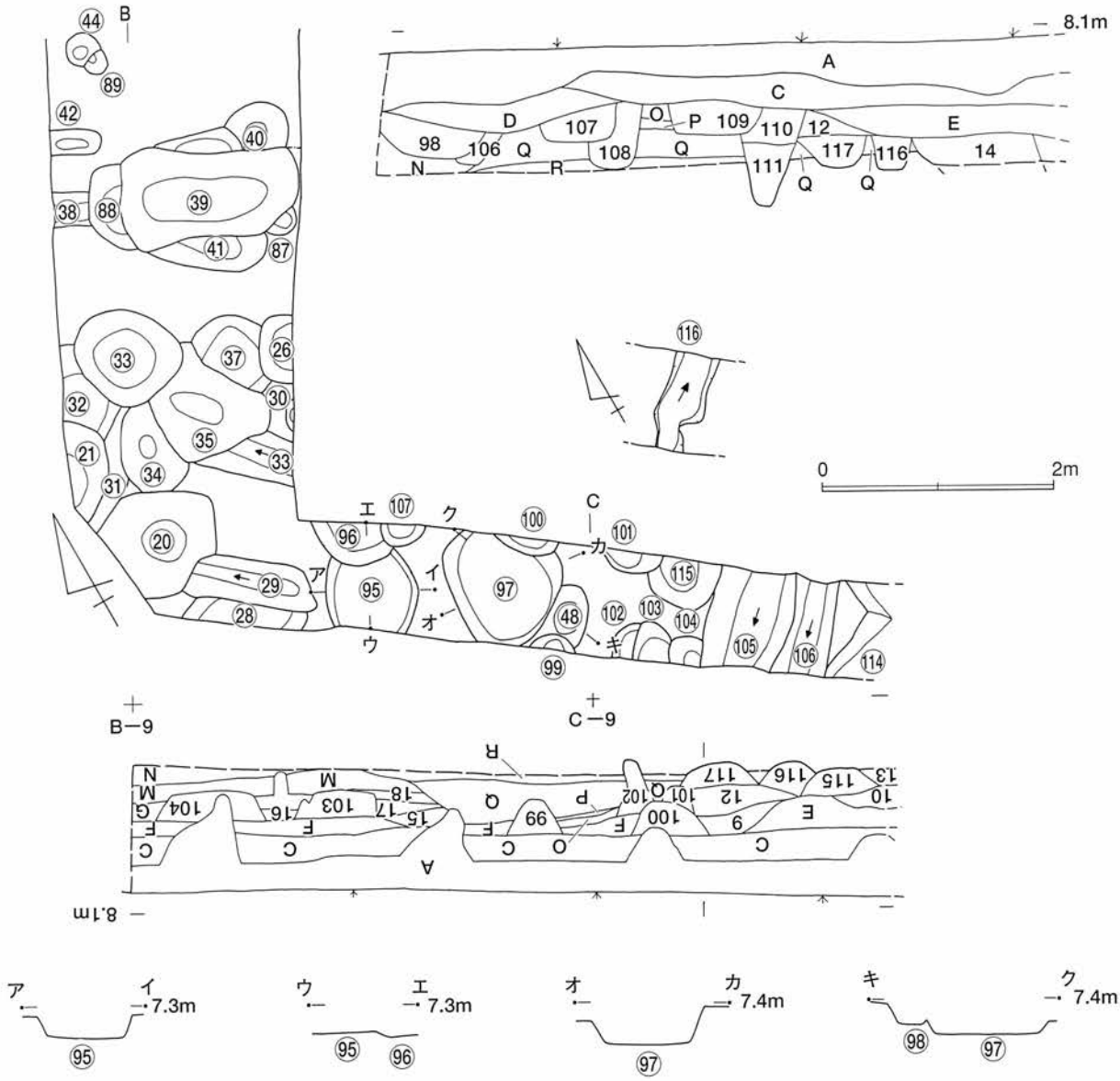


図11　A・B・C－8遺構図（第2面）

3．方形土壙

方形土壙として検出されたものは2基である。全体規模の解るものはイコウ８０だけであるが、掘り形底面で検出されているピットが本址に伴うかは不明である。以下、軸方位と磁北との関係を記す。

・イコウ２７・７１（A・B－４グリット）：N－37°－E

・イコウ８０（A・B－６・７グリット）：N－42°－E

4．方形竪穴建築址

方形竪穴建築址として検出されたものは、A・B－２・３グリットで確認されたイコウ１９と４８である。両址は切り合い関係を有し、１９は４８に切られている。

４８では厚さ１cm程の板壁の痕跡が確認された。鎌倉石（凝灰岩切り石）が掘り形底面近くから１点だけ出土している。海抜6.8m前後で水が湧き、完掘は不可能であったが、部分的に掘り形底面の海抜レベルを測定することができた。軸方位と磁北との関係はN－42°－Eである。

１９は南壁と掘り形底面のみの検出である。底面は平坦であり、柱穴等は確認されていない。

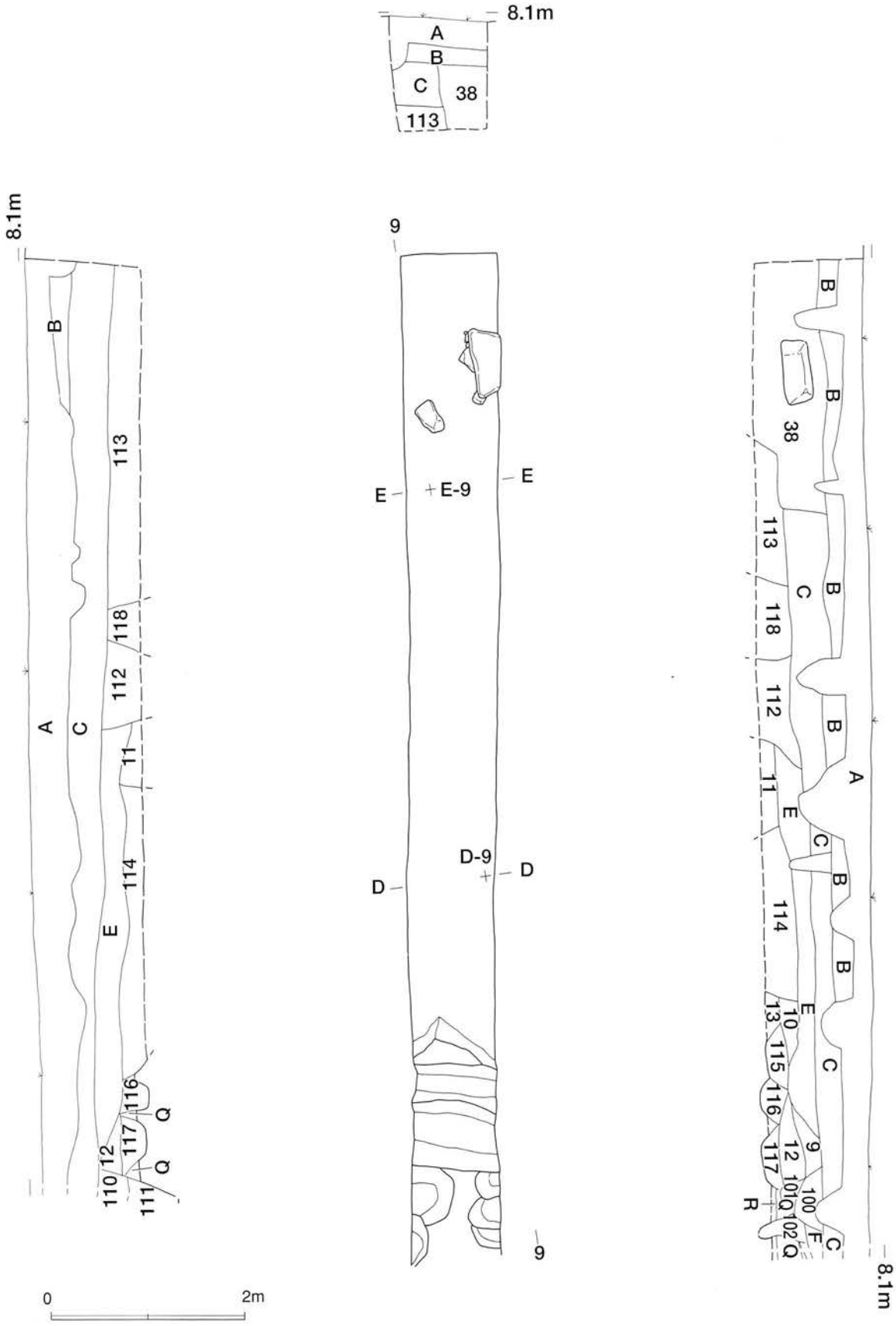


図12　C・D・E－8・9遺構図（第2面）

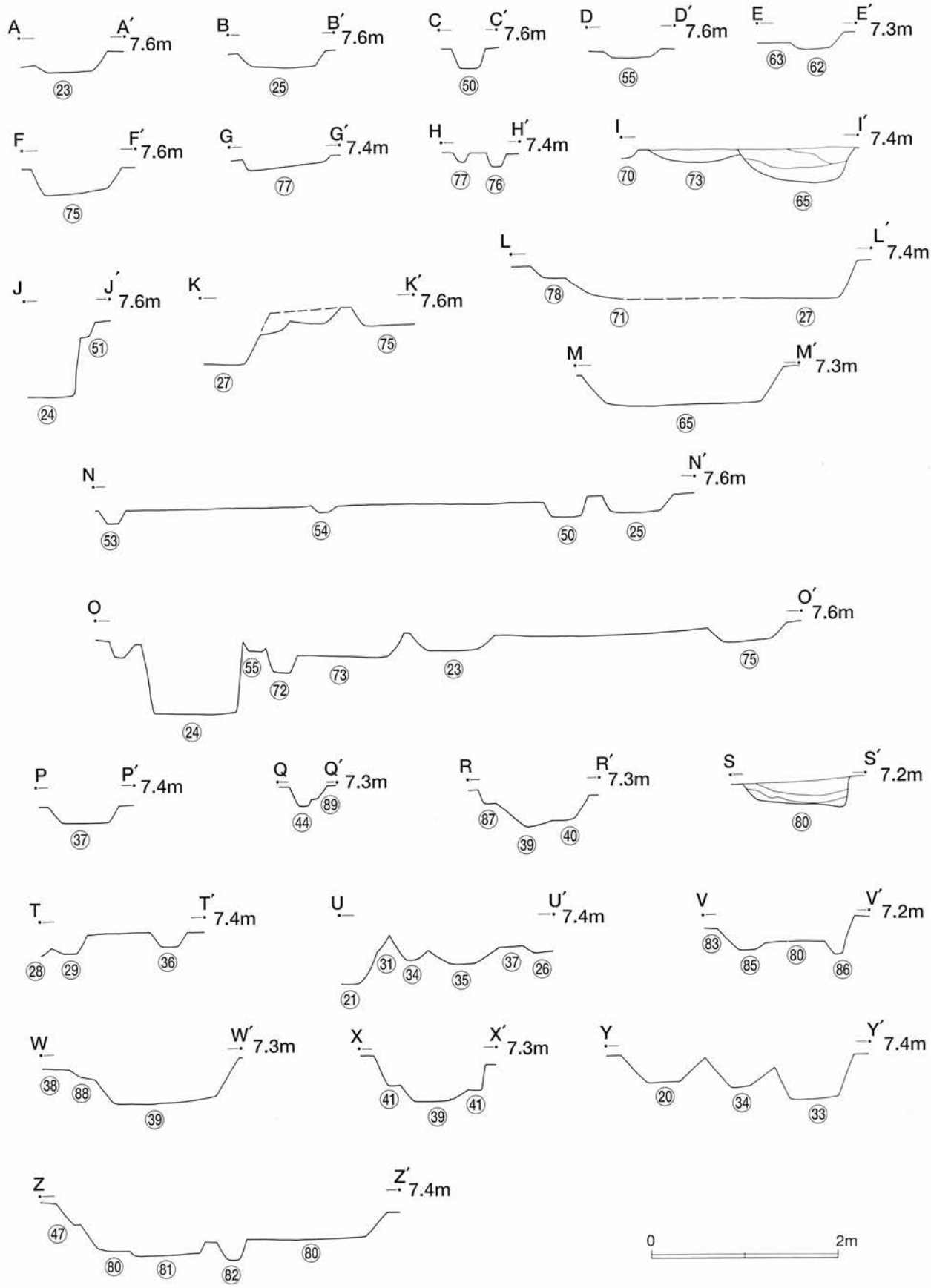


図13　第２面遺構エレベーション

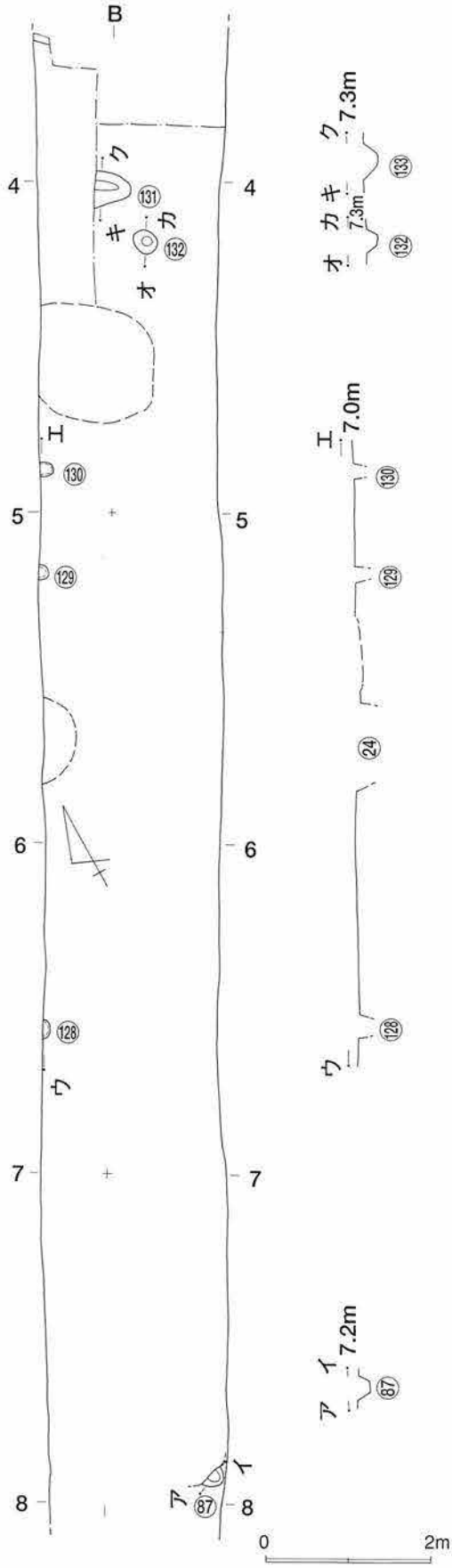


図14　A・B－3・4・5・6・7遺構図（第3面）

また、Sトレンチ東半部（D・E－8・9グリット）では、水の湧く深度まで掘削を行ったが、風成砂層は検出されなかった。調査区壁のセクション観察からは、方形竪穴建築址のような大きな掘り形を有する遺構の存在が推測できる。

5．溝状土壙

今回の調査では6基の溝状土壙を検出している。しかし、部分的な検出が多く、全体規模の解るものはイコウ77だけである。以下、軸方位と磁北との関係を記す。

・イコウ　77：N－39°－E
・イコウ　50：N－43°－W
・イコウ　36：N－37°－W
・イコウ　29：N－50°－W
・イコウ105：N－44°－E
・イコウ106：N－44°－E

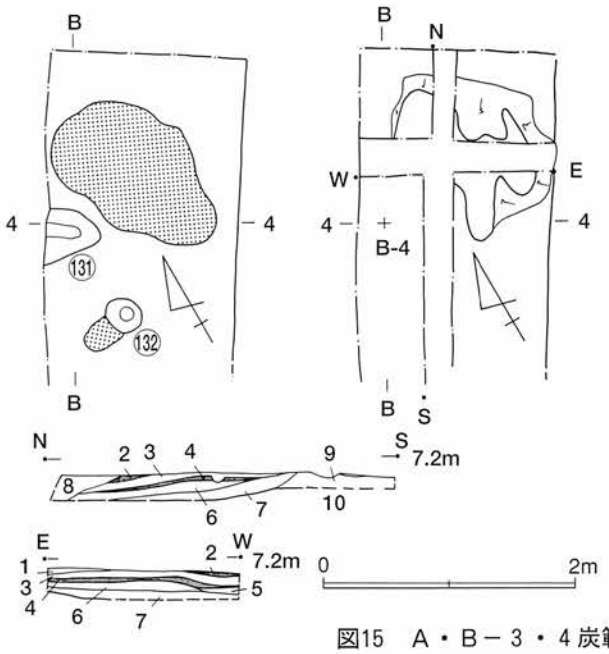
溝状土壙が集中的に検出されているのはB・C－8グリットである。この部分の中世基盤層（O～R層）を断ち割ると硬く締っており、通路として使われていた可能性が高い。また、溝状土壙と切り合い関係にある土壙は、全て土壙の方が新しいことが確認されている。

Ⅲ．第3面検出遺構（図14・15）

第2面の調査終了後、水の湧く海抜6.8m前後まで風成砂層を掘り下げ遺構の確認、及び、堆積土層の調査を行った。Wトレンチ（A・B－3～7グリット）において、海抜6.9 ～7.1mで6口のピットと炭が広がる範囲を検出した。

1．ピット

検出されたピットはイコウ87・128～132の6口である。調査区西壁際で検出された南北に並ぶ128・129・130は、芯～芯距離で北から1.25m、5.5mを測る。いずれもⅠ層の堆積以前に掘り込まれたものである。湧水のために完掘は不可能であったが、明確な掘り込みを有している。B－7



1. 暗褐色砂。
2. 炭、灰色粘土混入。
3. 暗褐色砂。小量の炭粒混入。
4. 炭、灰色粘土混入。
5. 暗褐色砂。小量の炭粒混入。
6. 黄色砂。しまり良好。
7. 暗褐色細砂。
8. 暗褐色細砂。
9. 暗褐色砂。しまり良好。
10. 暗褐色砂。しまり良好。

図15　A・B－3・4炭範囲（第3面）

グリットで検出された８７が上記の３口に関連する可能性もあるが、狭い範囲からの検出であり断定はできない。また、いずれのピットからも遺物は出土していない。

A・B－3・4グリットから検出された１３１・１３２は、次に述べる炭が広がる部分を掘り込んでいる。形態的には１３１は土壙というべきかもしれない。この２口からも遺物の出土は無い。

2．炭範囲

B－3・4グリットから検出されている。本址の北部はイコウ１９により削平され、崩落していると考えられる。確認時には1.5m×1.0m程の不整円を呈する範囲に炭が集中していた。確認レベルは7.1m前後である。十字にベルトを設定し堆積状況を観察すると、炭は２層確認された。南から北へ向かい緩やかに傾斜しており、数点の遺物が出土している（図３３参照)。尚、遺物の取り上げでは、ベルトにより四分割した範囲をA～Dと呼称した。調査区西壁のセクション観察から、イコウ１９の南に遺構が存在していた可能性があり、本址はその覆土の可能性がある。

No.	形 態	長径・短径・深さ(cm)	確認レベル(m)	底面レベル(m)	覆 土 注 記	新 旧 関 係
1	試掘壙					
2	試掘壙					
3	攪乱	(40.0)・ 13.0 ・ 12.0	7.53	7.41		
4	攪乱	25.0 ・ 20.0 ・ 15.0	7.49	7.34		
5	攪乱	30.0 ・ 30.0 ・ 34.0	7.64	7.30		
6	ピット	25.0 ・ 20.0 ・ 19.0	7.62	7.43	暗褐色粘質砂。しまり良好。	19を切る。
7	攪乱	(45.0)・ 40.0 ・ 24.0	7.54	7.30		17,27 を切る。
8	攪乱	43.0 ・ 30.0 ・ 17.0	7.64	7.47		
9	攪乱	65.0 ・ 50.0 ・ 22.0	7.58	7.36		
10	ピット	(35.0)・(13.0)・ 9.0	7.60	7.51	暗褐色粘質砂。	
11	攪乱	(42.0)・(40.0)・ 24.0	7.51	7.33		
12	土壙	54.0 ・ 50.0 ・ 15.0	7.61	7.46	灰褐色粘質砂。	19を切る。
13	ピット	30.0 ・(18.0)・ 31.0	7.59	7.28	黒褐色粘質砂。	
14	攪乱	140.0 ・(21.0)・ 24.0	7.60	7.36		
15	48 覆土	(109.0)・(70.0)・ 30.0	7.53	7.23	暗褐色粘質砂。	
16	土壙	(60.0)・(31.0)・ 17.0	7.55	7.38	灰褐色粘質砂。	
17	攪乱	45.0 ・ 33.0 ・ 50.0	7.60	7.10		7に切られる。
18	ピット	35.0 ・(30.0)・ 52.0	7.64	7.12	黒褐色砂。	79を切る。
19	方形竪穴	(540.0)・(227.0)・ 66.0	7.60	6.94	暗灰褐色粘質砂。	91,92 を切る。6,12,48,93に切られる。
20	土壙	(101.0)・ 92.0 ・ 32.0	7.31	6.99	黒褐色粘質砂。	29,31 を切る。
21	土壙	(60.0)・(50.0)・ 28.0	6.96	6.68	黒褐色粘質砂。土丹粒多し。	32に切られる。
22	=75				黒褐色粘質土。土丹粒含む。	
23	土壙	103.0 ・ 75.0 21.0	7.45	7.24	暗灰黄色砂。	
24	土壙	126.0 ・(57.0)・ 87.0	7.45	6.58	灰褐色粘質土。土丹を含む。	50,51,67を切る。30に切られる。
25	土壙	93.0 ・ 68.0 ・ 18.0	7.42	7.24	暗褐色粘質砂。	
26	ピット	60.0 ・(40.0)・ 37.0	7.36	6.99	黒褐色粘質砂。	37を切る。
27	方形土壙	(132.0)・(64.0)・ 54.0	7.42	6.88	黒褐色粘質砂。	7,49に切られる。
28	土壙	95.0 ・(20.0)・ 27.0	7.32	7.05	灰褐色砂。白色砂混入。	29を切る。
29	溝状土壙	(115.0)・ 38.0 ・ 52.0	7.48	6.96	暗褐色粘質砂。	96を切る。20,28 に切られる。
30	攪乱	145.0 ・(55.0)・ 70.0	7.47	6.77		24,67,72を切る。
31	土壙	(70.0)・(50.0)・(26.0)	7.30	(7.04)	灰褐色砂。白色砂混入。	20,21,32に切られる。
32	土壙	(140.0)・(48.0)・ 63.0	7.52	6.89	暗褐色砂。	21,33,118 を切る。
33	土壙	90.0 ・ 80.0 ・ 45.0	7.25	6.80	暗褐色粘質砂。	32,35 に切られる。

表1　検出遺構一覧表（1）

No.	形 態	長径・短径・深さ(cm)	確認レベル(m)	底面レベル(m)	覆 土 注 記	新 旧 関 係
34	土壙	(78.0)・(47.0)・ 30.0	7.23	6.93	暗褐色粘質砂。	
35	土壙	100.0 ・(80.0)・ 36.0	7.25	6.89	暗褐色粘質砂。	33,36,37を切る。
36	溝状土壙	(90.0)・ 44.0 ・ 38.0	7.40	7.02	灰褐色砂。土丹粒を含む。	35に切られる。
37	土壙	75.0 ・(53.0)・ 18.0	7.21	7.03	灰褐色砂。	26,35 似切られる。
38	ピット	(34.0)・ 29.0 ・ 14.0	7.31	7.17	灰褐色砂。	39に切られる。
39	土壙	157.0 ・ 74.0 ・ 51.0	7.24	6.73	灰褐色砂。	38,41,87,88 を切る。
40	ピット	58.0 ・(44.0)・ 28.0	7.14	6.86	暗褐色砂。	
41	土壙	123.0 ・(115.0)・ 39.0	7.22	6.83	暗褐色砂。	39に切られる
42	ピット	(46.0)・ 22.0 ・ 38.0	7.42	7.04	暗灰黄色砂。	119 を切る。
43	ピット	56.0 ・(27.0)・ 40.0	7.62	7.22	灰黄色砂。黒褐色粘質砂混入。	119 を切る。
44	ピット	34.0 ・(30.0) ・ 23.0	7.27	7.04	灰黄色砂。黒褐色粘質砂混入。	89を切る。
45	土壙	(125.0)・(47.0)・ 66.0	7.50	6.84	暗褐色粘質土。	57,126に切られる。
46	80 覆土	・ ・ 40.0	7.40	7.00	黒褐色粘質砂。炭粒混入。	
47	ピット	(35.0)・(30.0)・ 43.0	7.60	7.17	黒褐色粘質砂。炭粒混入。	59を切る。80に切られる。
48	方形竪穴	(432.0)・(170.0)・(83.0)	7.53	6.70	明褐色粘質土。土丹粒混入。	19を切る。93に切られる。
49	71 覆土	・ ・			明褐色砂。土丹粒混入。	
50	溝状土壙	(175.0)・ 44.0 ・ 16.0	7.40	7.24	明褐色砂質土。	63を切る。24に切られる。
51	ピット	34.0 ・(18.0)・ 14.0	7.35	7.21	灰褐色砂。	24に切られる。
52	ピット	28.0 ・(17.0)・ 30.0	7.43	7.15	暗褐色粘質土。	
53	ピット	40.0 ・(12.0)・ 32.0	7.50	7.18	暗褐色粘質土。	80を切る。
54	ピット	45.0 ・ 26.0 ・ 6.0	7.35	7.29	灰褐色粘質土。	
55	ピット	64.0 ・ 60.0 ・ 6.0	7.36	7.28	灰褐色粘質砂。しまり良好。	
56	123 覆土	・ ・			灰褐色砂。炭粒混入。	
57	ピット	(61.0)・(32.0)・ 50.0	7.46	6.96	暗褐色粘質砂。土丹粒混入。	45,60,125 を切る。124 に切られる。
58	80 覆土	・ ・			灰褐色砂。	60,61 を切る。68,69 に切られる。
59	80 覆土	・ ・			黄色砂。灰褐色粘質砂混入。	47に切られる。
60	標準土層H	・ ・			暗灰褐色中砂。	57,58,68に切られる。
61	=122	・ ・			暗褐色粘質砂。灰白色砂混入。	65を切る。58に切られる。
62	ピット	56.5 ・ 48.0 ・ 17.0	7.20	7.03	白黄色砂。	63に切られる。
63	土壙	93.0 ・(45.0)・ 11.0	7.18	7.07	暗褐色細砂。炭粒混入。	62,64,69,83,120 を切る。
64	標準土層H	・ ・			暗灰褐色中砂。	63に切られる。
65	土壙	218.0 ・ 116.0 ・ 40.0	7.50	7.10	暗褐黄色砂。炭粒混入。	73を切る。61,122に切られる。
66	ピット	(25.0)・(20.0)・ 31.0	7.68	7.37	黒褐色粘質土。	70を切る。

表2　検出遺構一覧表（2）

No.	形　態	長軸・短軸・深さ(cm)	確認レベル(m)	底面レベル(m)	覆　土　注　記	新　旧　関　係
67	標準土層	・　・			明黄色粗～中砂。	24,30,50,72 に切られる。
68	80　覆土	・　・			灰褐色砂。黄色砂混入。	58,60 を切る。
69	土壙	80.0・(23.0)・40.0	7.50	7.10	灰褐色砂。土丹粒混入。	58,83,120 を切る。63に切られる。
70	ピット	(36.0)・(21.0)・23.0	7.33	7.10	灰黄色砂。白黄色砂混入。	66に切られる。
71	方形土壙	(78.0)・(25.0)・54.0	7.51	6.97	黒褐色粘質砂。	78を切る。
72	ピット	(45.0)・(15.0)・18.0	7.19	7.01	暗褐色粘質土。灰黄色砂混入。	67を切る。30に切られる。
73	土壙	100.0・98.0・22.0	7.26	7.03	明褐色粘質土。	65に切られる。
74	ピット	124.0・(15.0)・40.0	7.62	7.14	暗灰褐色砂。炭粒を含む。	
75	土壙	94.0・(75.0)・57.0	7.71	7.14	暗褐色粘質土。土丹粒を多量に含む。	
76	ピット	20.0・19.0・16.0	7.29	7.13	灰褐色砂。	
77	溝状土壙	93.0・19.0・13.0	7.29	7.16	白色砂。黒褐色粘質土混入。	
78	ピット	(45.0)・(40.0)・13.0	7.27	7.14	灰黄色砂。灰褐色粘質砂を含む。	72に切られる。
79	ピット	30.0・(20.0)・40.0	7.65	7.20	黒褐色粘質砂。	18に切られる。
80	方形土壙	335.0・155.0・68.0	7.58	6.90	暗褐色砂。	47を切る。53に切られる。
81	土壙	85.0・54.0・13.0	6.87	6.74	暗灰褐色砂。	
82	ピット	33.0・30.0・22.0	6.90	6.68	暗灰褐色粘質砂。	
83	ピット	23.0・(15.0)・21.0	7.17	6.96	暗灰褐色砂。炭粒混入。	63,69,120 に切られる。
84	ピット	(36.0)・(15.0)・18.0	7.18	7.00	灰褐色砂。	
85	ピット	51.0・46.0・24.0	7.06	6.82	灰褐色砂。	
86	ピット	35.0・22.0・11.0	6.87	6.76	暗灰褐色粘質砂。	
87	ピット	(30.0)・(17.0)・13.0	7.17	7.04	暗灰褐色中砂。	39に切られる。
88	土壙	75.0・(35.0)・19.0	7.25	7.06	灰褐色砂。	39に切られる。
89	ピット	25.0・(20.0)・15.0	7.27	7.12	灰褐色砂。	44に切られる。
90	ピット	(28.0)・(10.0)・36.0	7.39	7.03	黒褐色粘質砂。土丹粒を含む。	
91	土壙?	120.0・(52.0)・26.0	7.00	6.74	灰褐色砂。炭粒混入。	19に切られる。
92	ピット	24.0・(20.0)・18.0	6.97	6.79	黒褐色粘質砂。炭粒混入。	19に切られる。
93	土壙?	(110.0)・(80.0)・(78.0)	7.48	(6.70)	黒褐色粘質砂。灰黄色砂混入。	19,48 を切る。
94	土壙?	(96.0)・(34.0)・未堀	6.78	未堀	灰褐色砂。土丹粒混入。	
95	土壙	80.0・(65.0)・25.0	7.31	7.06	灰褐色粘質砂。白黄色砂混入。	96に切られる。
96	土壙	(54.0)・(50.0)・41.0	7.42	7.01	暗褐色粘質砂。白黄色砂混入。	95,107を切る。29に切られる。
97	土壙	106.0・98.0・30.0	7.34	7.04	灰褐色砂。黄色砂混入。	100 を切る。
98	ピット	55.0・(35.0)・17.0	7.38	7.21	黒褐色粘質砂。	99に切られる。
99	ピット	(40.0)・(13.0)・31.0	7.46	7.15	黒褐色粘質砂。黄色砂・土丹粒混入。	98を切る。

表３　検出遺構一覧表（３）

No.	形 態	長径・短径・深さ(cm)	確認レベル(m)	底面レベル(m)	覆 土 注 記	新 旧 関 係
１００	ピット	(55.0)・(25.0)・ 60.0	7.50	6.90	暗褐色粘質砂。黄色砂・土丹粒混入。	97に切られる。
１０１	ピット	53.0 ・ 18.0 ・ 31.0	7.51	7.20	暗褐色粘質砂。白黄色砂混入。	102,115,116 を切る。
１０２	ピット	(32.0)・(28.0)・ 51.0	7.30	6.79	黄色砂。灰褐色粘質砂混入。	103 に切られる。
１０３	ピット	(35.0)・(31.0)・ 30.0	7.48	7.18	暗褐色粘質砂。	102,104,105 を切る。
１０４	ピット	(30.0)・(26.0)・ 27.0	7.30	7.03	暗褐色粘質砂。白黄色砂混入。	105 を切る。103 に切られる。
１０５	溝状土壙	(90.0)・ 73.0 ・ 45.0	7.18	6.73	暗褐色砂。灰白色砂混入。	106 を切る。103,104 に切られる。
１０６	溝状土壙	(87.0)・ 45.0 ・ 36.0	7.18	6.82	灰黄色砂。灰褐色砂混入。	105,114 に切られる。
１０７	ピット	35.0 ・(30.0)・ 27.0	7.23	6.96	黒褐色粘質砂。白色砂混入。	96に切られる。
１０８	土壙or溝?	・ ・(32.0)	7.22	(6.90)	暗灰褐色粘質砂。灰白色砂・炭粒混入。	
１０９	土壙or溝?	・ ・(42.0)	7.32	(6.90)	黒褐色粘質土。灰白色砂混入。炭粒・土丹粒を含む。	110 を切る。
１１０	土壙or溝?	・ ・(35.0)	7.25	(6.90)	灰白色砂。灰褐色粘質砂混入。	109,111,112 に切られる。
１１１	方形竪穴?	・ ・(33.0)	7.23	(6.90)	暗褐色粘質土。褐色砂混入。	110 を切る。113 に切られる。
１１２	方形竪穴?	・ ・(33.0)	7.23	(6.90)	暗褐色粘質土。褐色砂混入。	110 を切る。113 に切られる。
１１３	方形竪穴?	・ ・(74.0)	7.64	(6.90)	暗褐色粘質土。土丹粒を含む。	11,112を切る。
１１４	土壙?	(70.0)・(68.0)・ 24.0	7.12	6.88	暗褐色粘質砂。白黄色砂混入。	106 を切る。
１１５	ピット	60.0 ・(42.0)・ 31.0	7.42	7.10	灰褐色砂。黄色砂混入。	101 に切られる。
１１６	土壙	・ ・ 53.0	7.10	6.57	灰褐黄色砂。	101 に切られる。
１１７	ピット?	・ ・ 44.0	7.60	7.16	明褐色粘質土。土丹粒を含む。	
１１８	土壙?	・ ・ 28.0	7.30	7.02	灰黄色砂。暗褐色砂をブロック状に含む。	32に切られる。
１１９	土壙?	・ ・ 22.0	7.44	7.22	灰黄色砂。黒褐色砂をブロック状に含む。	42,43 に切られる。
１２０	土壙?	・ ・ 38.0	7.44	7.06	黒褐色細砂。	83を切る。63,69 に切られる。
１２１	ピット?	・ ・ 17.0	7.58	7.41	灰白色砂。炭粒混入。	65,123を切る。
１２２	土壙?	・ ・ 38.0	7.52	7.24	暗褐色粘質砂。灰白色砂混入。	
１２３	土壙?	・ ・ 42.0	7.50	7.08	灰褐色砂。炭粒混入。	122 に切られる。
１２４	ピット?	・ ・ 27.0	7.45	7.18	暗褐色粘質砂。土丹粒を含む。	57,125を切る。
１２５	土壙?	・ ・ 30.0	7.30	7.00	灰黄色砂。灰褐色粘質砂混入。	57,124に切られる。
１２６	ピット?	・ ・ 23.0	7.50	7.27	暗褐色粘質土。	45を切る。
１２７	ピット?	・ ・ 28.0	7.50	7.22	暗灰色砂。	
１２８	ピット?	(28.0)・(8.0)・(12.0)	6.88	(6.76)	明黄色粗～中砂。	
１２９	ピット	(18.0)・(12.0)・(14.0)	6.86	(6.72)	明黄色粗～中砂。	
１３０	ピット	(18.0)・(18.0)・(10.0)	6.86	(6.76)	明黄色粗～中砂。	
１３１	ピット	(44.0)・ 40.0 ・ 14.0	7.09	6.95	淡灰褐色砂。	
１３２	ピット	30.0 ・ 26.0 ・ 13.0	7.08	6.95	灰黄色砂。	
１３３	ピット?	・ ・ 20.0	7.08	6.88	灰黄色中砂。	

表４　検出遺構一覧表（４）

第２節　出土した遺物

本遺跡からはテンバコ約15箱に及ぶ遺物が出土している。本節では出土遺物についての説明を加えていく。遺構から出土したものは遺構別に記載した。また、１～５次にわたる掘り下げ時に出土したものは、Ｎトレンチ、Ｓトレンチに分け、さらに、Ｎトレンチは北部・中部・南部に分けて記載した。

Ｉ．イコウ出土遺物（図１６～２２）

（１）イコウ９出土遺物（図１６）

１は鉄製品である。断面は長方形を呈する。鎹であろう。

（２）イコウ１１出土遺物（図１６）

２は常滑窯捏鉢の口縁部である。端部は角張り、内・外に引き出される。胎土は粗く、混入物多し。

（３）イコウ１２出土遺物（図１６）

３はかわらけの小皿である。ロクロ成形。色調は赤橙色を呈する。

（４）イコウ１５出土遺物（図１６）

４はかわらけ小皿の底部である。内面に銅が溶着している。トリベとして使用されたものであろう。

５は銅銭。『貨泉』である。

６は鉄製品である。鉄釘である。頭部は平たく叩かれ、折り曲げている。

（５）イコウ１８出土遺物（図１６）

７～12は鉄製品である。錆が激しいが、全て鉄釘である。断面は方形、もしくは長方形である。

（６）イコウ１９出土遺物（図１６）

13は常滑窯甕胴部である。外面に押印を有する。胎土は粘性強く精良である。

14は渥美・湖西窯山皿である。胎土は灰色を呈し精良・緻密である。

15は瀬戸窯入子の口縁部である。胎土は灰白色を呈し緻密である。

16は銅銭である。『熙寧元寳』である。

17～26はかわらけである。17～21はロクロ成形の小皿、22はロクロ成形の中皿、23は手づくね成形の小皿、24～26は手づくね成形の大皿である。21・23には煤が付着しており、灯明皿と考えられる。

（７）イコウ２１出土遺物（図１６）

27～30はかわらけである。27・28はロクロ成形の大皿、29・30はロクロ成形の小皿である。

31は瓦質鍔付き手焙りである。器表は灰黒色、胎土は灰白色を呈する。鍔上面には菊花文の連続押印を有する。鍔部には斜方向の穿孔が見られる。

（８）イコウ２２出土遺物（図１６）

32は白磁口兀げ皿底部である。釉は淡青色、胎土は灰白色を呈する。

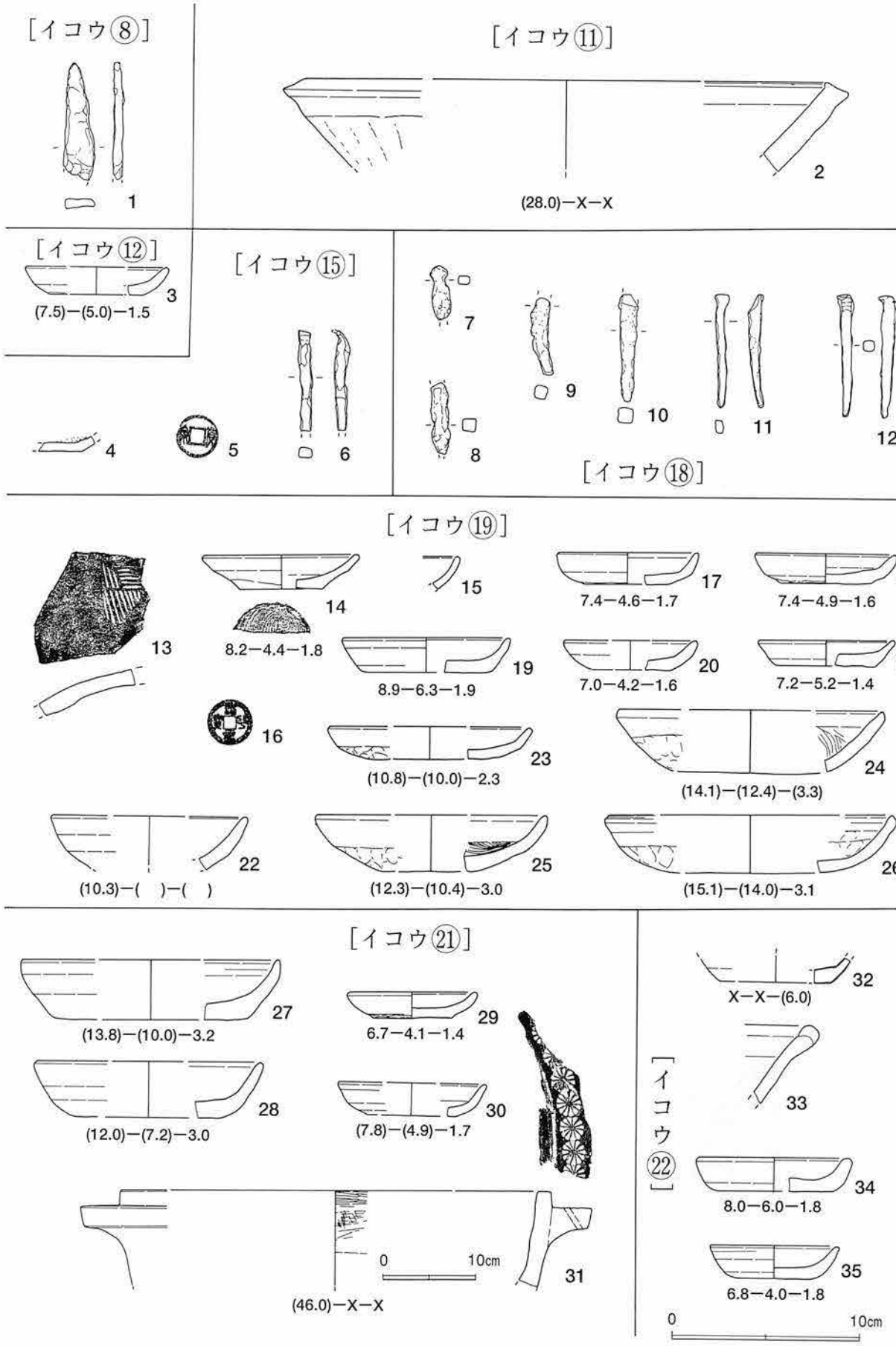


図16　イコウ出土遺物（1）

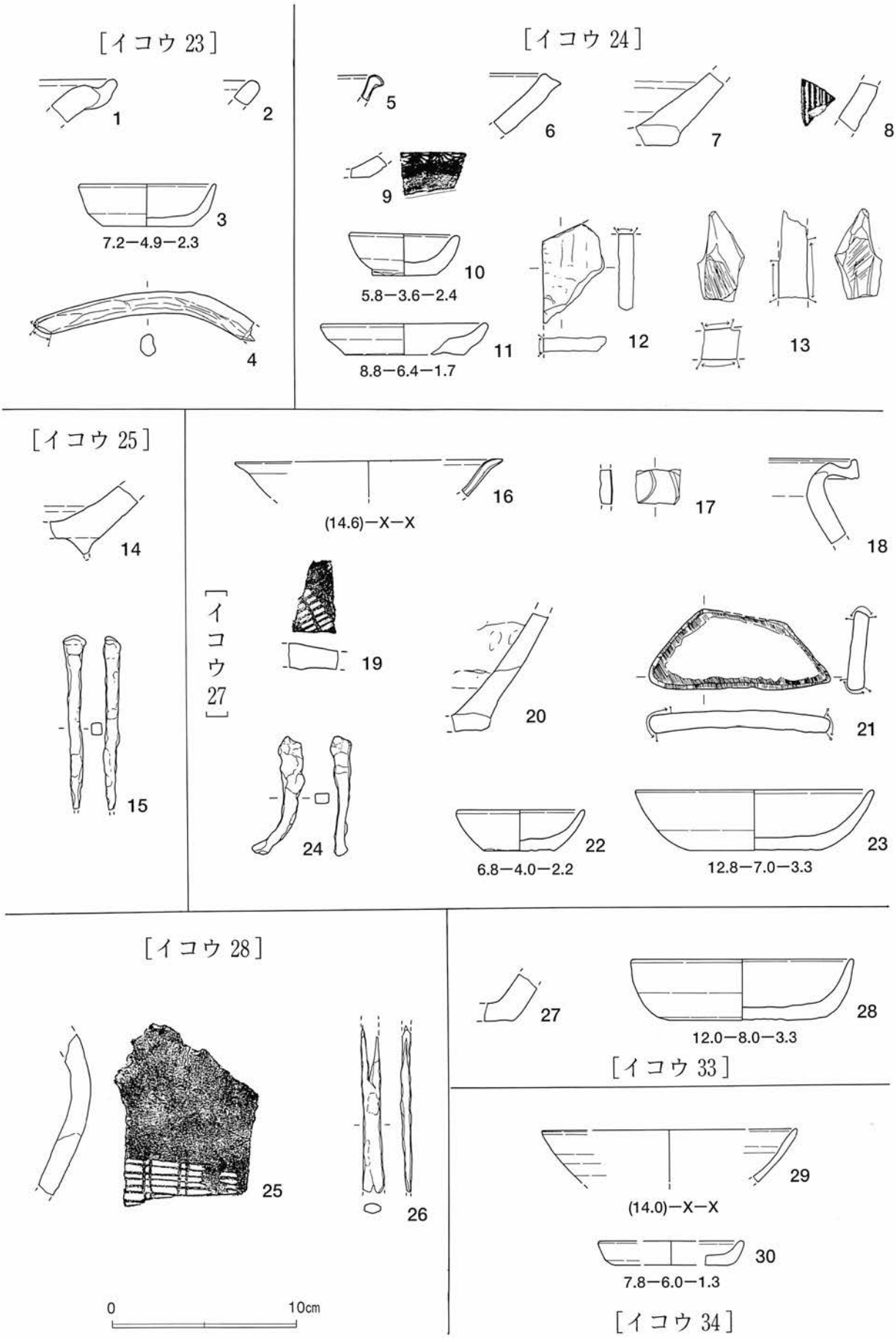


図17　イコウ出土遺物（2）

33は山茶碗窯系捏鉢の口縁部である。口縁内面に浅い窪みを有する。胎土は灰白色を呈する。
34・35はロクロ成形のかわらけ小皿である。34の体部は厚く、胎土に砂を多く含む。

（9）イコウ２３出土遺物（図１７）

1は常滑窯甕口縁部である。端部は受け口状である。器表は暗橙色、胎土は灰白色を呈する。
2は山茶碗窯系捏鉢の口縁部である。胎土は灰白色を呈する。
3はロクロ成形のかわらけ小皿である。器表は非常に薄く、胎土は灰橙色を呈する。
4は動物骨である。端部には切断痕を有している。

(10) イコウ２４出土遺物（図１７）

5は青磁折腰鉢口縁部である。釉は灰青色、胎土は灰白色を呈する。
6は常滑窯捏鉢口縁部である。端部は角張り、外方に引き出される。胎土は灰色を呈し粗雑である。
7は常滑窯甕底部である。外底面は砂底である。胎土は灰色を呈し、粘性に富む。
8は備前窯擂鉢体部片である。外面は横ナデ、内面には条痕を有する。
9は瓦質香炉底部である。体部下位には菊花文の連続押印を有する。胎土は灰白色を呈し緻密。
10・11はかわらけ小皿である。いずれもロクロ成形である。11は胎土に砂を多く含む。
12は砥石である。仕上砥と考えられる。
13は硯である。表面は滑らかであり、底面は雑に削られている。

(11) イコウ２５出土遺物（図１７）

14は山茶碗窯系捏鉢底部である。体部外面下位はヘラケズリ。外底面には高台が貼り付けられる。
15は鉄製品である。鉄釘である。断面は四角い。頭部は平たく叩かれ、折り曲げられている。

(12) イコウ２７出土遺物（図１７）

16は青磁碗口縁部である。端部は外反する。釉は淡青色、胎土は灰白色を呈する。
17は青白磁梅瓶胴部片である。外面には渦文を有する。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。
18は常滑窯甕口縁部である。縁帯幅は狭い。器表は褐色、胎土は灰白色を呈し粘性に富む。
19は常滑窯甕胴部である。外面に格子の押印を有する。胎土は灰橙色を呈し粘性に富む。
20は常滑窯甕底部である。胎土は灰色を呈し、粘性に富む。外底面は砂底である。
21は研磨痕を有する常滑窯甕胴部片である。外周が研磨され、曲面を呈している。
22・23はロクロ成形のかわらけである。22は小皿、23は大皿である。いずれも器壁が薄い。
24は鉄製品である。錆が激しいが鉄釘と考えられる。断面は長方形を呈する。

(13) イコウ２８出土遺物（図１７）

25は常滑窯甕胴部片である。外面に格子の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。
26は鉄製品であるが、錆が激しく用途は不明である。断面は楕円状を呈する。

(14) イコウ３３出土遺物（図１７）

27は瓦質輪花型手焙り底部である。体部外面は縦位のミガキ、外底面は砂底である。

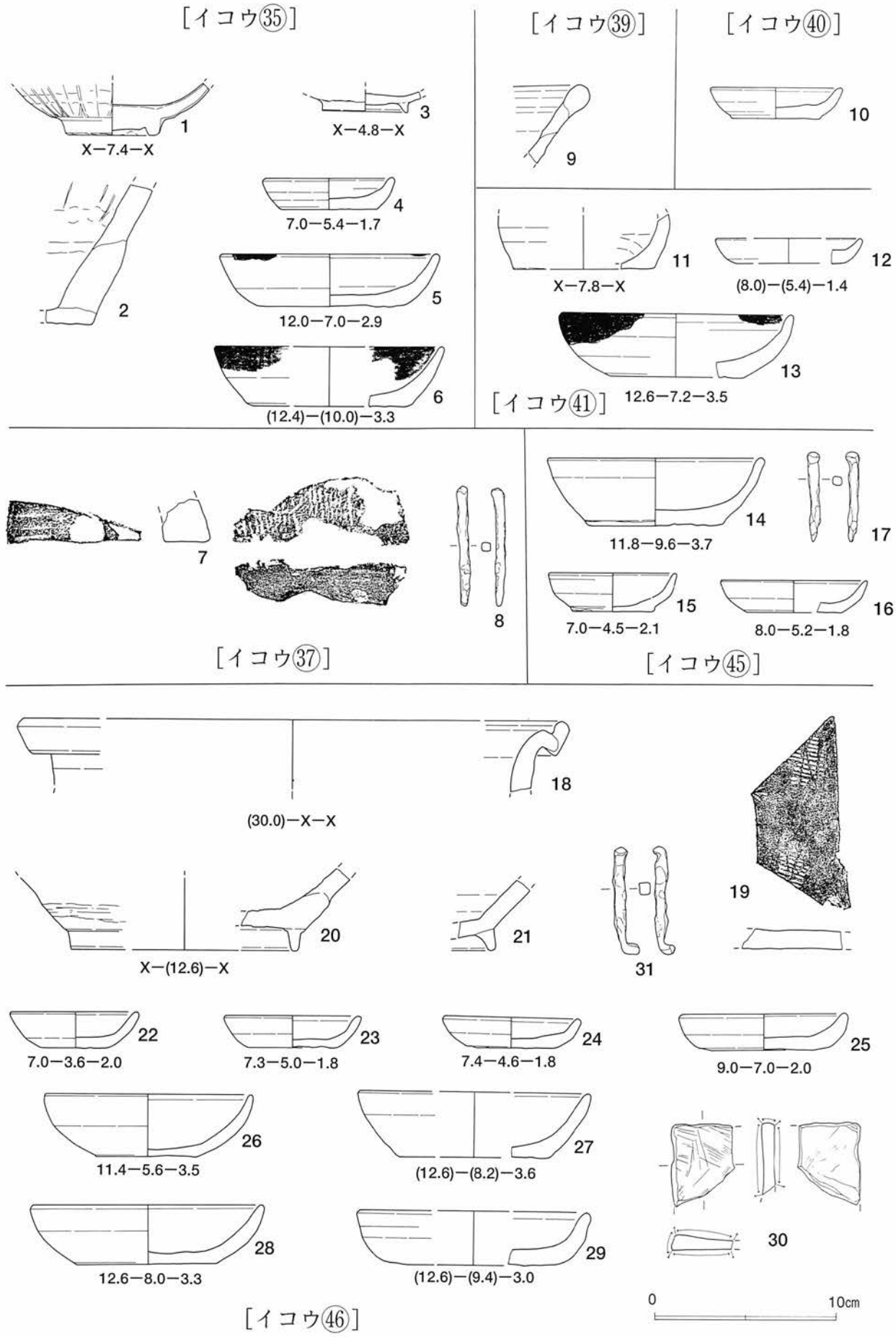


図18　イコウ出土遺物（3）

28はロクロ成形のかわらけ大皿である。底径が大きく、器高の低いタイプである。

(15) イコウ３４出土遺物（図１７）

29は渥美・湖西窯山茶碗口縁部である。器壁は薄く、胎土は灰色を呈し緻密である。

30はロクロ成形のかわらけ小皿である。底径が大きく、器高の低いタイプである。

(16) イコウ３５出土遺物（図１８）

１は青磁鎬蓮弁文碗底部である。釉は暗緑色を呈する。胎土は灰白色を呈し緻密である。

２は常滑窯甕底部である。器表は褐色を呈する。胎土は灰色を呈し、粘性に富む。

３は吉備系土師質土器底部である。胎土は赤味を帯びた白色を呈する。

４～６はロクロ成形のかわらけである。４は小皿である。５・６は大皿であり、口縁部内・外に煤が付着しており、灯明皿として使われたものである。

(17) イコウ３７出土遺物（図１８）

７は平瓦である。凸面は縄目の叩きを有し、離れ砂が付着する。凹面の布目痕は明瞭ではない。端面はヘラ調整である。胎土は灰色を呈し緻密である。厚さは2.4cm前後である。

８は鉄製品である。鉄釘と考えられる。断面は方形を呈する。

(18) イコウ３９出土遺物（図１８）

９は山茶碗窯系捏鉢口縁部である。端部は丸い。胎土は灰色を呈し、粗雑である。

(19) イコウ４０出土遺物（図１８）

10はロクロ成形のかわらけ小皿である。胎土は淡灰橙色を呈する。

(20) イコウ４１出土遺物（図１８）

11は土製品である。かわらけ質の小壷であろう。外底部は回転糸切りである。

12・13はロクロ成形のかわらけである。12は小皿。13は大皿であり、灯明皿として使われている。

(21) イコウ４５出土遺物（図１８）

14～16はロクロ成形のかわらけである。14は大皿、15・16は小皿である。

17は鉄製品である。鉄釘である。断面は方形を呈する。

(22) イコウ４６出土遺物（図１８）

18は常滑窯甕口縁部である。縁帯の幅は2.0cm程である。胎土は粘性が強く、灰色を呈する。

19は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈する。

20・21は山茶碗窯系捏鉢底部である。胎土は灰色を呈し粗雑である。内面は摩滅している。

22～25はロクロ成形のかわらけ小皿である。25が古い様相を呈している。

26～29はロクロ成形のかわらけ大皿である。29が古い様相を呈している。

30は砥石である。仕上砥と考えられる。

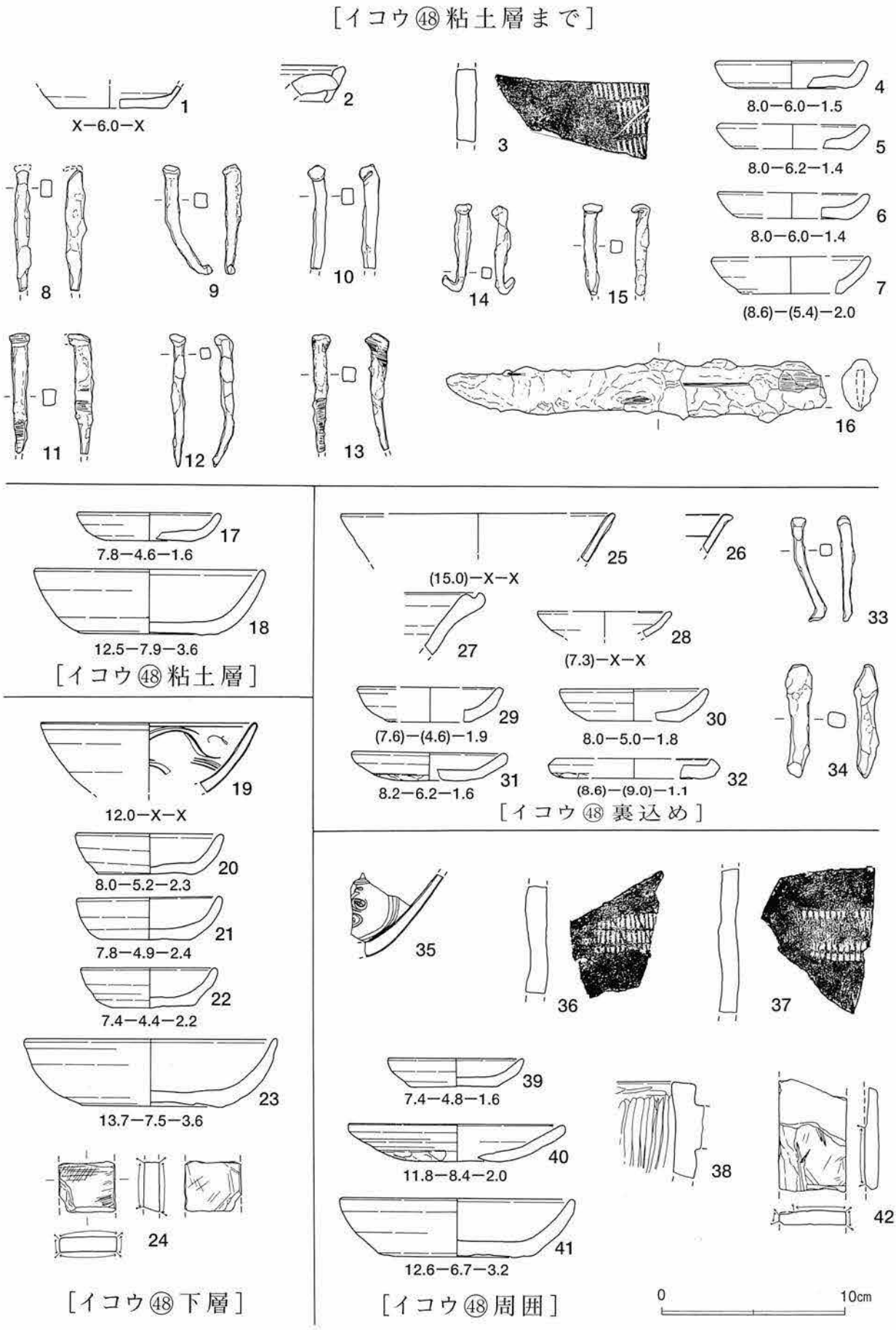


図19　イコウ出土遺物（4）

(23) イコウ４８粘土層まで（図１９）

１は白磁口兀げ皿底部である。釉は淡灰青色、胎土は灰白色を呈す。

２は常滑窯甕口縁部である。縁帯の幅は2.0cm程である。器表は褐色、胎土は灰色を呈す。

３は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。胎土は灰白色を呈し、粘性に富む。

４～７はロクロ成形のかわらけ小皿である。

８～15は鉄釘である。断面はいずれも方形を呈する。

16は刀子である。錆が激しく詳細は不明である。

(24) イコウ４８粘土層（図１９）

17・18はロクロ成形のかわらけである。17は小皿、18は大皿である。いずれも薄手のタイプである。

(25) イコウ４８下層（図１９）

19は青磁劃花文碗口縁部である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

20～22はロクロ成形のかわらけ小皿である。所謂、薄手タイプである。

23はロクロ成形のかわらけ大皿である。これも薄手タイプである。

24は砥石である。仕上砥と考えられる。

(26) イコウ４８裏込め（図１９）

25は青磁碗口縁部である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

26は白磁碗口縁部である。口縁端部は外方へ引き出される。釉は淡灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

27は山茶碗窯系捏鉢口縁部である。端部上面には沈線を有する。胎土は粗く、灰白色を呈する。

28は渥美・湖西窯山皿口縁部である。胎土は非常に精良であり、灰白色を呈する。

29・30はロクロ成形のかわらけ小皿である。

31・32は手づくね成形のかわらけ小皿である。32はコースター状を呈するものである。

33・34は鉄釘と考えられる鉄製品である。断面は方形、もしくは長方形を呈する。

(27) イコウ４８周囲（図１９）

35は青磁劃花文碗体部である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

36・37は常滑窯甕胴部である。外面には格子文の押印を有している。

38は瓦質鍔付き手焙り口縁部である。内面は縦位のヘラミガキ調整である。胎土は白橙色を呈する。

39はロクロ成形のかわらけ小皿である。

40は手づくね成形のかわらけ小皿である

41はロクロ成形のかわらけ大皿である。

42は砥石である。仕上砥と考えられる。

(28) イコウ４９出土遺物（図２０）

１は山茶碗窯系捏鉢底部である。高台の付かないタイプである。胎土は灰白色を呈し、精良である。

２は鉄釘である。頭部は平たく叩かれ、折り曲げられている。断面は方形を呈する。

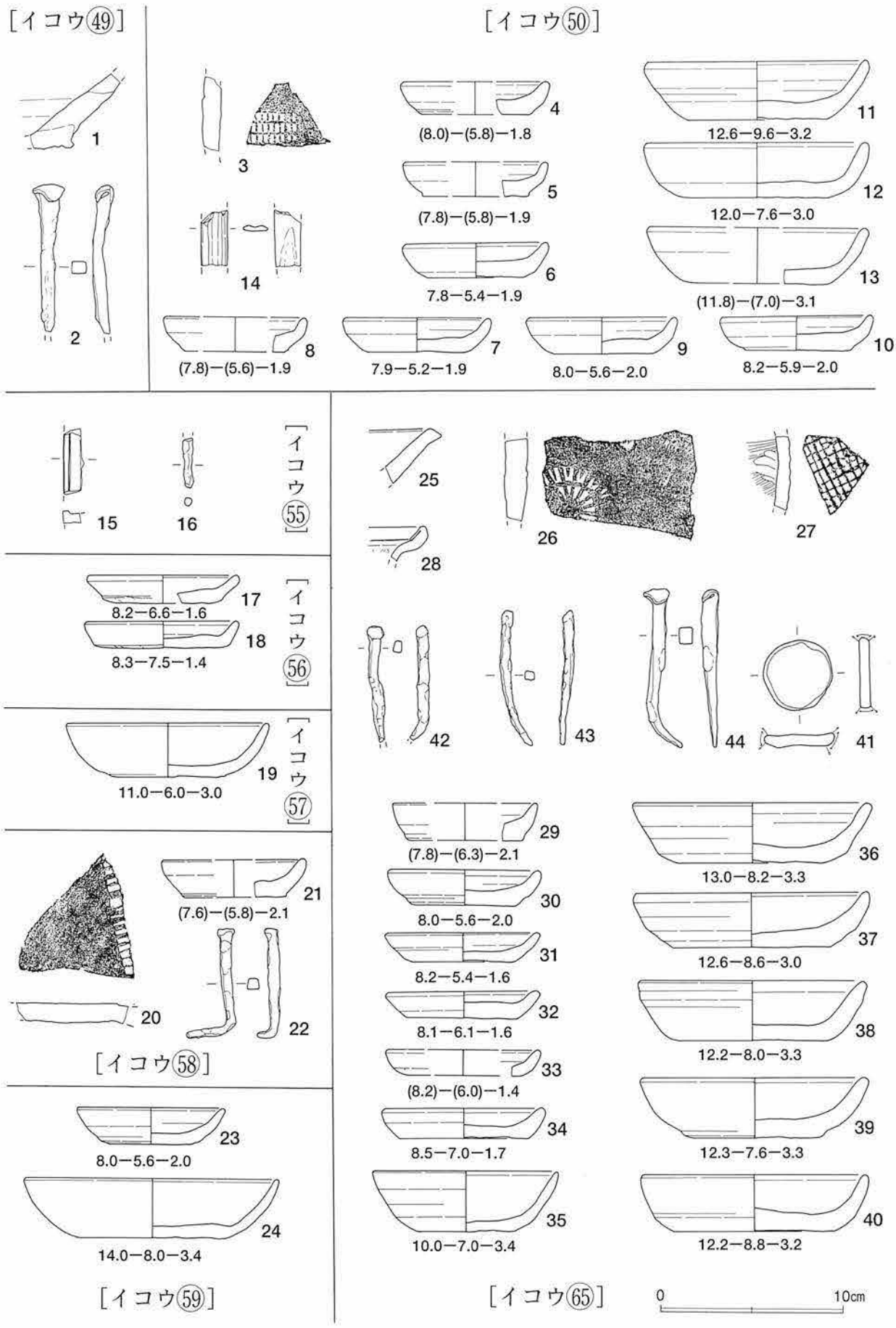


図20　イコウ出土遺物（5）

(29) イコウ５０出土遺物（図２０）

３は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。胎土は灰色を呈し粗雑である。

４～10はロクロ成形のかわらけ小皿である。8.0cm前後の口径を有し、器壁の厚いものである。

11～13はロクロ成形のかわらけ大皿である。

14は骨製品である。笄の小片である。

(30) イコウ５５出土遺物（図２０）

15は硯の小片である。

16は鉄釘の小片である。

(31) イコウ５６出土遺物（図２０）

17・18は手づくね成形のかわらけ小皿である。

(32) イコウ５７出土遺物（図２０）

19はロクロ成形のかわらけ大皿である。

(33) イコウ５８出土遺物（図２０）

20は常滑窯甕肩部である。外面に格子文の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰白色を呈し精良。

21はロクロ成形のかわらけ小皿である。口縁の内・外には煤が付着し、灯明皿として使われている。

22はＬ字形に折り曲げられた鉄釘である。断面は方形を呈している。

(34) イコウ５９出土遺物（図２０）

23・24はロクロ成形のかわらけである。いずれも薄手タイプであり、23は小皿、24は大皿である。

(35) イコウ６５出土遺物（図２０）

25は常滑窯捏鉢口縁である。端部は外方に引き出される。器表は褐色、胎土は灰色を呈し精良。

26は常滑窯甕胴部である。外面には車輪状の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰橙色を呈する。

27は亀山窯甕胴部である。外面には格子叩きを有している。胎土は軟質であり、灰白色を呈する。

28は伊勢系土鍋の口縁である。胎土は灰橙色を呈し、長石を多く含む。

29～40はロクロ成形のかわらけである。29～34は小皿、35は中皿、36～40は大皿である。

41は土盤である。かわらけの底部を利用し、外周を擦っている。

42～44は鉄釘である。断面は方形、もしくは長方形を呈している。

(36) イコウ６８出土遺物（図２１）

１は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張り、外方へ引き出される。器表は褐色、胎土は灰色を呈す。

２はロクロ成形のかわらけ大皿である。

(37) イコウ７２出土遺物（図２１）

３・４はかわらけ大皿である。３はロクロ成形、４は手づくね成形である。

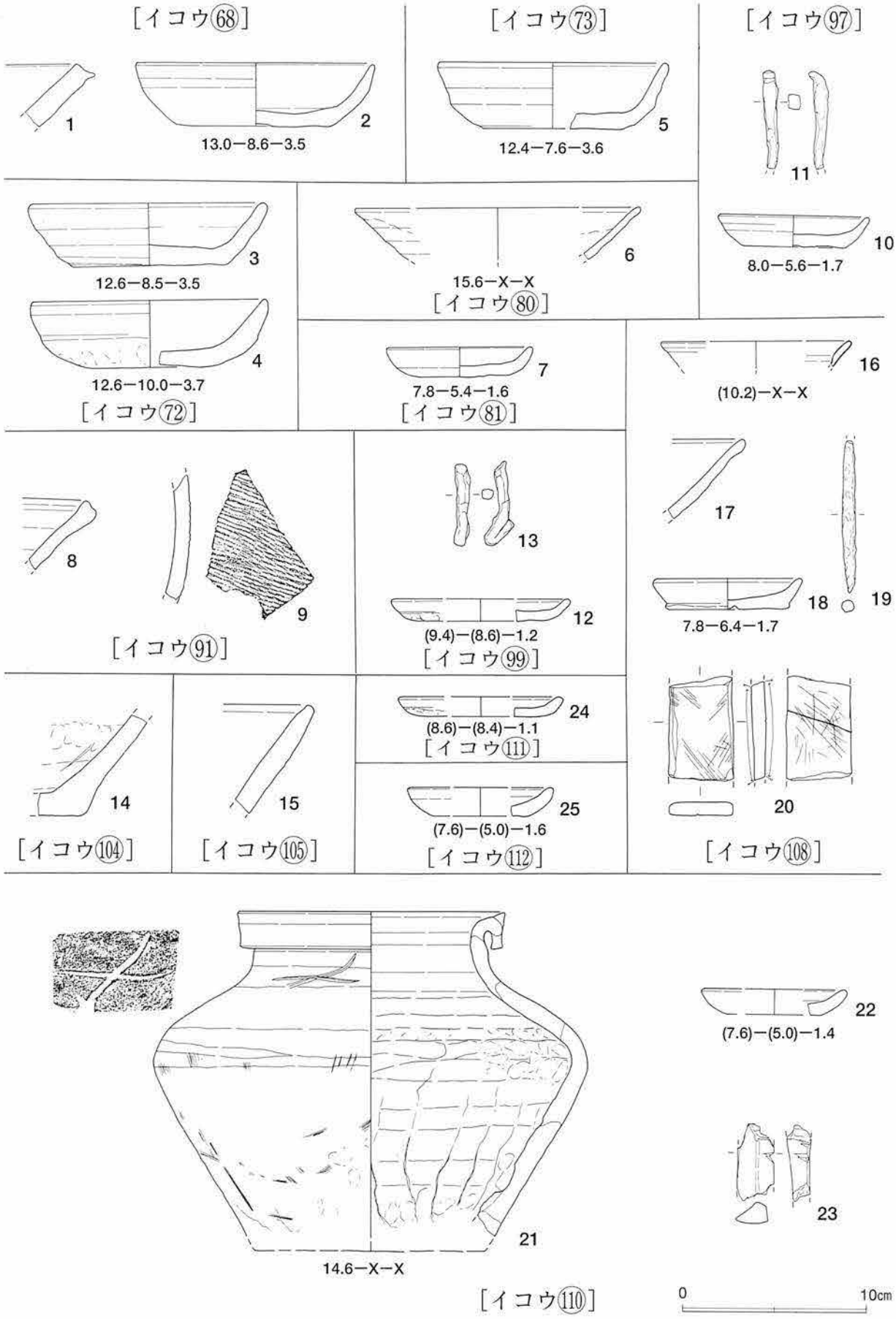


図21　イコウ出土遺物（6）

(38) イコウ７３出土遺物（図２１）

５はロクロ成形のかわらけ大皿である。

(39) イコウ８０出土遺物（図２１）

６は須恵器であろうか？胎土は灰色を呈し、非常に精良である。

(40) イコウ８１出土遺物（図２１）

７はロクロ成形のかわらけ小皿である。

(41) イコウ９１出土遺物（図２１）

８は山茶碗窯系捏鉢口縁である。端部には沈線状の窪みを有する。胎土は灰白色を呈し、やや粗い。

９は亀山窯甕胴部である。外面には叩きを有する。器表は灰黒色、胎土は軟質で、灰白色を呈する。

(42) イコウ９７出土遺物（図２１）

10はロクロ成形のかわらけ小皿である。

11は鉄釘である。断面は方形を呈する。

(43) イコウ９９出土遺物（図２１）

12は手づくね成形のかわらけ小皿である。胎土は赤橙色を呈し。焼成良好。

13は鉄釘である。断面は長方形を呈する。

(44) イコウ１０４出土遺物（図２１）

14は常滑窯甕底部である。器表・胎土は灰橙色を呈する。外底面は砂底である。

(45) イコウ１０５出土遺物（図２１）

15は常滑窯捏鉢口縁である。端部は尖り気味である。器表は褐色、胎土は灰色を呈し粗雑である。

(46) イコウ１０８出土遺物（図２１）

16は同安窯系青磁皿口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

17は常滑窯山茶碗口縁である。胎土は灰白色を呈し粗雑である。

18はロクロ成形のかわらけ小皿である。

19は鉄製品である。火箸と考えられる。断面は円形を呈する。

20は砥石である。仕上砥と考えられる。

(47) イコウ１１０出土遺物（図２１）

21は常滑窯壷である。ほぼ完形に近く復元できたが、底部片は１点も出土していない。縁帯は下方に伸びている。器表は褐色、胎土は灰黒色を呈する。頚部～肩部にはヘラによる×印を有している。

22はロクロ成形のかわらけ小皿である。

23は切断痕を有する動物骨である。

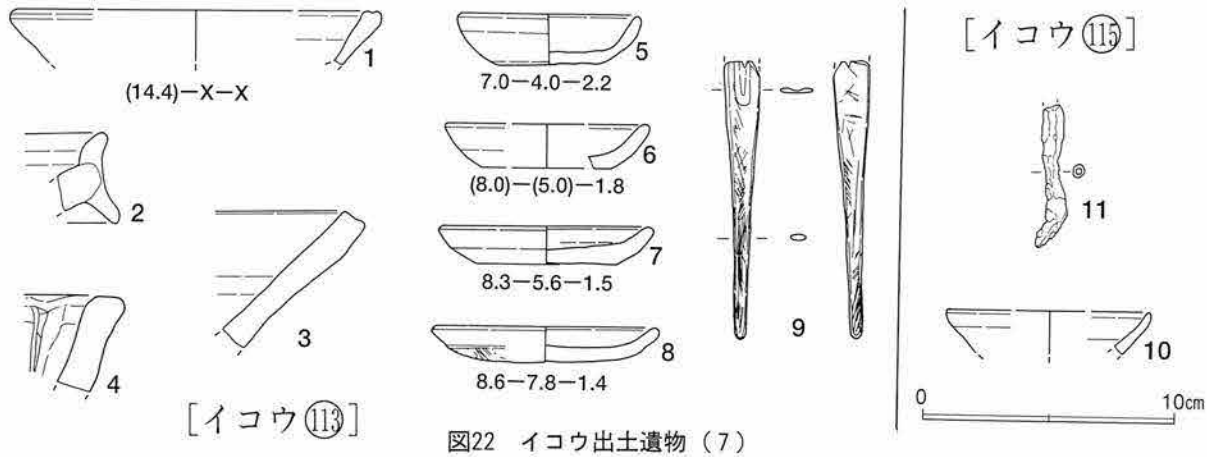


図22　イコウ出土遺物（7）

(48) イコウ１１３出土遺物（図２２）

1は瀬戸窯卸し皿口縁である。胎土は灰白色を呈する。釉は剝離している。

2は常滑窯甕口縁である。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。縁帯の幅は3.6cmである。

3は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張る。器表は暗褐色、胎土は灰色を呈する。

4は瓦質輪花型手焙りの口縁部である。器表は灰黒色、胎土は灰白色を呈する。

5～8はかわらけの小皿である。5～7はロクロ成形、8は手づくね成形である。

9は骨製品である。上半部は失うが笄である。

(49) イコウ１１５出土遺物（図２２）

10は渥美・湖西窯山皿口縁である。胎土は非常に精良であり、灰白色を呈する。

11は錆が激しいが鉄釘である。断面は方形を呈する。

Ⅱ．トレンチ掘り下げ出土遺物（図２３～３４）

（1）Wトレンチ北・中部１・２次掘り下げ出土遺物（図２３）

1は青磁劃花文碗口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

2は白磁口兀げ皿口縁である。釉は白色透明、胎土は白色を呈する。

3は白磁口兀げ皿底部である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

4は青白磁梅瓶胴部である。釉は水青色、胎土は白色を呈する。

5は瀬戸窯卸し皿底部である。釉は灰釉。胎土は灰色を呈する。外底部は回転糸切りである。

6は常滑窯壷口縁である。器表は褐色、胎土は灰色を呈し、粘性に富む。

7・8は常滑窯甕底部である。外底面は砂底。胎土は灰色を呈している。

9は渥美窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。胎土は灰色を呈し緻密。

10・11は常滑窯捏鉢口縁である。10の端部は角張り、11は外周に沈線状の窪みを有する

12は研磨痕を有する常滑窯甕胴部片である。外面を研磨している。

13・14は山茶碗窯系捏鉢口縁部である。胎土は灰色を呈し、粗雑である。

15～17はロクロ成形のかわらけ小皿である。15は器高の高いタイプである。

18は手づくね成形のかわらけ小皿、19はロクロ成形のかわらけ大皿である。

20・21は手づくね成形のかわらけ大皿である。21の端部は内方へ引き出される。

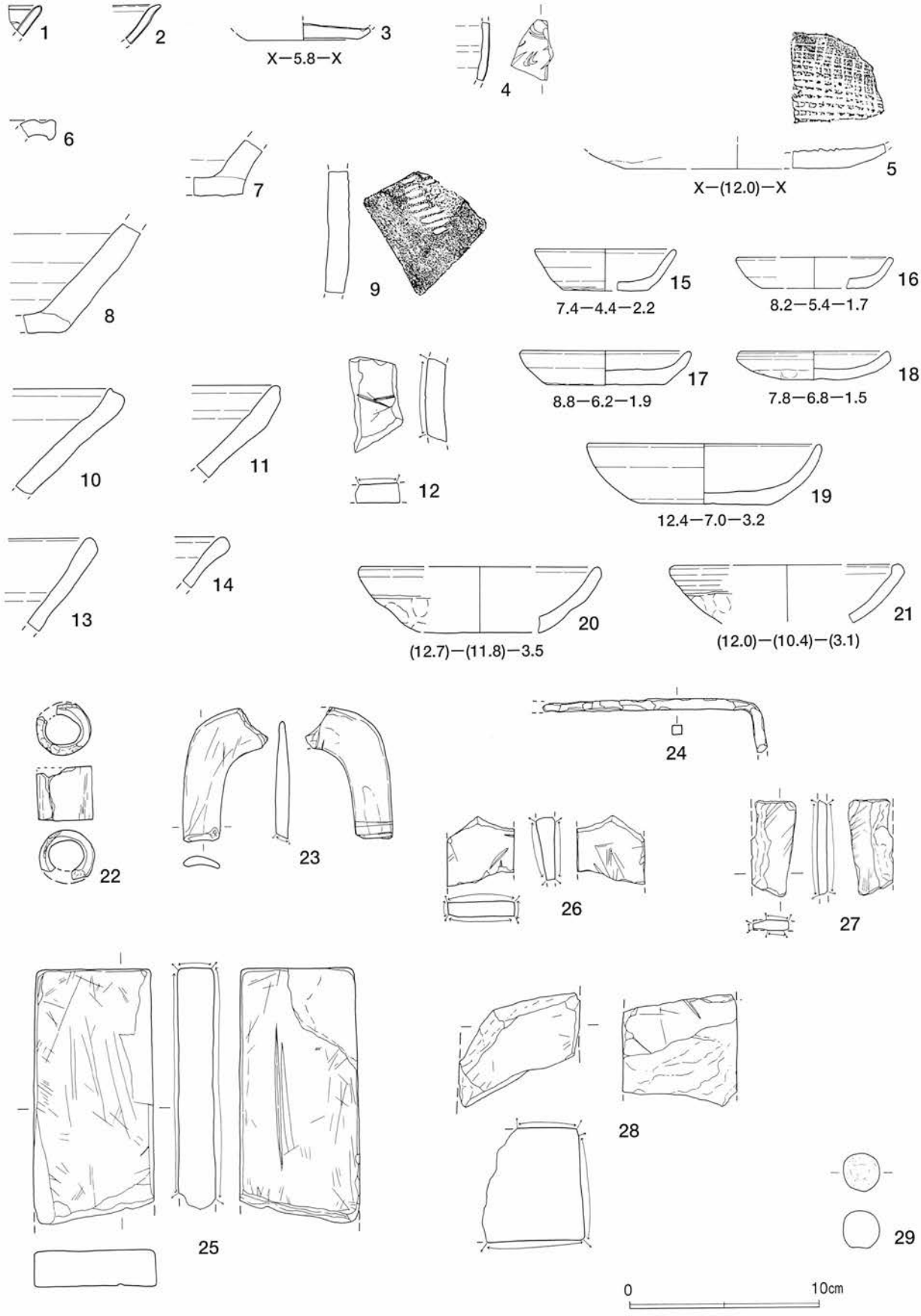


図23　Wトレンチ北・中部１・２次掘り下げ出土遺物

22は円筒形を呈する骨製品である。外径2.9cm 、高さ2.8cm 。用途不明。
23は切断痕を有する動物骨である。３箇所に刃物傷が認められる。
24は鉄製品である。断面は方形を呈する。
25～27は砥石である。仕上砥と考えられる。25は現代の所産であろう。
28は砥石である。荒砥と考えられる。
29は球形を呈する石である。

（２）Ｗトレンチ北部３次掘り下げ出土遺物（図２４）
１・２は青白磁梅瓶である。外面に渦文を有する。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。
３は常滑窯捏鉢口縁である。端部は外方へ引き出される。胎土は灰橙色を呈し、粘性に富む。
４は常滑窯甕口縁である。縁帯幅は1.4cm 。器表、胎土は灰色を呈し粘性に富む。
５は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰白色を呈し緻密。
６は研磨痕を有する常滑窯甕胴部片である。外周を研磨しており、曲面を呈する。
７は平瓦である。凸面には縄目の叩きがみられる。凹・凸面ともに粗い離れ砂が付着する。側面はヘラ調整である。厚さ2.0cm前後。器表・胎土は灰色を呈し緻密である。
８は伊勢系土鍋口縁である。胎土は灰橙色を呈し、長石を多く含む。
９・10はかわらけ大皿である。９はロクロ成形、10は手づくね成形である。
11・12はロクロ成形のかわらけ小皿である。
13は手づくね成形のかわらけ小皿である。
14・15は鉄製品である。いずれも鉄釘と考えられる。断面は方形を呈する。

（３）Ｗトレンチ北部４次掘り下げ出土遺物（図２４）
16は青磁鎬蓮弁文碗口縁である。釉は暗緑色、胎土は灰白色を呈する。
17は白磁口兀げ皿である。釉は白色透明、胎土は灰白色を呈する。
18は青白磁碗体部である。内面に櫛描きの文様を有する。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。
19は瀬戸窯入子である。外底面はヘラ切りである。胎土は灰白色を呈し緻密である。
20はロクロ成形のかわらけ大皿である。器壁の薄いタイプである。

（４）Ｗトレンチ北部５次掘り下げ出土遺物（図２４）
21は常滑窯壷口縁である。器表は灰褐色、胎土は灰色を呈する。
22は白かわらけ口縁である。胎土は乳白色を呈する。

（５）Ｗトレンチ中部３次掘り下げ出土遺物（図２５）
１は瀬戸窯（東濃型）山茶碗である。胎土は灰白色を呈し精良・緻密。器壁は非常に薄い。
２は常滑窯山茶碗口縁である。胎土は灰色を呈し粗雑である。
３は山茶碗窯系捏鉢口縁である。胎土は灰色を呈し、粘性に富む。
４・５は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張る。胎土は灰色を呈し粗雑である。
６は常滑窯甕肩部である。外面に格子文の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。
７は手焙り口縁である。胎土は赤橙色を呈する。

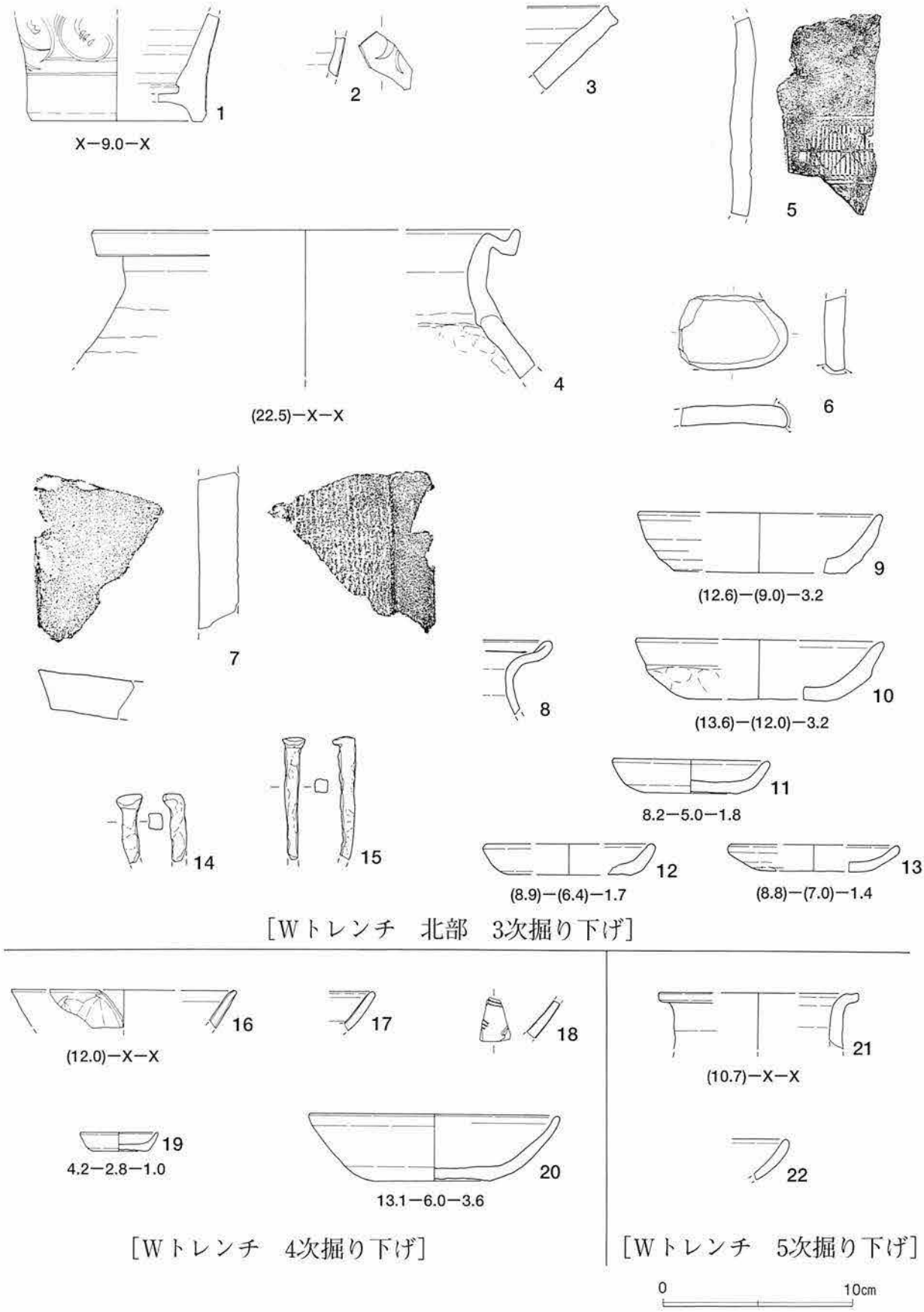


図24　Wトレンチ北部３・４・５次掘り下げ出土遺物

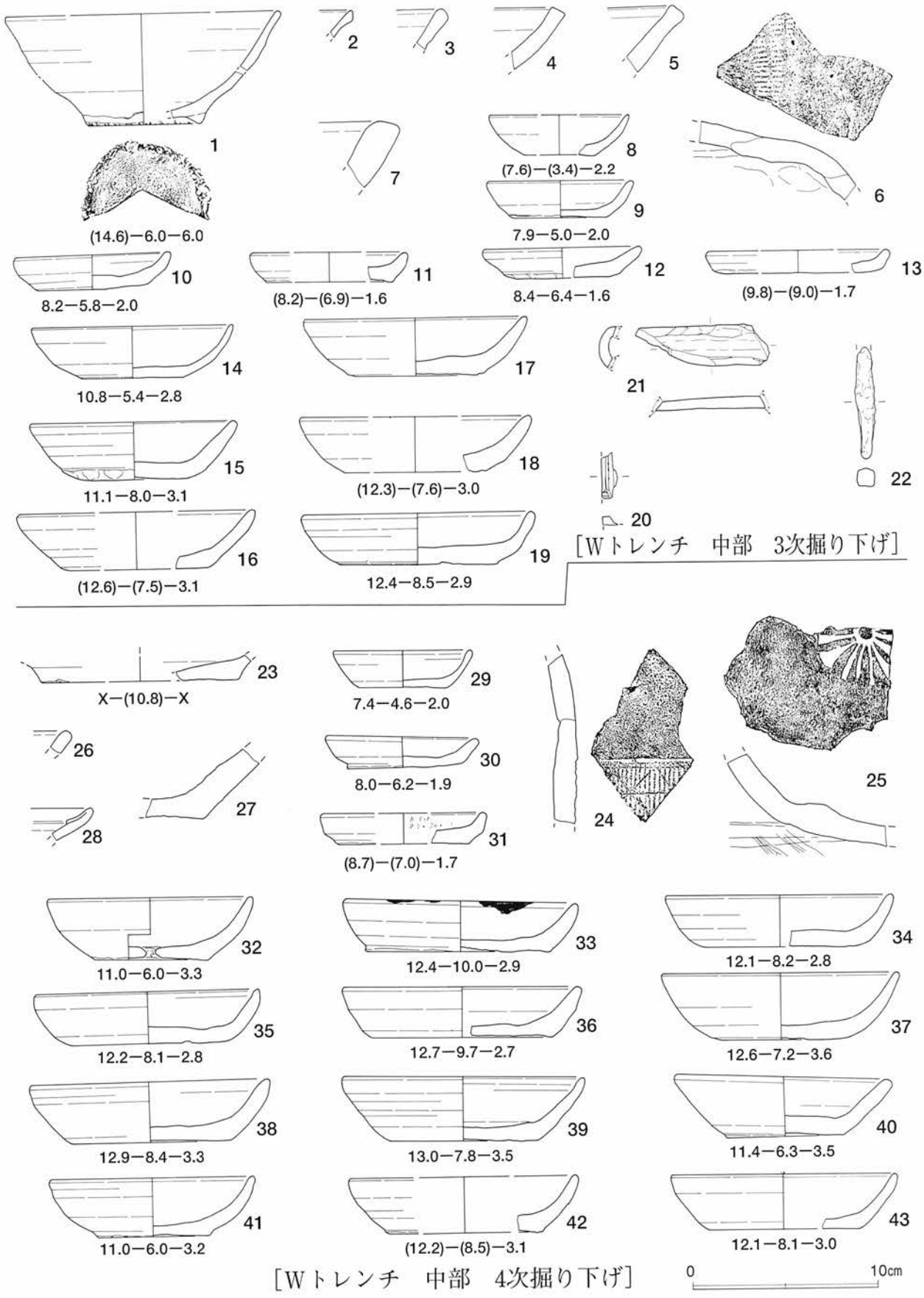


図25　Wトレンチ中部３・４次掘り下げ出土遺物

8～11はロクロ成形のかわらけ小皿である。8・9は薄手タイプである。
12・13は手づくね成形のかわらけ小皿である。
14はロクロ成形のかわらけ中皿である。器壁は非常に薄い。
15は手づくね成形のかわらけ大皿である。器壁は厚い。
16～19はロクロ成形のかわらけ大皿である。19は底径が大きく、器高の低いタイプである。
20は硯である。
21は切断痕を有する動物骨である。
22は鉄製品である。鉄釘と考えられる。断面は方形を呈する。

（6）Wトレンチ中部4次掘り下げ出土遺物（図25）
23は瀬戸窯鉢底部である。釉は灰釉。外底面は回転糸切りである。胎土は乳白色を呈し精良。
24・25は常滑窯甕肩部・胴部である。24は格子文、25は車輪文の押印を有する。胎土は灰色を呈す。
26は山茶碗窯系捏鉢口縁である。胎土は灰色を呈し粗雑である。
27は山茶碗窯系捏鉢底部である。高台部が剝離している。胎土は灰色を呈し粗雑である。
28は伊勢系土鍋口縁である。胎土は灰橙色を呈し、芯部は灰黒色を呈す。
29～31はロクロ成形のかわらけ小皿である。29は薄手タイプである。
32～43はロクロ成形のかわらけ大皿である。32・37・39・41は薄手タイプ、40は厚手で粉質のタイプである。32の底部中央には焼成後の穿孔を有している。33は灯明皿として使われたものである。

（7）Wトレンチ中部5次掘り下げ出土遺物（図26）
1は白磁皿底部である。内面にヘラ描きの文様を有する。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。
2は青白磁碗口縁部である。端反り口縁である。釉は水青色、胎土は白色を呈する。
3は瀬戸窯卸し皿口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈し緻密である。
4は渥美・湖西窯山茶碗底部である。断面三角形の高台を有する。胎土は灰色を呈し精良である。
5は渥美・湖西窯山皿である。外底面は回転糸切りである。胎土は灰色を呈し精良である。
6は渥美・湖西窯系の碗口縁であろうか？端部は内方へ突出する。胎土は灰色を呈し精良である。
7～10は山茶碗窯系捏鉢口縁部である。いずれの端部も丸い。胎土は灰色を呈し、粗雑である。
11は常滑窯甕底部である。外底面は砂底である。器表は褐色、胎土は灰色を呈し精良である。
12は手づくね成形のかわらけ小皿である。
13・14は手づくね成形のかわらけ大皿である。器壁は厚手である。
15・16はロクロ成形のかわらけ大皿である。
17～19は鉄製品である。17は楔、18は掛け金具、19は鉄釘と考えられる。

（8）Wトレンチ南部1次掘り下げ出土遺物（図26）
20は白磁口兀げ皿口縁である。釉は灰色透明、胎土は灰白色である。
21は須恵器であろうか？胎土は灰色を呈し緻密である。
22は瀬戸窯折縁鉢口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈し精良である。
23は瀬戸窯盤口縁である。釉は鉄釉。胎土は灰白色を呈する。
24は常滑窯甕口縁部である。縁帯の幅は0.8cmである。器表は褐色、胎土は灰色を呈し、粘性強し。

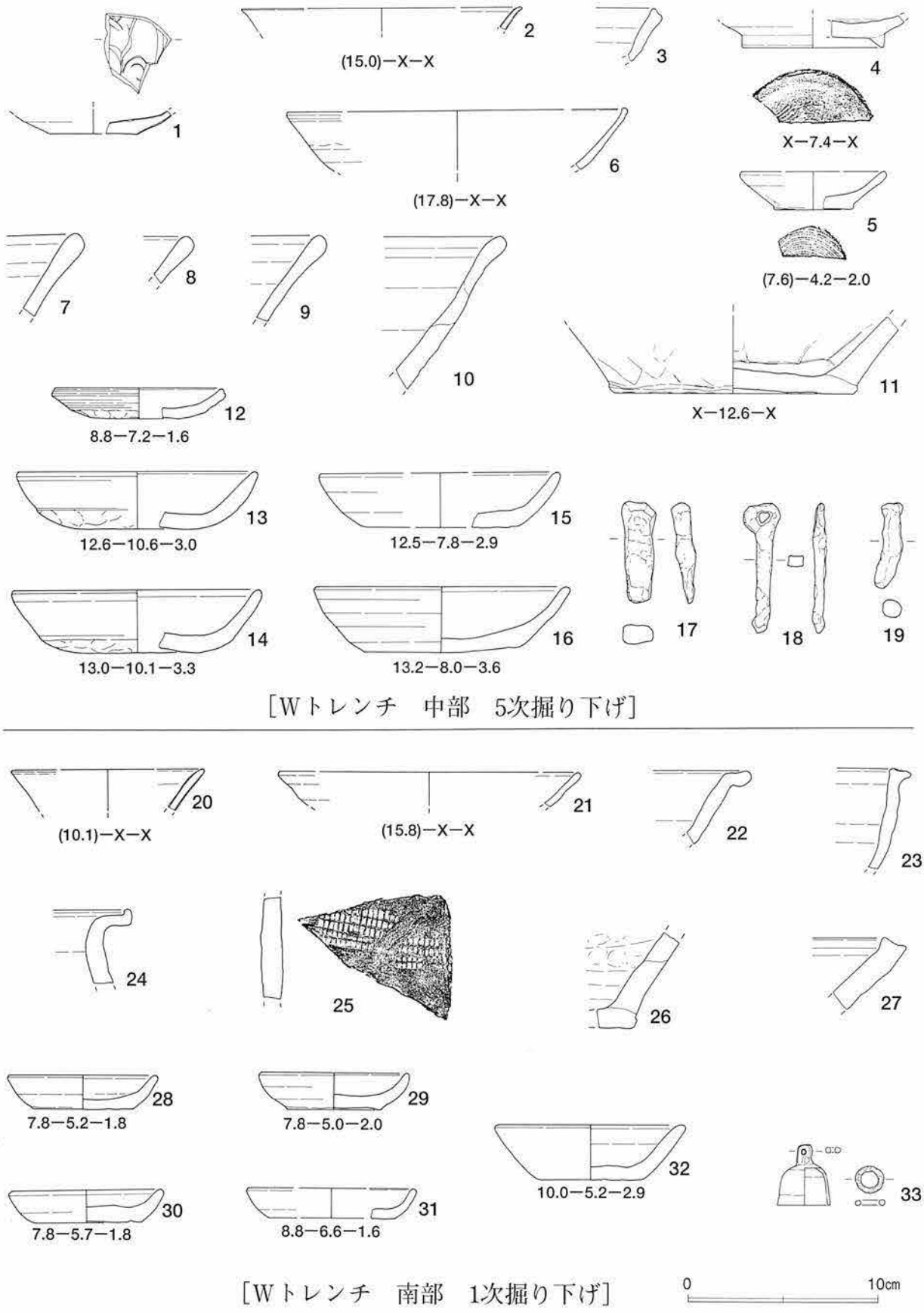


図26　Wトレンチ中部５次、南部１次掘り下げ出土遺物

25は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。
26は常滑窯甕底部である。外底面は砂底である。器表は褐色、胎土は灰色を呈し粘性に富む。
27は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張り、内方に引き出される。器表は褐色、胎土は灰色を呈す。
28〜31はロクロ成形のかわらけ小皿である。
32はロクロ成形のかわらけ中皿である。器壁は厚く、粉質のタイプである。
33は銅製の鈴である。現代の所産である可能性がある。

（9）Wトレンチ南部2次掘り下げ出土遺物（図27・28）

1・2は青磁鎬蓮弁文碗口縁である。釉調は1が暗緑色、2が灰緑色を呈す。胎土は灰色を呈する。
3は青磁折縁鉢口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。
4は青白磁小皿底部である。内面には水青色の釉がかかる。胎土は灰白色を呈する。
5は瀬戸窯卸し皿口縁である。釉は灰釉。胎土は灰色を呈する。
6は瀬戸窯平鉢底部である。釉は灰釉。外底面は回転糸切りである。胎土は灰白色を呈する。
7は瀬戸窯卸し皿口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。
8は瀬戸窯盤口縁である。釉は鉄釉。胎土は灰白色を呈する。
9は瀬戸窯盤底部である。外底面は砂底である。釉は鉄釉。胎土は灰白色を呈する。
10は瀬戸窯入子口縁である。胎土は灰色を呈し緻密である。
11は瀬戸窯山茶碗底部である。胎土は橙味がかった灰色を呈する。
12は渥美・湖西窯山皿口縁である。胎土は灰色を呈し精良・緻密である。
13は常滑窯甕口縁である。縁帯の幅は1.1cm。器表は褐色、胎土は灰色を呈し、粘性に富む。
14〜16は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有している。器表は褐色、胎土は灰色を呈す。
17は常滑窯製品底部である。壷であろうか？外底面は回転糸切りである。胎土は灰橙色を呈する。
18は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張る。器表・胎土は灰色を呈し、粗雑である。
19〜21は山茶碗窯系捏鉢口縁である。端部は丸い。胎土は灰色を呈し粗雑である。
22〜26は山茶碗窯系捏鉢底部である。砂底の底部に高台を張りつけている。胎土は灰色を呈する。
27は手焙り口縁である。器表は橙色、胎土は灰色を呈する。
28は羽釜の鍔部である。胎土は淡橙色を呈し精良。焼成良好である。
29は手づくね成形の白かわらけである。胎土は橙味がかった白色を呈する。
30はロクロ成形のかわらけである。口径5.6cmであり、非常に小さいものである。
31〜43はロクロ成形のかわらけ小皿である。
44は手づくね成形のかわらけ小皿である。器壁は厚い。
45〜49はロクロ成形のかわらけ大皿である。
50・51は手づくね成形のかわらけ大皿である。器壁は厚く、ボッテリとしている。
52〜54は滑石鍋の破片である。53は底部。52・55は二次的な加工痕を有する。
55は砥石である。荒砥と考えられる。
56は土製の円板である。ロクロ成形のかわらけ底部を使用している。周囲は研磨されている。
57は骨製品の笄である。
58は切断痕を有する動物骨である。刃物による削痕が認められる。
59〜61は銅銭である。59は皇宋通宝、60は至和元宝、61は景徳元宝である。

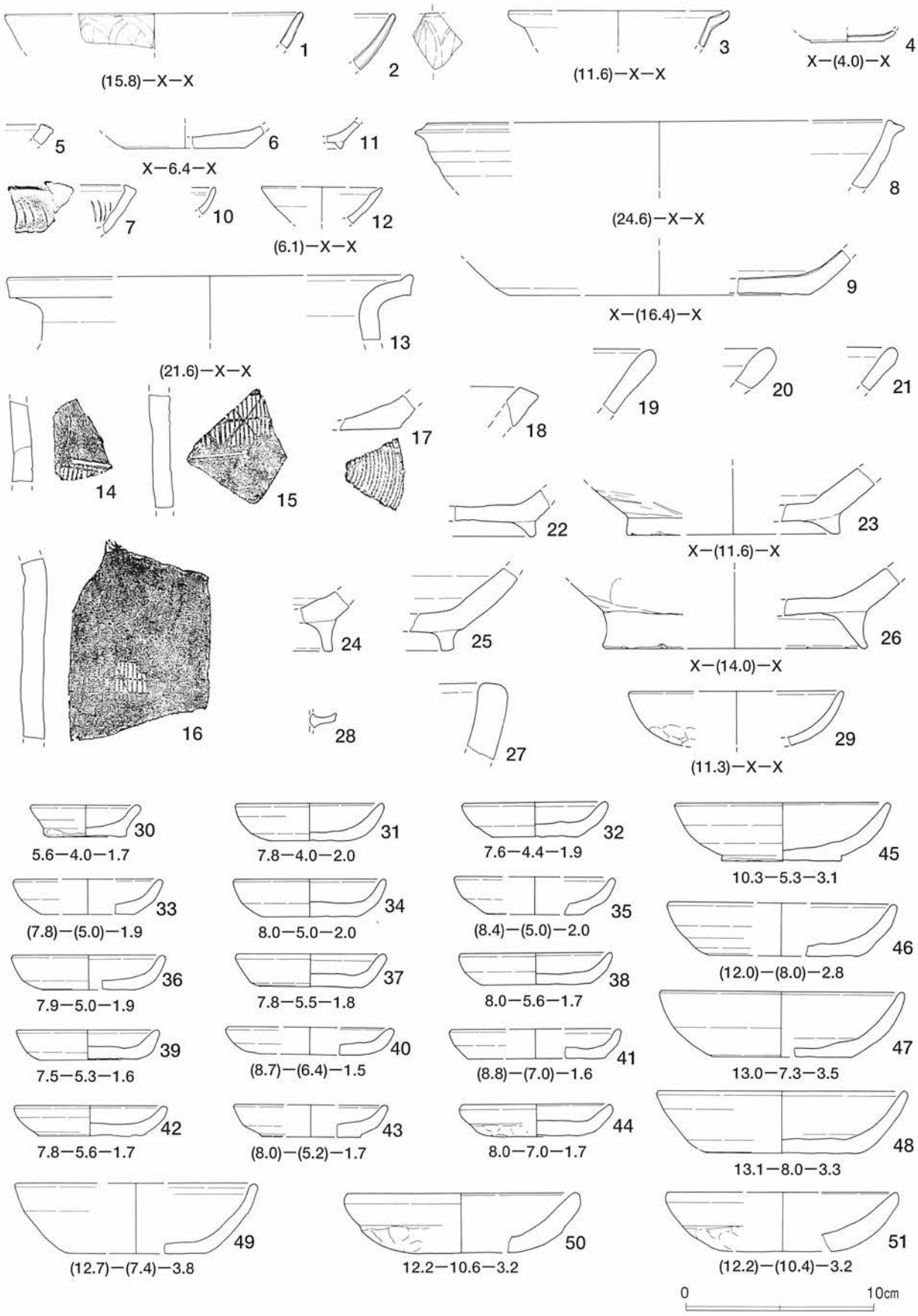
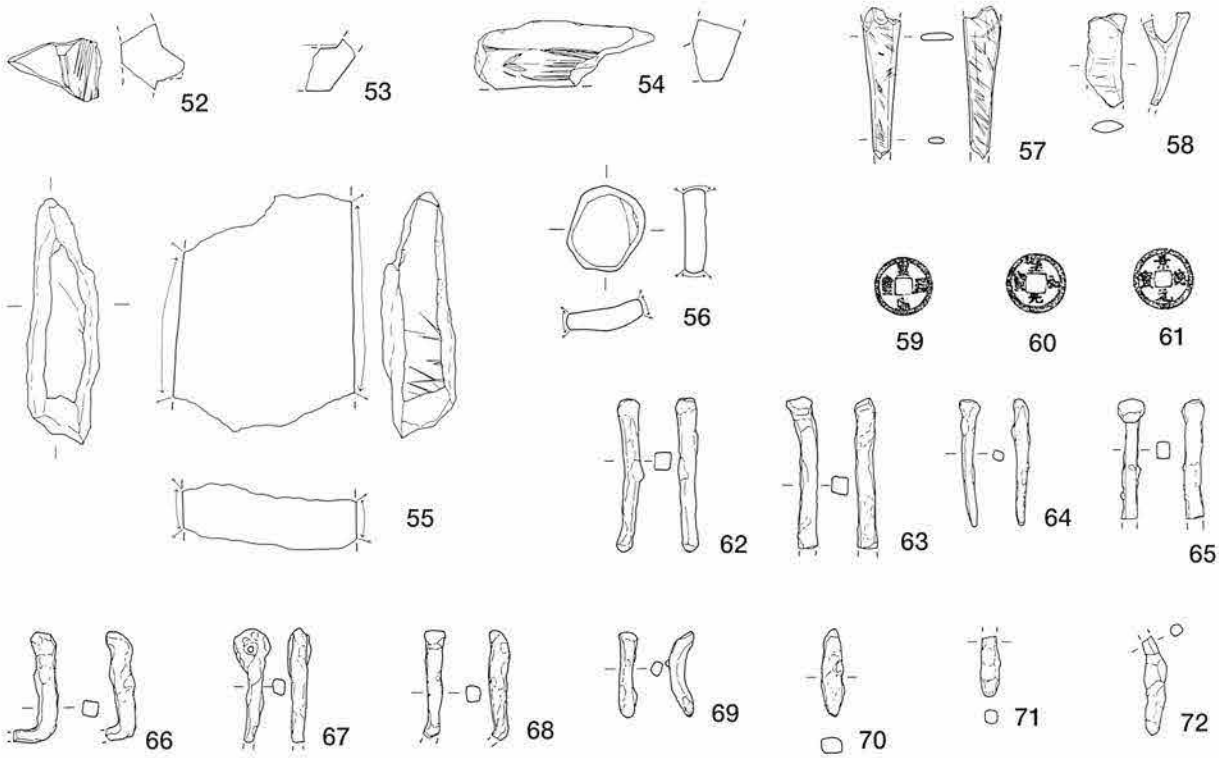
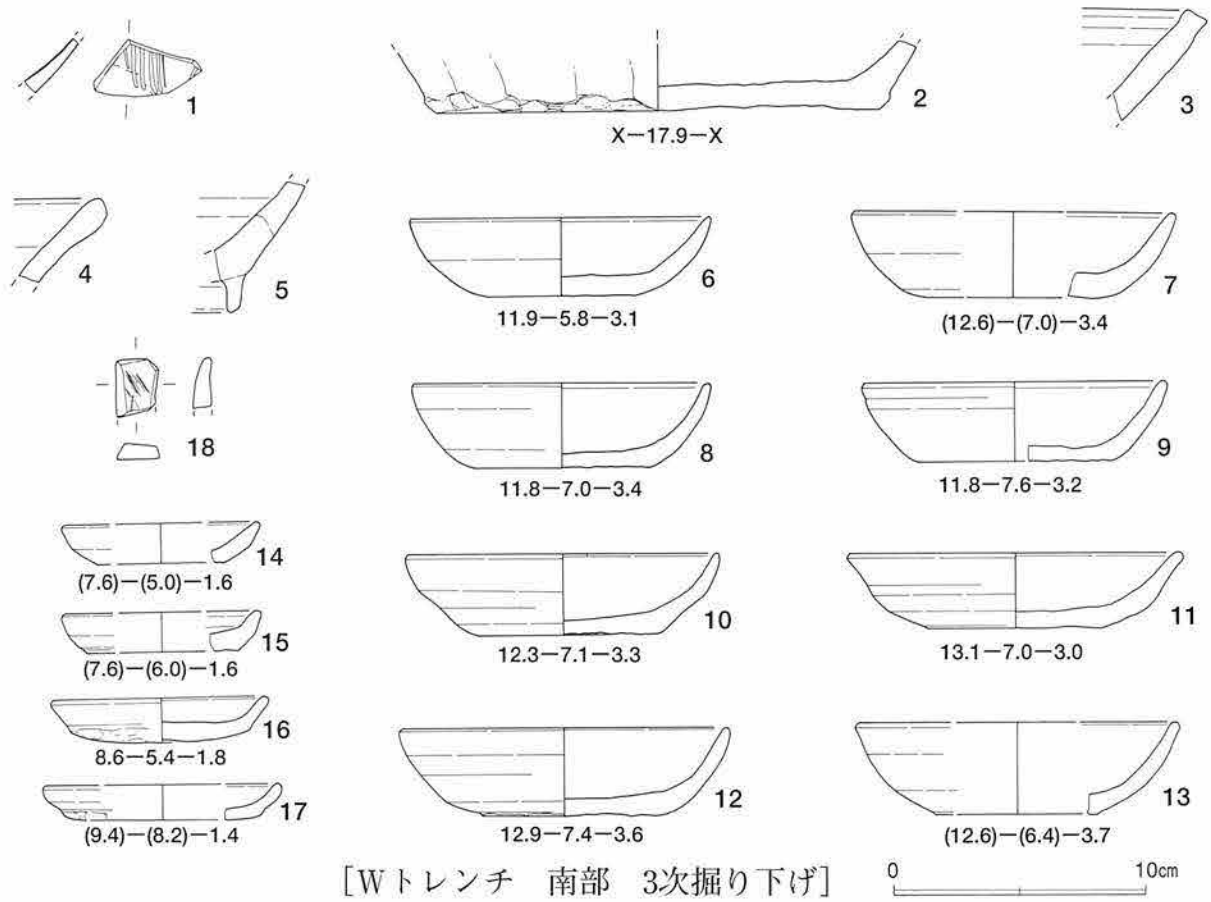


図27　Wトレンチ南部２次掘り下げ出土遺物（1）



［Wトレンチ　南部　2次掘り下げ（2）］



［Wトレンチ　南部　3次掘り下げ］

図28　Wトレンチ南部2（2）・3次掘り下げ出土遺物

62～72は鉄製品である。67は掛け金具、他は鉄釘である。断面は方形、もしくは長方形を呈する。

(10) Wトレンチ南部3次掘り下げ出土遺物（図２８）

1は同安窯系青磁碗体部である。外面に櫛描き文を有する。釉は灰色、胎土は灰白色を呈する。

2は常滑窯甕底部である。外底面は砂底である。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。

3は常滑窯捏鉢口縁である。端部は角張る。器表は褐色、胎土は灰色を呈し、粘性は強い。

4・5は山茶碗窯系捏鉢である。4は口縁、5は底部である。胎土は灰色を呈し粗雑である。

6～13はロクロ成形のかわらけ大皿である。器壁の薄いタイプが主流である。

14・15はロクロ成形のかわらけ小皿である。器壁は厚い。

16・17は手づくね成形のかわらけ小皿である。

18は砥石である。中砥と考えられる。

(11) Wトレンチ南部4次掘り下げ出土遺物（図２９）

1は青磁碗底部である。釉は青緑色、胎土は灰白色を呈する。

2は青白磁梅瓶底部である。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。

3・4は常滑窯甕である。3は口縁、4は底部である。縁帯幅は1.2cm。胎土は灰色を呈する。

5・6は常滑窯捏鉢である。5は口縁、6は底部である。口縁端部は角張る。胎土は灰色を呈する。

7は山茶碗窯系捏鉢口縁である。端部は丸い。胎土は灰白色を呈する。

8～10は手焙りである。8は菊花文の押印を有する。9の端部は外方に突出する。10は底部である。

11～16はロクロ成形のかわらけ小皿である。

17・18は手づくね成形の小皿である。

19～25はロクロ成形のかわらけ大皿である。

26は手づくね成形の大皿である。器壁の厚いタイプである。

27～29は錆が激しいが、鉄釘と考えられる。断面は長方形を呈するものである。

30は火打ち石である。

(12) Wトレンチ南部5次掘り下げ出土遺物（図２９）

31は渥美・湖西窯山茶碗底部である。高台の断面は三角形、胎土は灰色を呈し精良・緻密である。

32は常滑窯甕口縁である。外底面は砂底。器表・胎土は灰橙色を呈する。焼成不良。

33・34はロクロ成形のかわらけである。33は大皿。34は小皿である。ともに薄手タイプである。

35は切断痕を有する動物骨である。

(13) Sトレンチ1次掘り下げ出土遺物（図３０）

1は瀬戸窯折縁鉢口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

2は山茶碗窯系捏鉢口縁である。端部は丸い。胎土は灰色を呈する。

3は手焙り底部である。器表は灰黒色、胎土は灰橙色を呈し、軟質である。

4は型造りの泥塔である。胎土は灰橙色を呈する。現代の所産の可能性がある。

5は切断痕を有する動物骨である。

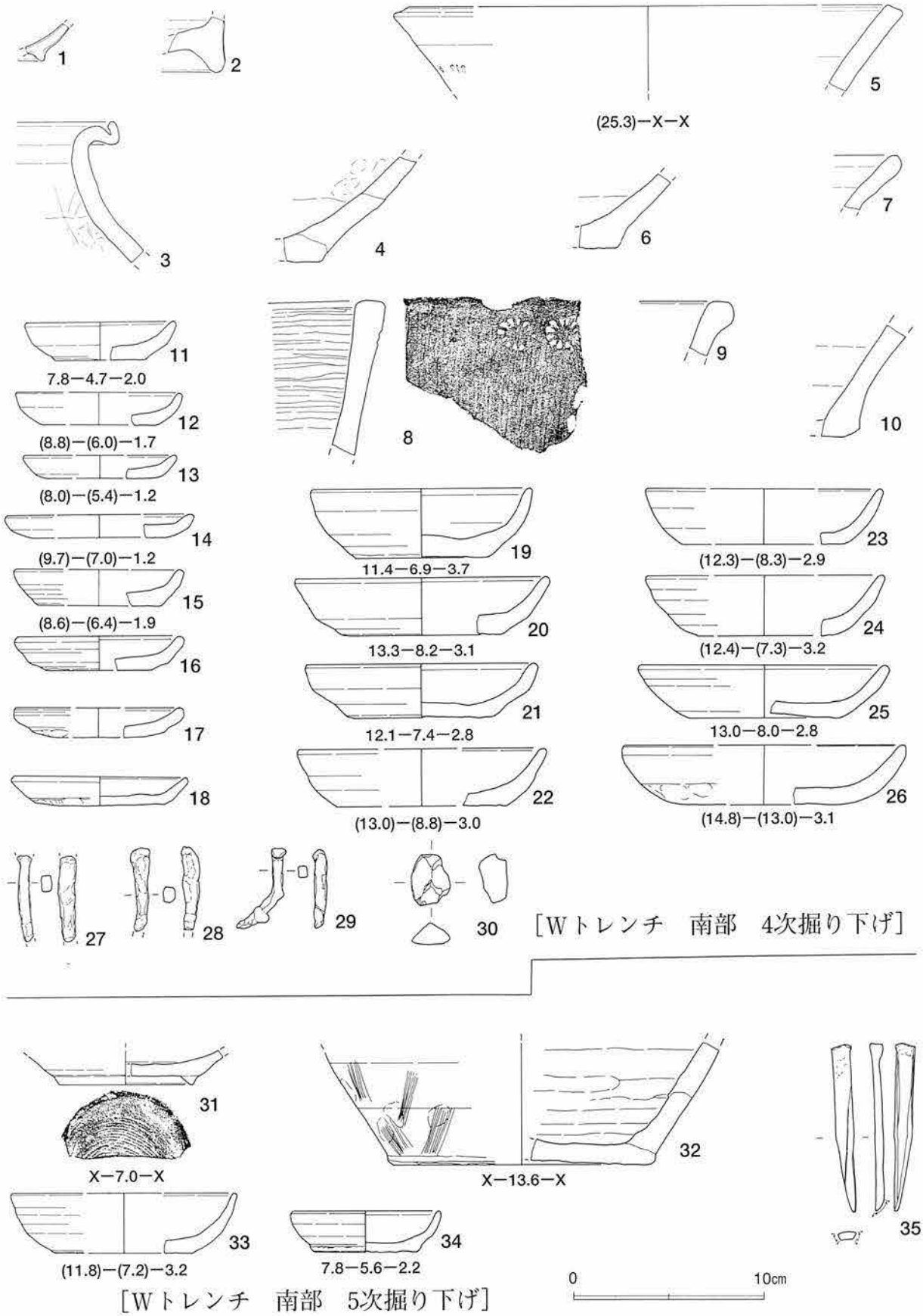


図29　Wトレンチ南部４・５次掘り下げ出土遺物

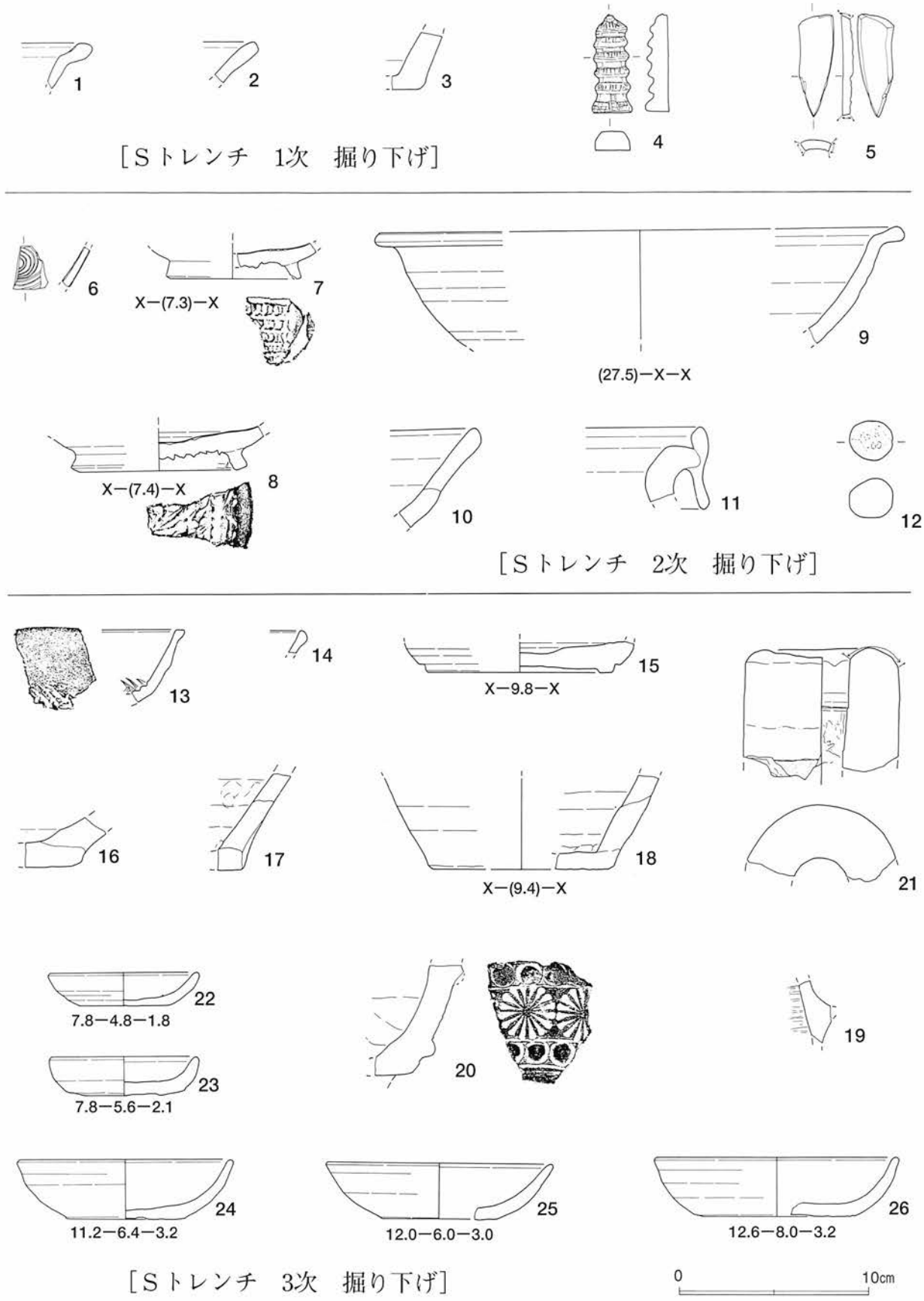


図30　Sトレンチ1・2・3次掘り下げ出土遺物

(14) Ｓトレンチ２次掘り下げ出土遺物（図３０）

６は青白磁碗体部である。内面に渦文を有する。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。

７・８は瀬戸窯底卸し目皿である。釉は灰釉。胎土は灰色を呈する。

９は瀬戸窯縁折れ鉢口縁である。釉は灰釉。胎土は灰色を呈する。

10は山茶碗窯系捏鉢口縁部である。端部は丸い。胎土は灰色を呈し粗雑である。

11は常滑窯甕口縁部である。縁帯の幅は4.3cm 。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。

12は球形を呈した石である。

(15) Ｓトレンチ３次掘り下げ出土遺物（図３０）

13は瀬戸窯卸し皿口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

14は瀬戸窯鉢口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

15は瀬戸窯鉢底部である。高台は削り出しである。釉は灰釉。胎土は灰色を呈する。

16・17は常滑窯甕底部である。外底面は砂底。胎土は精良であり、16は灰色、17は灰橙色を呈する。

18は常滑窯壷底部である。外底面は砂底。胎土は灰色を呈する。

19は羽釜である。器表は灰橙色、胎芯は灰黒色を呈する。

20は瓦質手焙り底部である。菊花文の押印と連珠の凸帯を有す。器表は灰黒色、胎芯は灰色を呈す。

21はフイゴの羽口である。胎土は灰橙色を呈し、一部に溶着が認められる。端部を研磨している。

22・23はロクロ成形のかわらけ小皿である。

24～26はロクロ成形のかわらけ大皿である。いずれも器壁の薄いタイプである。

(16) Ｓトレンチ４次掘り下げ出土遺物（図３１）

１は青磁鎬蓮弁文碗口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

２は青白磁碗体部である。内面には文様を有する。釉は水青色、胎土は白色を呈する。

３は白磁口兀げ皿口縁である。釉は淡灰色透明、胎土は灰白色である。

４は瀬戸窯瓶子底部である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

５は常滑窯甕底部である。外底面は砂底。器表は褐色、胎土は灰色を呈し粗雑である。

６～９は常滑窯捏鉢口縁部である。６・９の端部は外方へ引き出される。胎土は灰色を呈する。

10・11は山茶碗窯系捏鉢である。10は口縁、11は底部。口縁端部は丸い。胎土は灰色を呈する。

12は魚住窯捏鉢口縁である。胎土は灰色を呈し、断面はザクリとしている。

13は瓦質輪花型手焙り口縁である。外面に菊花の押印を有する。器表は灰黒色、胎芯は灰色を呈す。

14～19はロクロ成形のかわらけである。14～18は小皿、19は大皿である。

20・21は手づくね成形のかわらけ大皿である。

22は切断痕を有する動物骨である。

23～25は鉄製品である。23は火箸、24は鉄釘、25は掛け金具と考えられる。

26は用途不明の石製品である。上層からの混入であろうか？

(17) Ｓトレンチ５次掘り下げ出土遺物（図３２）

１は青磁櫛描き文碗口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

２は白磁口兀げ皿底部である。釉は淡青白色、胎土は灰白色を呈する。

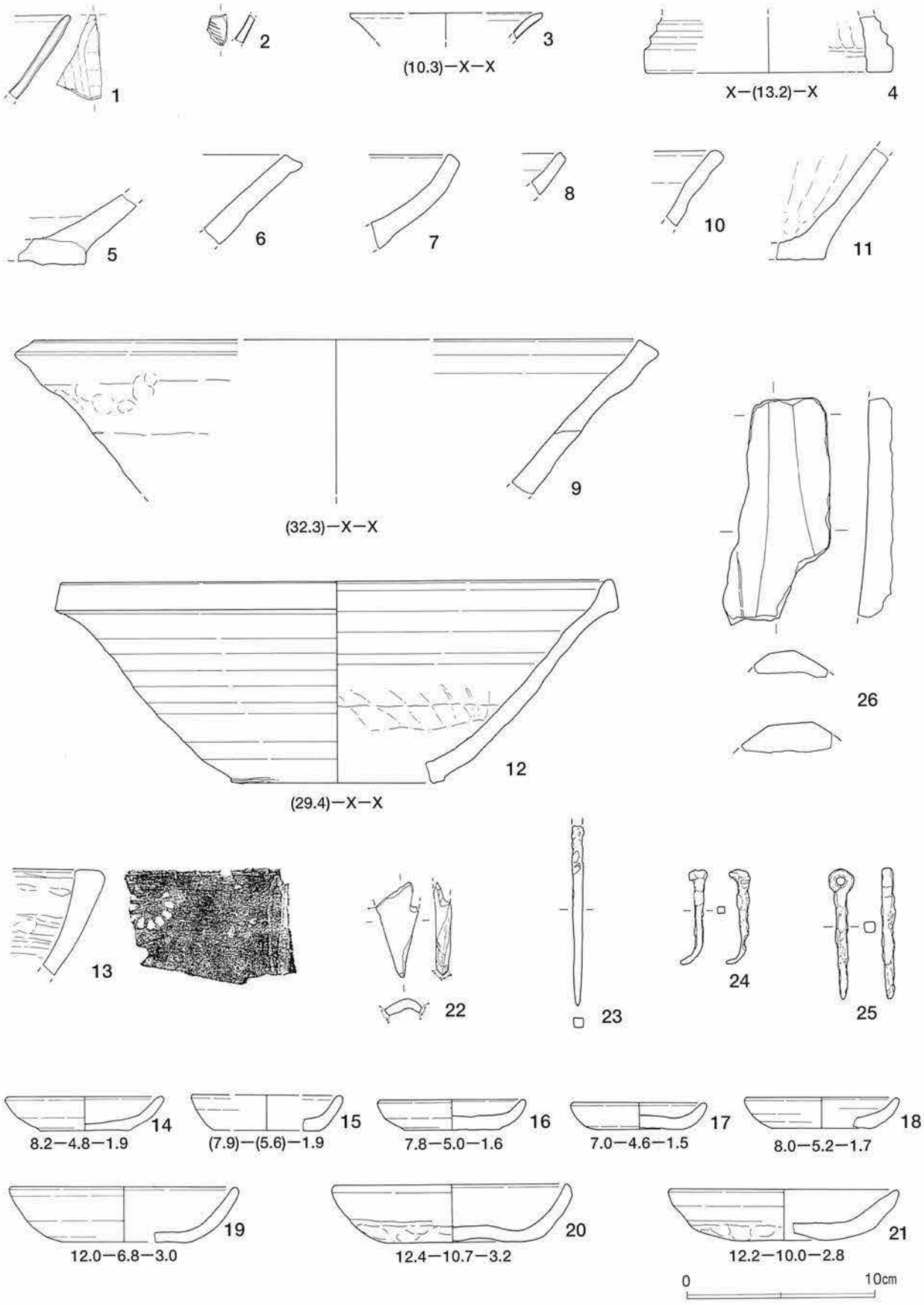


図31　Sトレンチ4次掘り下げ出土遺物

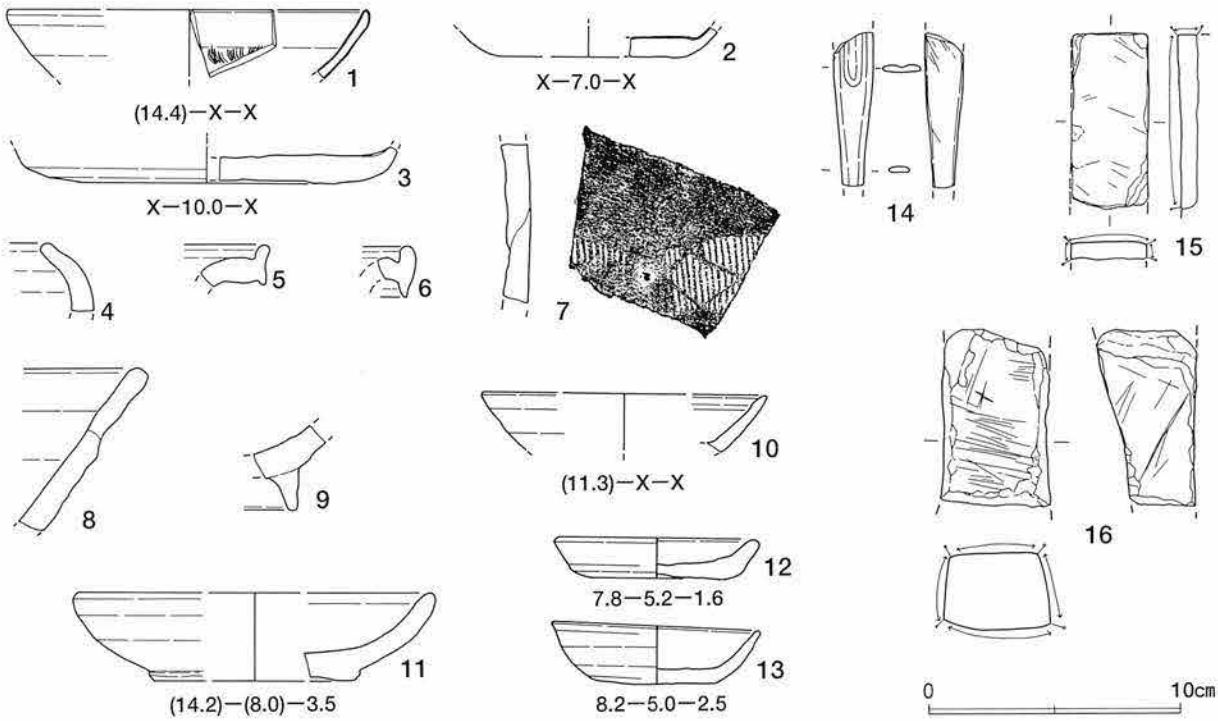


図32　Ｓトレンチ５次掘り下げ出土遺物

３は瀬戸窯折縁鉢底部である。外底面は回転糸切り。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

４は常滑窯鉢口縁である。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。

５・６は常滑窯甕口縁である。縁帯幅は５が1.6cm、６が2.0cm。器表は褐色、胎土は灰色を呈す。

７は常滑窯甕胴部である。外面に格子文の押印を有する。器表は褐色、胎土は灰白色を呈する。

８・９は山茶碗窯系捏鉢である。８は口縁、９は底部。口縁端部は丸い。胎土は灰色を呈する。

10は吉備系土師質土器口縁である。胎土は橙色味がかった白色、芯部は灰白色を呈する。

11はロクロ成形のかわらけ大皿である。器壁は非常に厚い。

12・13はロクロ成形のかわらけ小皿である。13は薄手タイプであり、全体に煤が付着している。灯明皿として使われたものである。

14は骨製品の笄である。

15・16は砥石である。15は仕上砥、16は中砥である。

(18) Ｗトレンチ風成砂層１次掘り下げ出土遺物（図３３）

１～３は手づくね成形のかわらけである。１・２は小皿、３は大皿である。

(19) Ｗトレンチ風成砂層２次掘り下げ出土遺物（図３３）

４～６は手づくね成形のかわらけ小皿、7~9は大皿である。

(20) Ｗトレンチ北部炭範囲Ａ出土遺物（図３３）

10は渥美・湖西窯山茶碗口縁である。胎土は灰色を呈し精良・緻密である。

11は渥美窯甕胴部である。外面に押印を有する。胎土は灰色を呈する。

12は手づくね成形のかわらけ小皿である。

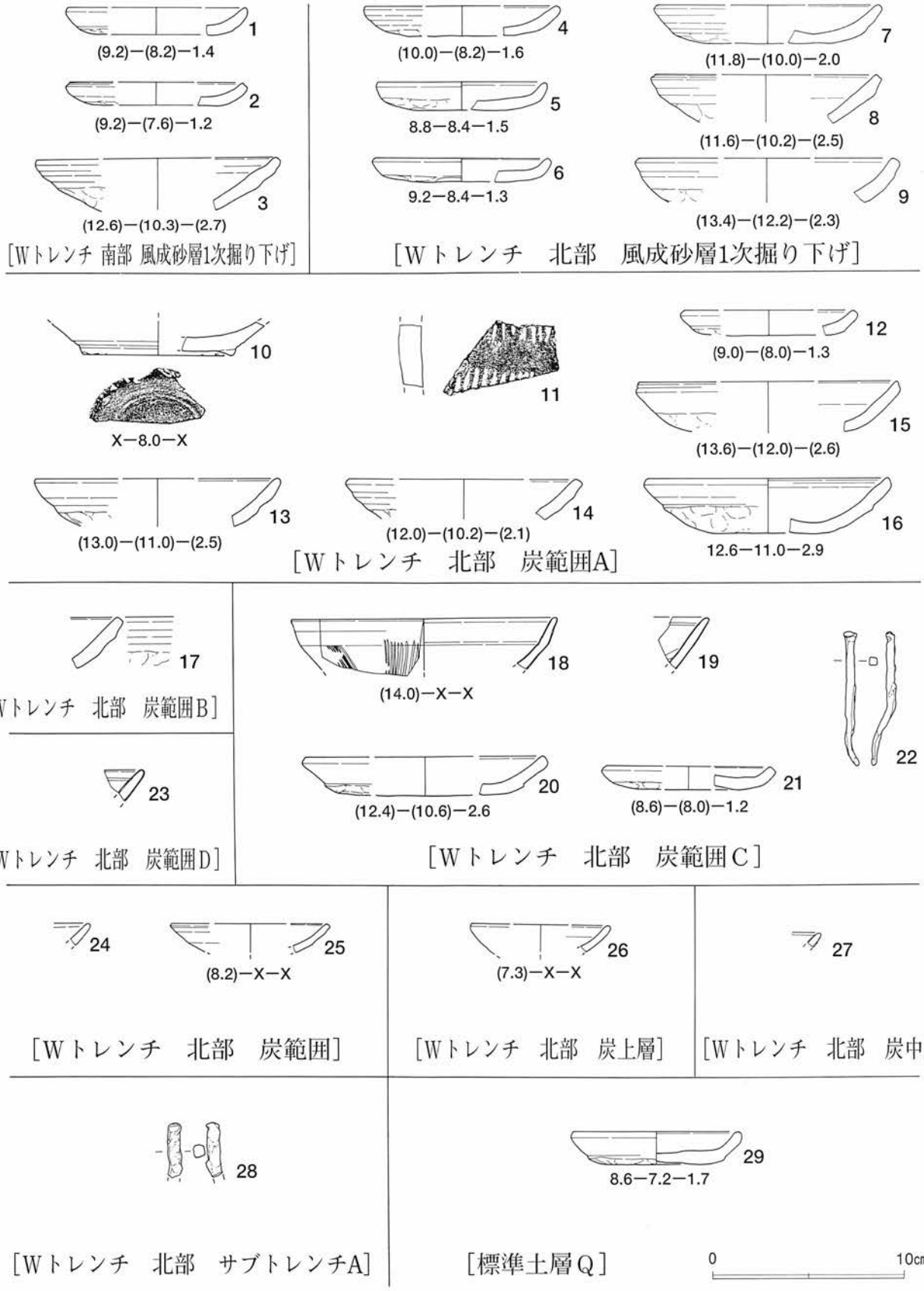


図33 Wトレンチ風成砂層掘り下げ、及び、炭範囲出土遺物

13〜16は手づくね成形のかわらけ大皿である。

(21) Wトレンチ北部炭範囲B出土遺物（図３３）

17は手づくね成形のかわらけの大皿口縁である。

(22) Wトレンチ北部炭範囲C出土遺物（図３３）

18は同安窯系青磁碗である。外面に櫛描き文を有する。釉は灰緑色、胎土は灰白色を呈する。

19は青磁劃花文碗口縁部である。釉は灰青色、胎土は灰白色を呈する。

20・21は手づくね成形のかわらけである。20は大皿、21は小皿である。

22は鉄釘である。断面は方形を呈する。残長7.0cm。

(23) Wトレンチ北部炭範囲D出土遺物（図３３）

23は青磁劃花文碗口縁部である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

(24) Wトレンチ北部炭範囲出土遺物（図３３）

24・25は渥美・湖西窯山茶碗口縁である。胎土は灰色を呈し精良・緻密である。

(25) Wトレンチ北部炭上層出土遺物（図３３）

26は渥美・湖西窯山茶碗口縁である。胎土は灰色を呈し精良・緻密である。

(26) Wトレンチ北部炭中層出土遺物（図３３）

27は青磁劃花文碗口縁部である。釉は灰緑色、胎土は灰色を呈する。

(27) Wトレンチ北部サブトレンチA出土遺物（図３３）

28は鉄釘である。断面は方形を呈するものである。

(28) 標準土層Q出土遺物（図３３）

29は手づくね成形のかわらけ小皿である。

(29) 表採遺物、及び、貝類（図３４）

1は土師器坏の蓋である。外面はヘラケズリ調整。内面は赤彩される。胎土は灰色を呈し緻密。

2は同安窯系青磁皿口縁である。釉は灰緑色、胎土は灰白色である。

3は青白磁皿底部である。釉は水青色、胎土は灰白色を呈する。

4は瀬戸窯底卸し目皿口縁である。釉は灰釉。胎土は灰白色を呈する。

5は渥美窯捏ね鉢口縁である。口縁端部は尖る。胎土は灰白色を呈する。

6は渥美・湖西窯山皿口縁である。胎土は灰白色を呈し精良・緻密である。

7・8は常滑窯山茶碗口縁である。胎土は灰色を呈し粗雑である。

9・10は常滑窯甕口縁である。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。縁帯幅は1.2cmである。

11・12は常滑窯捏鉢口縁部である。口縁端部は角張る。器表は褐色、胎土は灰色を呈する。

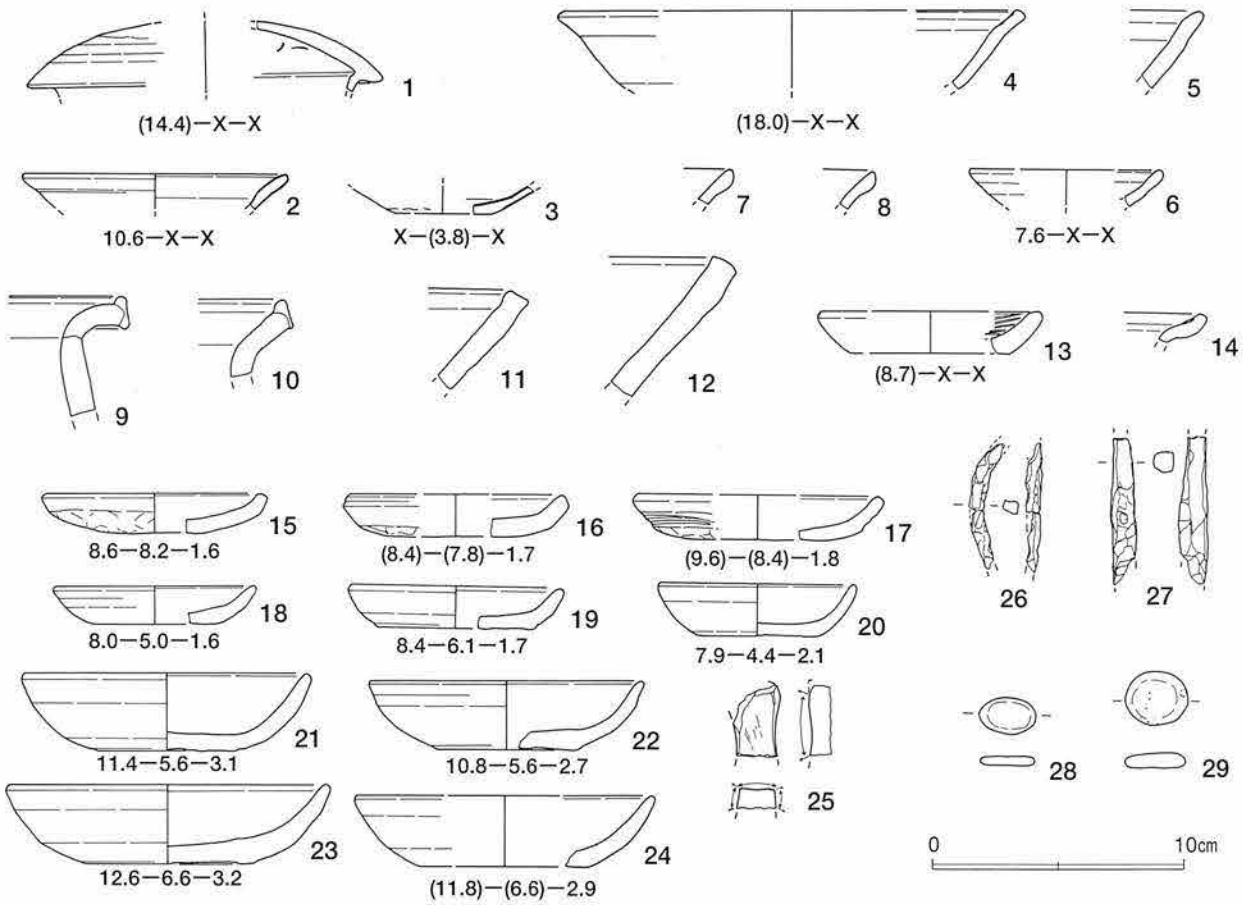


図34　表採遺物

13は瓦質の小皿である。内面には横位のミガキが行われる。胎土はくすんだ白色を呈する。

14は伊勢系土鍋口縁である。胎土は灰橙色を呈する。

15〜17は手づくね成形のかわらけ小皿である。

18〜20はロクロ成形のかわらけ小皿、21〜24は大皿である。

25は砥石である。中砥と考えられる。

26・27は鉄製品である。錆が激しいが鉄釘と考えられる。断面は方形を呈するものである。

28・29は扁平な石である。碁石として使用された可能性もあろう。

本調査からは総数595点に及ぶ貝類を出土している。以下、生息環境別に各種類の出土点数を記載していく。点数は層位別ではなく、調査区内一括の数値である。

- ［内湾泥底群集］…二枚貝類－アカガイ：1、ミルクイガイ：1。巻き貝類－アカニシ：110、バイ：9。
- ［内湾底砂群集］…二枚貝類－アサリ：2、イタヤガイ：1、オキシジミ：2、サルボウガイ：2、シオフキガイ：1、ハマグリ：3。巻き貝類－イボキサゴ：24、ツメタガイ：9。
- ［湾外砂底群集］…二枚貝類－サトウガイ：1、チョウセンハマグリ：265、ベンケイガイ：1、マガキ：6、ムラサキガイ：1。巻き貝類－イトマキナガニシ：1、キサゴ：11、ダンベイキサゴ：33。
- ［岩礁群集］…巻き貝類－イシダタミガイ：6、イボニシ：4、クロヅケガイ：3、クボガイ：3、サザエ：31、スガイ：24、バテイラ：10、マダカアワビ：29、ミガキボラ：1。

第四章　まとめと考察

調査面積が狭いことにも拘らず、本遺跡からは１～３面にわたる生活面と、多種・多量の遺物を検出することができた。従来、調査例が少なかった材木座町屋遺跡において、新たな資料が得られたことは意義深いことと考える。本章では調査の成果を踏まえ、若干の考察を加えまとめとしたい。

１．検出遺構と年代

第１面の検出遺構はピット、土壙、そして、かわらけ一括廃棄遺構である。いずれも部分的な検出であり、全体の配置や規模等については不明な点が多い。かわらけ一括廃棄遺構から出土したかわらけには、13世紀中頃～14世紀代と考えられるものが混在しており、第１面の年代は漠然と14世紀中頃～15世紀初頭頃と考えたい。この年代観は第２面と一部重複している。

第２面は風成砂層上面において遺構を確認し、ピット、土壙、方形土壙、溝状土壙、そして、方形竪穴建築址を検出している。これらの遺構のうち方形竪穴建築址と方形土壙はほぼ同一の主軸方位を有している。さらに、溝状土壙もこれと直交、あるいは平行の関係にあり、ある程度の区画が存在していたと考えられる。全体をながめると２か所（Ａ・Ｂ－５、Ａ・Ｂ－８グリット）に不定形の土壙が集中している。これらの土壙のうち溝状土壙と切り合い関係にあるものは、全て土壙の方が新しい。何らかの理由で区画がその機能を失い、土壙が掘られたと考えられる。Ｂ－８グリットあたりの中世基盤層は非常に硬化しており、通路として使われていた可能性は非常に高い。「由比ケ浜４－６－９地点」[1] では溝状土壙により区画された道路部分から、多数の土壙が検出されており、本遺跡もこれに類するものと考えられる。第２面の年代は13世紀末～14世紀代と考えたい。これは方形竪穴建築址が出現し、衰退する時期と考えられる。

第３面の遺構は風成砂層を掘り下げた段階で確認された。第２面とは確実に間層を挟んでおり、方形竪穴建築址がこの地に出現する以前の遺構群と考えられる。検出されたのはピット：６口と炭が集中する範囲である。ピットは柱穴と考えられるが、狭い範囲の検出であり、建物を復元することは不可能であった。第２面から第３面への掘り下げ時に出土した遺物は、手づくね成形のかわらけと同安窯系青磁櫛描文碗、龍泉窯系青磁劃花文碗である。そして渥美・湖西窯の山皿・山茶碗が出土している。この山皿・山茶碗は生産地編年では13世紀前半～中頃の年代が与えられており[2]、第３面の年代をあてることができよう。出土した手づくねかわらけは、いずれも薄手の器壁を有し、焼成良好である。

２．遺物構成について

本遺跡からは接合後の破片数で7990点の遺物が出土している。圧倒的に多いのはかわらけ6115点であり、全体の76％を占める。内訳はロクロ成形4901点、手づくね成形1214点であり、出土かわらけの約20％が手づくね成形であることは非常に興味深い。次に多いものは常滑窯製品であり796点（10％）、そして貝類が595点（７％）である。

かわらけ・貝類を除いた遺物の組成をグラフ化したものが図35である（総数1280点）。国産陶磁器は964点出土している。最も多いのは先に述べた常滑窯製品であり、次いで山茶碗窯系製品93点、瀬戸窯製品44点、渥美・湖西窯製品26点、魚住窯製品３点、備前窯製品２点である。常滑窯では甕734 点、捏ね鉢37点、壷17点、山茶碗４点、研磨痕を有する甕胴部片４点が出土しており、圧倒的に甕の出土点数

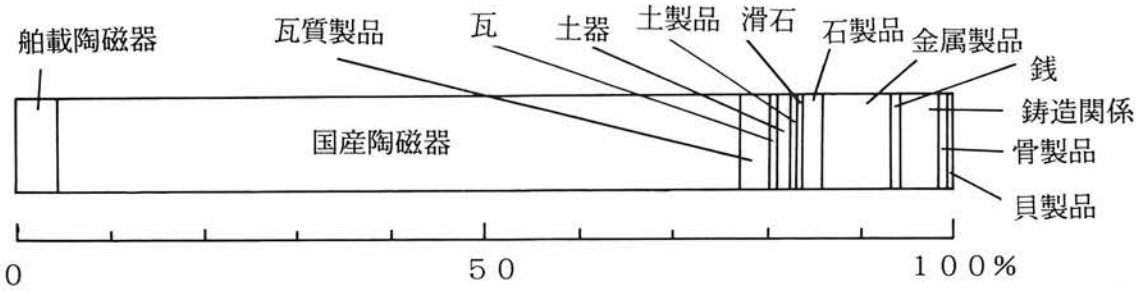


図35　出土遺物構成

が多い。山茶碗窯系のものは全て捏ね鉢である。瀬戸窯製品では壷18点、鉢11点、卸し皿６点、入れ子４点、山茶碗２点、天目・瓶・水注は１点ずつ出土している。渥美・湖西窯では甕９点、山皿９点、山茶碗７点、鉢１点が出土している。魚住窯では捏ね鉢３点、備前窯では擂り鉢２点がそれぞれ出土している。

舶載陶磁器は61点出土している。青磁33点、白磁15点、青白磁12点、黄釉陶器１点である。青磁では同安窯系碗・皿６点、龍泉窯系劃花文碗７点、龍泉窯系鎬蓮弁文碗15点、無文碗１点、鉢２点、壷２点が出土している。白磁では皿９点、壷５点、碗１点が出土している。皿は端反りが１点あり、他は口兀げである。青白磁では梅瓶５点、碗３点、皿３点、合子１点、黄釉では盤が１点出土している。

瓦質製品では手焙り44点、香炉２点が出土している。瓦では平瓦１点、軒平瓦１点が出土している。土器類では伊勢系土鍋７点、白かわらけ５点、羽釜２点、吉備系土師質土器２点が出土している。土製品では円板・壷・泥塔が１点ずつ出土している。滑石製品では鍋が４点出土している。石製品では砥石14点、硯２点、石丸２点、軽石２点、火打ち石１点、用途不明が２点出土している。鉄製品では鉄釘83点、刀子２点、掛け金具２点、鎹１点が出土している。銅製品では鈴が１点出土ている。銭は８点出土している。鋳造関係遺物はスラグ、トリベ、フイゴの羽口などが出土している。骨製品では笄４点、円筒形製品１点、切断痕を有する動物骨９点を出土している。

本遺跡から出土した遺物のうち特徴的なものは、スラグ、トリベ、フイゴの羽口などの鋳造に関わるものや、砥石や切断痕（加工痕）を有する動物骨のような生産・加工等に関わる可能性を有する遺物の出土であろう。長谷小路周辺の遺跡や由比ケ浜中世集団墓地遺跡など、基盤層が砂で方形竪穴建築址を主体とする遺構群が展開される遺跡からはこのような遺物が出土している。本遺跡では狭い調査区からの出土であり、遺構との関連についてはこれからの課題としたい。

【註】

1）斉木秀雄『由比ケ浜４－６－９地点発掘調査報告書－大蔵省印刷局鎌倉宿泊所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』由比ケ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団　1994年３月

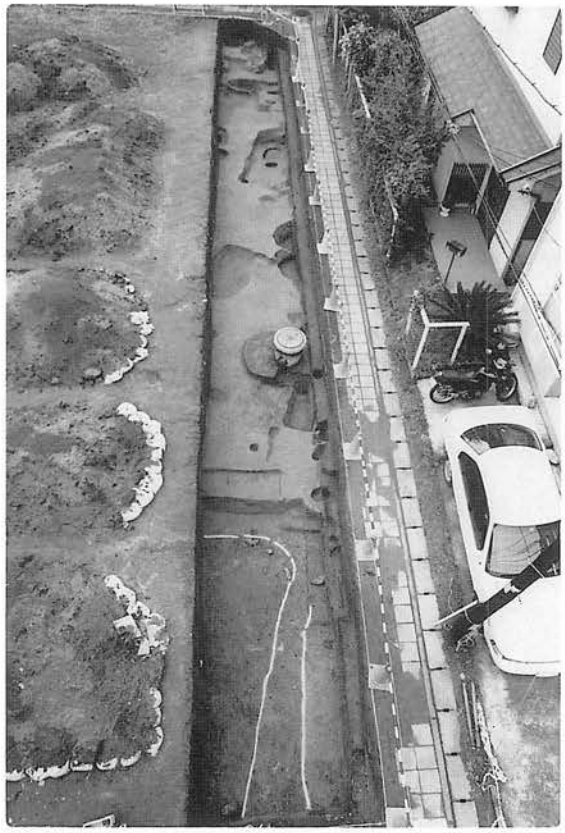
2）後藤健一氏（湖西市教育委員会）から御教示して頂いた。

◀1. 調査区近景。
(北西から)

◀2. 第1面スナップ。
A・B－1～3。
(南から)

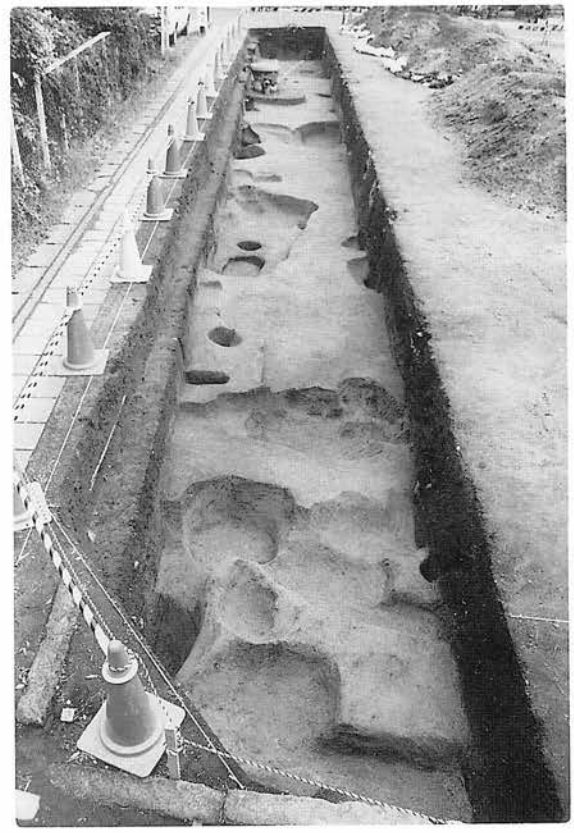
◀3. 同上スナップ。
かわらけ出土状況
(南から)

◀1. 第2面全景スナップ
（北から）



▲2. 第2面全景（北から）。

▼3. 第2面全景（南から）。

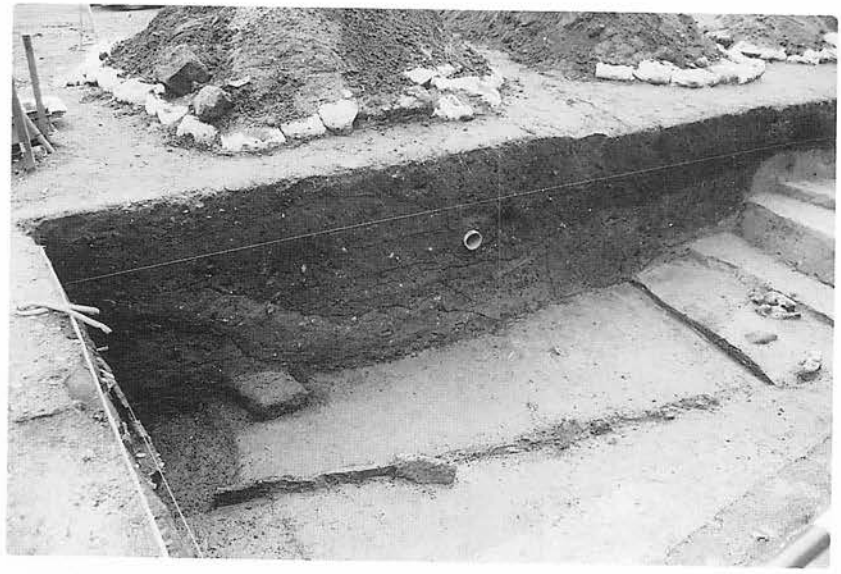


◀1. Ｓトレンチ全景（西から）。

▼2. Ｓトレンチ全景（東から）。

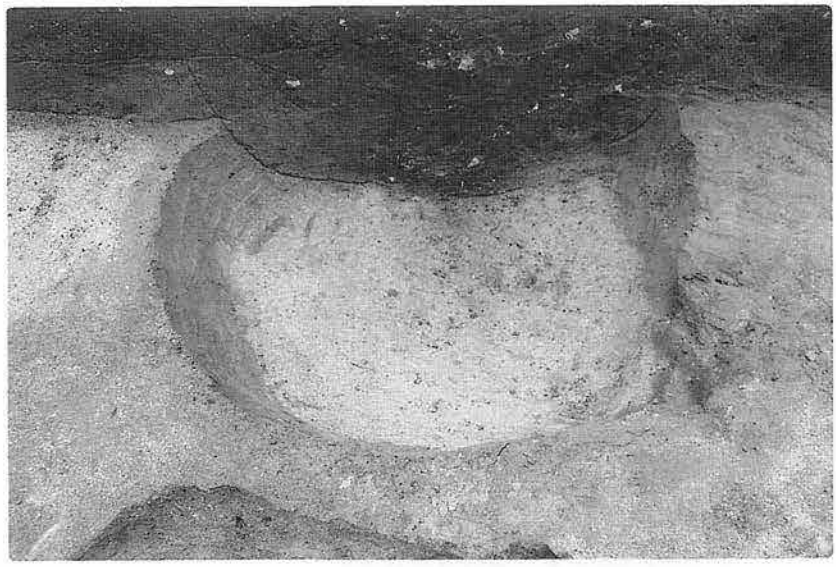
▼3. Ｅ－9グリット、鎌倉石（北から）。

◀1. イコウ48
(北から)。

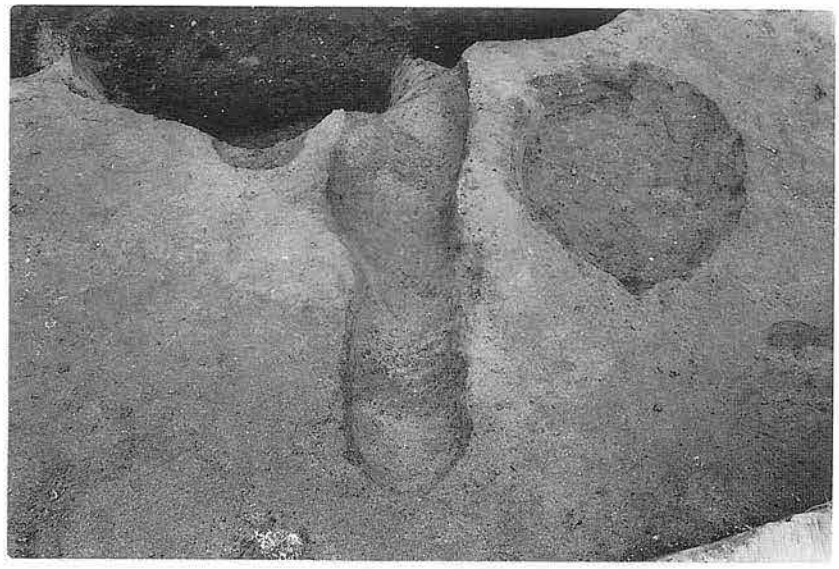


◀2. イコウ48セクション
(西から)。

◀3. イコウ19セクション
(東から)。

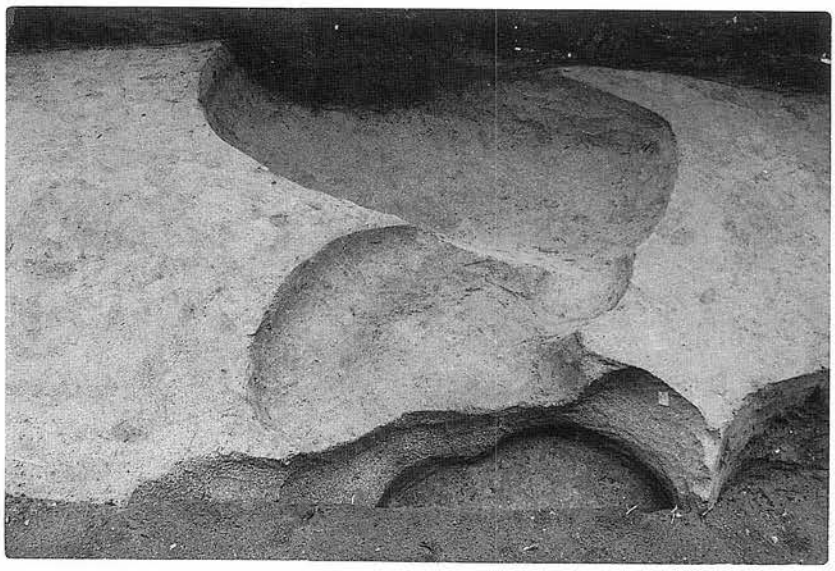


◀1. イコウ75（西から）



◀2. イコウ25・50
（東から）

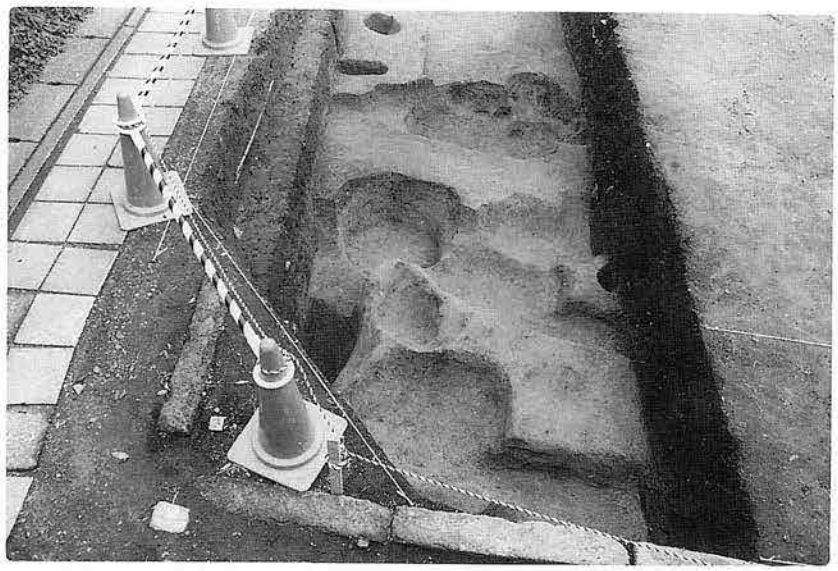
◀3. イコウ24（東から）



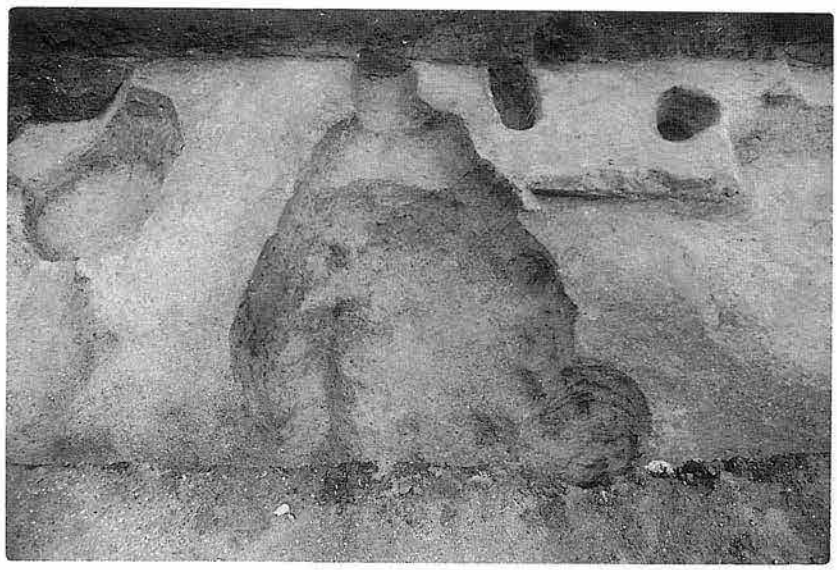
◀1. イコウ25・65・73
（西から）

◀2. イコウ80
（北から）

◀3. イコウ80
セクション
（東から）



◀1. A・B－8グリット
（南から）

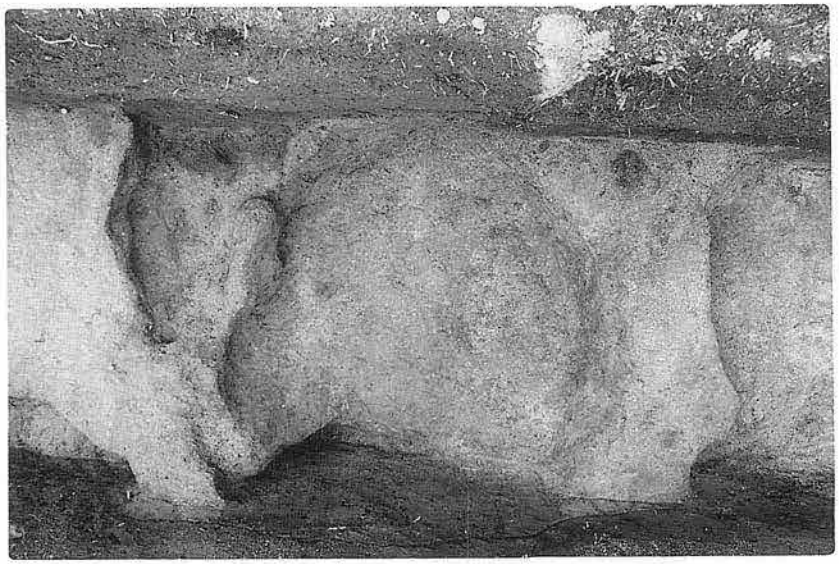


◀2. イコウ39
（東から）

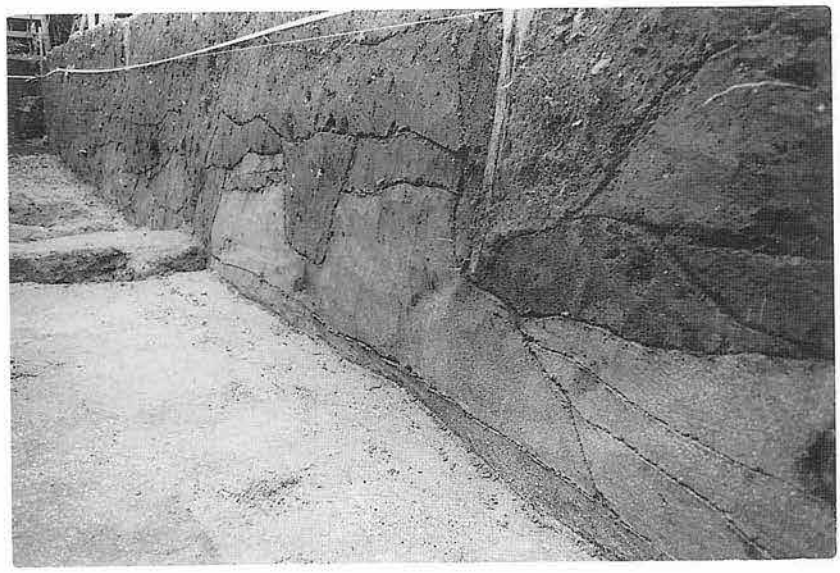
◀3. A～C－8グリット
（西から）

◀1. B－8グリット
（東から）

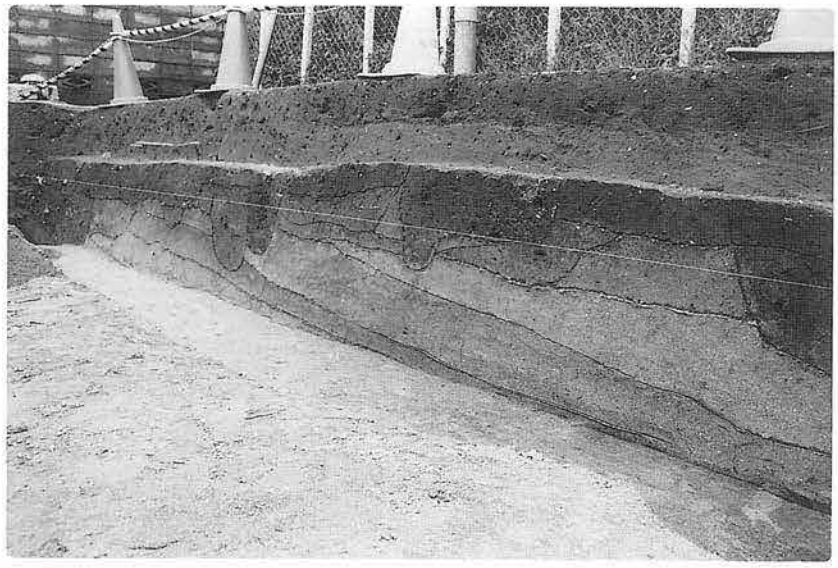
◀2. イコウ95
（南から）



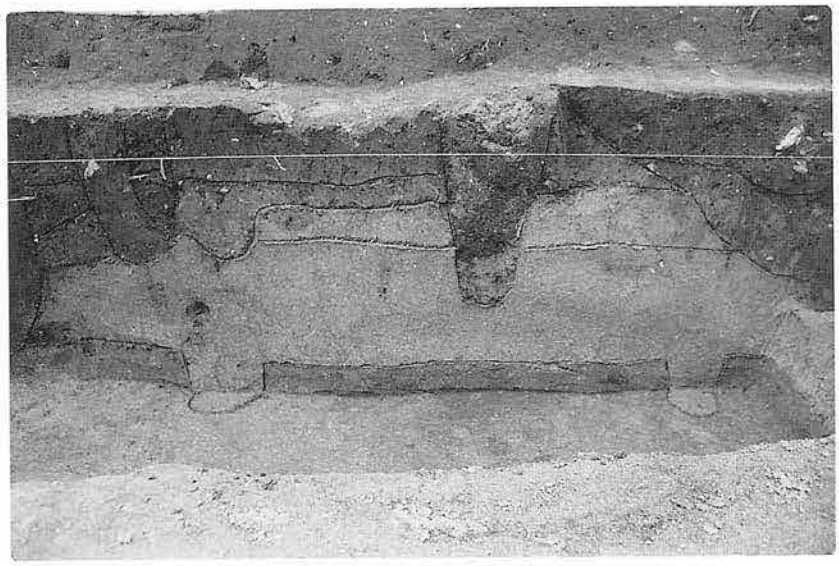
◀3. イコウ99
（南から）



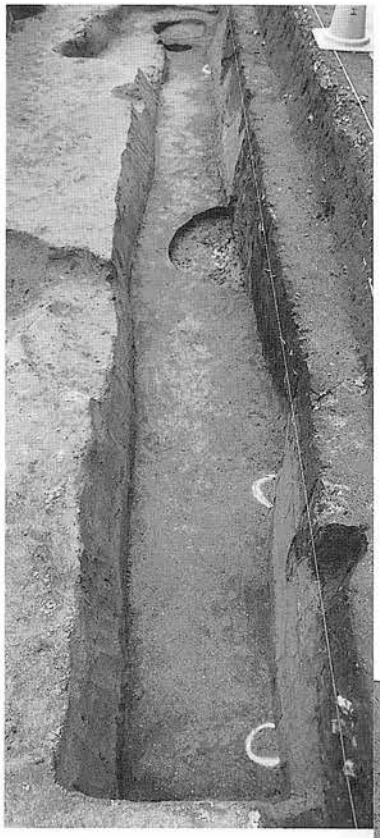
◀1. 南壁セクション
（北西から）



◀2. 西壁セクション
（東から）

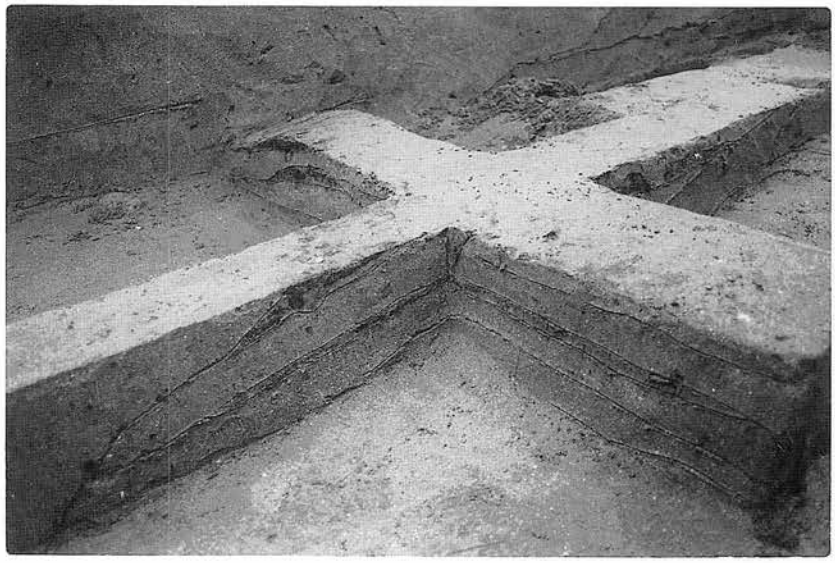


◀3. 同上
第3面ピット列
（東から）

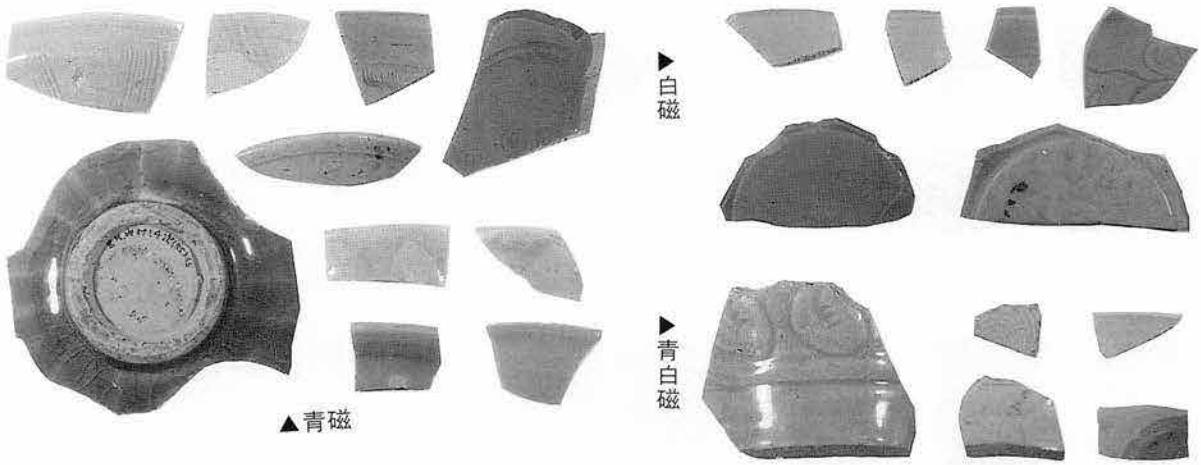


◀1. 第3面ピット列（北から）

▼2. 第3面、炭範囲（南から）



3.▶炭範囲セクション（北西から）

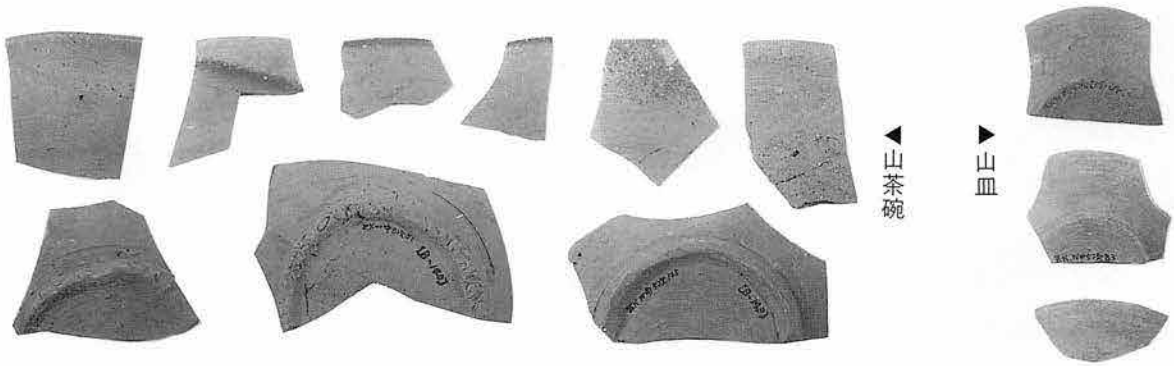


▶白磁

▶青白磁

▲青磁

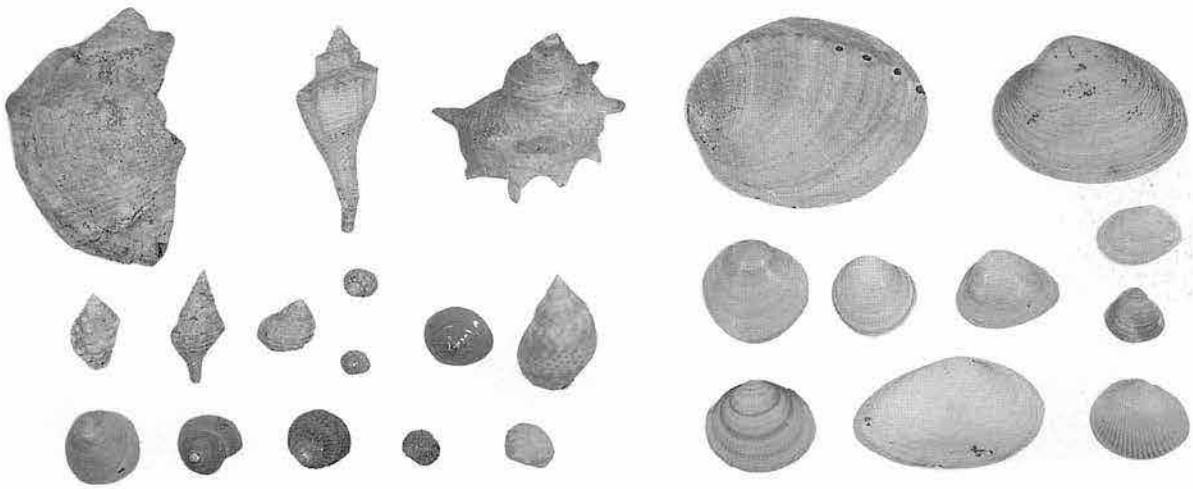
▲瀬戸

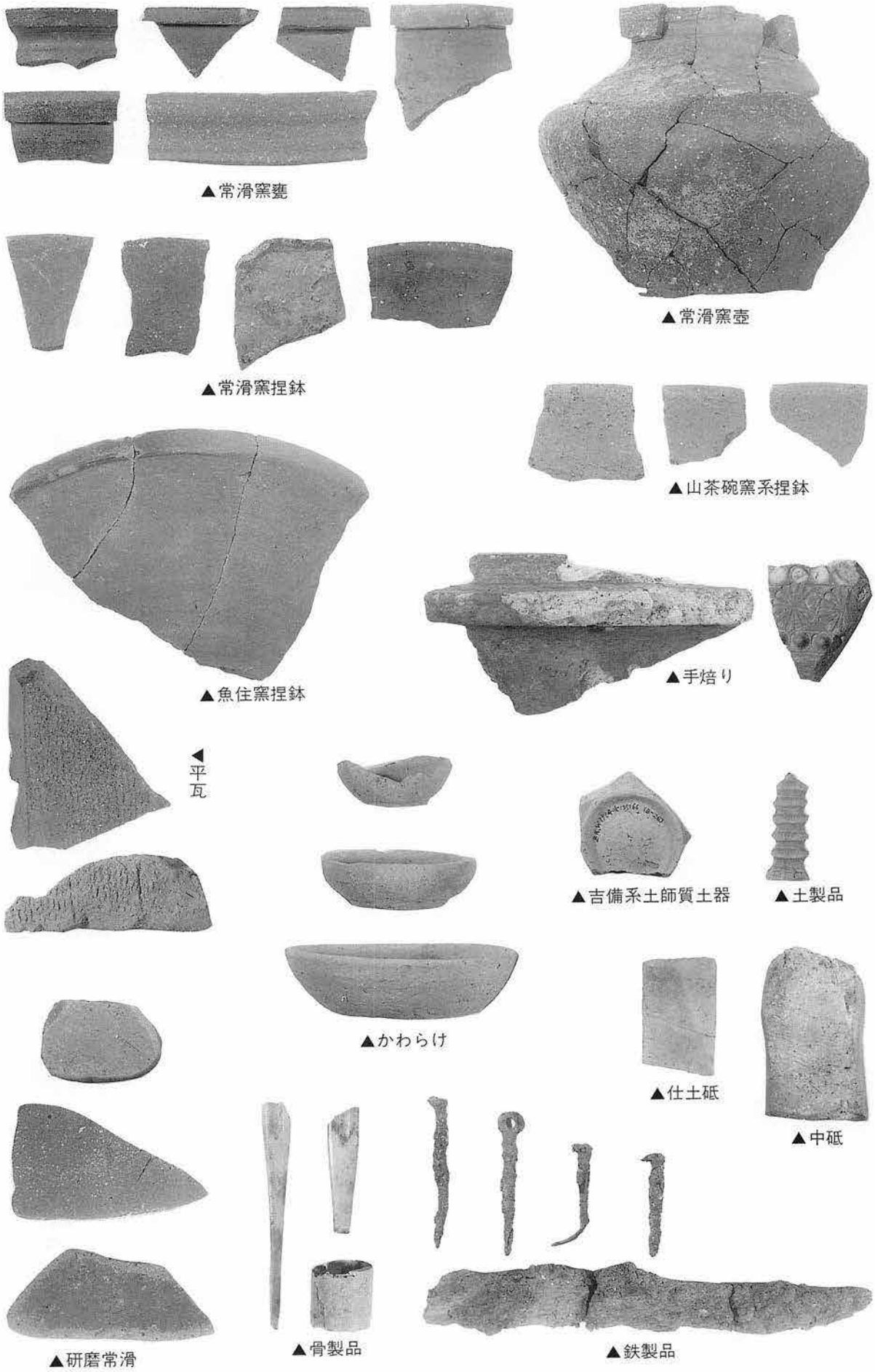


◀山茶碗

▶山皿

▼貝類




▲常滑窯甕
▲常滑窯壺
▲常滑窯捏鉢
▲山茶碗窯系捏鉢
▲魚住窯捏鉢
▲手焙り
◀平瓦
▲吉備系土師質土器
▲土製品
▲かわらけ
▲仕土砥
▲中砥
▲研磨常滑
▲骨製品
▲鉄製品

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	11
編集者名	瀬田哲夫
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1995年3月

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ざいもくざまちやいせき 材木座町屋遺跡	神奈川県鎌倉市材木座二丁目	204	261			19930910～ 19931016	80	自己用住宅にかかる道路整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
材木座町屋遺跡	中世都市遺跡	13～14世紀	方形竪穴建築址 2棟 土壙 27穴 ピット 50穴 溝状土壙 8基	かわらけ、常滑、青白磁、青磁、白磁、砥石、古瀬戸渥美、骨製品、鉄製品等 テンバコ15箱	13世紀前半～中頃と考えられるピット群を確認。 方形竪穴建築址を確認。

8．長谷観音堂周辺遺跡

長谷三丁目39番４外地点

例　言

1．本報告は、神奈川県鎌倉市長谷三丁目39番４外地点に所在する遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘は鎌倉市教育委員会が実施し、宗臺秀明が担当した。調査期間は1993年10月18日より同年12月28日までである。

3．本報告の執筆は、宗臺秀明、宗臺富貴子、浜野洋一、鈴木　茂、吉川昌伸が行い、宗臺秀明が編集した。また第三章のまとめは調査員全員の討議のうえ、宗臺秀明が責任執筆した。

4．使用した写真は調査員が撮影したものである。ただし、中近世の遺構全景写真は木村美代治にリモコン式高所撮影装置による撮影を依頼した。

5．第二章第７、および第８節の挿図および図版の番号は、編集の都合上、他の章および節のそれらの番号から独立して与えられている。

6．遺物実測中の｜｜は何らかの範囲を示している。すなわち、｜―｜は使用痕の、｜― ―｜は原材加工の、｜―・―・―｜は加工もしくは釉がけの範囲を示す。またやはり実測図中のドットは煤を、黒塗りは陶磁器の施文ないしは漆の施された範囲を示している。さらに▼は金属板折曲げ加工のあわせ目の位置を示している。

7．発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関・諸氏よりご協力とご教示を賜った。記して、御礼申し上げる。

清興建設株式会社、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、藤澤良裕（瀬戸市歴史民俗資料館）、田尾誠敏（東海大学文学部史学科考古学課程助手）。手塚直樹、菊川英政（鎌倉考古学研究所）。

8．本遺跡の発掘調査にかかわる資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　遺跡の位置と調査の経緯 …… 87
遺跡の位置と歴史的環境 …… 87
調査地測量方眼設定について …… 87
調査体制 …… 91
第二章　発見された遺構と遺物 …… 92
第1節　中世（第4面） …… 92
第2節　近世（第3面） …… 100
第3節　近代（幕末～明治、第2面） …… 133
第4節　近代（明治～大正、第1面） …… 141
第5節　その他の出土遺物 …… 157
第6節　出土動物遺存体 …… 160
第7節　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石 …… 186
第8節　長谷観音堂周辺遺跡の粒度分析 …… 196
第三章　まとめ …… 204

図　表　目　次

挿図

図1　遺跡の位置 …… 88
図2　調査地の方眼設定図 …… 89
図3　長谷観音堂周辺遺跡群間方眼関係と国土座標軸 …… 90
図4　中世前半期遺構と河川 …… 92
図5　井戸3と土層堆積 …… 93
図6　井戸3出土遺物 …… 93
図7　河川と土層堆積 …… 94
図8　河川出土遺物（1） …… 95
図9　河川出土遺物（2） …… 96
図10　河川出土遺物（3） …… 97
図11　河底土壙出土遺物 …… 98
図12　4面上出土遺物 …… 98
図13　3面下出土遺物 …… 99
図14　近世遺構 …… 100
図15　水田出土遺物（1） …… 101
図16　水田出土遺物（2） …… 102
図17　水田出土遺物（3） …… 103
図18　近世水路 …… 104
図19　水路1出土遺物（1） …… 105

図20　水路１出土遺物（２）……106
図21　水路１出土遺物（３）……107
図22　水路１出土遺物（４）……108
図23　水路１出土遺物（５）……109
図24　水路１出土遺物（６）……110
図25　堤出土遺物……111
図26　水路２出土遺物（１）……112
図27　水路２出土遺物（２）……113
図28　水路２出土遺物（３）……114
図29　水路２出土遺物（４）……115
図30　水路２出土遺物（５）……116
図31　水路４出土遺物……117
図32　水路５出土遺物（１）……118
図33　水路５出土遺物（２）……119
図34　水路５出土遺物（３）……120
図35　水路５出土遺物（４）……121
図36　水路５出土遺物（５）……122
図37　水路６出土遺物……123
図38　水路１～６出土遺物……124
図39　水路北地業層出土遺物（１）……125
図40　水路北地業層出土遺物（２）……126
図41　水路北地業層出土遺物（３）……127
図42　水路北地業層出土遺物（４）……128
図43　水路北地業層出土遺物（５）……129
図44　水路北地業層出土遺物（６）……130
図45　水路北地業層出土遺物（７）……131
図46　水路北地業層出土遺物（８）……132
図47　近代遺構図１……133
図48　建物１、２……134
図49　灯明皿一括出土状況……135
図50　井戸４……135
図51　建物１出土遺物……136
図52　建物２出土遺物……136
図53　土壙５出土遺物……137
図54　生活面（第２面）下出土遺物（１）……138
図55　生活面（第２面）下出土遺物（２）……139
図56　生活面（第２面）上出土遺物……140
図57　近代遺構図２……141
図58　建物３……142

図59　礎石根固め ……143
図60　井戸1 ……143
図61　建物3出土遺物 ……144
図62　井戸1出土遺物 ……145
図63　土壙3出土遺物（1） ……146
図64　土壙3出土遺物（2） ……147
図65　土壙3出土遺物（3） ……148
図66　土壙3出土遺物（4） ……149
図67　土壙3出土遺物（5） ……150
図68　土壙3出土遺物（6） ……151
図69　土壙3出土遺物（7） ……152
図70　土壙4出土遺物 ……153
図71　生活面（第1面）上出土遺物 ……154
図72　現代整地層出土遺物 ……155
図73　表面採集遺物 ……157
図74　第4面下出土遺物（1） ……158
図75　第4面下出土遺物（2） ……159
図76　長谷観音堂周辺遺跡群中世面合成図 ……205

表

表1　出土獣骨分類表 ……161
表2　出土貝類分類表 ……164
表3　出土貝類種別頻度グラフ ……166
表4　出土貝類観察表 ……167
表5　出土遺物観察表 ……172

写　真　図　版　目　次

図版1　遺跡地から南東の長谷交差点をのぞむ ……207
図版2　遺跡地から南西の長谷観音参道をのぞむ ……207
図版3　中近世遺構全景（南から） ……207
図版4　水路2～4（東から） ……208
図版5　堤護岸（北から） ……208
図版6　水路1（東から） ……209
図版7　近代（幕末～明治初年）全景（北から） ……209
図版8　井戸4（東から） ……209
図版9　井戸4近景（東から） ……209
図版10　第2面下出土の瀬戸・美濃製品 ……210
図版11　建物1北側出土灯明皿出土状況（南から） ……210
図版12　近代（明治～大正）全景（北から） ……210

図版13　井戸１（西から）……211
図版14　井戸１掘り方底面（北から）……211
図版15　井戸１に使われた桶の部材……211
図版16　礎石根固め上層……212
図版17　礎石根固め下層……212
図版18　礎石を支える赤松の丸太杭……212

第一章　遺跡の位置と調査の経緯

遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は、神奈川県鎌倉市長谷三丁目39番４に所在する。ここは、鎌倉駅を中心とする海岸平野の西端、長谷寺門前の参道が国道134号線と交わる交差点の北西角にあたる。調査は、当地における店舗併用住宅建設の申請を受けて、1993年10月18日より同年12月28日までに行われた。調査対象面積は190㎡である。

調査は、それまで現存していた木造礎石建物が大正12（1923）年の震災直後の整地面に建てられていたことを確認すると同時に、震災のあとかたづけが行われたゴミ穴の発掘から始まり、それ以前の幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡、それに中世の河川跡を発掘した。

水田埋立の後、遺跡地には三和土をもつ礎石建物が二棟建てられた。建物はいづれも現在の長谷寺参道に平行して建ち並んでいる。建物裏の井戸付近からは、幕末から明治初期の物と思われる灯明皿が発見された。また水路もこの時期に埋められ、遺跡地を迂回して、より西を流れる（相模国鎌倉名所及江ノ嶋全図、明治29年頃）。これらの建物は一度火災に見舞われるが、再度同じような建物が同位置に建てられたことが土層観察よりわかる。その後、明治の中頃から後半にかけてのある時期に、遺跡内の敷地利用が変わる。建物の向きはそのままに、それまでの建物の礎石を抜き取ってあらたな建物が少なくとも一棟建てられる。この建物は大正12（1923）年の震災で倒壊するまで存続し、その後に現存した建物が再建された。

遺跡の西に位置する浄土宗海光山慈照院長谷寺は、天平八年草創との寺伝があるものの、現存する史料では、新長谷寺梵鐘の文永元（1264）年七月十五日銘が確実な史料としては一番古い[1]。鎌倉市史のまとめるところによれば、長谷寺は、慶長頃までは建長寺系統の人が住寺となる禅宗で、その後徳川家康が荒廃していた長谷寺を再興し、このときより光明寺の末寺の浄土宗となる。こうした長谷寺の変遷と遺跡地に発見された遺構の変遷は、長谷寺の盛衰と現在みられる参道の形成とに関係していよう。絵図や古写真によれば、明治維新前までには現在の参道はすでに出来上がり、旅館も参道に面して作られている。幕末頃に水田が埋められて、建物が現在の参道に面するように建てられる遺跡地の変遷も、そうした門前の参道の賑わいに因るものであろう。

鎌倉は、豊臣秀吉や徳川家康による八幡宮の整備の他、文化・文政の江戸民衆による大山参りの一環とする江ノ島弁天・長谷観音・金沢八景（千光寺＝千手観音、能見堂、金龍院、称名寺、琵琶島弁天）の観音めぐりと結びついて、訪れる人々も多かったと考えられる。中世と近世で建物の向きの異なることが判明した今回の調査からは、鎌倉の中で、長谷寺の盛衰と現在の参道がどのように整えられていったのか、貴重な資料を提供している。

調査地測量方眼設定について

調査の開始にあたり、当遺跡の位置と平面直角座標系との整合を図るため、実測用のメッシュおよび方眼発生においてトラバース測量による調整が行われた。この方法をとることで、遺跡の位置と遺跡内の遺構を国土座標軸にもとづいた地図上で掌握することが可能になると思われる。

遺跡地周辺には、鎌倉市道路管理課の設置した「鎌倉史４級基準点」が存在する。これは関東地方一帯をカバーするAREA9平面直角座標値、すなわち国土座標値を有しており、任意の２点間を測量することで、調査区内への国土座標値の振込が可能になる。当調査では、調査区内に国土座標値の明確な基

1.今回の調査地点
2.長谷観音堂周辺遺跡・長谷三丁目41番イ地点
3.長谷寺境内遺跡
4.桑ヶ谷療病院跡・長谷三丁目629番20外地点
5.高徳院周辺遺跡・長谷一丁目290番1地点
6.桑ヶ谷療病院跡・長谷三丁目630番17地点
7.長谷一丁目284番1地点
8.甘縄神社遺跡・長谷一丁目271番10地点
9.長谷小路周辺遺跡・長谷二丁目252番1地点
10.伝安達泰盛邸跡・長谷一丁目227番地点
11.伝安達泰盛邸跡・長谷一丁目236番1地点
12.由比ガ浜南遺跡
13.長谷小路南遺跡

図1　遺跡の位置

準杭を設けて方眼の基準点とし、これよりAREA9平面直角座標軸に整合するメッシュを発生させ、遺構の実測などをおこなった（したがって当遺跡で記録された遺構などは、簡易な計算を施すだけで、すべて正確な国土座標値を有すると考えて差しつかえない)。トラバース測量作業の細かな記述は省くが、調査区内の基準杭の観測成果表と周囲の４級基準点の成果、ならびに基準南北軸（平面直角座標系X軸)、真北方向角（北極星への角度）などの関係は図に示した。方眼の東西ラインと現在の長谷寺参道との角度差はE－11.5°－Nである。

調査にあたり発生させたメッシュは２m間隔に設定された。まず、国土座標値を振り込んだ基準杭を０－０座標とし、これよりX軸方向はNS－0ライン、Y軸方向はEW－0ラインと呼称する。これを基軸に、X軸、Y軸に並行なラインを２mおきに設け、NS－0ラインより東方の南北ラインにローマ数字を、西方にアラビア数字を与え、またEW－0ラインより北方の東西ラインにアルファベットを、南方にギリシャ文字を与えた。

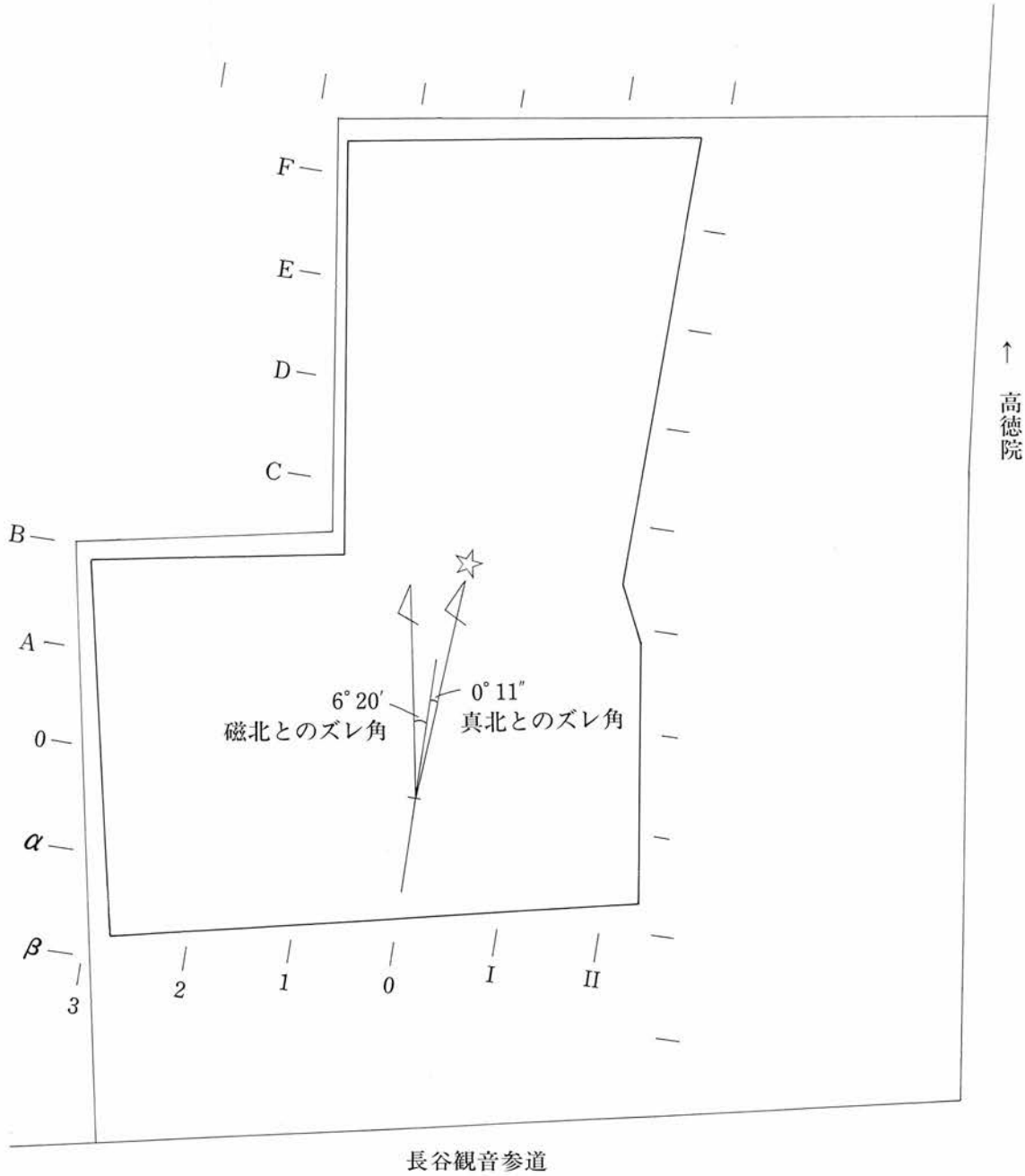


図２　調査地の方眼設定図

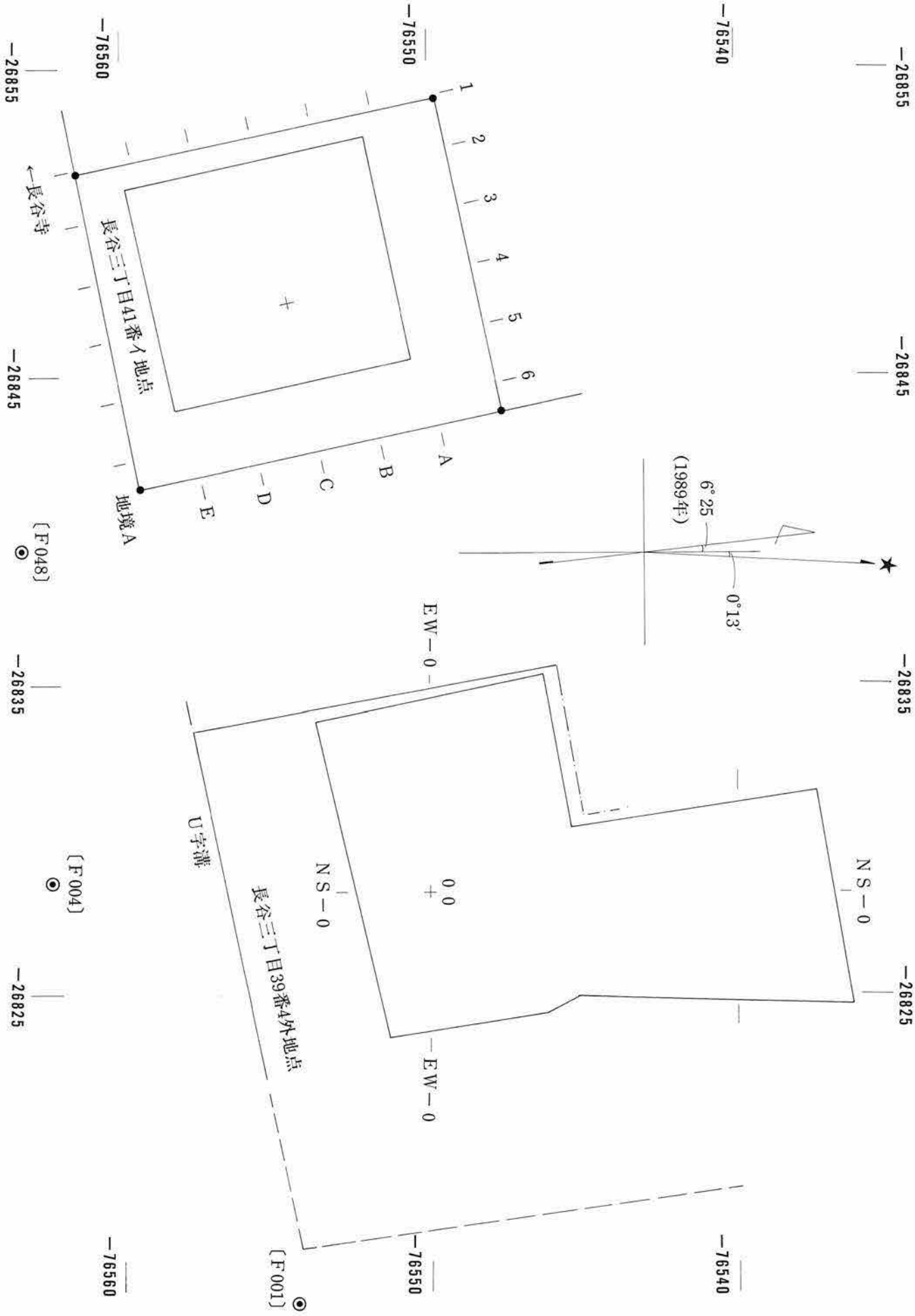


図3　長谷観音堂周辺遺跡群間方眼関係と国土座標軸

なお、調査地の西にほぼ隣接する長谷３丁目41番イ地点が平成５年度に発掘調査・報告されている（以降、イ地点遺跡とする）。その中で調査区内基準と周辺の鎌倉市４級基準点との関係が明記されていたが、この観測成果から当遺跡との正確な記録（図面）合成が可能になった。ここではその結果を記載しておく（図３）。

まずイ遺跡内の方眼発生基準となった地境AとBの国土座標値は、計算の結果、地境Aは［X－76559.407　Y－26841.374］、地境Bは［X－76547.448　Y－26843.925］となる[2)]。したがって、南北軸の方向角は地境Aを起点に347°57′31″となり、当遺跡の基準南北軸（X軸）より12°02′29″西に偏る（なお磁北に関しては年差および送電施設から受ける影響を考慮し、合成の参考としていない）。位置の関係はイ地点遺跡のC－4座標点を方眼の基準点とするならば、C－4座標の国土座標値は［X－76554.546　Y－26847.487］で、当遺跡の方眼座標基準点である0－0から西へ19.132m、南へ4.546mの位置にあたる。

調査体制

発掘調査は、鎌倉市教育委員会のもと、調査の依頼を受けた宗臺秀明が調査主任となり、以下の人員でおこなった。

調査主任　宗臺秀明

調査員　宗臺富貴子、浜野洋一

調査補助員　小野和代、馬瀬直子、石丸運人、野本賢二

註１．長谷寺境内に発見されている板碑の奉造記年のうち、最古のものは弘長２（1262）年であるが、板碑の発見状況はそれが当初よりそこにあったとは言えないものであったと記憶している。
服部清道他　1985『海光山慈照院長谷寺－観音堂新築工事に関わる埋蔵文化財の調査』

２．報告書に掲載されている鎌倉市４級基準点への値は、誤植による誤った数値が掲載されているとの教示を調査担当者から得た。ここに掲げた値は正しい数値より導きだした結果である。

第二章　発見された遺構と遺物

調査は、すでに記したように震災のあとかたづけが行われたゴミ穴の発掘から始まり、それ以前の幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡、それに中世の河川跡を発掘した。以下、発見した遺構と遺物を、古い時代より順に報告する。

第1節　中世（第4面）

中世に属する遺構は、縄文海進期に浅海ないし潮間帯で形成された砂層および黒色腐植土の上から川と井戸が発見された（図4）。調査地の北側に、北西から南西にむけて発見されたこの川は、現在調査地の西に暗渠となって流れ、長谷交差点に残る三橋（橋の名前）の下を流れる皆瀬川の支流であっと思

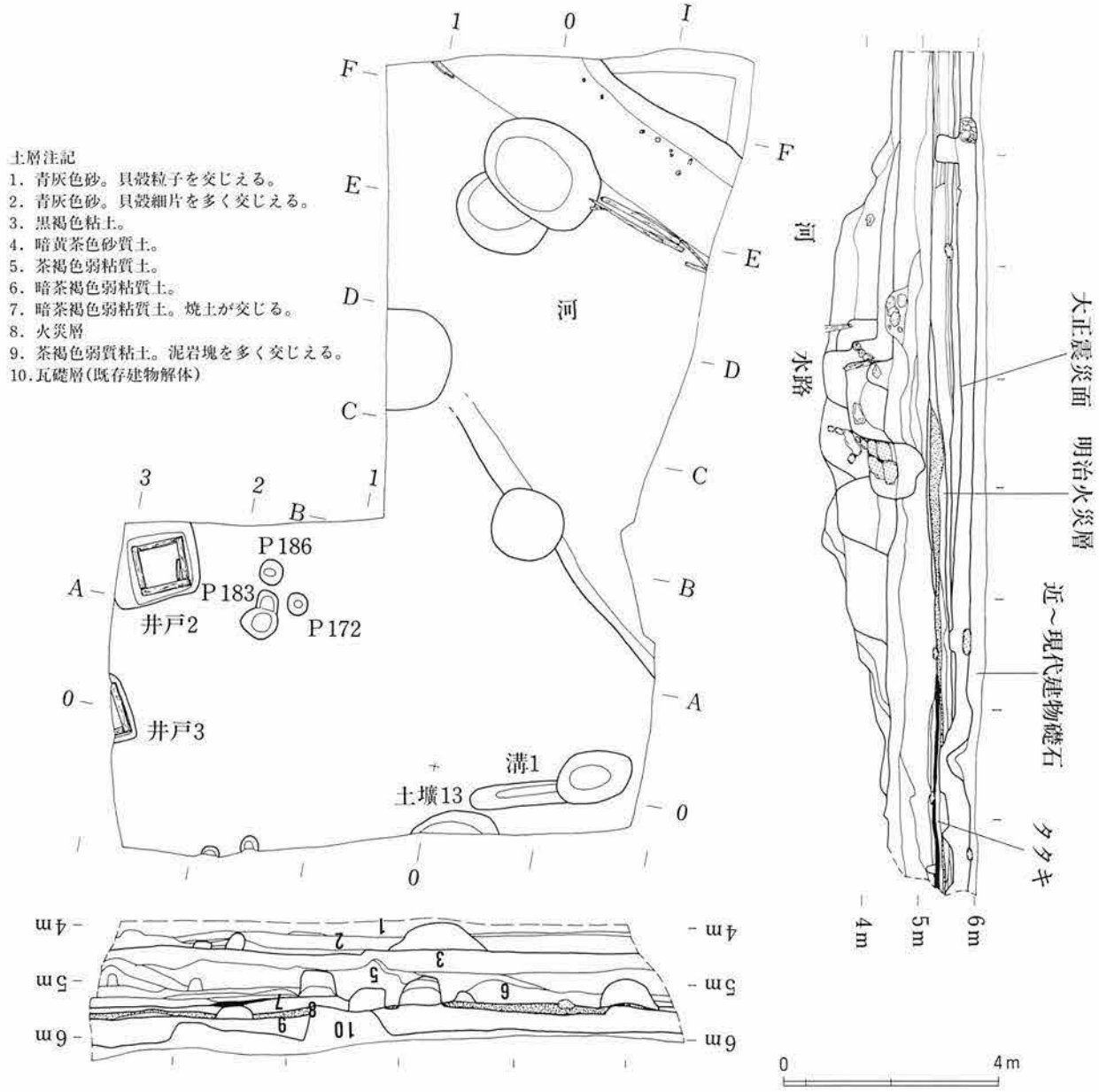
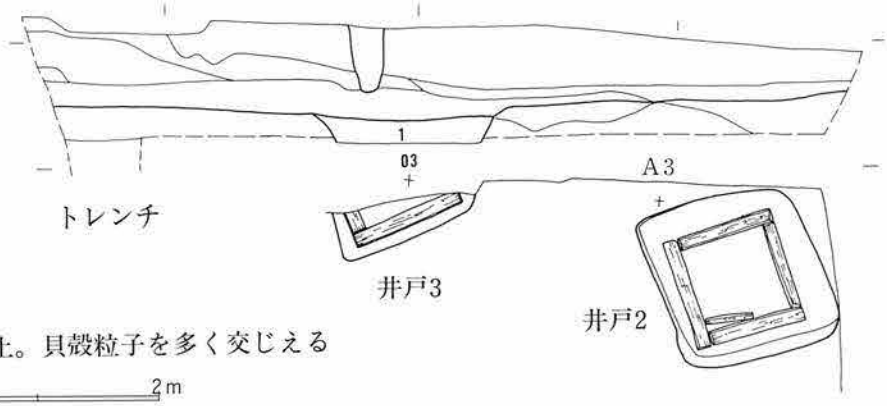


図4　中世前半期遺構と河川



土層注記
1.茶灰色砂質土。貝殻粒子を多く交じえる

0 2m

図5　井戸3と土層堆積

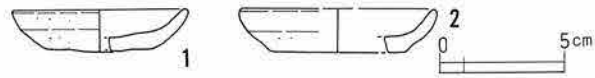


図6　井戸3と出土遺物

われる。調査地内河川南側部分は比較的広いが、残されていた遺構は井戸の枠の最下段を残すのみで、他の遺構はほとんど残っていない。また河川の北側地域は調査地内にほんのわずかに残っており、破砕泥岩による地業が認められたが、建物や護岸施設などは発見されていない。発見された遺構は少なかったものの、井戸枠の方位のほか、隣接する長谷三丁目41番イ地点の発掘成果を持ち寄るならば、この時期の長谷寺前は西から東の川にむけて傾斜しており(図4の土層図)、また河川の流路に従った町並みであったようだ。出土した遺物は少なく、青磁の蓮弁文碗破片などがある。

井戸（井戸2、井戸3）

調査区の西端に2基発見された。最下段の井戸枠しか残さないが、ともに横桟支柱式と考えられる。井戸枠最下段と井戸掘り方底面だけであるが、調査できた井戸2の規模は、掘り方が一辺1.3m、井戸枠一辺0.8mを測り、枠材は幅12×長さ70～90cmが用いられている。井戸2、3の東西軸方位はそれぞれE－23°－N、E－26°－N。

河川

調査区の北西端から南東にむけて幅7mの河川が発見された。北西から南東へ少しずつ広がりながら緩やかに流れ下る。川底と南西の肩は後の遺構群によっておおかた壊され、発見状況は良くない。河川北東の肩と川底が調査区北東隅にわずかに残っている。そこでの河川は海抜4.5mから落ち込み、深さ80cmを測る。川岸の落ち込みは2段になっており、上段の落ち込み底面に護岸のための杭列とその痕跡が認められたが、それ以上の護岸施設などは発見されていない。

河の中には、まず山砂と小さな泥岩を多量に含む黒褐色砂質土が河川流下土として沈殿して堆積している。その上には大型の泥岩が無造作に大量に投げ込まれ、川が埋められている。さらに砂質土と粘質土が交互に運び込まれ、最後に破砕された泥岩による版築地業がなされている。この版築地業面からかつての川の肩を壊している後世の水路が造作される。

調査区中央付近の北東河岸下段際に、土壙状の窪みが二つ確認された。窪みの中には河底面堆積土と同じ山砂を主成分とする土が堆積していたことから、河に水が流れていた当時にはすでに掘られていたものと考えられる。窪みの周囲に、同様のものはなく、これらの窪みが河の護岸施設を支えるようなものでないことは確かであろう。河の底面際にあるこれらの窪みは、河が流れていた当時に、何らかの理由で滞ってしまった水のスムーズな流下を促すためにおこなわれた所作で窪んでしまったのであろう。窪みからは獣骨などの祭祀に関わる遺物の出土はなかった。

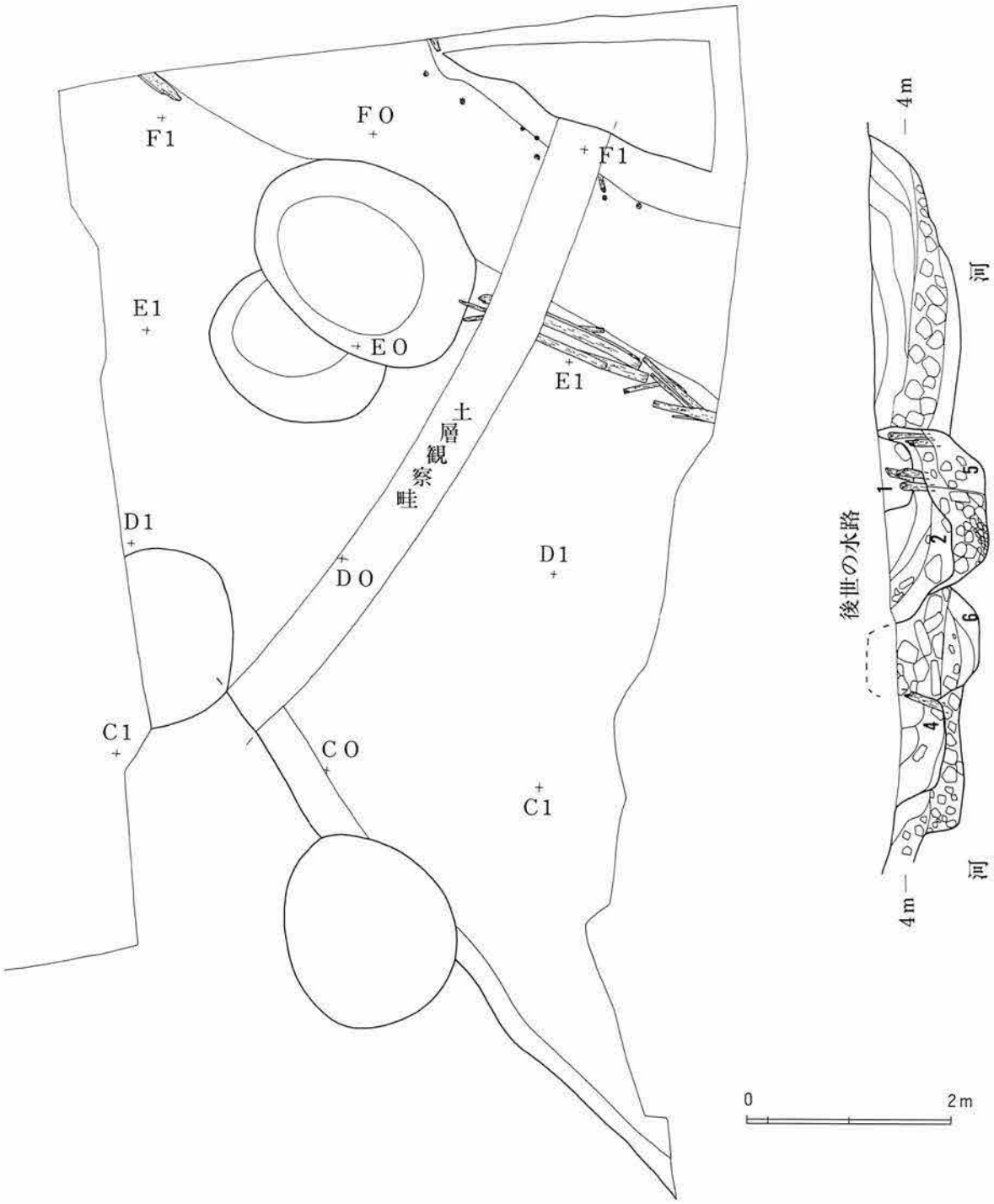


図7　河川と土層堆積

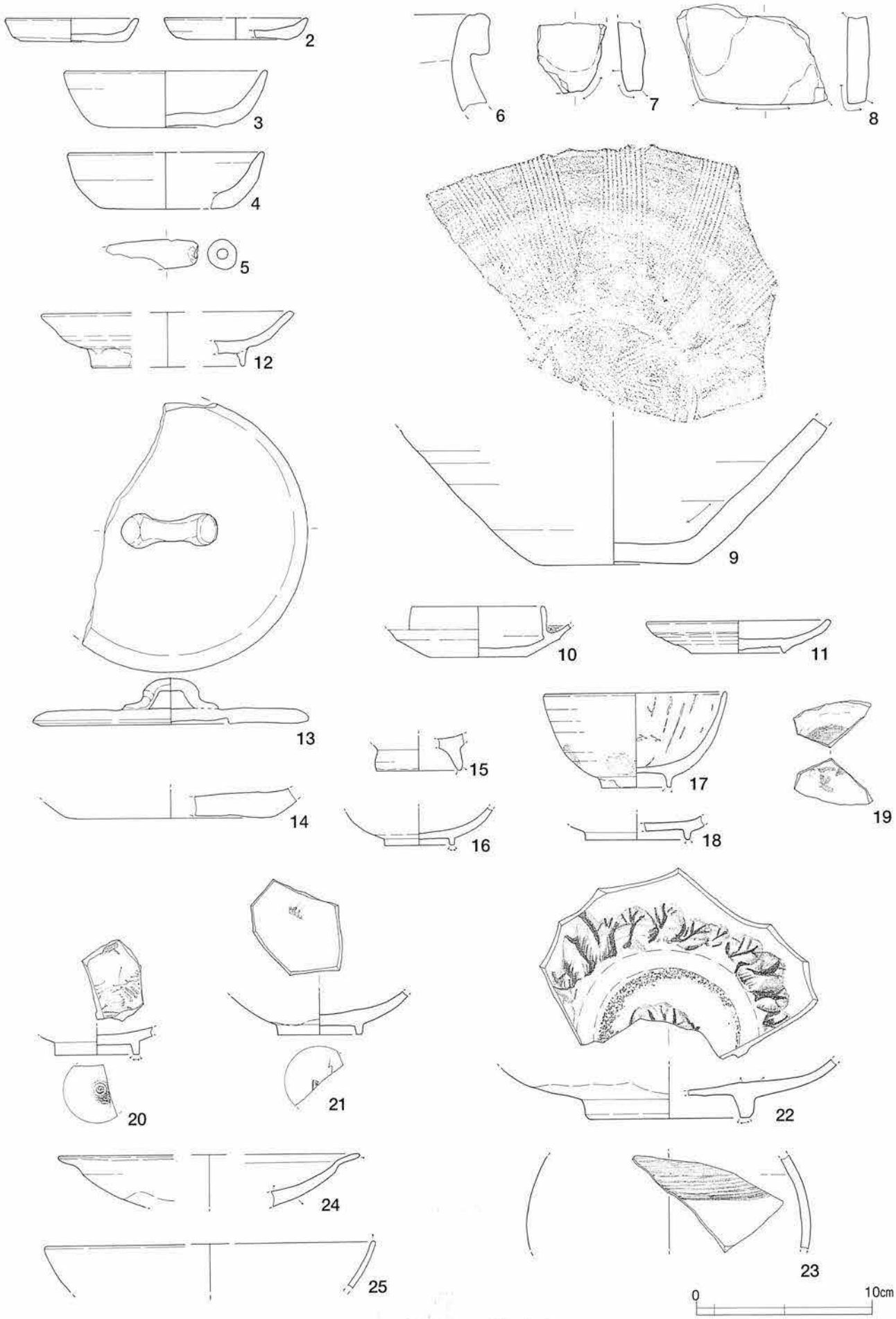


図8　河川出土遺物（1）

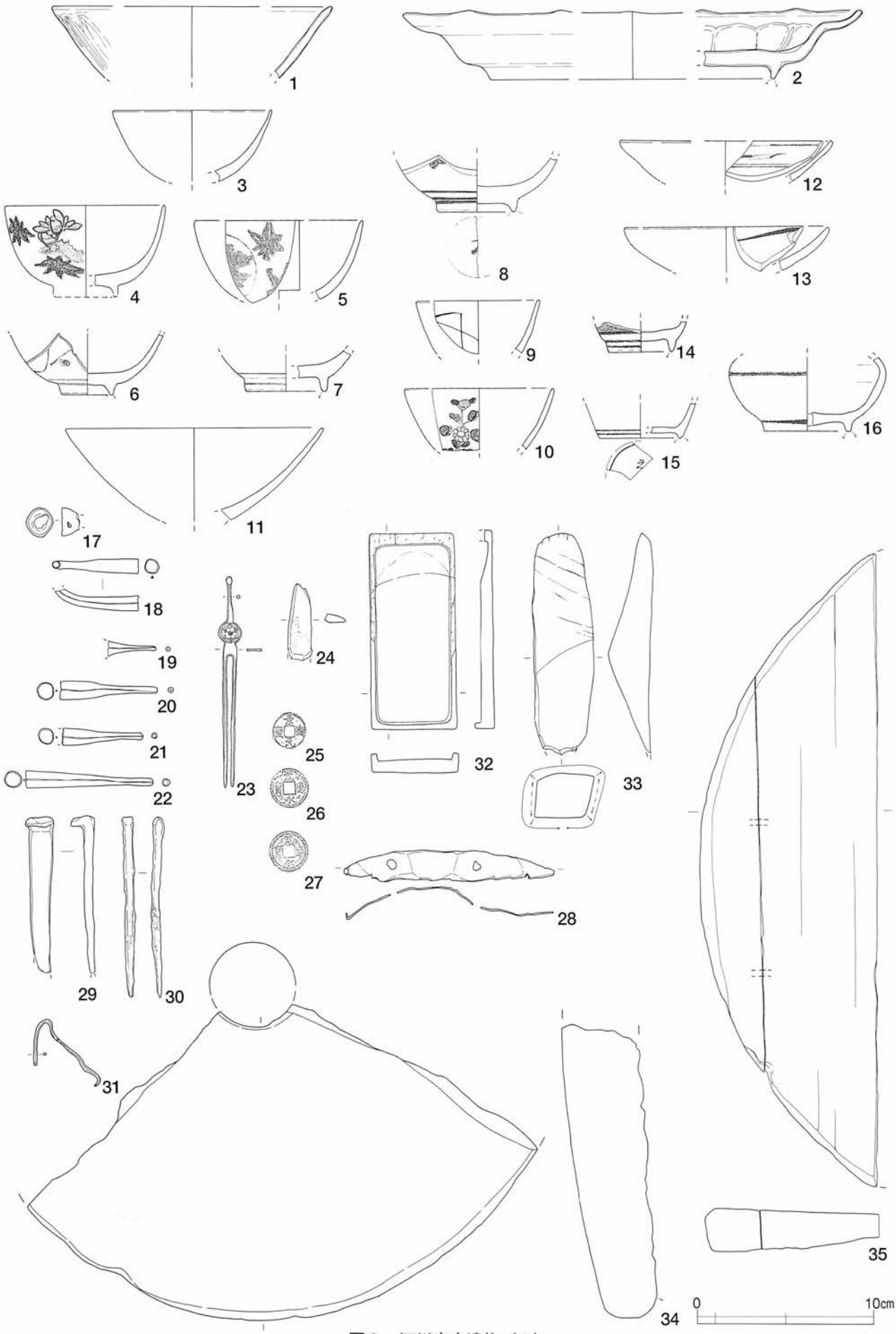

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
0
10cm

図9　河川出土遺物（2）

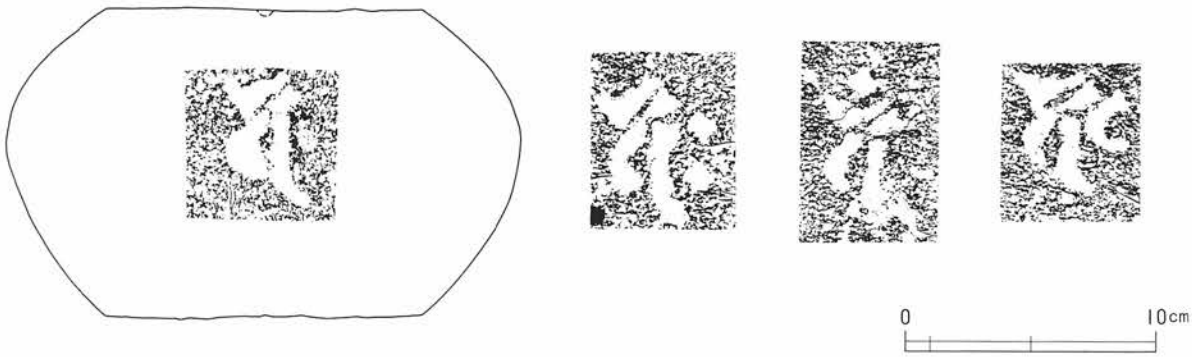


図10　河川出土遺物（3）

以上のような後世の水路等の造作による削平のため、河川および河底土壙は、中世遺物をほとんど含まない。しかし、瀬戸・美濃製品および肥前の磁器を見るかぎり、幅の広い生産年代を持つ陶磁器の中で、17世紀～18世紀の100年間に生産された古手の陶磁器が主流であることは、河川の埋立が近世の早い時期になされた証左と言えよう。

図８－９は瀬戸窯の擂鉢。内面に施された擂目の形状、また外底部は糸切り痕を残すことから19世紀にまでは下らないと思われる。10は志戸呂の灯明皿受け皿。本遺跡地より出土した灯明皿受け皿には内部の環状施設（以下、「受け」とする）が口径より高いものと低いものとに大きく分類しえる。10は口縁部を破損しているが、受け径値、器高は出土した灯明皿の中で一番大きい。17は肥前の蛍手の碗。胎土は練り込み、体部外面下位に白濁釉による蛍手が施される。現在、鎌倉市内遺跡において、大量の近世以降の遺物を出土している遺跡は極くわずかだが、筆者が実見した限りでは、この蛍手碗の出土は破片でも数少ない。

図９－４～16は肥前の染付。本遺跡地において出土した肥前磁器の素地は、おおむね白色～明白灰色を呈し、混入物少なく、緻密で、断面は磁肌に光沢がない。そのため、素地に大きな違いがある場合を除いて、あえて素地の記載を行なわないことをご了承いただきたい。染付は明青色～灰青色顔料による手描きあるいはコンニャク印判を用いて施されている。なお、５と同手法・同文の小盃が河底土壙より出土している（図11－９）。17～22は煙管。いずれも灰を落す際に灰落しや火入れの縁等に打ちつけて生じる「ツブレ」は見られない。23は真鍮製のかんざし。中央付近に陰刻の文様飾りが付く。33は砥石。産地を特定することはできなかった。波状ノミ痕が原材からの切り出し痕なのか、破損後の再加工痕なのか、確認しえていないが、おそらくは再加工痕であろう。また、波状ノミ痕を残す他の砥石も砥面はかなり変形したものが多く、中世期に出土するものより使い方が雑である。これらの違いが確認されれば、砥石の生産・販売・使用の変遷が明らかになってくると思われる。

図11－１はかわらけ。黒色微砂と雲母微片を混じえる肌色粉質土。器壁はゆっくり開きながら立ち上がる。器壁、底部共にとても薄く、内底面にロクロ目を残す。17世紀代の製品か？　３はすり常滑。製品破損後に周囲を丸く打ち砕いて作られている。４は瀬戸のおろし皿。中世期の製品と思われるが、内底面に施された卸目に磨滅痕が残る例は、現在までの鎌倉市内の調査では筆者の知るかぎりでは確認されていない。しかし、河底土壙という遺構の性格上、必ずしも使用による磨滅とは言いきれない。

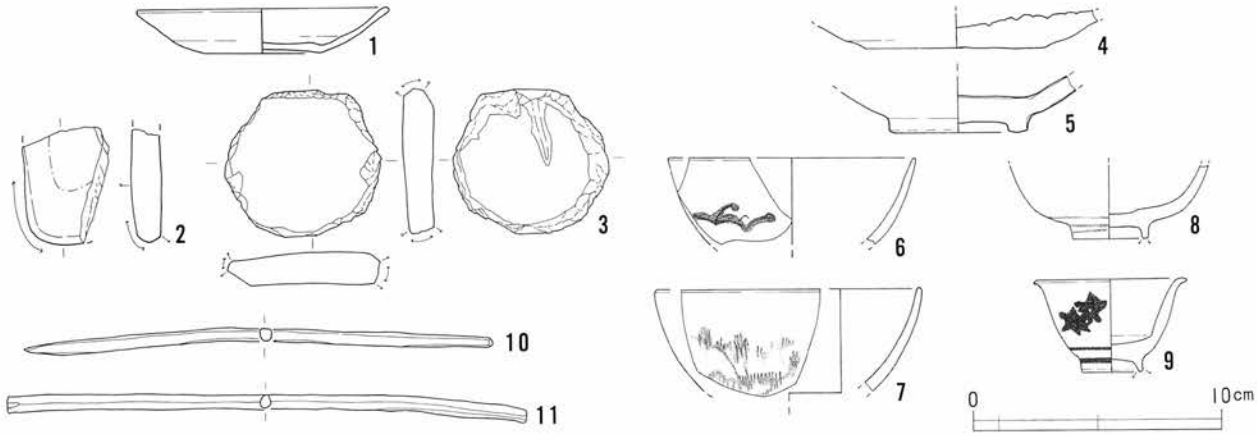


図11　河底土壙出土遺物

その他の遺構

調査区内の南東隅、河の南東岸脇に溝状土壙と土壙が発見された。土壙13を除く溝と土壙の掘り込みは非常に浅く、本来の姿をとどめているとは思われないが、内部に堆積している覆土はともに、黒褐色の砂質土で、すぐ上面を覆う後世の水田床土とは全く異なる。これらの遺構は水田床土面を作りだす際に、中世の地表面がある程度削られてしまったために浅くなったと思われる。

また、井戸２の東には、４口のピットが認められた。ただし内部に堆積する土は黒色の粘質土であり、またすぐそばにある井戸がその最下段しか残していないことを考えると、後世の水田造成時以降のものと思われる。図３にてすでに見たように、今回の調査地点から10mほど西に位置するイ地点での調査成果からは、中世の生活面が5.5mほどの海抜高に確認されており、今回発見された河岸の4.5mとは１ｍの比高差がある。このことから、この付近では、少なくとも中世の時点では長谷観音のある西から河にむけて傾斜していたことを想定できる。この傾斜地を河川の岸の高さにあわせて後世の水田面が造成されたものと理解でき、今回の調査地点においては河から離れるにしたがって、斜面の削り取りが深く、中世期の遺構が残される可能性は低い。このため中世期の掘り込み遺構としては、深い井戸の最下段と削り取りの浅かったであろう河に近い地域の土壙13や溝状土壙しか残らなかったのである。

以上の遺構からの出土遺物はなかった。

このほか、今回の調査地点での中世期の時期を想定させる遺物が、河の北東岸の生活面直上（４面上）とその面上堆積土中（３面下）から出土している。

図12―1～２、５～６、図13―１～３が中世期のものと考えられよう。

図12―１および図13―１～２のかわらけは口径が小さく、器高の高い側面観碗型を呈するもので14世

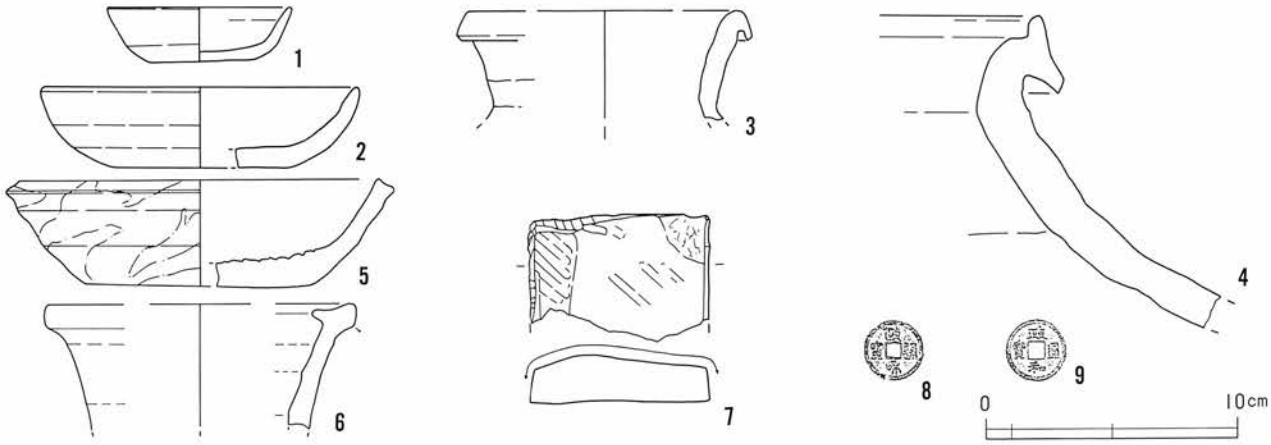


図12　４面上出土遺物

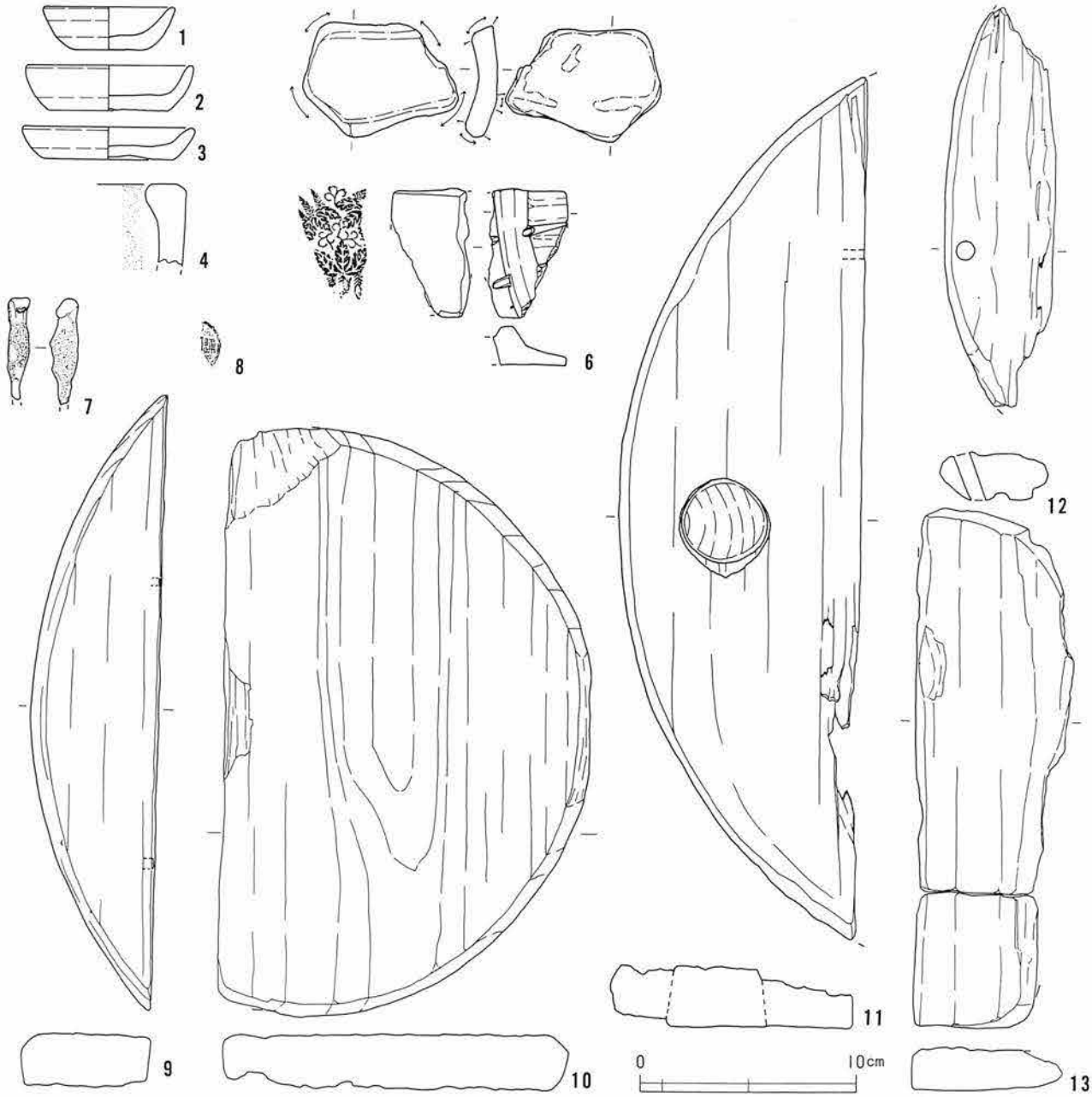


図13　3面下出土遺物

紀前半、また図12－6の瀬戸製品には15世紀前半の年代が与えうる。いずれの遺物も南北朝以降に帰属するものである。

図13―6は滑石鍋転用スタンプ。藤の花房、蔓、葉が丁寧に彫られる。

第2節　近世（第3面）

河川を除いて、河の西側にあったであろう遺構のなかでも深い掘り込みの井戸の底面と川岸の土壙などのみを残して、中世の遺構を削り取ったのは江戸期の水田経営であった。前節ですでに述べたように、河川に向かって西から東に傾斜する遺跡地周辺の土地は、近世に入ってからそれまでの川岸傾斜面を河岸レヴェルにあわせて削り取り、水田経営へと改変された。また河川は河岸制御による堤を伴う水路に作り替えられた（図14）。

水田

水田は調査区の南側、中世の河が改変されて作られた水路の南に広がっている。水路の北側は、海砂と破砕泥岩で地業され、日常生活空間とされている。地業面の上には、上面の平らな安山岩と凝灰岩の礎石様の石がいくつか残されているが、建物を構成する様子なはく、それぞれの石も傾き、また端部は割れている。敷地の隅に投げ捨てられたようなものであろう。

水路南側の地域は、調査時における中世遺構が発見されたレヴェルの上面にのる土の感触から、水田の床土と判断したが、ある程度の水田面調査後に調査区壁面に残された水田床土と思われる青黒色土中の花粉分析とプラント・オパール（植物珪酸体化石）分析をおこなった。その結果、多量のイネのプラ

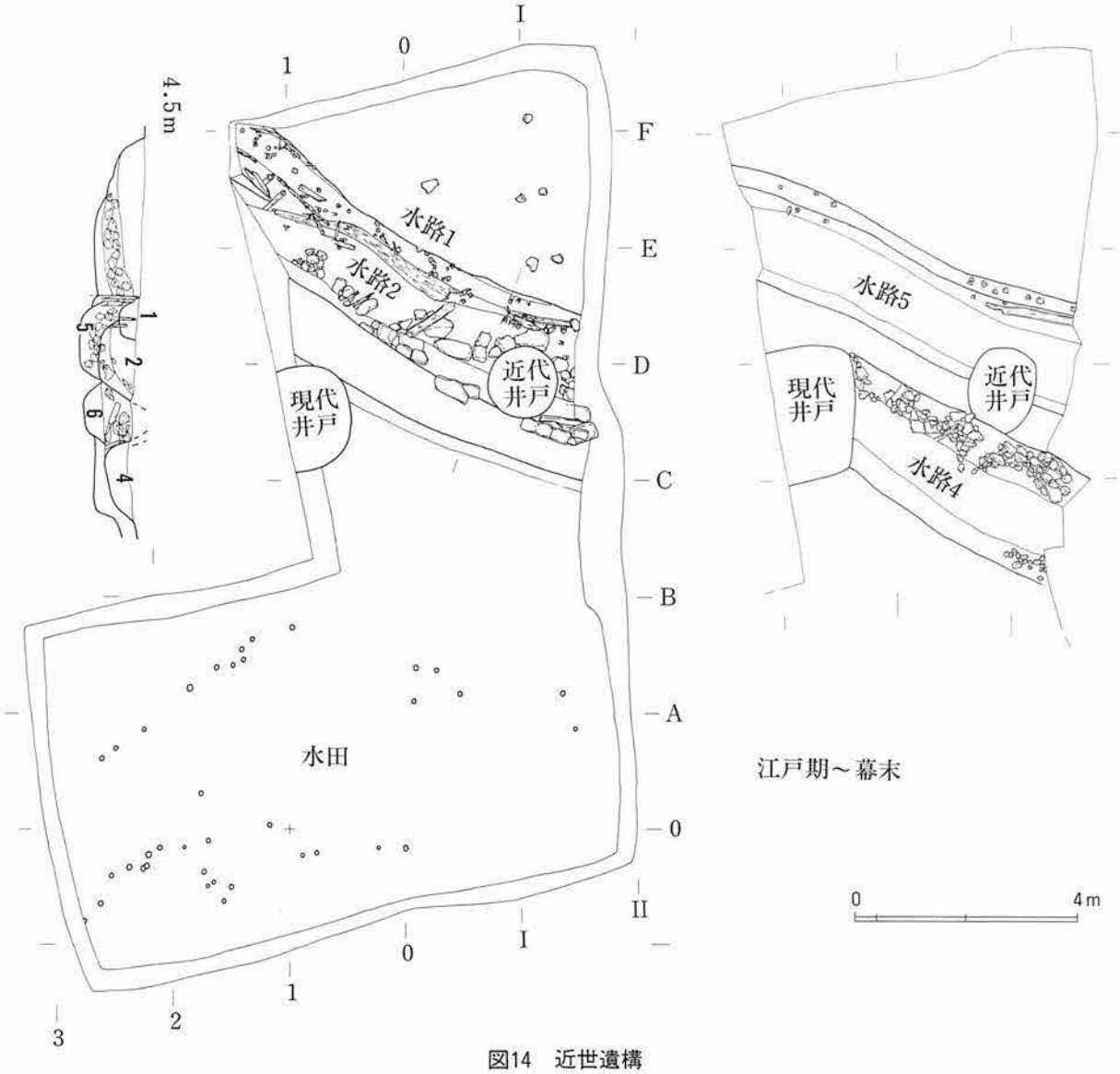


図14　近世遺構

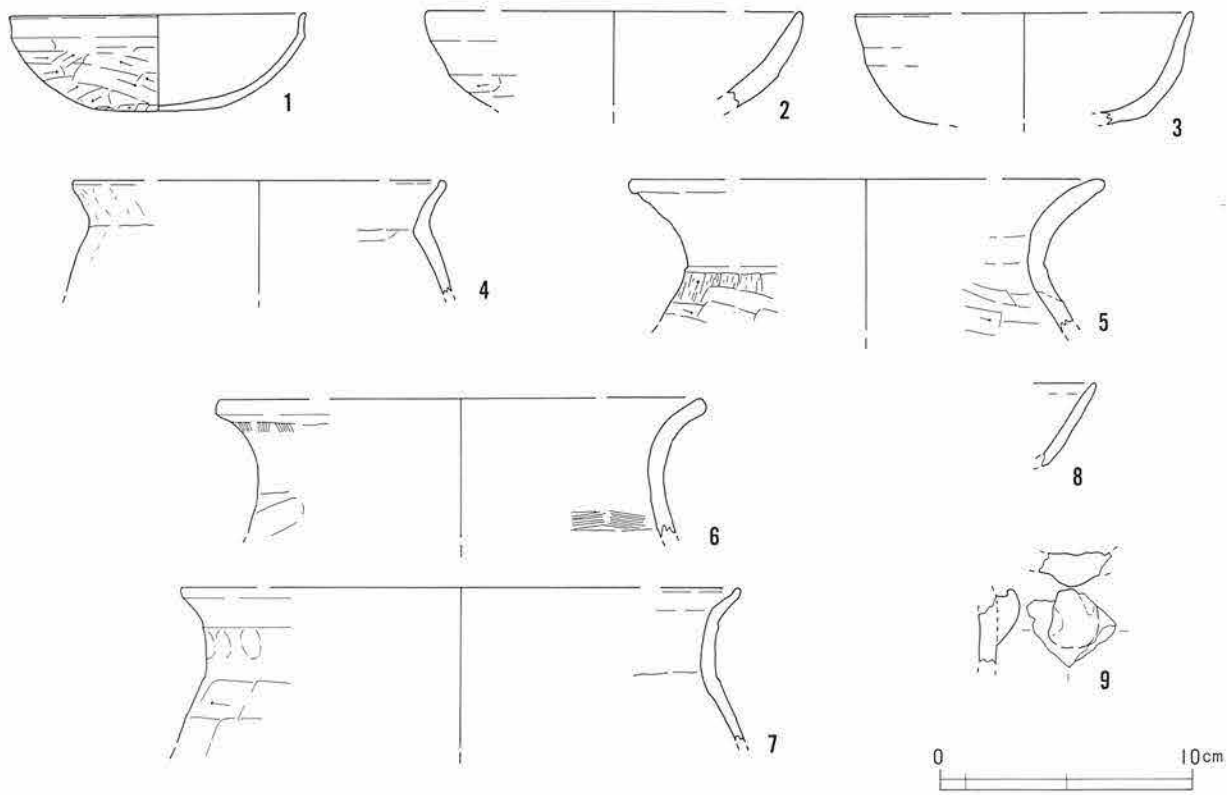


図15　水田出土遺物

ント・オパールと水田雑草の花粉が検出されて、水田であることがほぼ間違いないものと思われる。

水田面からは、直径にして5cmほどの小さな杭痕が多数発見されている。杭痕には、それらが列をなしている部分も認めることはできるものの、明確な畦畔を確認させるほどには発見できなかった。ただし、北東から南西へ向けて延びる列として認めることのできる二つの杭列の間隔は、ほぼ2mを測る。その杭列の方位は、E－33°－Nである。

この水田経営は近世を通して営まれ、幕末頃に隣接する長谷三丁目41番イ地点の生活面レヴェルにあわせた水田埋立まで続く。水田土中からは次の遺物が出土している。

図15―8は須恵器の坏。胎土に白色粒子や石英粒を多く混じえることから南多摩産と考えうる。破片のため法量値がはっきりしないが9世紀初頭～中頃と思われる。

図15―9は須恵器の提瓶の把手部。県内でも出土は珍しく（横浜市　浅間下第2号古墳、鎌倉市　猫池横穴、秦野市　桜土手11号墳、伊勢原市　弥杉・上ノ台遺跡、大磯町　滝の沢横穴）、集落遺跡からはめったに出土しない。本遺跡地より出土したものは胴部の一部とそれに付く把手だけであった。把手の形状は時代を経るにしたがって大→小へと変化するが、本遺跡地より出土したものはちょうど中頃のタイプであることから7世紀代のものと考えられる。

水路

中世の河を大型の泥岩で埋立てた後、流路を制御・護岸して、水田に水を供給していた水路は、河があったのと同じ場所に5回にわたって作り替えられている。河と同じく、北西から南西へ流れる。ほとんどの水路は幅を2m前後に狭められ、打ち込み杭と横板による護岸施設が設けられる。水田へ水を引き込む取水口施設を水田側にも水路側にも発見できなかったが、水路の水田側である南岸は凝灰岩の切り石や河の埋立で用いられた泥岩を利用する場合が見られ、必ず打ち込み杭が用いられた北岸とは護岸の方法が異なっている。水田の取水、排水に対する水の管理を行ううえで、水田側の護岸を北岸のもの

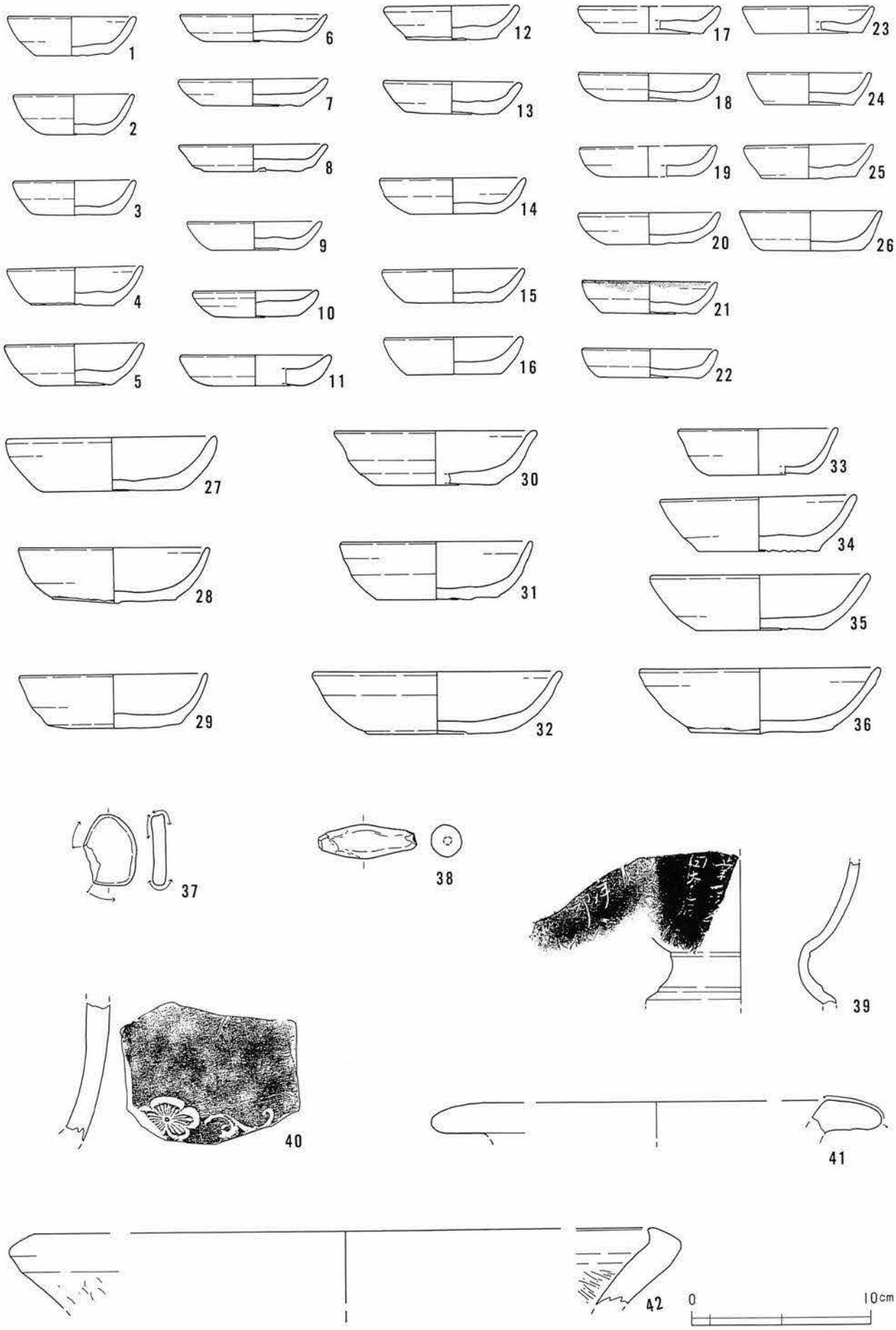

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
0
10cm

図16　水田出土遺物（2）

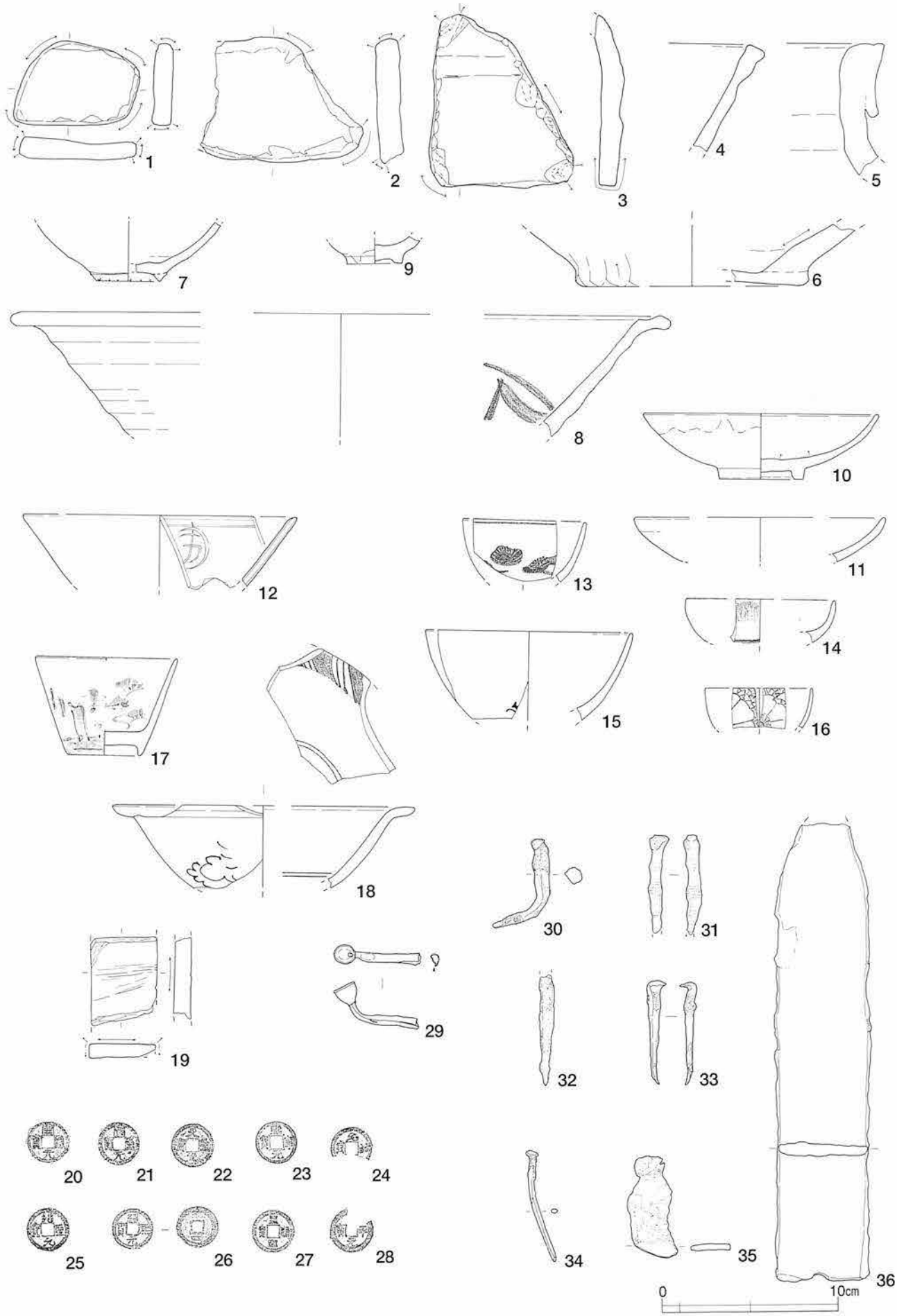

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
0
10cm

図17　水田出土遺物（3）

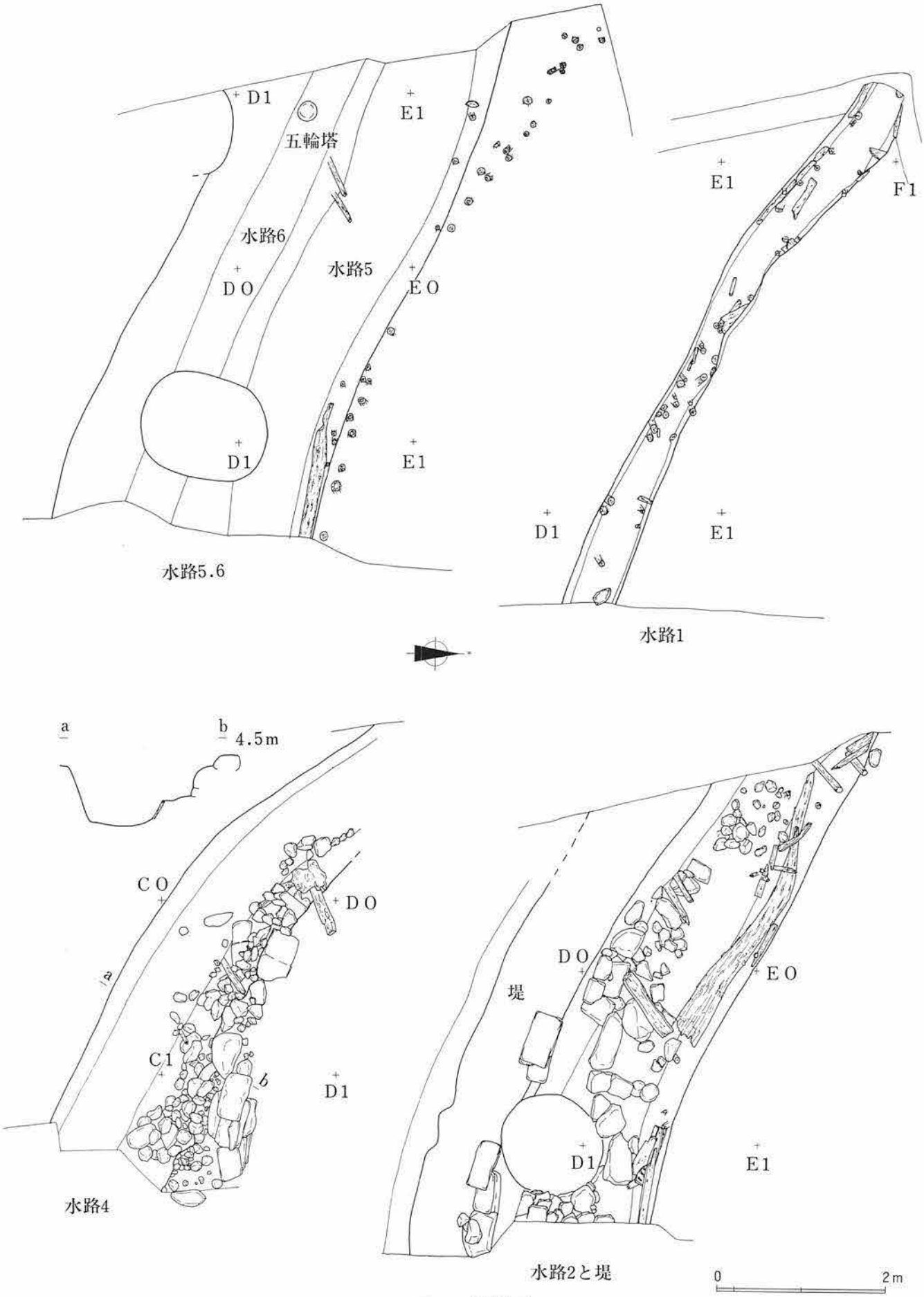

D1
五輪塔
E1
水路6
水路5
DO
EO
D1
E1
水路5.6
E1
F1
D1
E1
水路1
a
b
4.5m
CO
DO
a
C1
b
D1
水路4
DO
堤
EO
D1
E1
水路2と堤
0
2m

図18　近世水路

と違える何らかの必要があったのであろう。

水路からは、17世紀から19世紀に至る国内産染付磁器と施釉陶器が多数出土しているため、水田と水路は近世の江戸期を通じて維持されていたと考えられる。その間に、水路は何度も浚渫や作り替えがなされるが、水路２の時期には水路の南岸に切り石を積み上げて水路の護岸を行うと同時に水路に伴う堤を持つ最も安定したものが造られた。しかし、次の時期、水田経営の最終期に造られた水路１は、最も貧弱なものとなってしまう。護岸の打ち込み杭も、先行する時期の杭をそのまま利用したり、または水路の中に残したまま水を流していた。

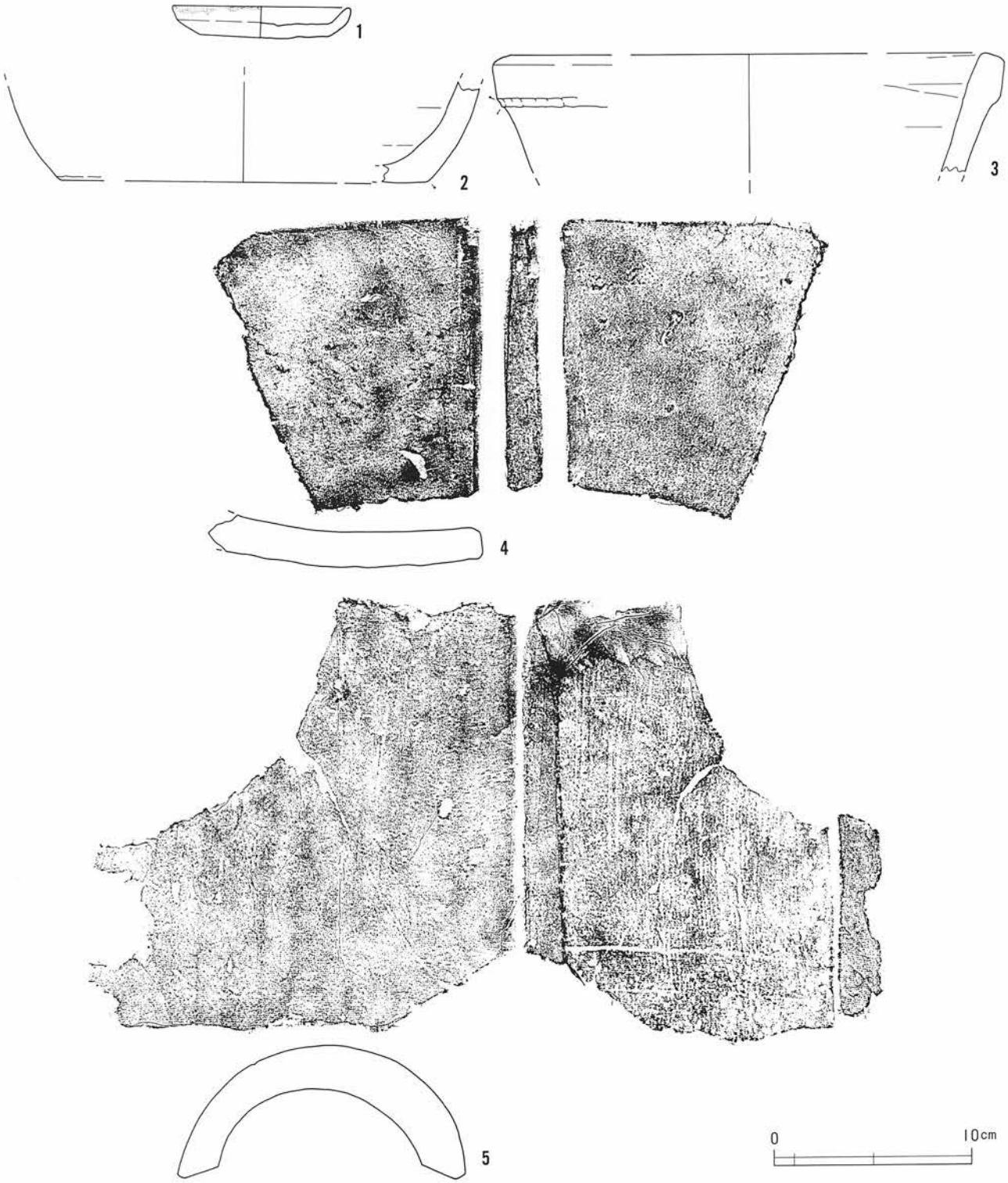


図19　水路１　出土遺物（１）

水路１

最も新しい時期の水路である。５つの水路の中で、最も北側に作られている。この時期、水田面は、調査区内に確認できたかぎりでは最も拡大している。水路の流れは、まっすぐでなく、湾曲しているが、調査区内に発見された限りにおいて比較的直線をなす南東部での方位は、E－26°－Sをなす。幅は上幅50～60cm、下幅30～48センチ、深さは35cm内外を測る。断面は逆台形をなす。

護岸施設としては、打ち込み杭があるものの、調査区内に発見された部分に限っては、その多くは先行する時期の水路５や水路２の打ち込み杭を利用している。ただし、水路１の北西部は水路５や水路２に比べて大きく北へ向けて湾曲しており、水路５と水路２の護岸に用いられた打ち込み杭を利用できずに、新たな杭を持ち込んでいる。しかし、調査区内に発見できた限りでは、水路１の北西部北岸の護岸に打ち込まれた新たな杭は２本しか発見されていない。あるいは、水路１の護岸はかなりおざなりなものであったかもしれない。そうした護岸の粗末さは、先行する時期の杭を利用していることから、護岸施設の裏込めを掘りえず、杭に持たせかける横板などの土留めが発見されなかったことに現われている。新たに打ち込まれた北西部の杭の周辺にも、板などを土留めに用いた痕跡を確認できなかった。また、水路の中に水路２の北岸の護岸で用いられた杭を抜かずに、そのまま残してもいる。ここにも、水路１の開鑿全体における簡便さがみられる。

水路内に堆積していた覆土は、５cm大の泥岩を交える粘質土で、水分は少なく、硬くしまっていた。つぎの遺構面を造成するために埋立られたのであろう。底面に砂などの流下物は見られず、水路１は他の水路に比べて短期間しか機能していなかったものと考えられる。

図20―３～５は志戸呂の錆釉灯明皿。３はその上皿。４～５は受け皿。４面の河より出土した灯明皿より「受け」がかなり低くなっている。いずれも体部外面中位から下方は回転ヘラ調整が行なわれる。

図21―１～６は擂鉢。１と６は瀬戸美濃系、２～４は備前系、５は産地不明である。擂鉢の内面に残された使用磨滅痕は体部下位から内底面にかけてで、これは現在の擂鉢のそれと同じ位置である。他方、中世期の擂り目を持たない山茶碗窯こね鉢の磨滅痕は、中位から下方にかけて残る。両者の使用法の差

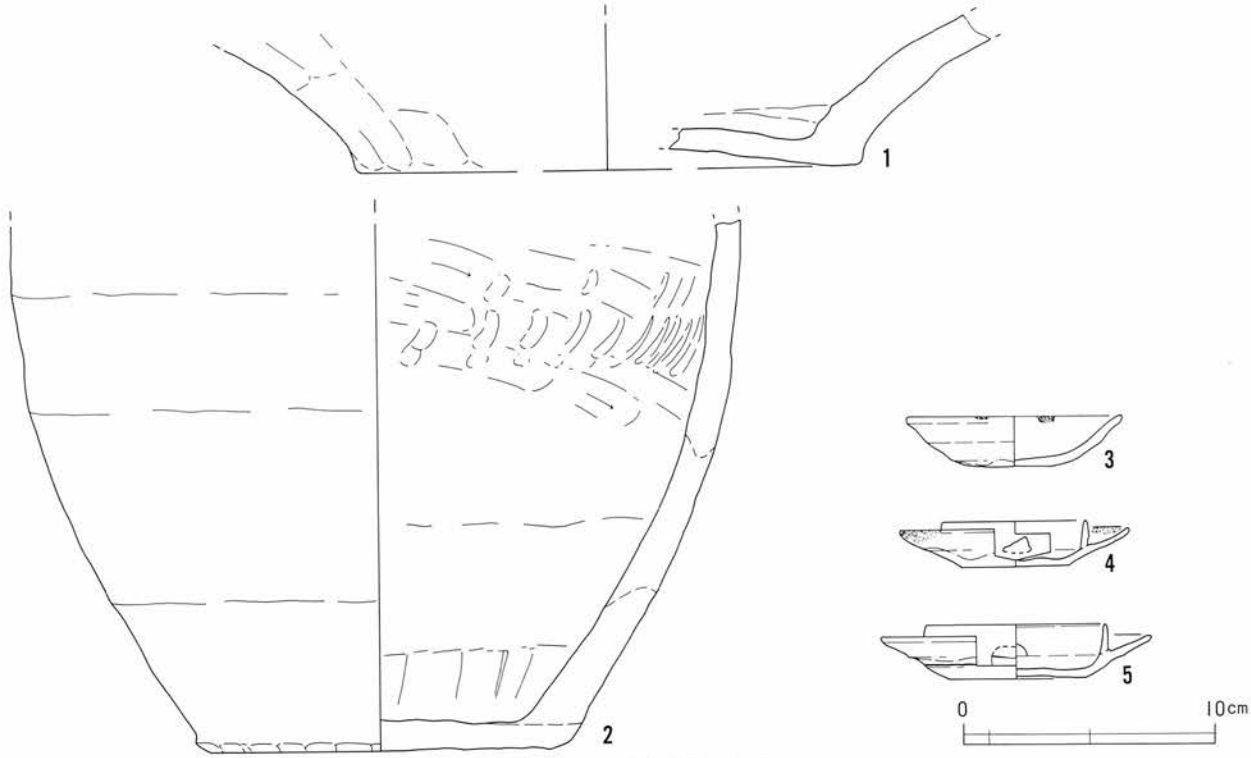


図20　水路１　出土遺物（２）

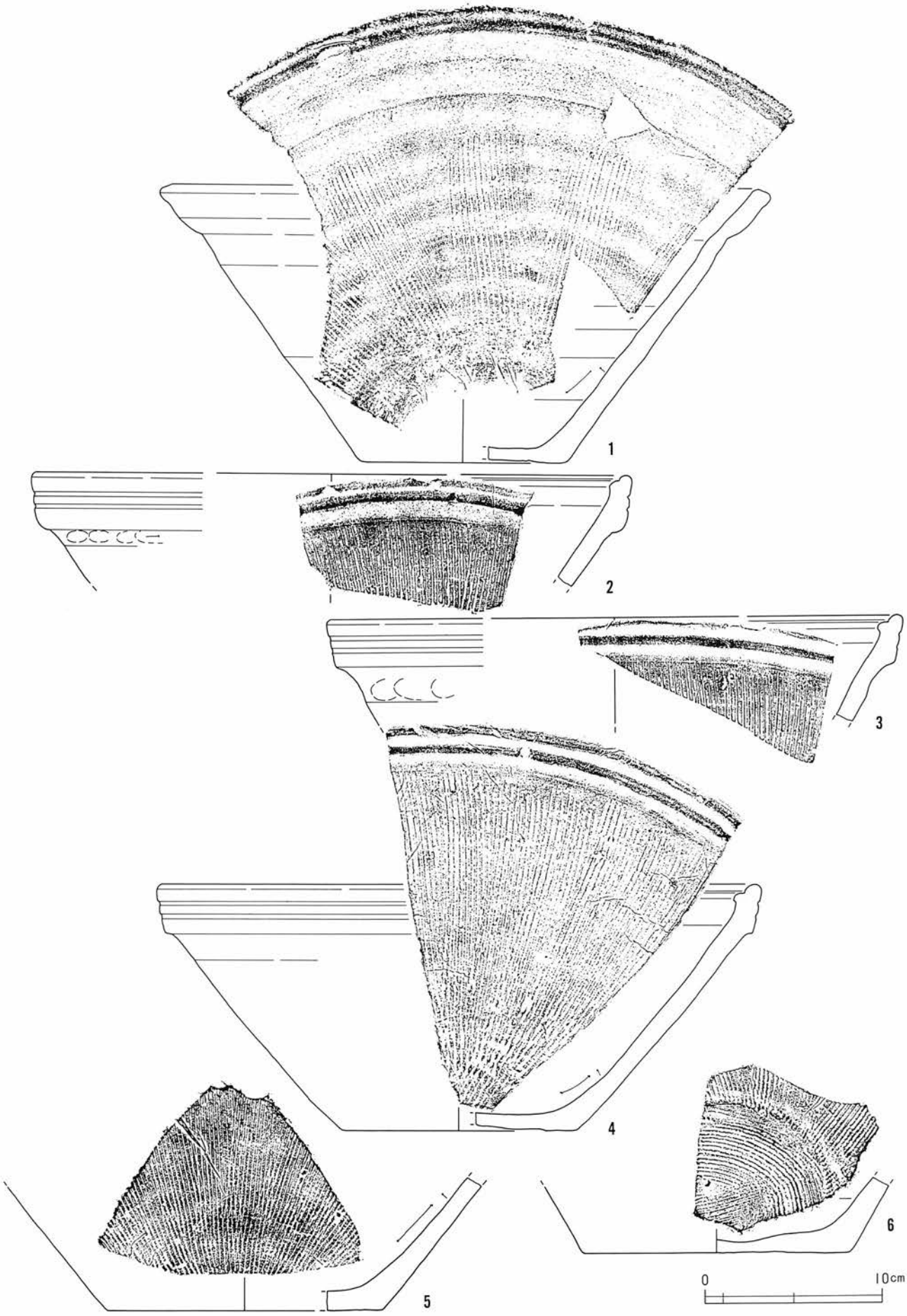


図21　水路１　出土遺物（３）

が明確に現われている。なお、1の瀬戸美濃系擂鉢は18世紀代。

図22は施釉陶器。4以外は17世紀後半～18世紀前半の年代を与えうる。2は美濃の御深井釉皿。見込みに描かれた鉄釉による摺絵は、二次焼成により白濁気味。器壁に煤も付着しているため灯明皿の上皿として使用されたのかもしれない。4は古瀬戸後期の灰釉香炉。体部外面上位に櫛状工具による波文が巡る。古瀬戸後期の製品は、鎌倉市内の寺院跡の調査ではその性格上、茶道具あるいは仏具などの製品を中心にわずかに出土しているものの、市街地遺跡では日常雑器を中心とした古瀬戸中期製品に比べてその出土量が激減することが知られている[1]。このことは幕府衰退以降の鎌倉の町の様子を探るひとつの手掛かりといえよう。

図23—1～17は肥前の染付製品。いずれも17世紀後半～18世紀前半にかけての年代を与えうる。染付は明青色および灰青色顔料による手描きの文様が描かれるものが主流だが、見込みにコンニャク印判による五弁花文を押印したもの、底裏に「大明年製」の文字が残る製品も見られる。また、15のような手のこんだ高級品である濃筆（技法）で描かれた製品も出土している。また、15と同形・同文・同技法の製品が後述する水路北地業層中（図46—7）より出土している。18～20は煙管。19は雁首の腹部に、20は吸い口の先端部にツブレが残る。26は不明木製品。表裏面の周縁部に漆が残る。また、裏面にはノミ状工具による切込みのような加工痕が残る。

水路2と堤

水路2は水路1に先行する水路である。水路1の南に位置し、北の岸を水路1に切られている。規模は、上幅1.6m、下幅90cm、深さ62cmを測る。断面は逆台形を呈する。水路の東西軸方位は、E－29°－Sである。

この水路2は、発見された5本の水路の中では最も残りの状況がよく、また作り自体も強固であったと思われる。護岸には打ち込み杭と横板が基本的に採用され、南の肩の一部は凝灰岩の切り石が積み上げられて岸が築かれている。底面は、先行する水路5の埋立の際に投入された大小さまざまな泥岩をそのまま残している。そのために、水路の底面に泥岩を敷きつめたように見える。

杭と横板による護岸は、北の肩に見られた。杭は直径8～9cmの丸太がもちいられ、先端を鉈状のもので尖らせて、打ち込まれている。打ち込みは、外側に向けて2本づつなされ、その間に横板が差し

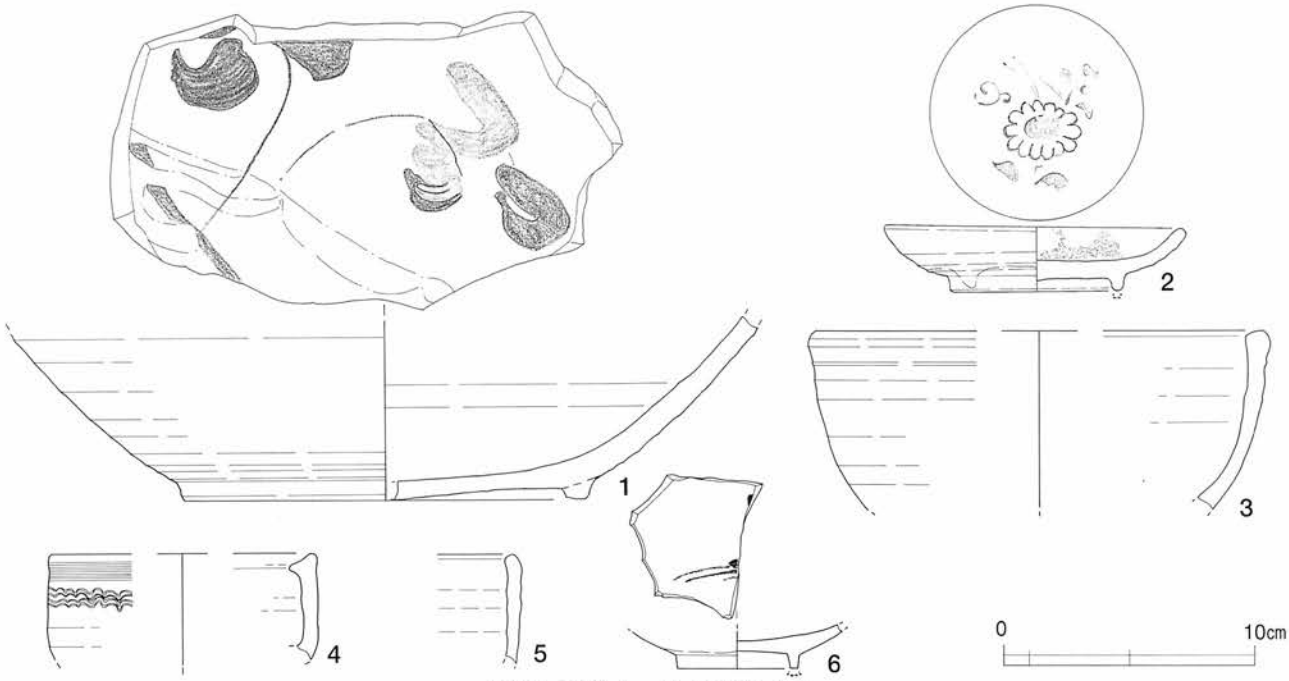


図22　水路1　出土遺物（4）

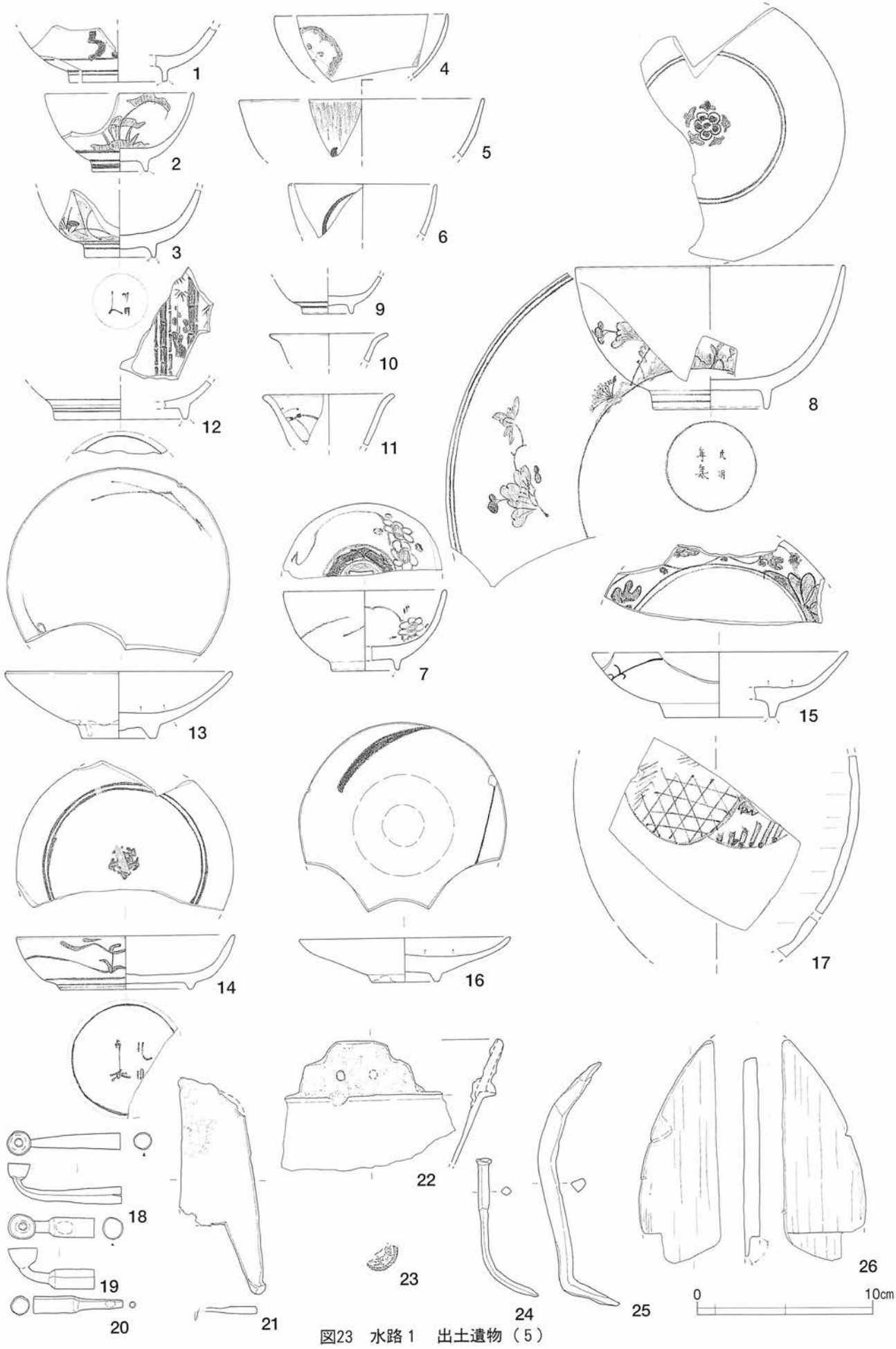


図23　水路１　出土遺物（５）

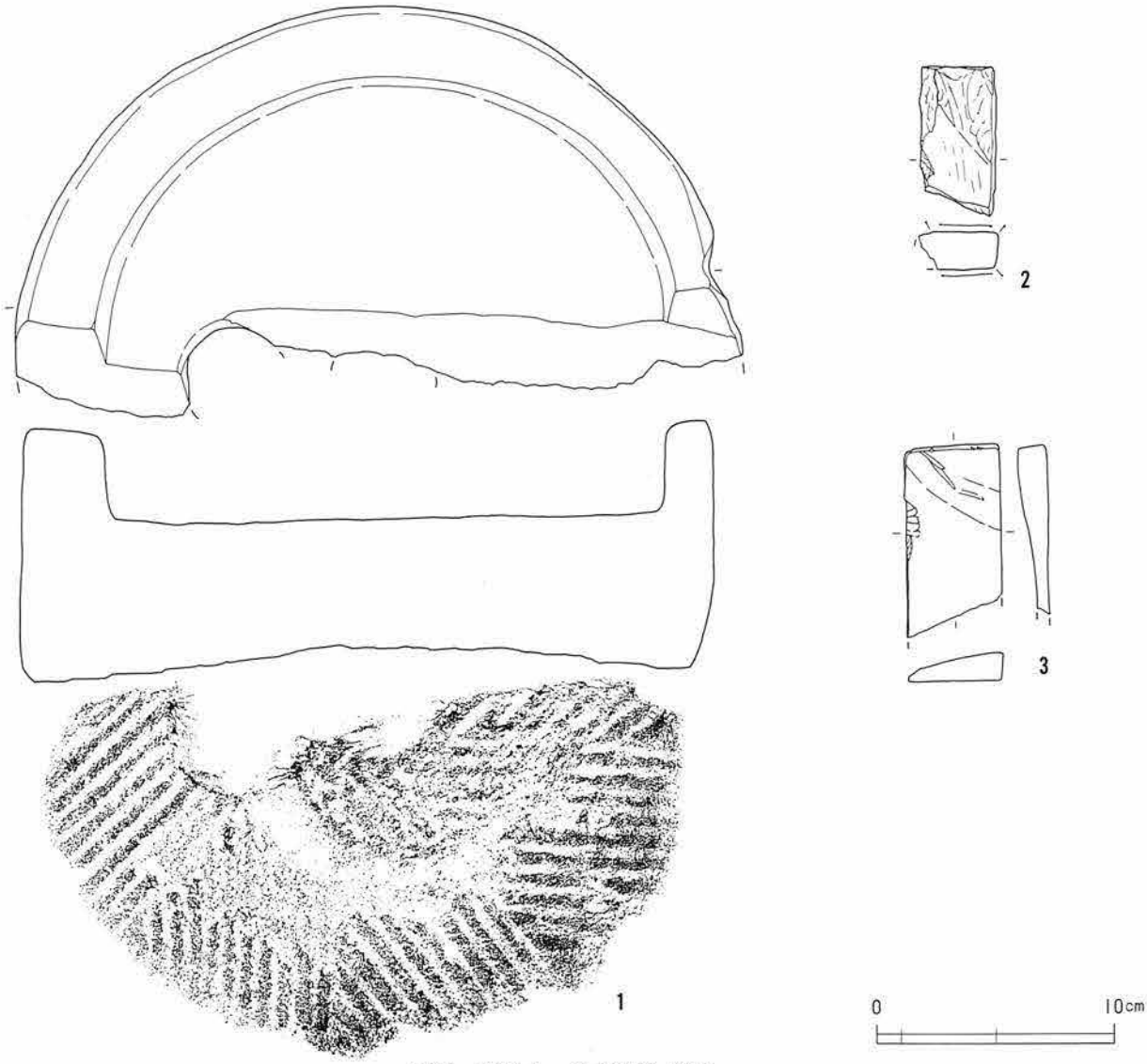


図24　水路１　出土遺物（６）

込まれている。横板は幅の広いものは見られず、残っていたかぎりでは９～15cm幅であった。板の長さもそろってはおらず、厚さもまちまちであった。規格材の板を水路の護岸用に用意したというよりは、転用材であろう。そのためか、横板は杭にとどまるのに充分な強度を保持しえなかったようである。杭が残っているにもかかわらず、横板の見られない部分や、断片的にしか残っていない。横板がはずれてしまったようである。

横板がはずれてしまい、補修の行われた様子が北岸の中央部に発見された。水路２の発見された北岸の東端と西端には杭に挟まれた幅の狭い横板が残っているが、中央部には杭から外れた板が点々と残っている。この横板の外れてしまった部分に、竹であんだ長いアンペラ様のものが水路の壁から底面へ倒れ込んでいた。アンペラの残っている状況は良いとはいえないが、その西端は杭の間に差し込まれ、護岸のために用いられたことを示している。確認できた限りでのアンペラの最大幅は東端で55cmを測り、長さは3.4mに及んだ。最大幅を測る東端に、丸太材を粗く面取りした角材が水路に差し渡すように底面に落ち込んでいる。こうした角材を水路の底面に差し渡す必要性はないものと考えられる。アンペラの東端の断裂と角材の状況から、この角材は護岸の横板の代わりにアンペラを水路の壁に押しつけるための支えとして、水路の南北の壁に差し渡された心張り棒であろう。

水路２の南岸には打ち込み杭がその西部に残ってはいたが、横板やその補修材も発見されなかった。また２本発見された杭も横に並んでいて重なる位置にはなく、板材などを挟み込むようには打ち込まれ

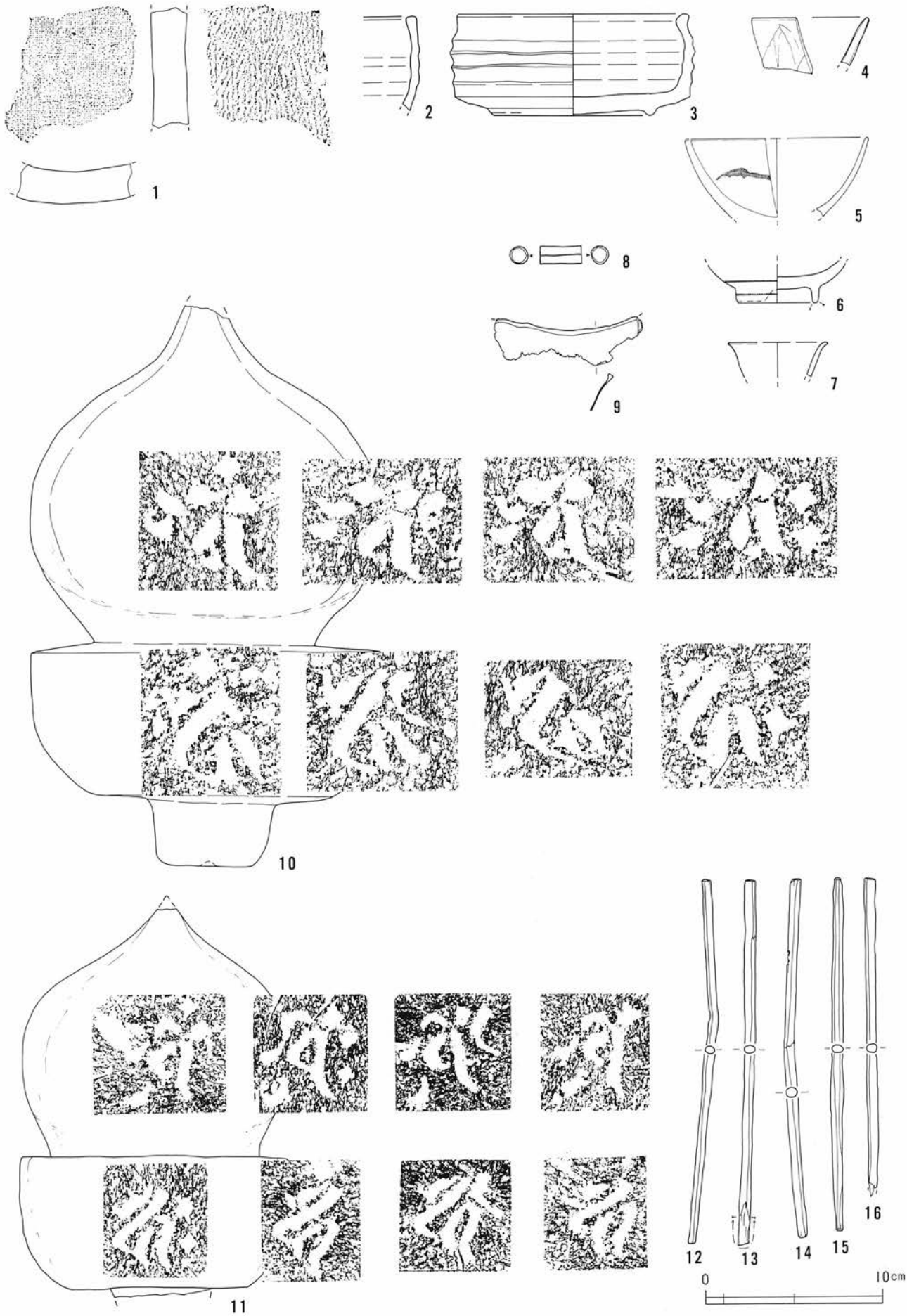


図25　堤出土遺物

ていない。水田のある水路の南側には、水路の護岸に杭だけが打ち込まれて横板などの押さえはなかったものと思われる。ただし、南岸の東部の護岸は、時期差による水路どうしの切りあい関係が影響しているため一概には言いきれないが、発見された５つの水路の護岸施設のなかでも最も丁寧で強固な作りである。

南岸東部の壁は凝灰岩の切り石を３段積み上げて、水路の壁の上半分を護岸している。切り石は、長さが60と30cmの２種類、幅も32と21cmの２種類で厚さ12cmのものが用いられ、全長2.4mにわたって積み上げられていた。全長2.4mの中ほどを近代の井戸によって壊されているため、積み石護岸の正確な積み上げ方とその用途もしくは意図を把握するには、多少の推量を挟まなくてはならない。

石積みは一列４～６個の石の長辺を水路内に向けて並べ、その上に積み上げる列は下段の石列のつなぎ目を覆うように30cmずらして並べる。いわゆる煉瓦のイギリス積みと同様の手法である。このずらして並べるために、長辺の長さが60cmと30cmの２種類の切り石を必要としたのであろう。この切り石積みの護岸施設が水路の一部にのみ設置された理由を調査時には明確にできなかったが、水田への取水もしくは水田からの排水の施設を設けるためではなかったろうか。

水路２の南にはおそらく突堤状の堤が付設されていたと思われるが、平面的には捉えられなかった。発掘調査においては、調査区の北半分が現代のゴミ捨て穴にされていたために、水路を確認した面より上のおおかたが壊されていた。しかし、調査区の壁面と調査区内に設定した土層観察畔に堤の存在を確認できた。そのため、平面図には堤が水路２の南側に一貫して伴うものとしてあるが、上述の取廃水用に切れている部分があったかもしれない。ただし、確認はできない。堤は先行する水路５と６の埋立に投入された大型泥岩を利用しつつ、泥岩の上に凝灰岩切り石を水路壁面に並べ、泥岩と粘質土を積み上げて作られた。

図25は堤から出土した遺物を図示した。

図25―10、11は五輪塔。堤を造作あるいは補修する際に利用されたと考えられる五輪塔の空・風輪が出土している。中世期以来の人々の系譜が途切れ、中世以来の墓を守る意識の衰退が窺われる。

図26～30は水路２から出土した遺物を図示した。

図26―１～７はかわらけ。４および５は、その器型と粉っぽい緻密な胎土から近世のかわらけと考えうる。８は灯芯立て。中央は穿孔され、その周辺には煤が付着する。外底面は糸切り痕を残す。９は灯明皿の受け皿。両者ともに白色針状物質、黒色砂を混じえるかわらけ質の肌色粉質土であり、灯芯立ての径と灯明皿受けの受け径がピッタリはまるサイズであることこから在地産の受け付き灯明皿であろう。

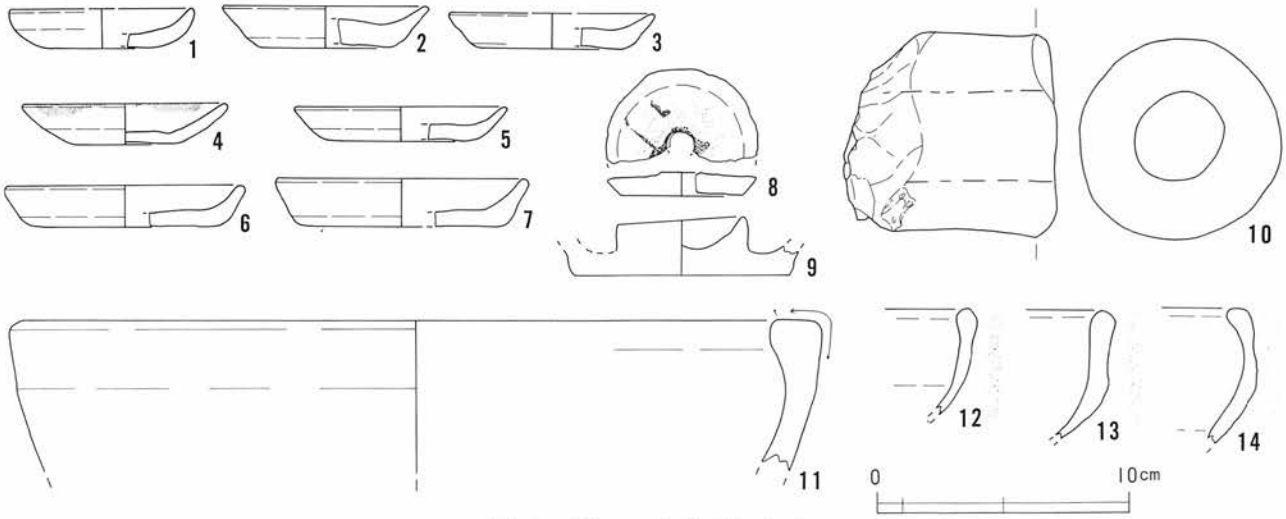


図26　水路２　出土遺物（１）

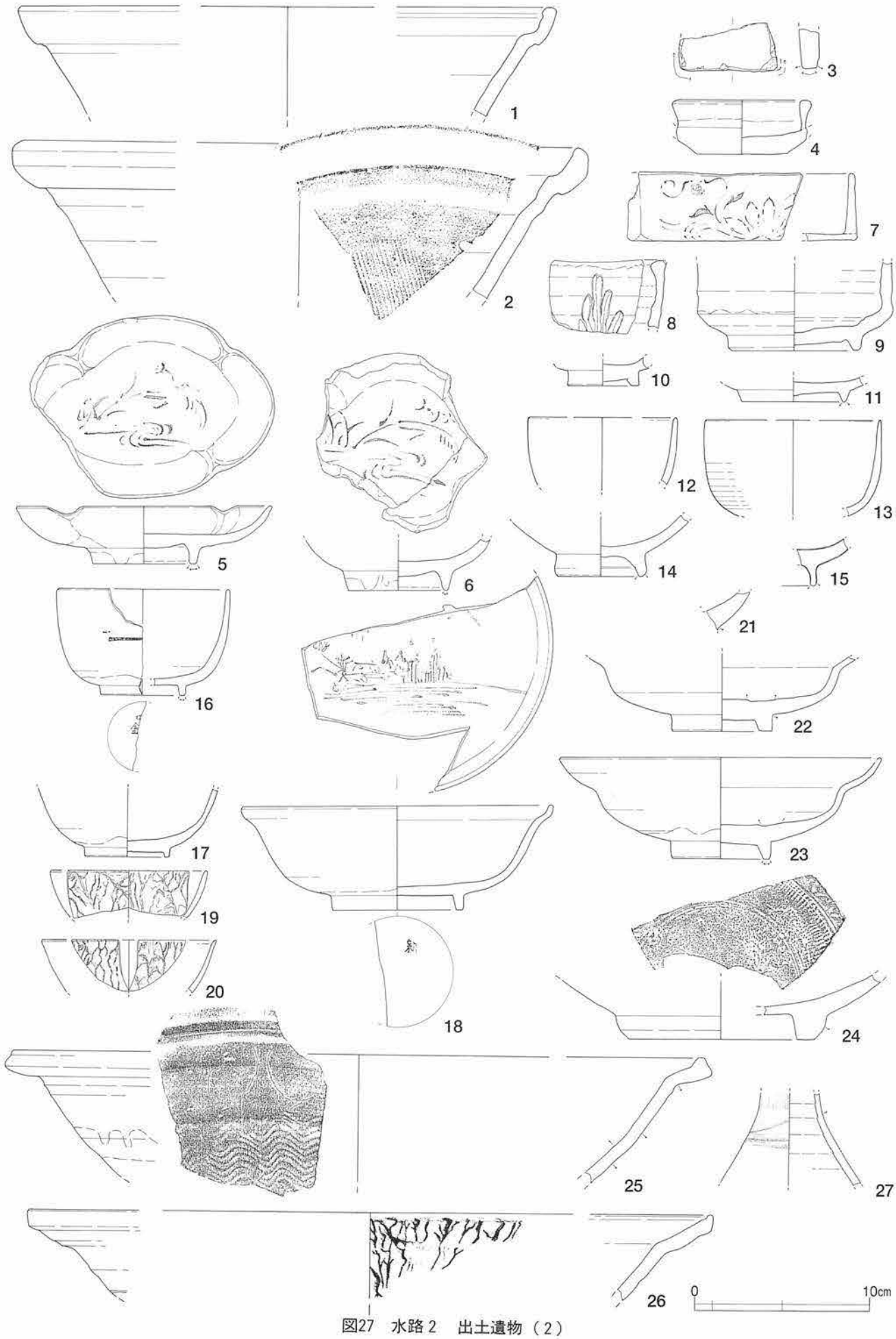


図27　水路２　出土遺物（２）

図27は施釉陶器。年代は17世紀末～18世紀前半頃までのものが多い。

図27―１、２は17～18世紀の瀬戸美濃の擂鉢。図示しえたのはこの口縁部２片のみである。７は美濃の御深井釉摺絵鬢ダライ、８、９は御深井釉木瓜型摺絵皿。19、20は肥前の練り込み碗。

図28は磁器。年代は17世紀後半～18世紀中葉頃。器種はやはり碗、皿が中心だが、小型の製品が多くなってきていると同時に、染付で描かれる文様もバラエテイーに富んできている。３は見込みに「荒磯文」が描かれる。これは1660～70年代に生産され、その多くが東南アジア方面に輸出されている。17は色絵小碗、26は色絵皿。

図29―１～５は煙管。１、３、５にはツブレが残る。11は硯。頁岩を原材としているため、一見して砥石のようである。同時に破損しやすかったのではないだろうか。現在のところ、鎌倉市内の中世期遺跡からは頁岩製の硯は出土していない。

図30は木製品。水路２からは最も多くの木製品が出土している。１～６は椀。漆が塗られる製品には黒色漆と赤色漆が用いられている。内面と外面を塗り分けするだけで、加飾は一切行なわれない。中世

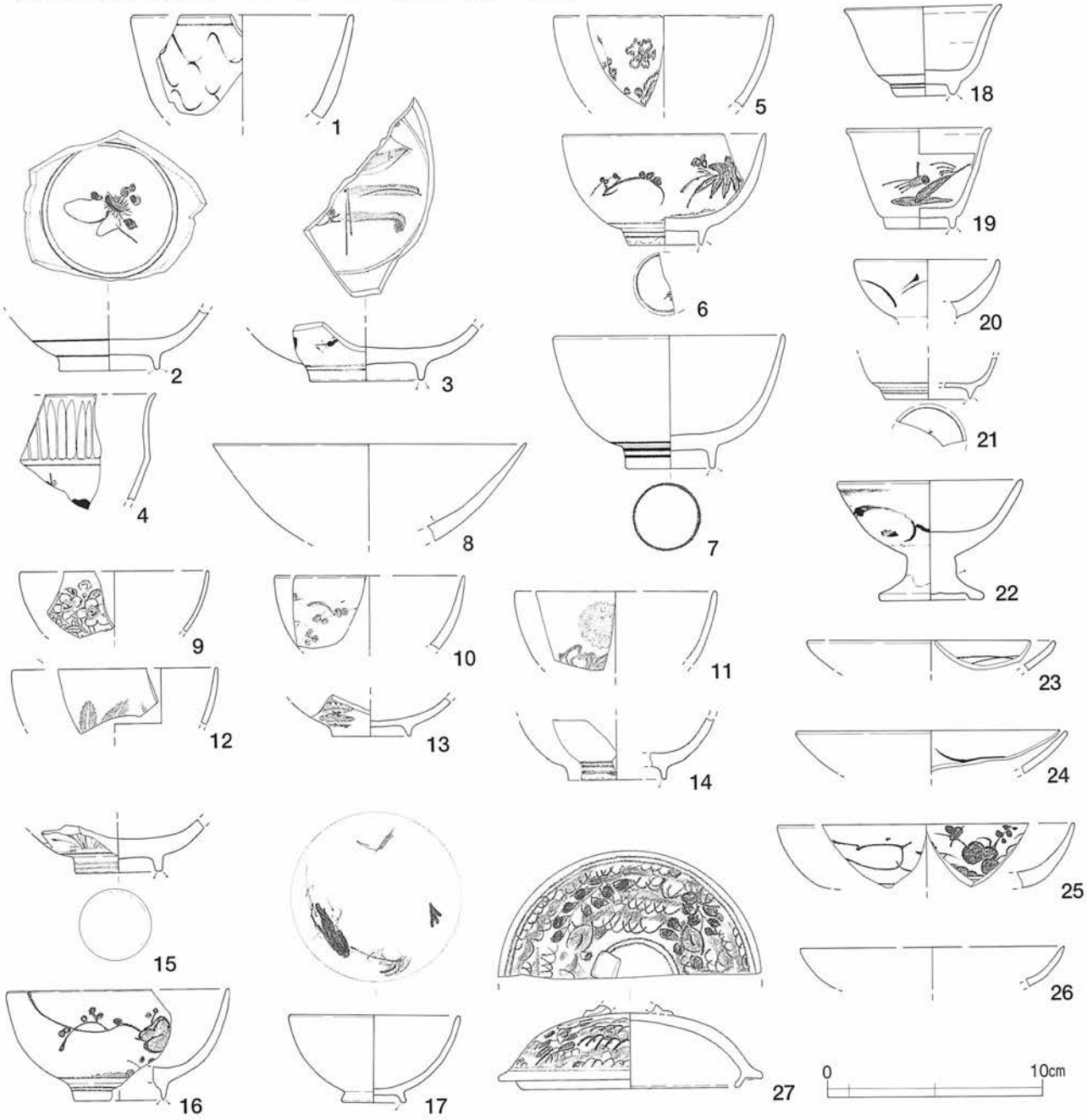


図28　出土２　出土遺物（３）

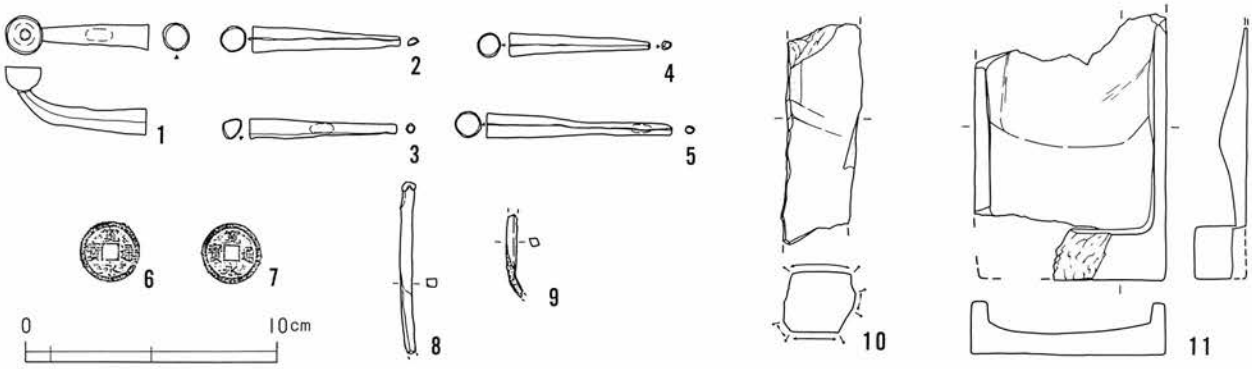


図29　水路２　出土遺物（４）

期の製品よりもかなり高台が高くなり、４あるいは５のように高台の高さだけで２cm以上あるものもある。６は未製品と思われる。器壁外面はノミ状工具により面取りしたような削り痕、また外底部は２箇所に爪痕が残る。12は曲物の底板を俎板に転用した後、漆を全面に塗ってさらに再利用している。

水路４

時間的に水路２に先行する。水路の北岸を水路２に切られ、また水路６を切って作られる。５つの水路の中では最も南に作られ、中世河川の南岸に沿うような位置にある。上幅1.3～1.5m、下幅68cm、深さ40cmの断面逆台形をなす。調査区内に発見された限りでは、その北西部で北に向かって大きく湾曲する。南東部での水路の東西軸方位は、E－30°－Sである。

水路の護岸には、とくに意識して作られた強固な施設は見られなかった。護岸用に打ち込まれた杭は北岸に２本しか発見されていない。水路２と同様に外に向けて斜に打ち込まれた杭は幅それぞれ12cmと７cmを測る角材が用いられ、他の水路で使われている丸太のものとは異なっている。大きい方の杭は12×６cmの角材の先端に、奥行き３cmのほぞが切り出されている。このほぞを用いて、中世の市街地の大溝を護岸する際にみられる箱型の施設と類似した構築物を作るには、水路内に発見される部材が少なすぎる。水路４の護岸に使われた杭は、転用品の角材であろう。

この水路北岸の壁面は、大型の泥岩の集積が形成している。この泥岩の集積は、水路４が切る水路６の埋立の際に投入された泥岩を掘り残して、水路４の北の壁面としたためである。角材の杭はこれらの掘り残しの泥岩が崩れるのを防止するために打ち込まれたのである。水路６の埋立泥岩のない水路４の南壁面で杭の全く見られないことが、このことを指している。

また、水路の底面は中世河川のなかに堆積した山砂と小石からなる。

図31―１～２のかわらけ、４の山茶碗窯こね鉢、５の常滑のこね鉢は中世期の製品と考えられる。２のかわらけは背が低く器壁もゆっくり開きながら立ち上がる。近世期のかわらけの形に似てきている。５は常滑のこね鉢。体部外面中位付近に指頭による押さえ痕が残る。赤羽・中野編年では第８型式（14世紀半ば～15世紀）に分類できよう。７は18世紀代の瀬戸美濃系擂鉢。15は1590～1630年代の舶載染付。素地は白色粘質緻密土。染付は淡灰青色顔料で、見込みには手描きによる花文、口縁部外面には粗雑な輪文が２本巡る。本遺跡地で出土した肥前染付は高台付近に輪文の巡るものは多いが、口縁部に輪文の巡るものは15だけであった。16は煙管の雁首。腹部中央にツブレが残る。

水路５

水路５は水路１と２に切られ、後述の水路６を切っている。すなわち、水路１、２より古く、水路６より新しい。水路４との関係では直接的に切り合い関係をもたず、ともに水路６を切る時期関係をもつ。しかし、水路の掘り込まれた深さを考慮するならば、水路５と６の深さがほぼ同じであることから、水

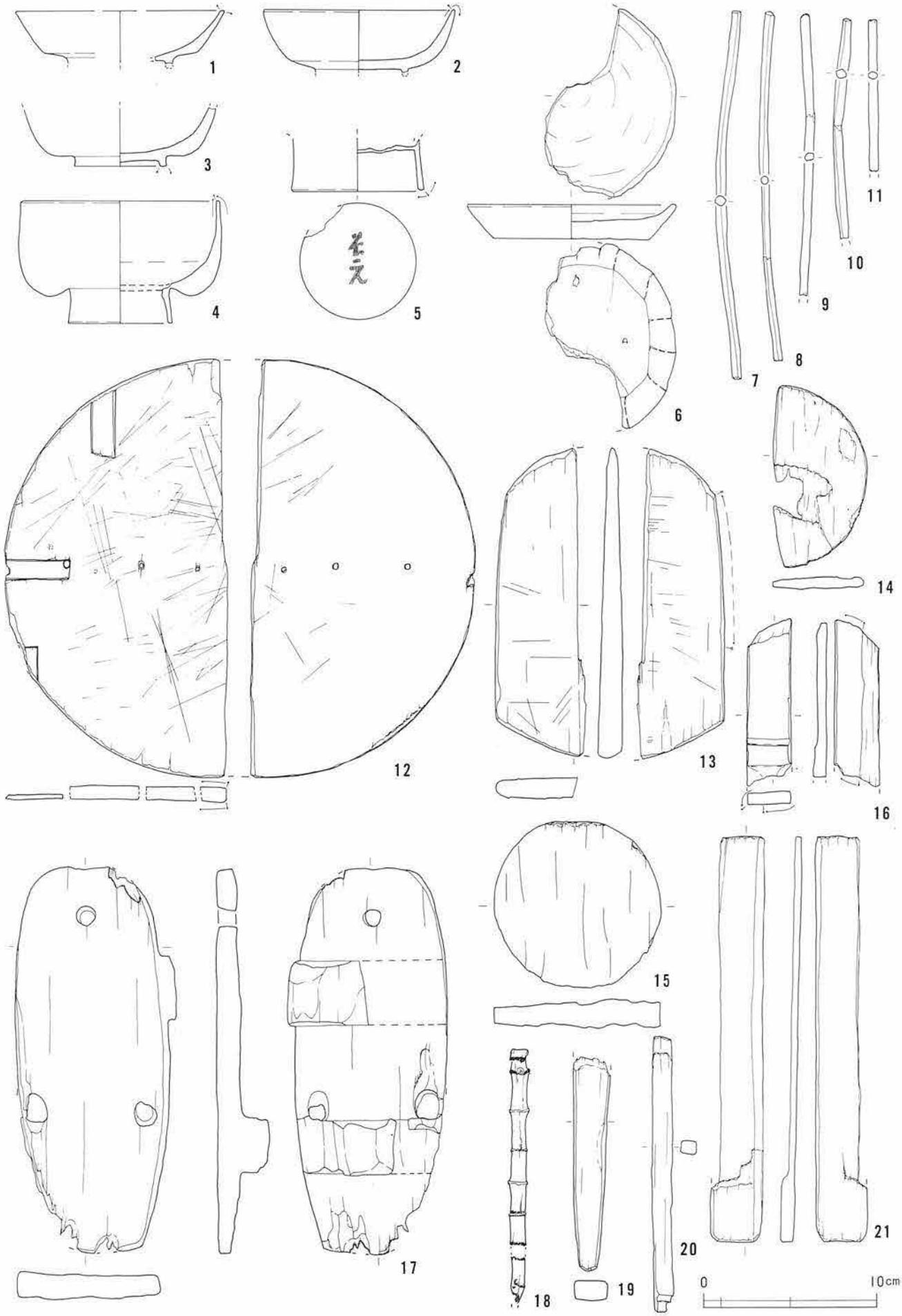


図30　水路２　出土遺物（５）

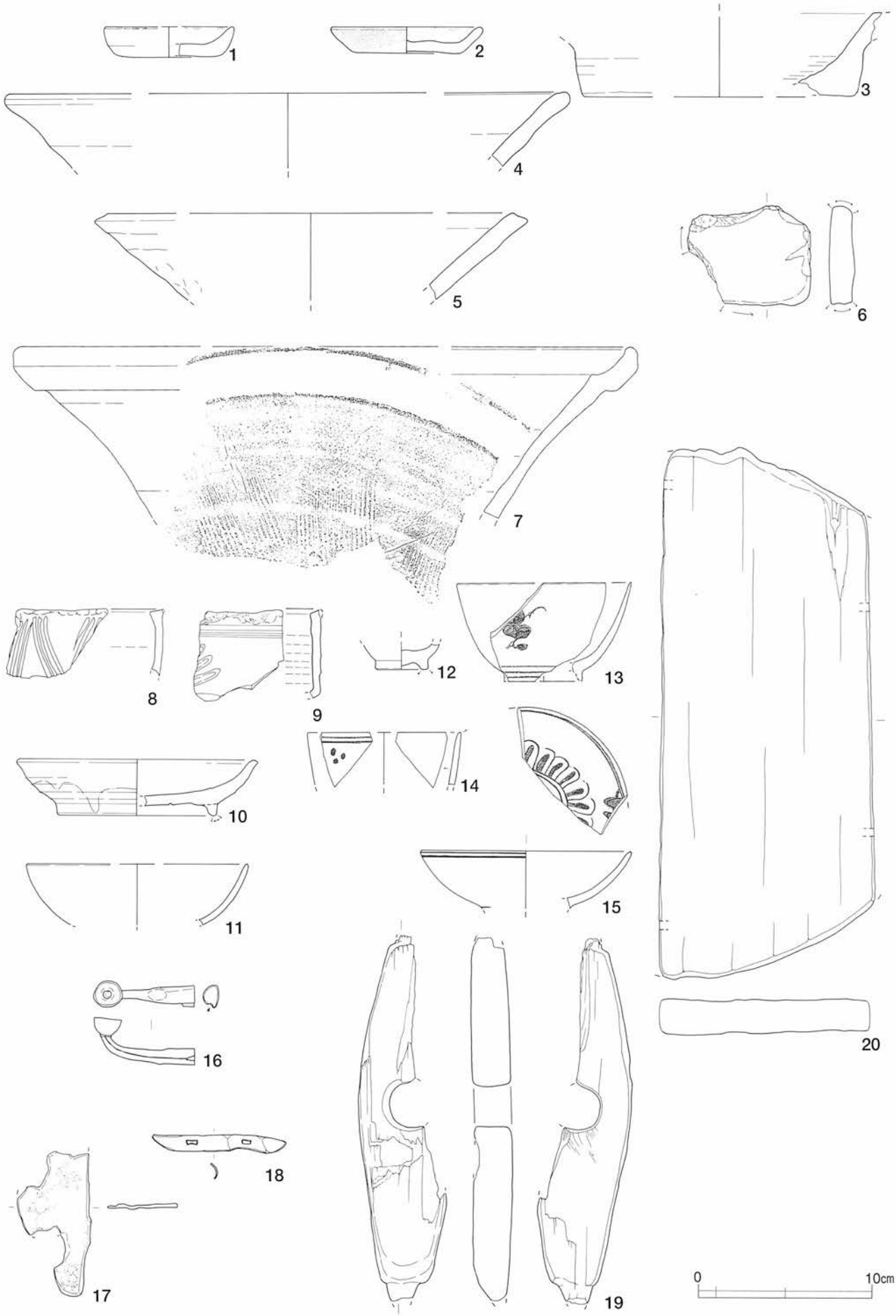


図31　水路４　出土遺物

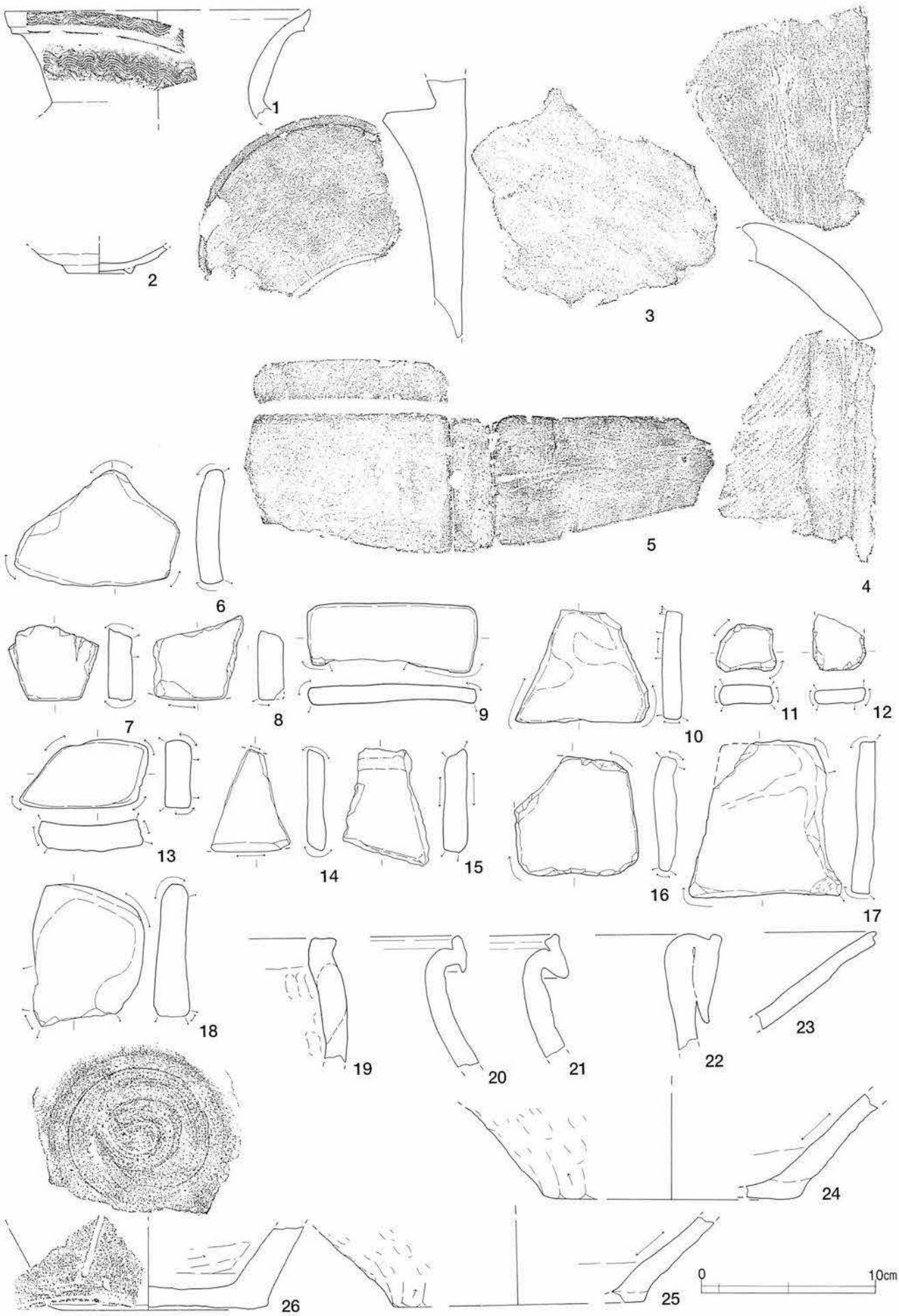


図32　水路５　出土遺物（１）

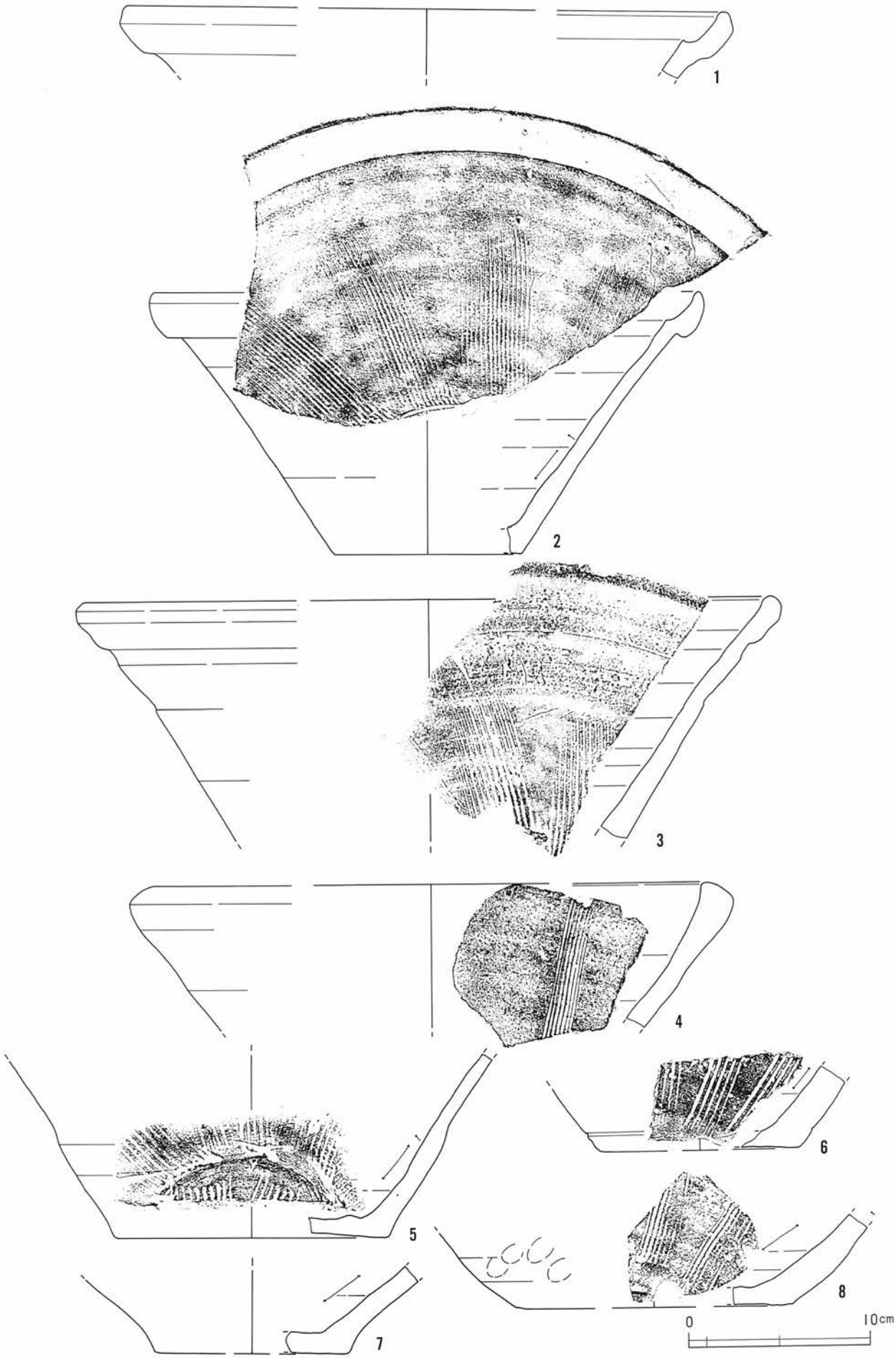


図33　水路５　出土遺物（２）

路５と６は近い時期関係にあり、掘り込みの浅い水路４は水路１、２に近い時期関係にあるとしえよう。よって、これまでに記してきた水路の切り合い関係をまとめて水路１、２、４、５、６の時間的変遷を古いものから新しいものへ順に記すならば、次のように設定できる。水路６→５→４→２→１（水路３は欠番）。

さて、水路５は水路１と２の真下に位置している。その規模は上幅1.5m以上、下幅95cm、深さ１ｍを測る。断面形はやはり逆台形を呈する。底面は中世河川のそれよりさらに深く掘り込んで、自然堆積の海成砂の面にまで達している。東西軸方位は、E－20°30′－Sである。南の岸は水路２に切られているためか、護岸施設は何ら見られない。一方、水路１の北岸とほぼ共有される水路５の北岸には、２列の丸太杭とそれに挟まれた長い丸太による護岸施設を確認できる。

丸太杭は直径９cm、長さ1.2mほどを測る。先端は鉈で尖らされている。打ち込まれた間隔はまちまちで、50cmもあれば20cmの場合もある。杭は外側に傾斜する水路の壁面と、縁とに２列が垂直に打ち込まれる。次に北岸の壁面と上幅の縁の２列に打ち込まれた丸太杭の上端に、挟み込むように長い丸太が差し入れられる。水路の壁面上半分は杭が押さえ、上端の岸際を横に渡された丸太と杭で押さえる構造になっている。調査では壁面に打ち込まれた杭の上端が腐って、この上端に渡された丸太が少し水路内に倒れ込むようにして発見された。横にさし渡された丸太の直径は13cm、確認できた長さは1.6mである。

水路５のなかに堆積している土は、最下層の底面上に水路を流れた山砂があり、その上は作り替えの時に水路を埋め立てた大型の泥岩であった。この泥岩は後に水路２の底面となっている。この水路５からは水路の杭や横板に挟まるようにして、擂鉢が多く出土している。

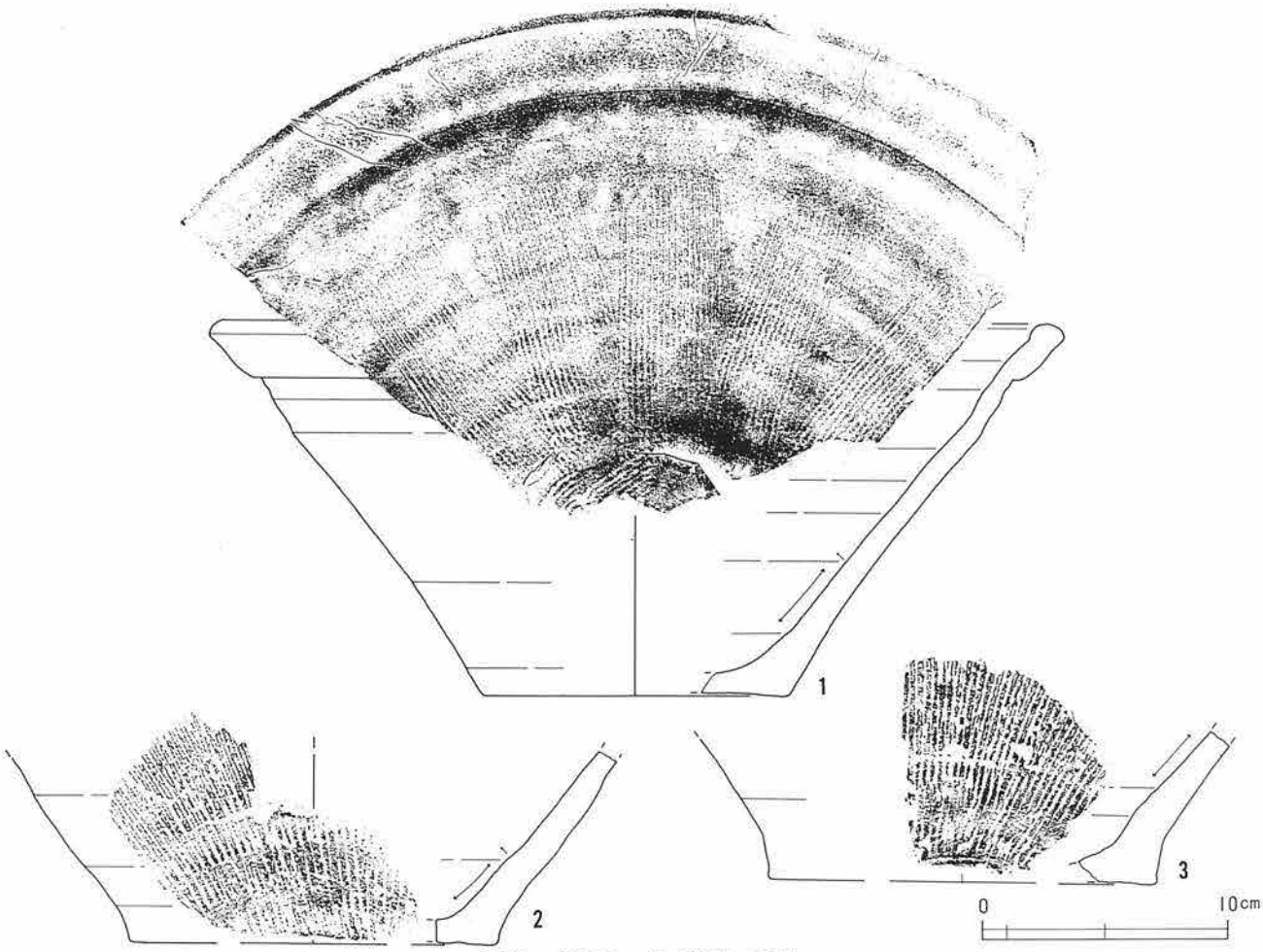


図34　水路５　出土遺物（３）

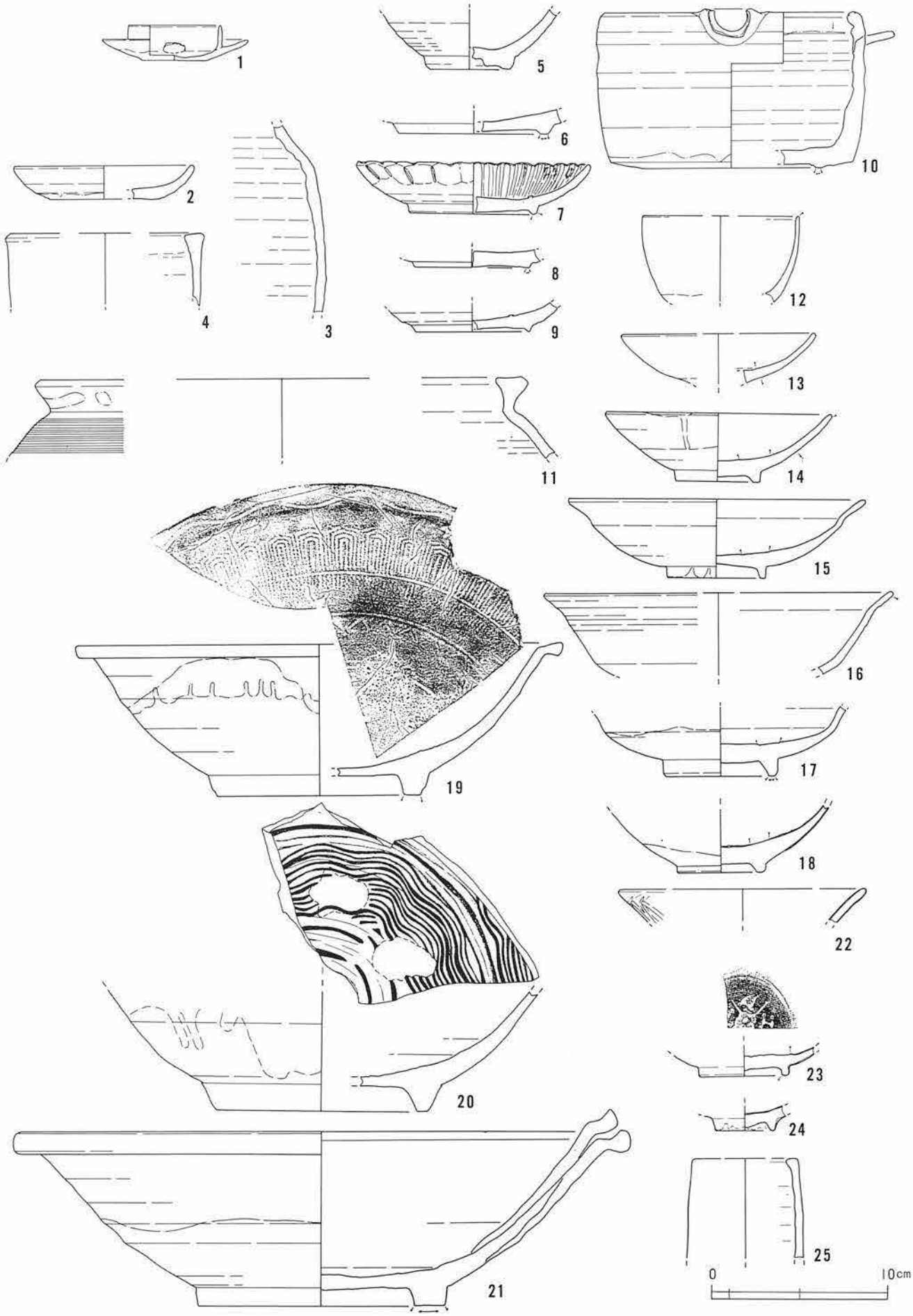


図35　水路５　出土遺物（４）

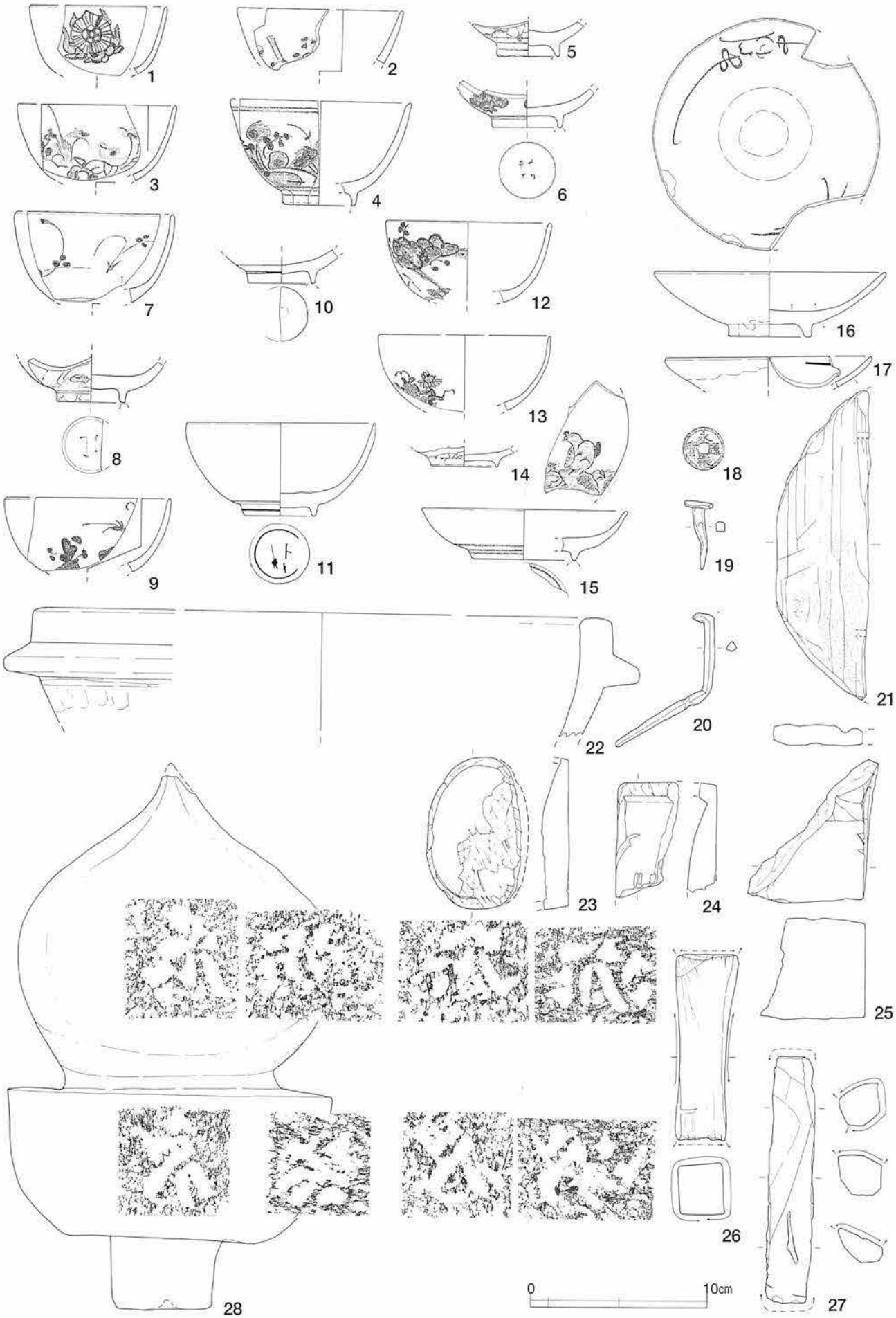


図36　水路５　出土遺物（５）

図32—6～18は常滑及びこね鉢の破片の端部を研磨や削り落しの道具に転用した、所謂すり常滑類。水路全体で100片近くが出土しているが、遺構の性格上、水流による磨滅を考慮にいれて磨滅痕の著しいものだけを図示した。9は山茶碗窯こね鉢転用。19は常滑と思われる壷。口縁部周辺は横方向のナデ、体部外面上位から下方は指頭によるナデで調整される。26は常滑と思われる甕か。内底部にはロクロ目が強く残る。

図33—1～3、5、図34—1は18世紀代の瀬戸美濃系擂鉢。図33—4は備前系、図34—2～3は信楽の擂鉢と思われる。

図35—23、24は明代の舶載磁器。23は見込みの釉ハギされた露胎部を擦って滑らかにされている。また、中央にはスタンプによる花文が押印される。

図36—1～17は肥前の染付。おおむね18世紀前半～中葉にかけての製品が多く出土している。6、8、11の底裏にはかなり崩れた「大明年製」の文字がある。

水路6

水路6は水路2に伴う堤の真下に位置している。発見された水路のなかでは最も古い時期の水路であるため、水路1を除く他のすべての水路に切られている。そのために正確な規模を知ることができない。把握できたかぎりでの規模と断面形は以下の通りである。上幅1.1m以上、下幅50cm、深さ80cmの逆台形を呈していたと考えられる。また、東西軸方位はE－22°－Sである。

水路の上半分の大方が、より新しい水路の造作で壊されてしまっているため、この水路では護岸施設の存在を示すものはほとんど残っていない。ただ、北壁面に2本の杭がかろうじて残っていただけであった。杭は6×4cmの不整長方形角材が用いられている。

底面は中世河川よりさらに下にまで掘り込まれ、海成砂である。水路内には、最下層に水磨した小さな泥岩を交えた山砂が堆積した上に、大型の泥岩が水路を埋立るために投入されている。この大型泥岩が水路4の北壁面に、また水路2に伴う堤の基礎になっている。

図37は水路6からの出土遺物。また、図38は水路1～6からの湧き水を流すために掘った側溝中より出土したものを図示したため、肥前の染付製品の年代幅は17世紀中頃～明治以降までとかなり広くなっている。14の底裏には崩れた「大明年製」が描かれる。24の体部外面に描かれた線描き文は清朝の影響を受けたもの。見込みは崩れた「壽」が描かれる。

水路北地業面

中世河川を埋立た後に、砂質土と破砕泥岩で地業された水路北側の生活面に明瞭な建物痕や生活活動の痕跡は残されていないが、作り替えによる水路の移動にともなって、この地業面も拡大したり、縮小したりした。そのため、各地業面は非常に薄いものの、度重なる地業による地業層が重なり合い、その都度地業土の中に混入した遺物は数多く、また広範な時期にわたる姿を見せている

水路の項目で詳しく記したが、河川を制御・護岸し、また水田の給排水を行った水路の造作にあたって、新旧の水路の切り合い関係が影響していると言えども、その護岸は北岸に重きが置かれていた。このことは水路の北側に水路の水で流失されては困る、もしくは頻繁な人の行き来のある地域があったこ

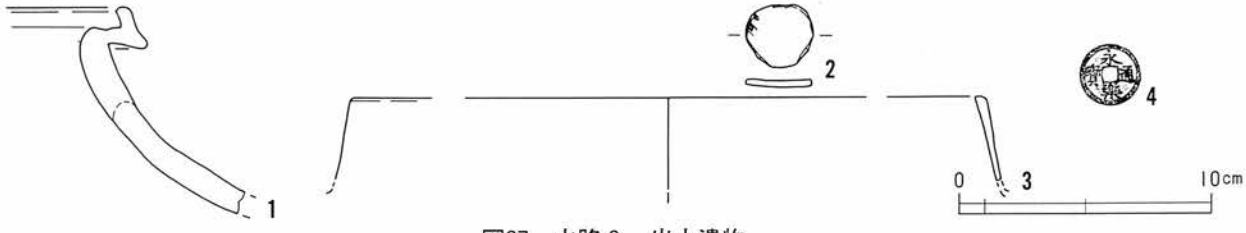


図37　水路6　出土遺物

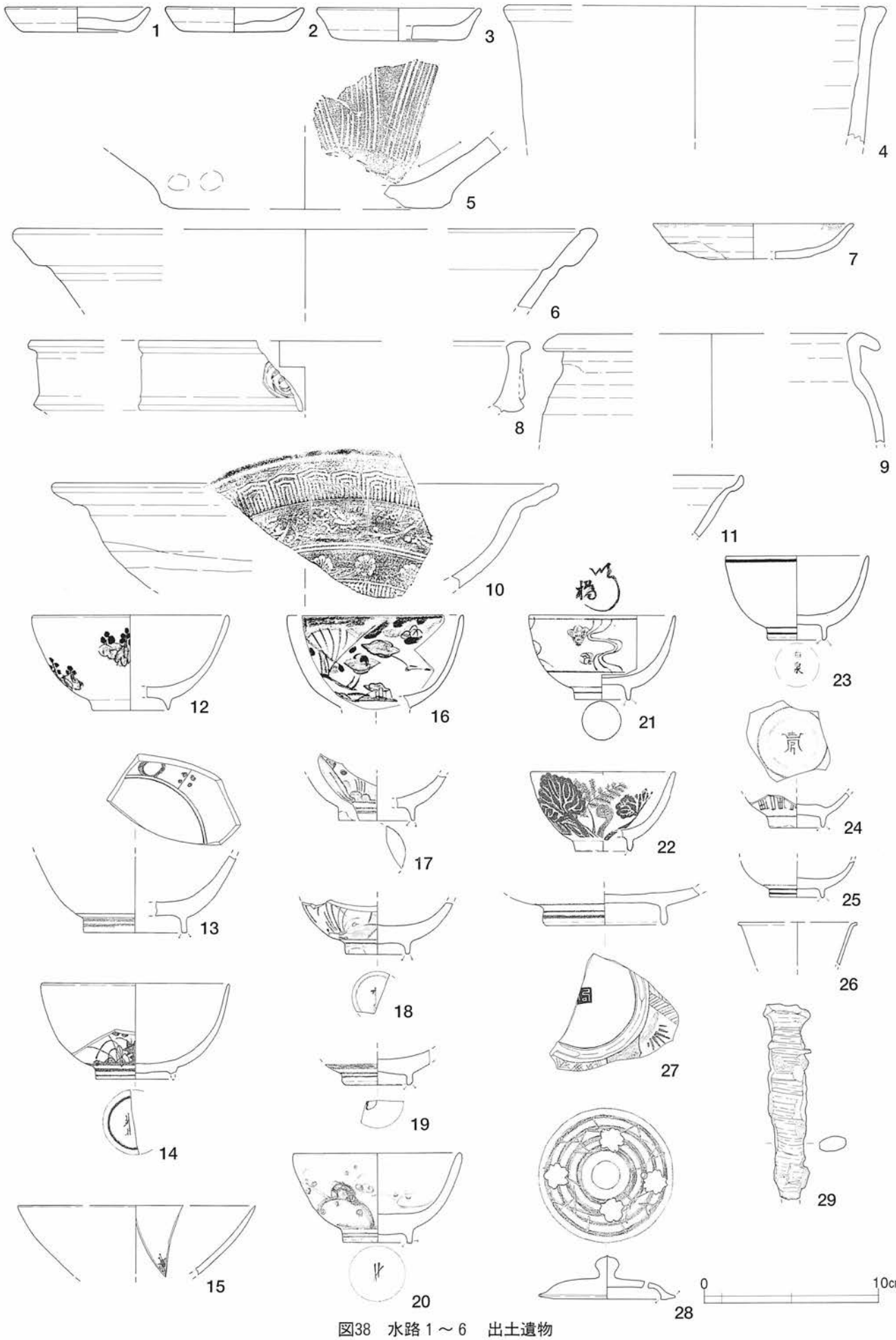


図38　水路１～６　出土遺物

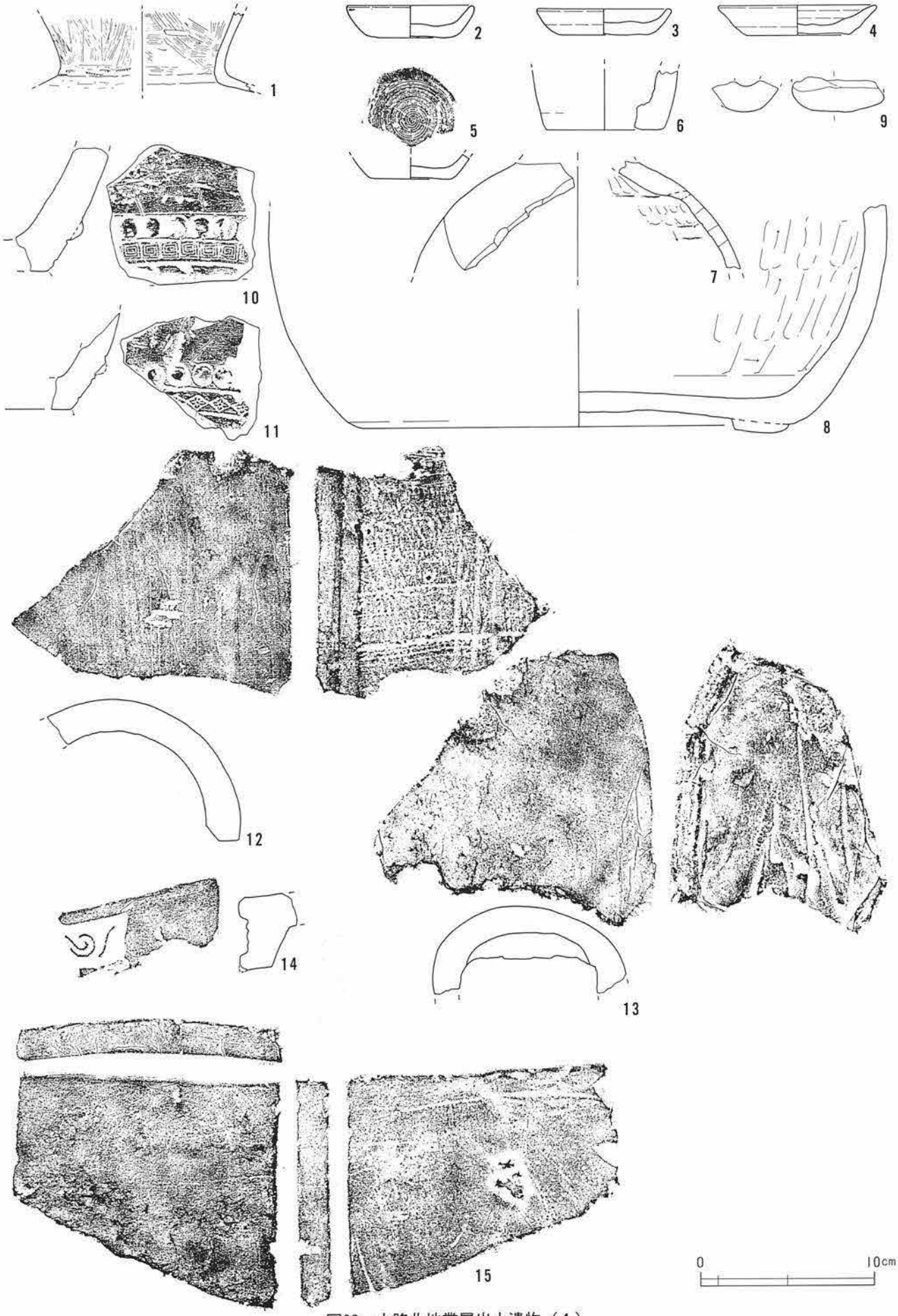


図39　水路北地業層出土遺物（1）

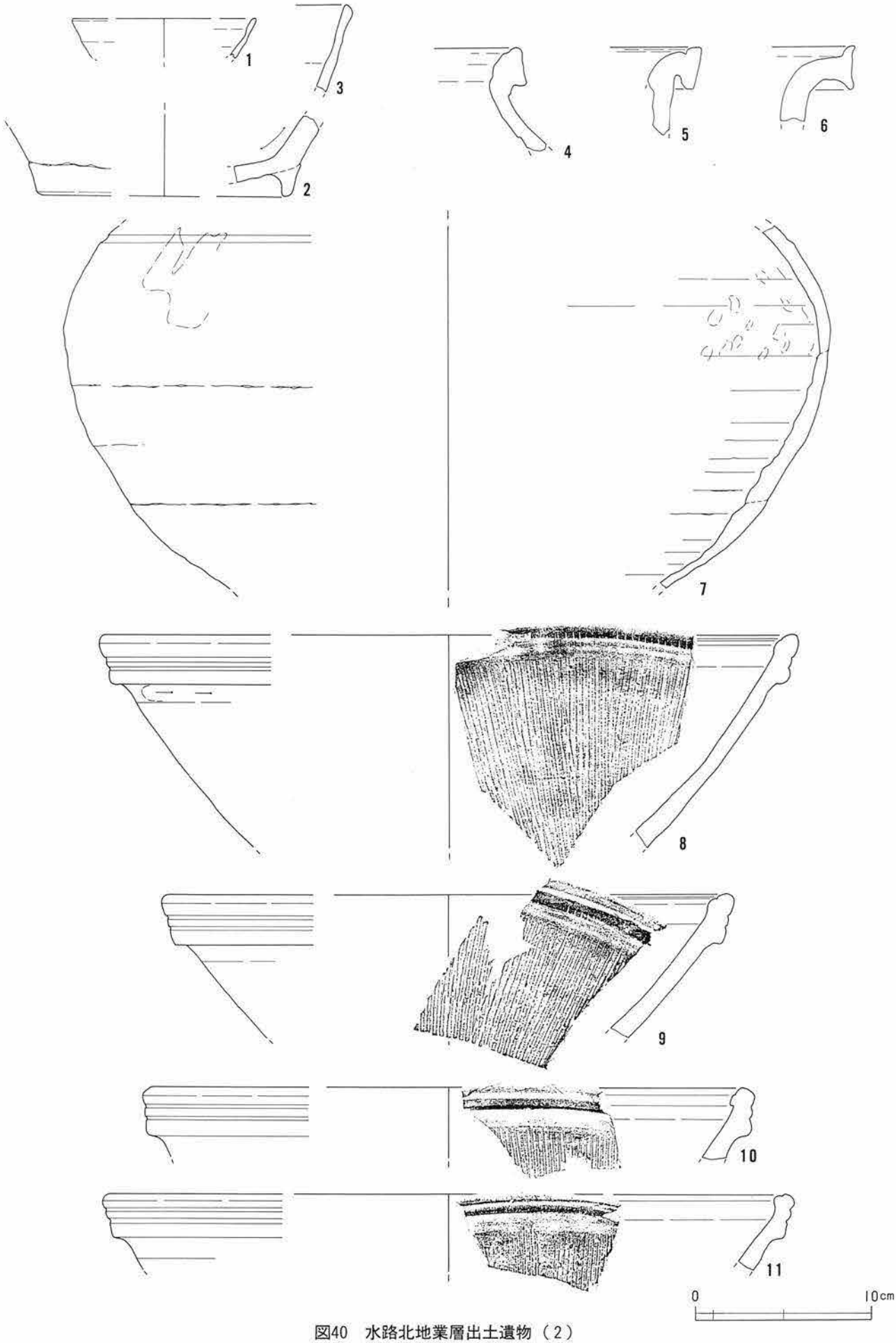


図40　水路北地業層出土遺物（2）

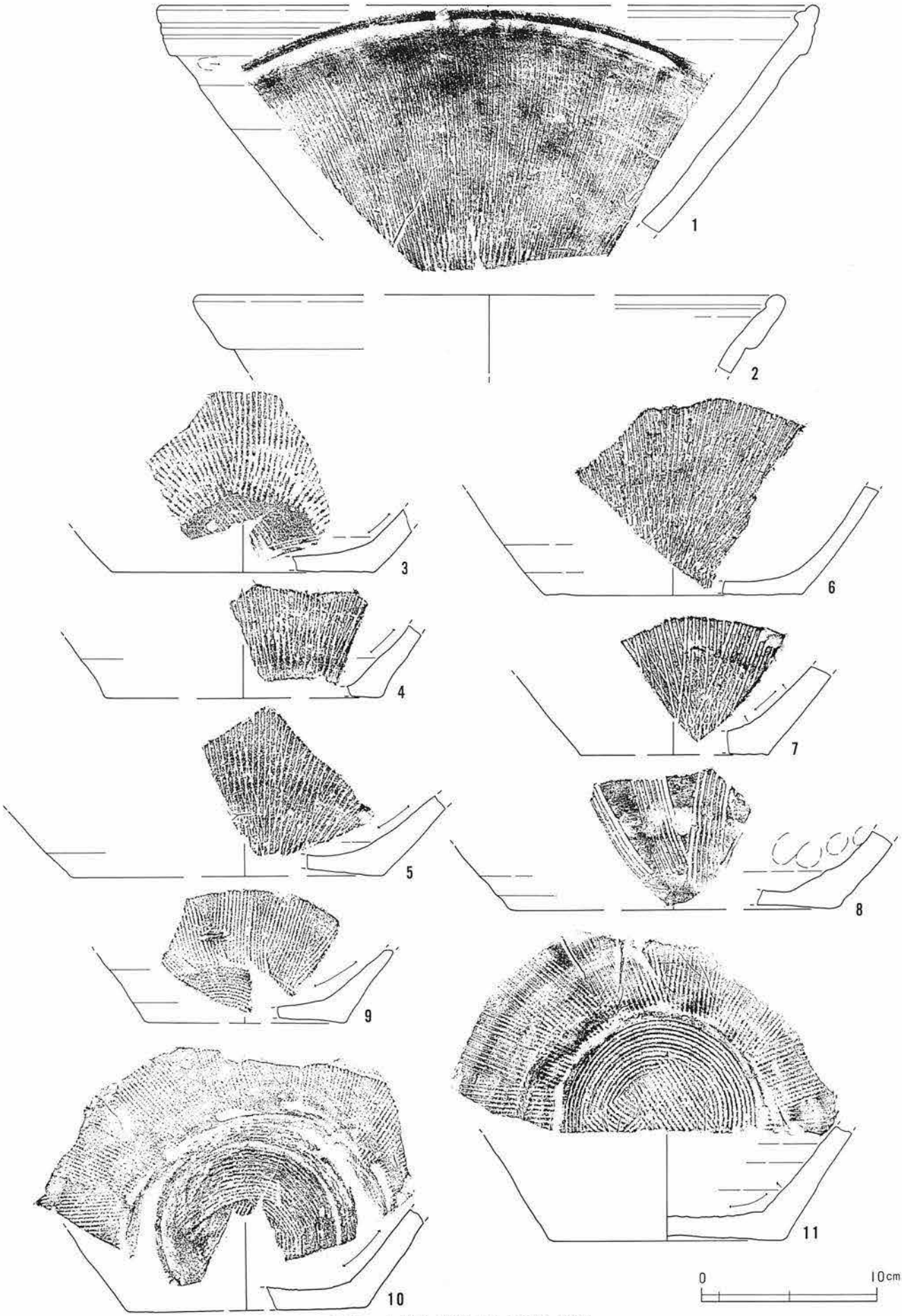


図41　水路北地業層出土遺物（3）

とを示している。地業面の造成はこの地域に家屋などの建物が建っていたことを指し、調査された地業面はそうした地域の、外れの一画であったと考えられる。

図39は土製品。5は黒砂、雲母片を混じえるかわらけ質の土製擂鉢か。内面は擂鉢状の擂目を持つが、使用による磨滅はなく、擂鉢として使用したものとは思えない。外底面は糸切り痕を残す。

図40～44は国産陶器。

図40―7は産地不明の甕。白色粗砂～小石と黒色砂を混じえる粘質灰黄色土。器壁は薄く、体部外面に粘土接合痕が残るほど調整は荒く、体部内面も中位から上方は指頭によるナデあるいは押さえにより調整されるが、下方は何の調整も行なわれない。器表は、外面は赤茶色、内面は灰黄色を呈する。図40―8～9と図41は擂鉢。瀬戸美濃系擂鉢は18世紀代の年代を与えられる。本遺跡地から出土した擂鉢の生産地は出土量の多い順に、瀬戸美濃系、備前系、信楽系、産地不明の4箇所になる。瀬戸美濃系は混入物の多いボソボソな淡黄白色土。鉄釉が薄く掛けられ、外底部は糸切り痕を残す。内面の擂目条線は交差することなく、条線1本一本が細い。備前系は白色微粒を混じえる赤褐色粘質土。内面の擂目条線は交差し内面全体に擂目がつくようになっている。信楽系は混入物の多い淡茶色粘質土。内面の擂目条線は太い。外底面は砂底。

図42―17～27は志戸呂あるいは美濃の灯明皿。受け皿はいぜん受け高が高く、錆釉が施釉されたものである。一方、上皿は鉄釉が施釉されたものが出現してきている。

図43は美濃の施釉陶器。おおむね18世紀代の製品が中心である。9は御深井釉摺絵香炉。指頭押し込

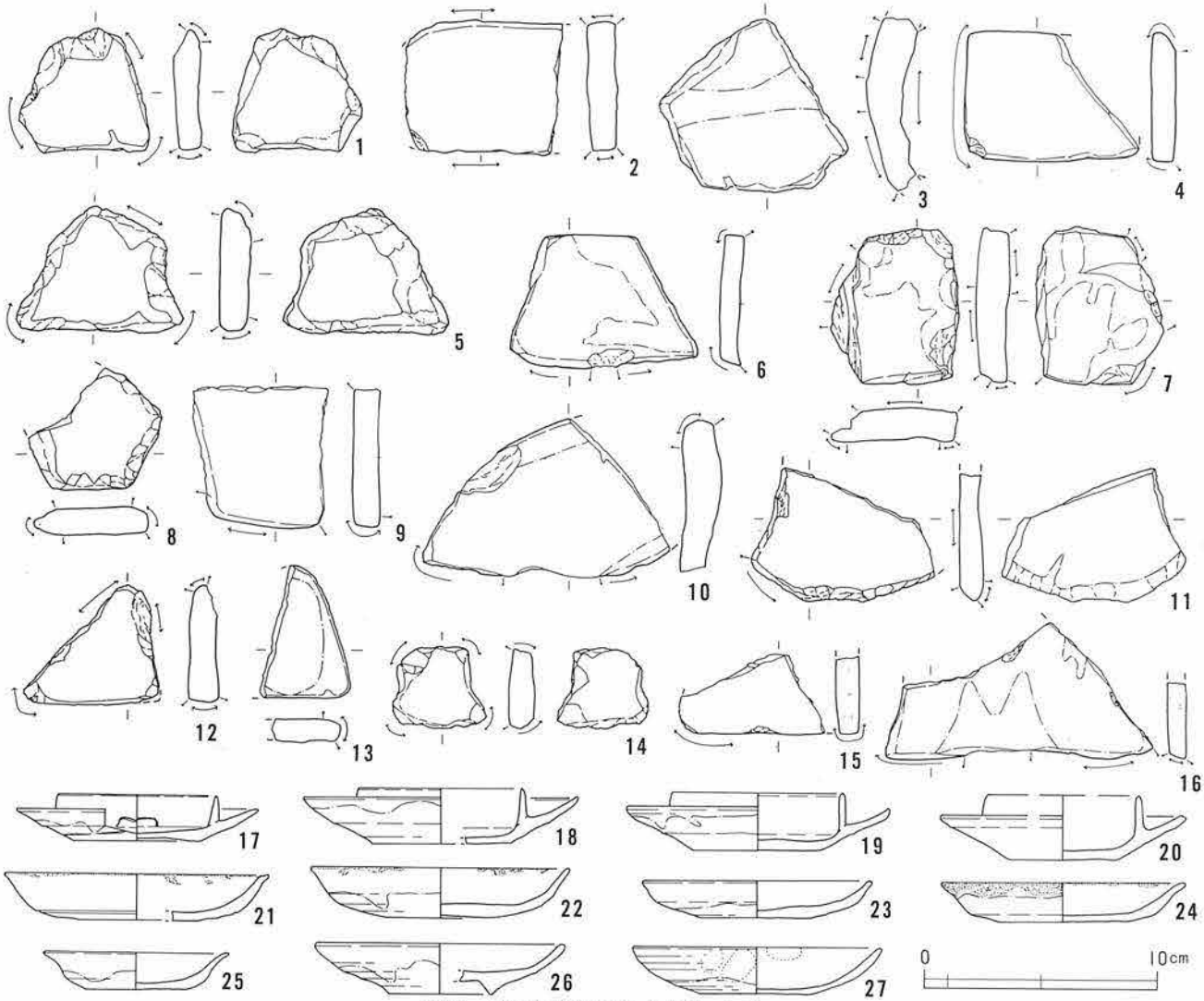


図42　水路北地業層出土遺物（4）

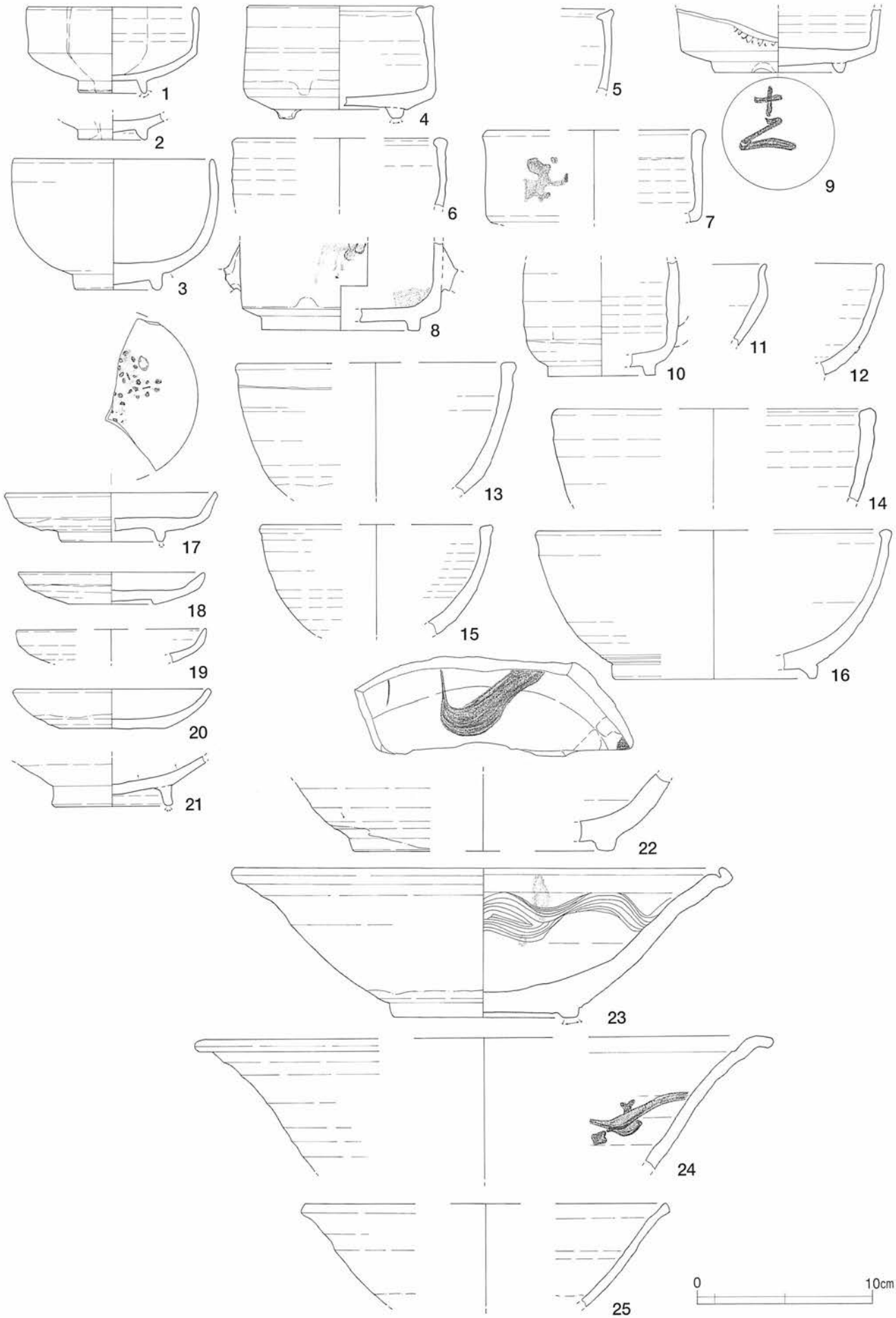


図43　水路北地業層出土遺物（５）

みによる高台装飾がある。また、底裏には墨書で「十二」が書かれる。施釉陶器の高台畳付が擦られているものが多く見られたが、その器種は碗、皿だけではなく香炉、鉢などにもおよぶ。これは生産地で行なわれたものなのか、消費地で行なわれたものなのか判断しかねる。昭和中頃までの、いわゆる露店の陶器屋では、客が商品を買う際に高台畳付の部分を滑らかになるように削ってくれていたという。これがいつ頃まで遡れるか、また他窯製品あるいは染付にも同様の擦り痕が見られるのかを確認しえていないが、消費地遺跡としては大変興味深く今後の研究課題としたい。

図44は瀬戸、肥前の施釉陶器。1～3、7は14～15世紀代の製品。10～16は肥前内野山窯の掛け分け皿。10～12のような小型の製品が出現する。21～22は三島手皿。内面の文様は多彩になってくるが、象嵌は白濁釉の施釉が薄くなり胎土の色がすけはじめる。

図45－5～27と図46－2～16は肥前染付。碗類は18世紀中葉前後～後半、皿類は17世紀後半～18世紀前半頃の製品が主流である。碗の染付文様は次第に簡略化され、底裏の「大明年製」も完全に崩れてしまっている。皿類では、図46－1は舶載の明代の染付皿。見込みには簡略化された梵字とアラベスク様

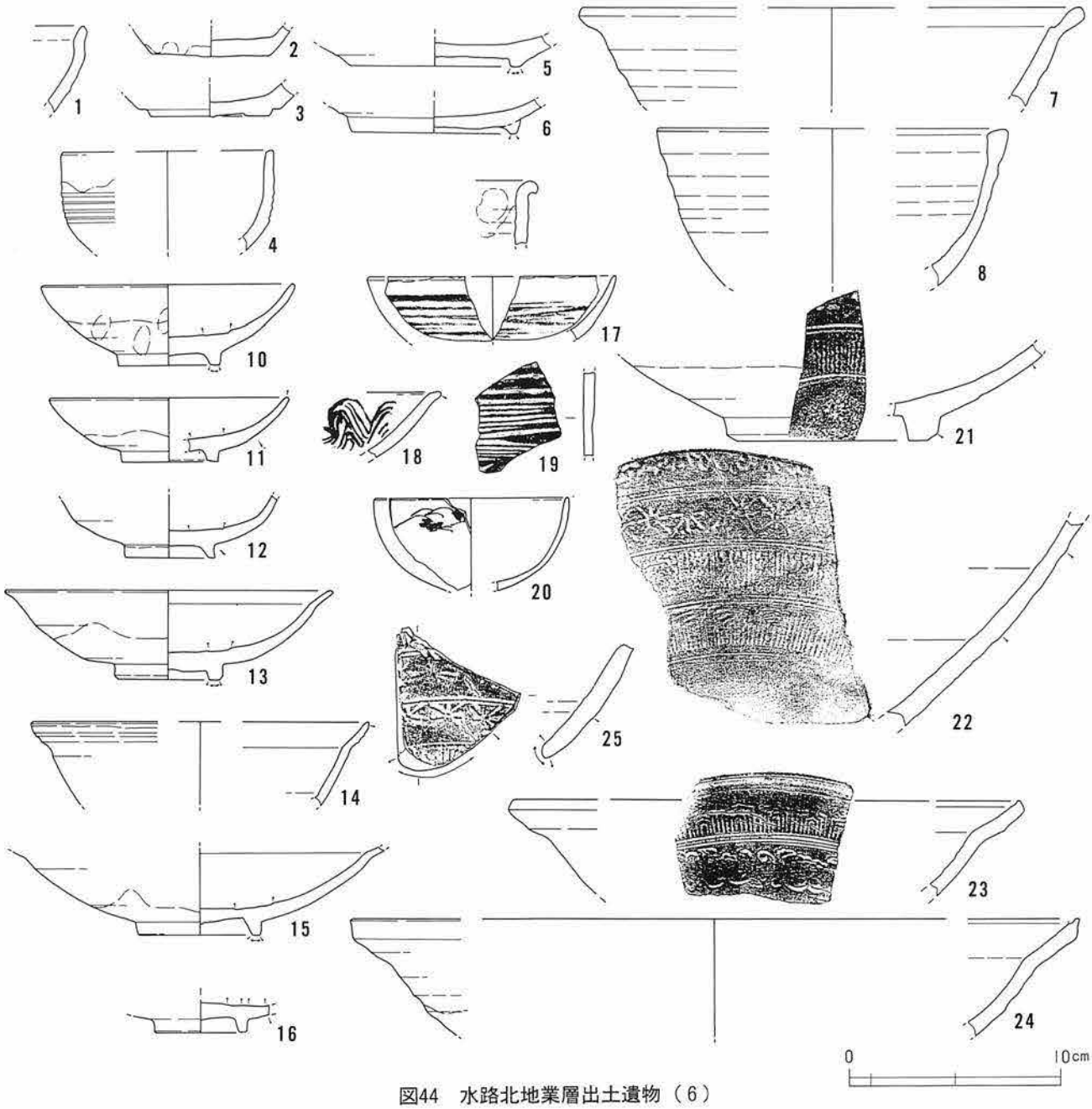


図44　水路北地業層出土遺物（6）

の文様が描かれている。4は内面に、高級品に使われたという白抜き線を描く技法の「墨弾き」による捻文が描かれる。7は水路1から同型・同文の製品が出土している。11の底裏は「渦福」文か？

18～20は煙管。腹部にツブレはない。22は包丁、17はその柄。25は刃物。木製の柄が残ったままで出土した。先端部が欠損しているが、あるいは裁縫用の物断刀かもしれない。本遺跡地において出土した柄の握りの端部はすべて工具で切り出したままで、表面の調整は僅かに行なわれただけのひどく雑な作りであること、また刃物の出土種類も多いことから、包丁をはじめとする刃物類が家庭用品として浸透している様子を窺える。

26～29は砥石。26～28は鳴滝産と思われる。中世期の鎌倉市内遺跡において（特に浜地周辺の遺跡に多い）出土する砥石の産地は主に上野、鳴滝、天草の3箇所が確認されているが、本遺跡地より出土した砥石も同様である。しかし、その使用方法は中世のものと比べてひどく雑であるにもかかわらず、破損した段階で再加工し再利用している。また、本遺跡出土の砥石の大きさには一定の規格がありそうである。ただ、これらの砥石が本当に近世以降に産出され、使用されたのかはいまだ確認しえていないが、前述のように刃物類が多く出土するならば、それに伴って砥石の出土があっても全く不思議ではなかろう。

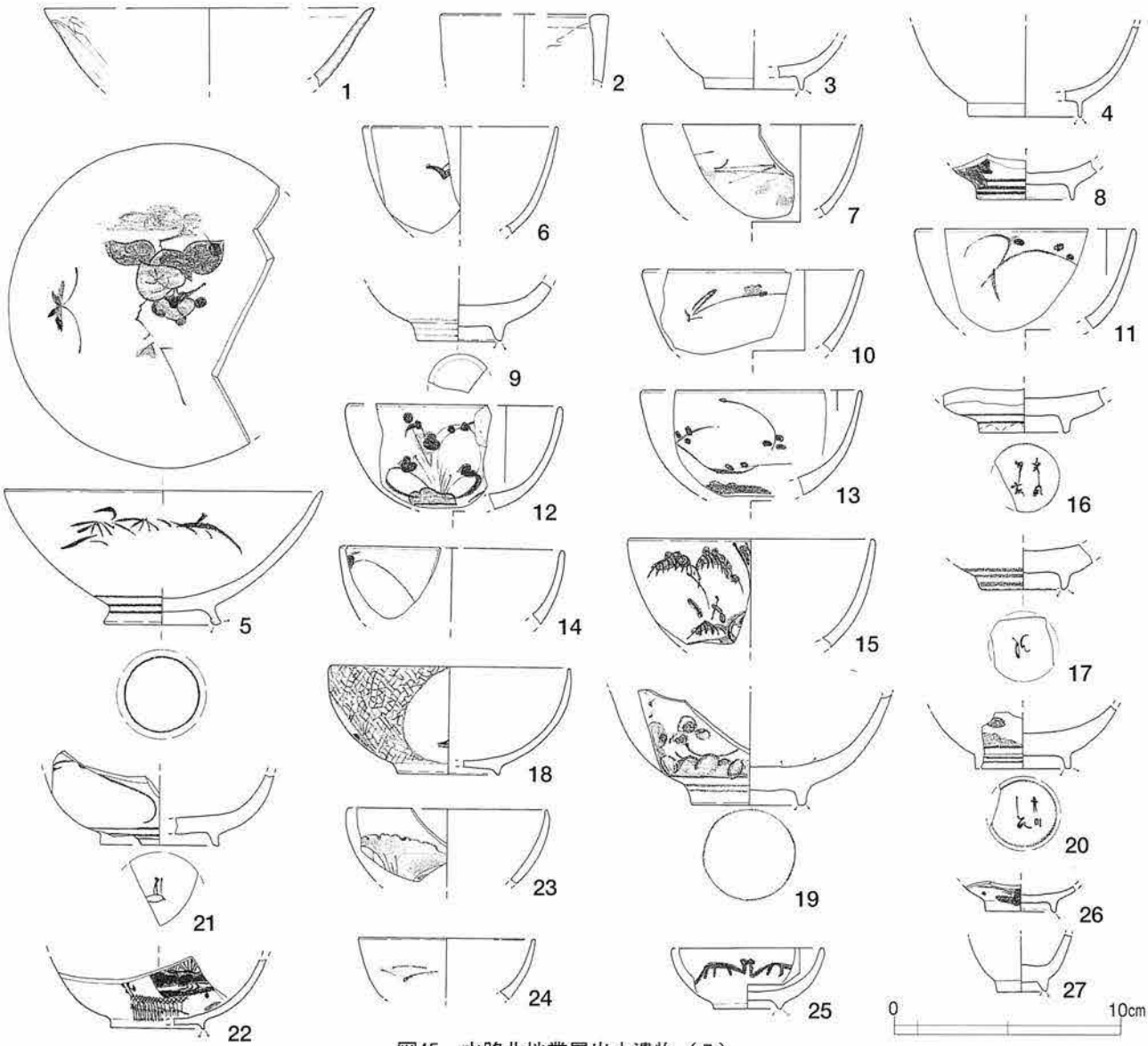


図45　水路北地業層出土遺物（7）

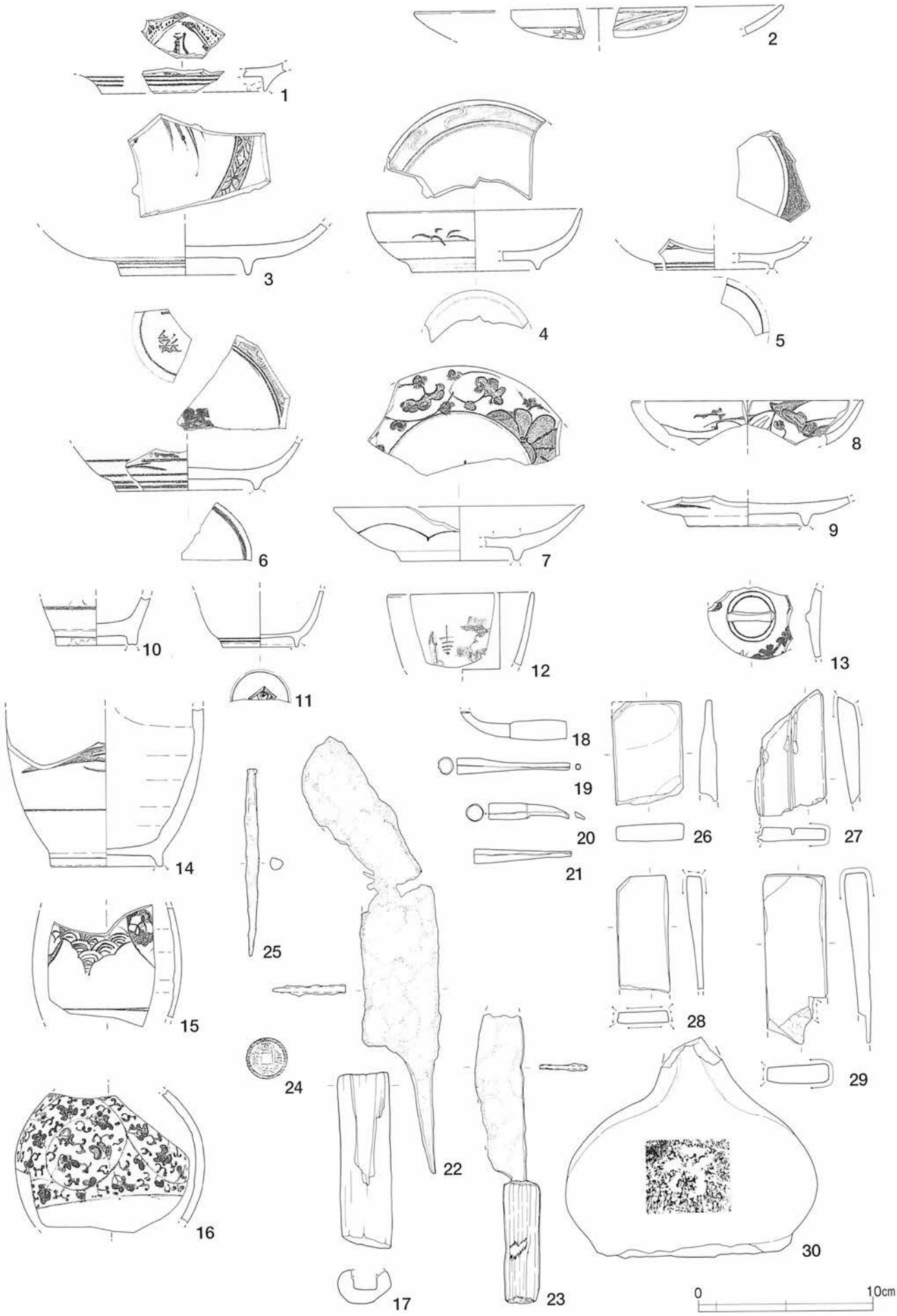


図46　水路北地業層出土遺物（8）

第3節　近代（幕末～明治、第2面）

近世を通じて営まれた水田は、江戸末期と考えられる時期に、遺跡地に隣接する長谷観音堂周辺遺跡（鎌倉市長谷三丁目41番イ地点）の近代遺構面の海抜高に合わせて埋立られた。水田埋立の後、遺跡地には三和土をもつ礎石建物が二棟建てられた。建物はいずれも現在の長谷寺参道に平行して立ち並んでいる。建物裏の井戸付近からは、幕末から明治初期のものと思われる燈明皿が発見された。また水路もこの時期に埋められ、遺跡地を迂回して、より西を流れる（相模国鎌倉名所及江ノ嶋全図、明治29年）。これらの建物は一度火災に見舞われるが、再度同じような建物が同位置に建てられたことが土層観察よりわかる（図4）。

建物1

調査区の南東に発見された礎石建物である。砂質土を挟みながら泥岩を交えた粘質土で、水田を埋立てた造成面に建物が建てられている。確認できた限りでは南北2間半、東西2間を測る。南東の隅に幅1間、長さ2間の三和土が残っているが、南と東の限界は調査区に確認されていないため、三和土と建物自体も南と東にさらに広がっているものと考えられる。礎石は安山岩と凝灰岩の比較的薄いものが三

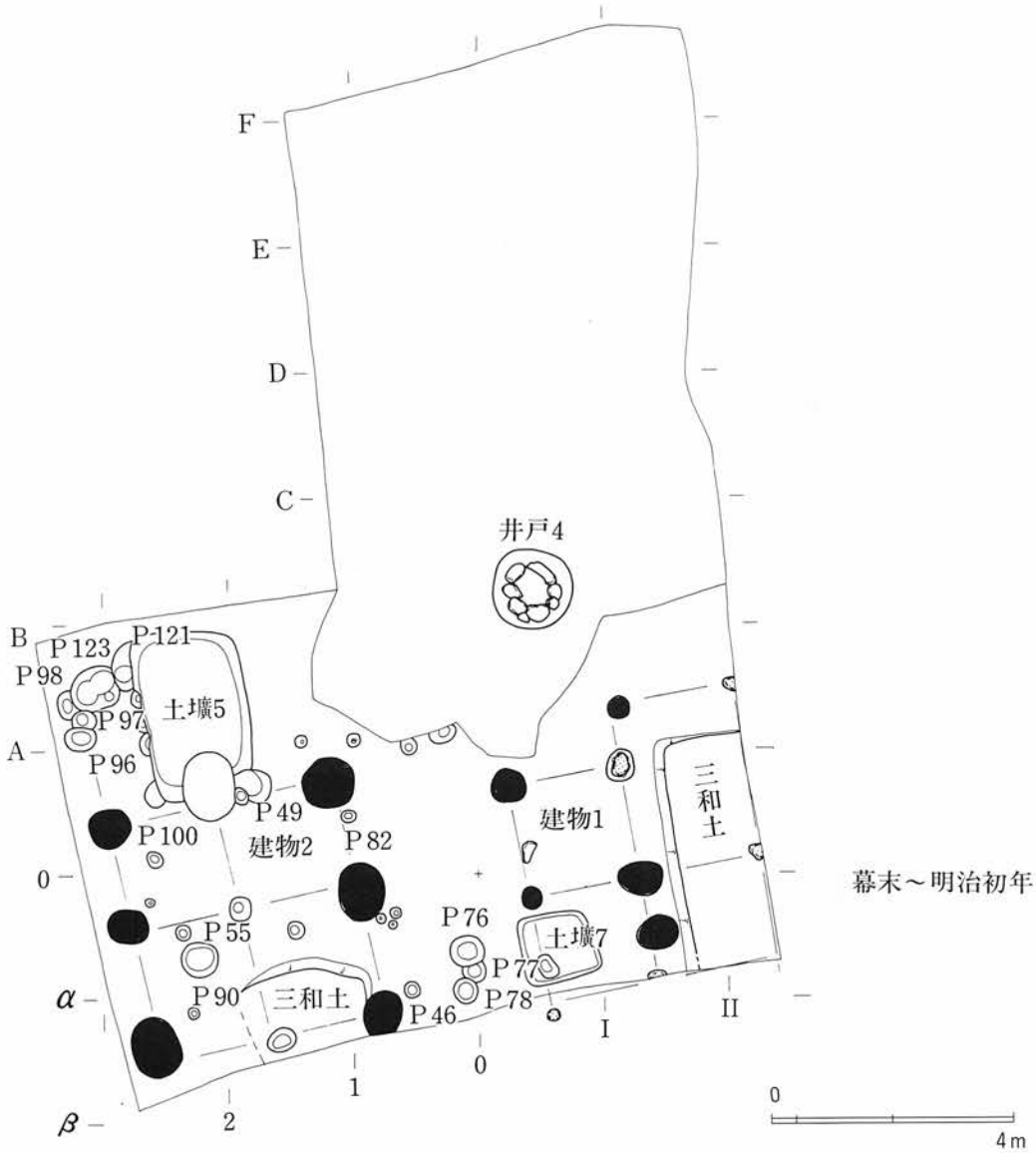


図47　近代遺構図1

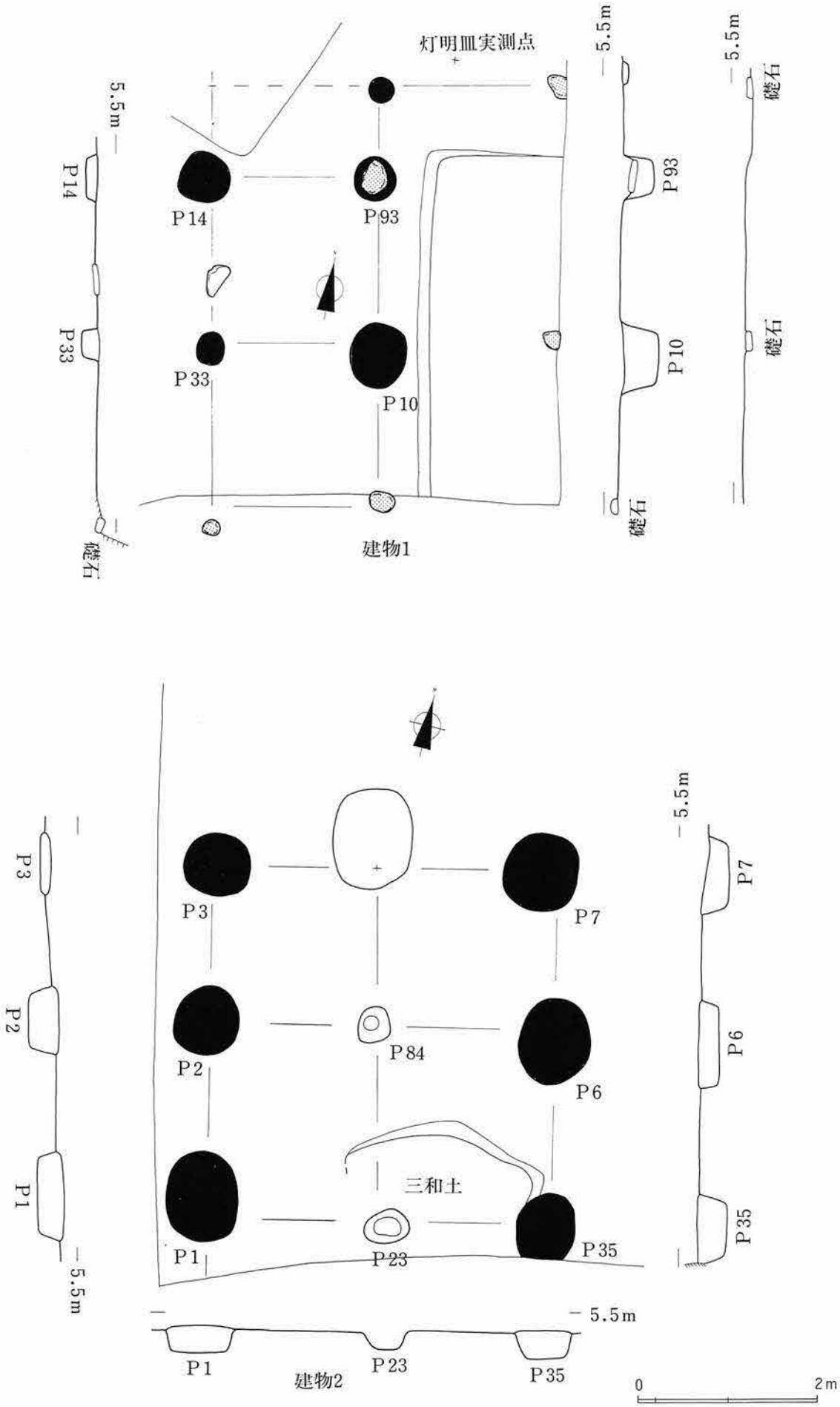

灯明皿実測点
5.5m
P14
P93
P33
P10
礎石
建物1
P3
P7
P2
P84
P6
P1
P23
P35
三和土
建物2
0
2m

図48　建物１、２

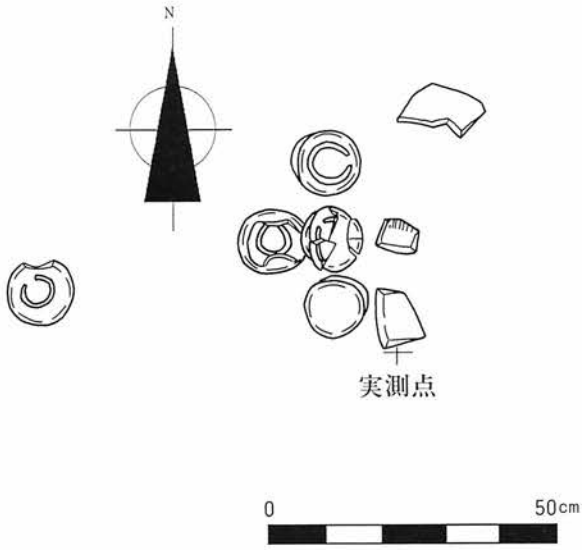
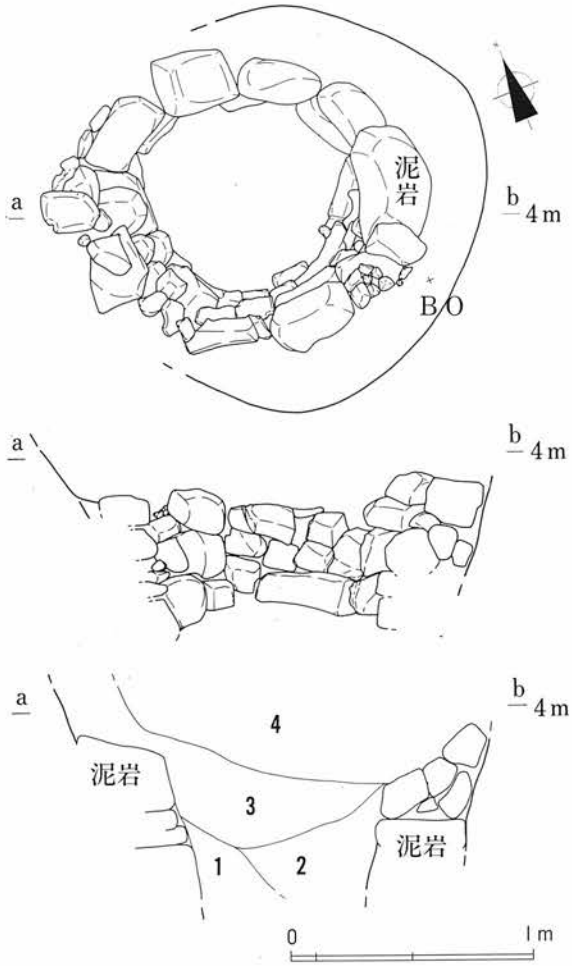


図49　灯明皿一括出土状況



土層注記
1.暗青灰色粘質土。
　海成砂を交じえる。
　水分多く、軟かい。
2.暗青灰色粘質土。海成砂のほか、3cm大泥岩片と木片を交じえる。
　粘性やや強し。
3.暗青灰色粘質土。粘性強く、やや堅い。5cm大泥岩片を多量に交じえる。
4.暗灰褐色土。泥岩粒。小石、貝殻粒を交じえる。

図50　井戸4

和土の周囲に残っており、他の柱位置には泥岩を破砕して付き固めた柱の根固め土壙が発見されたのみで、礎石自体は残っていなかった。そのため、柱間隔は判然としないが、根固め土壙の中心を測点にして測るならば、1.7～1.8mを測る。建物北端の半間部分の間隔は90cmである。ちなみに、調査区の南壁面に位置している2個の礎石は調査区の表土を重機で掘削する際に、重機がこれらの礎石を引っ掛けたためにやや南に動いてしまっていることを記しておかねばならない。調査区の東壁面にある礎石が凝灰岩、その他は安山岩である。

柱位置には礎石が生活面上に直接置かれたものと、土壙を掘ってから泥岩の版築が行われた根固めの2種類があるのだが、この違いは三和土の周囲の礎石が建物の構造状それほど重要でなかったためではないだろうか。後述の建物3、4の泥岩版築根固めとともに用いられていた礎石の大きさと比べて、建物1の三和土周囲に残っている礎石はかなり小さいことからも窺える。

さて、建物は北に半間の張り出しを持つ。この位置には凝灰岩の薄い礎石と小さく浅い版築根固めがある。建物の西の限界、P14の北にも半間の張り出しがあるかも知れないが、この部分は撹乱によって、確認できない。この張り出しは礎石と根固めの規模からも屋根を支える柱を受けるものではなく、軒の張り出しと考えられる。建物の北側は三和土の北端のラインに沿うものであったろう。三和土は建物のなかの通り抜けであったかも知れない。建物の南北軸方位は、S－10°－Eである。

三和土の北の張り出し部から外にでた地点に、灯明皿の一括廃棄跡が発見された。燈明皿は浅い窪みの中に、下皿と上皿が一枚ずつ組になって廃棄されていた。廃棄された状態は、下皿が上になるように重ねられていたが、出土した灯明皿にの中には土圧でも壊れずに残っていたものもあり、廃棄された当時は完形品も多かったと考えられ、灯明皿の意図的廃棄と考えられる。

建物のさらに北に、泥岩を井戸枠に用いた丸井戸が発見されている。井戸の上半分は壊され、また湧

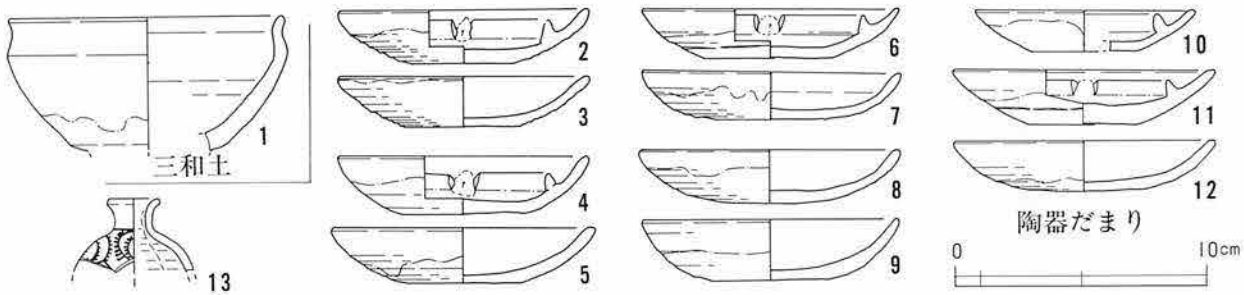


図51　建物１　出土遺物

水も激しく井戸底までを確認できなかったが、井戸下方の一部を調査できた。井戸枠になった泥岩は板状に切りだされ、形状も丸い井戸に合わせて湾曲している。泥岩の積み上げは５段までを確認した。井戸枠の上方は補修も加えられたのか、上ほど泥岩の積み上げと石の成型が乱雑になっている。掘り方直径1.6m、井戸枠内直径90cmを測る。

燈明皿は上皿と受け皿の最低４組セットを確認した。いずれも美濃製品だが、胎土はよく水簸された淡黄白色粘質土にツヤのある鉄釉が施され、上皿も受け皿も体部外面中位から下方にかけて拭い取りが行なわれる。また、受け皿の器型は先行期までと大きく異なり、受け径は口径より低くなると同時に法量値も一定化してきているのが特徴である。

建物２

調査区の南西部、建物１の西側に確認された。建物１と同時期に同じ土で水田を埋めて生活面が作られている。建物１との間にはいくつかの柱穴が開いているが、柵や塀を形作るようには並んでいない。建物１と２の間には２ｍほどの空間地が残っている。

建物は確認できたかぎりで、東西２間、南北２間の規模をもつ。東にはこれ以上大きくならないと考えられるが、南と西には広がる可能性がある。南東隅にある三和土がP23より南の調査区壁面にまで続くため、南への広がりは確実であろう。北には土壙６のほかに小さな柱穴が数多く位置しているので、廊下状の張り出しが北へ広がるかもしれない。建物１の敷地が最低でも井戸４まで北に広がっていることを考えれば、ありえないことではない。ただし、Ｐ７の北に柵状の穴が並ぶため、建物の北東部はここが限界であろう。建物の南北軸方位は、S－12°30′－Eである。

柱はやはり根固めを行ってから立てられている。泥岩を破砕して付き固めた上には礎石が一つも残ってはいないが、先の建物１と同様に根固めの上に礎石を据えてから柱が立てられたものと考えられる。柱の間隔は1.8mを測る。根固めは、南北には１間間隔に、東西は２間の間隔をもって作られている。東西２間の間には小さな柱穴が穿たれているが、根固めのなされた位置に立つ柱より小さな床束が立ったのであろう。このままでは棟持柱が立たないため、やはりより西へと建物は広がると考えられる。

図52―２は美濃灰釉皿。見込みには直径７cm程の重ね焼き痕が残る。３は肥前内野山窯の掛け分け皿。同時期の製品と比べて口径値が大きく、口縁部の折り返しもきつい。また、胎土はボソボソでしま

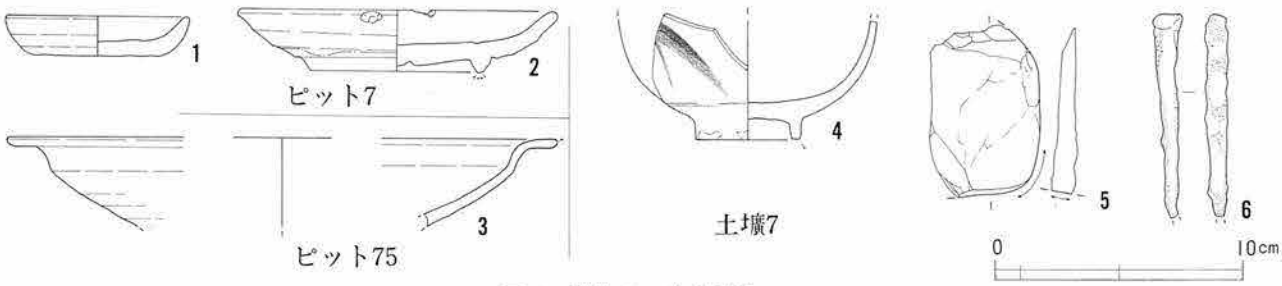


図52　建物２　出土遺物

りに欠ける。

その他の遺構

土壙５

建物２の北に位置している。南北1.7m、東西1.6m、深さ20cmの断面箱型の長方形を呈する。内部には砂質土が堆積していた。土壙の西の方には多くの小さな穴が並んで掘られているが、土壙に伴うものでなく、土壙より古い時期のものである。

図53－３は常滑の甕。中世の製品とは異なった口縁部断面形を呈する。４、５は瀬戸染付。瀬戸窯の染付が大量生産に成功して盛んに焼かれるようになったのは1820年頃、そして江戸では幕末には瀬戸染付が肥前染付を凌駕する。第４節で後述するように、本遺跡地での出土様相もそれを十分に裏付けている。11は肥前志田窯の染付輪花皿。割れ口断面には焼継による補修痕が残る。江戸後期になると大消費地には欠け茶碗を継ぐ「焼継師」が出現し、重宝がられた。細破片は未だ確認しえていないが、本遺跡地出土の磁器は焼継による補修より、中世以来からの漆による補修が多いようである。

土壙７

建物１の南西に位置する、南北１m、東西1.2m、深さ40cmのやはり断面箱型の方形を呈する。内部

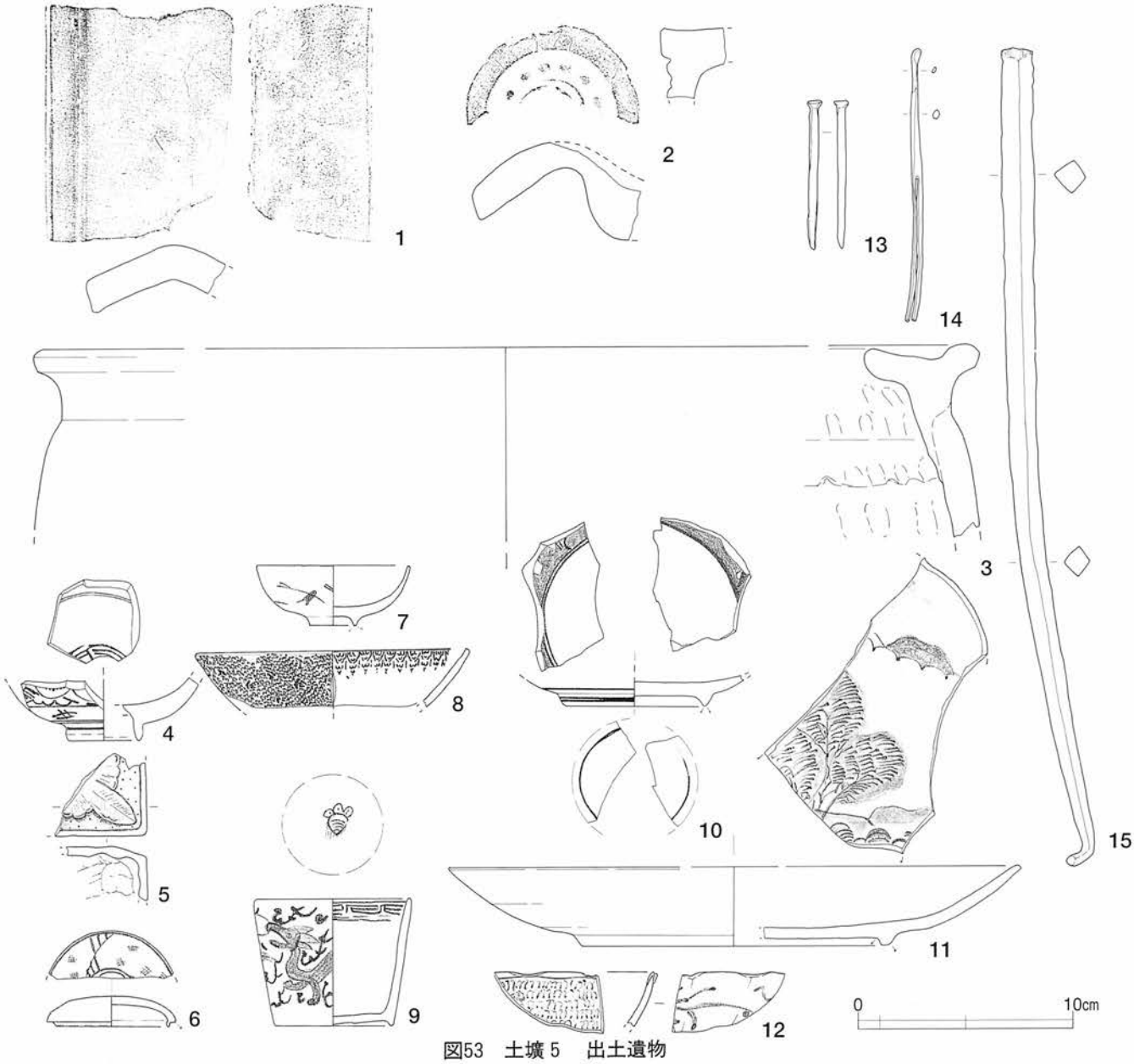


図53　土壙５　出土遺物

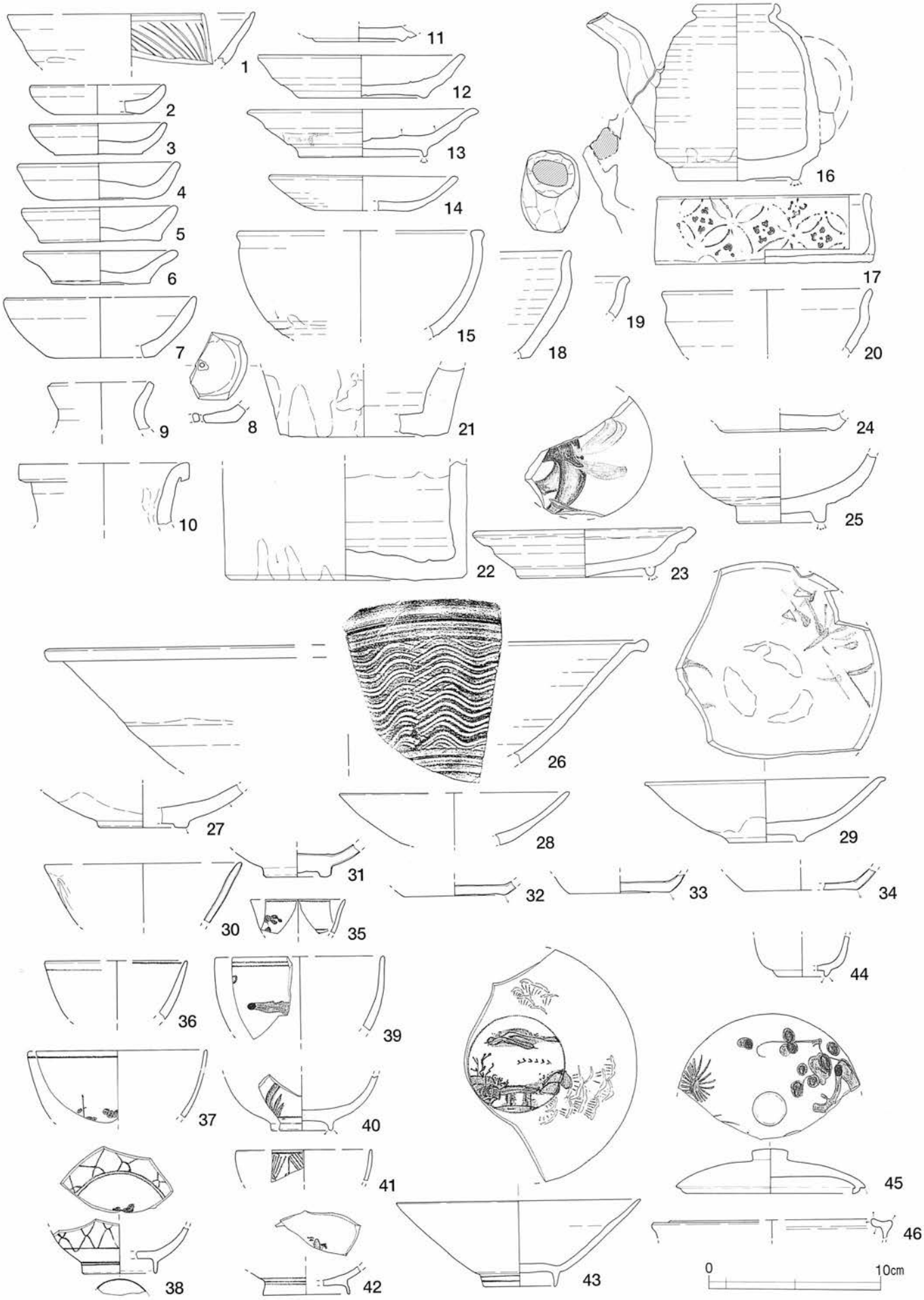


図54　生活面下出土遺物（1）

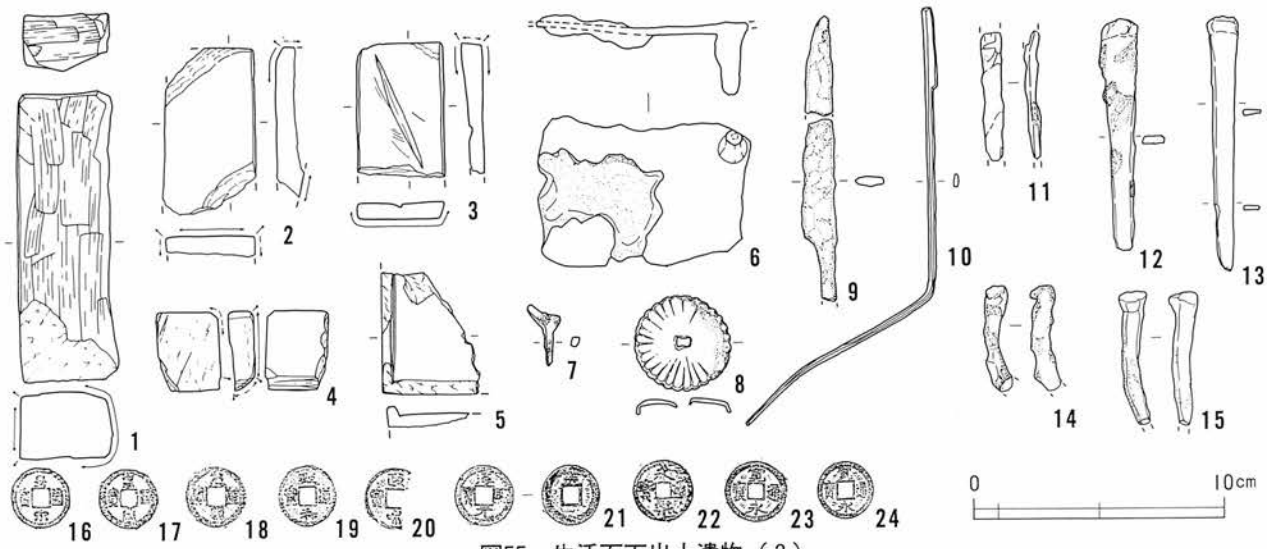


図55　生活面下出土遺物（2）

には一気に埋められた様に橙色の砂質土が堆積している。この土壙は建物1に伴い、建物内の地下貯蔵穴であろう。出土遺物なし。

生活面（第2面）下出土遺物

水田を潰して、上記の建物などの遺構が作られた生活面を造成した土のなかより出土した遺物を、ここで取り上げる。すなわち、近世の水田の土より上に乗せた造成土より出土する遺物のなかでも最も新しい時期の遺物は近代遺構面の造成時期を示していると考えられる。

造成のために、遺物の出土様相は古いものから新しいものまでいっしょくたになっている。

図54—12、13は美濃長石釉皿。鎌倉市内遺跡では、大窯～連房式登り窯初期の製品はきわめて少ないが、連房III期以降の茶陶生産が減少して日常雑器を生産しはじめた頃からの製品の出土量が急激に増加している。これは、現在調査報告書作成中の若宮大路周辺遺跡（長沢屋旅館跡地）でも同様の傾向といえる[2] 16は美濃灰釉水注。注ぎ口が破損した後、割れ口に鉛をつめこんで再利用している。なお、注ぎ口部と胴部は同じ図版に貼り込んでいるが、修理した胴部は近代面の建物3に帰属する遺構中より出土していることを付け加えておく。29は肥前の鉄絵陶器。見込みには砂目積みのための砂目痕が残る。30～34は南宋～元代の舶載磁器。35は明代末の舶載染付。43は肥前の型打ち染付碗。体部外面は型打ち成形後、カンナにより調整される。見込みは染付による山水文と6羽の雁が飛んでいる秋の風景か。内面は型打ち成形の際に一緒に打たれた松の文様が残る。

図55—1～4は砥石。1は上野産と思われる。左側面だけに磨滅痕を残し、残りの5面はすべて波状工具痕を残す。前述のとおり、この波状工具痕が原材からの切り出し痕なのか、破損後の再加工痕なのかは不明である。おそらくは破損後の再生加工痕であろう。2～4は鳴滝産。特に2は砥面に黒色斑点が入り、緻密である。4は硯製作途中に破損したために砥石に転用したと思われる。右隅を丁寧に面取りしており、このことは砥石では全く意味を持たないことから硯→砥石と考えるのが妥当と思われる。

年代を確定できたものの中で最も時代の下る製品は、図54—42と46の肥前染付製品でともに18世紀末から幕末までの間であることから、近代遺構面の造成時期もその頃と推測される。

生活面（第２面）上出土遺物

建物１と２の存続期間を示す遺物をここで取り上げる。

図56―１は中世期のかわらけ。全体に熱で吹き上がり、形もはげしく歪み、器表全体が黒色化しているところから、「とりべ」として使用されていたと思われる。２は坩堝。器表外面は熱により吹き上がり、内面は緑色を呈する鉱滓片が付着し、内底面ではそれが溶け込んで溜まっている。６は瀬戸系擂鉢。外底部はこれまでの糸切り未調整からヘラ調整へと変化しているが、口縁部が破損しており年代を判断しにくい。瀬戸系擂鉢で外底部を調整しているものは破片を含めてもこれだけであった。10は明代末期の舶載染付。素地は黒色砂粒をわずかに混じえる淡灰白色粘質堅緻土。染付は灰青色顔料による手描き文、透明釉は厚めに施釉され細貫入が入る。11～12は幕末～明治の瀬戸美濃染付。13～19肥前染付。13は網目が一部二重になっているが、これは二重網目文ではなく塗り直しによるものである。20は碁石。赤色泥岩を加工したものに黒色漆を塗って黒碁石に仕上げている。29～31は「寛永通寶」。30は背文に「元」とあり、いわゆる寛保年間（1741年初鋳）に大阪高津新地で鋳られた「元字銭」と思われる。31の背文は「文」。

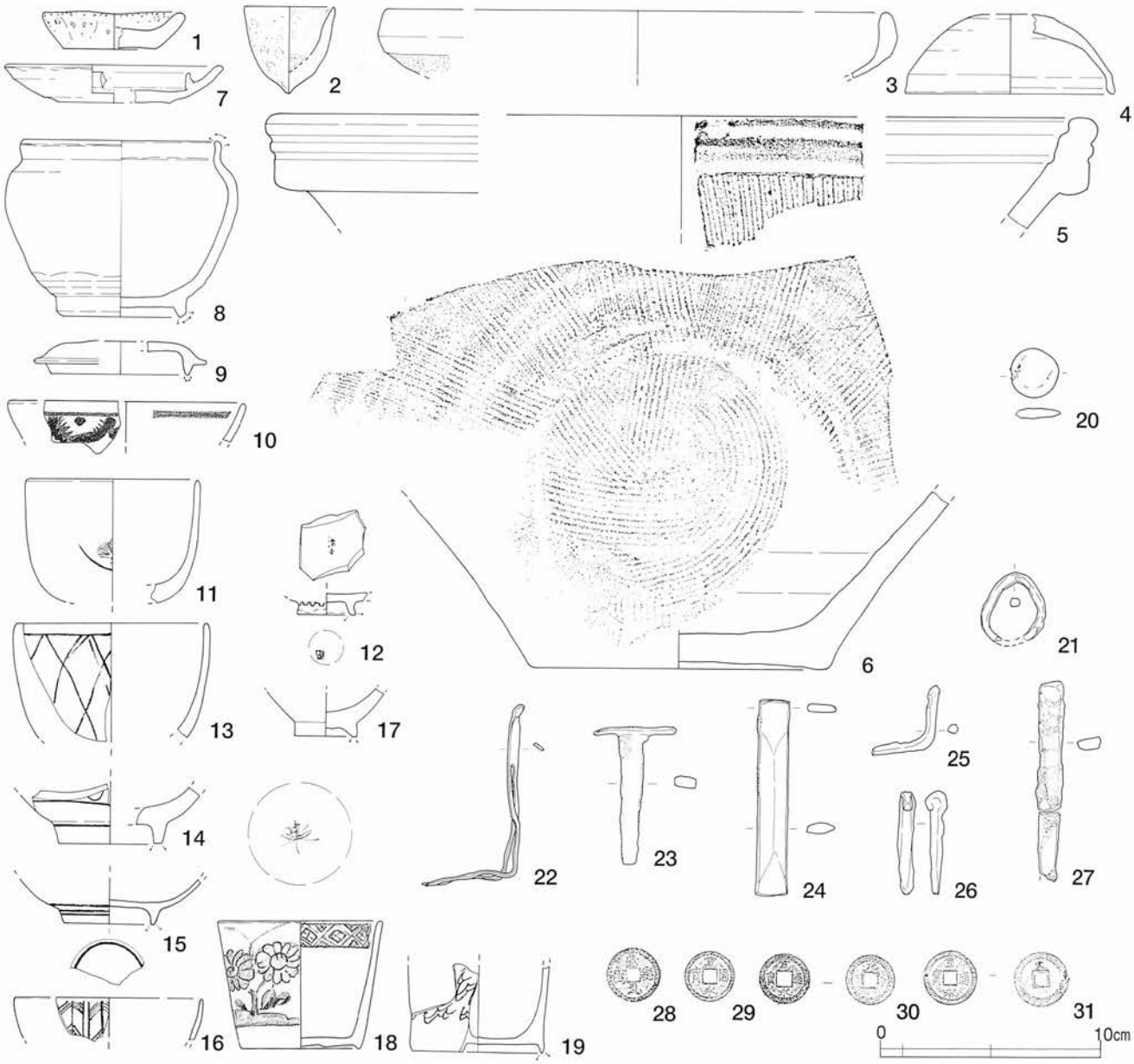


図56　生活面上出土遺物

第4節　近代（明治～大正、第1面）

明治の中頃から後半にかけてのある時期に、遺跡内の敷地利用が変わる。建物の向きはそのままに、それまでの建物の礎石を抜き取ってあらたな建物が少なくとも一棟建てられる。この建物は大正12（1923）年の震災で倒壊するまで存続し、その後に現存した建物が再建された。震災で倒壊した建物の創建時期は、震災のあとかたづけに利用された便所穴から出土した日清戦争戦勝祝い絵皿と瀬戸産の染付便器がおおまかな年代指標となる。

建物3

以前建物1が建っていた付近に少し西へ礎石の位置を移動し、建物3が建てられた。建物1の建替えと考えられる建物3は、建物1を取り壊した後にほとんど土盛りをしない、簡単な整地作業だけ行って建てている。この建物の柱もやはり泥岩の版築根固めの上の礎石に建てられているが、版築を取り除いて根固めの柱穴を観察することで、建物3が2度にわたって建替えられていたことが判明した。

水田の上に盛り土をして造成された近代遺構面はやはり軟弱であったと考えられる。建物3を構成する根固め柱穴の一つであるP16の断面図を図59に掲げた。この断面図からは、この位置に立つ柱は当初

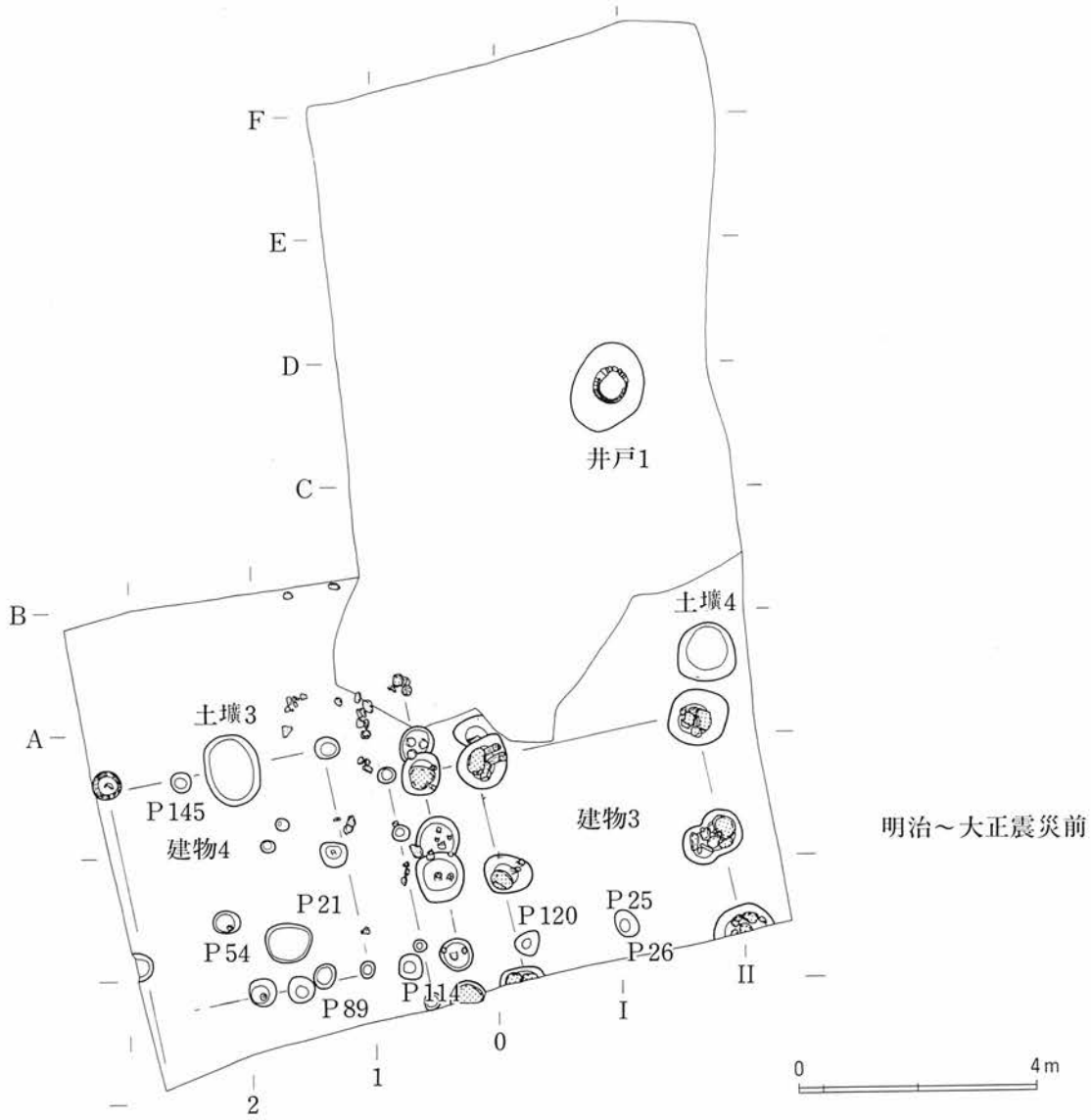


図57　近代遺構図2

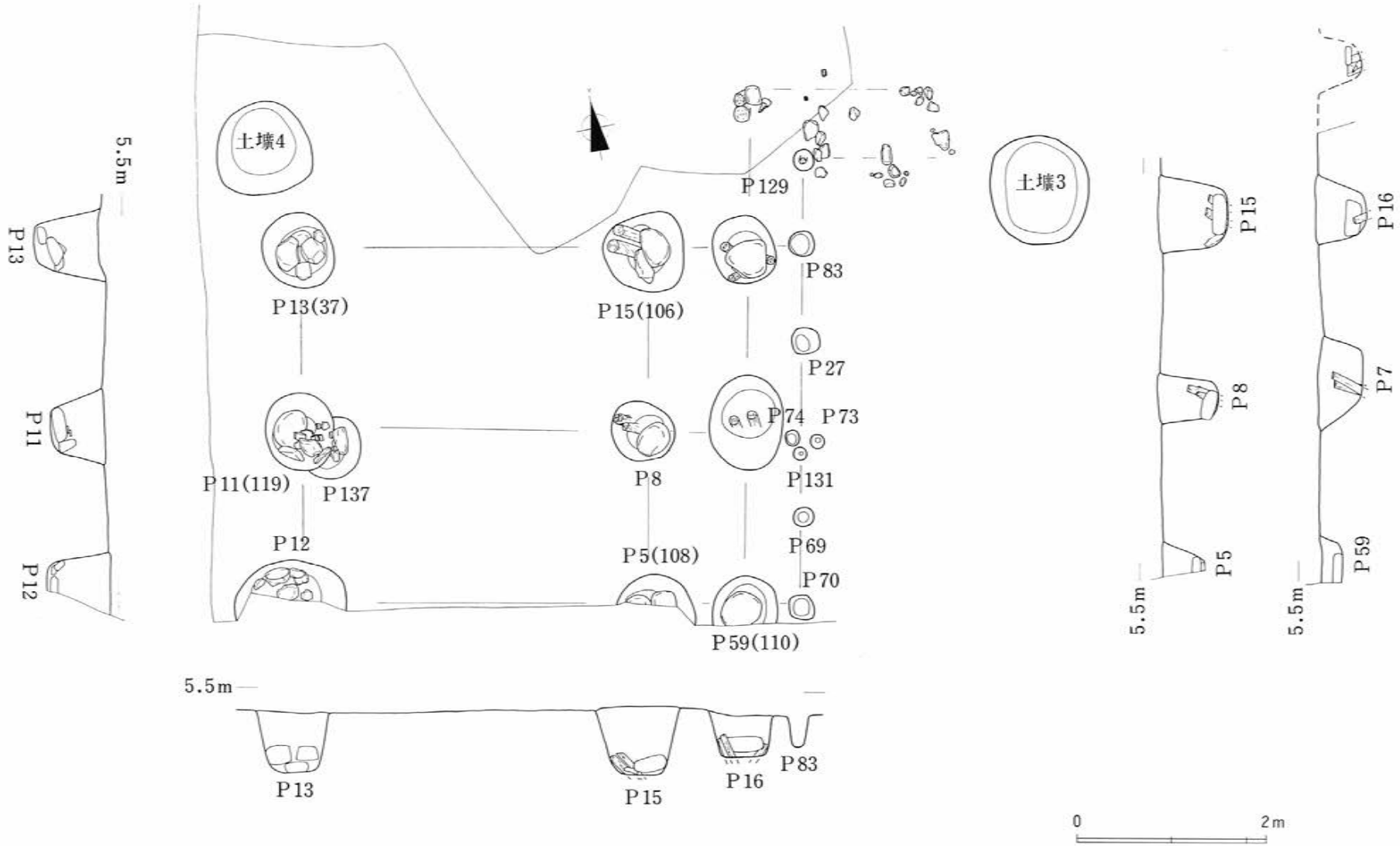

土壙4
土壙3
P129
P83
P13(37)
P15(106)
P27
P74
P73
P11(119)
P137
P8
P131
P12
P69
P5(108)
P70
P59(110)
P13
P11
P12
5.5m
P15
P16
P8
P7
P5
P59
P13
P15
P16
P83
0
2m

図58　建物 3

柱穴の中に打ち込んだ赤松の杭の上に据えた安山岩を礎石にしていたが、軟弱な地盤のために杭は斜に倒れながら沈み込み、礎石は杭から落ちてしまい、柱も礎石から外れたであろうことが観察できる。この後、柱穴は杭と礎石を根固めのために残して大型の泥岩を交えながらの版築の根固めに変更された。この根固めに立つ柱の建物は次に火災に会い、消失したことが版築上面に残る焼土より窺われる。この後に、再度焼土の上に破砕泥岩の版築を行い、礎石を据えて建物を再建したのである。この2度にわたる建替えはすべて同位置に柱を建て直す再建であった。また、建物1から3への建替えは、軟弱な地盤が影響していたのであろうか。

建物3は以上のように柱を安定させるために相当の苦労をしているが、建物の規模は先の建物1とさほど変わらない。調査区内に確認できた規模は、南北2間、東西2間半に廂が西側に取り付く。実際は東と南の調査区外へ広がる建物と思われる。柱の間隔は1.8mを測り、東西の柱は2間間隔に設定されている。廂の小さな柱穴だけは半間の90cm間隔に配置される。西の半間の張り出しは当初のものと再建時で多少位置を違えているが、東西の柱通りの延長線上にある縁であろう。この張り出しは掘り方を発見できなかったものの、根固めの杭と礎石が残るだけの柱位置にまで廂と共に建物本体よりさらに半間北に延びる。ここから西へ90°に曲がる通路が土壙3に導いている。土壙3は、南北軸長1.1m、東西軸長1m、深さ50cmを測る。規模、配置、出土

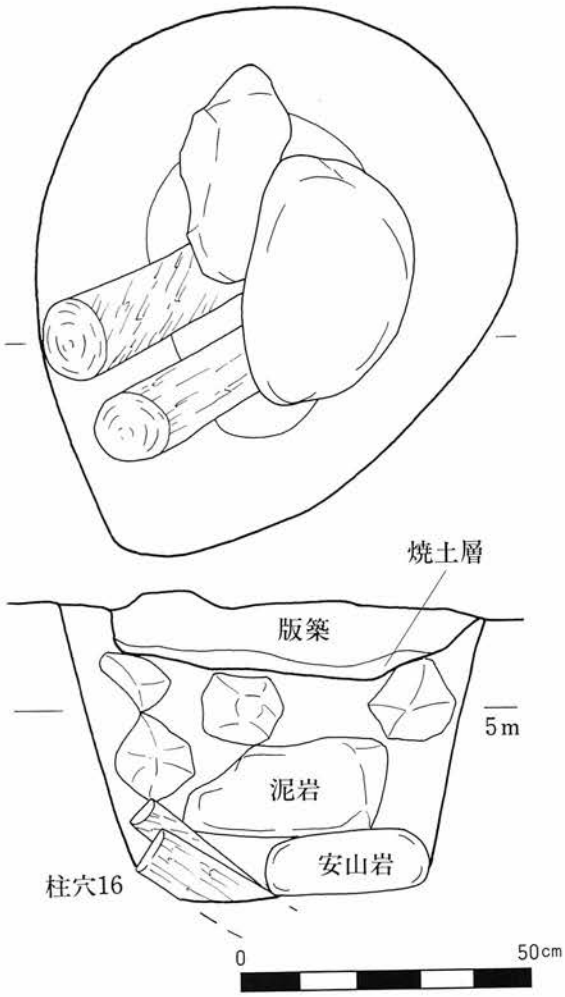


図59　礎石根固め

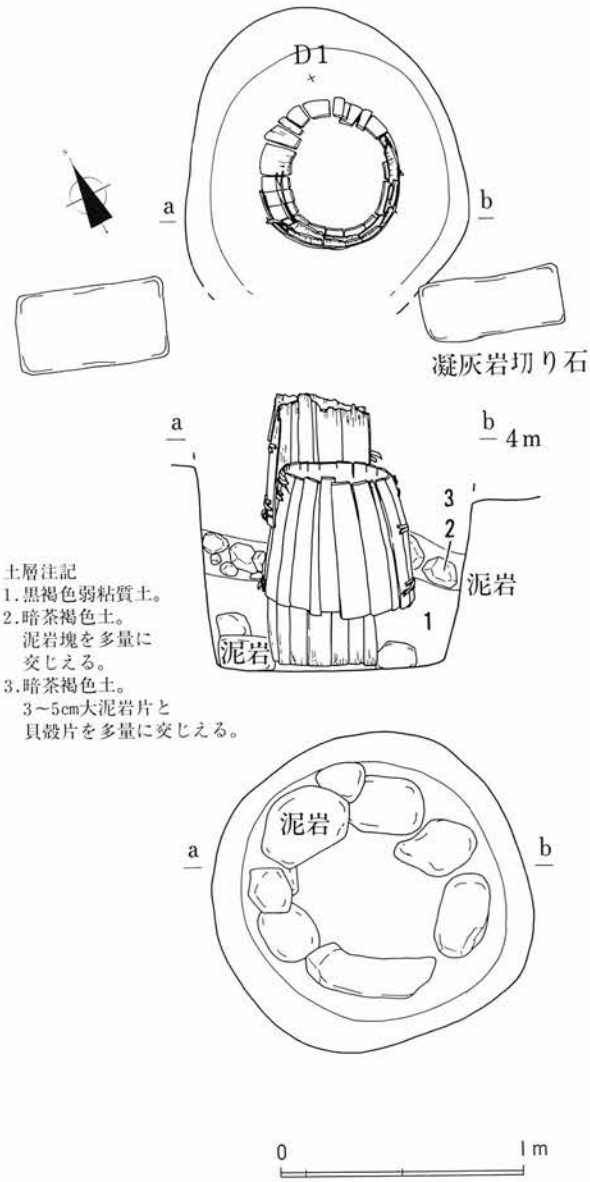


図60　井戸1

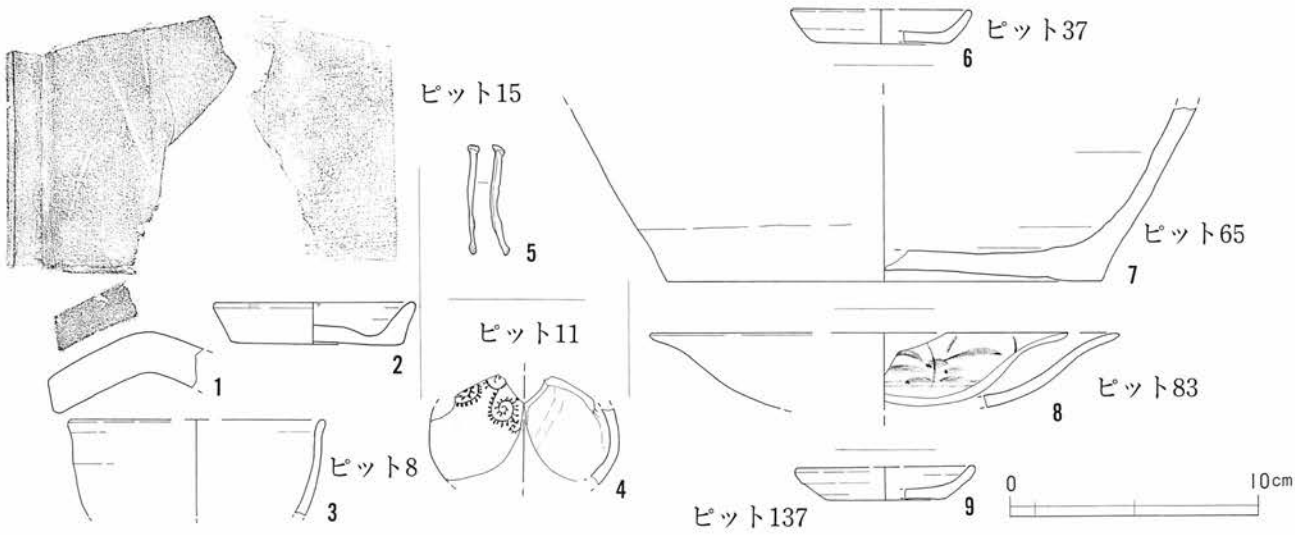


図61　建物３　出土遺物

遺物から、この土壙３は便所であっと考えている。南北軸方位S－12°30′－Eの建物３の敷地は、建物のさらに北に広がっている。この北側部分は先に記したように撹乱されていたために調査区東壁面に残る土層観察から、建物３の北に生活面の柔らかい裏庭があったことを確認した。この裏庭に深い掘り込みの井戸１が発見された。

井戸は近世の水路２を切って掘り込まれ、直径43cmの桶を重ねた井戸枠を設置している。掘り方は、確認した限りで直径1.1mを測る。深さ55cmの桶は竹のタガでとめられ、広口の方を下にして３段まで重ねられている。撹乱の入る以前にはさらに積み重ねられていたと思われる。掘り込みが水路の中であったことも手伝って、底面まで調査できた。井戸の底は中世河川を掘り抜いた海成砂にまで達しているが、湧水による砂の吹き上がりで桶の井戸側の沈み込みを防ぐように、泥岩を桶の口の下に並べている。

建物３が建てられたこの時期、調査区の西側、かつて建物２の位置していた場所には、直径30～40cmの比較的小さな柱穴がみられるものの、それらは明確な建物配置を示してはいない。簡便な小屋掛けの構築物があったかもしれないが、どちらにしろこの時期には主な建物は、建物３のみによる敷地利用に変わっていたと考えられる。

図61は建物３に帰属する遺物、図62は井戸１より出土した遺物を図示した。

図61－２は近世かわらけ。胎土は黒色砂、白針を多量に混じえる黄褐色粉質土。内底面にはロクロ目が残る。煤が付着していることから灯明皿として使用したものと考えられる。

図62は番号21と23を除いて井戸１の裏込めから出土しているものの、井戸が水路２を切っていたため、出土遺物は井戸の掘り込まれた当時の年代を充分に反映していないことを書き添えておく。１は常滑こね鉢。体部外面のヘラ状工具によるかきあげ調整は体部中位にまで及ぶ。体部内面中位付近は指頭による押さえで調整する。内面に使用による磨滅痕は残らず、降灰が残る。７～11は肥前染付。７はうがい碗。口縁端部に口銹あるいは口紅が施される。また、割れ口断面には漆による補修痕が残る。13は舶載呉須赤絵大皿。生産地は現在の広東省汕頭地方。素地は黒色微砂を混じえる明灰色強粘質土。内面は暗朱色を呈する呉須赤絵と深緑色顔料により上絵付けされる。高台端部から底裏にかけては鉄釉が施されるが、畳付を中心におそらくは乾燥の最中に付着したと思われる粗砂が付着する。19～20は赤間石の硯。中世鎌倉の浜地周辺の遺跡では硯石として加工されたものの破片が多く出土するが、製品の多くは黒色粘板岩製の硯で、赤間石の硯は現在までのところ非常に少ない。21は下駄。中世の楕円形のものから現在のような長方形に変化してきている。22～23は箸。先端部は細く削られていない。

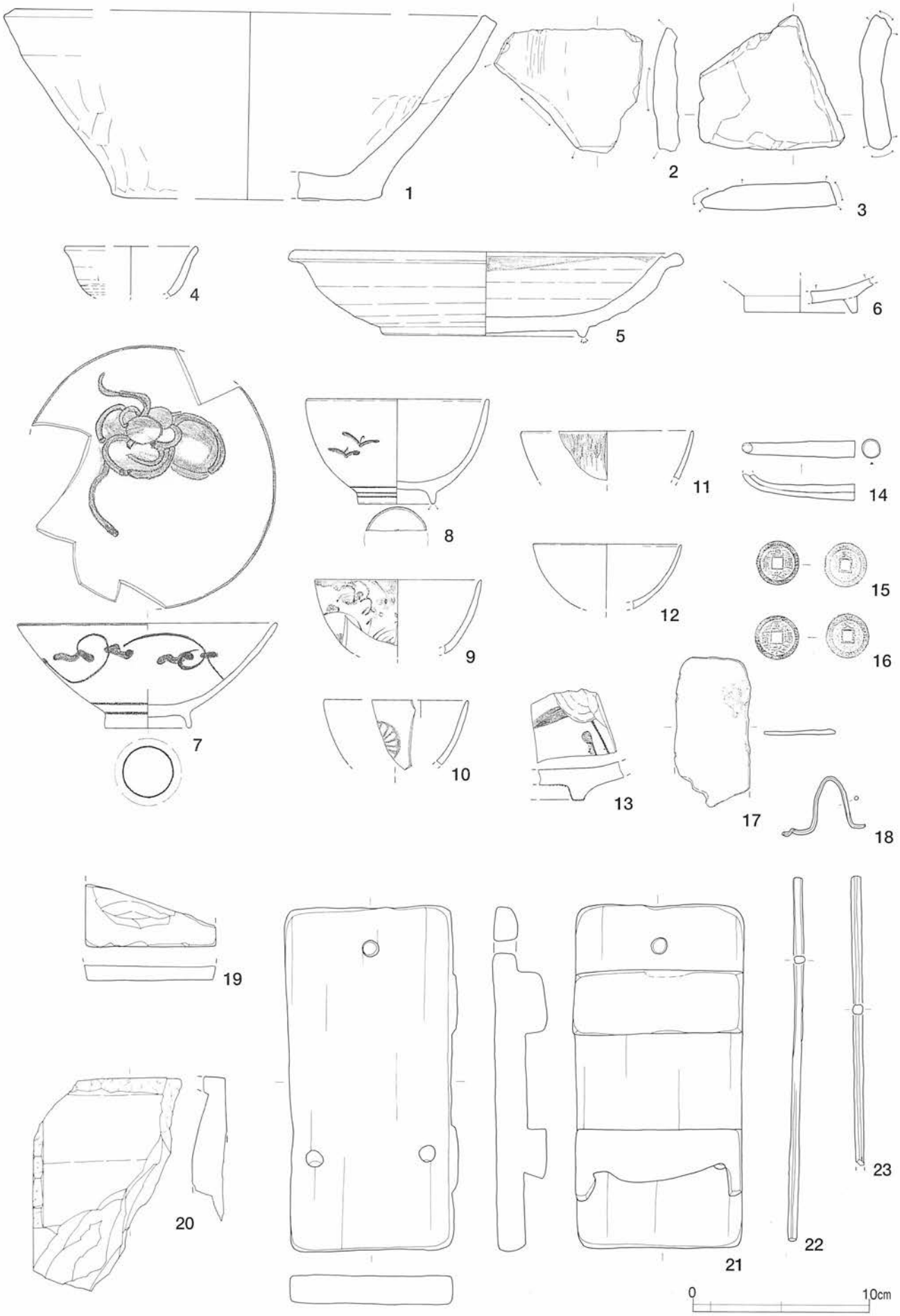


図62　井戸１　出土遺物

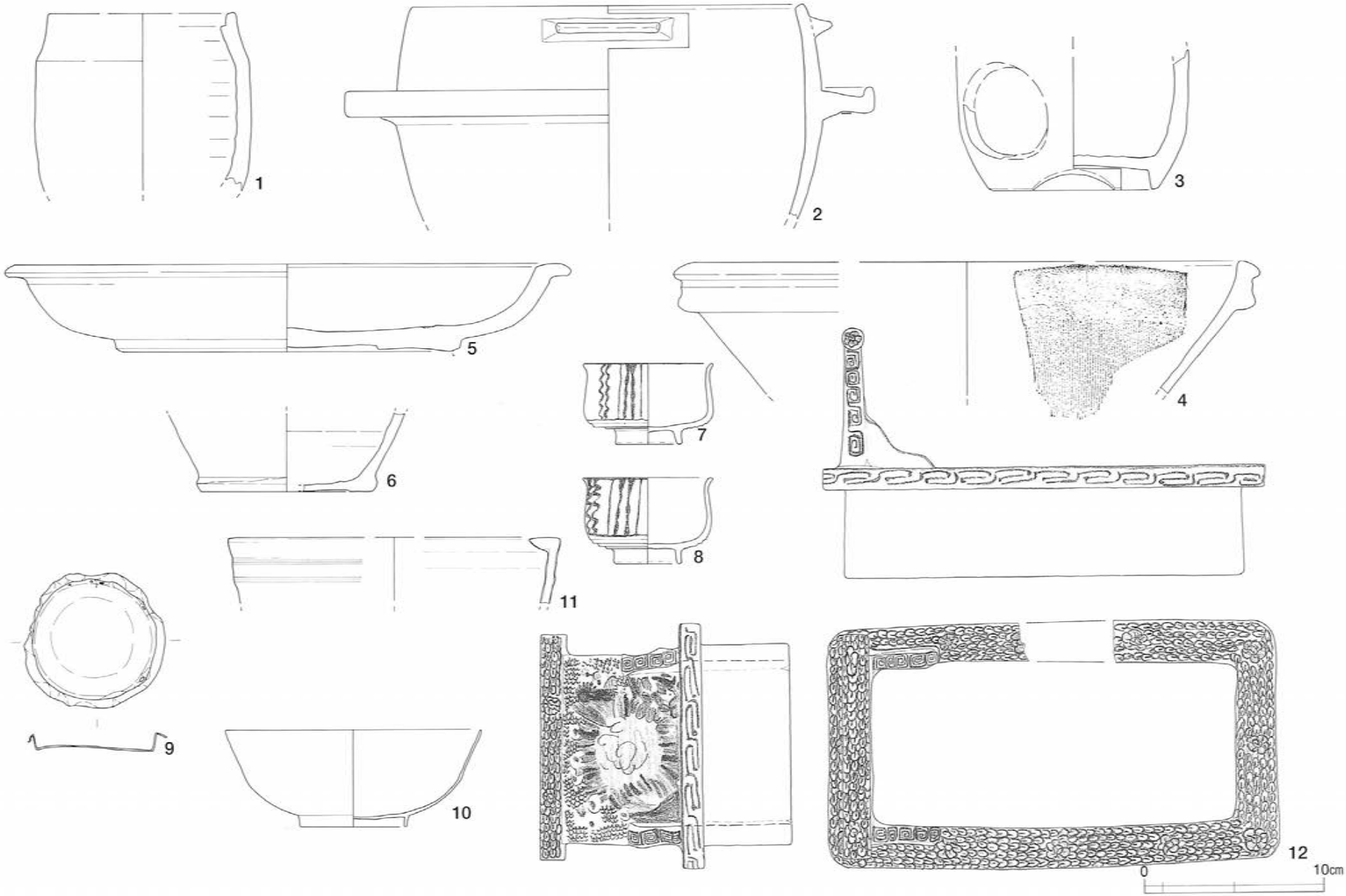


図63　土壙３　出土遺物（１）

図64　土壙３　出土遺物（２）

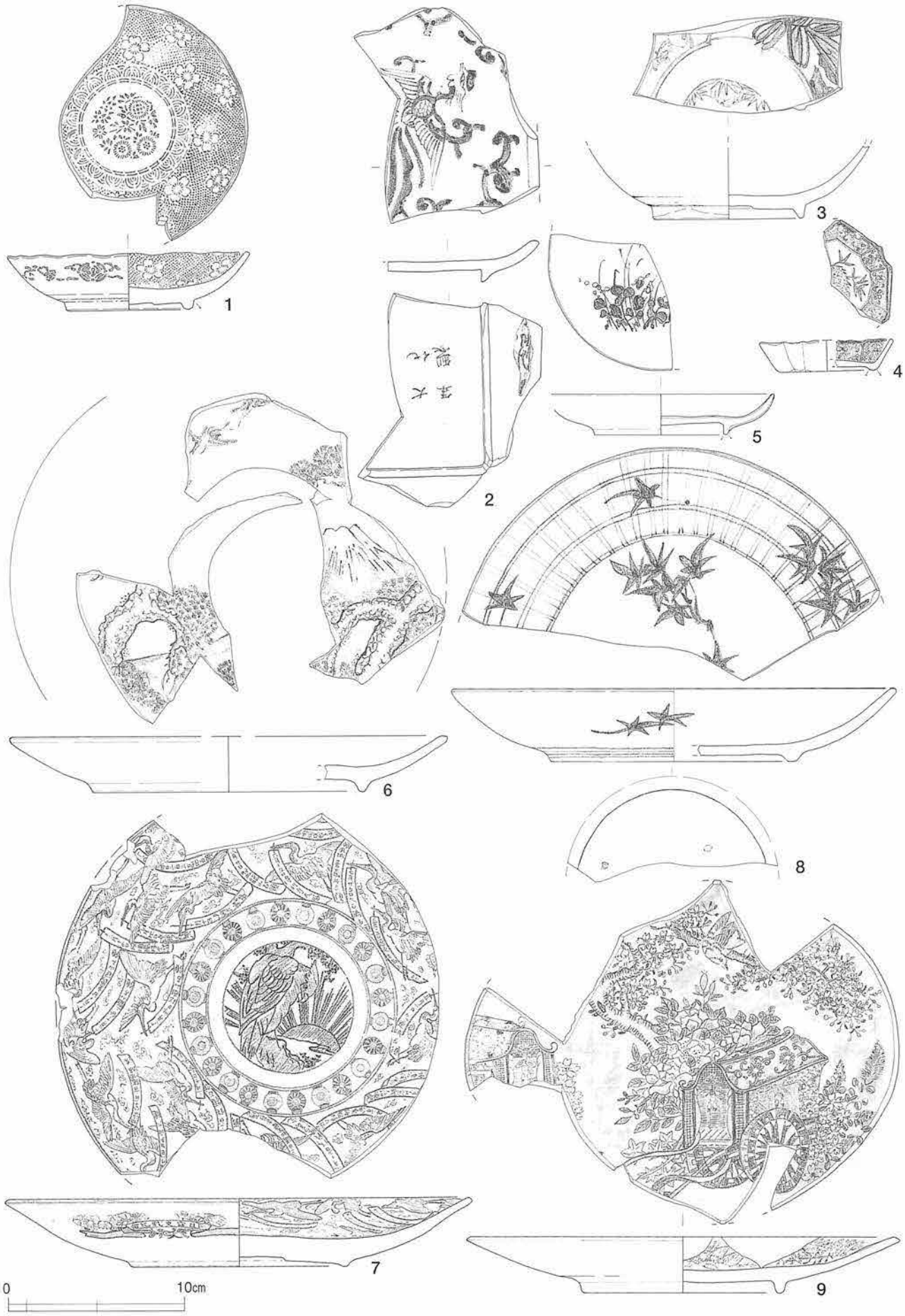


図65　土壙３　出土遺物（３）

土壙３出土遺物

建物３に付属した便所と思われる土壙３からは、大正の震災によって倒壊したと建物の後片付けで捨てられた遺物が大量に出土した。これらの遺物は、建物３の終末時期と存続時期中の遺物群の組み合わせを知るうえで良好な資料である。出土した遺物の大方が瀬戸美濃の磁器製品であり、陶器は２、３点にすぎないことも興味深い。

図63―10～図69―17は瀬戸美濃と関西、肥前の磁器製品。図63―10は瀬戸美濃染付便器。土壙３が建物３に付属する便所と考える遺物のひとつである。他にカルシウム塊も共伴する。

図64は瀬戸美濃の染付あるいは色絵碗。碗はそれまでの肥前染付を中心とした出土磁器の様相とまっ

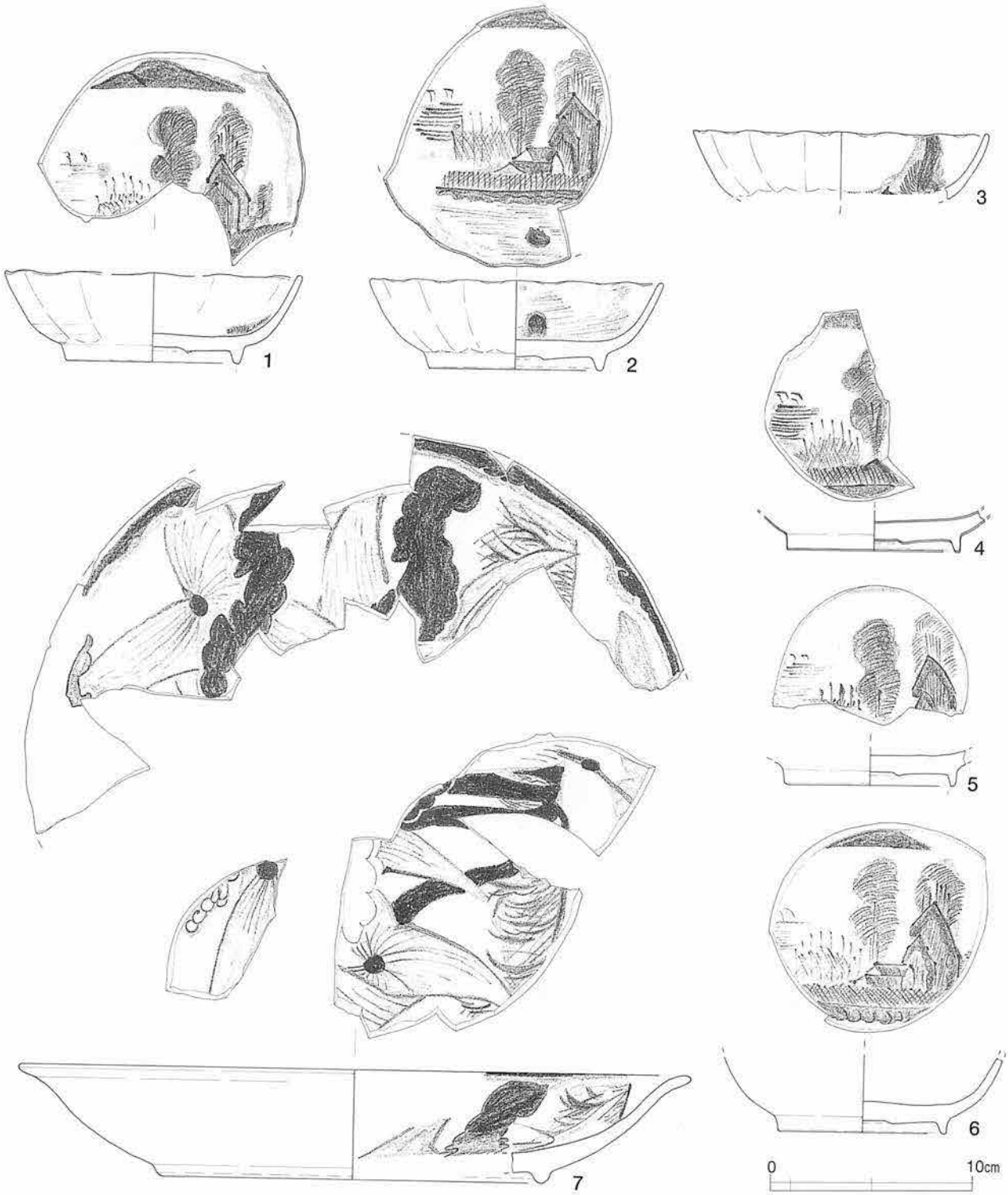


図66　土壙３　出土遺物（４）

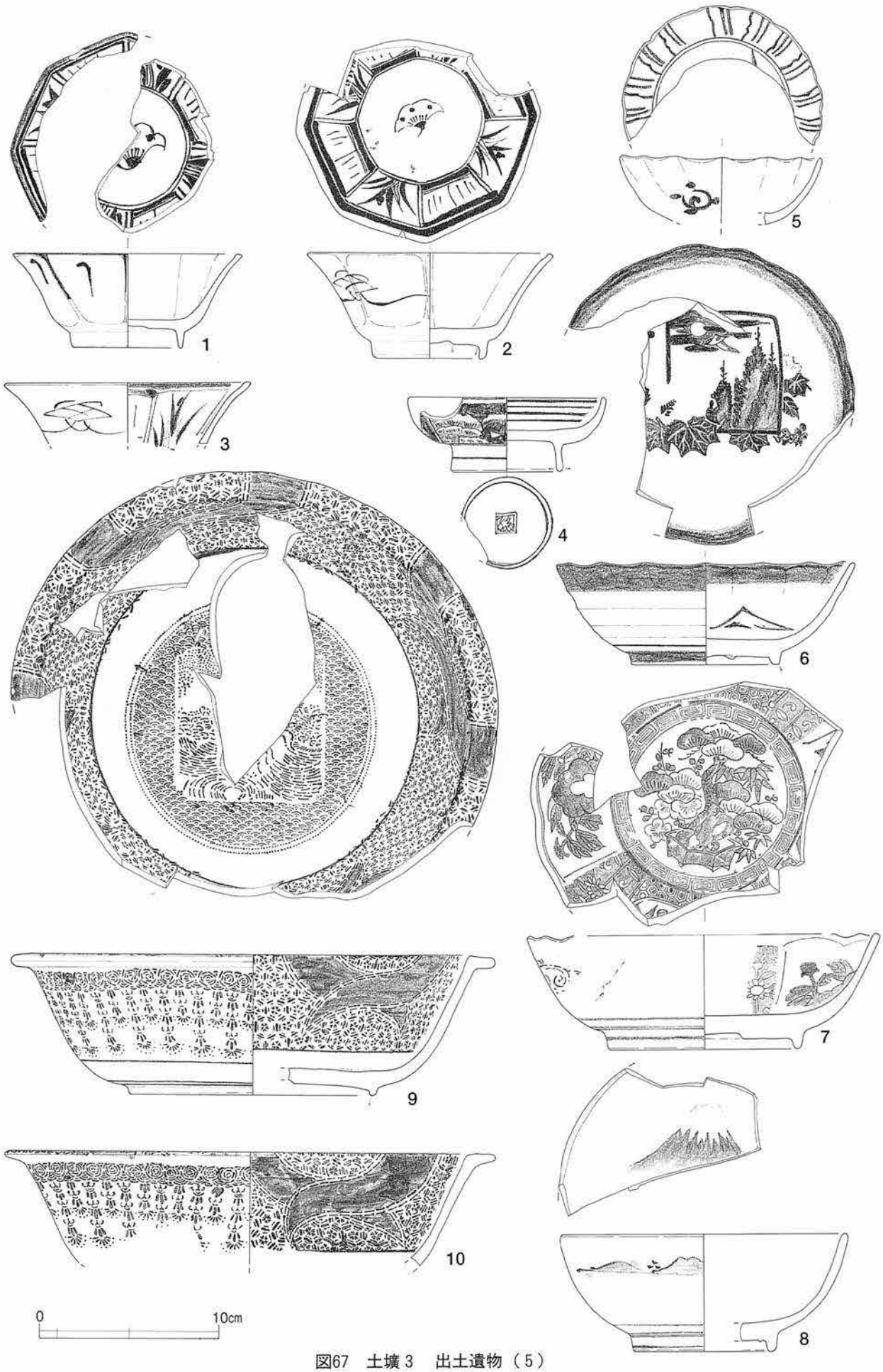


図67　土壙３　出土遺物（５）

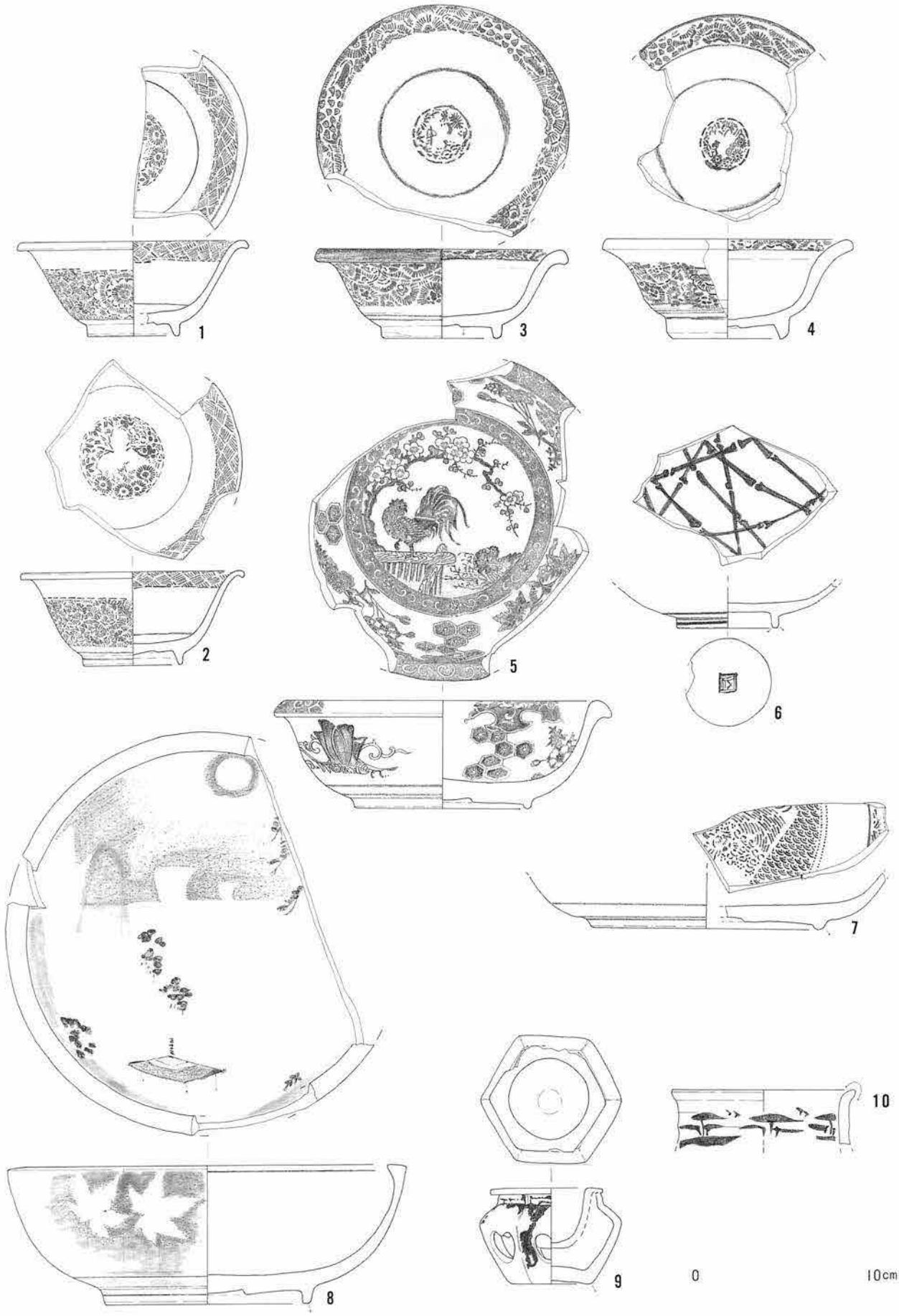


図68　土壙３　出土遺物（６）

図69　土壙３　出土遺物（７）

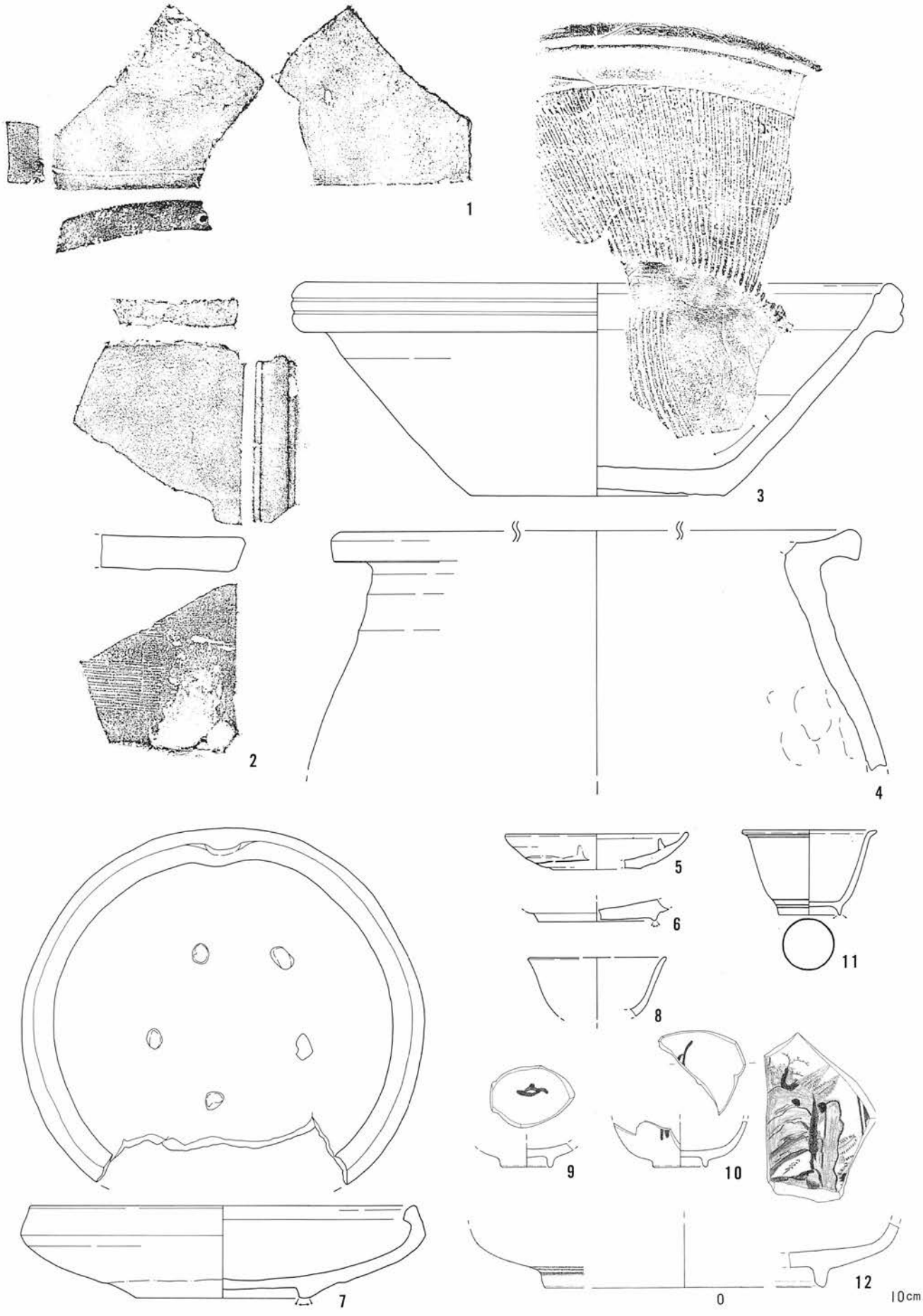


図70　土壙4　出土遺物

たく異なっており、瀬戸美濃染付が主流となる。瀬戸美濃製品の器壁はかなり薄く、器種は筒型湯飲み、輪花型碗なども出現し、豊富である。染付は灰青色顔料による手描きの細文様が施されるものは極く僅かで、代わってケバケバしい明青色顔料による銅版転写あるいは手描きでも手間のかからないラフな絵柄に変化している。大量生産化が進んでいる様子が理解しえよう。また、底裏には「大明年製」に代わって、「古陶園製」、「青爭軒製」、「□案東山」など製造業者名が描かれる。

図65～66は肥前あるいは瀬戸美濃の染付皿。図65―7は1904年から始まった日露戦争戦勝記念の銅版転写絵皿。外面には「日露交戦記念」、内面は見込みに「旭日」と鷲、そのまわりを提灯がめぐり、器壁内面は数十羽の鶴がそれぞれ苦戦をしいられた日露戦争勝利の記録を記した短冊をくわえて飛び回っている、いわゆる準記年銘資料といえる。

図66は1820年代～幕末頃の肥前志田窯の鉢。大皿は1枚だが2種類の鉢は3組ずつ出土して、7枚共に染付は明治以降の製品には見られない灰青色気味顔料による手描きの同様の山水文が描かれている。年代が遡るのは日常雑器として用いなかったからなのかもしれない。

大震災で所持していた陶磁器すべてが破損せず、いくつかが手元に残った、あるいは震災以前に破損してしまったことなどを考慮に入れながらこの家のおおよその陶磁器の食器構成が把握できそうである。

土壙4

建物3P13のすぐ北に位置する。南北95cm、東西1m、深さ29cmを測る、ほぼ円形の土壙である。断面は北に偏った擂り鉢状を呈する。平面形は建物の柱が立つ根固めの柱穴に似ているが、断面形が異なり、柱や礎石の沈み込み防止の杭や泥岩の版築は見られない。ただし、掘り込まれた位置や規模から、建物3に係わる穴であろうが、判然としない。柱穴の掘り間違いか。

遺物は新旧いりまじっている。図70―4は常滑の甕と思われるが口縁部は受け口状になっている。口縁部下から体部内面中位までは指頭によるナデ、中位から下方は押さえによる調整が行なわれる。8～

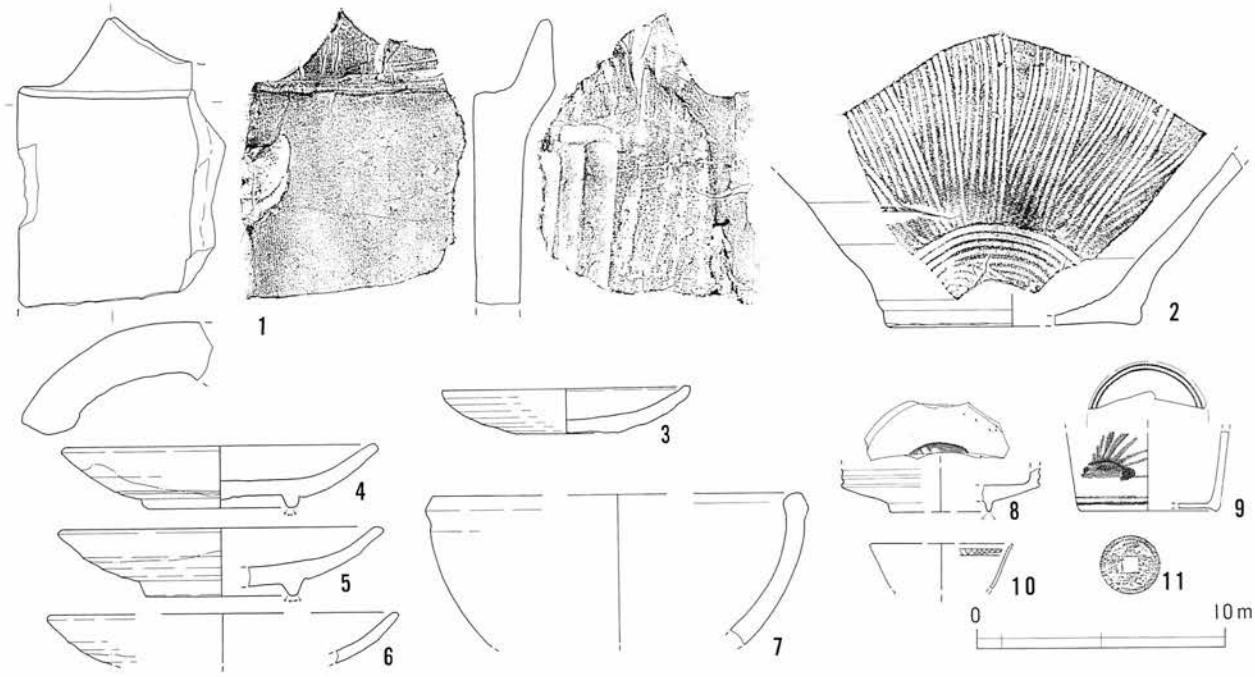


図71　生活面上出土遺物

10は幕末～明治頃の瀬戸美濃染付。素地は黒色砂を混じえる白色強粘質土。瀬戸美濃染付はおおむね同様の素地である。11は肥前端反小坏磁器。江戸中期にまで遡る。12も肥前染付か。岩山に松を配した山水画。外面にも僅かに染付文様が見られるが、判然としない。明治以降のものである。

生活面（第１面）上出土遺物

大正の震災で倒壊した建物３が建てられていた生活面の直上から発見された遺物群をここで取り上げる。建物３の存続した間に敷地の空間地に捨てられた遺物群である。生活面の存続時期をある程度示すものと考えられる。

また、建物３の倒壊後、敷地を整地して現在まで使われ、今回建替えのために壊された建物が造られたが、その際の敷地整地土層からの出土遺物は、土壙３と同様に建物３の終末時期と存続期間中の遺物群の組み合わせを知るうえで良好な史料である。

図71は第１面上から発見された、ある程度建物３の存続時期を示す遺物群である。２は瀬戸の擂鉢、内底面の擂り目が円を描くように作られている。３～７は美濃の陶器。３は鉄釉の灯明皿。４～６は18

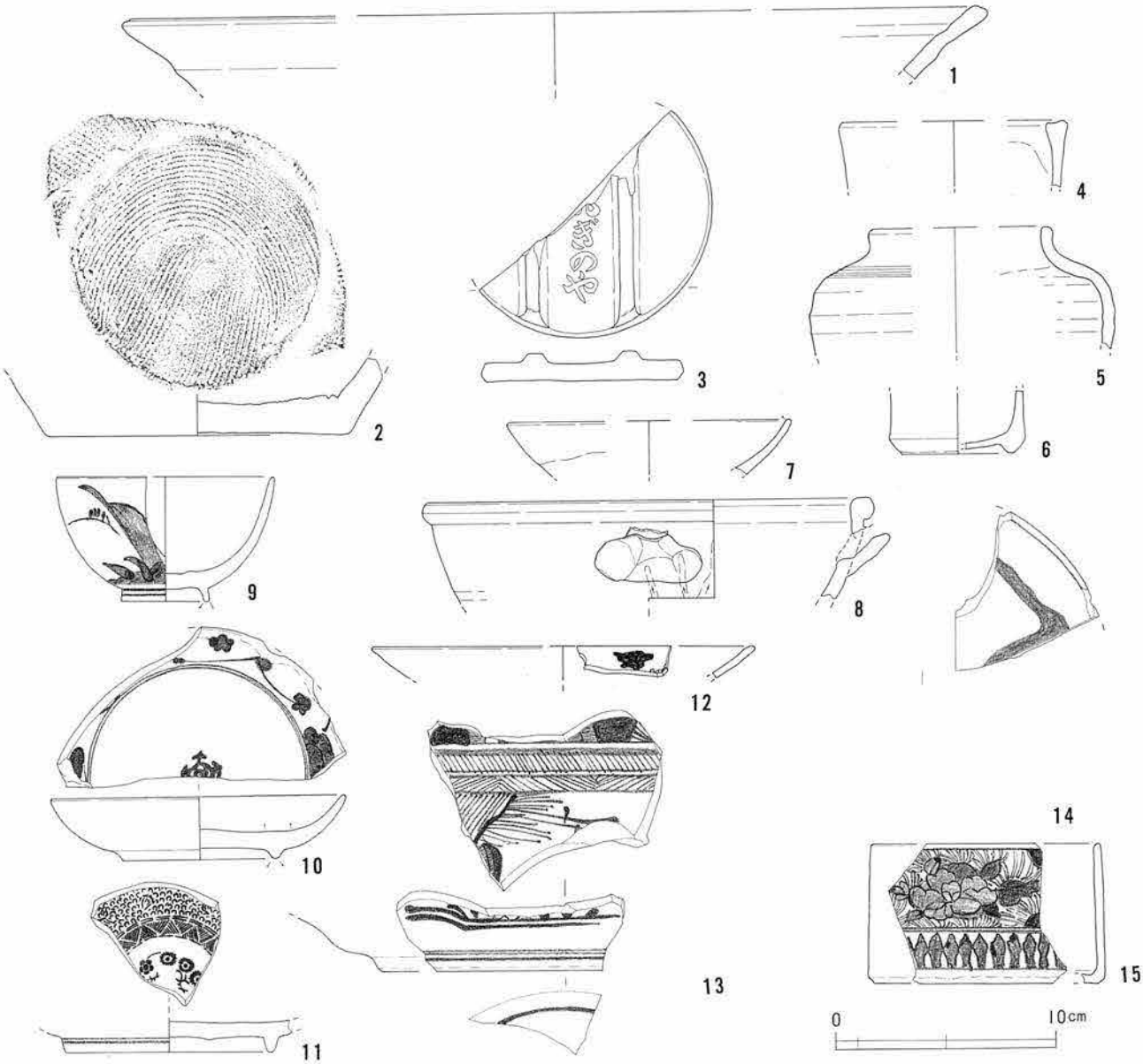


図72　現代整地層出土遺物

世紀前半代の灰釉皿である。ただし、4は二次焼成で真黒に焼けている。7も灰釉の片口鉢。17世紀後半まで遡るであろう。8～10は肥前磁器。18世紀末から幕末にかけての所産である。8と10が染付、9は赤絵である。11は寛永通寶。古寛永であろう。

図72は現代整地層出土の遺物群である。なかには中世や現代の遺物も紛れ込んでいる。1は山茶碗窯系こね鉢。口径の復元に不安が残る。2、4～6は瀬戸美濃陶器。4と5はあめ釉の香炉と小壺。8～11は肥前系磁器。17世紀以降の古手の染付が見られる。9は波佐見窯か。12は中国製の17世紀前半にまで遡る染付皿である。13～15が明治以降にまで下る染め付け磁器である。

第5節　その他の出土遺物

ここでは調査開始前の現地表と表土の重機掘削の際に発見された遺物群と、近世水田によって壊されてしまっていた中世生活面の下、自然堆積砂層から出土した遺物群を取り上げる。いずれも、帰属する生活面を明確にしえない遺物だが、調査地付近の歴史的環境を想定させるものである。

図73は表面採集によって発見された遺物群である。3の美濃灰釉皿、4と5の内野山窯の陶器、9の肥前磁器を除いて、製産地を判断できなかった。1はかわらけである。外面下半に横方向の削りが施される。近世から近代にかけて、胞衣の埋納時に用いられることが多い。3は18世紀前半、4と5は17世紀末から18世紀前半、7は18世紀後半から19世紀前半、8は明治以降、9は1640～1660年代にそれぞれ帰属する。10は「寛永通寶」、新寛永である。

図74と75には近世水田によって土が撹乱されてしまった中世面の下から出土した遺物群を集めた。図74－1～7は中世のかわらけ。ぼってりとした器壁がゆっくりと開く14世紀後半代のものであろう。9と10は東播磨産と常滑産のこね鉢。12～15は擂鉢。12と13は備前系、14と15は瀬戸美濃産である。

図75－1は美濃かけ分けせんじ。2も美濃であろうか。灰釉の皿である。3は国内産の白磁輪花碗。型作り成形の内面には菊花文が浮かぶ。17世紀末から18世紀初頭。4と5は肥前染付。4は18世紀前半から中葉、5は17世紀末から18世紀前半のもの。6は中国産青磁蓮弁文碗。14世紀代であろう。

図75－7～11は木製品。7～9は桶・樽の底板。半円形の直線面に接合のための目釘が残っている。11の下駄は一木の連歯下駄であったものが、前の歯がかけてしまった後に、露卯下駄のように差歯にした再製品である。

図75－12と13は鉄製品。12は刀子。13は鉄瓶の蓋。

註1）第2回中世都市研究討論会　1994『鎌倉における生産地年代と消費状態』レジュメ

2）筆者実見。

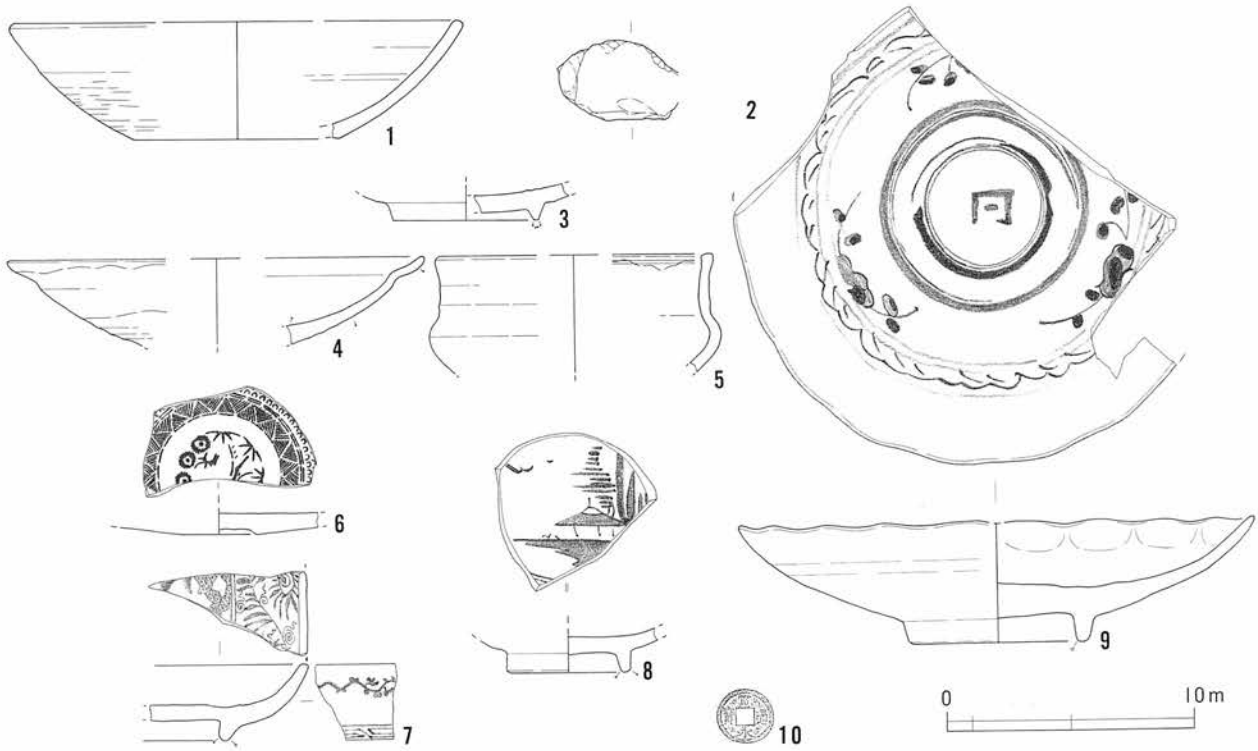


図73　表面採集遺物

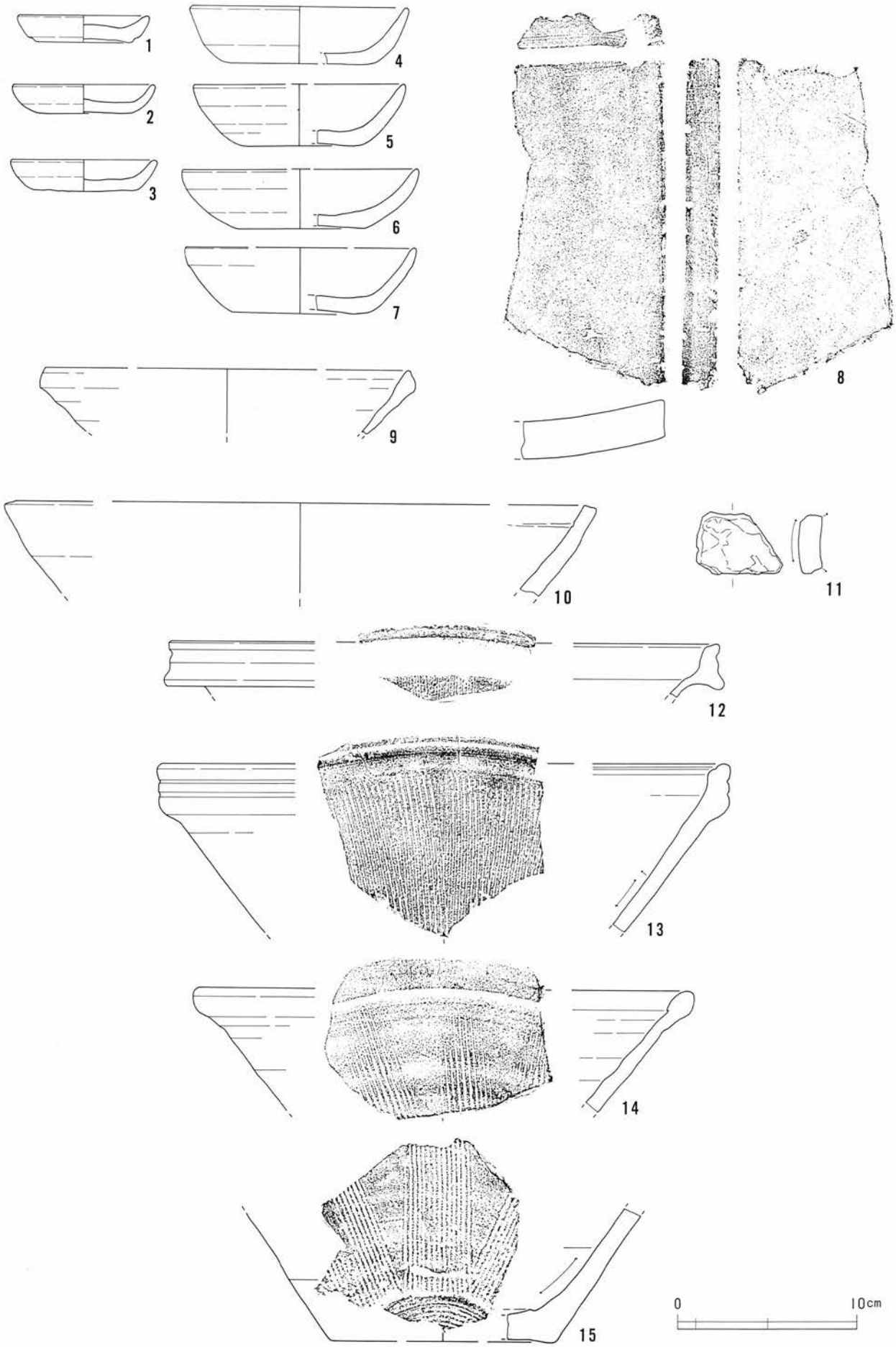


図74　第４面下出土遺物（１）

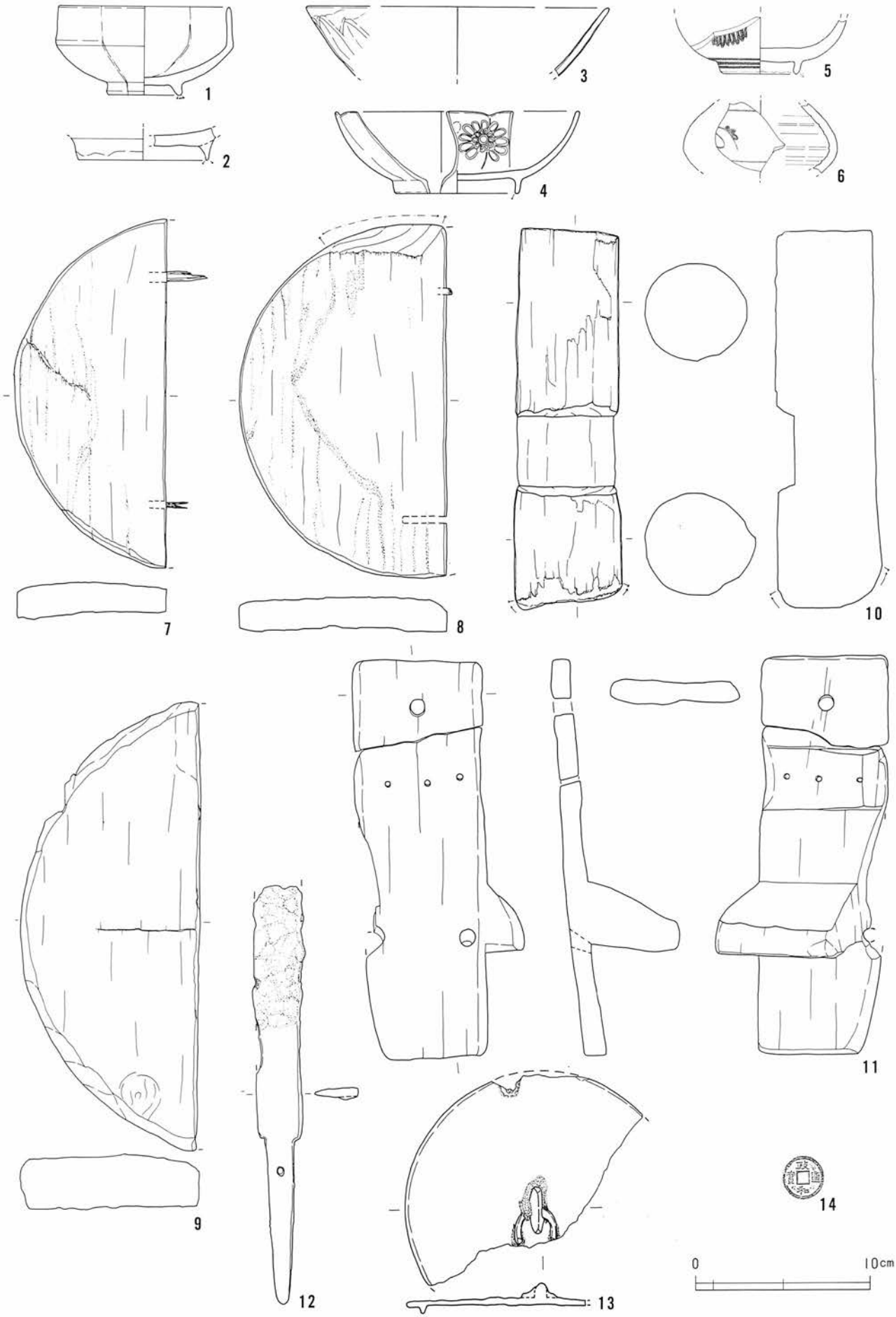


図75　第４面下出土遺物（２）

第6節　出土動物遺存体

調査地点の発掘調査によって、中世の河川、近世の水田と水路が発見され、調査地点は比較的土中の水分含有量の多い土地柄であることが判明した。土中の水分含有量が多い場合、木製品や獣骨などの有機物質は土中にあって空気から遮断されて腐敗を免れる。発掘調査においてもそうした土地では有機物質遺物が多く発見されることが多い。しかしながら、今回の調査では盛り土造成の行われた近代以前の遺構や生活面からの有機体遺物の出土は少なかった。特に、獣骨の動物遺存体の出土は少なかった。河川の中からはもう少し多くの獣骨が出土しても良さそうなものだが、獣骨の少なさは調査地点の遺跡の性格によるものであろう。今回の調査で採集した動物遺存体は、発掘調査を進める中で肉眼にて確認できたもので、フィルター透過、浮遊選別（Water Sepatation）などの装置を用いずに得られたものであることをまず断っておく。

動物骨ではウマ（*Equus caballus*）、ウシ（*Bos taurus*）、イヌ（*Canis familiaris*）、ヒト（*Homo sapience sapience*）、ネズミ（*Muridae*）、タコノマクラ、イルカ（*Delphinidae*）、マダイ（*Pagrus major*）、メジロザメ（*Family Carcharhinidae*）が河と水路を中心にして出土している。ネズミは出土地点が明確でなく、近年の潜り込みの可能性がある。ウマは上腕骨と中足骨、中節骨が1点ずつ出土した。ウマの中足骨は、遺跡地の東方に位置する長谷小路周辺遺跡では中世の刀装具の材料として頻繁に加工されるものであるが、今回の出土中足骨には加工された痕跡はなかった。ウシでは橈骨と基節骨が1点ずつある。

イヌは水路5からまとまって下顎のほか四肢骨が出土している。飼われていた犬が死亡して、水路の中に投げ込まれたのであろう。犬は中世以来、埋葬された他に、しばしば溝の中に投げ込まれて骨格がばらばらになったものが発見される。

ヒトの骨は軸椎が一点だけ出土した。近世水路の中に五輪塔が投げ込まれていたり、遺跡地付近の葬送地が何らかの形であらされていたようであり、この人骨も土葬骨を埋葬する墓が壊されて、近代造成土の中に紛れ込んだために柱穴から出土したのであろう。

イルカは軸椎が3点出土した。イルカは中世の鎌倉にはたびたび回遊してきたことが出土骨からわかっているが、今回出土した骨も鎌倉の湾内もしくわ相模湾の中で捕獲されたものが解体されたのであろう。

貝類は出土総点数386点のすべてが水棲種であった。出土した地点・遺構は中世河川および近世水路に多く、その他に特にまとまって出土した遺構などはなかった。しかし、出土した貝種は食用がほとんどで、食用に捕獲された後に廃棄された貝殻であると考えられる。点数のおおい、目立つ種類はアサリ、バイ、カキ（イボカキ、マガキ、イワガキ）、ハマグリ、チョウセンハマグリ、サザエである。なかでもチョウセンハマグリ、イワガキ、サザエの多さが目立つ。これらは湾外と岩礁に生息する種で、鎌倉の前海で捕獲されたものではないだろう。また、鎌倉の中世遺跡から出土する貝の中で最も多く、遺跡によっては出土総点数の半分近くを占めるアカニシがここでは2％しかない。浅い海の泥底に棲むアカニシは縄文時代以来中世でも多く食されていたが、近世・近代を中心とする今回の調査地点ではこのアカニシに対する嗜好ほとんど薄れてしまっていると言えるだろう。

一方、バイ、キサゴ類の小型巻き貝は近世に至ってもあいかわらず多く、これらは鎌倉の前海で捕獲されて佃煮や酒肴などに用されたと思われる。

獣骨分類表

出土地	頭骨	環椎	軸椎	頸椎	腰椎	肋骨	寛骨	仙骨	歯	角	上顎骨			下顎骨			切歯骨			肩胛骨			上腕骨			橈骨			尺骨			中手骨		
											r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u
ウマ Equus caballus																																		
河																																		
水路4																								1s										
ピット58																																		
合計																								1										
ウシ Bos taurus																																		
土壙11、12																											1s							
合計																											1							
イヌ Canis familiaris																																		
水路5														1per										1d			1p			1per				
深掘りトレンチ																																		
合計														1													1			1				
ヒト Homo sapience sapience																																		
ピット144、145			1																															
ネズミ Muridae																																		

タコノマクラ

d：遠端　per：完形
p：近端
s：破片

*は解体痕の見られるものを示し、＃は焼かれた痕跡を有するものを示す。
以下の表においても同様である。

表1（1）

獣骨分類表

出土地	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	腓骨	距骨	踵骨	中足骨	中手・足骨	手・足根骨	基節骨	中節骨	末節骨
	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u	r l u
	ウマ Equus caballus											
河							1per					
水路4												
ピット58											1	
合計							1				1	
	ウシ Bos taurus											
土壙11、12										1		
合計										1		
	イヌ Canis familiaris											
水路5												
深掘りトレンチ			1									
合計			1									
	ヒト Homo sapience sapience											
ピット144、145												
ネズミ Muridae												
			1per									

表1（2）

鯨類

出土地	頭骨	環椎	軸椎	頚椎	歯骨			上顎骨			下顎骨			肩甲骨			手根骨			岩骨	尾椎骨
					r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u	r	l	u		
イルカ科 Delphinidae (*Grampus griseus*)																					
水路1			1*																		
ピット192			1*																		
2面下			1*																		
合計			3*																		

魚類

出土地	擬耳骨	上後頭骨	上顎骨	鰓蓋骨	脊椎骨	軸椎	椎体	関節骨	尾骨	尾部状骨	棘刺	歯	前上顎			歯骨			甲	腹甲板	不明
													r	l	u	r	l	u		r	
マダイ Pagrus major																					
4面下	1																				
ピット50											1										
メジロザメ Family Carcharhinidae																					
深掘りトレンチ							1														

表1（3）

貝類出土数表

		干潟群集							内湾泥底群集					内湾砂底群集								
	シジミ	イチョウシラトリガイ	アサリ	ヌノメアサリ*	シオフキガイ	バカガイ	オオノガイ	カガミガイ	ゴイサギガイ	ハイガイ	アカニシ	ゴマフダマガイ*	バイガイ	イボキサゴ	マガキ	イタボガキ	ハマグリ	アカガイ	サルボウ	ツメタガイ	ムラサキガイ	ウチムラサキガイ
側溝																						
p143			1										1									
p145																						
p145																						
p148													1									
p150																						
p181											1											
p190																						1
p190													2		4					2		
p193															1		1			2		
p194																						
p195		1																				
p25																						
p38													1									
p40																						
2面下										1	1		5		2				3	1		
2面上													1									
3面上																						
3面上													2									
4面下		1													4	1			1			
井戸1裏込			1																	2		
井戸2																						
河									2			1	1	1	2		2		2	5	5	
河北地業層													1				1					
深掘りトレンチ						2					4		2	2					1	6		
水路1															1							
水路1～3																	1					
水路2																						
水路4	1	8	2		1							1	4	3			12		2	4		
水路5		1		1				1					1		1				1	1	2	
水路6																					1	
堤			21				3	1														
土丹地業層																						
土壙11・12											2				5							
土壙13														5								
土壙15															2							
土壙16																						
土壙5																						
土壙7																						
土壙9																						
北部上層																		1				
明治火災面下		1											1									
合計	1	12	25	1	1	2	3	2	2	1	8	2	23	11	22	1	17	1	10	23	8	1

	シジミ	イチョウシラトリガイ	アサリ	ヌノメアサリ	シオフキガイ	バカガイ	オオノガイ	カガミガイ	ゴイサギガイ	ハイガイ	アカニシ	ゴマフダマガイ*	バイガイ	イボキサゴ	マガキ	イタボガキ	ハマグリ	アカガイ	サルボウ	ツメタガイ	ムラサキガイ	ウチムラサキガイ
合計	1	12	25	1	1	2	3	2	2	1	8	2	23	11	22	1	17	1	10	23	8	1

表2（1）

貝類出土数表

	湾外砂底群集					岩礁群集												
	チョウセンハマグリ	キサゴ	ダンベイキサゴ	フノキガイ	ベンケイガイ	クロアワビ	トコブシ	マダカアワビ	チリボタンガイ	イワガキ	コケゴロモガキ	イボニシ	フノマタナガニシ	ヒザエ	オニヒザエ	バテイラ	コシダカガンガラ	ボウシュウボラ
側溝														1				
p143	1		11															
p145			1															
p145	1																	
p148																		
p150			1															
p181														1				
p190														2				
p190										1				1				
p193																		
p194										1								
p195	1									1	1							
p25			1															
p38																		
p40			1															
2面下	2		2					1						2	1			
2面上	1																	
3面上														2				
3面上	1									1								
4面下	2									1								1
井戸1裏込	1		1							1								
井戸2										1								
河	14			1	1	1		1	1	18		1	1	13				2
河北地業層	2									2				3				1
深掘りトレンチ	6									3		2						
水路1	1																	1
水路1～3																		
水路2	1									1				5				1
水路4	5		1		1					1				15		1		1
水路5	8				2				1	8				8				2
水路6	2									2								
堤	1											1						
土丹地業層										1								
土壙11・12										2								
土壙13		1												2			1	
土壙15																		
土壙16																1		
土壙5														1				1
土壙7	1		3								1							
土壙9										1								
北部上層														1				
明治火災面下							1											
合計	51	1	22	1	4	1	1	2	2	46	2	4	1	57	1	2	1	10

	チョウセンハマグリ	キサゴ	ダンベイキサゴ	フノキガイ	ベンケイガイ	クロアワビ	トコブシ	マダカアワビ	チリボタンガイ	イワガキ	コケゴロモガキ	イボニシ	フノマタナガニシ	ヒザエ	オニヒザエ	バテイラ	コシダカガンガラ	ボウシュウボラ
合計	51	1	22	1	4	1	1	2	2	46	2	4	1	57	1	2	1	10

表2（2）

貝類種別出土頻度グラフ

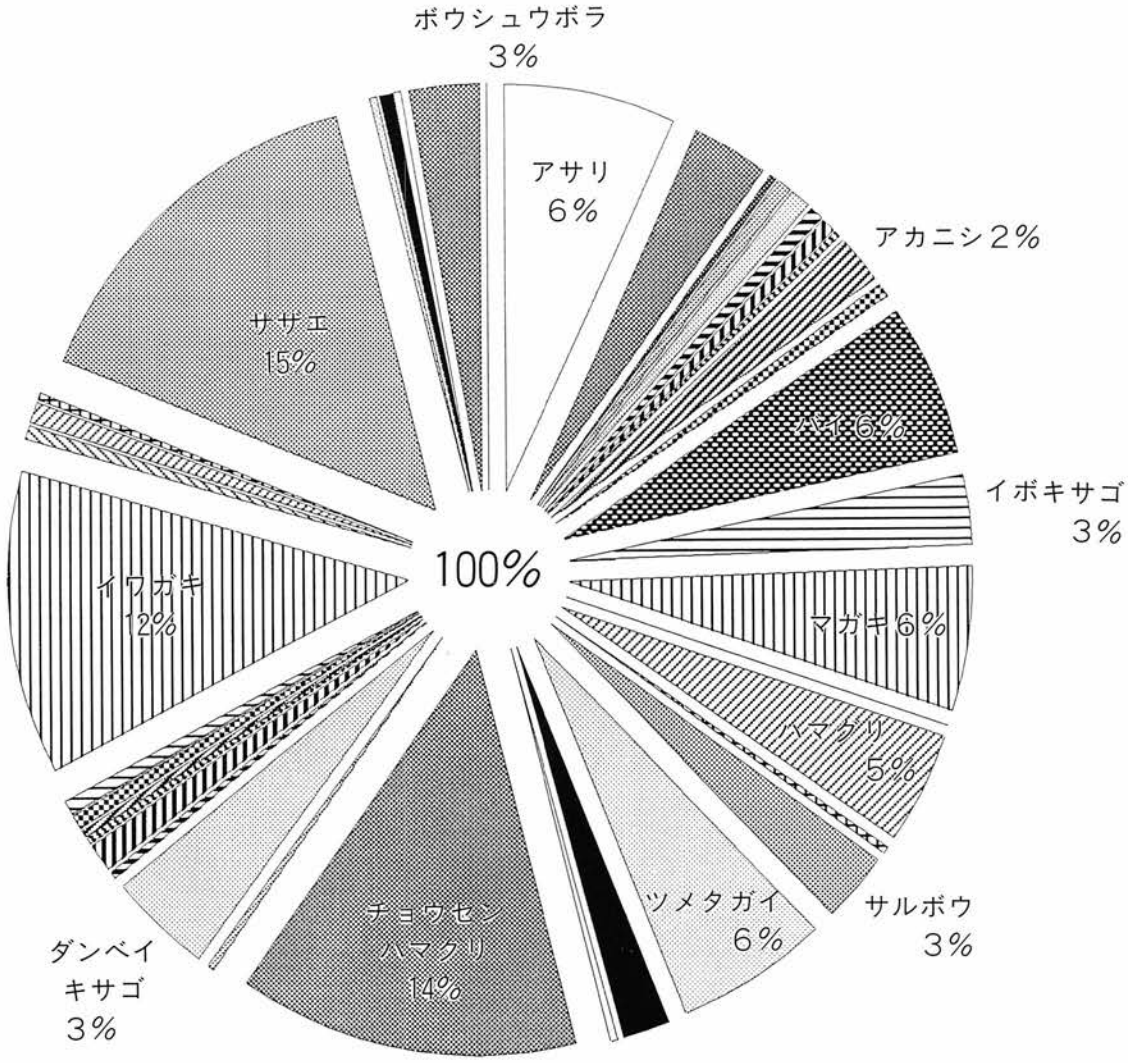


表3

貝類観察表

出土地点	種別	長	径	高	
2面下	アカニシ		?	53	幼貝、口唇から反対体層を欠く
2面下	オニサザエ		36+α	54+α	ら塔と反対体層を欠く
2面下	サザエ		56.5	67	口唇を欠く
2面下	サザエ		43.5	54.5	口唇を欠く
2面下	サザエ蓋				
2面下	サザエ蓋				
2面下	サザエ蓋				
2面下	サザエ蓋				
2面下	サザエ蓋				
2面下	サルボウ	55		46.5	右
2面下	サルボウ	?		60	左
2面下	サルボウ	?		?	?
2面下	ダンベイキサゴ		21.5	12.5	口唇を欠く
2面下	ダンベイキサゴ		24.5	16.5	口唇を欠く
2面下	チョウセンハマグリ	93		70	右
2面下	チョウセンハマグリ	?		68	左
2面下	ツメタガイ		28.5	12	口唇を欠く
2面下	バイ		34	57	口唇を欠く
2面下	バイ		?	53.5	軸のみ
2面下	バイ		19.5+α	40.5	口唇～体層の一部を欠く
2面下	バイ		31.5	55.5	口唇を欠く
2面下	バイ		22	?	ら塔と口唇を欠く
2面下	ハイガイ	41		35	左
2面下	マガキ	70.5		?	左
2面下	マガキ	79		158	左
2面下	マダカアワビ	84+α	?	19	
2面上	チョウセンハマグリ	71		59	左
2面上	バイ		26	52	口唇を欠く
3面上	イワガキ	56.5		94.5	右
3面上	サザエ		48+α	?	
3面上	サザエ		40+α	53.5	
3面上	チョウセンハマグリ	?		53	右
3面上	バイ		?	45+α	ら塔を欠く軸のみ
3面上	バイ		?	36.5+α	ら塔を欠く軸のみ
4面下	イタボガキ	101		92.5	右
4面下	イチョウシラトリ	34		26+α	左
4面下	イワガキ	48		91	右
4面下	サルボウ	71		61.5	左
4面下	チョウセンハマグリ	39.5		32	左
4面下	チョウセンハマグリ	?		?	左
4面下	ボウシュウボラ				ら塔を欠く軸のみ
4面下	マガキ	59		153	左
4面下	マガキ	73		115+α	左
4面下	マガキ	73.5		129	右
4面下	マガキ	47.5		100	右
ピット126	サザエ蓋				
ピット13	イチョウシラトリ	50+α		?	右
ピット13	イワガキ	40.5		53.5	左
ピット13	コケゴロモガキ	30		30	左
ピット13	チョウセンハマグリ	?		?	?
ピット143	アサリ	?		?	右
ピット143	ダンベイキサゴ		30	29	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		17	27	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		14.5	22	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		13.2	22	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		14	22	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		13	21	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		13	21	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		12.5	18+α	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		13	20	口唇を欠く
ピット143	ダンベイキサゴ		?	14	軸のみ
ピット143	ダンベイキサゴ		?	13	軸のみ
ピット143	チョウセンハマグリ	?		?	左
ピット143	バイ		32++α	58	口唇～体層の一部を欠く
ピット145	ダンベイキサゴ		21	13.5	口唇を欠く
ピット145	チョウセンハマグリ	?		?	
ピット148	バイ			52	軸のみ
ピット150	ダンベイキサゴ		29	18.5	
ピット150	ツノマタナガニシ		?	64	軸のみ
ピット173	サザエ蓋				
ピット181	アカニシ		47.5	59	完形、幼貝
ピット181	ウチムラサキガイ	?		?	左
ピット181	サザエ		?	106.5	軸のみ
ピット181	サザエ		?	42	軸のみ
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ蓋				
ピット181	サザエ無蓋		?	36	体層を欠く、幼貝
ピット190	イワガキ	94.5		168	右、黒色化
ピット190	サザエ		?	86	軸のみ
ピット190	サザエ蓋				
ピット190	サザエ蓋				
ピット190	サザエ蓋				
ピット190	サザエ蓋				
ピット190	ツメタガイ		39	24.5	口唇を欠く
ピット190	ツメタガイ		23.5	17.5	口唇を欠く
ピット190	バイ		?	53	軸のみ
ピット190	バイ		27	52	口唇を欠く
ピット190	マガキ	65		115.5	左
ピット190	マガキ	64.5		59	左
ピット190	マガキ	76		?	左
ピット190	マガキ	66.5		91	右

表4（1）

出土地点	種別	長	径	高	
ピット193	サザエ蓋				
ピット193	サザエ蓋				
ピット193	ツメタガイ			11.5	幼貝、口唇を欠く
ピット193	ツメタガイ			?	軸のみ
ピット193	ハマグリ			21	左、幼貝
ピット193	マガキ	77.5		210	左右完形
ピット194	イワガキ	76.5		109	左
ピット195	コケゴロモガキ	30		30	左
ピット25	ダンベイキサゴ			18	
ピット38	バイ		?	51.5	軸のみ
ピット40	ダンベイキサゴ		20.5	13.5	口唇を欠く
井戸1裏込め	アサリ	47		34.5	左
井戸1裏込め	イワガキ	61.5		69	右、黒色化
井戸1裏込め	サザエ蓋				
井戸1裏込め	サザエ蓋				
井戸1裏込め	ダンベイキサゴ		22	14.5	口唇を欠く
井戸1裏込め	チョウセンハマグリ	98		69.5	左
井戸1裏込め	ツメタガイ		21.5	12	口唇を欠く
井戸1裏込め	ツメタガイ		40.5	25	口唇を欠く
井戸2	イワガキ	78		122.5	右
河	イボキサゴ		16	11.5	口唇を欠く
河	イボニシ		22	33.2	
河	イワガキ	89		152	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	86		122	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	84		122	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	68		95	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	880		112	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	72.5		92	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	65.5		87.5	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	59.8		94.5	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	69		94	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	66.5		96	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	54.5		76	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	39.5		47	右、片殻被熱黒色化
河	イワガキ	82.5		124.5	左殻被熱痕
河	イワガキ	47		?	左
河	イワガキ	53.5		?	右
河	イワガキ	81.5		112.5	右
河	イワガキ	82		124	右、黒色化
河	イワガキ	66		82	右、黒色化
河	イワガキ	83		83+α	右、黒色化
河	イワガキ	74.5		86	右、黒色化
河	クロアワビ	134	104	29	
河	ゴイサギ	26		21	
河	ゴイザギ	52		39	
河	サザエ		89	102	被熱痕、口唇を欠く
河	サザエ		98	110	口唇を欠く
河	サザエ		109	122	口唇を欠く
河	サザエ		111	145	口唇を欠く
河	サザエ		92	117	口唇を欠く
河	サザエ		95	101	口唇を欠く
河	サザエ		84	100	口唇を欠く
河	サザエ		72	80	口唇を欠く
河	サザエ		58	68	口唇を欠く
河	サザエ		67	79	口唇を欠く
河	サザエ		52	62	口唇を欠く
河	サザエ		37	40.5	口唇を欠く
河	サザエ		?	61	口唇と反対休層を欠く
河	サザエ蓋				
河	サルボウ	76		60	
河	サルボウ	37.5		30.5	左
河	チョウセンハマグリ	86		60	
河	チョウセンハマグリ	97.5		71	
河	チョウセンハマグリ	92		71	
河	チョウセンハマグリ	91		72	
河	チョウセンハマグリ	90		70	
河	チョウセンハマグリ	85		66	
河	チョウセンハマグリ	93		74	
河	チョウセンハマグリ	94		73.5	
河	チョウセンハマグリ	97.5		73	
河	チョウセンハマグリ	72		54	
河	チョウセンハマグリ	90.5		61.5	右
河	チョウセンハマグリ	81.5		65.5	左
河	チョウセンハマグリ	?		48.5	左
河	チョウセンハマグリ	76.5		58	
河	チリボタン	45		52	
河	チリボタンガイ	37.5		34	
河	ツノキガイ		48	105	
河	ツノマタナガニシ		222.5	54.5	口唇を欠く
河	ツメタガイ		52	31	
河	ツメタガイ		46.8	29.6	
河	ツメタガイ		40	22	
河	ツメタガイ		43.5	30	口唇を欠く
河	ツメタガイ		39	25	口唇を欠く
河	バイ		14	31	
河	ハマグリ	70		56	
河	ハマグリ	70		56	
河	ベンケイガイ	91.88		59	
河	ボウシュウボラ		82+α	170+α	
河	ボウシュウボラ		90	142+α	
河	マガキ	63		64	
河	マガキ	47		69	右
河	マガキ	40		57.5	左
河	マガキ	42.5		60	左

表4（2）

貝類観察表

出土地点	種別	長	径	高	
河	マダカアワビ	144	115	36	
河	マダカアワビ	128	86	30	
河	ムラサキガイ	96		62	
河	ムラサキガイ	94		56.5	
河	ムラサキガイ	85		51	
河	ムラサキガイ	90		57	
河	ムラサキガイ	91		61	右
河北地業層	イワガキ	77.5		108.5	右
河北地業層	イワガキ	61.5		102.5	右、被熱
河北地業層	サザエ		87+α	110	口唇と反対体層を欠く
河北地業層	サザエ		?	102	体層を欠く
河北地業層	サザエ		?	?	体層と軸を欠く、ら塔のみ
河北地業層	サザエ蓋				
河北地業層	サザエ蓋				
河北地業層	チョウセンハマグリ	112.5		83	右
河北地業層	チョウセンハマグリ	101		82.5	右
河北地業層	バイ		31.5	52	完形
河北地業層	ハマグリ	?		50	左
河北地業層	ボウシュウボラ		?	155+α	ら塔と体層を欠く
深掘りトレンチ	アカニシ		81	106	
深掘りトレンチ	アカニシ		74	97	
深掘りトレンチ	イボキサゴ		21.5	21	軸のみ
深掘りトレンチ	イボニシ		21.5	4	
深掘りトレンチ	イワガキ	57.5		88.5	左
深掘りトレンチ	イワガキ	86		117.55	右
深掘りトレンチ	イワガキ	45.5		89.5	右
深掘りトレンチ	サザエ蓋				
深掘りトレンチ	サザエ蓋				
深掘りトレンチ	サルボウ	51		46	左
深掘りトレンチ	チョウセンハマグリ	91.5		70.5	右
深掘りトレンチ	チョウセンハマグリ	95		72.5	左
深掘りトレンチ	チョウセンハマグリ	?		?	右
深掘りトレンチ	ツメタガイ		54	38	口唇を欠く
深掘りトレンチ	ツメタガイ		58.5	35	口唇を欠く
深掘りトレンチ	ツメタガイ		45.5	31	口唇を欠く
深掘りトレンチ	バイ		28+α	48.5	口唇～体層の一部を欠く
深掘りトレンチ	バカ	46		?	右
水路1～3ベルト	ハマグリ	?		?	右殻
水路1	チョウセンハマグリ	?		49	左
水路1	ボウシュウボラ		81	136	
水路1	マガキ	64		99+α	左
水路2	イワガキ	68		89	右
水路2	サザエ		106.5	116	口唇を欠く
水路2	サザエ		97+α	143	口唇を欠く
水路2	サザエ		?	109.8	口唇と反対体層を欠く
水路2	サザエ		?	103+α	ら塔・口唇・反対体層を欠く
水路2	サザエ		?	123+α	ら塔を欠く軸のみ
水路2	サザエ蓋				
水路2	サザエ蓋				
水路2	チョウセンハマグリ	?		67.5	左
水路2	ボウシュウボラ		?	108+α	ら塔を欠く軸のみ
水路4	アサリ	?		32	左
水路4	アサリ	?		31	右
水路4	イチョウシラトリ	42		35	左
水路4	イチョウシラトリ	41.5		?	左
水路4	イチョウシラトリ	38.5		28.5	左
水路4	イチョウシラトリ	50.5		32	左
水路4	イチョウシラトリ	53		?	右
水路4	イボキサゴ		16	14	口唇を欠く
水路4	イボキサゴ		16	11	
水路4	イボキサゴ		16	11	
水路4	イワガキ	61		?	右
水路4	ゴマフタマガイ		22	26	口唇を欠く
水路4	サザエ			36	軸のみ
水路4	サザエ			36	軸のみ
水路4	サザエ			33	軸のみ
水路4	サザエ		?	101+α	ら塔と体層を欠く
水路4	サザエ		75	85	口唇を欠く
水路4	サザエ		47	45+α	口唇を欠く
水路4	サザエ		35	39	口唇を欠く
水路4	サザエ		?	50	体層を欠く
水路4	サザエ		35	?	ら塔と口唇を欠く
水路4	サザエ		33	37	口唇を欠く
水路4	サザエ		31	36	口唇を欠く
水路4	サザエ		26	31	口唇を欠く
水路4	サザエ蓋				
水路4	サルボウ	69		57.5	左
水路4	サルボウ	?		61	右
水路4	シオフキ	34		32	左
水路4	シジミ	?		?	左
水路4	ダンベイキサゴ		30	18.5	口唇を欠く
水路4	チョウセンハマグリ	93		69	右
水路4	チョウセンハマグリ	100		76.5	右
水路4	チョウセンハマグリ	69		54	左
水路4	チョウセンハマグリ	64		49	左
水路4	チョウセンハマグリ	?		56	右
水路4	ツメタガイ		38.5	25	口唇を欠く
水路4	ツメタガイ		35	21	口唇を欠く
水路4	ツメタガイ		31	20	口唇を欠く
水路4	ツメタガイ		?	20	軸のみ
水路4	バイ		11.5	29.5	
水路4	バイ		31	50	口唇を欠く
水路4	バイ		?	?	ら塔のみ
水路4	バイ		34	53	口唇を欠く
水路4	バテイラ		31	25	口唇を欠く

表4（3）

出土地点	種別	長	径	高	
水路4	ハマグリ	37.5		30	右
水路4	ハマグリ	36		30	右
水路4	ハマグリ	28		24	右
水路4	ハマグリ	?		?	右
水路4	ハマグリ	61		46	右
水路4	ハマグリ	40		32	左
水路4	ハマグリ	40		34	左
水路4	ハマグリ	43		34	左
水路4	ベンケイガイ	?		65	右
水路4	ボウシュウボラ		?	?	ら塔のみ
水路5	イチョウシラトリ	50		37	左
水路5	イワガキ	45		66	左
水路5	イワガキ	73.5		118	右、被熱
水路5	イワガキ	78		118	右、被熱
水路5	イワガキ	58.5		86	右、被熱、黒色化
水路5	イワガキ	41.5		59.5	右、被熱、黒色化
水路5	イワガキ	55.5		92	右、黒色化
水路5	イワガキ	62		76	右、黒色化
水路5	イワガキ	35		44	右、黒色化
水路5	カガミガイ	67.5		67.5	左
水路5	サザエ		84.5	93	口唇を欠く
水路5	サザエ		69.5	78.5	口唇を欠く
水路5	サザエ		71	76	口唇と体層の一部を欠く
水路5	サザエ		?	105	軸のみ
水路5	サザエ		130	125	口唇を欠く
水路5	サザエ		77	104	口唇を欠く
水路5	サザエ		?	100+α	ら塔、口唇、反対体層を欠く
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ蓋				
水路5	サザエ無蓋		31	39.5	口唇を欠く
水路5	サルボウ	48		36	右
水路5	チョウセンハマグリ	87		65	右
水路5	チョウセンハマグリ	90+α		71.5	左
水路5	チョウセンハマグリ	86.5		66.5	左
水路5	チョウセンハマグリ	82.5		66	左
水路5	チョウセンハマグリ	77		64	左
水路5	チョウセンハマグリ	75+α		57	右
水路5	チョウセンハマグリ	87+α		69	右、黒色化
水路5	チョウセンハマグリ	93+α		72.5	左
水路5	チリボタン	?		44	
水路5	ツメタガイ		21.5	11.5	口唇を欠く
水路5	ヌノメアサリ	41		36.5	左
水路5	バイ		34	56.5	口唇を欠く
水路5	ベンケイガイ	86		77	左
水路5	ベンケイガイ	?		?	左
水路5	ボウシュウボラ		?	?	ら塔のみ
水路5	ボウシュウボラ		?	?	ら塔のみ
水路5	マガキ	56.5		87	右
水路5	ムラサキガイ	86+α		?	左
水路5	ムラサキガイ	?		?	右
水路6	イワガキ	76		135	右
水路6	イワガキ	92		140	右
水路6	サザエ蓋				
水路6	チョウセンハマグリ	28		65.5	左
水路6	チョウセンハマグリ	?		47	左
水路6	ムラサキガイ	97+α		59	右
水路堤	アサリ	42		28	完形
水路堤	アサリ	40		30	右
水路堤	アサリ	?		28.5	右
水路堤	アサリ	?		?	右
水路堤	アサリ	?		?	右
水路堤	アサリ	39		28.5	左
水路堤	アサリ	?		?	左
水路堤	アサリ	?		?	左
水路堤	アサリ	?		?	左
水路堤	アサリ	48.5		37	
水路堤	アサリ	42		32	
水路堤	アサリ	40.5		29.5	
水路堤	イボニシ		21	31.5	
水路堤	オオノガイ	82		51.5	
水路堤	オオノガイ	?		?	
水路堤	オオノガイ	?		?	
水路堤	カガミガイ	31		29	
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	サザエ蓋				
水路堤	チョウセンハマグリ	?		72	
側溝	サザエ		87.5	97	

表4（4）

貝類観察表

出土地点	種別	長	径	高	
土丹地業層	イワガキ	?		?	右殻、黒色化
土丹地業層	サザエ蓋				
土壙11、12	アカニシ		?	75+α	ら塔を欠く軸のみ
土壙11、12	アカニシ		?	60+α	ら塔を欠く軸のみ
土壙11、12	イワガキ	51		60	左
土壙11、12	イワガキ	35		58.5	左
土壙11、12	サザエ蓋				
土壙11、12	サザエ蓋				
土壙11、12	マガキ	84.5		190	左
土壙11、12	マガキ	58		115.5	左
土壙11、12	マガキ	67.5		108	左
土壙11、12	マガキ	64		109	右
土壙11、12	マガキ	55.5		76	右
土壙13	イボキサゴ		17	11.5	口唇を欠く
土壙13	イボキサゴ		19.5	13.5	口唇を欠く
土壙13	イボキサゴ		17.5	13.5	口唇を欠く
土壙13	イボキサゴ		17	11.5	口唇を欠く
土壙13	イボキサゴ		16		口唇・ら塔を欠く
土壙13	キサゴ		19	12	口唇を欠く
土壙13	コシダカガンガラ		26.5	21.5	口唇を欠く
土壙13	サザエ		24	30	
土壙13	サザエ			30	軸のみ
土壙13	サザエ蓋				
土壙13	サザエ蓋				
土壙13	サザエ蓋				
土壙13	サザエ蓋				
土壙15	マガキ	95.5		155	左
土壙15	マガキ	40.5		85+α	左
土壙16	バテイラ		22	19	口唇を欠く
土壙4	サザエ蓋				
土壙5	サザエ		?	116.5	軸のみ
土壙5	サザエ蓋				
土壙5	サザエ蓋				
土壙5	ボウシュウボラ		58.5	101.5+α	ら塔の一部を欠く
土壙7	コケゴロモガキ	60		69	右
土壙7	サザエ蓋				
土壙7	ダンベイキサゴ		28	18	口唇を欠く
土壙7	ダンベイキサゴ		?	20	軸のみ
土壙7	ダンベイキサゴ		?	16	軸のみ
土壙7	チョウセンハマグリ	?		?	左
土壙9	イワガキ	69.5		108.5	右
北部上層	アカガイ	?		54+α	左
北部上層	サザエ		?	39	口唇～反対体層を欠く
明治火災面下	イチョウシラトリ	?		?	左
明治火災面下	コトブシ	?	?	14	
明治火災面下	サザエ蓋				
明治火災面下	バイ		31	48.5	口唇を欠く

反対体層：外唇の裏側の体層を示す。

表4（5）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
井戸3	図6-1		かわらけ	中世	6.6	4.6	1.7	器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	2		かわらけ	中世	7.6	5.4	1.8	体部外面中位に強い稜を持ち、器壁は内彎気味に立ち上がる
河川	図8-1		かわらけ	中世	7.4	3.9	1.4	器壁薄く直立気味に立ち上がり、側面観台形を呈する
	2		かわらけ	中世	8.0	5.6	1.2	底部厚に比して器壁薄い
	3		かわらけ	中世	11.2	7.7	3.2	体部外面に強い稜を持たず、器壁は直立気味に立ち上がる
	4		かわらけ	中世	10.9	7.4	3.2	器壁は直立気味に立ち上がるが、口縁先端は外反する
	5		土錘		遺存長5.2	径1.7		白色砂を多く含む橙色土　砂っぽい
	6	常滑	甕	?				口縁帯付近に降灰かかる
	7		すり常滑		3.9×3.6×1.4			
	8		すり常滑		5.7×7.3×1.2			
	9	瀬戸	鉄釉擂鉢	?		9.1		混入物少ない淡黄白色土　著しい摩滅痕　外底部糸切り
	10	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿			5.6	2.9	受け径7.5　煤付着
	11	志戸呂	灰釉緑釉小皿		10.2	5.3	1.8	灰色弱粘質緻密土　釉は灰緑～茶褐色　外底部未調整
	12	美濃	灰釉皿	18C前半	14.0	8.7	3.1	灰色粘質緻密土　釉は二次焼成を受け不透明な灰緑色
	13	美濃	灰釉蓋	?	15.6		2.6	淡黄白色弱粉質緻密土　釉は淡灰緑色透明
	14	瀬戸	灰釉皿			11.8		淡黄白色粉質緻密土　釉は暗灰緑色　二次焼成
	15	肥前	呉器手碗	17C後半		4.8		淡茶色粉質緻密土　釉は暗黄灰色　貫入
	16	肥前	京焼風碗	17C末～18C初頭		4.0		黄白色粉質緻密土　釉は透明だが二次焼成を受けやや白濁
	17	肥前　唐津	蛍手碗	1690年～18C前半	10.3	4.0	4.4	赤褐色堅緻土　蛍手は白濁釉　内面は白濁釉による刷毛塗り？
	18	肥前	京焼風？皿or碗	17C後半～18C前半		6.0		薄茶色弱粘質緻密土　釉は透明　貫入
	19	肥前	?　皿or碗	18C				薄橙色緻密土　白濁釉の刷毛塗り後、半透明釉施釉　底裏に墨書
	20	肥前	京焼風皿	17C後半		4.8		黄白色粉質緻密土　鉄絵は手描きの山水　底裏は陰刻の「清水」
	21	肥前	京焼風皿	17C末～18C初め		4.8		黄白色粉質緻密土　底裏に「清水」の陰刻と墨書
	22	肥前　唐津	打刷毛目蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半		9.2		暗茶褐色堅緻土　見込みに白濁釉による打刷毛目
	23	肥前	刷毛目塗り瓶	18C				黄橙色緻密土　白濁釉による刷毛目塗り
	24	肥前　内野山	掛け分け皿	17C末～18C前半	16.9			淡灰色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明の灰釉
	25	肥前　内野山	掛け分け皿	18C前半	18.5			淡茶色土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明の灰釉
	図9-1	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗		15.8			明灰色粘質緻密土　釉は淡青味灰緑色
	2	国産磁器	青磁鱠花皿	17C末～18C前半	25.5	16.0	3.8	黒色微砂を僅かに混じえる白色強粘質緻密土　釉は明灰緑色
	3	肥前	白磁碗	18C前半～中葉	8.8			黒色微砂を多く混じえる明灰白色粘質土　釉はごく薄く施釉される
	4	肥前	染付碗	1690年～18C前半	9.0	3.4	5.2	染付は明青色顔料によるコンニャク印判の植物文
	5	肥前	染付碗	18C前半	9.5			染付は灰水色顔料によるコンニャク印判の紅葉文
	6	肥前	染付碗	18C前半		3.0		染付は明青色顔料による手描きの文様
	7	肥前	染付碗	18C前半頃		4.6		染付は薄灰緑色顔料による輪文
	8	肥前	染付碗	18C前葉～中葉		4.4		染付は灰青色顔料によるコンニャク印判の植物文？
	9	肥前	染付碗	18C中葉頃	7.0			染付は明青色顔料による手描きの文様
	10	肥前	染付碗	18C	8.4			染付は明青色顔料による手描きの植物文
	11	肥前	色絵うがい碗	17C末～18C前半	14.4			色絵は剥落するが朱の線がわずかに残る
	12	肥前	染付皿	17C中葉～末	12.0			染付は淡灰青色顔料による手描きの文様
	13	肥前	染付皿	18C	11.6			染付は灰青色顔料による手描きの文様
	14	肥前	染付盃？	18C前半		3.6		染付は淡灰青色顔料による輪文
	15	肥前	染付そば猪口	17C末～18C前半		4.6		染付は明青色顔料による輪文　底裏に文字
	16	肥前	染付油壺	17C後半		5.0		染付は胴部と高台上に淡灰赤色顔料による輪文
	17		煙管　雁首					
	18		煙管　雁首		遺存長4.8			
	19		煙管　吸い口		遺存長2.6			
	20		煙管　吸い口		全長5.5			
	21		煙管　吸い口		遺存長4.5			
	22		煙管　吸い口		全長7.2			
	23		真鍮　簪		全長11.9			
	24		刀子		遺存長4.5	厚0.6		
	25		銭					「景徳元寶」　輪郭が小さい　加工銭？
	26		銭					「寛永通寶」（新）
	27		銭					「寛永通寶」（新）
	28		真鍮　飾り金具					下辺は切り込み様
	29		釘		遺存長8.7			
	30		釘		全長10.3			
	31		真鍮　針金					
	32		硯		11.2×4.8×7.0			黒色粘板岩
	33		砥石		12.5×3.4×2.3			緑色凝灰岩　両側面は波板状ノミ痕残る
	34		石臼（下臼）		最大厚4.6			多孔質安山岩　上面は使用による磨滅が著しい　二次焼成
	35		曲物　蓋板					有孔　木釘残る
	図10		五輪塔（風輪）		最大幅20.3	高12.1		粗粒安山岩
河底土壙	図11-1		かわらけ	近世？	10.0	4.9	1.8	器壁薄くゆっくり開きながら立ち上がる
	2		すり常滑		4.7×3.5×1.2			
	3		すり常滑		5.9×6.3×1.3			破片の周囲を丸く打ち砕いてすり常滑用材を作っている
	4	瀬戸	灰釉おろし皿	中世		7.4		淡黄白色粉質緻密土　釉は淡黄緑色
	5	舶載磁器	青磁碗			5.6		明灰色弱粘質緻密土　釉は深灰緑色
	6	肥前	染付碗	18C前半	9.8			染付は淡青灰色顔料による手描きの文様
	7	肥前	染付碗	18C前半	10.6			染付は明藍色顔料による手描きの文様
	8	肥前	染付碗	18C前半		3.0		染付は青灰色顔料による輪文
	9	肥前	染付盃	18C前半	5.8	2.4	3.7	染付は青灰色顔料によるコンニャク印判の紅葉文
	10		箸		全長18.9	径0.5		下先端部は削りが入る
	11		箸		全長21.0	径0.6		先端部に削りは入らない
4面上	図12-1		かわらけ	中世	7.3	4.2	2.2	背高で器壁薄く、直立気味に立ち上がる
	2		かわらけ	中世	12.3	7.3	3.2	器壁は内彎気味に立ち上がる
	3	常滑	壺	?	10.3			器表色は暗茶褐色　内面中位付近は指頭痕残る

表5（1）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	4	常滑	甕	赤羽・中野６型式				肩部内面上位付近は指頭による押さえとナデ調整
	5	瀬戸	灰釉おろし皿	中世	14.1	9.1	4.3	淡黄白色粉質緻密土　釉は軽い二次焼成を受け淡黄緑色
	6	瀬戸	灰釉瓶or燭台	15Ｃ前半	11.9			明灰色弱粘質緻密土　釉は淡緑色透明　口縁付近は露胎
	7	天草	砥石		5.1×7.1×1.9			淡紅色凝灰岩　側面に一部ノミ痕を残すが、ほぼ全面砥面
	8		銭					「政和通寶」
	9		銭					「政和通寶」
３面下	図13-1		かわらけ	中世	5.8	3.8	2.0	口径値小さい　背高で器壁は直立気味に立ち上がる
	2		かわらけ	中世	7.5	5.5	2.1	器壁は直立気味に立ち上がり、側面観台形
	3		かわらけ	中世	7.7	6.0	1.5	背低で器壁は開きながら立ち上がる
	4		土器質火鉢					外面はミガキ、内面は横方向のナデ調整　内面は煤がつく
	5		すり常滑		5.2×7.2×1.1			
	6		石鍋転用スタンプ					石鍋の鍔部が残る　藤の花房、葉、蔓が彫られる
	7		釘		遺存長4.7　径0.9			
	8		銭					欠損「□□通□」
	9		曲物　蓋板		28.2×5.9×2.4			有孔　木釘残る
	10		曲物　底板		26.8×16.9×2.4			無孔
	11		曲物　底板or蓋板					木栓が残る
	12		下駄？					
	13		曲物　底or蓋の転用品か					
水田	図15-1		土師器　坏	７Ｃ末～８Ｃ前半	11.6	5.1	3.8	黒色、白色砂を混じえる暗灰色土　器表は橙色～紅色　器壁薄い
	2		土師器　坏	７Ｃ末～８Ｃ前半	14.7			黒色、白色粗砂を多く混じえる淡橙色粉質土　器表は褐色
	3		土師器　相模型坏	８Ｃ中葉以降	13.3			白～灰色砂を混じえる肌色粉質土　器面磨滅し調整痕不明
	4		土師器　甕	７Ｃ末～８Ｃ前半	14.7			雲母片、白色砂を混じえる灰色土　口縁下はケズリ調整か？
	5		土師器　甕	７Ｃ末～８Ｃ前半	18.4			雲母片を多く混じえる淡黄色土　器表は薄肌色～淡紅色
	6		土師器　甕	７Ｃ末～８Ｃ前半	19.0			雲母片、白色砂を混じえるザラザラした肌色土　口縁下にハケ痕残る
	7		土師器　武蔵型甕	９Ｃ代	21.9			雲母片、白色砂、黒色砂を多く混じえるザラザラした薄茶色土
	8		須恵器　？	９Ｃ初頭～中頃				体部下半は重ね焼きによる酸化焔焼成
	9		須恵器　提瓶	７Ｃ代				白灰色微砂～粗砂を混じえる緻密土　胎心は赤褐色、器表は黒灰色
	図16-1		かわらけ	中世	4.0	2.2	2.2	
	2		かわらけ	中世	6.6	3.4	2.2	
	3		かわらけ	中世	6.6	4.6	1.9	おおむね口径値小さく、背高　器壁は八の字状に開く
	4		かわらけ	中世	7.4	4.6	2.1	
	5		かわらけ	中世	7.5	4.2	2.3	
	6		かわらけ	中世	8.1	5.6	1.5	
	7		かわらけ	中世	8.1	5.7	1.5	
	8		かわらけ	中世	8.0	5.9	1.5	口径値はやや大きめ　背低　器壁は薄めでゆっくり開く
	9		かわらけ	中世	7.3	4.8	1.6	
	10		かわらけ	中世	6.8	4.6	1.5	
	11		かわらけ	中世	8.2	5.4	1.7	
	12		かわらけ	中世	7.2	5.0	1.9	
	13		かわらけ	中世	7.4	5.1	1.8	
	14		かわらけ	中世	8.0	4.8	2.0	口径値は大きめ　背高　体部中位に稜を持ち、器壁は
	15		かわらけ	中世	7.8	5.5	1.9	やや内彎気味に立ち上がる
	16		かわらけ	中世	7.6	5.2	2.0	
	17		かわらけ	中世	7.7	6.1	1.5	
	18		かわらけ	中世	7.6	5.4	1.7	
	19		かわらけ	中世	7.4	5.2	1.7	口径値は大きめ　背低　体部中央に稜を持ち、器壁は内彎気
	20		かわらけ	中世	7.8	4.8	1.8	味に立ち上がる
	21		かわらけ	中世	7.4	5.5	1.8	
	22		かわらけ	中世	7.3	5.6	1.6	
	23		かわらけ	中世	7.2	6.0	1.5	
	24		かわらけ	中世	6.7	5.0	1.8	口径値は大きめ　体部に稜を持たず、器壁は直線的に立ち
	25		かわらけ	中世	7.0	5.3	1.9	上がる
	26		かわらけ	中世	7.8	5.4	2.2	
	27		かわらけ	中世	11.5	7.6	3.0	
	28		かわらけ	中世	10.5	6.9	3.1	器壁は内彎、もしくは内彎気味に立ち上がる
	29		かわらけ	中世	10.4	7.4	3.0	
	30		かわらけ	中世	11.0	7.0	3.0	
	31		かわらけ	中世	10.4	6.8	3.2	体部中位、もしくは口縁部下に稜を持ち内彎する
	32		かわらけ	中世	13.6	8.1	3.5	
	33		かわらけ	中世	8.7	5.6	2.6	
	34		かわらけ	中世	10.8	6.8	3.1	体部に強い稜を持たず、器壁はゆっくり立ち上がる
	35		かわらけ	中世	12.0	7.1	3.1	
	36		かわらけ	中世	13.2	8.0	3.7	
	37		すりかわらけ		3.9×3.0			表裏面両側面ともに使用による磨滅痕残る
	38		土錘		全長5.4　径1.8			黒色雲母片と白色砂を混じえる淡橙色土　焼成良好
	39		土製　小壺					明肌色微粉質土　外面に刻文「□業七拾年　□田本店」
	40		瓦器質火鉢					黒色・赤褐色砂粒を混じえた白～淡紅色粉質土
	41		土器質火鉢		19.2			赤褐色土　口縁部が出っ張る新しい時代のものであろう
	42		瓦質浅鉢型火鉢		34.3			石英粒・黒色粗砂を多量に混じえる灰色土　器表は灰黒色
	図17-1		すり常滑		4.8×6.5×1.2			
	2		すり常滑		6.9×8.6×1.4			
	3		すり常滑		9.7×8.2×1.2			
	4	常滑	鉢	赤羽・中野７型式				白黄灰色弱粘質土　口縁端部に重ね焼痕のこる
	5	常滑	甕	赤羽・中野９型式				石英粒・小石を混じえる紅色土　器表は黒茶色
	6	常滑	甕転用鉢	？				石英粒～小石を混じえる灰色緻密土　体部内面は使用磨滅痕
	7	東濃	山茶碗	藤澤第７期？			3.6	高台貼付後の調整は雑で、籾殻痕少ない

表５（２）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	8	美濃	灰釉？鉄絵皿	17C後半	36.2			灰色粘質緻密土　釉は二次焼成を受け乳灰色
	9	美濃	灰釉小碗？	17C			3.2	灰白色弱粘質緻密土　釉は乳灰緑色
	10	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	13.2	4.8	4.2	淡黄茶色緻密土　釉は外面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	11	肥前　唐津？	皿		14.1			赤褐色緻密土　釉は暗深草色を呈するが一部二次焼成により白濁
	12	舶載？磁器	青磁碗		15.3			黒色砂を多く混じえる明灰白色土　釉はオリーブ色　漆補修痕あり
	13	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治	7.0			染付は明青色顔料による手描きの文様
	14	肥前	染付碗？	18C前半	8.4			染付は淡灰青色顔料による簡略化された雨降り文
	15	肥前	染付碗		11.5			染付は明青色顔料による手描きの文様
	16	肥前	染付碗	18C末～幕末	6.0			染付は明青色顔料による菊散らし文
	17	肥前	染付そば猪口	18C前半頃	7.9	4.2	5.6	染付は灰青色顔料による手描きの山水文
	18	肥前	染付鉢	18C後半～19C初頭	16.1			染付は淡明青色顔料による手描きの文様
	19	鳴滝？	砥石		4.9×3.7×0.9			肌色頁岩
	20		銭					「開元通寶」
	21		銭					「開元通寶」　星あり
	22		銭					「天□通寶」　天聖通寶か
	23		銭					「熙寧通寶」
	24		銭					「元祐□寶」　元祐通寶か
	25		銭					「紹聖元寶」
	26		銭					「紹熙元寶」　裏面に「四」
	27		銭					「皇宋通寶」
	28		銭					「□平元寶」
	29		煙管　雁首		全長4.9			雁首下にツブレあり
	30		釘		全長6.6　径0.9			
	31		釘		遺存長5.5　径0.9			
	32		釘		遺存長6.3　径0.9			
	33		釘		全長5.9　径0.7			
	34		釘		全長6.6　径0.4			
	35		？		全長5.8　厚0.4			
	36		農具？		遺存長26.0厚0.9			
水路1	図19-1		かわらけ	？	8.8	6.5	1.6	体部外面中位に強い稜を持つ　見込みは回転ヘラナデ調整
	2		土製　甕？			18.5		粗い薄肌色土　体部外面下位は軽いミガキ　外底部は未調整
	3		瓦質火鉢		24.0			淡黄色粉質土　木状工具によるヨコナデ、口縁下はケズリ調整
	4		桟瓦					器表は灰黒色　調整は不明
	5		丸瓦					器表は灰黒色　凸面はヘラナデ調整、凹面は布目痕のこる
	図20-1	常滑	甕	？		20.0		灰黒色土　体部下位はヘラ掻き上げ　外底部は砂底
	2	常滑？	甕	？		14.8		体部内面中位は指頭押圧＋ナデ、下位はヘラ調整
	3	志戸呂？	錆釉灯明皿上皿		8.4	3.0	2.0	淡茶色土　釉は茶色不透明
	4	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		9.1	4.2	1.5	受け径5.6　受け高1.8　淡茶色土　釉は暗赤褐色不透明
	5	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		10.5	5.4	1.7	受け径7.1　受け高2.1　淡茶色緻密土　釉は茶色不透明
	図21-1	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	32.9	11.6	15.6	淡黄白色土　外底部糸切り＆重ね焼痕　著しい磨滅痕
	2	備前系	擂鉢		33.3			茶褐色粘質土　口縁下は指頭ナデ
	3	備前系	擂鉢		31.8			赤褐色粘質土　口縁下は指頭ナデ
	4	備前系	擂鉢		33.5	13.6	14.0	茶褐色土　軽い磨滅痕
	5	？	擂鉢		15.6			茶褐色土　外底部は丁寧に調整される　著しい磨滅痕
	6	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢			14.9		淡黄白色弱粘質土　外底部糸切り　重ね焼痕　磨滅痕なし
	図22-1	美濃	黄釉鉄絵皿	17C後半～18C前半		16.0		淡黄色弱粘質緻密土　釉は濃黄色　二次焼成　骨付にスリなし
	2	美濃	御深井釉皿	18C前半	11.7	6.9	2.6	灰～黄白色粘質緻密土　灯明皿として使用
	3	美濃	飴釉鉢	18C前半	17.4			黄白色弱粘質緻密土　釉は黄茶～茶褐色　二次焼成
	4	瀬戸	灰釉香炉	古瀬戸後期　14C後半	10.3			黄白色弱粘質土　釉は淡緑色透明　体部外面に櫛描き文
	5	瀬戸美濃	灰釉香炉	？				白灰色土　釉は淡緑色透明
	6	肥前	練り込み京焼風皿	17C後半～18C初		4.8		黄白色土と灰色土の練り込み　鉄絵は黒茶色釉
	図23-1	肥前	染付碗	17C後半		5.7		染付は灰青色顔料による手描きの文様あり
	2	肥前	染付碗	18C前半	8.4	3.2	4.5	染付は明青色顔料による手描きの植物文
	3	肥前	染付碗	18C前半		4.1		染付は明藍色顔料による手描きの植物文　底裏に崩れた「大明年製」
	4	肥前	染付碗	18C前半	9.9			染付は明青色顔料による手描きによる花文
	5	肥前	染付碗	18C前半	14.0			染付は薄青灰顔料による手描きの簡略化された雨降り文
	6	肥前	染付碗	18C	8.4			染付は灰青色顔料によるの手描きの文様
	7	肥前	赤絵碗	18C前半～中葉頃	9.2	3.8	4.6	内面は朱色、淡緑色、黒色、　外面は朱色顔料の線文　口紅がめぐる
	8	肥前	染付大碗	18C前半	15.4	6.6	8.2	明青色顔料による植物文　見込みに手描き五弁花　底裏は「大明年製」
	9	肥前	染付盃	17C後半		2.9		染付は明青色顔料による輪文
	10	肥前	染付盃	18C前半	6.6			残存部に染付は見られない
	11	肥前	染付盃	18C前半	7.2			染付は灰青色顔料による手描きの植物文
	12	肥前	染付型打成形皿	17C末～18C前半		7.6		染付は灰青色顔料による手描きの竹文
	13	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	12.7	4.2	3.8	染付は灰青色顔料による手描きの松葉文
	14	肥前	染付皿	18C前半	12.5	7.6	3.1	灰青色顔料の手描き植物文　見込コンニャク印判五弁花「大明年製」
	15	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	18C前半～中葉	14.3	6.3	3.7	淡青灰顔料と茶灰色顔料の濃筆による植物文、外面は手描き文様
	16	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	18C	12.1	3.8	2.5	染付は手描きの線文　露胎部は鉄発色
	17	肥前	染付瓶	17C中葉～末				染付は藍色顔料による手描きの風景文？　体部内面はロクロ目残る
	18		煙管　雁首		全長6.5			
	19		煙管　雁首		全長4.9			首部の脹部にツブレあり
	20		煙管　吸い口		全長5.2			吸い口部に軽いヘコミあり
	21		包丁		12.6×4.0　厚0.4			
	22		鉄鍋		厚0.4			鍔部より下位には煤が付く
	23		銭					「□武通□」　洪武通寶
	24		釘		全長9.7　径0.5			
	25		鎹		全長17.1　径0.7			
	26		曲物底板転用品		12.1×4.7×0.9			表裏面ともに外周部に漆痕あり

表5（3）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	図24-1		石臼（上臼）		29.8×15.2×10.7			緑色凝灰岩
	2	赤間	硯転用砥石					赤間石　硯転用と思われる
	3	鳴滝	砥石		7.8×4.1×1.2			淡紅色頁岩
堤	図25-1		平瓦					陶器質っぽい　凸面は縄目叩、凹面は布目痕が残る
	2	美濃	鉛釉香炉	?				黄白色粉質緻密土　釉は濃灰緑～黄味灰緑色
	3	美濃	鉛釉香炉	?	12.7	8.9	5.7	黄味白灰色弱粘質緻密土　釉は暗黄土色　畳付にスリなし
	4	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗					明白灰色粘質土　釉は草緑色　蓮弁の彫りが深い
	5	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.3			染付は淡明青色顔料による手描きの文様あり
	6	肥前	染付碗	17C後半～18C初頭		4.5		染付は灰青色顔料による輪文
	7	肥前	染付盃	18C前半	5.4			小片のため染付文様は見られない
	8		煙管　?		全長2.3			
	9		真鍮　飾り金具?		遺存長8.0　厚0.3			
	10		五輪塔（空輪＋風輪）		高31.2　幅20.0			祖粒安山岩
	11		五輪塔（空輪＋風輪）		高21.8　幅15.1			祖粒安山岩
	12		箸		全長20.6　径0.5			
	13		箸		全長20.6　径0.6			下先端部に削り痕残る
	14		箸		全長20.3　径0.7			下先端部周辺に磨滅痕残る
	15		箸		全長19.2　径0.7			
	16		箸		遺存長18.0径0.6			
水路2	図26-1		かわらけ	中世	7.2	4.8	1.6	器壁は内彎気身に立ち上がる
	2		かわらけ	中世	8.0	5.1	1.7	底部厚は厚いが、器壁は薄くゆっくり外反する
	3		かわらけ	中世	7.9	5.4	1.4	
	4		かわらけ	近世?	8.2	3.7	1.6	器高は低め　器壁薄く、ゆっくり外反する
	5		かわらけ	?	8.2	6.0	1.4	
	6		かわらけ	中世	9.2	7.1	1.7	口径値大きく、器壁は直立気味に立ち上がり側面蜆台形を
	7		かわらけ	中世	9.7	8.1	1.9	呈する
	8		土製　灯芯立			4.8	0.9	外底部は糸切り　かわらけ質　受け皿とセットと思われる
	9		土製　灯明皿受け皿			8.5	2.2	受け径4.9　外底部は糸切り　かわらけ質
	10		鞴口		全長8.3　径8.0			
	11		土器質火鉢		29.8			肌色粉質土　器壁内面は横方向のナデ、外面はミガキ
	12		土鍋					黄灰色粉質土　体部外面中位から器壁内面にかけては
	13		土鍋					横方向のナデ調整、体部外面中位から下方は無調整　いずれも
	14		土鍋					口縁端部から下方は煤が付く
	図27-1	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	30.2			淡黄白色土　釉は緑味茶色
	2	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	31.8			淡黄白色ボソボソ土　釉は明茶色
	3		すり常滑		2.8×5.5×1.1			
	4	?	鉄釉灯明皿受け皿			5.2	3.1	受け径7.1　灰色粘質緻密土　釉はつやのある茶色　煤付着
	5	美濃	御深井釉型打木瓜型皿	17C末	14.4	5.9	3.3	黄白～肌色弱粘質緻密土　釉は淡緑灰色　軽い二次焼成
	6	美濃	御深井釉型打木瓜型皿	17C末		5.6		黄白～肌色弱粘質緻密土　釉は淡緑灰色　軽い二次焼成
	7	美濃	御深井釉鬢ダライ	18C前半			3.9	黄味灰白～灰白色弱粘質土　釉は乳淡緑色不透明
	8	美濃	鉛釉半菊文筒型香炉	?				黄白色粉質緻密土　釉は黄灰緑色
	9	美濃	鉄釉香炉	?		7.6		灰白色弱粘質緻密土　釉は暗茶褐色　畳付にスリなし
	10	瀬戸	天目茶碗	登窯期　17C代		4.1		黄味白灰色弱粘質緻密土　釉は明茶色釉と暗茶褐色釉の二度施釉
	11	瀬戸美濃	黄釉皿	?		6.0		黄白色粉質緻密土　釉は黄灰色だが一部二次焼成のため白濁
	12	肥前	京焼風？碗	17C末	8.4			白黄色粉質緻密土　釉は無色透明　細貫入多
	13	肥前	京焼風碗	17C末	10.0			黄白色粉質緻密土　一部鉄絵が残る　釉は無色透明　細貫入多
	14	肥前	呉器手碗	17C後半～18C前半		5.1		暗黄灰色弱粘質緻密土　釉は無色透明　貫入黒ずむ
	15	肥前	呉器手碗	17C後半～18C前半				灰白色弱粘質緻密土　釉は灰緑色　細貫入
	16	肥前	京焼風碗	17C末	9.7	4.9	6.1	黄白色粉質緻密土　手描きの文様は鉄釉　底裏に除刻「中村金」
	17	肥前	京焼風碗	17C末～18C初		4.9		黄白色粉質緻密土　釉は無色透明　貫入　二次焼成
	18	肥前	京焼風皿	17C末	17.7	7.4	6.0	黄白色粉質緻密土　文様は鉄絵手描き山水　底裏に除刻「新」
	19	肥前	刷毛塗り碗	18C前半	8.9			赤褐色堅緻土　白濁釉による刷毛塗り後、無色透明釉施釉
	20	肥前	刷毛塗り碗	18C前半	10.0			暗灰色堅緻土　白濁釉による刷毛塗り後、無色透明釉施釉
	21	肥前　内野山	掛け分け碗	?				淡橙灰色緻密土　釉は内外面ともに銅緑釉二度施釉
	22	肥前　内野山	灰釉蛇の目釉ハギ皿	17C後半～18C前半		5.8		淡灰白色緻密土　重い　釉は掛け分けなく不透明な灰釉のみ
	23	肥前　内野山	灰釉蛇の目釉ハギ皿	17C後半～18C前半	18.3	5.6	5.8	淡茶色緻密土　釉は掛け分けなくやや草色帯びる不透明な灰釉
	24	肥前　唐津	三島手皿	18C		10.6		赤褐色堅緻土　釉は内面は白濁釉＋透明　外面は小豆色
	25	肥前　唐津	二彩手皿	17C後半～18C前半	39.8			淡茶色堅緻土　釉は内面は白濁釉＋透明　外面は銅緑釉＋褐色釉
	26	肥前　唐津	二彩手皿	18C	38.9			暗茶褐色堅緻土　釉は内面は白濁釉（刷毛目状）＋透明　外面は透明
	27	肥前	刷毛目瓶	18C代				淡橙色緻密土　頸部は鉄釉、下方は白濁釉による刷毛目＋黄茶色釉
	図28-1	肥前	染付碗	1640～1660年代	10.1			染付は灰青色顔料による手描きの一重網目文
	2	肥前	染付碗	1650～1670年代		4.7		染付は灰青色顔料による手描きの昆虫文？
	3	肥前	染付碗	1660～1670年代		5.3		染付は灰青色顔料による手描きの荒磯文
	4	肥前	染付碗？	17C後半				染付は暗青色顔料による文様　口縁下は彫りによる蓮弁
	5	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.2			染付は明青色顔料による手描きの梅樹文？　強い二次焼成
	6	肥前	染付碗	17C後半	9.4			染付は明青色顔料による手描きの植物文
	7	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.5	4.1	6.2	染付は灰青色顔料による輪文のみ
	8	肥前	染付うがい碗	17C末～18C前半	14.5			残存部に染付は見られない　見込みは釉ハギの可能性あり
	9	肥前	染付碗	18C前半	8.8			染付は明青色顔料による手描きの草花文
	10	肥前	染付碗	18C前半	8.8			染付は灰青色顔料による手描きの簡略化された梅樹文
	11	肥前	染付碗	18C前半	9.4			染付はコンニャク印判による菊花文
	12	肥前	染付碗	18C前半	9.6			染付はコンニャク印判による菊葉文か
	13	肥前	染付碗	18C前半		3.7		染付は明青色顔料による松
	14	肥前	染付碗	18C前半		4.6		染付は灰青色顔料による雨降り文か
	15	肥前	染付碗	18C中葉前後		4.1		染付は藍色顔料による手描きの植物文
	16	肥前	染付碗	18C後半	10.3	4.2	5.2	染付は灰青色顔料による手描きの梅樹文
	17	肥前	色絵碗	18C後半頃	8.0	3.0	4.1	内面に朱および黒色顔料の文様あり

表5（4）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	18	肥前	染付盃	17C後半	7.2	2.8	4.1	染付は灰青色顔料による輪文のみ
	19	肥前	染付盃	17C後半	6.6	3.2	4.7	染付は灰青色顔料による手描きの文様
	20	肥前	染付盃	18C	6.6			染付は淡明青色顔料による手描きの文様
	21	肥前	染付そば猪口	17C末～18C前半		4.0		染付は明青色顔料による輪文のみ
	22	肥前	染付仏飯器	17C後半～18C初	8.4	4.9	5.6	染付は灰青色顔料による手描きの植物文
	23	肥前	染付皿	17C後半	11.3			染付は灰青色顔料による手描きの文様あり
	24	肥前	染付皿	18C	12.7			染付は灰青緑色顔料による手描きの文様あり
	25	肥前	染付皿	18C後半	13.9			染付は灰青色顔料による手描きの植物文
	26	肥前	色絵皿	17C末～18C中葉	12.3			口縁部内面に黒色顔料がわずかに残る
	27	肥前	染付蓋	1690～18C前半	12.5		3.6	染付は明青色顔料による手描きの植物文
	図29-1		煙管　雁首		全長5.6			首部の腹部にツブレあり
	2		煙管　吸い口		全長5.8			吸い口末端にツブレあり
	3		煙管　吸い口		全長5.8			中央部にツブレあり　吸い口末端断面は丸い
	4		煙管　吸い口		全長5.5			吸い口末端断面は丸い
	5		煙管　吸い口		全長7.3			吸い口に近い所にツブレあり　末端断面は丸みを帯びる
	6		銭					「寛永通寶」（古）
	7		銭					「寛永通寶」（古）
	8		釘		遺存長6.8　径0.4			
	9		釘		遺存長3.4　径0.3			
	10	上野	砥石		7.9×3.0×2.4			緑色凝灰岩　使用中に破損したものをノミで微調整している
	11		硯		10.4×7.5×2.1			淡黄色頁岩　泥質でかなり軟質　砥石用材かもしれない
	図30-1		漆器椀		11.8	6.0		器壁内外面共に赤色漆、口縁端部は黒色漆が塗られる
	2		漆器椀		10.8			器壁内面は赤色漆、外面は黒色漆
	3		漆器椀			5.4		器壁内外面および外底部は赤色漆、高台畳付は黒色漆
	4		漆器椀		11.0	6.0	7.0	器壁内面は赤色漆、外面は黒色漆
	5		漆器椀			7.6		器壁内外面は赤色漆、高台～内底は黒色漆　底裏は赤色漆で「長元」
	6		椀		11.7	9.0	2.0	漆は塗布されず、木地の成形痕、外底面に爪痕残る　未製品か
	7		箸		全長21.0　径0.6			先端部は削りなし　折れなし
	8		箸		全長19.9　径0.5			先端部は削りなし　折れあり
	9		箸		遺存長14.1径0.5			先端部は削りなし　折れあり
	10		箸		遺存長12.7径0.6			先端部は削りなし　折れあり
	11		箸		遺存長8.6　径0.5			先端部は削りなし　折れ不明
	12		曲物蓋板転用まな板					有孔　蓋板をまな板に転用した後、全面に黒色漆を塗布して再転用
	13		曲物　底板		17.7×4.7×1.4			無孔　表裏面共に刃物痕が残る　転用まな板か？
	14		円板		10.4×5.4×0.7			無孔
	15		円板		9.6×9.4×1.4			無孔　木地は硬い
	16		用途不明		8.5×2.5×0.7			全面に黒色漆が塗布されていたと思われる
	17		連歯下駄		22.1×8.7×1.3			
	18		羅宇		遺存長15.2径1.2			細竹　先端部は折り曲がっている
	19		織り具？		12.3×2.1×1.2			中央部は磨滅痕
	20		用途不明		15.8×1.2×0.8			下先端部にわずかに切れ込みが入る
	21		刀子の鞘？		23.3×3.0×0.8			
水路4	図31-1		かわらけ	中世	7.3	5.2	1.7	体部外面に稜を持たず、器壁はやや外反気味に立ち上がる
	2		かわらけ	中世	8.4	6.1	1.5	体部外面に稜を持たず、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	3		用途不明			15.8		黄灰色瓦質土　内面は黒色　外面下位は横方向のナデ調整
	4		山茶碗窯系こね鉢		31.6			白色および黒色微粒を僅かに混じえる灰色弱粘質土
	5	常滑	こね鉢	赤羽・中野８型式	23.1			灰白色土　体部外面中位から下方は指頭によるナデ調整
	6		すり常滑		5.7×7.1×1.5			
	7	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	35.3			淡黄白色粉質気味土　釉は淡茶～茶褐色
	8	美濃	鉛釉筒型香炉	?				黄白色粉質緻密土　釉は二次焼成により白濁～明茶色
	9	美濃	鉛釉半菊文筒型香炉	?				黄白色粉質緻密土　釉は黄土色
	10	瀬戸美濃	灰釉皿	?	13.4	9.1	3.2	黄味白色粉質土　釉は薄黄～黄味灰緑色　重ね焼痕
	11	肥前	京焼風碗	17C後半～18C初	12.6			白黄色弱粘質土　釉は無色透明　貫入
	12	肥前	染付碗？	17C中葉～末		3.1		染付は明青色顔料による輪文がわずかに残る
	13	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.0			染付は淡明青色顔料による手描きの植物文
	14	肥前	染付そば猪口	17C末～18C前半	8.7			染付は明青色顔料による手描きの三ツ点文
	15	舶載磁器	染付碗	明末（1590～1630）	11.9			染付は淡灰青色顔料による手描きの植物文
	16		煙管　雁首		全長5.8			腹部中央にツブレあり
	17		包丁		8.3×4.1×0.2			
	18		銅製　飾り金具		0.9×7.6×0.1			
	19		織り具？		21.1×4.4×2.2			糸巻か？
	20		曲物　蓋板		30.0×12.4×1.9			有孔
水路5	図32-1		須恵器　甕	?	17.5			赤褐色緻密土　器表は黒灰色　口縁部と頸部に櫛掻き波文が巡る
	2	瀬戸内	土器碗			3.8		石英小石～粒を混じえた白色土　胎心は灰黒色　焼成良好
	3		軒瓦					細砂を混じえる灰黒色土　凸凹面ともに指頭ナデによる調整
	4		丸瓦					胎土は白～灰黒色土　凸面は縄目叩き、凹面は糸切り痕残る
	5		平瓦					胎土は細砂を混じえる灰黒色～灰色土
	6		すり常滑		6.6×9.0×1.3			
	7		すり常滑		4.4×5.1×1.4			
	8		すり常滑		4.3×4.8×1.5			
	9		すりこね鉢		3.9×9.8×1.1			山茶碗窯系こね鉢転用
	10		すり常滑		7.2×6.3×1.1			
	11		すり常滑		2.6×3.5×1.1			
	12		すり常滑		3.2×3.1×0.8			
	13		すり常滑		3.9×6.8×1.5			
	14		すり常滑		5.9×6.5×1.1			
	15		すり常滑		6.3×4.8×1.4			

表５（５）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	16		すり常滑		6.7×7.0×1.3			
	17		すり常滑		8.8×8.7×1.1			
	18		すり常滑		8.0×6.4×2.1			こね鉢転用
	19	常滑	壷	?				口縁部は横方向のナデ、体部外面上位から下方は指頭によるナデ調整
	20	常滑	甕	赤羽・中野6型式				白色小石を混じえる黒色土　器表は赤褐色
	21	常滑	甕	赤羽・中野6型式				灰黒色土　器表は茶褐色　縁帯より下方は横方向のナデ調整
	22	常滑	甕	赤羽・中野9型式				白色小石を混じえる灰色土　器表はツヤのある赤褐色
	23	常滑	こね鉢	赤羽・中野6型式?				黒色緻密土　体部外面上位から下方は指頭によるナデ上げ
	24	常滑	こね鉢			14.8		外面下位はヘラナデ上げ、中位は指頭押圧　内面は磨滅する
	25	常滑	こね鉢			14.4		外面下位はヘラナデ上げ、中位は指頭押圧　内面は磨滅する
	26	常滑?	壷or甕			12.8		石英小石を多く混じえる明橙色土　外底部は砂底　内底はロクロ目
	図33-1	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	32.8			淡黄白色土　釉は暗茶色
	2	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	30.0			淡黄白色ボソボソ土　釉は茶色　内面やや磨滅
	3	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代?	37.5			黒色微粒を多く混じえる淡橙茶色　釉は暗茶色
	4	備前?	擂鉢		30.3			白色石～粒を少量混じえる茶色粘質土
	5	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢			15.2		淡黄白色　釉は茶色でツヤない　外底面は糸切り　内面磨滅
	6	?	擂鉢			11.0		灰色粘質土　外底部は砂底　内面は著しい磨滅痕
	7	?	擂鉢			10.6		白色微粒を多く混じえる黒灰色土　外底面は砂底　内面は著しい磨滅
	8	?	擂鉢			15.2		白色微粒を僅かに混じえる灰褐色土　内面は著しい磨滅痕
	図34-1	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	33.4	12.6	12.6	淡黄白色　釉は茶褐～黒茶色　外底面糸切り　内面は著しい磨滅痕
	2	信楽系	擂鉢			15.0		白色小石を多く混じえる淡茶色粘質土　外底面は砂底　内面は磨滅痕
	3	信楽系	擂鉢			15.8		白色小石を混じえる淡茶色粘質土　外底面は砂底　内底面は磨滅痕
	図35-1	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		8.2	3.7	1.2	受け径5.2　受け高2.0　暗茶色緻密土　釉は暗茶色
	2	美濃	飴釉縁釉小皿	18C	10.0	6.2	1.9	黄白色弱粘質緻密土　釉は黄土～茶褐色　内底部うのふ釉かかる
	3	美濃	灰釉？小壷	18C				黄味灰白色粘質緻密土　釉は肩部より上位はうのふ釉、下位は灰釉
	4	美濃	灰釉？筒型香炉	?	10.7			黄白色弱粘質緻密土　釉は濃灰緑色　二次焼成
	5	瀬戸	灰釉平碗？	15C前半		4.6		淡黄白色粉質緻密土　釉は二次焼成を受け白濁～淡緑色
	6	瀬戸	長石釉皿	17C前半		8.4		黄白色粉質土　釉は黄味乳白～乳灰色　外底部の釉は拭い取り
	7	瀬戸	灰釉縁部流し菊花皿	17C後半	13.1	7.3	2.9	黄味白色粉質土　釉は黄味淡緑色　口縁付近に銅緑釉かかる
	8	瀬戸美濃	長石釉皿	17C代		6.4		灰白～暗灰色土　釉は乳白色　外底面の釉は拭い取り
	9	瀬戸美濃	長石釉皿	?		6.5		灰色土　釉は乳白色　外底部の釉の拭い取りは行なわれない
	10	瀬戸	鉄釉片口鉢	17C後半	14.3	13.8	9.1	灰白色弱粘質緻密土　釉は暗茶色　浅い高台もどき付く
	11	?	鉄釉壷	?	27.4			灰白色弱粘質緻密土　釉はツヤのある暗茶～明茶色
	12	肥前　内野山	掛け分け碗	17C後半～18C前半	8.8			灰白色緻密土　釉は内面灰釉、外面銅緑釉の二度施釉　掛け分けが逆
	13	肥前　内野山	掛け分け皿	17C末～18C前半	10.9			淡茶色弱粘質緻密土　釉は内面は灰釉、外面は淡茶色釉
	14	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	12.7	4.8	3.9	淡灰白色土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は不透明な灰釉
	15	肥前　内野山	灰釉蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	16.8	5.6	4.5	淡茶色緻密土　釉は掛け分け無く内外面共に不透明な灰釉
	16	肥前　内野山	掛け分け皿	17C後半～18C前半	19.6			淡茶色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明灰釉
	17	肥前　内野山?	灰釉蛇の目釉ハギ皿	?		6.5		灰白色緻密土　釉は内外面ともに不透明な灰釉
	18	肥前?	蛇の目釉ハギ皿	17C後半～18C前半		5.0		橙色緻密土　釉はオリーブ色だが一部二次焼成のため白濁　貫入
	19	肥前　唐津	三島手皿	17C後半～18C前半	27.6	11.6	8.6	茶褐色粘質堅緻土　釉は白濁釉の上に透明釉　外面は茶色気味透明釉
	20	肥前　唐津	二彩手皿	17C末～18C中葉		12.0		暗茶褐色堅緻土　器壁内面は波状文　内底面に砂目痕残る
	21	肥前　唐津	二彩手皿	17C後半～18C初	32.8	14.0	11.2	赤褐色堅緻土　釉は茶色釉、白濁釉、一部銅緑釉　砂目痕5箇所
	22	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗		13.9			明白灰色弱粘質土　釉は淡オリーブ色　破損断面に漆による補修痕
	23	舶載磁器	青磁見込み釉ハギ碗	明代		5.2		明灰白色弱粘質土　釉は薄草緑色　見込みに押印による植物文
	24	舶載磁器	青磁碗	明代		3.4		明白灰色弱粘質土　釉は草緑色　細貫入
	25	国産磁器	青磁灰落し	17C末～18C前半	5.8			薄灰白色粘質緻密土　釉は灰緑色
	図36-1	肥前	染付碗	18C前半	7.8			染付は明青色顔料によるコンニャク印判の蓮花文
	2	肥前	染付碗	18C前半	9.5			染付は藍色顔料による手描きの植物文?
	3	肥前	染付碗	18C前半	9.0			染付は明藍色顔料による手描きの植物文
	4	肥前	染付碗	18C前半	10.3	4.2	6.0	染付は明青色顔料による手描きの植物文
	5	肥前	染付碗	18C前半		3.6		染付は淡灰青色顔料による手描きの文様
	6	肥前	染付碗	18C前半		4.0		染付は明青色顔料によるコンニャク印判の植物文　底裏に「大明年製」
	7	肥前	染付碗	18C中葉前後	8.9			染付は藍色顔料による手描きの簡略化された梅樹文
	8	肥前	染付碗	18C中葉前後		4.0		藍色顔料による手描きの文様　底裏に崩れた「大明年製」
	9	肥前	染付碗	18C中葉頃	9.5			染付は淡明青色顔料による手描きの植物文
	10	肥前	染付碗	18C中葉頃		3.8		染付は明青色顔料による輪文のみ残る
	11	肥前	染付碗	18C中葉頃	10.7	4.0	5.3	染付は灰青色顔料による手描きの梅樹文　底裏に「大明年製」
	12	肥前	染付碗	18C中葉～後半	9.4			染付は灰青色顔料による手描きの梅樹文
	13	肥前	染付碗	18C末～19C初	9.8			染付は明青色顔料による手描きの植物文
	14	肥前	染付碗	18C頃		3.8		染付は明青色顔料による手描きの文様
	15	肥前	染付皿	1670～18C初頭	11.8	5.9	2.9	染付は明青色顔料による手描きの鳥文　破損断面に漆の補修痕あり
	16	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	17C後半	13.1	4.8	3.6	染付は灰青色顔料による手描きの線文様
	17	肥前	染付皿	18C	11.6			染付は灰青色顔料による手描きの文様
	18		銭					「永楽通寶」
	19		銅釘（鋲？）		全長3.8　径0.6			
	20		釘		全長10.6径0.5			
	21		曲物　蓋板		17.4×5.2×1.2			有孔　表裏面共に一部煤が付く
	22		石鍋		31.8			鍔部付近は横方向のササラ状沈線多い　削り痕はほとんど無い
	23	赤間	円形硯		8.6×5.2×1.5			破損後に再加工をしかけて途中放棄したものと思われる
	24	赤間	硯		6.6×3.5×1.5			底部破損後に再調整して使用
	25	赤間	硯石		8.1×6.1×5.8			加工痕、擦り痕などは見られない
	26	上野	砥石		10.6×3.5×2.9			緑色凝灰岩　上側面は簡単なノミ調整、下側面は破損後ノミで再調整
	27	上野	砥石		14.1×2.5×2.8			緑色凝灰岩　砥面以外は波板状のノミ痕残る
	28		五輪塔（空・風輪）		長30.1　幅18.2			粗粒安山岩
水路6	図37-1	常滑	甕	赤羽・中野6型式				白色微石を混じえる黒灰色粘質土　器表は赤褐色
	2		銅？製品		2.5×2.7×0.3			表面は平滑　用途不明

表5（6）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	3		鉄釜		24.6			
	4		銭					「永楽通寶」
水路1～6	図38-1		かわらけ	中世	8.2	6.0	1.4	体部外面に強い稜を持たず、器壁はゆっくり開きながら
	2		かわらけ	中世	7.8	6.0	1.4	立ち上がる
	3		かわらけ	中世	9.2	6.8	1.6	底部厚に比べ器壁が薄い　器壁はゆっくり外反しながら開く
	4		瓦質火鉢		21.4			淡黄色粉質土　胎芯は黒色　内外面共に横方向のナデ調整
	5	信楽系	擂鉢			15.8		灰～黒灰色弱粘質土　外底部は砂底　内面は著しい摩滅痕
	6	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代？	32.3			淡黄白色土　釉はツヤの無い茶色　極く薄く施釉される
	7	志戸呂	錆釉灯明皿上皿		11.4	4.4	2.0	淡茶色緻密土　釉は茶色　煤付着
	8	瀬戸美濃	灰釉瓶掛？	?	28.3			淡黄味白灰色粉質緻密土　釉は淡緑色の灰釉と黄茶色の鉄釉
	9	?	鉄釉壷	?	17.4			明茶褐色緻密土　釉は口縁部付近は明茶色、下位は黒褐色
	10	肥前　唐津	三島手皿	17C後半～18C前半	28.8			赤褐色堅緻土　釉は押印後、白濁釉を刷毛塗り
	11	肥前	京焼風？皿	?				黄白色粉質緻密土　釉は無色透明　細貫入
	12	肥前	染付碗	1660～1690年代	11.0	4.4	5.5	染付は明青色顔料による手描きの桐葉文
	13	肥前	染付碗	17C後半～18C初		6.0		染付は薄明青色顔料による手描きの植物文
	14	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.8			染付は灰青色顔料による手描きの植物文
	15	肥前	染付うがい碗	17C末～18C前半	13.6			染付は灰青色顔料による手描きの昆虫文？
	16	肥前	染付碗	18C前半頃	9.9			染付は明青色顔料による手描きの扇面と植物文の組み合わせ
	17	肥前	染付碗	18C前半		4.4		染付は明青色顔料による手描きの植物文？　破損断面に漆の補修痕
	18	肥前	染付碗	18C中葉前後		3.7		染付は藍色顔料による手描きの雪の輪文と植物文の組み合わせ
	19	肥前	染付碗？	18C中葉～後半		4.1		染付は灰青色顔料による輪文
	20	肥前	染付碗	18C後半	9.5	4.0	5.2	灰青色顔料の手描き雪の輪文と梅樹文　底裏は崩れた「大明年製」
	21	肥前	染付碗	明治以降	8.2	3.2	4.8	明青色顔料の流線文と薄紫色顔料の梅花文　見込み上絵付の「川橋」か
	22	肥前	染付碗	明治以降	8.2	3.3	4.6	明青色顔料と桃色顔料による銅版転写の植物文
	23	肥前	染付碗	明治以降	8.0	3.4	4.8	明青色顔料と桃色顔料による銅版転写の植物文　底裏は「白泉」
	24	肥前	染付碗	1780～1810年代		3.2		染付は薄明青色顔料による線描き文　見込みは崩れた「壽」
	25	肥前	染付碗	18C前半		3.1		染付は明青色顔料による輪文
	26	肥前	染付盃	17C末～18C前半	6.5			器壁薄い　残存部に染付は見られない
	27	肥前	色絵皿	明治以降		7.2		藍色顔料と黄緑顔料による手描きの植物文　底裏は朱で白抜き
	28	肥前	染付蓋	明治以降	7.8		2.5	明青色顔料による輪文と白抜きの花文
	29		桜		遺存長11.1径0.8			表裏面ともに木材痕が残る
水路北地業層	図39-1		土師器　壷	古墳前期				肩部外面上位はハケ調整後、軽いヘラミガキが行なわれる
	2		かわらけ	中世	7.1	4.4	1.9	体部外面に強い稜を持たず、器壁は開きながら立ち上がる
	3		かわらけ	中世	7.6	5.1	1.5	
	4		かわらけ	?	8.9	5.9	1.7	口径値大きめ　器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	5		土製不明品			4.6		かわらけ質の胎土　内面に擂り鉢状の条線あり
	6		土製不明品			6.9		黄灰色粉質土　体部外面は横方向のナデ　底部中央の焼成前の穿孔
	7		土製不明品					黄灰色粉質土　図39-6と同じ胎土か？　肩部に焼成前の穿孔
	8		土製不明品			24.5		黒、白色砂を多く混じえる橙色土　団子状の脚は4脚か？
	9		土錘		遺存長5.2　径1.9			雲母、白色微粒、赤褐色泥粒を多く混じえる橙色土
	10		瓦質火鉢					淡紅白色粉質土　体部外面は軽いミガキ、内面は指頭押圧とナデ調整
	11		瓦質火鉢					白色土　体部外面はミガキ、内面は横方向のナデ調整
	12		丸瓦					細砂を混じえる灰黒色土　凸面はヘラナデ、凹面はヘラ切り痕残る
	13		役瓦？					細砂を混じえる灰黒色土　凸面はミガキ？凹面はヘラ調整痕のこる
	14		軒平瓦					細砂、白色粒を混じえる灰黒色土　瓦当部に唐草文
	15		桟瓦					細砂を混じえる灰黒色土
	図40-1		須恵器　坏	?	10.4			白色粒を混じえる灰色土　焼成良好
	2		山茶碗窯系こね鉢			14.5		灰色土　高台貼り付け後の調整は丁寧　内面摩滅
	3	常滑	山茶碗	赤羽・中野5型式				灰白色緻密土　内面に摩滅痕は見られない
	4	常滑	壷or甕	?				石英小石～粗砂を混じえる黒色土　器表は赤褐色
	5	常滑	甕	赤羽・中野6型式				石英粗粒を多く混じえた灰白色土　器表は茶色　口縁部内面に降灰
	6	常滑	甕	赤羽・中野6型式				石英粗砂を混じえる暗灰色土　器表は灰黒色
	7	?	甕					白色粗砂～小石、黒色砂を混じえる灰黄色粘質土　器表は赤茶色
	8	備前系	擂鉢		38.9			白色細石を混じえる赤褐色粘質土
	9	備前系	擂鉢		31.7			白色細石を混じえる茶褐色粘質土　器表は暗茶褐色
	10	備前系	擂鉢		33.6			白色微粒をわずかに混じえる赤褐色粘質土　器表は暗赤褐色
	11	備前系	擂鉢		38.6			白色微粒を多く混じえる茶褐色粘質土　器表は暗赤褐色
	図41-1	備前系	擂鉢		37.2			白色細石を混じえる赤褐色粘質土　器表は暗赤褐色
	2	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	18C代	32.8			混入物の多い淡黄白色土　釉は茶色
	3	備前系？	擂鉢			15.6		白色微粒を多く混じえる茶褐色土　内面は著しい磨滅
	4	備前系？	擂鉢			15.9		白色微石を多く混じえる淡橙色土　内面は著しい磨滅　砂底
	5	備前系	擂鉢			16.0		白色微粒を混じえる茶褐色粘質土　外底面は調整　内面は著しい磨滅
	6	備前系	擂鉢			14.8		白色細石を混じえる赤褐色粘質土　外底部は丁寧に調整　磨滅なし
	7	?	鉄釉擂鉢			10.8		白色微粒を混じえる暗赤褐色粘質土　釉は暗茶色　内面磨滅
	8	信楽系？	擂鉢			19.0		混入物の多い淡茶色粘質土　外底面は砂底　磨滅痕なし
	9	瀬戸美濃系？	鉄釉擂鉢			11.4		混入物の多い淡黄白色土　釉は茶褐色　外底面糸切り　内面磨滅
	10	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢			13.6		黒色砂を混じえる淡黄白色土　釉は暗茶色　外底面糸切り　内面磨滅
	11	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢			13.6		淡黄白色土　釉は暗茶色　外底面糸切り　内面は磨滅
	図42-1		すり常滑		5.2×5.4×1.2			
	2		すり常滑		5.6×6.6×1.3			
	3		すり常滑		7.4×7.2×1.8			
	4		すり常滑		5.5×7.3×1.0			
	5		すり常滑		5.3×7.1×1.4			
	6		すり常滑		5.7×8.0×0.9			
	7		すり常滑		6.6×5.4×1.4			
	8		すり常滑		5.2×5.3×1.2			
	9		すり常滑		5.6×11.4×0.8			

表5（7）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	10		すり常滑		6.7×10.5×1.6			
	11		すり常滑		5.5×7.7×1.0			製品破損後、すり常滑用に適度な大きさに打ち欠いている
	12		すり常滑		5.1×5.7×1.2			
	13		すり常滑		5.7×3.8×1.0			
	14		すり常滑		3.5×3.9×1.1			
	15		すり常滑		3.4×6.0×1.0			
	16		すり常滑		4.8×6.5×1.2			
	17	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		10.2	5.4	1.4	受け径6.7　受け高2.0　胎土は硬く焼きしまる
	18	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		11.6	6.0	2.0	受け径6.9　受け高2.4　白色粒を混じえる淡橙茶色土
	19	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		11.1	5.5	1.9	受け径7.3　受け高2.5　白色粒を混じえる淡茶色土
	20	志戸呂	錆釉灯明皿受け皿		10.2	4.6	1.9	受け径6.4　受け高2.8　白色粒を多く混じえる茶色土　煤付着
	21	志戸呂	錆釉灯明皿上皿		11.0	5.0	2.0	白色粒を少量混じえる淡茶色土　煤付着
	22	志戸呂	錆釉灯明皿上皿		10.9	4.6	2.2	白色粒を混じえる淡橙茶色土　煤付着
	23	志戸呂？	錆釉灯明皿上皿		9.5	4.8	1.6	混入物の多い暗茶色土　外底部は無釉
	24	志戸呂？	錆釉灯明皿上皿		10.2	5.6	1.7	淡茶褐色土　体部外面中位から外底部まで無釉　煤付着
	25	志戸呂？	錆釉灯明皿上皿		7.6	4.3	1.6	淡茶色土　体部外面中位から外底部まで無釉　外底部糸切り
	26	志戸呂	鉄釉縁釉小皿		10.9	4.4	2.2	黄味白灰色弱粘質緻密土　釉は黒褐色＋茶褐色半透明
	27	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.5	4.8	2.0	淡黄白色精土　見込みに重ね焼き痕　外底部の釉は拭い取り
	図43-1	美濃	掛け分けせんじ茶碗	?	9.5	4.0	4.9	白灰色弱粘質緻密土　灰釉は淡緑色、鉄釉は茶褐色不透明
	2	美濃	掛け分けせんじ茶碗	?		4.0		白灰色弱粘質土　灰釉は淡灰緑色、鉄釉は明茶色
	3	美濃	灰釉丸碗	18C前半	11.3	5.0	7.5	黄味白灰～灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色　畳付スリなし
	4	美濃	鉛釉筒型香炉	?	10.4	7.8	6.4	黄白色粉質土　釉は黄味灰緑色　外面二次焼成
	5	美濃	鉛釉筒型香炉	?				黄白色粉質緻密土　釉は黄土色　外面二次焼成
	6	美濃	鉛釉？香炉	?	11.8			黄白色粉質緻密土　釉は黄味灰緑色　薄い施釉　内外面二次焼成
	7	美濃	黄釉織部流し筒型香炉	?	12.2			黄白色粉質緻密土　釉は黄灰緑色　内外面強い二次焼成
	8	美濃	灰釉香炉？	18C		9.0		黄白色弱粘質土　釉は淡緑色透明　内底面煤付く　畳付にスリなし
	9	美濃	御深井釉摺絵菊花文香炉	18C		7.3		淡黄味白色弱粘質緻密土　釉は淡緑色　底裏に墨書による「十二」
	10	美濃	灰釉？水注	18C		6.1		淡黄土色粘質緻密土　釉は淡黄色　外面二次焼成　畳付スリなし
	11	美濃？	鉄釉小壺	?				白灰色弱粘質緻密土　釉は茶色で柿釉っぽい
	12	美濃	灰釉鉢	18C前半				白灰色粘質緻密土　釉は濃灰緑色
	13	美濃	鉛釉鉢	18C前半	15.9			黄白色弱粉質土　釉は明黄土色　黄瀬戸っぽい
	14	美濃	鉛釉鉢	18C前半	18.0			黄白色弱粘質緻密土　釉は黄土色　内外面二次焼成により白濁
	15	美濃	灰釉鉢	18C前半	13.2			白灰色粘質緻密土　釉は濃灰緑色
	16	美濃	黄釉鉢	18C前半	20.0	11.6	8.6	黄白色弱粘質緻密土　釉は淡黄色
	17	美濃	御深井釉摺絵皿	18C前半	11.9	5.9	2.8	灰白色弱粘質緻密土　釉は淡緑色透明　見込みの円錐ピン痕を調整
	18	美濃	灰釉縁釉小皿	18C	10.5	5.0	1.8	黄白～灰色弱粘質緻密土　釉は濃灰緑色　灯明皿として使用？
	19	美濃	灰釉小皿	18C	10.7			黄白色粘質緻密土　釉は黄味灰緑色透明　ごく薄く施釉
	20	美濃	鉛釉縁釉小皿	18C	11.0	6.0	2.3	黄白色弱粘質緻密土　釉は黄土色　外底面はヘラ調整
	21	美濃？	灰釉輪はげ皿	18C		7.0		黄白色粉質緻密土　釉は黄白色　輪はげ部分は黒ずむ
	22	美濃	灰釉？笠原鉢？	17C後半～18C前		14.9		淡黄土色粘質緻密土　釉は乳暗黄色　畳付にスリ痕なし
	23	美濃	黄瀬戸系織部流し大平鉢	18C初め	27.7	10.5	8.5	黄白色弱粘質緻密土　釉は淡黄色　トチ痕は4箇所　内外面二次焼成
	24	美濃	灰釉？笠原鉢	18C	31.3			黄土色弱粘質緻密土　釉は鼠～淡黄色　内外面ともに強い二次焼成
	25	瀬戸美濃	灰釉？鉢	?	20.4			白灰色弱粘質土　釉は黄味白色
	図44-1	瀬戸	天目茶碗	中世				黄味白灰色弱粘質緻密土　釉は明茶色と暗茶褐色の二度施釉　補修痕
	2	瀬戸	灰釉碗	14C代		5.6		白灰色弱粘質緻密土　釉は淡緑色　外底面糸切り　二次焼成
	3	瀬戸	灰釉平碗	15C第３四半期		5.6		白灰色粉質緻密土　釉は淡緑色透明　畳付には糸切痕残る
	4	瀬戸	腰錆茶碗	18C第４四半期	9.7			淡黄白色粉質土　灰釉は淡黄色、鉄釉は茶褐色
	5	瀬戸	灰釉皿	18C		8.0		黄白色粉質気味土　釉は黄味淡緑色
	6	瀬戸	灰釉皿	?		7.8		白色粉質緻密土　釉は淡灰緑色透明
	7	瀬戸	灰釉折縁鉢	14C第２四半期	23.4			灰白色粉質緻密土　釉は淡緑色だが二次焼成により半失透
	8	瀬戸	灰釉鉢	?	16.2			白黄色粉質土　釉は黄味淡緑色　口縁部周辺は薄い黄土色
	9	瀬戸	柿釉壺？	?				淡黄白色弱粘質緻密土　釉は黒＋明茶色
	10	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	11.7	4.8	3.8	淡黄色土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	11	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	やや新しめ	11.2	4.5	3.0	明灰白色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	12	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半？		4.3		淡茶色緻密土　内面は透明釉と銅緑釉の二度施釉　外面は半透明灰釉
	13	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半	15.2	5.1	4.2	淡茶色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	14	肥前　内野山	掛け分け皿	17C後半～18C前半	15.7			淡黄色土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	15	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C前半		5.7		淡茶色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明な灰釉
	16	肥前　内野山	銅緑釉蛇の目釉ハギ皿	17C末～18C中葉		4.4		淡灰白色緻密土　釉は内面は銅緑釉　外面は露胎
	17	肥前　唐津？	刷毛目文碗	17C末～18C前半	11.6			淡橙色緻密土　釉は白濁釉による刷毛目　貫入
	18	肥前	輪花刷毛目文皿？	?				薄茶色土　内面は白濁＋黄茶色色の刷毛目、外面は淡茶色釉を施釉
	19	肥前	刷毛目瓶	17C後半				暗茶褐色堅緻土　釉は暗茶色釉の刷毛目と青味深草色釉を施釉
	20	肥前	京焼風？碗	?	8.9			黄白色弱粉質緻密土　鉄絵は手描きの植物文
	21	肥前　唐津	三島手皿	18C		9.9		暗茶褐色堅緻土　釉は内面は白濁色＋透明釉、外面は明茶色
	22	肥前　唐津	三島手皿	?				赤褐色堅緻土　釉は薄い白濁釉＋透明釉　外面は茶褐色不透明釉
	23	肥前　唐津	二彩手皿	18C	23.5			赤褐色堅緻土　釉は内面は薄い白濁釉＋透明釉
	24	肥前　唐津	二彩手皿	18C	34.0			暗茶褐色堅緻土　釉は白濁釉は見られず透明釉のみ
	25		擦り唐津	18C				暗赤褐色堅緻土
	図45-1	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗		14.4			明白灰色粘質土　釉は淡青色
	2	国産磁器	青磁火入れ？	17C末～18C前半	6.3			黒色微粒をやや混じえる明灰白色土　釉は淡青緑色
	3	肥前	白磁碗	18C前半～中葉		4.4		黒色微粒を多く混じえる白色弱粘質土
	4	肥前	白磁碗	18C前半～中葉		5.0		黒色微粒を多く混じえる白色弱粘質土
	5	肥前	染付うがい碗	1690～18C前半	13.9	5.2	5.9	染付は明青色顔料による手描きの笹葉文、見込みに植物文と昆虫文
	6	肥前	染付碗	17C末～18C前半	8.5			染付は明青色顔料による手描きの鳥文？
	7	肥前	染付碗	18C前半	9.7			染付は明青色顔料によるコンニャク印判の植物文＋手描きの松葉文
	8	肥前	染付碗	18C前半		4.3		染付は明青色顔料による手描きの文様あり
	9	肥前	染付碗	18C前半～中葉		3.8		染付は淡灰青色顔料による輪文のみ残る

表５（８）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	10	肥前	染付碗	18C中葉前後	9.4			染付は藍色顔料による手描きの植物文
	11	肥前	染付碗	18C中葉前後	9.5			染付は藍色顔料による手描きの簡略化された梅樹文
	12	肥前	染付碗	18C中葉前後	9.3			染付は藍色顔料による手描きの植物文
	13	肥前	染付碗	18C中葉前後	9.5			染付は藍色顔料による手描きの簡略化された梅樹文
	14	肥前	染付碗	18C中葉前後	9.7			染付は藍色顔料による手描きの簡略化された植物文
	15	肥前	染付碗	18C中葉前後	10.6			染付は淡藍灰色顔料による手描きの植物文
	16	肥前	染付碗	18C中葉前後		4.0		染付は淡明青色顔料による輪文　底裏には文字残るが判読不可
	17	肥前	染付碗	18C中葉～後半		3.9		染付は灰青色顔料による輪文、底裏にも文様あり
	18	肥前	染付碗	18C中葉～末	10.5	4.5	4.8	染付は明青色顔料による線文様
	19	肥前	染付蛇の目釉ハギ碗	18C中葉～後半		5.1		染付は灰青色顔料による手描きの植物文か？
	20	肥前	染付碗	18C後半		4.2		染付は明青色顔料の手描き文様　底裏は簡略化された「大明年製」
	21	肥前	染付碗？	18C後半	5.3			染付は明青色顔料の手描き文様　底裏は簡略化された「大明年製」
	22	肥前	染付碗	18C		4.1		染付は明青色顔料による手描きの山水文？
	23	肥前	染付碗	18C頃	8.7			染付は明青色顔料による手描きの銀杏葉文
	24	肥前	染付碗	18C前半	7.7			染付は灰味薄青色顔料による手描きの文様
	25	肥前	染付盃	18C前半頃	6.5	3.0	2.7	染付は灰味淡青色顔料による手描きの動物or植物文
	26	肥前	染付盃	18C後半～19C初頭		3.1		染付は明青色顔料による手描きの文様
	27	肥前？	染付盃	18C前半～中葉		2.2		小片のため染付は見られない
	図46-1	舶載	染付皿	明代		9.6		淡青色顔料による外面は輪文、見込みは略梵字とアラベスク文？
	2	肥前	染付皿	1640～1650年代	18.4			染付は灰青色顔料による手描きの芙蓉手
	3	肥前	染付皿	1660～18C初頭		7.6		染付は明青色顔料による植物文　底裏に「製」
	4	肥前	染付皿	17C末～18C初	12.3	7.3	3.6	染付は内面は灰青色顔料の墨弾き、外面は灰緑色顔料の文様
	5	肥前	染付皿	1690～18C前半		6.8		染付は明青色顔料による墨弾き？　外面には手描きの文様
	6	肥前	染付皿	18C前半		8.2		灰青色顔料　内面は墨弾き、コンニャク印判の五弁花　外面は植物文
	7	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	18C前半～中葉	14.1	6.8	3.1	青灰色顔料と茶灰色顔料による濃筆の植物文　外面は手描き文様
	8	肥前	染付皿	18C中葉～末	13.3			染付は灰青色顔料による手描きの文様　植物文？
	9	肥前	染付蛇の目釉ハギ皿	18C後半～幕末		7.0		染付は淡灰青色顔料による手描きの文様
	10	肥前	染付そば猪口？	17C後半～18C前半		4.7		染付は灰青色顔料による輪文と手描きの文様
	11	肥前	染付そば猪口	18C前半		4.4		染付は灰青色顔料による手描きの文様　底裏は渦福文？
	12	肥前	染付そば猪口	18C前半頃	8.3			染付は灰青色顔料による手描きの文様
	13	肥前	染付蓋	18C後半～19C初頭				染付は明青色顔料による手描き？の文様
	14	肥前	染付瓶	17C後半		6.6		染付は灰青色顔料による手描きの文様　二次焼成
	15	肥前	染付瓶	17C末～18C初				染付は群青色顔料による手描きの青海波文か？
	16	肥前	染付瓶	18C前半				染付は暗藍色顔料による牡丹唐草文？
	17		木製品　鞘？		10.2×3.0×1.9			内側の溝はノミ状工具により彫り窪められる
	18		煙管　雁首		全長6.0			ツブレなし
	19		煙管　吸い口		全長6.4			ツブレなし
	20		煙管　吸い口		全長4.5			ツブレなし
	21		煙管　吸い口		全長5.6			ツブレなし
	22		包丁		26.2×4.2×0.4			
	23		包丁？＋握り					刃部9.4×2.8×0.3　鞘部7.1×2.1×1.0
	24		銭					「寛永通寶」（新）
	25		釘		全長10.7　径0.7			
	26	鳴滝	砥石		5.9×3.9×0.9			淡黄色頁岩　全面水磨しているため砥面を確定できない
	27	鳴滝	砥石		6.4×4.1×1.0			淡黄色頁岩　表面に使用による溝　左側面はノコギリ状擦り痕残る
	28	鳴滝	砥石		6.5×2.9×0.8			淡緑色頁岩　堅緻
	29	?	砥石		9.7×3.5×1.3			淡黄色頁岩
	30		五輪塔（空輪）		長12.6　幅14.4			花崗岩
建物１タタキ	図51-1	瀬戸	天目茶碗	大窯IV期　16C末	10.7			黄白色粉質気味土　釉は明茶色釉と暗茶褐色釉の二度施釉
陶器溜り	2	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		9.7	4.1	2.1	受け径6.6　受け高1.7　淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	3	美濃	鉄釉灯明皿上皿		9.6	4.6	2.0	淡灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	4	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		9.8	4.9	2.3	受け径6.8　受け高1.6　淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	5	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.2	4.4	2.2	淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	6	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		9.9	5.2	1.9	受け径7.4　受け高1.7　淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	7	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.0	4.3	1.9	淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	8	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.0	4.4	2.1	淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	9	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.0	4.6	2.5	淡黄灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	10	美濃？	鉄釉灯明皿受け皿		8.5	4.2	1.6	受け径5.8　受け高1.5　淡茶色粘質土　釉はツヤのある茶色
	11	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		10.1	4.3	2.2	受け径6.6　受け高1.8　淡灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	12	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.1	4.4	2.0	淡茶色粘質土　釉はツヤのある茶色
	13	肥前	染付神酒徳利	19C初～幕末	1.9			染付は灰青色顔料による蛸唐草文
建物２　P7	図52-1		かわらけ		7.1	4.8	1.7	体部外面中位に稜を持ち、器壁はやや内彎気味に立ち上がる
	2	美濃	灰釉皿	18C前半	12.5	6.9	2.5	灰白色弱粘質緻密土　釉は灰緑色　口縁部にはさみ工具痕　二次焼成
P75	3	肥前　内野山	掛け分け皿	17C末～18C前半	21.2			明灰白色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉　外面は半透明な灰釉
土壙7	4	肥前	染付碗	1640～1660年代		4.2		染付は灰緑～灰緑青色顔料による手描きの笹文？
	5		円形硯		6.9×4.5×0.9			黒色粘板岩　製品破損後、水磨する
	6		釘		遺存長8.4　径0.9			
土壙５	図53-1		桟瓦					灰色～淡紅色土　凸面はヘラナデ調整、凹面は粗れ砂痕残る
	2		軒丸瓦					灰橙色瓦質土
	3	常滑	甕	?	43.2			白色砂～粗砂を多く混じえる紅色土　器表は黒褐色
	4	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治		3.6		染付は明青色顔料による手描きの文様
	5	瀬戸美濃	染付型打成形水滴	19C				染付は明青色顔料で除刻後に行なわれる
	6	肥前	染付蓋	1780年代～19C前半	5.9		1.4	染付は明青色顔料による手描きの文様
	7	肥前	染付盃	18C	7.0	2.2	2.8	染付は薄明青色顔料による手描きの文様
	8	肥前	染付碗？	明治以降	12.4			染付は明青色顔料による銅版転写の羊歯文風
	9	肥前	染付蛇ノ目高台そば猪口	19C初～幕末	7.1	5.5	6.0	染付は明青色顔料による龍と雲　見込みにも文様
	10	肥前	染付皿	1690～18C前半		6.8		染付は明青色顔料の濃筆による文様

表５（９）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	11	肥前　志田	染付輪花皿	1820～1860年代	26.0	14.4	3.7	染付は明青色顔料による手描きの山水文？　破損断面に焼き継ぎ痕
	12	肥前	染付輪花皿？	18C末～幕末				染付は明青色顔料による　内面は羊歯文、外面は唐草文
	13		釘		全長6.9　径3.5			
	14		銅製　簪		全長12.7　径0.4			
	15		大釘		全長38.4　径1.4			
生活面下	図54-1		土師器　暗文坏	8C第1～2四半期	14.2			肌色粉質緻密土　内面は粗くミガキ調整される
	2		かわらけ	中世	7.7	5.0	1.7	器壁は内彎気味に立ち上がる
	3		かわらけ	中世	7.8	5.0	1.8	
	4		かわらけ	中世	9.0	7.1	2.2	口径値やや大きく、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	5		かわらけ	中世	8.7	7.0	2.1	器壁は直線状に立ち上がり側面観台形を呈する
	6		かわらけ		8.6	5.8	2.0	体部外面中位の凹みにより器壁は大きく外反する
	7		かわらけ	中世	10.9	6.0	3.5	器壁は外反気味に立ち上がる
	8		穿孔かわらけ		4.0×3.0×1.9			
	9	常滑	小壺	?	5.7			石英粗粒を混じえる灰色緻密土　口縁部周辺は降灰かかる
	10	常滑	壺	?	9.5			折り曲げただけのような口縁断面を呈する
	11	美濃	長石釉皿	17C		5.1		黄白色弱粘質緻密土　釉は黄味乳白色　外底面は拭い取り
	12	美濃	長石釉皿	17C後半	11.8	7.4	2.5	黄白～薄肌色弱粘質土　釉は淡緑味乳白色　外底部拭い取り
	13	美濃	灰釉輪ほげ皿	18C前半	17.0	7.5	2.8	灰色弱粘質緻密土　釉は二次焼成により乳灰色　灯明皿？
	14	美濃	鉄釉灯明皿上皿		10.7	5.6	2.0	淡灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	15	美濃	鉄釉鉢	18C前半	13.7			淡黄白色粉質緻密土　釉は暗茶褐～茶色で二度施釉
	16	美濃	灰釉水注	18C後半	4.5	7.0	10.2	黄白色弱粘質緻密土　釉は灰緑色　注ぎ口に鉛塊を詰め転用
	17	美濃	御深井釉摺絵鬢グライ	18C前半	12.1	12.8	4.0	明灰白色弱粘質緻密土　灰釉は淡緑味透明　鉄釉は明茶色
	18	瀬戸	天目茶碗	大窯期				黄味白色粉質土　釉は茶褐色釉の二度施釉　漆による補修痕
	19	瀬戸	天目茶碗	登窯期　17C代				黄白色粉質気味土　釉は茶褐色釉の二度施釉
	20	瀬戸	天目茶碗	登窯期　17C代	12.0			黄白色粉質土　釉は暗茶褐色
	21	瀬戸	灰釉瓶子	中世		9.8		灰色弱粘質緻密土　釉は灰味淡緑色透明
	22	瀬戸	鉄釉徳利	?		13.5		淡黄白色粉質緻密土　釉は暗茶色　外底面はナデ調整
	23	瀬戸	黄釉鉄絵皿	17C中	12.3	8.0	2.8	黄白色弱粉質土　釉は黄色だが二次焼成により一部白濁、鉄絵は茶色
	24	瀬戸美濃	鉄釉？皿	?		6.3		胎土は二次焼成により黒灰色　釉は暗茶褐色
	25	瀬戸美濃	鉄釉碗	17C後半		5.2		黄白色弱粉質土　釉は茶褐色で厚めに施釉
	26	肥前　唐津	二彩手皿	17C後半～18C中葉	34.3			赤褐色堅緻土　内面は波状文に白濁釉施釉後、透明釉
	27	肥前　内野山？	碗？	?		5.2		茶褐色堅緻土　釉は高台周辺は暗茶褐色半透明灰釉、上方は銅緑釉
	28	肥前	鉄絵砂目積み碗	17C前半	13.1			橙色堅緻土　二次焼成により鉄絵は白濁
	29	肥前	鉄絵砂目積み碗	17C前半	13.5	4.4	3.6	淡橙色堅緻土　鉄絵は手描きによる植物文？　二次焼成
	30	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗		11.3			明灰白色粘質土　釉は淡灰緑色
	31	舶載磁器	青磁碗			4.0		灰色弱粘質土　釉は明淡水色
	32	舶載磁器	白磁口兀げ皿			5.8		白色弱粘質土　釉は淡緑味乳白色　外底部は拭い取り
	33	舶載磁器	白磁口兀げ皿			5.8		淡灰色土　釉は乳白色　外底部は拭い取り
	34	舶載磁器	白磁口兀げ皿			6.6		白色弱粘質土　釉は淡青味乳白色　外底部は拭い取り
	35	舶載磁器	染付盃	明末1590～1630年代	5.5			白色粘質堅緻土　染付は灰味淡水色顔料による手描きの植物文？
	36	肥前	染付碗	17C中葉～末	8.1			染付は暗灰青色顔料による輪文
	37	肥前	染付碗	17C後半～18C初頭	10.4			染付は明青色顔料による手描きの植物文
	38	肥前	染付碗	1660～1670年代		4.3		染付は明青色顔料による一重網目文、見込みは手描きの文様
	39	肥前	染付碗	17C後半	9.8			染付は灰青色顔料による手描きの文様
	40	肥前	染付碗	18C前半		3.7		染付は淡灰青色顔料による手描きの植物文　破損断面に漆補修痕
	41	肥前	染付湯飲み碗	1780～1810年代	7.8			染付は明青色顔料による手描きの矢羽根文
	42	肥前	染付碗	18C末～幕末		5.1		染付は明青色顔料による手描きの山水文か？
	43	肥前	型打成形染付碗	1650～1670年代	13.8	4.3	5.0	松は型打　明青色顔料による手描きの山水文　破損面に漆の補修
	44	肥前	染付盃	17C後半		2.8		残存部に染付は見られない
	45	肥前	染付蓋	1630～1640年代	11.0		2.6	染付は灰青色顔料による手描きの植物文か？
	46	肥前	染付身？	18C末～幕末	11.7			染付は明青色顔料による手描き　破損断面に下手な焼き継ぎ痕
	図55-1	上野	砥石		11.4×3.7×2.6			左側面は磨滅痕、他面は波状ノミ痕を残す
	2	鳴滝	砥石		6.5×3.5×0.9			淡黄色頁岩で黒点が入る
	3	鳴滝	砥石		5.3×3.4×0.9			肌色頁岩
	4	鳴滝か？	転用砥石		3.1×2.4×1.0			淡黄色頁岩　砥石用材で硯を製作中に破損のため砥石に転用したもの
	5		硯		4.8×3.8×0.8			淡紅色頁岩
	6		脚付き鉄鍋					
	7		釘？		全長2.6　径0.4			
	8		釘隠し？		径3.8　遺存厚0.2			
	9		刀子or剃刀		幅1.2　遺存厚0.4			
	10		真鍮製　火箸？		全長20.4　径0.5			
	11		鉄楔		遺存長5.1			
	12		鉄楔		全長9.2　厚0.3			
	13		鉄楔		遺存長10.1厚0.3			
	14		釘		遺存長4.1　径0.8			
	15		釘		遺存長5.3　径0.7			
	16		銭					「皇宋通寶」
	17		銭					「皇宋通寶」
	18		銭					「元豊通寶」
	19		銭					「政和通寶」
	20		銭					「政和□寶」　政和通寶
	21		銭					「淳熙元寶」
	22		銭					「永楽通寶」
	23		銭					「寛永通寶」（古）
	24		銭					「寛永通寶」（新）
生活面上	図56-1		かわらけ	中世	6.2	4.3	1.6	熱による歪み、黒色化が著しい　「よりべ」か？
	2		土製　るつぼ？		4.0		4.0	外面は融着痕　内面は緑色鉱滓片が付着

表５（10）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	3		土器質ほうろく		22.7			黒色および白色砂を混じえた橙色粉質土　外面は煤付着
	4		須恵器　坏蓋	7C代	9.4		3.6	白色砂を少量混じえる明灰色土　焼成良好
	5	備前系	擂鉢		36.4			赤褐色粘質土　条線は太い
	6	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	19C以降		13.4		ボソボソした淡黄白色土　外底部はヘラ調整　釉は茶色
	7	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		9.5	5.1	1.7	受け径6.8　受け高1.4　淡灰色粘質土　釉はツヤのある茶色
	8	瀬戸	灰釉広口小壷	?	8.7	5.9	8.0	黄味白色粉質土　釉は黄味灰緑色　口縁部周辺は軽いスリ痕
	9	瀬戸美濃	白磁？蓋	?	7.8		1.6	淡黄味白色粉質緻密土　釉は透明
	10	舶載磁器	染付碗	明末16C後半～17C初	10.7			淡灰白色粘質堅緻土　染付は灰青色顔料による文様
	11	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治	7.7			染付は明青色顔料による植物文？
	12	瀬戸美濃	染付盃or小碗	幕末～明治		2.7		染付は明青色顔料　見込みには「染吉」、底裏には渦福文
	13	肥前	染付碗	1630～1640年代	8.6			染付は灰青色顔料による一重網目文
	14	肥前	染付碗	1630～1640年代		4.7		染付は淡灰青色顔料による一重網目文
	15	肥前	染付碗	18C前半頃		4.1		器壁は極く薄い　染付は明藍色顔料による輪文
	16	肥前	染付湯飲み碗	1780～1810年代	8.4			器壁は極く薄い　染付は明青色顔料による手描きの矢羽根文
	17	肥前	染付？小碗	18C前半		2.8		残存部に染付は見られない
	18	肥前	染付蛇ノ目高台そば猪口	18C末～19C初頭	7.5	5.4	5.9	染付は灰青色顔料による手描きの花、昆虫、菱形連続文など
	19	肥前	染付そば猪口	19C前半		6.0		染付は明青色顔料による手描きの波文？　高台が高く「上げ底」状
	20		碁石		径2.2　厚0.4			赤色泥岩の表面に黒色漆が塗られる
	21		鉄環		径0.5			つり手か？
	22		銅製　簪		全長13.0　厚0.2			同型の簪が土壙５より出土している
	23		かみそり？		全長6.3　幅3.8			
	24		真鍮製　刃物の握り		全長9.0　厚0.5			
	25		釘		全長5.0　径0.4			
	26		釘		全長4.8　径0.6			
	27		釘		遺存長9.2　幅1.2			
	28		銭					「景徳元寶」
	29		銭					「寛永通寶」（新）
	30		銭					「寛永通寶」（新）　背面「元」
	31		銭					「寛永通寶」　背面「文」　文銭
建物３　P8	図61-1		桟瓦	近世以降				細砂、褐色粒を混じえる瓦質土　凸面はヘラナデ、凹面は指頭ナデ
	2		かわらけ	近世？	7.9	7.0	1.7	黄褐色粉質土　背低で器壁は直立する　煤付着
	3	肥前	鉄釉碗	17C	10.1			淡橙色堅緻土
P11	4	肥前	染付油壷	18C末～幕末				染付は灰藍色顔料による手描きの蛸唐草文
P15	5		釘		全長4.4　径0.3			
P37	6		かわらけ	中世	7.0	5.1	1.4	背低で器壁は開きながら立ち上がる
P65	7	?	鉄釉鉢	?		17.5		白色砂～小石を混じえる白灰色土　釉は濃茶色　外底部は砂底
P83	8	肥前	染付皿	1640～1650年代	18.6			染付は灰青色顔料による手描きの芙蓉手文
P137	9		かわらけ	中世？	7.0	4.7	1.3	背低で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
井戸１	図62-1	常滑	こね鉢	?	26.6	15.2	10.6	一部片口が残る　外底部は砂底　磨滅痕なく降灰が残る
	2		すり常滑		7.1×8.4×1.4			
	3		すり常滑		7.5×8.2×1.4			
	4	美濃	灰釉？小盃	17C	7.4			灰白～黄味白灰弱粘質緻密土　釉は強い二次焼成により黄灰色
	5	美濃	灰釉鉢	17C後半	21.8	11.6	4.8	黄灰白色弱粘質緻密土　釉は黄緑灰色　口縁部は鉛釉が巡る
	6	瀬戸美濃	灰釉輪はげ皿	?		6.4		黄味白色粉質土　釉は黄乳白色　輪はげ部は錆釉が施釉される
	7	肥前	染付うがい碗	17C末～18C初め	14.7	4.9	6.0	染付は藍色顔料による手描きの植物文　見込みは宝文　口唇部は口銹
	8	肥前	染付碗	17C末～18C前半	10.3	4.4	6.0	染付は灰青色顔料による手描きの鳥文
	9	肥前	染付碗	18C前半	9.5			染付は灰青色顔料による手描きの植物文
	10	肥前	染付碗	18C前半	8.2			染付は明藍色顔料によるコンニャク印判の菊花文
	11	肥前	染付碗	18C前半	9.8			染付は灰青色顔料による簡略化された雨降り文
	12	肥前	白磁碗	18C前半～中葉	8.5			
	13	中国汕頭地方	呉須赤絵大皿	1590～1630年代				明灰色強粘質緻密土　上絵付は暗朱色と深緑顔料による手描きの文様
	14		煙管　雁首		遺存長6.4			
	15		銭					「寛永通寶」（新）　背面「文」
	16		銭					「寛永通寶」（新）　背面「元」
	17		包丁？		8.7×4.1厚0.3			
	18		銅製　針金？		径0.3			
	19	赤間	硯		3.5×7.4×0.8			製作途中の破損品
	20	赤間	硯		12.1×7.8×1.8			
	21		下駄		19.4×9.6×2.7			
	22		箸		全長20.6　径0.6			先端に削りはない　折れなし
	23		箸		遺存長16.4径0.6			先端に削りはない　折れなし
土壙３	図63-1		土製　壷		10.0			白色砂を少量混じえる赤褐色堅緻土
	2		土釜		21.8			石英粒～小石を混じえる橙色土　内面から鍔部までは黒色の鉄釉施釉
	3	?	不明陶器			9.1		白色砂を混じえる赤褐色土　無施釉　底裏は「清和堂」の押印
	4	備前系	擂鉢		30.6			暗茶褐色強粘質堅緻土　擂目は極く細い
	5	美濃	灰釉大皿	19C前半	30.0	19.3	4.9	淡黄白色粘質緻密土　釉は透明な灰緑色だが二次焼成で白濁
	6	?	水注？	?		9.6		暗灰色弱粘質緻密土　釉は二次焼成で内面は黒色、外面は白濁する
	7	?	灰釉鉄絵湯呑み碗	明治以降	7.2	3.8	4.6	黄白色弱粉質緻密土　鉄絵は茶褐色　二次焼成
	8	?	灰釉鉄絵湯呑み碗	明治以降	7.2	3.8	4.9	黄白色弱粉質緻密土　鉄絵は茶褐色　二次焼成
	9		真鍮製　楔の引き手		径7.8　厚0.2			
	10		真鍮製　碗		14.2	6.0	5.4	歪みが著しい
	11	国産磁器	青磁火入れ？		17.2			素地は明灰色堅緻土　釉は淡オリーブ色
	12	瀬戸	染付便器	明治～大正				染付は明青色顔料による手描きの植物文、雷文
	図64-1	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	10.3	5.7	5.2	染付は濃明青色顔料による手描きの植物、鳥文　底裏に「古陶園製」
	2	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	10.4	5.0	5.0	染付は濃明青色顔料による手描きの植物、鳥文　底裏に「古陶園製」
	3	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	9.9	3.6	4.4	染付は淡明青色顔料による手描きの植物文？　二次焼成
	4	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	10.4	4.0	4.7	染付は濃明青色顔料による手描きの植物文など　二次焼成

表５（11）

遺物観察表

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	5	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	10.1	3.6	4.9	染付は濃明青色顔料による手描きの植物文など　二次焼成
	6	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	10.5			染付は濃淡明青色顔料による手描きの幾何学文　底裏は「湖畔」
	7	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	11.4	5.2	5.3	染付は明青色顔料の輪文と黒藍色顔料の手描きの植物文　二次焼成
	8	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	9.5	3.8	5.2	染付は明青色顔料、暗緑色顔料の手描きの植物文　二次焼成
	9	瀬戸美濃	染付碗	近代以降		4.6		染付は明青色顔料による手描きの植物文
	10	瀬戸美濃	染付碗	近代以降		5.2		染付は明青色顔料による手描きの雷文
	11	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	8.2	3.8	4.7	染付は濃明青色顔料による銅版転写の植物文　二次焼成
	12	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	8.2	3.7	4.7	染付は濃明青色顔料による銅版転写の植物文　二次焼成
	13	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	8.1	3.8	4.7	染付は濃明青色顔料による銅版転写の植物文　二次焼成
	14	瀬戸美濃	色絵碗	近代以降	7.3	3.9	4.9	素地は白色粉質気味土　色絵は手描きによる山水文か？　二次焼成
	15	瀬戸美濃	色絵碗	近代以降	7.3	4.0	4.9	色絵は黒色顔料と茶色顔料による手描きの山水文か？　二次焼成
	16	瀬戸美濃	色絵碗	近代以降	7.4	4.2	4.8	黒色、茶色、明青色顔料による手描きによる山水文　二次焼成
	17	瀬戸美濃	染付碗	近代以降	8.1	4.0	4.5	染付は濃明青色、茶色顔料による手描きの樂と線文様　二次焼成
	18	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.0	4.4	7.1	明青色顔料による手描きの山水文　体部外面中位～下方は鉄釉施釉
	19	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.3	4.7	7.2	染付は明青色顔料による手描きのグルマとネコ　底裏に文字あり
	20	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.3	4.7	7.2	染付は明青色顔料による手描きのグルマとネコ　底裏に文字あり
	21	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.3	4.7	7.2	染付は明青色顔料による手描きのグルマとネコ　底裏に文字あり
	22	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.3	4.3	7.2	染付は明青色顔料による手描きのグルマとネコ　底裏に文字あり
	23	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.2	3.7	6.8	染付は明青色顔料による手描きの植物文　底裏は「□安東山」
	24	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	5.5	3.8	6.9	明青色顔料と淡桃色顔料の銅版転写による文様
	25	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	5.4	3.9	6.9	明青色顔料と淡桃色顔料の銅版転写による文様
	26	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.1			緑色顔料の刷絵？による文様
	27	瀬戸美濃	染付筒型湯呑み碗	近代以降	6.0	4.1	6.9	淡桃色顔料の銅版転写による植物文
	28	瀬戸美濃	染付輪花？碗	近代以降	10.4	4.5	4.7	明青色顔料による手描きの文様　底裏は押印による「愛山」
	29	瀬戸美濃	染付輪花碗	近代以降	12.8	6.1	5.3	明青色顔料と黄土色顔料による手描きの幾何学文　二次焼成
	30	瀬戸美濃	染付輪花鉢	近代以降	13.3	6.0	6.8	明青色顔料と黄土色顔料による手描きの幾何学文　二次焼成
	31	瀬戸美濃	染付輪花？鉢	近代以降		6.4		明青色顔料と黄土色顔料による手描きの幾何学文と山水文
	図65-1	瀬戸美濃	染付蛇の目高台輪花皿	幕末～明治	13.5	7.2	3.2	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文　二次焼成
	2	瀬戸美濃	染付角皿	幕末～明治				染付は灰青色顔料による手描きの鳳凰　底裏は「大化年製」
	3	瀬戸美濃	色絵蛇の目高台皿	近代以降		8.6		明青色、緑色顔料の手描き？植物文　二次焼成著しく色絵は剥落
	4	瀬戸美濃	染付輪花手塩皿	近代以降	7.4	5.2	1.8	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文　口唇に鉄釉がめぐる
	5	瀬戸美濃	青磁皿	近代以降	12.8	7.6	2.4	茶色、赤茶色、緑色顔料による手描きの植物文　釉は淡緑色
	6	瀬戸美濃	染付輪花？大皿	近代以降	24.2	15.3	3.2	染付は明青色顔料による手描きの山水文　口唇部と畳付は鉄発色
	7	瀬戸美濃	染付蛇の目高台大皿	1905年以降	26.2	12.4	3.9	染付は明青色顔料の銅版転写による文様　日露戦争勝利記念品か
	8	肥前	染付大皿	幕末～明治	24.9	13.9	4.2	染付は明青色顔料による手描きの紅葉と格子　強い二次焼成
	9	肥前　有田	染付楕円大皿	近代以降	23.9	11.3	3.2	明青色顔料による銅版転写の御所車　染付以外は淡緑色釉を施釉
	図66-1	肥前　志田山	染付蛇の目高台輪花小鉢	1820年代～幕末	14.5	8.6	4.4	染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文　口唇部は口銹風
	2	肥前　志田山	染付蛇の目高台輪花小鉢	1820年代～幕末	14.4	8.7	4.4	染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文
	3	肥前　志田山	染付輪花小鉢	1820年代～幕末	14.4			染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文
	4	肥前　志田山	染付蛇の目高台小鉢	1820年代～幕末		8.1		染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文
	5	肥前　志田山	染付蛇の目高台小鉢	1820年代～幕末		8.4		染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文
	6	肥前　志田山	染付蛇の目高台小鉢	1820年代～幕末		8.3		染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの山水文
	7	肥前　志田山	染付輪花大皿	1820年代～幕末	32.6	19.3	5.5	染付は明青色～暗藍色顔料による手描きの植物文
	図67-1	肥前	染付蛇の目高台八角鉢	1820～1860年代	12.2	6.1	5.3	染付は明紺色顔料による手描きの植物文
	2	肥前	染付蛇の目高台八角鉢	1820～1860年代	13.3	6.3	5.9	染付は明青色顔料による手描きの植物文
	3	肥前	染付八角鉢	1820～1860年代	13.3			染付は明青色顔料による手描きの植物文
	4	瀬戸美濃	染付小鉢	近代以降	10.7	6.2	4.2	染付は明青色顔料による手描きの山水文　口唇部は黄土色顔料がめぐる
	5	瀬戸美濃	染付輪花鉢	近代以降	11.1			明青色顔料と黄土色顔料による手描きの幾何学文　二次焼成
	6	瀬戸美濃	染付蛇の目高台輪花鉢	近代以降	16.4	8.2	5.6	見込みは明青色、緑色、淡桃色顔料の銅版転写による文様
	7	瀬戸美濃	染付蛇の目高台輪花鉢	近代以降	19.3	10.7	6.4	染付は明青色顔料の銅版転写による文様
	8	瀬戸美濃	染付鉢	近代以降	15.7	8.0	6.6	明青色顔料と淡桃色顔料による色吹墨の山水文
	9	瀬戸美濃	染付蛇の目高台鉢	幕末～明治	24.3	13.7	7.8	染付は明青色顔料の型紙刷りによる文様
	10	瀬戸美濃	染付鉢	幕末～明治	25.4			染付は明青色顔料の型紙刷りによる連続文
	図68-1	瀬戸美濃	染付蛇の目高台小鉢	近代以降	12.3	5.2	5.3	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文と幾何学連続文
	2	瀬戸美濃	染付蛇の目高台小鉢	近代以降	12.1	5.6	5.2	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文と幾何学連続文
	3	瀬戸美濃	染付蛇の目高台小鉢	近代以降	13.5	6.7	5.1	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文と幾何学連続文
	4	瀬戸美濃	染付蛇の目高台小鉢	近代以降	13.5	6.8	5.6	染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文と幾何学連続文
	5	瀬戸美濃	染付蛇の目高台鉢	近代以降	17.3	9.9	6.1	染付は明青色顔料の銅版転写による文様
	6	瀬戸美濃	染付鉢？	近代以降		5.8		染付は明青色顔料による手描きの竹
	7	瀬戸美濃	染付蛇の目高台鉢	幕末～明治		13.2		染付は明青色顔料の銅版転写による文様
	8	瀬戸美濃	染付蛇の目高台鉢	近代以降	20.5	11.7	7.8	染付は淡灰色顔料による手描きの山水文　明青色、桃色顔料吹墨の文様
	9	瀬戸美濃	白磁鉄釉香炉	近代以降	6.6	4.6	5.4	体部外面は黒色釉と茶色釉を施釉
	10	瀬戸美濃	染付香炉	19C初～幕末	10.2			明灰青色顔料による手描きの山水文　体部内面中位から下方は露胎
	図69-1	瀬戸美濃	染付方形段重（上段）	近世以降	13.2	12.4	5.3	染付は明青色顔料による手描きの梅樹文が4面に描かれる
	2	瀬戸美濃	染付方形段重（下段）	近世以降	13.1	13.1	7.0	
	3	瀬戸美濃	染付方形段重蓋	近世以降				染付は明青色顔料による銅版転写の山水文　軽い二次焼成
	4	瀬戸美濃	染付方形段重	近世以降	10.8	10.7	6.0	下段側面には「青垂軒製」
	5	?	青磁水注蓋	近世以降	7.4	5.0	6.3	素地は混入物を全く含まない白色強粘質堅緻土　薄緑色顔料
	6	?	青磁水注	近世以降		7.2		強い二次焼成
	7	瀬戸美濃	色絵水注	近世以降	7.0	6.4	7.7	緑色、淡桃色、明青色顔料による手描きによる山水文　二次焼成
	8	瀬戸美濃	染付水注	近世以降	5.0	6.7	8.2	明青色、緑色、淡桃色、薄茶色顔料による植物文　強い二次焼成
	9	瀬戸美濃	染付蓮華	近世以降	4.6×7.2×0.5			明青色、緑色、茶色、桃色顔料による手描きの植物文　二次焼成
	10	?	染付玩具	近世以降				型つくりの猫
	11	?	染付玩具	近世以降				型つくりの猫
	12	?	染付玩具	近世以降				型つくりの犬
	13	?	白磁碗	近世以降	7.8	4.8	6.1	混入物を混じえない強粘質白色土　時代的にかなり下る
	14	?	白磁皿	近世以降	7.8	4.9	1.8	底裏まで施釉される　二次焼成

表5（12）

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	15	?	白磁皿	近世以降	13.5	9.2	2.5	混入物を混じえない強粘質白色土　時代的にかなり下る
	16	?	白磁輪花大皿	近世以降	22.7	12.8	2.6	混入物を混じえない強粘質白色土　時代的にかなり下る　二次焼成
	17	?	白磁大皿	近世以降	22.7	11.7	2.9	混入物を混じえない粉質白色土　時代的に下る　外底部は押印の「3」
	18	?	白磁蓋	近世以降	10.8	9.1		素地は混入物を混じえない強粘質白色土　時代的にかなり下るもの
土壙4	図70-1		熨斗瓦					細砂を混じえる灰黒色土　凸面はミガキ調整か
	2		桟瓦					灰黒～暗灰色土　凸面はクシ状工具、凹面はヘラによる調整
	3	備前系	擂鉢		32.9	14.2	12.0	白色微粒を多く混じえた灰～橙灰色土　外底部は砂底
	4	常滑？	甕		28.8			灰黒色緻密土　口縁部付近は横方向のナデ調整で降灰かかる
	5	美濃	鉄釉灯明皿受け皿		10.2	5.0	2.1	受け径7.2　受け高1.7　淡黄白色弱粘質土　釉はツヤのある茶色
	6	瀬戸美濃	長石釉皿	17C代		6.7		暗灰色弱粘質緻密土　釉は暗乳灰色
	7	瀬戸	灰釉鉢	18C中頃	21.5	9.8	5.3	白灰色粉質土　釉は二次焼成によりやや白濁した灰緑色
	8	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治	7.6			遺存部に染付は見られない　口唇端部に口銹めぐる
	9	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治		3.0		染付は明青色顔料による手描きの文様
	10	瀬戸美濃	染付碗	幕末～明治		3.2		染付は明青色顔料による手描きの文様
	11	肥前	染付蓋	1680～1700年代	7.4	3.5	4.8	染付は明青色～灰青色顔料による手描きの山水文
	12	肥前	染付皿	1640～1660年代		16.1		染付は藍色顔料による手描きの山水文
生活面上	図71-1		素丸瓦					粗砂、細砂、白色粒を混じえる灰黒色土　凹面はヘラ調整
	2	瀬戸美濃	鉄釉擂鉢			10.3		橙茶～黒灰色弱粘質土　釉は茶褐色　外底部は糸切り痕残る
	3	美濃	鉄釉灯明皿上皿		9.7	4.1	1.8	淡灰色粘質土　器壁厚く重い　釉はツヤのある茶色
	4	美濃	灰釉？皿	18C前半	12.4	6.2	2.5	灰～黒灰色弱粘質緻密土　釉は二次焼成を受け暗灰緑色
	5	美濃	灰釉皿	18C前半	12.8	6.2	2.7	灰白色弱粘質緻密土　釉は灰味淡緑色
	6	美濃	灰釉皿	18C前半	14.0			灰色弱粘質緻密土　釉はごく軽い二次焼成を受け淡灰緑色
	7	美濃	灰釉鉢	17C後半	14.6			灰白色粘質緻密土　釉は淡灰緑色
	8	肥前	染付筒型湯呑み碗	18C末～幕末		4.1		染付は明青色顔料による文様
	9	肥前	染付そば猪口	1780～19C初		5.7		染付は明青色顔料による手描きの文様
	10	肥前	赤絵盃	19C中頃	5.8			器壁はとても薄い　赤絵は朱色顔料による連続文
	11		銭					「寛永通寶」（古？）
現代整地層	図72-1		山茶碗窯こね鉢	中世	38.5			白色小石～粗粒を混じえる灰白色弱粘質土
	2	瀬戸美濃	鉄釉擂鉢	?		13.7		淡茶色弱粘質土　外底部は糸切り痕　釉は茶色
	3	?	釜飯の蓋	?			1.3	横川駅釜飯弁当の蓋
	4	美濃	鉛釉香炉	?	10.0			黄白色弱粘質緻密土　軽い二次焼成により黄味灰緑色
	5	美濃	鉛釉小壷	18C	7.7			黄白色弱粘質土　軽い二次焼成により黄土色
	6	?	?	?		5.1		暗紅灰色弱粘質緻密土　釉は外面は赤褐色、内面は灰緑色
	7	肥前　内野山	掛け分け皿	17C後半～18C前半	12.7			淡茶色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉、外面は半透明灰釉
	8	肥前	水注？	17C後半～18C中葉	19.3			赤橙色緻密土　釉は刷毛塗りの白濁釉と不透明茶色釉と銅緑釉
	9	肥前	染付碗	17C後半～18C前半	9.8	4.0	5.7	染付は淡明青色顔料による手描きの植物文
	10	肥前　波佐見	染付蛇の目釉ハギ皿	18C後半	13.3	7.1	2.9	灰青色顔料による手描き植物文　見込みにコンニャク印判の五弁花文
	11	肥前	染付蛇の目高台皿	?		9.4		染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文
	12	舶載磁器	染付皿？	17C前半	17.2			黒色砂を混じえる白色強粘質土　染付は明青色顔料の手描き植物文
	13	肥前	染付皿	明治以降		17.0		染付は藍色顔料による手描きの文様
	14	肥前	染付鉢？	明治以降	16.5	9.0	6.0	染付は明青色顔料による手描きの文様
	15	肥前	染付蓋物	明治以降	10.2	10.2	6.5	染付は明青色顔料による手描きの植物文
表面採集	図73-1		かわらけ	近世以降	17.9	8.3	4.8	金雲母片を多く混じえる明橙色土　内面中位に重ね焼き痕
	2		すり常滑		3.2×5.3×1.1			
	3	美濃	灰釉皿	18C前半		5.8		黄味灰白色弱粘質緻密土　釉は軽い二次焼成を受けて淡灰緑色
	4	肥前　内野山	掛け分け蛇の目釉ハギ皿	17C後半～18C前半	16.5			淡茶色緻密土　釉は内面は銅緑釉の二度施釉　外面は不透明な灰釉
	5	肥前　内野山	香炉	17C後半～18C前半	10.7			淡茶色緻密土　釉は銅緑釉だが強い二次焼成を受け白濁
	6	肥前？	染付蛇の目高台皿	?				染付は明青色顔料による型紙刷りの植物文
	7	肥前	染付角皿	18C後半～19C前半				染付は明青色顔料による手描きの植物、幾何学文　二次焼成
	8	肥前	染付皿	明治以降		5.0		染付は明青色顔料による手描きの風景文
	9	肥前	染付蛇の目釉ハギ輪花皿	1640～1660年代	21.7	7.3	4.9	染付は藍色顔料による手描きの植物文　釉ハギ部は黒ずむ
	10		銭					「寛永通寶」（新）
4面下	図74-1		かわらけ	中世	7.1	5.4	1.5	背低で器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	2		かわらけ	中世	7.8	5.0	1.6	
	3		かわらけ	中世	7.9	6.1	1.8	
	4		かわらけ	中世	11.8	8.6	3.2	器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	5		かわらけ	中世	11.7	5.8	3.4	口唇はやや尖り、器壁はゆっくり開きながら立ち上がる
	6		かわらけ	中世	13.1	7.2	3.3	
	7		かわらけ	中世	12.7	7.6	3.7	
	8		桟瓦					灰色土　凸面は指頭によるナデ、凹面はヘラ＋指頭ナデ調整
	9	魚住	鉢		20.1			口縁帯には降灰かかる　口縁下は重ね焼き痕
	10	常滑	こね鉢	?	31.5			体部外面上位から下方はナデ調整
	11		すり常滑		3.3×4.8×1.2			
	12	備前系	擂鉢		30.3			混入物を多く混じえる黒灰色強粘質堅緻土
	13	備前系	擂鉢		31.2			白色小石を混じえる茶褐色粘質土　体部内面中位から下方は磨滅痕
	14	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	?	27.1			混入物を僅かに混じえる淡黄白色土　釉は暗茶色不透明
	15	瀬戸美濃系	鉄釉擂鉢	?		12.3		淡黄白色土　外底部は糸切り痕　釉は暗茶色　内面は著しい磨滅痕
	図75-1	美濃	掛け分けせんじ茶碗	?	9.7	4.4	5.0	黄味灰白色弱粘質土　灰釉は淡緑色、鉄釉は明茶色
	2	瀬戸美濃	灰釉皿	?		7.5		灰色弱粘質緻密土　釉は淡灰緑色透明
	3	舶載磁器	青磁鎬蓮弁文碗		17.1			白色微粒多く混じえる灰色堅緻土　釉は灰緑色
	4	国産磁器	白磁型打成形輪花皿	17C末～18C初頭	13.8	7.1	4.7	黒色微粒を混じえる白色強粘質土　見込みに押印菊花文　二次焼成
	5	肥前	染付碗	18C前半～中葉		4.6		染付は灰青色顔料によるコンニャク印判の菊花文
	6	肥前	染付油壷	17C末～18C前半				染付は淡青灰色顔料による手描きの植物文
	7		曲物　蓋板		19.8×8.6×1.9			有孔　木釘が残る　表面は一部煤ける
	8		曲物　蓋板		20.0×11.8×1.9			有孔　1箇所は木釘残る　表面は煤ける　上周縁部は削り痕残る
	9		曲物　底板		25.6×10.2×3.1			無孔
	10		杵		21.7×5.9径6.2			中央は切れ込みが入り「握り」にしている　下方は著しい磨滅

表5（13）

出土地	図版	生産地	種別	年代	口径	底径	器高	備考
	11		下駄		22.7×7.3×1.2			
	12		刀子		24.0×2.9×0.5			
	13		鉄瓶の蓋？		径15.8		厚0.4	
	14		銭					「政和通寶」

表5（14）

第７節　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

長谷観音堂周辺遺跡群の、平成５年度の発掘調査地、長谷三丁目39番４外において住居層の下位に江戸時代後半の水田とみられる堆積層が検出された。ここでは、この堆積物について花粉分析を行い、検出される花粉化石から水田稲作の検討を試みた。また、井戸内堆積物の花粉分析結果をあわせて、当時の遺跡周辺の古植生についても検討した。

１．試　料

花粉分析用試料は調査区南壁の地点１と、東壁の地点２および調査区内中央部の地点３（井戸４）の３地点より柱状（地点１）やスポット（地点２、３）で採取した。これらの位置を図１に、また各地点の断面および花粉分析層準を図２（地点１）、図３（地点２）、図４（地点３）に示すが、これらに用いた層位番号は便宜的につけたものである。以下に試料を採取した土層を中心に記載を示す。

１）地点１（図２）

１層は黒灰色のシルトで、泥岩小片（いわゆる土丹で、最大径55㎜）が散在している。その他、炭片やかわらけ片も認められる。本層は客土であり、その上位には明治期の火災層が認められる。２層は暗青灰色のシルトで、やや粘土質となっており、土丹小片やかわらけ片が点在している。また、２層と下位の３層との境界付近に土丹片がやや多く認められる。この２層は水田層ではないかとみられており、花粉分析試料は本層より採取した。３層は黒灰色の細砂層で、シルト分もいくらか認められる。またこの３層は水田の床土ではないかとみられており、これら２、３層の時代は江戸時代後半～末頃と考えられている。４層は暗灰色の貝片混じり（多くは稚貝や有孔虫など）の砂層で、ラミナの発達部や重鉱物の濃集部、やや大きめの貝片が多い部分などが認められる。なおこの砂層については粒度分析が行われており、詳しくはそちらの報告書を参照して頂きたい。

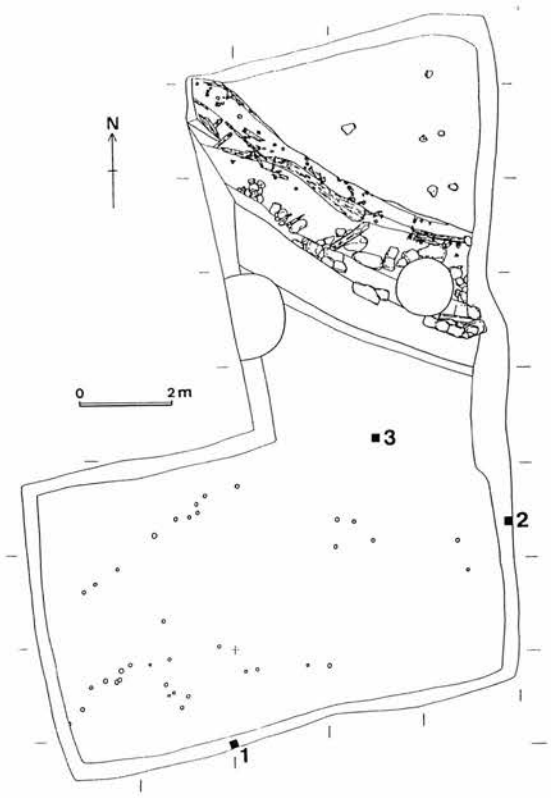


図1　試料採取位置図

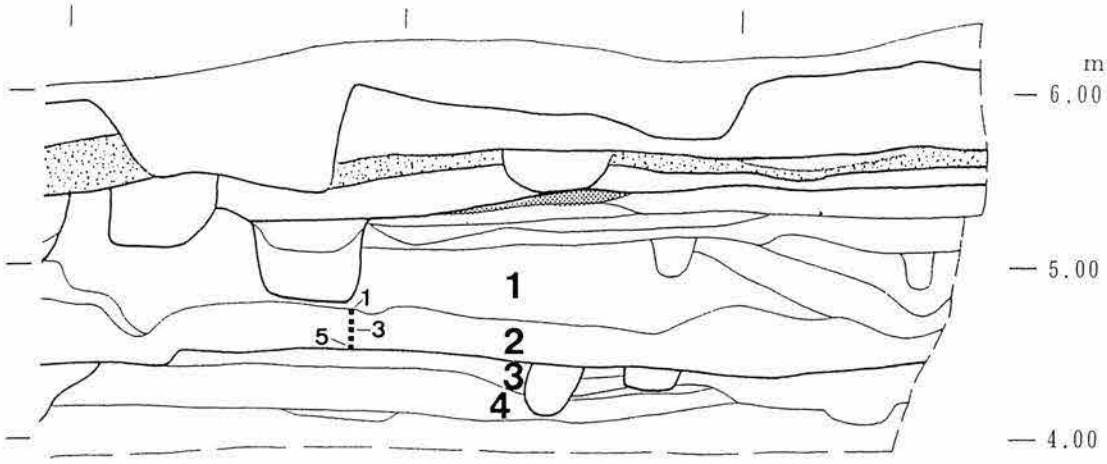


図2　地点1付近の断面図（南壁）と試料採取層準

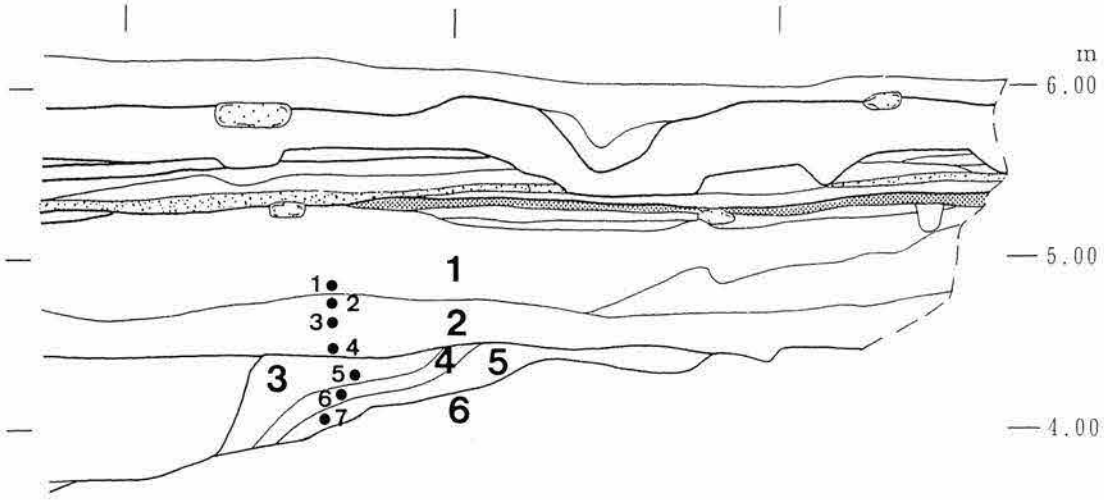


図3　地点2付近の断面図（東壁）と試料採取層準

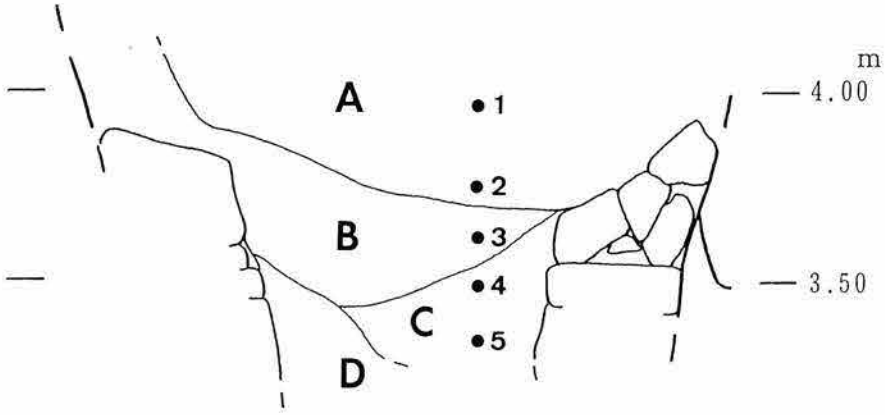


図4　地点3（井戸4）の断面図と試料採取層準

2）地点２（図３）

１層は黒灰褐色の砂質シルトで、最大径170㎜の土丹が散在し、かわらけ片や炭片も認められる。本層は客土層であり、その上位には明治期の火災層や関東大震災時の焼土などが認めらる。２層は黒灰色の砂質シルト～粘土で、土丹片、かわらけ片、炭片、緑色凝灰岩（玉じゃり）が点在している。本層も地点１同様水田層と考えられており、時代は江戸時代後半～末頃とみられている。３層は土丹層で、基質は黒灰褐色の砂質シルトである。４層は黒灰褐色のやや粘土質の砂質シルトで、土丹小片やかわらけ片が点在している。５層は黒灰色のシルト質砂で、貝の小片が多量に認められ、土丹小片やかわらけ片も認められる。この５層は中世の河川にともなう堆積物の可能性もあるが、遺物も検出されておらず、現時点において５層の時代は特定されていない。６層は青灰白色の砂層で、貝の小片（多くは稚貝や有孔虫など）が多く認められる。これらのうち、花粉分析試料は２層（３点）を中心に、６層を除く各層１点の計７点を採取した。

3）地点３（図４）

本地点は井戸４の堆積層で、時代は江戸時代末から明治時代初期と考えられている。Ａ層は黒灰色の砂質シルトで、貝殻の微小片が多く認められる。Ｂ層は青色を帯びた黒灰色の砂質シルトで、貝殻片が認められる。また土丹片が含まれ（20～30㎜主体）、特に下部は多く、大形（最大径100㎜）となっている。Ｃ層は黒灰色の砂質シルト～粘土で、竹片が認められ、50㎜前後の土丹片が点在している。また、Ｄ層は暗青灰色の粘質土となっている。このうち、花粉分析試料はＡ～Ｃ層より５点採取した。

２．分析方法

上記した３地点、計17試料について、次のような手順にしたがって花粉分析を行った。

試料（湿重約４ｇ）を遠沈管にとり、10％水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5㎜目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％フッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、重液分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続いてアセトリシス処理（無水酢酸９：１濃硫酸の割合の混酸を加え３分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンにて染色を施した。

３．分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は３地点を合わせて、樹木花粉43、草本花粉29、形態分類を含むシダ植物胞子３の計75である。これら花粉・シダ植物胞子の一覧を表１に、また主要な花粉・シダ植物胞子の分布を図５（地点１）、図６（地点２）、図７（地点３）に示した。なお、これらの分布図における樹木花粉は樹木花粉総数を基数に、草本花粉、シダ植物胞子は全花粉・胞子総数を基数として百分率で示してある。表および図においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類群間の区別が困難なものを示し、クワ科・バラ科・マメ科の花粉は樹木起源と草本起源のものとがあるがそれぞれに分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。また花粉化石の単体標本（花粉化石を一個体抽出して作成したプレパラート）を作成し、各々にPLC.SS番号を付し、形態観察用および保存用とした。

1）地点1

検鏡の結果、マツ属複維管束亜属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）が最も多く検出されており、20％前後の出現率を示している。ハンノキ属も全試料10％を越えており、コナラ属アカガシ亜属は10％前後得られている。その他、モミ属、ツガ属、スギ属、クマシデ属－アサダ属、コナラ属コナラ亜属、シイノキ属－マテバシイ属、ニレ属－ケヤキ属などが5%前後検出されている。草本類では、イネ科が試料1－4で出現率36％を示すなど下部で多く検出されているが、上部では12～13％とそれほど多くはない。これとは反対に、タンポポ亜科は上部で多く検出されており、単条型胞子も同様の傾向を示し、また、カヤツリグサ科も上部に向かい次第に増加している。その他、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、ヨモギ属が5％前後得られ、水生シダ植物のアカウキクサ属が試料1－4より上位で連続して検出されている。

2）地点2

本地点は他の2地点に比べて花粉の検出数が少なく、特に樹木花粉は少なく、試料2－1、－5、－6については分布図として示すことができなかった。また、他の試料についても分布図の信頼度は低いことを記しておく。ニヨウマツ類は最下部で6％と低いが、上部では試料2－3で20％を越えるなど多く検出されている。その他、スギ属やハンノキ属が10％前後、クマシデ属－アサダ属やコナラ亜属、アカガシ亜属などが5%前後産出している。草本類では、イネ科とタンポポ亜科が10～20％の出現率を示し、カヤツリグサ科は10％前後、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科が5%前後得られている。また、ヨモギ属は最下部において20％近く検出されている。

3）地点3（井戸4）

ニヨウマツ類が70％前後の高率出現を示し特徴的である。スギ属は最下部では10％を越えるが他は5%前後と低率であり、その他、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属－マテバシイ属、ニレ属－ケヤキ属などの樹木花粉はいずれも5％以下と低率である。草本類では、イネ科が下部において30％を越える出現率を示しているが、上部では減少している。反対にアカザ科－ヒユ科は最下部で出現率は10％以下であるが、その上位では20％以上を示している。その他はいずれも低率出現であるが、カヤツリグサ科、アブラナ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が連続して検出されている。

4）誘導化石

上記していない分類群ので、トウヒ属やブナ属などが比較的多く検出されている。また、ペカン属やフウ属も各地点から検出されているが、このペカン属やフウ属は第三紀後半に栄えた植物である。本地域周辺丘陵部には第三紀の前期鮮新世の逗子層が分布しており（見上・江藤　1986）、各地点にみられる土丹（泥岩）はこの逗子層からの砕屑物と予想される。今回分析を行った試料中には土丹のような非常に古い堆積物が含まれており、これらからペカン属やフウ属といった現在日本にはみられない分類群が抽出されたものとみられる。これらを誘導化石と呼ぶが、今回の分析結果においては、このペカン属やフウ属の他にトウヒ属やブナ属の多くが誘導化石とみられ、モミ属やツガ属、ハンノキ属、ジンチョウゲ科、グミ属などの一部にもその検出状況から誘導化石が含まれている可能性がある。

表1　長谷観音堂周辺遺跡の産出花粉化石一覧表

和名	学名	1-1	1-2	1-3	1-4	1-5	2-1	2-2	2-3	2-4	2-5	2-6	2-7	3-1	3-2	3-3	3-4	3-5
樹木																		
マキ属	*Podocarpus*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-
モミ属	*Abies*	6	3	8	1	4	-	1	3	2	-	-	1	1	2	1	2	1
ツガ属	*Tsuga*	7	6	14	5	12	-	4	4	12	1	1	1	1	1	-	3	1
トウヒ属	*Picea*	1	1	5	3	9	-	3	7	11	1	-	7	4	1	-	5	-
マツ属単維管束亜属	*Pinus* subgen. *Haploxylon*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	*Pinus* subgen. *Diploxylon*	25	36	44	38	24	4	20	14	12	9	3	4	167	121	20	153	104
マツ属（不明）	*Pinus* (Unknown)	11	7	16	10	1	1	5	5	4	1	1	1	9	12	1	3	6
コウヤマキ属	*Sciadopitys*	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
スギ属	*Cryptomeria*	11	15	10	9	20	1	21	2	12	18	1	9	9	15	1	12	18
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	T.- C.	3	5	3	8	2	-	3	-	3	3	-	1	1	-	-	1	1
ヤナギ属	*Salix*	1	1	-	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属	*Myrica*	3	3	1	-	-	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-
ペカン属	*Carya*	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	3	-	-	-	1	-
サワグルミ属－クルミ属	*Pterocarya-Juglans*	1	1	1	1	11	-	3	1	3	-	-	-	-	-	-	1	2
クマシデ属－アサダ属	*Carpinus - Ostrya*	11	6	8	5	16	2	12	3	5	2	2	7	-	1	2	1	1
カバノキ属	*Betula*	2	3	2	-	2	-	3	1	3	-	2	-	1	-	2	1	1
ハンノキ属	*Alnus*	25	28	24	14	23	2	11	8	9	4	3	9	2	-	3	6	4
ブナ属	*Fagus*	5	6	9	8	24	1	11	8	10	3	5	8	4	5	3	-	2
コナラ属コナラ亜属	*Quercus* subgen. *Lepidobalanus*	4	5	9	4	13	-	5	1	3	-	1	3	4	4	1	7	1
コナラ属アカガシ亜属	*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*	13	15	12	11	25	1	3	1	9	2	5	4	2	9	1	6	3
クリ属	*Castanea*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1
シイノキ属－マテバシイ属	*Castanopsis - Pasania*	9	7	4	3	7	-	-	1	1	-	-	3	2	6	2	7	-
ニレ属－ケヤキ属	*Ulmus - Zelkova*	5	5	9	2	5	1	4	3	3	1	1	1	2	4	-	4	2
エノキ属－ムクノキ属	*Celtis-Aphananthe*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-
フウ属	*Liquidamber*	2	-	3	2	3	-	2	-	2	-	-	3	1	-	-	1	1
サンショウ属	*Zanthoxylum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
コクサギ属	*Orixa*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユズリハ属	*Daphniphyllum*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウルシ属	*Rhus*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	3	1
モチノキ属	*Ilex*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ニシキギ科	Celastraceae	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
カエデ属	*Acer*	-	2	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	2
ブドウ属	*Vitis*	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
シナノキ属	*Tilia*	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ツバキ属	*Camellia*	-	-	-	-	3	-	1	-	-	-	-	-	1	2	-	1	-
ジンチョウゲ科	Thymelaeaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
グミ属	*Elaeagnus*	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-
サルスベリ属	*Lagerstroemia*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ウコギ科	Araliaceae	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ミズキ属	*Cornus*	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
エゴノキ属	*Styrax*	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	1	1
イボタノキ属	*Ligustrum*	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ガマズミ属	*Viburnum*	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属	*Lonicera*	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
草本																		
ガマ属	*Typha*	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
オモダカ属	*Sagittaria*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-
イネ科	Gramineae	82	84	87	258	132	14	73	51	84	16	14	41	76	94	24	326	154
カヤツリグサ科	Cyperaceae	122	93	97	67	29	4	49	32	41	9	5	30	4	9	4	21	9
ツユクサ属	*Commelina*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ユリ科	Liliaceae	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
クワ科	Moraceae	-	1	-	-	4	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	1	2
ギシギシ属	*Rumex*	2	-	1	5	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	*Polygonum* sect. Persicaria-Echinocaulon	-	1	1	1	1	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	5	3
イタドリ節	*Polygonum* sect. Reynoutria	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ソバ属	*Fagopyrum*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	8	-
アカザ科－ヒユ科	Chenopodiaceae - Amaranthaceae	43	42	49	57	62	87	33	14	45	-	1	20	103	100	19	278	33
ナデシコ科	Caryophyllaceae	2	4	4	7	2	-	6	4	2	-	-	1	1	-	1	12	5
カラマツソウ属	*Thalictrum*	-	1	-	-	1	-	2	-	-	1	-	1	-	1	-	3	2
他のキンポウゲ科	other Ranunculaceae	2	1	1	2	3	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	2	-
タケニグサ属	*Macleaya*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	Cruciferae	31	32	37	52	15	4	10	10	23	3	3	19	13	13	3	8	12
ワレモコウ属	*Sanguisorba*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
他のバラ科	other Rosaceae	1	-	1	-	2	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	2
マメ科	Leguminosae	4	8	4	1	3	-	2	-	-	-	-	2	4	1	-	4	1
アリノトウグサ属	*Haloragis*	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
セリ科	Umbelliferae	-	-	-	2	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	4	1
オオバコ属	*Plantago*	-	-	1	2	2	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1
アカネ属－ヤエムグラ属	*Rubia - Galium*	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
オミナエシ属	*Patrinia*	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
マツムシソウ属	*Scabiosa*	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	*Artemisia*	16	13	12	24	38	7	3	8	6	2	2	63	4	5	5	21	6
他のキク亜科	other Tubuliflorae	2	2	2	3	6	-	5	1	3	-	-	6	-	-	-	3	3
タンポポ亜科	Liguliflorae	87	98	128	68	26	31	66	54	70	12	15	45	15	6	7	12	16
シダ植物																		
アカウキクサ属	*Azolla*	1	1	1	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
単条型胞子	Monolete spore	81	95	85	23	28	7	27	10	27	7	11	17	22	17	9	13	13
三条型胞子	Trilete spore	17	13	12	17	6	1	9	8	14	2	3	11	3	3	-	5	1
樹木花粉	Arboreal pollen	149	160	189	127	210	13	114	63	115	47	27	69	215	188	37	222	154
草本花粉	Nonarboreal pollen	394	381	426	553	335	147	249	174	280	44	42	230	221	239	63	715	251
シダ植物胞子	Spores	99	109	98	43	34	8	36	18	41	9	14	28	25	20	9	19	14
花粉・胞子総数	Total Pollen & Spores	642	650	713	723	579	168	399	255	436	100	83	327	461	447	109	956	419
不明花粉	Unknown pollen	44	44	51	34	72	17	22	16	31	5	6	42	31	17	13	21	27

T．－C．はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupresaceaeを示す

4．水田稲作について

地点1、2におけるイネ科花粉の産出状況は、地点1の下部において比較的高い出現率を示すが、それ以外では20%以下と稲作地を考えるうえでは少ないように思われる。しかしながら、検出されたイネ科花粉にはイネ属の表面形態を有する化石が多く含まれている。イネ科以外についてみると、現在の水田において普通にみられるコナギ（ミズアオイ属）やオモダカ（オモダカ属）などの水田雑草類は、試料2－7で1点オモダカ属が検出されたのみである。一方、水田にもみられる水生シダ植物のアカウキクサ属が地点1において連続して検出されている。このように、本地点における水田稲作について花粉分析結果からは、その可能性はあると思われるが、さらに別方面からの検討が必要と判断される。

こうした状況から、稲作の検討に用いられているプラント・オパール分析を試み、その結果を表2に示した。このプラント・オパールは根より取り込まれ葉などの細胞内に蓄積された珪酸（植物珪酸体）が、植物が枯れるかなどして土壌中に埋積されたもので、イネについてはその形態分類の研究が進んでいる（藤原　1976など）。試料は地点1の1および6（3層：床土？）と、地点2の2、6、7の5試料である。その結果、試料1－6を除く他の4試料よりイネのプラント・オパールが検出され、水田層とみられている試料1－1および2－2では試料1g当り約12,000個得られた。また、最も多く得られたのは試料2－6の約22,000個、最も少ないのは試料2－7の8,000個である。検出個数の目安として、イネのプラント・オパールが試料1g当り5,000個以上検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断されている（古環境研究所　1989）。これにしたがえば、各試料において稲作の可能性は高いと推測され、花粉分析結果を合わせ、両地点の2層は水田層と判断される。

また地点2の下部についても、多量のイネのプラント・オパールが検出されている。しかしながら、堆積状況は河川堆積物の様相を示し、花粉分析結果も水田とは考えにくい。こうしたことから、地点2の下部については、遺跡周辺における下部層の堆積当時のイネの存在は認められるものの、地点2における稲作の可能性は低いと考える。

5．遺跡周辺の古植生変遷

先にも記したが、地点1、2が江戸時代後半～江戸時代末頃、地点3は江戸時代末～明治時代初期と考えられている。

江戸時代後半～江戸時代末頃の遺跡周辺はアカマツやクロマツなどのニヨウマツ類が優勢であった。また、スギ属も遺跡周辺に分布しており、アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属類を主体とした照葉樹林も普通にみられた。これらスギ林や照葉樹林は中世以前において鎌倉周辺に広く分布していたが、鎌倉幕府の開府以来の土地改変やスギ材の利用によりこれらの樹木は減少し（鈴木　1993）、その跡地にニヨウマツ類が侵入・分布拡大がなされたものと予想される。また、発掘調査により河川跡も検出されており、こうした河川周辺にはハンノキ属がみられたであろう。その他、クマシデ属－アサダ属やコナラ亜属、ニレ属－ケヤキ属などの落葉広葉樹類も生育していた。

地点1、2はこの頃水田であった可能性が高く、水田あるいはその周辺の畦などにはタンポポ亜科をはじめとしてカヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、アブラナ科、オオバコ属などの雑草類も多くみられたと推測される。

江戸時代末～明治時代初期は、さらにニヨウマツ類が生育地を広げたとみられるが、堆積地が井戸という閉ざされた狭い空間であることからニヨウマツ類は過大に表現されている可能性も考えられる。すなわち、ニヨウマツ類は風媒花であり、大量に生産された花粉は風によって広範囲に散布される。一方、

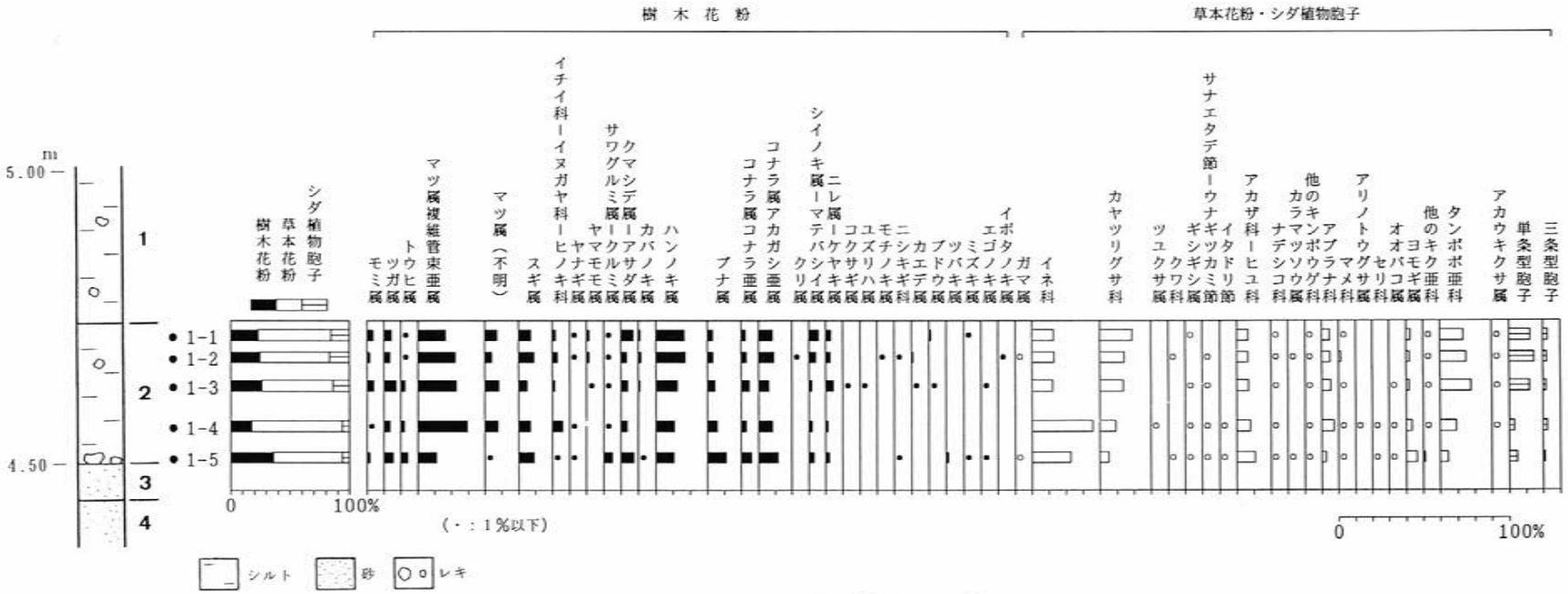


図5　地点1の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

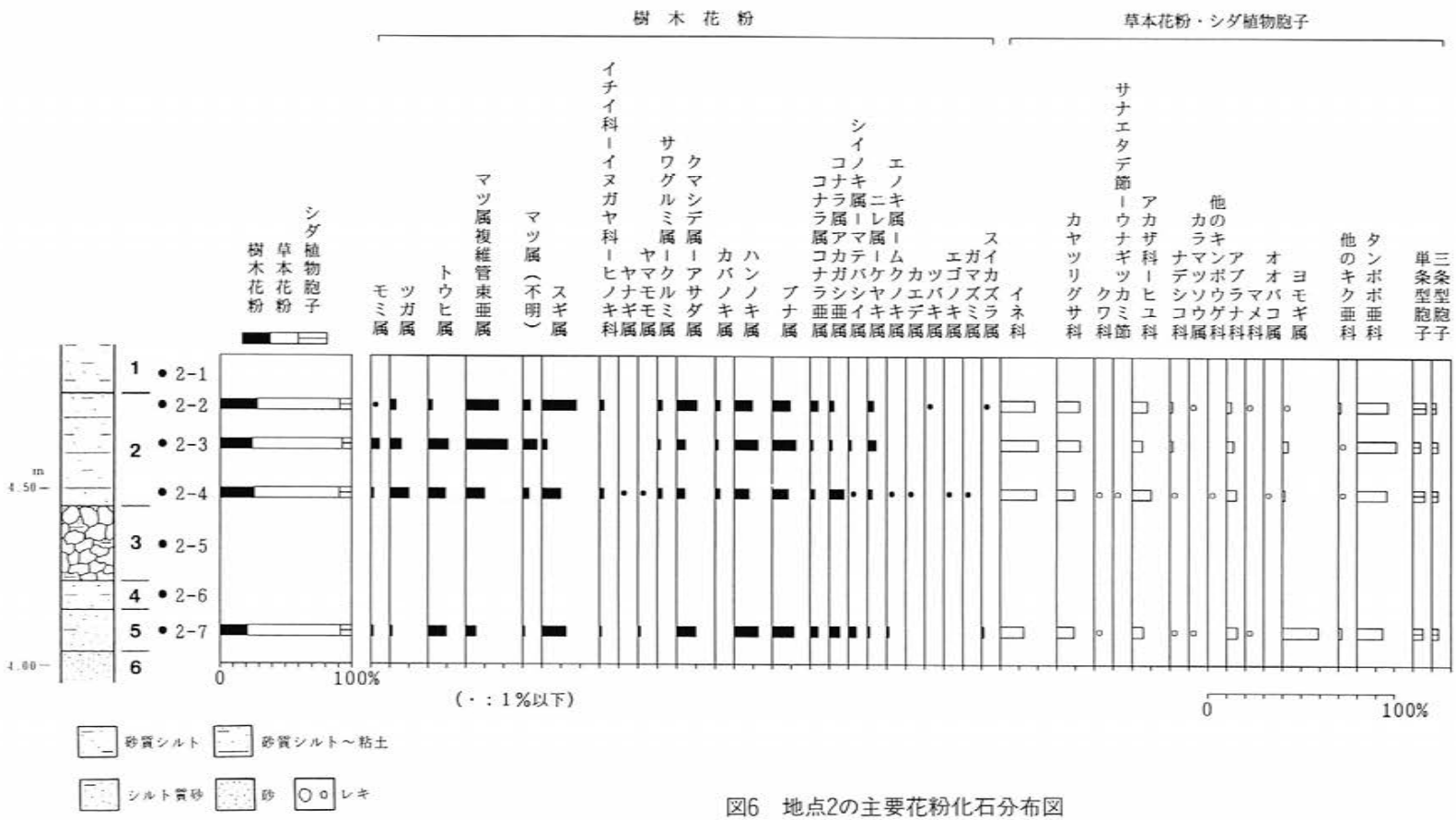


図6　地点2の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

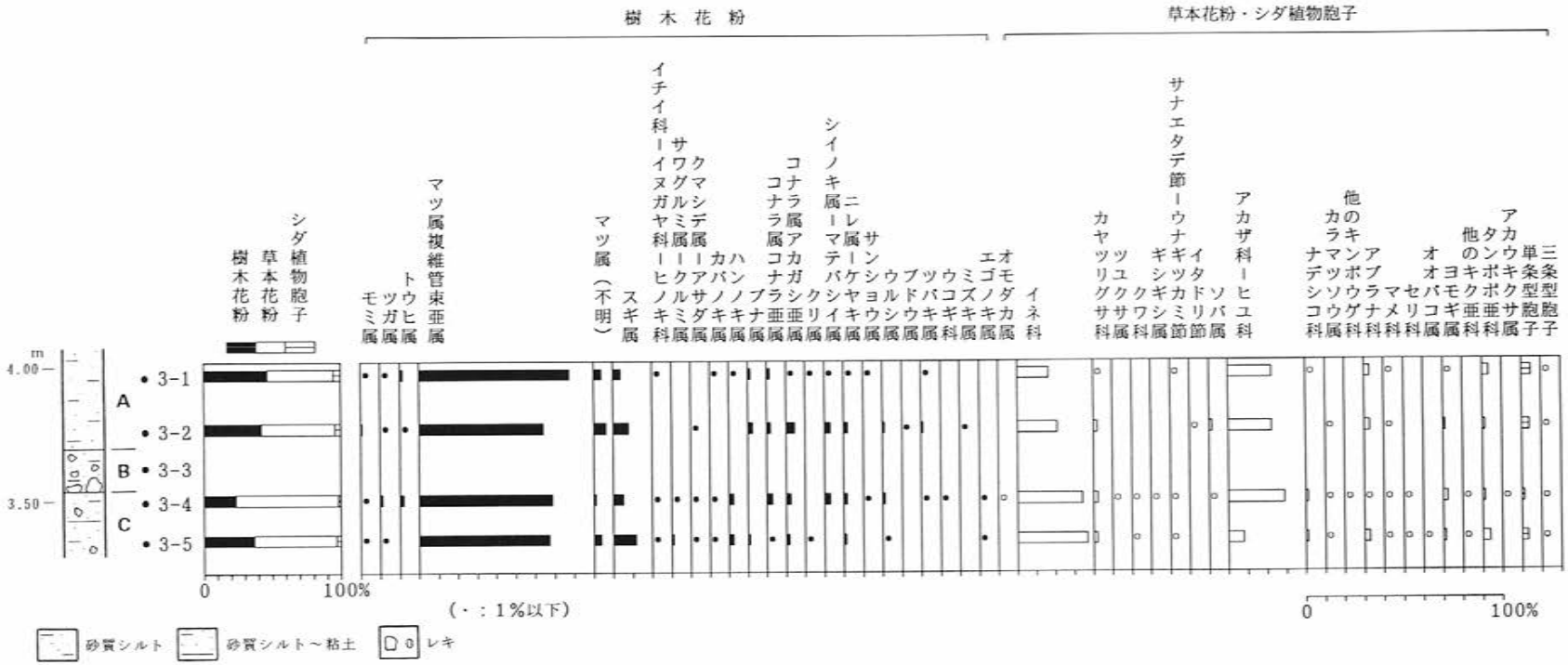


図7　地点3（井戸4）の主要花粉化石分布図

（樹木花粉は樹木花粉総数、草本花粉・胞子は花粉・胞子総数を基数として百分率で算出した）

表2　試料1ｇ当りのプラント・オパール個数

試　料	イネ	ネザサ節型	クマザサ属型	他のタケ亜科	ヨシ属	シバ属	キビ族	ウシクサ族	ジュズダマ属	不明
1－1	12,600	93,800	53,800	3,400	1,100	2,300	1,100	21,700	0	44,600
1－6	0	6,300	3,800	1,300	0	0	0	3,800	0	5,000
2－2	12,200	83,100	41,500	6,100	0	1,200	1,200	13,400	0	30,500
2－6	22,600	55,200	13,800	2,500	0	0	0	27,600	0	33,900
2－7	8,000	33,300	17,200	2,300	0	1,100	0	11,500	1,100	11,500

アカガシ亜属やシイノキ属などは虫媒花であり、散布される範囲はニヨウマツ類に比べかなり狭く、まして井戸内には堆積しにくい状況である。こうしたことから、遺跡周辺では前の時期同様にスギ林や照葉樹林は分布しており、コナラ亜属などの落葉広葉樹類も一部にみられたと推測される。

この井戸堆積物からソバ属花粉が比較的多く得られ、この頃遺跡周辺においてソバも栽培されていたと予想される。その他、イネ科やアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科なども多く検出されているが、これは当時井戸周辺にこれらが生育していたことによると予想される。また、ゴミ捨て場的な存在となった廃棄後の井戸に、除草などによりそれらが捨てられたことも推測され、そうしたことにによりこれらの花粉が供給されたことも考えられる。このように、当時の遺跡周辺ではイネ科やアカザ科－ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科などの雑草類も多く生育していた。

引用文献

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-28.

見上敬三・江藤哲人（1986）鎌倉市地質図．鎌倉市教育委員会.

鈴木　茂（1993）鎌倉市佐助ヶ谷遺跡の花粉化石．佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書－第1分冊－，佐助ヶ谷遺跡発掘調査団，p.407-430.

第８節　長谷観音堂周辺遺跡の粒度分析

吉川昌伸（パレオ・ラボ）

１．概　要

由比ケ浜の背後に位置する長谷観音堂周辺遺跡では、江戸時代の包含層の下位に貝殻片を多量に含んだ砂層が発達する。この砂層は、長谷観音堂周辺遺跡が縄文海進期に湾口部に位置することから、大半は縄文海進期に堆積した海成の砂層と推定された。しかし、砂層を不整合に江戸時代の堆積層が直接履うことや下位より粗粒な堆積物が上部層を形成することなどから、上部層については再堆積の貝殻片を含んだ河成層の可能性が指摘された。こうした状況から砂層の堆積環境を解明することを目的として粒度組成的検討を行った。なお、一部試料については関本勝久氏に有孔虫を同定して頂いた。ここに記して感謝の意を表します。

粒度組成の検討は、調査区の南壁と北壁東端の２地点で行った。分析は、南壁のS1～S6の６層準と北壁東端のN1～N5の５層準である。以下に各地点の概要を示す。

南壁の砂層を、６層に細分され、下位よりS6,S5,S4,S3,S2,S1と仮称する（図１）。堆積層は、Ｓ４を除いては全般に円摩された貝殻片を多く含み、特にＳ１、Ｓ３では著しい。また、基本的には概ね１㎜より粗粒な成分では貝殻片が卓越する。最下部のＳ６では、黄灰色細粒砂から構成される。この細粒の粒子は貝殻片や有孔虫及び介形虫、ウニの骨針などの生物遺骸を主体とし、外来の砂をほとんど含まない。また、Ｓ２では輝石類などの重鉱物が濃集する砂層からなる。一方、Ｓ１とＳ５層の上部では平行ラミナが発達する。

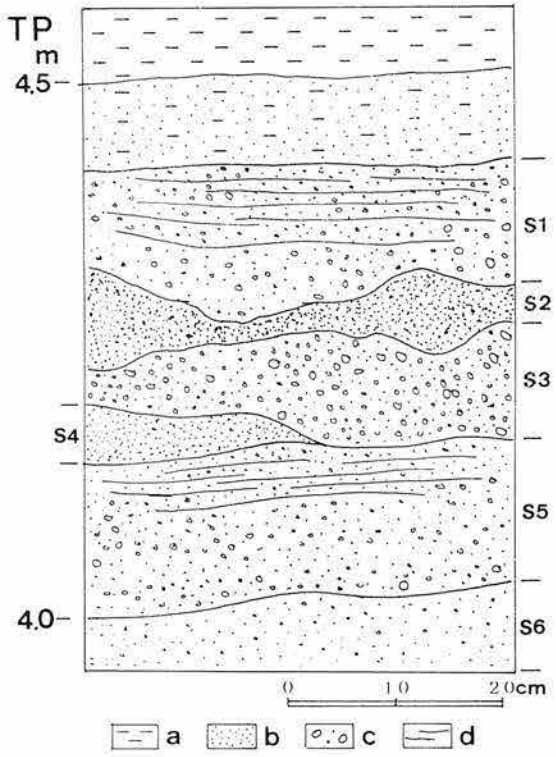


図1　南壁の一部セクション図と試料採取層準
a：シルト　b：砂　c：貝・貝片
d：ラミナ

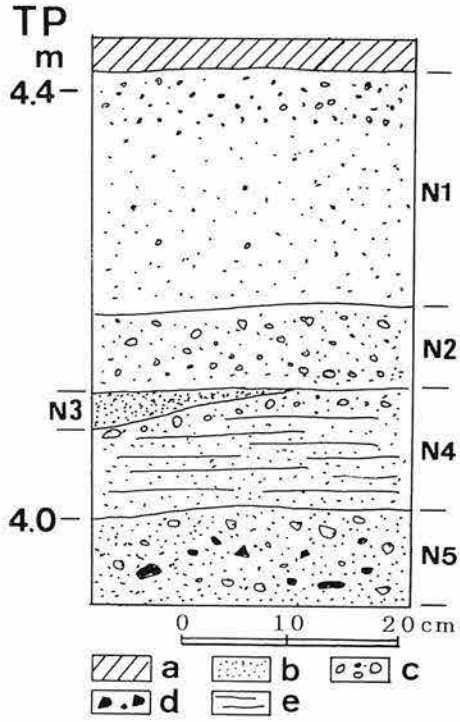


図2　北壁の一部セクション図と試料採取層準
a：撹乱　b：砂　c：貝・貝片
d：礫　e：ラミナ

北壁東端の砂層は、５層に細分され、下位よりN5,N4,N3,N2,N1と仮称する（図２）。堆積層は基本的には南壁と同様で円摩された貝殻片を多く含む。北壁では、特にN5とN2で多量に含まれる。このうちN5では、粗粒な貝殻片やサザエのふたとともに円摩された10～20mm程度の礫を含む。また、全試料で中粒砂より粗粒成分で貝殻片が卓越する。一方、N4では平行ラミナが発達し、最上部で粗粒な貝殻片が層状に堆積する。

処理は、試料80～250ｇを取り、恒温乾燥器で110度で乾燥し、標準フルイを１/２φ間隔で4.5φ（44μm）まで重ねて振とうした。なお4.5φ以下の細粒成分は0.2%以下と極めて少ないことから細粒成分の分析は行わなかった。また、普通、粒度分析は貝殻片などの炭酸塩粒子は取り除いて行うが、前述のように生物遺骸を主体とする堆積層や貝殻片を多量に含むことから、ここでは貝殻片も堆積物も構成する物質とみなした。

２．粒度分析結果の記載

表１に粒度分析結果を、図３に粒度分布のヒストグラムを示した。また、Friendman（1961, 1967）の積率法により平均粒径、淘汰度、歪度、尖度を算出した（表２）。計算式は、以下の通りである。

平均粒径　$x\phi=(\Sigma fixi)/100$

淘汰度　$\sigma\phi=\sqrt{(\Sigma(fi(xi-x\phi)^2/100))}$

歪　度　$\alpha\phi=(\Sigma fi(xi-x\phi)^3)/100(\sigma\phi)^3$

尖　度　$\beta\phi=(\Sigma fi(xi-x\phi)^4)/100(\sigma\phi)^4$

fi：各粒度階の重量%　　xi：各粒度階の中央粒径値（ファイ尺度）

表1　長谷観音堂周辺遺跡の粒度分析結果（単位：ｇ）

phi	S1	S2	S3	S4	S5	S6	N1	N2	N3	N4	N5
-4.0								6.19			12.56
-3.5											4.95
-3.0			3.60					0.79			6.16
-2.5	0.92	0.80	2.52					2.96			10.50
-2.0	0.48	0.14	5.25					2.18		0.18	12.10
-1.5	0.26	0.36	4.27		0.08		0.08	3.95	0.45	0.33	15.03
-1.0	0.78	0.77	4.82		0.38	0.04	0.13	4.08	0.37	0.34	15.03
-0.5	1.56	1.73	5.72	0.03	1.64	0.03	0.30	6.97	1.10	0.40	21.50
0.0	3.82	2.65	7.10	0.09	3.01	0.08	0.56	9.49	1.75	0.66	19.79
0.5	12.78	5.99	9.79	0.16	3.41	0.11	0.93	11.65	1.95	0.94	14.50
1.0	23.04	13.18	12.15	0.17	2.91	0.15	1.17	8.65	1.27	1.27	8.67
1.5	54.43	54.28	21.85	0.38	6.09	1.76	2.99	11.65	2.32	4.90	9.11
2.0	31.37	58.84	16.54	0.65	10.32	8.99	6.14	9.51	8.75	12.40	11.01
2.5	22.46	23.80	24.80	9.76	19.15	24.05	29.99	16.17	22.87	21.83	31.90
3.0	15.59	11.11	30.21	82.61	39.62	33.85	57.29	36.37	66.27	31.13	51.91
3.5	2.60	1.49	6.74	25.09	6.62	9.67	11.90	7.63	16.49	6.86	9.45
4.0	0.34	0.13	0.75	1.24	0.56	0.98	0.94	0.76	1.09	0.87	1.08
4.5	0.08	0.01	0.19	0.13	0.15	0.32	0.22	0.17	0.31	0.14	0.24
4.5>	0.10		0.20	0.13	0.08	0.16	0.12	0.11	0.19	0.15	0.10
Total	170.61	175.28	156.5	120.44	94.02	80.191	112.76	139.28	125.18	82.4	255.59

粒度分析結果は、すべてファイ（ϕ）尺度で表示している。ファイ尺度では、0ϕ（1㎜）を基準に、負ほど粗粒で正は細粒になる。ファイ尺度は、$\phi = -\log^2$（ミリメートル単位の粒度/1㎜）で示される。逆に、ファイ尺度をミリメートルにするには、㎜値＝2^{-Phi}で換算される。また、各種の統計指標の数値的特性は以下の通りである。まず、平均粒径は粒度分布全体を代表する値を示す。淘汰度は、粒子の大きさのそろい方を示し、数値が0に近いほど粒径が良く揃っていることを示す。歪度は、粒径分布の片寄りを示し、0を対称に正ほどモードが平均より粗い方に片寄り、逆に負は細粒の法に偏していることを示す。尖度は、粒径分布曲線の山の尖り方を示し、係数の大きいものは突出した曲線を、逆に小さいのはへん平な曲線を示す。

北壁と南壁の粒度分析結果は、大きくはS3･N2･N5、S1･S2、S4･S5･S6･N1･N3･N4の3群に区分される。それぞれA群、B群、C群（C1群とC2群からなる）と仮称する。各群の代表的な確率積算曲線を図4に示す。

A群（S3･N2･N5）は、粒度分布が細粒な方に偏した多峰性（polymodal）を示し、正規確率紙上では4つの線分（セグメント）から構成され、粗粒側の線分が発達している。この群は、淘汰度が1.655～2.247と極めて悪く、さらに尖度が1.971～3.144と低いことにより特徴づけられる。一方、平均粒径は0.302～1.170ϕ（0.811～0.444㎜）とこの遺跡では最も粗粒である。

B群（S1･S2）は、粒度分布は概ね正規分布を示し、単峰性（unimodal）からなる。正規確率紙上では4つの線分から構成され、中粒域の線分の発達が著しい。B群は、A群とC群の中間的な特性を示し、各種の統計指標も中間的な値を示す。すなわち、平均粒径

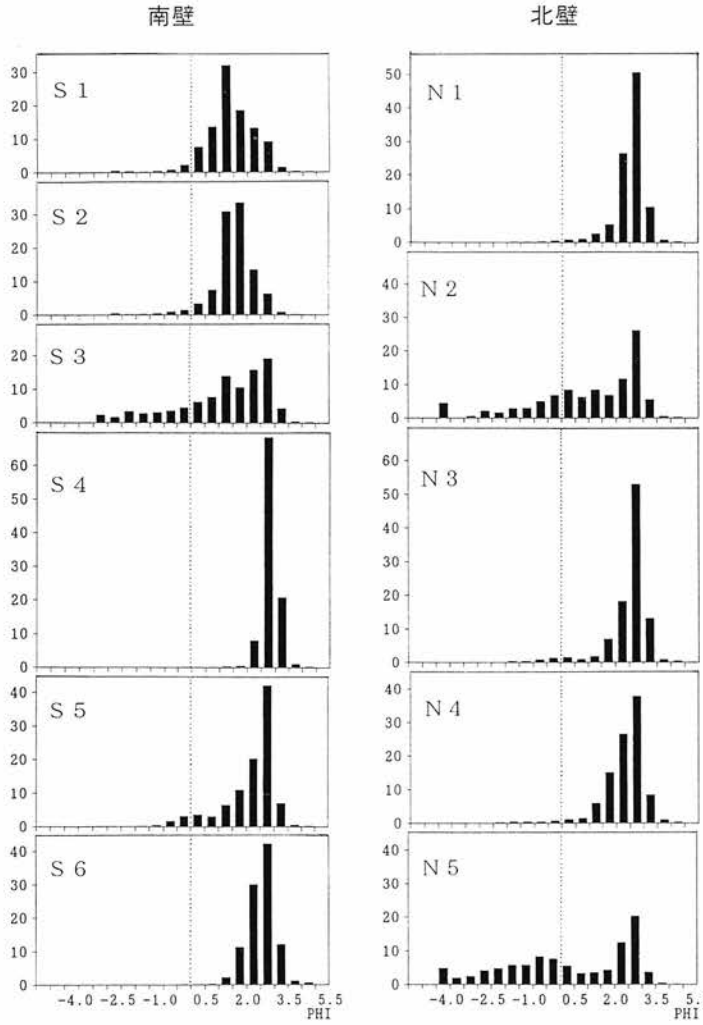


図3　粒度分布のヒストグラム

表2　長谷観音堂周辺遺跡の堆積物の各種の統計指標（phiスケール）

No.	平均粒径（㎜）	淘汰度	歪度	尖度
S1	1.408 (0.376)	0.895	-0.778	5.766
S2	1.515 (0.350)	0.766	-1.418	8.640
S3	1.170 (0.444)	1.655	-0.955	3.144
S4	2.808 (0.143)	0.347	-1.593	16.979
S5	2.156 (0.224)	0.958	-1.424	4.689
S6	2.523 (0.174)	0.528	-0.587	6.106
N1	2.515 (0.175)	0.608	-2.088	11.274
N2	1.036 (0.488)	1.957	-1.046	3.439
N3	2.482 (0.179)	0.792	-2.390	10.452
N4	2.290 (0.204)	0.802	-1.920	9.508
N5	0.302 (0.811)	2.247	-0.400	1.971

は1.408～1.515φ（0.376～0.350mm）、淘汰度は0.766ないし0.895である。

C群（S4·S5·S6·N1·N3·N4）は、粒度分布が粗粒な方に偏した単峰性を示し、正規確率紙上では4つの線分から構成される。この群は、平均粒径が2.156～2.808φ（0.224～0.143mm）細粒で、淘汰が0.347～0.958と比較的よいことにより特徴づけられる。なお、この群は淘汰度や粗粒成分の発達の程度からさらに2つに細分される。すなわち、淘汰の良いS4·S6·N1（C2群）といくぶん悪いS5·N3·N4（C1群）である。

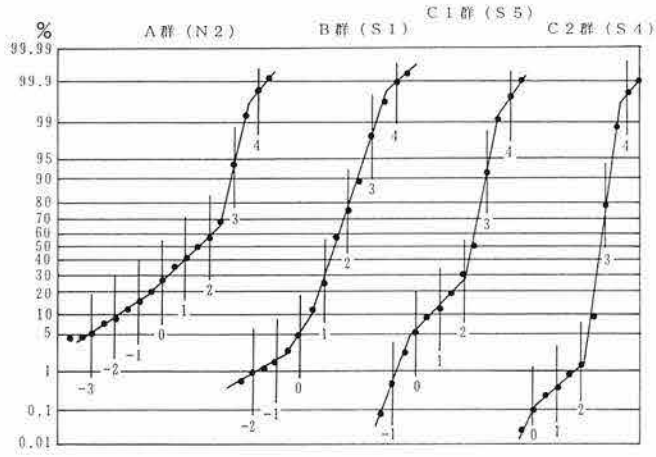


図4　A・B・C1・C2各群の確率積算曲線

3．堆積環境に関する若干の考察

一般に砕屑性堆積物の粒度組成を規制する要因としては、流体の密度、流速、流量、水深や河床勾配などがあり、さらに周囲の地質が異なれば供給砕屑物の粒度や形状及び砂粒子の密度が関係することは言を持たない。一方、海浜堆積物では特に波浪の強さ、風向、風速、沿岸流などが関係する。粒度組成は、これら要因の複合の状態や作用の状態、つまり堆積過程と堆積の場の環境により規制される。このように粒度分布は堆積環境によって特有の粒度組成を示す可能性が想定されることから、統計指標を用いて環境区分を一般化しようとした研究も多い（Friedman，1961；上杉，1972）。一方、松本（1983）は海成と風成堆積物の粒度の違いが個々の地域のみに成り立つ関係であるとし、一般化出来ないとする見解もないわけではない。

長谷観音堂周辺遺跡では、前述のようにあえて貝類などの炭酸塩からなる粒子も含めた粒度分析を行った。したがって、同じ粒度階でも比重のことなる貝片はより小さな営力で移動することは容易に想像できる。このことは、一般化された区分が摘要できない可能性を示唆させる。この様な問題点はあるが、以下に堆積環境について若干の検討を示す。

ここでの主目的である河川砂と海岸砂の区分については、Friedman（1967）は平均粒径と淘汰度によって比較的明瞭に区分されることを示した。しかし、上杉（1972）は平均粒径と淘汰度による区分の可能性については、浅海砂の淘汰度が全般に大きく河川砂と大差のないものであることなどから否定的である。ちなみに、図示していないがFriedman（1967）の分散図にプロットした場合、C2群は明らかに海岸砂の領域にプロットされ、他の試料は淘汰度が悪いことからいずれも河川砂の領域にプロットされる。なお、上杉（1972）の平均粒径と歪度を用いた風成砂と海成砂の区分では、歪度が著しい負を示すことからいづれの試料も明らかに海成砂の領域にプロットされ、少なくとも風成砂とは明確に区分される。一方、上杉（1972）は堆積環境ごとに特有な確率積算曲線のタイプを示したが、それに基づくとA群は浅海砂の、B群は前浜砂の示すタイプに比較される。C群は、どちらかと言うと河川の下流部に多くみられるパターンに似るが、これは粗粒成分に貝殻片を含むことによる可能性が高い。したがって、貝殻片を除いた場合、概ね前浜砂に似たタイプを示すものと推定される。なお、試料は実態顕微鏡で観察したところいづれの試料も有孔虫化石が多く含まれていた。このうちS6とN1の2試料について有孔虫化石の予察的な検討を行った。有孔虫化石群は、いづれの試料も概ね同様な組成を示し、Cibicides lobatulus,

Elphidium crispum, Cibicides aknerianus, Quinqueloculina seminulum Pararotalia nippnica, Cymbaloporetta spp.,Pseudononion japonicumなど湾口部付近の岩礁や砂底、あるいは海藻に付着した分類群を主体とする。

このような長谷観音堂周辺遺跡の砂層は、確率積算曲線や有孔虫化石群及び浅海砂の淘汰度が河川砂と大差のないことなどに基づくとすべて海成砂と見なせる。なお、統計指標や粒度パターンが明瞭に海成層を示さないのは、貝殻片を多量に含んだデータであることも要因の一つと考えられる。したがって、長谷観音堂周辺遺跡の下位に分布する砂層は、縄文海進期に浅海ないし潮間帯で形成された海成の砂層と推定される。

引用文献

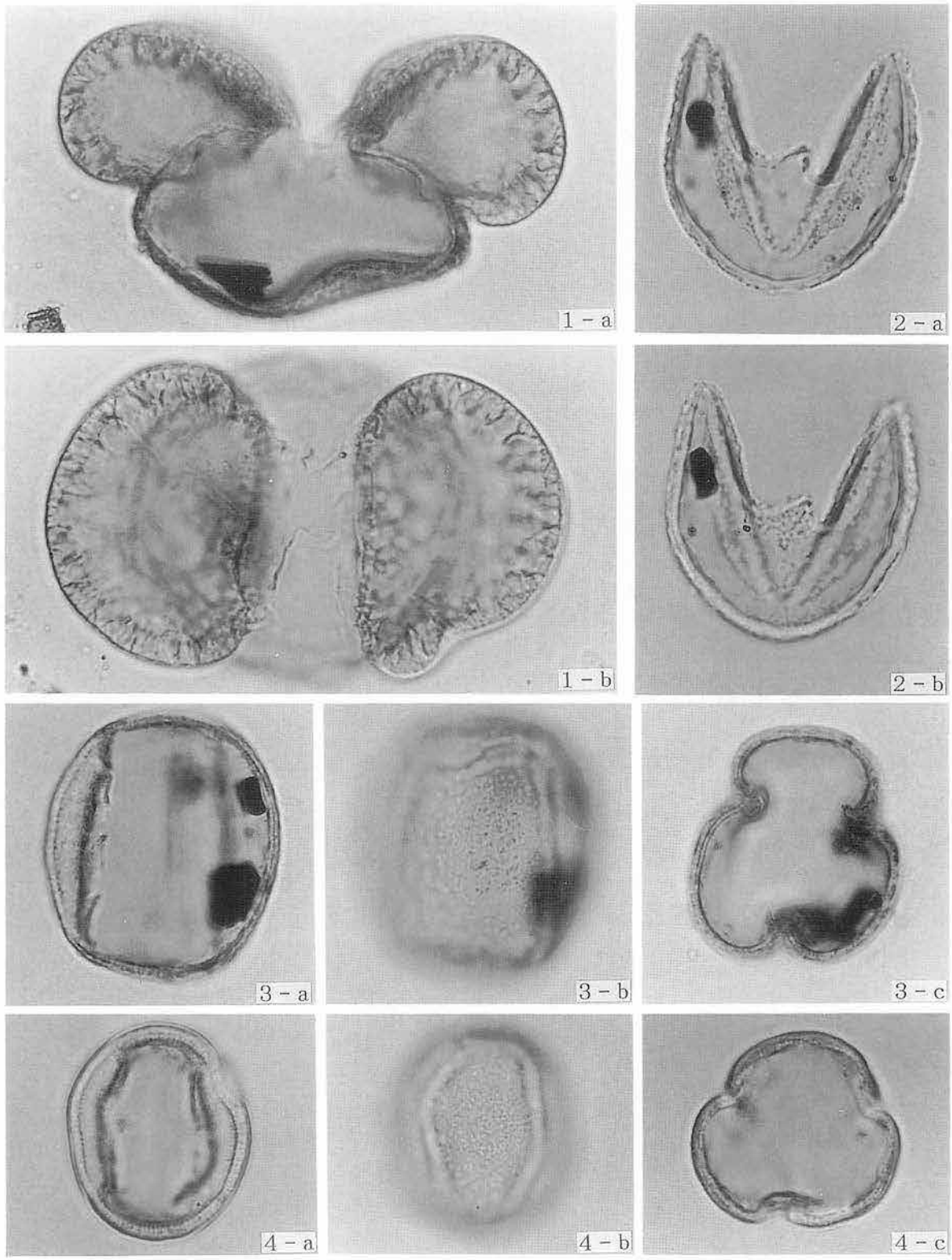
Friedman, G.H(1961)Distinction betwen dune, beach and river sands from the textural characteristics. Jour. Sed. Petro. 31,p.514-529

Fridman, G.H(1967)Dynamic processes and statistical parameters compared for size frequency distribution of beach and river sands. Jour. sed. Petro. 37,P.327-354

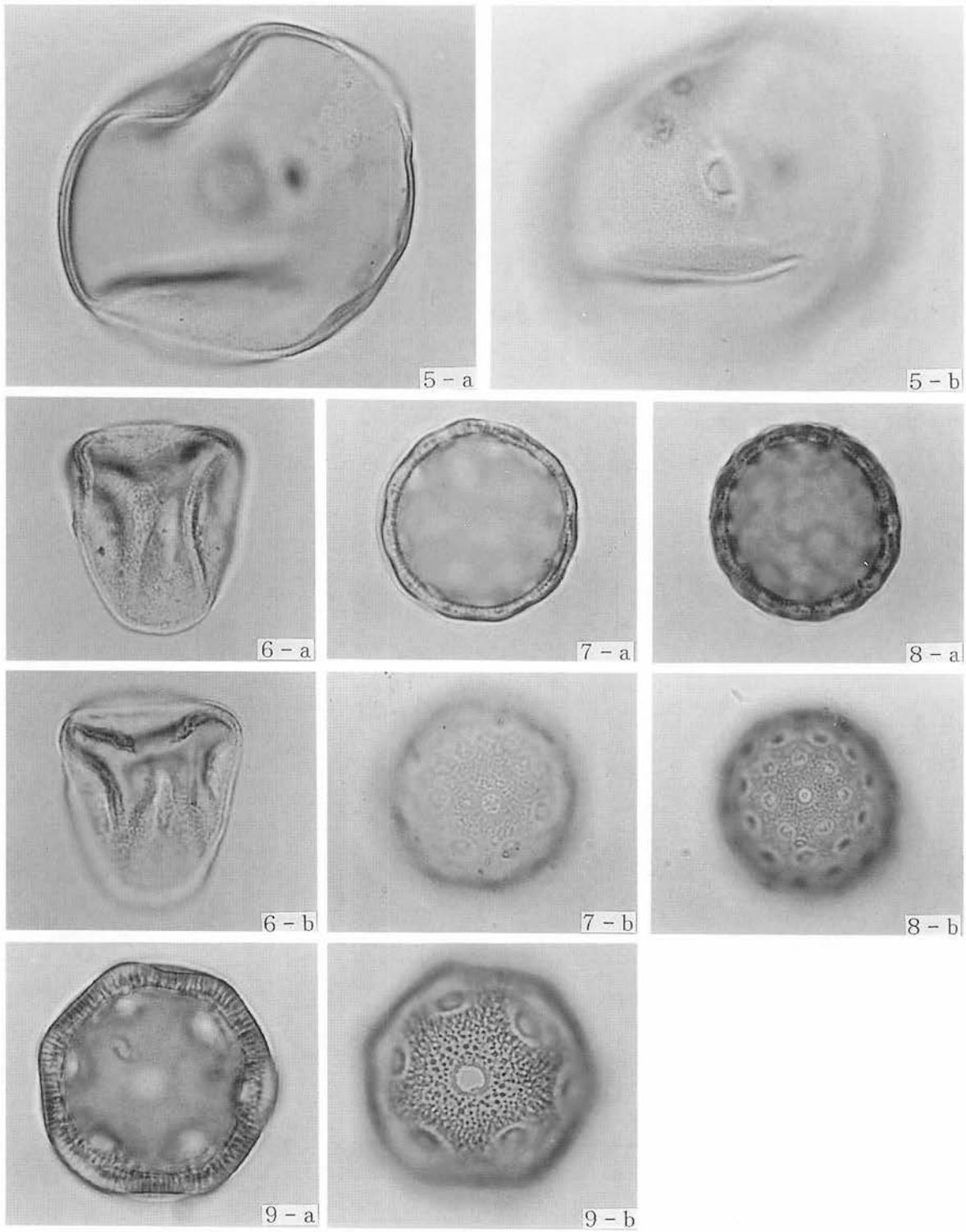
松本秀明（1983）海浜における風成・海成堆積物の粒度組成，東北地理，35，p.1-10

松島義章（1984）日本列島における後氷期の浅海成貝類群集－特に環境変遷に伴うその時間・空間的変遷－、神奈川県立博物館研究報告（自然科学），15，p.37-109

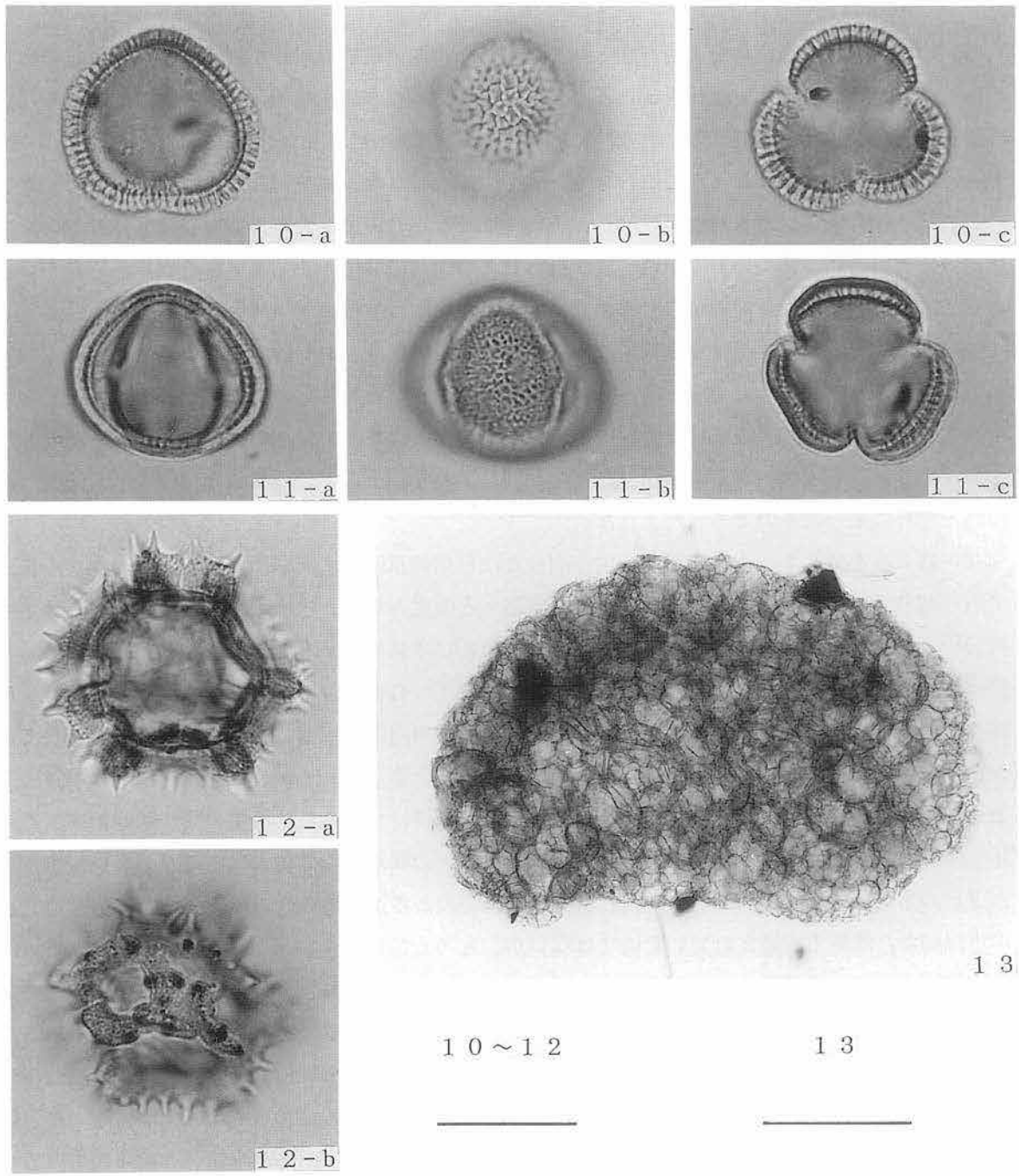
上杉　陽（1972）粒度頻度分布から見た風成砂・海成砂の諸特徴，第四紀研究，11，p.49-60



図版1　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石
1：マツ属複維管束亜属　PLC.SS 1408　試料1－4
2：スギ属　PLC.SS 1412　試料2－5
3：コナラ属コナラ亜属　PLC.SS 1414　試料1－3
4：コナラ属アカガシ亜属　PLC.SS 1416　試料1－3



図版2　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石
5：イネ科　PLC.SS 1415　試料1－3
6：カヤツリグサ科　PLC.SS 1411　試料2－4
7：アカザ科－ヒユ科　PLC.SS 1417　試料3－1
8：アカザ科－ヒユ科　PLC.SS 1418　試料3－1
9：ナデシコ科　PLC.SS 1410　試料2－4



図版3　長谷観音堂周辺遺跡の花粉化石
　10：アブラナ科　PLC.SS 1406　試料1－4
　11：ヨモギ属　PLC.SS 1404　試料1－4
　12：タンポポ亜科　PLC.SS 1405　試料1－4
　13：アカウキクサ属　PLC.SS 1407　試料1－4

第三章　まとめ

今回の調査では、鎌倉幕府の所在地として栄えた中世期の遺構と遺物が近世の水田経営によって壊され、そうした時期の遺構・遺物をほとんど発見できなかったが、南北朝、室町、戦国期を経た近世以降の鎌倉の姿を長谷観音の興隆の歴史と共に解明する資料を多少なりとも提供できたと考える。以下では、まとめとして新たに付け加えることはなく、すでに記してきた事柄を再度まとめて、結びとしたい。

調査は、現存していた木造礎石建物が大正12（1923）年の震災直後の整地面に建てられていたことを確認すると同時に、震災のあとかたづけが行われたゴミ穴の発掘から始まり、それ以前の幕末から明治にかけての建物跡、江戸前期から幕末までの水田跡、それに中世の河川跡を発掘した。

中世に属する遺構は、縄文海進期に浅海ないし潮間帯で形成された砂層、および黒色腐植土の上から川と井戸が２基と、それに土壙と溝がそれぞれ１基発見された。井戸はその井戸枠の最下段を残すのみであった。隣接する長谷三丁目41番地点の発掘成果を鑑み、また中世期の両遺跡の遺構図を合成すれば、この時期の長谷寺前は西から東の川にむけて傾斜しており、そこに建てられた建物などの遺構は河川の流路と地勢に従ったものであったようだ。

井戸底のみを残して、中世の遺構を削り取った江戸期の水田は、河岸傾斜面を河岸レヴェルにあわせて削り取り、河川は河岸制御による堤を伴う水路へと改変された。水田床土と思われた青黒色土中の花粉分析とプラント・オパール（植物珪酸体化石）分析は多量のイネと水田雑草を検出している。水田経営は江戸期を通して営まれ、幕末頃に隣接する長谷三丁目41番地点の生活面（の高さ）にあわせた水田埋立まで続く。水路からは、17世紀から19世紀に至る国内産染付磁器と施釉陶器が多数出土している。水路や河川の埋立土の中からは、中世の五輪塔が数多く出土しているが、これらの出土は中世と近世に遺跡地周辺に暮らした人々の間に中世墓に対する意識の差、すなわち居住民の間に断絶があったことを示していると思われる。また、古墳や横穴といった古代の葬地から発見されることの多い須恵器の提瓶が近世の水田より発見されたが、現在長谷寺と光則寺のある遺跡地の西方の山麓は五輪塔が造立される中世以前から葬地と認識されていたのではないか、と考えさせる。

水田埋立の後、遺跡地には三和土をもつ礎石建物が二棟建てられた。建物はいづれも中世期の遺構が河川の流路方向に規制されていたのとは替わって、現在の長谷寺参道に並行して立ち並んでいる。近世の水田水路の方向が中世河川とほぼ同方向であるここから、現在ある長谷寺参道はこの建物が建てられた時期までには定まっていたと考えられる。建物裏の井戸付近からは、幕末から明治初期の物と思われる燈明皿が上皿と下皿が逆さまに重ねられて、まとめて発見された。また水路もこの時期に埋められ、遺跡地を迂回して、より西を流れる（相模国鎌倉名所及江ノ嶋全図、明治29年）。これらの建物は一度火災に見舞われるが、再度同じような建物が同位置に建てられた。その後、明治の中頃の時期に、遺跡内の敷地利用が変わる。建物の向きはそのままに、それまでの建物の礎石を抜き取ってあらたな建物が少なくとも一棟建てられる。この建物は再度火災にあいながらも、大正12（1923）年の震災で倒壊するまで存続し、その後に現存した建物が再建された。震災で倒壊した建物の創建時期は、震災のあとかたづけに利用された便所穴からは日清戦争戦勝祝い絵皿と瀬戸産の染付便器が年代指標となる。また、近代の建物敷地から出土する多量の陶磁器には多くの器種が数個体で組をなす揃いであったことは注意されてよいだろう。長谷寺門前の遺跡地に建つ建物は単なる一般家屋ではなかったと考えられる。

さて、遺跡の西に位置する浄土宗海光山慈照院長谷寺は、天平八年草創との寺伝があるものの、現存

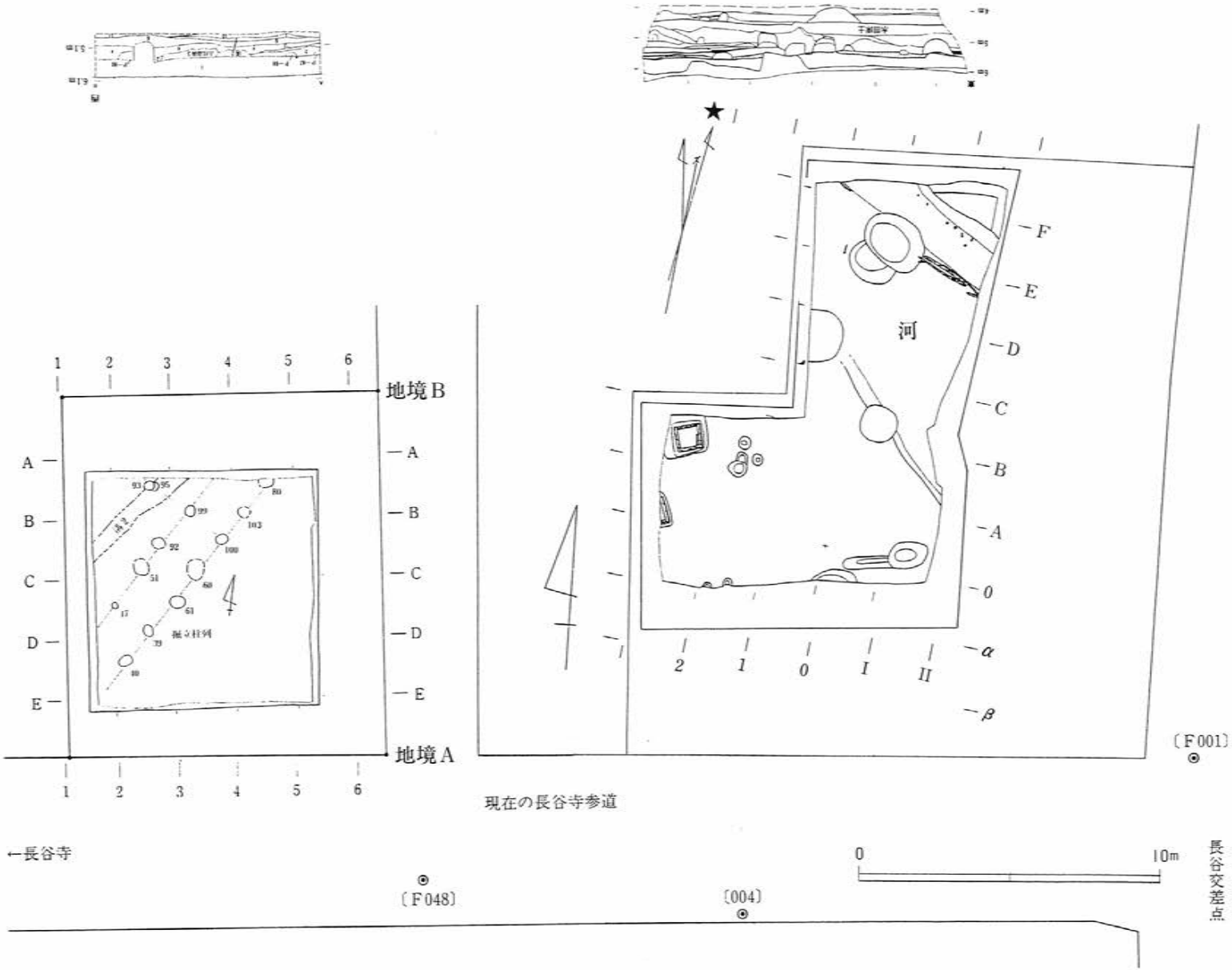


図76　長谷観音堂周辺遺跡中世面合成図

する史料では、新長谷寺梵鐘の文永元（1264）年七月十五日銘が一番古い。鎌倉市史のまとめるところによれば、長谷寺は、慶長頃までは建長寺系統の人が住寺となる禅宗で、その後徳川家康が荒廃していた長谷寺を再興し、このときより光明寺の末寺の浄土宗となる。こうした長谷寺の変遷と遺跡地に発見された遺構の変遷は、長谷寺の盛衰と現在みられる参道の形成と関係していよう。絵図や古写真によれば、明治維新前までには現在の参道はすでに出来上がり、旅館も参道に面して作られている。幕末頃に水田が埋められて、建物が現在の参道に面するように建てられる遺跡地の変遷も、そうした門前の参道の賑わいに因るものであろう。

鎌倉は、豊臣秀吉や徳川家康による八幡宮の整備の他、文化・文政の江戸民衆の大山参りの一環とした江ノ島弁天・長谷観音・金沢八景（千光寺＝千手観音、能見堂、金龍院、称名寺、琵琶島弁天）の観音めぐりと結びついて、訪れる人々も多かったと考えられる。中世と近世で建物の向きの異なることが判明した今回の調査からは、鎌倉の中で、長谷寺の盛衰と現在の参道がどのようにどのように整えられていったのか貴重な資料を提供している。

ただし、遺跡地で水田経営が行われている当時から現在のような参道がすでにあったのか、またはやや異なる位置に参道が位置していたのかの答えを得るには今後も調査を積み重ねなければならない。

参考文献

多治見市教育委員会編　1993　『美濃窯の焼きもの』

平凡社　1988　『古伊万里』　別冊太陽No. 63

古泉　弘　1988　『江戸を掘る』　柏書房

小泉和子　1989　『道具が語る生活史』　朝日新聞社

中橋掬泉　1930　『古銭大観』　1973年複刻　大文館書店

大橋康二　1994　『古伊万里の文様　―初期肥前磁器を中心に―』　理工学社

瀬戸市史編纂委員会　1988　『瀬戸市史　陶磁史篇三』　新訂三版

白神典之　1992　「堺擂鉢考」『東洋陶磁』　Vol. 13

桜木晋一　1993　「席田青木遺跡の六道銭」『席田青木遺跡１　福岡市教育委員会福岡市埋蔵文化財調査報告書　第356集』

東京大学遺跡調査会編　1989　『東京大学本郷構内の遺跡　理学部７号館地点　東京大学遺跡調査室発掘調査報告書１』

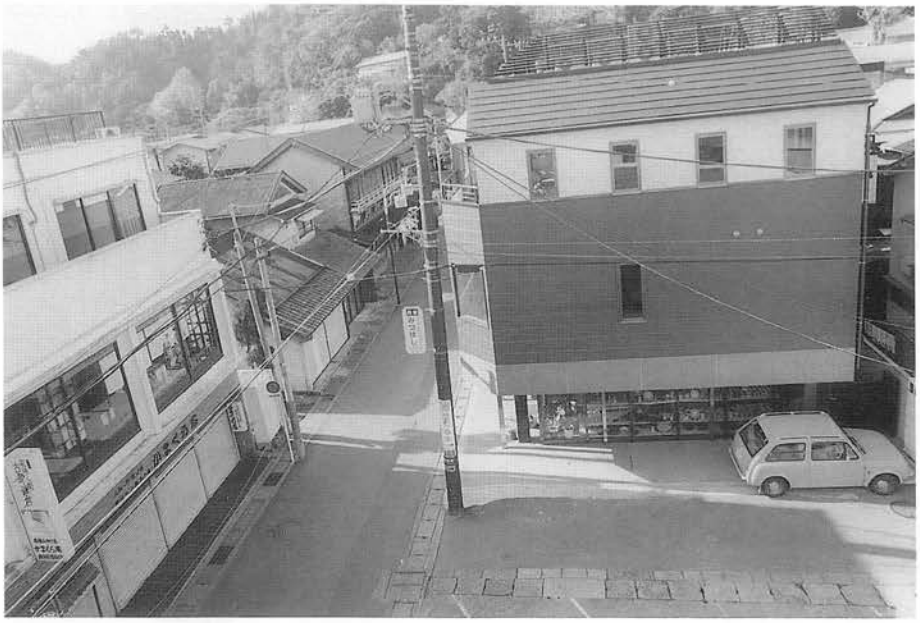
東京大学遺跡調査会編　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡　東京大学遺跡調査室発掘調査報告書２』

東京大学遺跡調査会編　1990　『東京大学本郷構内の遺跡　医学部附属病院地点　東京大学遺跡調査室発掘調査報告書３』

日本福祉大学知多半島総合研究所編　1994　『「中世常滑焼きをおって」資料集』　レジュメ

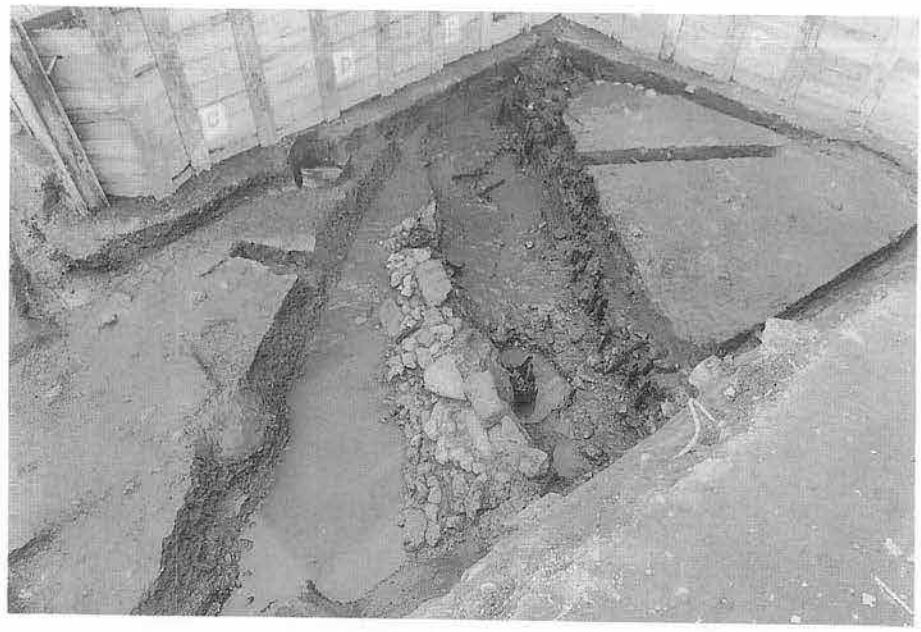
中世都市同人会編　1994　『鎌倉における生産地年代と消費状態』第２回中世都市研究討論会レジュメ

1. 遺跡地から
長谷の交差点をのぞむ



2. 遺跡地から
長谷観音参道を
のぞむ

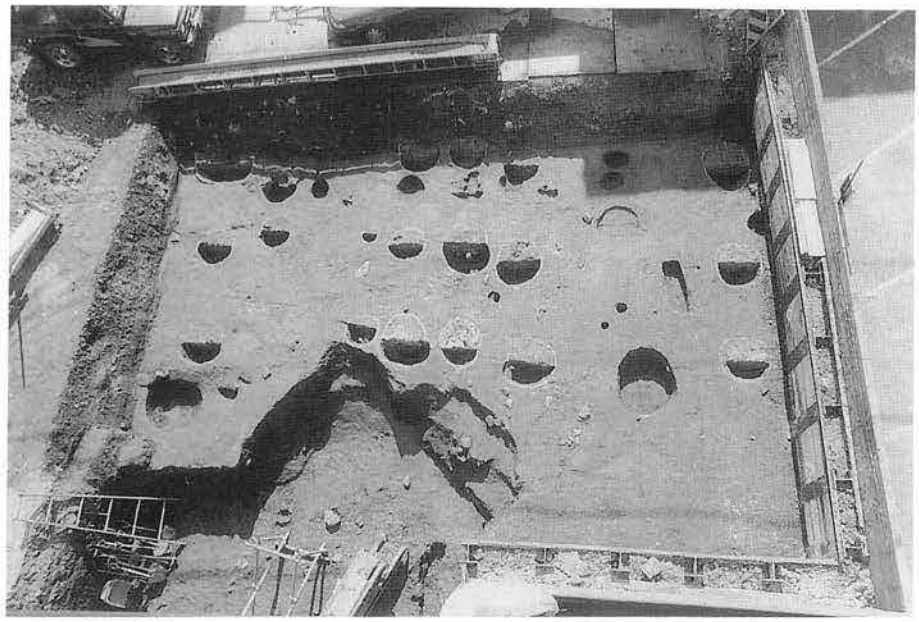
3. 中近世遺構全景
（南から）



4. 水路2～4
（東から）

5. 堤護岸（北から）

6. 水路1（東から）



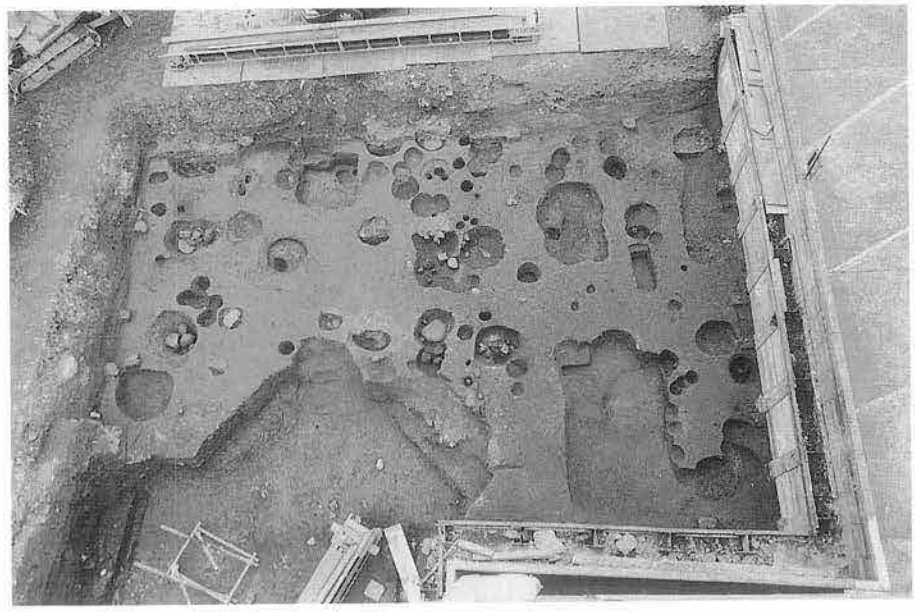
7. 近代（幕末～明治初）
全景（北から）

8. 井戸4（東から）

9. 井戸4近景（東から）

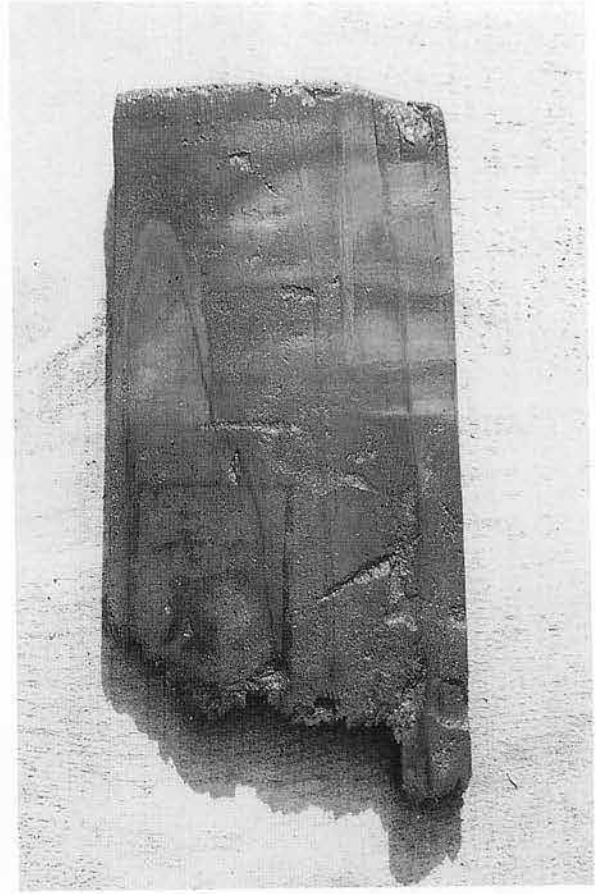
10. 2面下出土の
瀬戸・美濃製品

11. 建物1北側出土灯明皿
出土状況（南から）

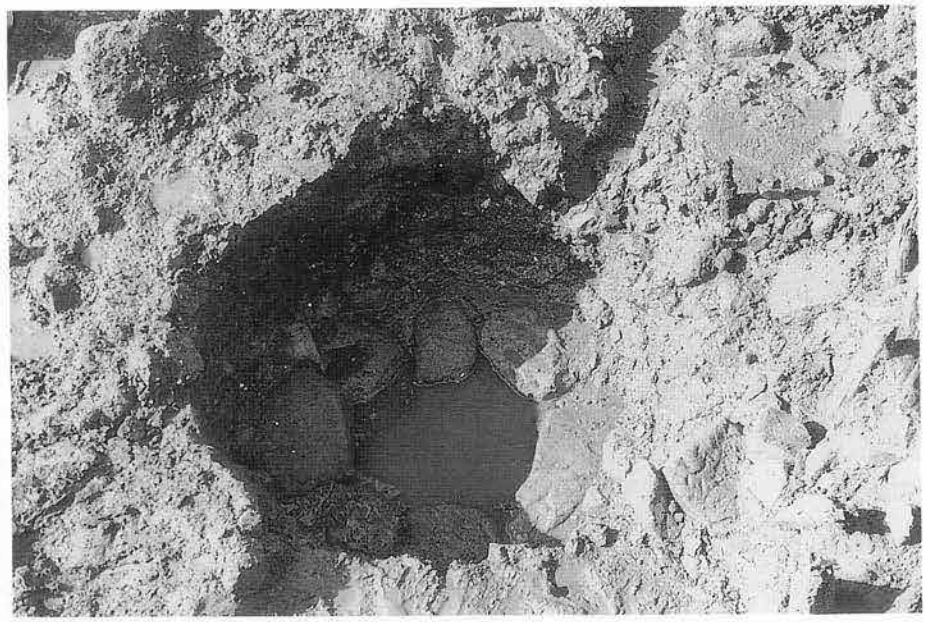


12. 近代（明治～大正）
全景（北から）

13. 井戸1（西から）

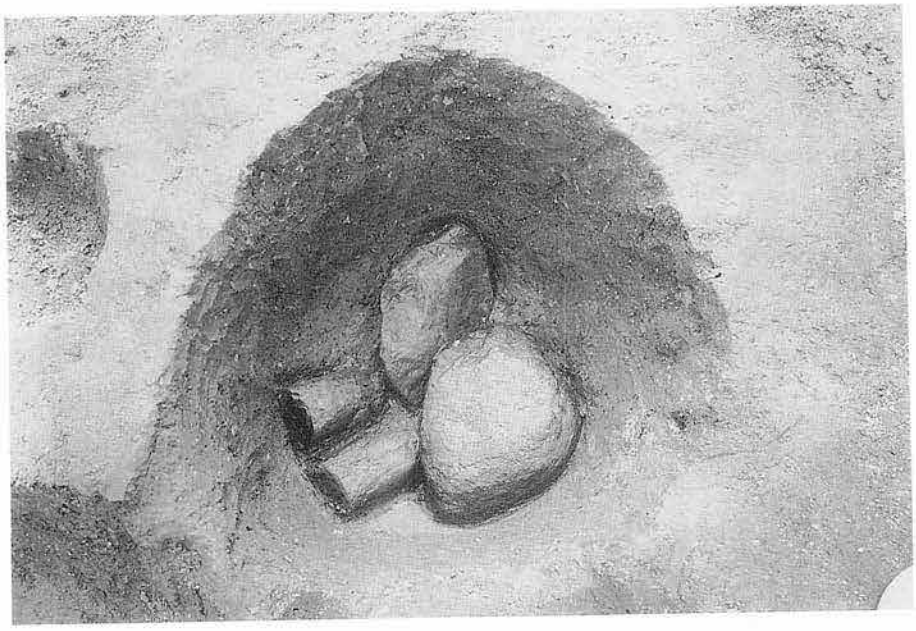


15. 井戸1に使われた桶の部材



14. 井戸1堀り方底面（北から）

16. 礎石根固め
土層



17. 礎石根固め下層

18. 礎石を支える
赤松の丸太杭

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	11
編集者名	室薹秀明
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1995年3月

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
はせかんのんどうしゅうへんいせき 長谷観音堂周辺遺跡	神奈川県鎌倉市長谷三丁目	204	296			19931018～ 19931228	190	自己用店舗併用住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長谷観音堂周辺遺跡	中世都市遺跡	中世	河川跡 1条 井戸 2基 土壙 1基 溝 1条	土師器・須恵器・近世磁器・近世陶器・砥石・銭・五輪塔・曲げ物・下駄・漆器・硯・石臼・キセル等 テンバコ52箱	中世遺構は近世に削平水田開発により削平。幕末から長谷観音堂の門前町に変遷。
		近世 (17～19世紀)	河川跡・水田		
		幕末～明治 19世紀	礎石建物 2棟		

９．上杉氏憲邸跡（Ｎｏ．２５８）

浄明寺一丁目699番外地点

例　言

1．本報は鎌倉市浄明寺一丁目699番他地点における埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる住宅部分の報告である。

2．調査は集合住宅建設にともなう原因者負担事業分と平行しておこなわれた。遺跡理解をそこなわないために、本報にはできるかぎりその成果も取り入れている。

3．調査体制は次のとおり

担当者	馬淵和雄
調査員	太田美知子・渡部律子（内業）・及川加代子（同前）
調査補助員	折茂由利・丹行正・岡陽一郎・森本康二・山上玉恵（内業）・兼行侊枝（内業）・坂倉美恵子（内業）
調査協力者	福本寿夫・萱野五郎・松崎靖弘・成田初枝・川名由子・河盛ミサエ・石井ちず子

4．本報作成分担は次のとおり

遺構図整理	森本・太田他
遺物実測	渡部・及川・山上・兼行・坂倉・折茂・丹
同墨入れ	同　上
表作成	折茂・山上
遺物写真撮影	太田
原稿執筆	馬淵（第一章前半・第二・三・四章）・岡（第一章後半）
編集	馬淵

5．出土遺物等、本発掘調査にかかわる資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

本　文　目　次

第一章　調査地点概観 ……219
第二章　調査の概要 ……224
第三章　調査結果 ……226
1．Ⅰ面 ……226
2．Ⅱ面 ……231
3．Ⅲ面 ……255
4．Ⅲ′面 ……264
第四章　まとめ ……268

挿　図　目　次

図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡 ……220
図2　調査地点位置図 ……221
図3　方眼設定図 ……224
図4　Ⅰ面遺構配置図 ……227
図5　1区Ⅰ面平面図 ……228
図6　切石列 ……229
図7　切石 ……230
図8　土壙1・2 ……231
図9　1区Ⅰ面出土遺物 ……232
図10　2区Ⅰ面平面図 ……234
図11　2区Ⅰ面土壙15•16•17，同出土遺物 …236
図12　2区Ⅰ面・小穴出土遺物 ……237
図13　Ⅱ面遺構配置図 ……240
図14　1区Ⅱ面平面図 ……241
図15　土壙3・7・8・9，同出土遺物 ……242
図16　土壙4・5・6 ……243
図17　土壙4・5・6出土遺物 ……244
図18　土壙10～14，同出土遺物 ……247
図19　1区Ⅱ面土師器溜り1・土師器埋納遺構，同出土遺物 ……248
図20　1区Ⅱ面出土遺物 ……250
図21　2区Ⅱ面平面図 ……251
図22　2区Ⅱ面土壙18～22，同出土遺物 ……252
図23　2区Ⅱ面土壙・道状遺構1 ……253
図24　2区Ⅱ面・小穴出土遺物 ……254
図25　Ⅲ面遺構配置図 ……256
図26　1区Ⅲ面平面図・出土遺物 ……257
図27　2区Ⅲ面平面図 ……258
図28　2区Ⅲ面土壙25・26，同出土遺物 ……259
図29　2区Ⅲ面溝4・5・道状遺構2 ……260
図30　2区Ⅲ面・Ⅲ面上炭化層出土遺物 ……261
図31　2区Ⅲ面上炭化層•Ⅲ面小穴出土遺物…262
図32　1区Ⅲ′面出土遺物 ……264
図33　2区Ⅲ面平面図 ……264
図34　1区北壁土層図 ……265
図35　1区各面土層図 ……266
図36　2区南壁土層図 ……267

表　目　次

表１　切り石観察表 ……230
表２　１区Ⅰ面出土遺物観察表 ……233
表３　溝１出土遺物観察表 ……236
表４　２区Ⅰ面出土遺物観察表 ……238
表５　土壙３・９出土遺物観察表 ……243
表６　土壙４・５・６出土遺物観察表（１）……245
表７　土壙５出土遺物観察表（２）……246
表８　土壙14出土遺物観察表 ……246
表９　土師器溜り１・埋納遺構出土遺物観察表(１) ……246
表10　埋納遺構出土遺物観察表（２） ……249
表11　１区Ⅱ面出土遺物観察表 ……249
表12　２区Ⅱ面土壙18・19・20出土遺物観察表 ……250
表13　２区Ⅱ面小穴出土遺物観察表（１） …250
表14　２区Ⅱ面小穴出土遺物観察表（２） …253
表15　１区Ⅲ面溝７・井戸１出土遺物観察表…254
表16　２区Ⅲ面土壙25・26出土遺物観察表 …257
表17　２区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（１）…259
表18　２区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（２）…260
表19　２区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（３）…263
表20　１区Ⅲ′面出土遺物観察表 ……264
表21　調査区全体遺物構成 ……269
表22　土師器技法別構成 ……269
表23　国産陶磁器器種構成 ……269
表24　中国産陶磁器器種構成 ……269

図　版　目　次

図版１　１．犬懸ヶ谷遠望(杉本寺周辺遺跡から)　270
　　２．犬懸坂（前方カーブ右側が調査地点）
　　３．調査地点近景（北西から）
　　４．同　上（南西から）
図版２　１．谷最奥部平坦面５(谷尻から)　271
　　２．同平坦面５入口のやぐら（西から）
図版３　１．１区Ⅰ面全景(拡張前,東から)　272
　　２．同　上（西から）
　　３．同東半部（西から）
図版４　１．１区Ⅰ面全景（北西から）　273
　　２．１区Ⅰ面切石列（北から）
　　３．１区Ⅰ面全景（北東から）
図版５　１．２区Ⅰ面全景（東から）　274
　　２．同　上（西から）
　　３．２区Ⅰ面下土壙
　　４．２区Ⅰ面下土壙
図版６　１．１区Ⅱ面土壙群（西から）　275
　　２．同　上（北東から）
　　３．１区Ⅱ面土壙
図版７　１．２区Ⅱ面全景（西から）　276
　　２．同　上（東から）
　　３．２区東辺部Ⅱ面下遺物出土状況
図版８　１．２区Ⅲ面全景（東から）　277
　　２．同　上　西辺部
　　３．同東辺部
図版９　１．２区Ⅲ面道状遺構１（北から）　278
　　２．２区Ⅲ面土壙　（北から）
　　３．２区Ⅲ面道状遺構２（北から）
図版10　１．１区西端深掘部（東から）　279
　　２．１区Ⅲ面下（北から）
　　３．１区Ⅱ面土師器埋納遺構
図版11　１．２区Ⅲ面土壙　280
　　２．２区Ⅲ面道状遺構土層断面
図版12　１区Ⅰ面・２区Ⅰ面・土壙３・土壙９出土遺物　281
図版13　土壙４・土壙５・土壙14出土遺物　282
図版14　埋納遺構・土師器溜まり１・１区Ⅱ面・土壙20出土遺物　283
図版15　２区Ⅱ面・溝７・井戸１・土壙25・２区Ⅲ面上炭化層・Ⅲ面小穴出土遺物　284
図版16　２区Ⅲ面上炭化層・Ⅲ面小穴出土遺物　285
図版17　２区Ⅲ面上炭化層・Ⅲ面小穴・１区Ⅲ面出土遺物
　　底部に花押のある瀬戸碗　286

第一章　調査地点概観

立　地

滑川の本流は朝比奈峠に源を発し、十二所から浄明寺（地名）、杉本辺の狭い谷あいを西に流れ、大倉付近で二・三の支流と合流して市内中心部の平野を開析する。浄明寺や杉本付近では、小さな支流によって開かれた南北の谷が、川の南岸にいくつも並ぶ。それらには西から大御堂ガ谷、釈迦堂ガ谷、犬懸ガ谷、宅間ガ谷などの名が付けられているが、調査地点はこのうち西から三つ目の犬懸ガ谷の中にある。谷前面を東西に通る道（中世の「田楽辻子」か）から30～40m入った、谷口近くに位置する。入口を扼す場所に当たるといってもよい。この地点から谷最奥部までは250～300m程度ある。現在の地番は鎌倉市浄明寺一丁目699番外。

谷は全体にかなりの傾斜で南に上っていくが、実際には五つ前後の平坦面が段状に繋がったものである。ここで犬懸ガ谷の概略と、その中での調査地点の位置をみてみよう。なおここには表面観察から五段の平坦面が認められるが、記述の都合上、入口（北端）から奥に向け、1から5までの番号を付しておく。調査区のある平坦面は2である。

平坦面2は東西、南北とも約50mほどの広さがある。この平坦面は数字のとおり、下から数えて大体2段目（3段目の可能性もある）になる。むろん、前面の北側（「平坦面1」）は一段低く、背後の臨地（「平坦面3」）は一段高い。いずれも2m程度の比高差を持つ急峻な崖で、明らかに人為的に削り出されている。背後の平坦面3は東の山懐に大きく開け、全体で東西100mと、1の倍ほどの広さが確保されている。かなり有力な人物の居住区であった可能性があろう。平坦面4は3よりもやはり2mほど高く、2と同じぐらいの規模がある。谷最奥部の5は人工的に切り開かれたとみられ、ここも3同様東側に膨らんでいる。東西、南北とも100mほどある広い平場である。周囲の山裾にはやぐらもいくつか開口している。広さや立地からみてあるいはここが、後述する犬懸ガ谷上杉氏の居館本体の所在地かもしれない。

谷の中を通る道は犬懸坂といい、後述するように、遅くとも平安末期には存在していた幹線道路である。犬懸坂は調査区と東側の山裾との間を抜けている。

また滑川は杉本寺前面で南に大きく蛇行し、現在運動広場となっている広い平坦地を形成するが、調査地点はこの南側にも当たる。

（馬淵）

歴史的環境

当遺跡周辺の地が古代に何と呼ばれていたか正確には不明だが、平安時代の『倭名類聚鈔』の記載でいえば荏草（えかや）郷に属していた可能性がある。この一帯にそれ以前から人々が居住していたことは、周辺の向荏柄遺跡や大倉幕府周辺遺跡から検出された古墳時代～奈良時代の竪穴住居（馬淵1985・1993）や、南御門周辺で検出された弥生時代の集落遺跡（及川1990）などからも知ることができる。

当遺跡の北を滑川に沿って東西に走る六浦道（現在の県道金沢－鎌倉線）は、石井進らの指摘にもある通り（石井1986・野口1993ほか）、鎌倉市域の南を通る旧東海道（奈良時代）とともに、中世以前から存在した主要道路であった。この六浦道が早くに存在したことは、窟堂・荏柄天神社・杉本寺など少なくとも平安時代末期にはあったと思われる寺社が、寿福寺（源義朝の「鎌倉之楯」）から当遺跡周辺にかけて道沿いに並ぶことからも明らかであろう。最初の幕府もこの道沿いの大倉に置かれた。以後政

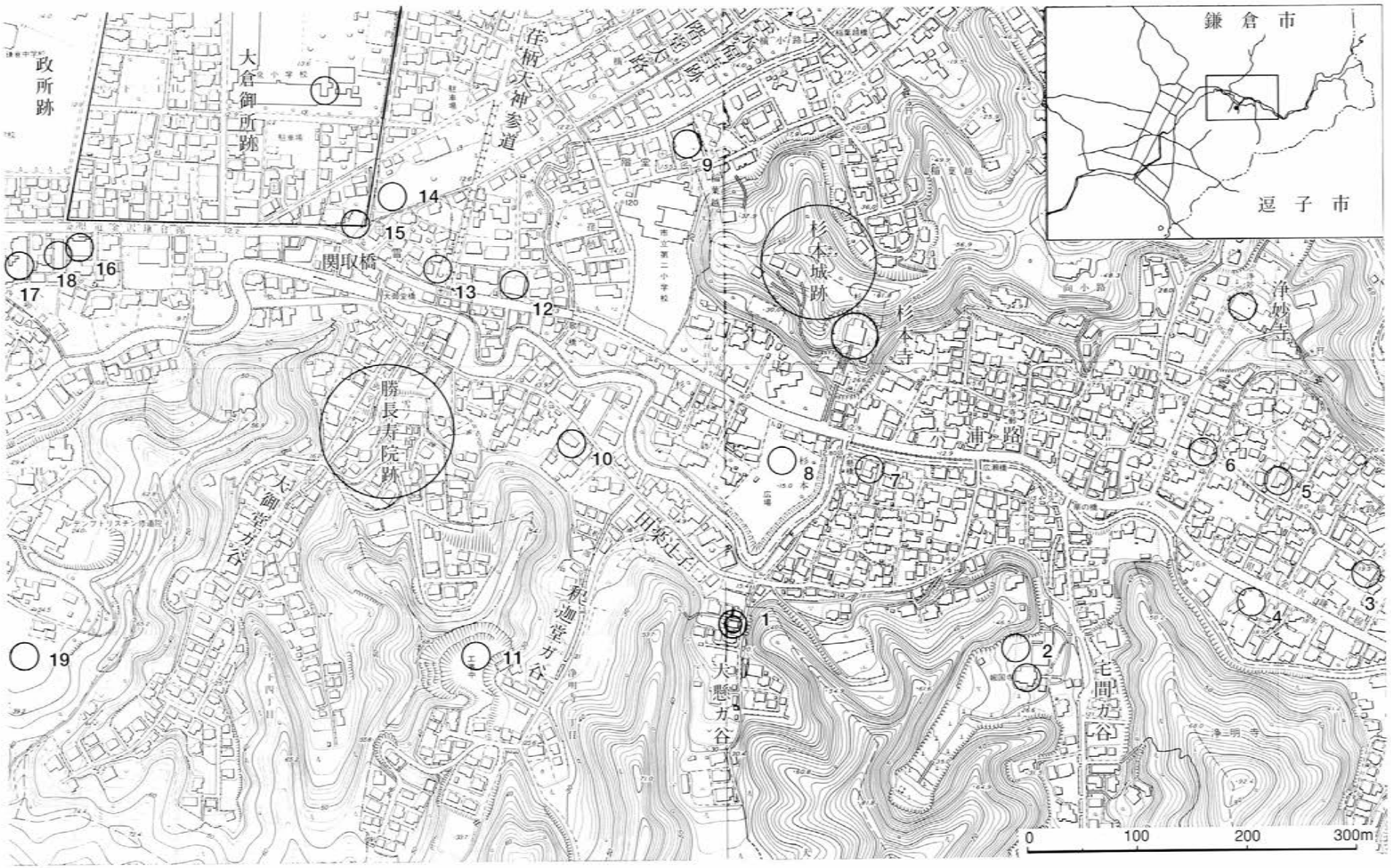


図1　調査地点と近辺の遺跡・旧跡

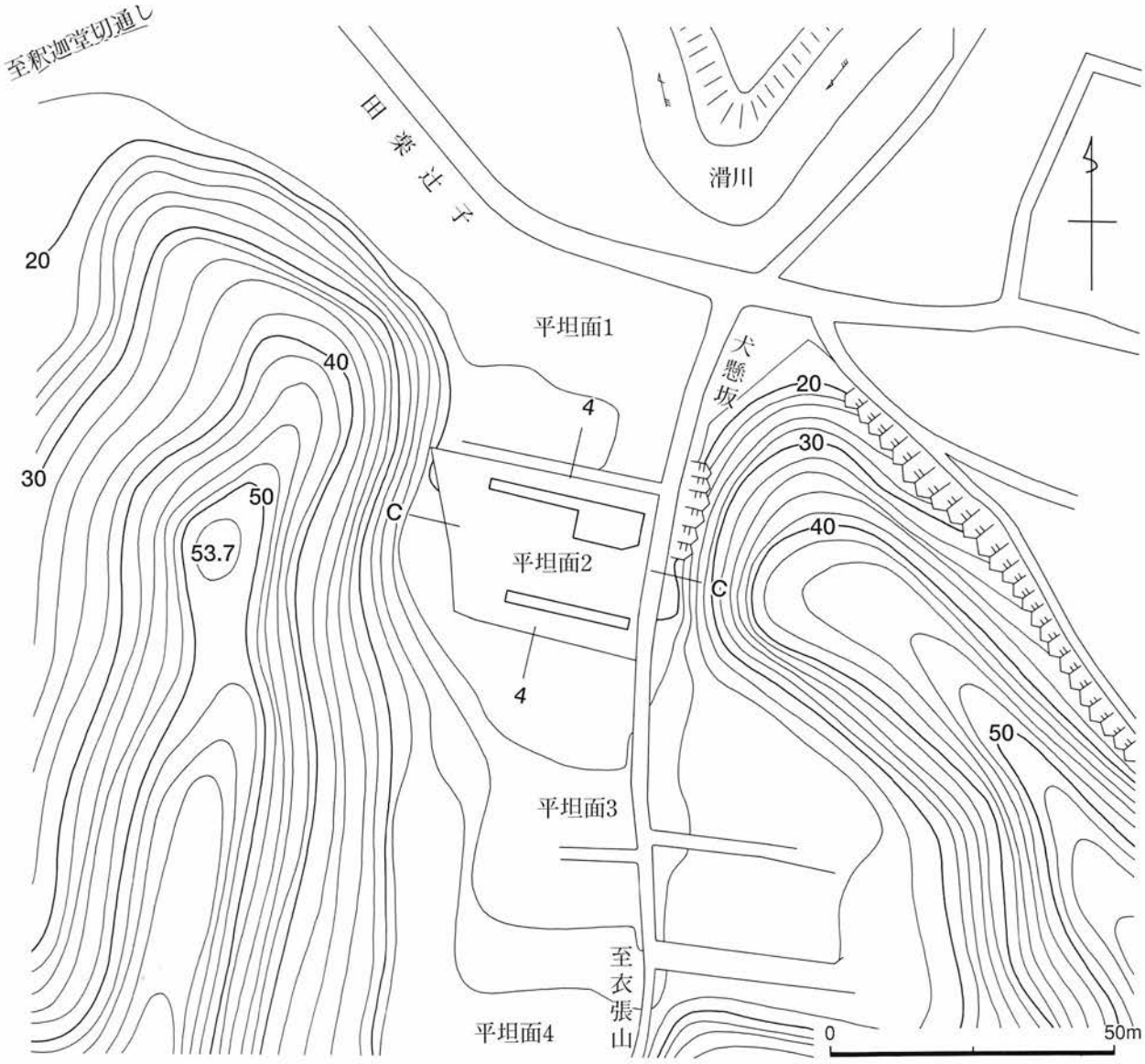


図２　調査地点位置図

図１地点名

１．調査地点　２．報国寺やぐら群　３．公方屋敷跡　４．浄明寺稲荷小路遺跡　５．浄妙寺旧境内遺跡　６．田楽辻子周辺遺跡（浄明寺字宅間562 番33地点）　７．浄妙寺旧境内遺跡（浄明寺字向小路90番１地点）　８．杉本寺周辺遺跡群（二階堂字杉本912番１外地点）　９．向荏柄遺跡　10．浄明寺釈迦堂田楽辻子遺跡　11．浄明寺釈迦堂遺跡　12．横小路周辺遺跡（二階堂字荏柄９番１地点）　13．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下字大倉耕地565 番４地点）　14．大倉幕府周辺遺跡群（二階堂字荏柄38番１地点）　15．大倉幕府周辺遺跡群（雪ノ下字大倉耕地569番１地点）　16．大倉南御門遺跡（Ａ地点）　17．大倉南御門遺跡（Ｂ地点）　18．大倉南御門遺跡（Ｃ地点）　19．東勝寺遺跡

※番号のついていないものはその他の調査地点

治情勢にかかわりなく、この道は中・近世から現代にいたるまで幹線として存続する。

六浦道沿いには、義朝の「楯」を中心として源氏累代の家人である三浦一族の居館も置かれていた。各居館の間を繋いだ居館網ともいうべき人・情報・ものの交流の網の目は、義朝らの動きからみても、六浦を越えて対岸の房総半島にまで続いていたのは明らかである。当遺跡付近では六浦道沿いの杉本寺前運動広場から大型の堀を有する掘立柱建物群が検出されたが（清水1991）、これも遺構年代とそのあり方から三浦氏関係の居館である可能性が高い。ここからは六浦道に交差する道路状遺構も検出され、本地点の面した犬懸坂がその延長線上に乗るところから、同一の道路であった可能性もある。

犬懸坂は本地点の南に伸び、衣張山に登る。この道路は近世では巡礼道とされているが、道筋自体『源平盛衰記』で和田小次郎義茂が小坪合戦の時にとった犬懸坂の北（つまり杉本）から小坪へと向かった道筋とほぼ重なると思われる。つまり、当遺跡は六浦道に近接した位置にあったのみならず、六浦道から小坪方面へと抜ける道路沿いにも位置する。

後に鎌倉に源頼朝が入ると、父義朝の菩提を弔うための寺院である勝長寿院（南御堂）が当遺跡西隣の谷（大御堂ガ谷）に建立されたりした。また、当遺跡の北側を通る道は、『吾妻鏡』にいう「田楽辻子」ではないかといわれている。

嘉禄元年（1225）の幕府移転により、都市鎌倉の基本軸が若宮大路を中心とする南北軸に移動するため、『吾妻鏡』における当遺跡周辺の記述は減少する。しかし、六浦道が依然として鎌倉とその外港六浦津とを結ぶ主要道路であることにかわりはなかった。遺跡北方の杉本寺前面の六浦道はちょうど微高地となるが、こうした立地条件のためか、平安末期あるいは鎌倉末期、杉本寺の裏山には杉本城という城郭が構えられている。鎌倉幕府滅亡後の建武四年（1337）8月の北畠顕家による鎌倉侵入の際には当地付近においても合戦が行われ（24日・25日）、足利尊氏方の武将斯波家長が戦死している。

南北朝・室町期に入ると、鎌倉時代に較べ当遺跡周辺の文献資料の数は少なく、発掘調査の事例も充分とはいえないが、東国十カ国（十一カ国または八カ国とも）の首府として、この付近は再び政治の中心舞台に登場する。

六浦道に面する現在の浄妙寺の東には公方屋敷という地名が存在する。この地に足利基氏以来鎌倉公方の屋敷があったという。これを信じるならば、南北朝・室町期における鎌倉の中心は六浦道周辺であり、鎌倉の基本軸も再度東西軸に変化したといえる。鎌倉公方を補佐する関東管領上杉氏の一族も、この東西軸沿いの地である宅間・犬懸をはじめ、山内・扇谷の各地を名字とした。上杉の祖の重房は建長四年（1252）、第六代将軍宗尊親王とともに関東に下向し、以来将軍の側近として武家となった。上杉氏は足利家と姻戚関係を結ぶなどして関東に勢力を広げ、正平十八年（貞治二年　1363）上杉憲顕が関東管領職に補任されて以後、これを独占する。室町時代には、上杉家は上記の四家に分かれているが、そのうちで当遺跡の位置する谷の名を名乗るのが犬懸上杉氏である。

応永初年（1394）以来、管領職には山内家と犬懸家が交代でつくようになり、その家が鎌倉府内部に影響力をもったと思われる。しかし、犬懸家は応永年間に管領職についた氏憲（禅秀，？～1417）の代に勢力を失う。彼が応永二十三年（1416）に起きた「禅秀の乱」の主因者となったからである。

乱前年の応永二十二年4月、氏憲は足利持氏により管領職を解かれ、山内家の憲基がそれに代わる。また、同年7月には犬懸、山内両派の軍勢が鎌倉に集まるなどの事件が起きた。これら一連の事件の背後には、持氏と氏憲、山内家と犬懸家の対立があったと考えられる。

禅秀の乱はこうした状況下で起こった。この時氏憲側に付いた人々のなかには持氏に反発する叔父満隆や、京都にいて将軍足利義持に不満を持つ義嗣（義満の庶子）など足利氏内部の不平分子の姿も見ら

れた。このように義持・持氏・憲基に対する不満派の人々や、姻戚関係にある関東の有力武士達を糾合した氏憲は応永二十三年10月２日の夜、浄妙寺東の持氏の御所を襲う。

この御所攻撃を皮切りに憲基邸を初めとする鎌倉の各地で戦闘が行われ、持氏は駿河国に、憲基は越後国にそれぞれ敗走する。氏憲側は幕府の対応の遅れもあり、鎌倉を占領する。しかし、京都での義嗣の挙兵は失敗し、翌二十四年正月10日、氏憲は幕府の切り崩しによる味方の相次ぐ寝返りのなかで幕府の軍勢を北と西から迎えて、鎌倉の雪ノ下で自害し、この乱は終結した（『鎌倉大草紙』）。

氏憲の屋敷がこの谷のどの場所にあったかは定かではない。最奥部が広さと立地の点においてもっとも相応しいが、それほど広い谷ではないので、全体を眷属の屋敷地としていた可能性はある。

やがて康正元年（1455）以降、鎌倉公方である足利成氏が下総古河に移るに至って鎌倉は東国の府としての役割を終えることとなる。それに伴なって都市鎌倉の姿も相当の変化があったと思われる。

戦国時代の鎌倉を支配した小田原北条氏は、天文13年（1544）、六浦道の大倉辻に荏柄天神社造営のための関銭法度を定め、通行する人馬から関銭を徴収した。この関所は現在の関取橋の地名の由来とされ、近辺の発掘調査でもそれらしき礎石建物が検出されている（馬淵他1990）。江戸時代には、六浦道は相模湾の魚介類を江戸に運ぶための道路として賑わったが、当遺跡付近の消息は伝わらない。

（岡）

引用文献

『鎌倉大草紙』（『群書類従』巻第三百八十二・合戦部十四）
石井進1986　「中世六浦の歴史」『三浦古文化』第40号　三浦古文化研究会
石井進1988　「中世都市・鎌倉――歴史の原風景を求めて――」『歴史の読み方２　都市と景観の読み方』（『週刊朝日百科　日本の歴史』別冊）朝日新聞社
及川良彦1990　「大倉南御門遺跡（Ｃ地点）出土の弥生土器」『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番１地点発掘調査報告書』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
清水菜穂1991　「杉本寺周辺遺跡群の調査」『鎌倉市遺跡調査・研究発表会資料』
野口実1993「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45　財団法人古代学協会
馬淵和雄他1985　『向荏柄遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
馬淵和雄他1990　『大倉幕府周辺遺跡群　雪ノ下字大倉耕地569番１地点発掘調査報告書』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
馬淵和雄1993　「２．大倉幕府周辺遺跡群　二階堂字荏柄38番１」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　９』鎌倉市教育委員会

参考文献

百瀬今朝雄他1981　「第三章　鎌倉府」『神奈川県史　通史編』２
永原慶二1974　『下克上の時代』中央公論社（文庫版）
永原慶二1988　『内乱と民衆の世紀』（『大系日本の歴史』６）小学館

第二章　調査の概要

調査にいたる経緯

この点に関しては、下の文献を参照されたい。

「平成５年度調査の概観」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　10』鎌倉市教育委員会　1994

また原因者負担分に関しては、国庫補助事業分の調査後に引き続いて行われ、1994年１月17日に終了した。

調査方法

住宅は二棟が東西に長く平行して建てられる。そこでその部分に幅２ｍの調査区を設定し、北から１区・２区と名付けた。１区は長さ27ｍで、東南に12ｍ×５ｍ拡張した。２区は長さ22ｍである。総調査面積は約160㎡で、うち国庫補助事業分は30㎡であるが、発掘調査という作業の性格上、原因者負担分と厳密な地区割りを設けているわけではない。

また杭を深く入れない工法で設計されているので、建物基礎の強度を維持するために、ここでは掘削

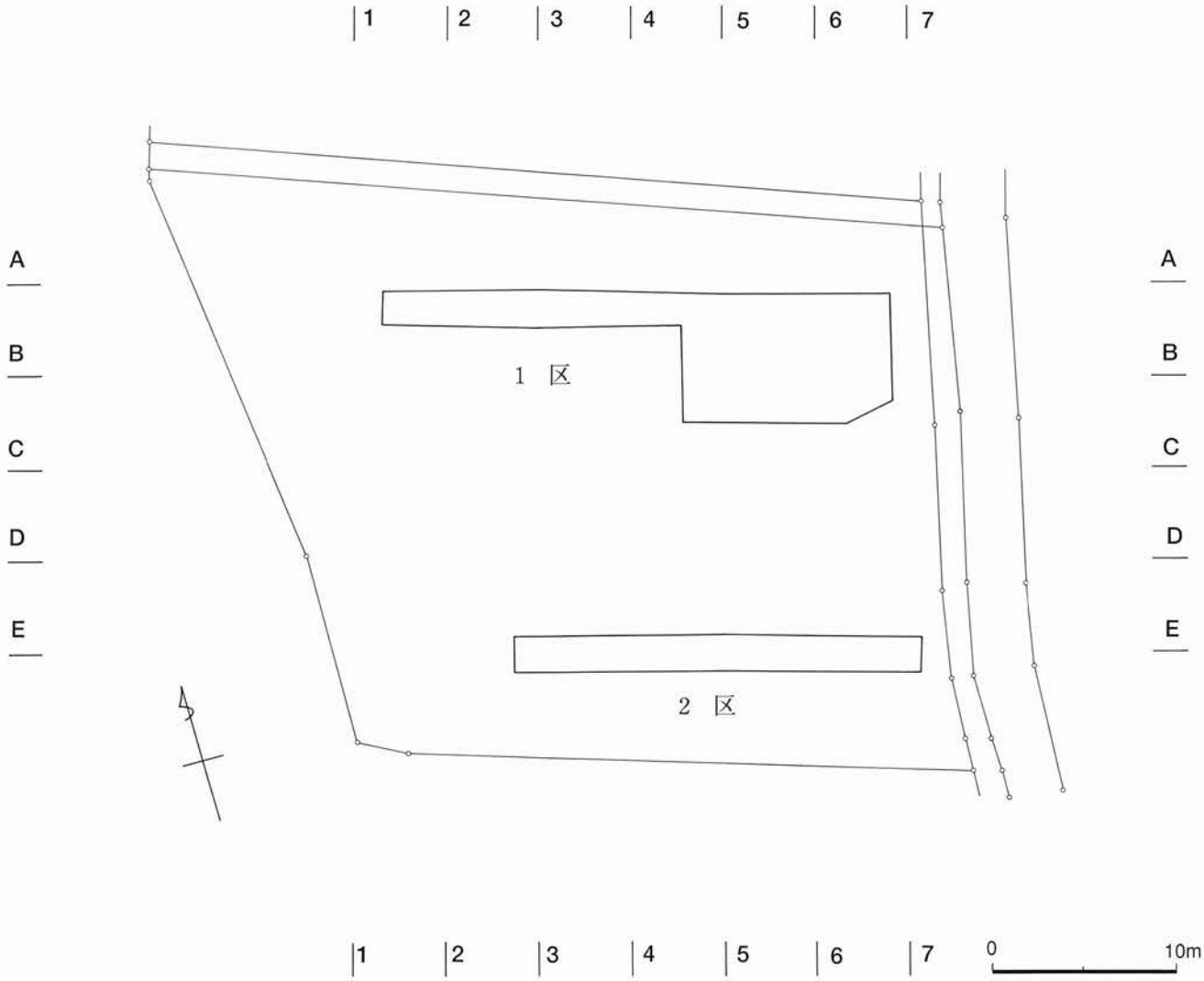


図３　方眼設定図

深度に規制が設けられた。その深度は現地表面が南から北に傾斜しているため場所によって異なるが、最大で約135cmほどである。ただしいくつかの遺構の底面では、結果的に規制深度よりも深くなったものもある。また1区の東西両端では土層確認のために深掘りをした。

調査にあたっては、初めに重機によって厚さ30cmほどの表土を排除した。層位の詳細については図34～36を参照されたい。

方眼設定は、次のようにおこなった。

まず調査区外西北の一点から東と南に5m間隔で軸線を派生させ、これにそれぞれ算用数字とアルファベットの名称を冠した。その際、測量の便宜をはかって軸線は調査区主軸方位にあわせた。各方眼区画の名称は北西角の軸線交点によって示される。

調査経過

国庫補助事業の調査は、1993年11月25日から同月30日までおこなわれた。その間の経過を調査日誌の引用によって示す。また、引き続いておこなわれた原因者負担分の調査についても、一連の作業として切り離すことはできないため、あわせて経過を報告しておく。

11月25日　重機による表土掘削と機材搬入
11月29日　測量方眼設定
12月1日　2区Ⅰ面全景写真撮影と平面実測、1区Ⅰ面西半部写真撮影
12月3日　1区に拡張区設定
12月10日　2区Ⅱ面平面実測、掘削
12月24日　1区遺構掘削
1月10日　1区東壁際・西端を深掘り
1月13日　1区東半部全景写真撮影
1月14日　1区東・南・北壁・2区南壁土層断面実測
1月17日　機材撤収

第三章　調査結果

調査区はほぼ全面に後世の削平を受けているとみられ、近・現代の整地層を除くと、直下に中世末もしくは近世とおぼしい面が存在する。これ以下、規制深度までほぼ３枚の生活面を確認した。１区と２区の間隔は13mほどあり、層位の同一性を確認するのは困難をともなうが、後述するような面のありかたの類似性、道状遺構などの連続性から判断した。以下、順次説明を加える。

１．Ⅰ面

現地表面は谷尻（南）からなだらかに、前面の滑川（北）に向かって傾斜しているが、それを剥がした遺構面は、実際にはそれほど傾いているわけではない。標高は１区で21.3m前後、２区で21.4m前後である。つまり、近・現代の整地層が南（２区）で厚く、北（１区）で薄いということになる。　この面での確認遺構は次のとおり。

１区……切石列１・土壙６・小穴約30

２区……溝１・土壙２・小穴約50

また両地区ともほぼ全面に、破砕されたシルト岩が厚く敷かれている。

ａ．１区

切石列

調査区東側の北壁に沿って粗くシルト岩が敷かれており、その南側に東西方向に一列、その途中から南へ派生するかたちでさらに一列確認された。全体としてＴ字形をなす。長さは東西列が8.25m、南北列が2.07m。石材のほとんどは凝灰質砂岩（いわゆる「かまくら石」）で、大きさは不揃いであるが、東西方向列は北面が揃えられており、こちらのほうが外に向いていたことが分かる。おそらく建物の基礎だと考えられるが、ほかに関連するような遺構がなく、詳細は不明である。

出土遺物が乏しく年代の推定に根拠を欠くが、層位的には最も上位にあり、また近くに近世伊万里焼が出土しているところから、江戸時代以降ではなかろうか。

土壙１

拡張区南西角に検出された。南半は調査区外に出ているが、現況で長径214cm、深さ77cmとかなり大きい。出土遺物に乏しく、性格・年代共に不明だが、おそらく中世後半だろう。

土壙２

拡張区南壁で確認された、長径84cm、深さ51cm以上の楕円形土壙。これも性格不明である。

その他の遺構

１区Ⅰ面にはこのほか、土壙４基、小穴約30口などがあるが、前者は性格不明で、後者も建物となるような連続性は認められないので、詳細は略す。

１区Ⅰ面出土遺物

土師器・同白色系・瓦質手焙り・土風炉・常滑こね鉢・瀬戸・肥前・青白磁・鉄釘などがある。年代的にやや混乱しているが、近世期のものや異例に古いものを除けば、常滑や瀬戸などは大体15世紀前半代の様相を持っている。

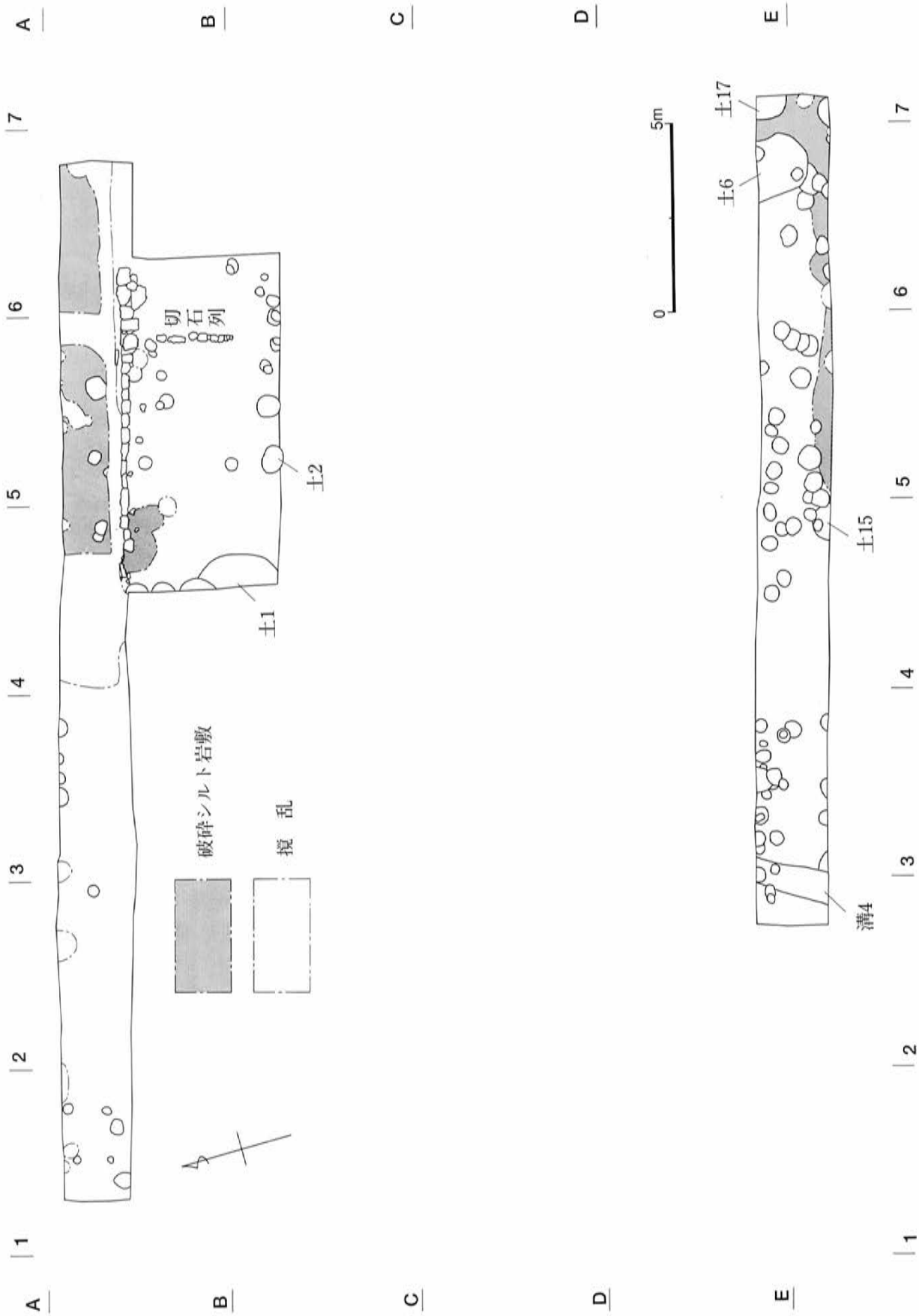
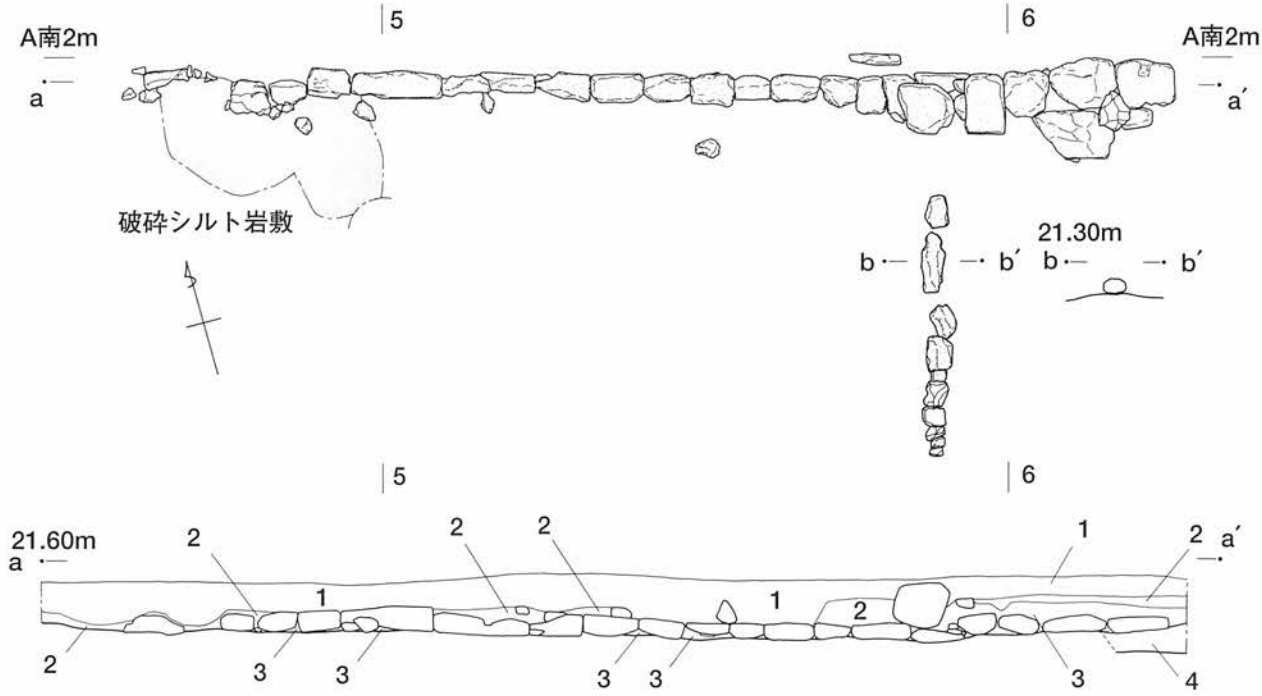


図4　Ⅰ面遺構配置図

小文字アルファベットは図34土層図基点。

図5　1区Ⅰ面平面図



1. 表土
2. 暗茶褐色土、土師器片を含む。(図34土層図注記10と同一)。
3. 茶褐色土、中、小シルト岩塊を多量に含む。(図34土層図注記14と同一)。
4. 暗茶褐色土（図34土層図注記27と同一)。

図6　切石列

b．2区

土壙15

中央部の南壁にかかって検出された円形土壙。深めの皿形の断面をもち、長径93cm以上、深さ33cmの規模がある。底面に茶色の粘質土が貼り付いたように堆積している。このような様相の土壙は、この付近の下層からもいくつか重複して検出されている。性格不明。

土壙16

東側のシルト岩の面を切り込む。北側は調査区外にある。断面は浅い皿状で、深さは26cmほどしかないが、幅は160cmを越える。性格不明。

土壙17

東端で検出された。これもシルト岩の面を切り込む。断面は皿状で、深さ43cm。中に常滑甕片が何点か入っていたが、甕を据えていたにしては大きすぎる。性格不明。

溝1

西端近くで検出された逆台形の断面を持つ溝。幅82cm前後、深さ32cm。西南～東北に向かって走行しており、どの検出遺構とも主軸が合わない。出土土師器の年代は15世紀代とみられる。

その他の遺構

小穴が多数検出されており、中には礎石らしい石の置かれたものもあるが、相互に関連して建物をなすようなものはみられない。

2区Ⅰ面出土遺物

土師器・砥石・瀬戸縁釉小皿・鉄製掛け金・銭などがある。15世紀代に属すると思われる。瀬戸や砥石など、基本的に搬入品である品々が多く含まれていることは注意を要する。

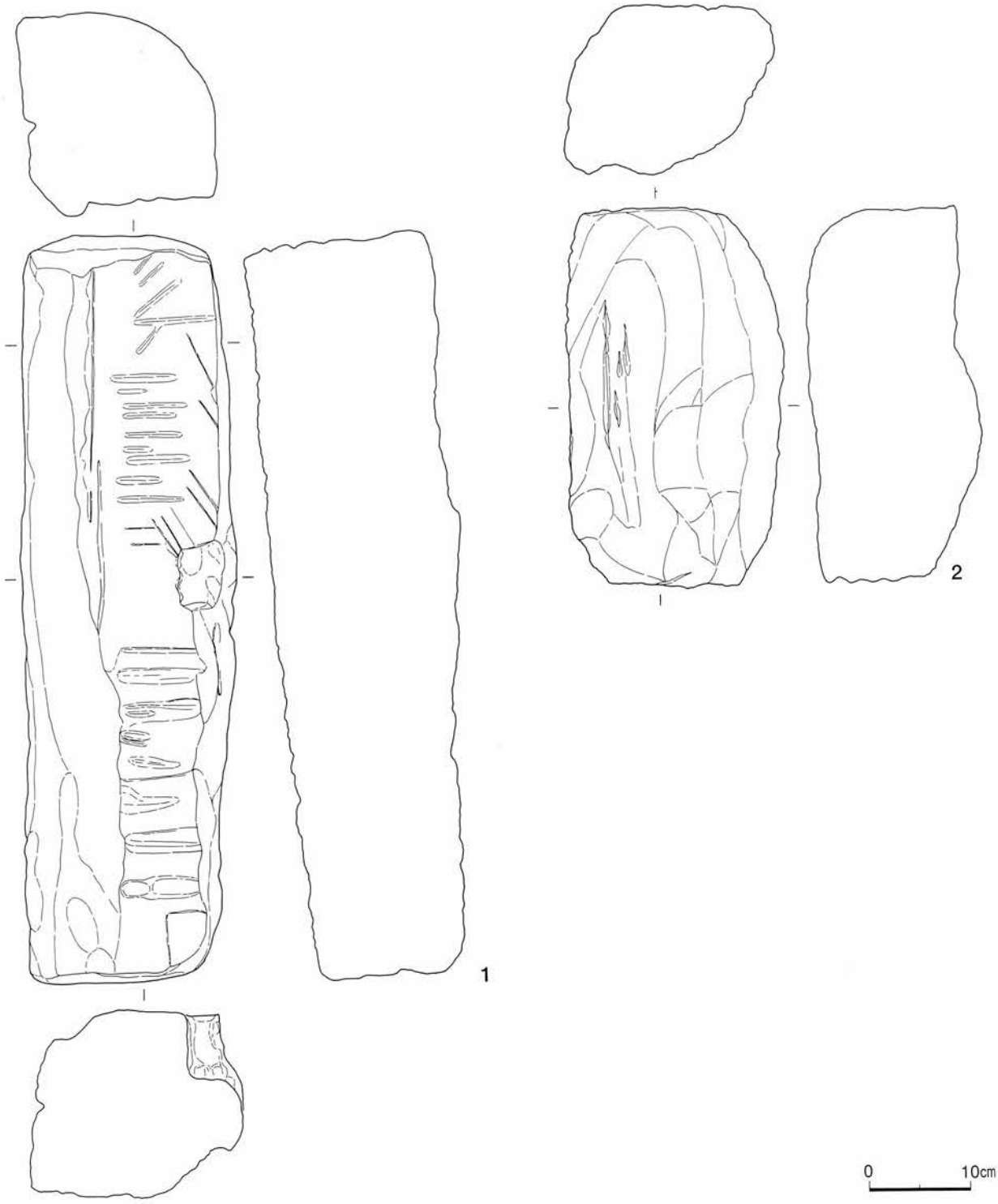
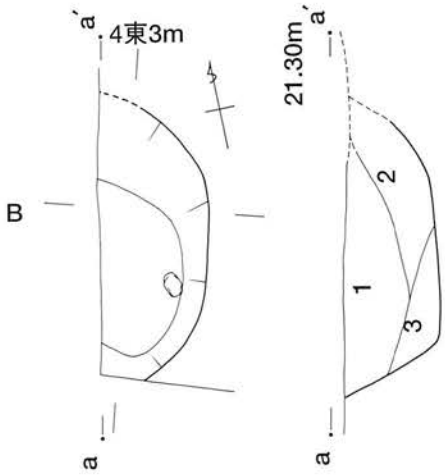


図7　切石

1	土台石	法量　長さ73.2cm　幅21.0cm　厚さ19.0cm	石材　凝灰質砂岩	備考　ノミ痕，ホゾ様の四角い穴有り
2	土台石	法量　長さ37.4cm　幅20.6cm　厚さ16.2cm	石材　凝灰質砂岩	備考　ノミ痕有り

表1　切り石観察表



1. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土、シルト岩粒を大量に含む。
3. 灰褐色砂質土、中シルト岩塊を含む。

位　　置　4－A・B
平面形状　楕円形？
断面形状　皿形？
長　　径　214cm以上
短　　径　84cm以上
深　　さ　77cm
主軸方位　不明

土 壙 1

位　　置　5－B
平面形状　楕円形
断面形状　U字形
長　　径　84cm
短　　径　61cm
深　　さ　51cm以上
主軸方位　N－63°－W

土 壙 2

0　2m

図8　土壙1・2

2．II面

I面を構成するシルト岩は調査区の全面にわたって敷かれており、20～30cmの厚みがある。これを除いて現れるのがII面である。面構成土は非常に細かいシルト岩粒子の入った地業層による。標高は1区が21.2～21.3m、2区が21～21.2mである。土壙が多いことが特徴として挙げられ、特に1区の拡張区西域には10基前後が群集する。また2区東域の壁際にもいくつかみられるが、この一帯のものは底面に赤褐～茶褐色の粘質土が堆積している。

この面の確認遺構は次のとおり。

1区……土壙14・溝1・小穴41・土師器溜まり1・埋納遺構1

2区……土壙7・小穴38・溝2・道状遺構1

a．1区

土壙3

拡張区の西端にかかって検出された。全容は不明だが、現況で南北141cm、深さ66cmの規模がある。断面は逆台形。出土遺物には土師器・瀬戸・銭などがあるが、そのうち瀬戸などは15世紀前半代のものと考えられる。

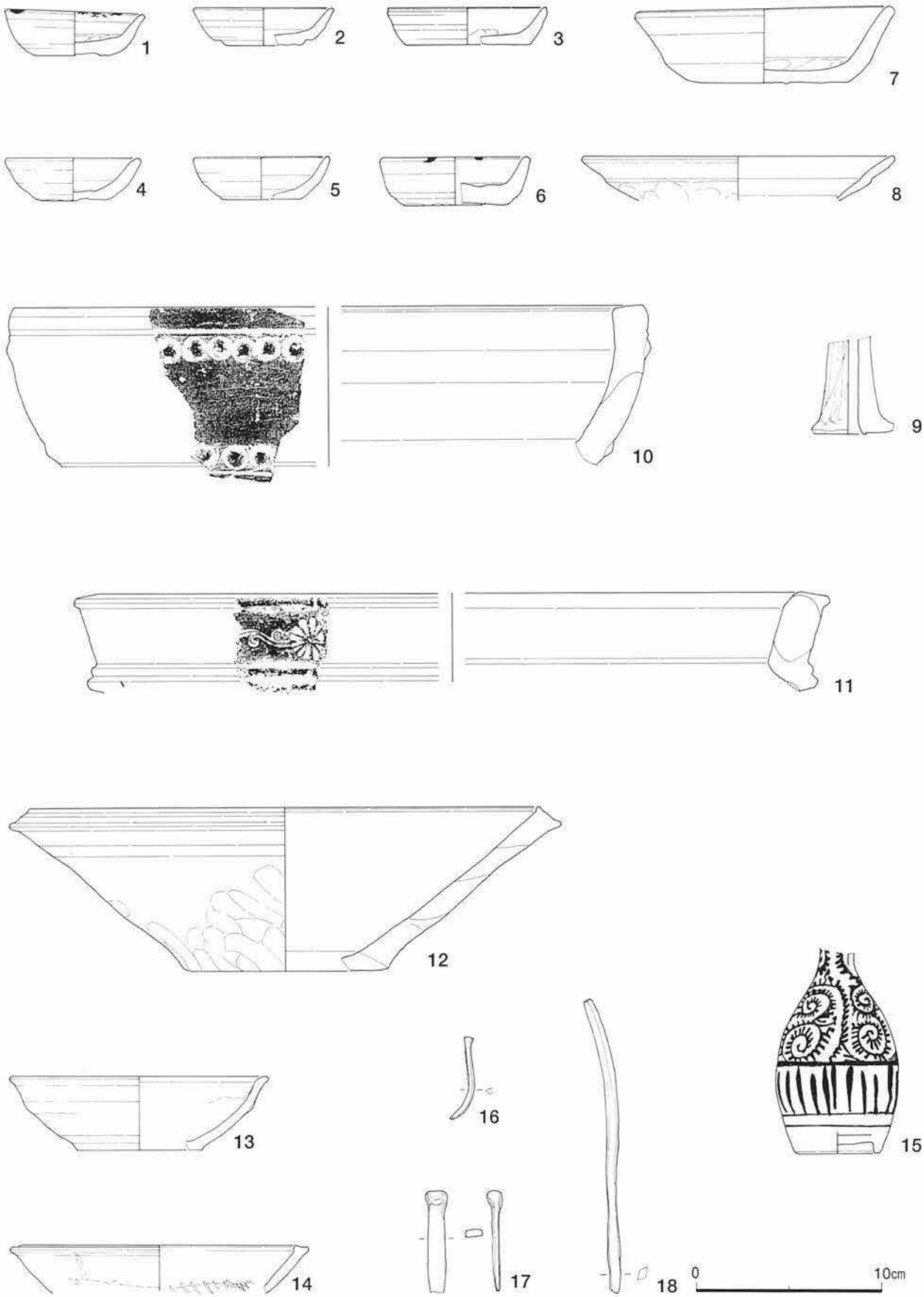


図9　1区Ⅰ面出土遺物

1	土師器 灯明皿	法量　口径7.6cm　底径4.0cm　器高2.4cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　　色調　橙色　スス付着　　焼成　良好
2	土師器	法量　口径7.6cm　底径4.1cm　器高2.0cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質含む　やや粗い　　色調　灰橙色　　焼成　良好
3	土師器	法量　口径8.6cm　底径6.7cm　器高2.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　淡灰橙色　　焼成　普通
4	土師器	法量　口径7.4cm　底径3.7cm　器高2.25cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
5	土師器	法量　口径7.35cm　底径4.1cm　器高2.3cm　　成形　ロクロ　外底部板状圧痕有り 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，小石含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
6	土師器	法量　口径8.15cm　底径5.5cm　器高2.6cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ無し 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　灰橙色　微量のスス付着　　焼成　良好
7	土師器	法量　口径14.0cm　底径7.8cm　器高4.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，小石含む　微気孔有り　　色調　淡橙色　　焼成　良好　　備考　完形
8	土師器 白色系	法量　口径16.9cm　器高（2.4cm）　　成形　手づくね　口縁部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　白褐色　　焼成　良好
9	燭　台	法量　器高（5.3cm）　　成形　軸に粘土を巻いて成形　外面ヘラ削り　　胎土　砂粒，雲母含む 色調　白褐色　　焼成　良好
10	瓦　質 火　鉢	法量　口径（33.9cm）　器高（8.6cm）　　成形　輪積　内面ナデ　口縁部，外面ヘラ磨き 文様　外面上位沈線の下に連珠文貼り付け　下位連珠文貼り付けの下に沈線　　胎土　白褐色　砂粒，小石，赤色小粒含む　気孔有り　　色調　白褐色～灰橙色　　焼成　やや不良
11	土風炉	法量　口径（40.8cm）　器高（5.3cm）　成形　輪積　口縁部，外面ヘラ磨き　　文様　外面頸部菊花唐草文押印 胎土　赤灰色　砂粒，小石含む　粗い　　色調　黒褐色　　焼成　良好　　備考　口縁部内側が摩耗している
12	常　滑 こね鉢	法量　口径29.8cm　底径11.0cm　器高8.8cm　　成形　輪積　口縁部ナデ　外面指頭痕有り 胎土　暗橙色　小石，砂粒，長石含む　　色調　暗橙色～茶色　　焼成　普通　二次焼成を受ける
13	瀬　戸 深　皿	法量　口径14.0cm　底径6.8cm　器高3.95cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　胎土　淡灰褐色　きめ細かい 釉薬　灰緑色透明　口縁部に付け掛け　　焼成　良好
14	瀬戸 おろし皿	法量　口径16.2cm　器高（2.6cm）　　成形　ロクロ　　胎土　灰褐色　粗い 釉薬　灰緑色半透明　口縁部につけ掛け　　焼成　良好
15	肥　前 徳　利	法量　頸部径1.8cm　胴部径6.6cm　底径4.7cm　器高（10.8cm）　　成形　ロクロ　高台削り出し 素地　象牙色　きめ細かい　　文様　蛸唐草文　呉須　筆描き　　釉薬　透明　畳付露胎　　焼成　普通
16	鉄製品　釘	法量　長さ4.5cm　幅0.3cm　厚さ0.25cm
17	鉄製品　船釘	法量　長さ（5.5cm）　幅0.9cm　厚さ0.4cm
18	鉄製品　不明	法量　長さ16.0cm　幅0.5cm　厚さ0.4cm

表２　１区Ⅰ面出土遺物観察表

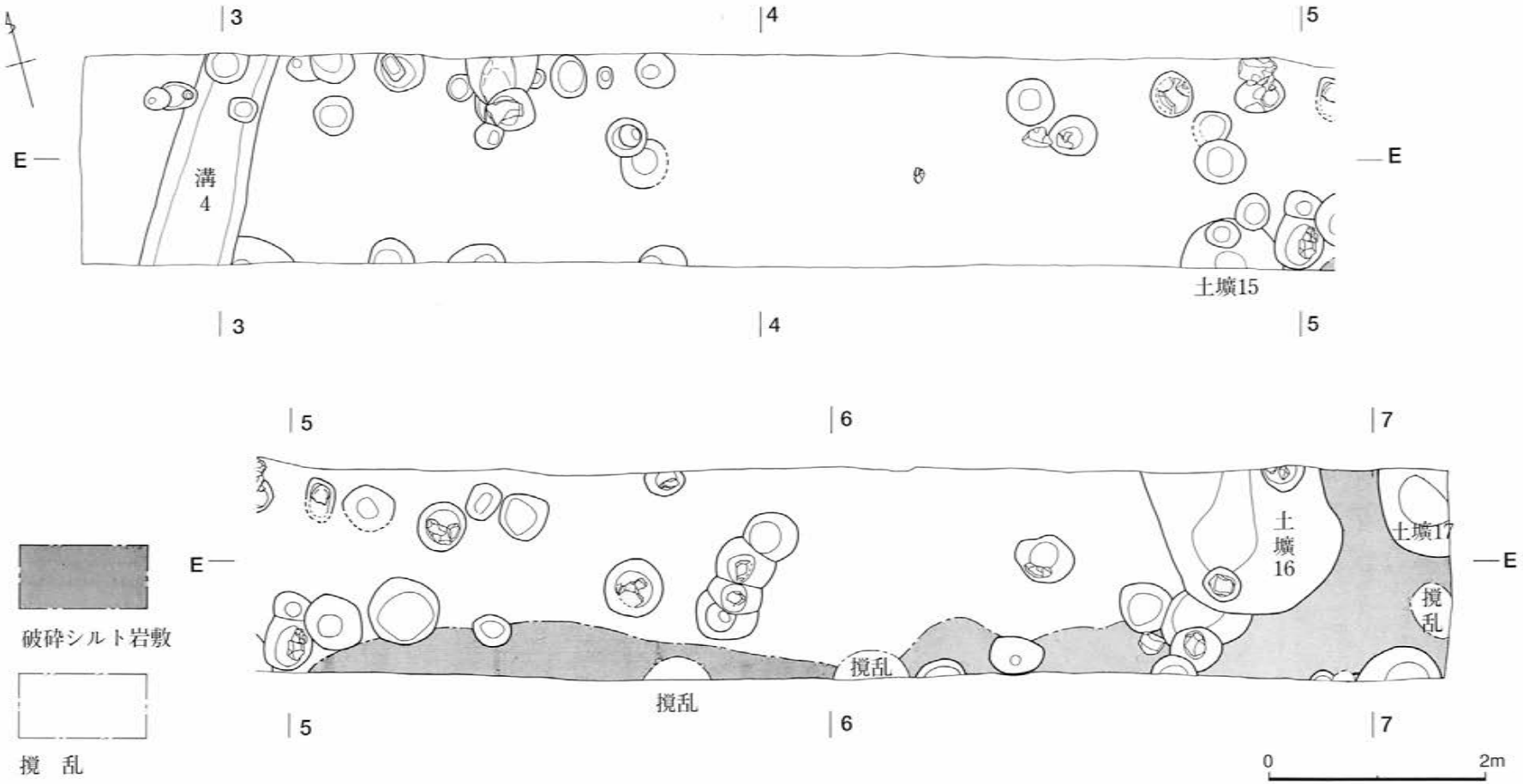


図10　2区Ⅰ面平面図

土壙4・5・6

拡張区の土壙群中に、南北に細長い土壙が3基並んでいる。西から4・5・6の番号を付したが、いずれも同規模で、堆積土も似ているため、まとめて扱う。

4は長さ265cm、幅106cm、深さ45cm、5は長さ不明だが、幅93cm、深さ37cm、6は長さ274cm、幅131cm、深さ42cmである。断面はいずれも逆台形で、5と6に切合い関係があるようにみえるが、堆積土は細かいシルト岩を大量に含む点で共通するので、三つが同時に存在していた可能性がある。出土遺物には4に土師器、5・6に土師器・陶磁器・瓦質製品などがある。このうち4出土遺物はおおむね15世紀として大過なかろう。5・6は当初一つの遺構として認定したため、遺物を一緒に取り上げてしまった。年代的には13世紀後半から15世紀まで含まれるが、主体は、瀬戸や瓦質の燭台などからみて、15世紀前半代ではなかろうか。

土壙7

拡張区の土壙群の中にある円形土壙。長径125cm、短径117cm、深さ57cm、断面は碗形。黄灰色のシルト岩粒子を大量に含む土が堆積している。

土壙8

土壙群の北東部にある円形土壙。長径113cm、短径103cm、深さ51cm、断面は碗形で、規模、形状とも7によく似ている。

土壙9

8の南60〜70cmにある楕円形土壙。長径117cm以上、短径91cm、深さ37cm、断面は逆台形を呈する。出土遺物には土師器があるが、おおむねこれも15世紀前半のものであろう。

土壙10・11・12

拡張区の西南域に3基がかたまって存在する。10・11はほぼ円形だが、12の全容は不明。前2基を12が切る。10は長径153cm以上あり、11もほぼ同規模とみられるが、12は規模不明。10・11はすり鉢状の断面だが、12は箱形を示す。これらの堆積土も細かいシルト岩の大量に混じった土である。

土壙13

土壙6の南にあり、後述の土壙14と切合うが本址が古い。おそらく直径90cmほどになる円形土壙で、断面はすり鉢状を呈する。深さ56cm。

土壙14

10・11と13の間にある楕円、もしくは隅丸長方形土壙。213cm×170cmで深さ42cm、断面は逆台形を示す。底部には他の土壙同様、細かいシルト岩層が認められる。出土遺物には、土師器・瀬戸三足鉢他があり、やはり、15世紀前半ごろであると思われる。

溝7

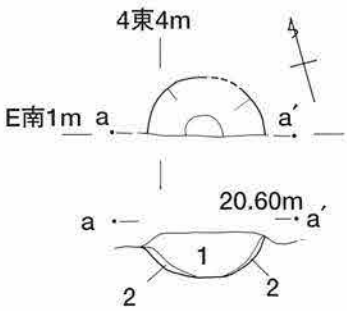
西端を深掘りした際に土層断面で確認した、南北に走る溝（図26・34）。幅など不明。

土師器溜り

拡張区中央部南壁際に、4・5点かそれ以上の土師器皿がまとまって出土した。年代は共伴遺物がないので確定しづらいが、大きくみて15世紀代であろう。

埋納遺構

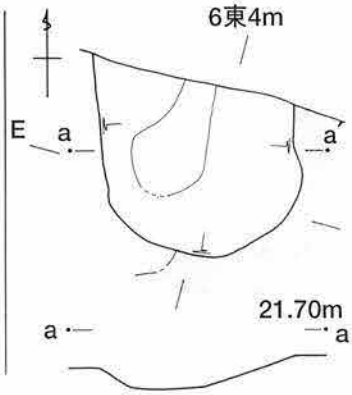
東壁近くで検出された。土師器7枚と刀子、砥石が土壙中に納められていた。刃物を使う、例えば料理人のような職能民のまじない儀礼だろうか。年代は、土師器が薄手で前代の様相を引きずっているかに見えることから、15世紀前半の可能性がある。



位　　置　4−E
平面形状　円形？
断面形状　皿形
長　　径　93cm以上
短　　径　46cm以上
深　　さ　33cm
主軸方位　不明

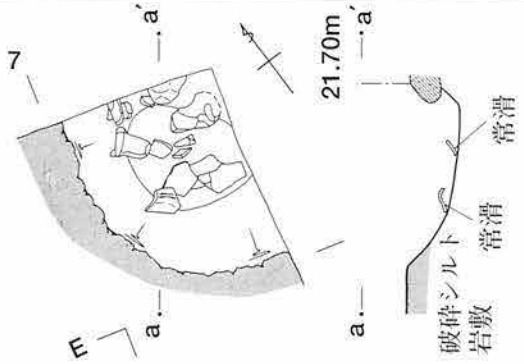
1. 黄茶褐色粘質土、小シルト岩塊、粒を多量に含む。
2. 茶色粘質土

土 壙 15



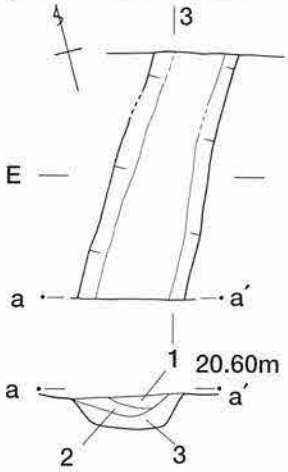
位　　置　6−D・E
平面形状　不整楕円形？
断面形状　皿形？
長　　径　158cm以上
短　　径　152cm以上
深　　さ　26cm
主軸方位　不明

土 壙 16



位　　置　7−D
平面形状　楕円形？
断面形状　皿形？
長　　径　157cm以上
短　　径　127cm以上
深　　さ　43cm
主軸方位　不明

土 壙 17



位　　置　2・3−D・E
概　　要　南西から北東方面に走る。断面逆台形
幅　　82cm
深　　さ　32cm
主軸方位　N−30°−E

1. 明褐色粘質土
2. 暗褐色粘質土
3. 明褐色粘質土、小シルト岩塊、粒を多量に含む。

溝 4

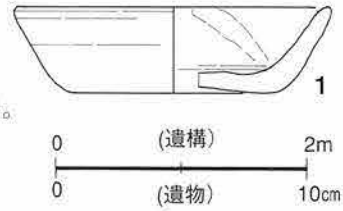


図11　2区Ⅰ面土壙15・16・17　溝1、同出土遺物

1	土師器	法量　口径12.7cm　底径8.2cm　器高3.4cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好

表3　溝1　出土遺物観察表

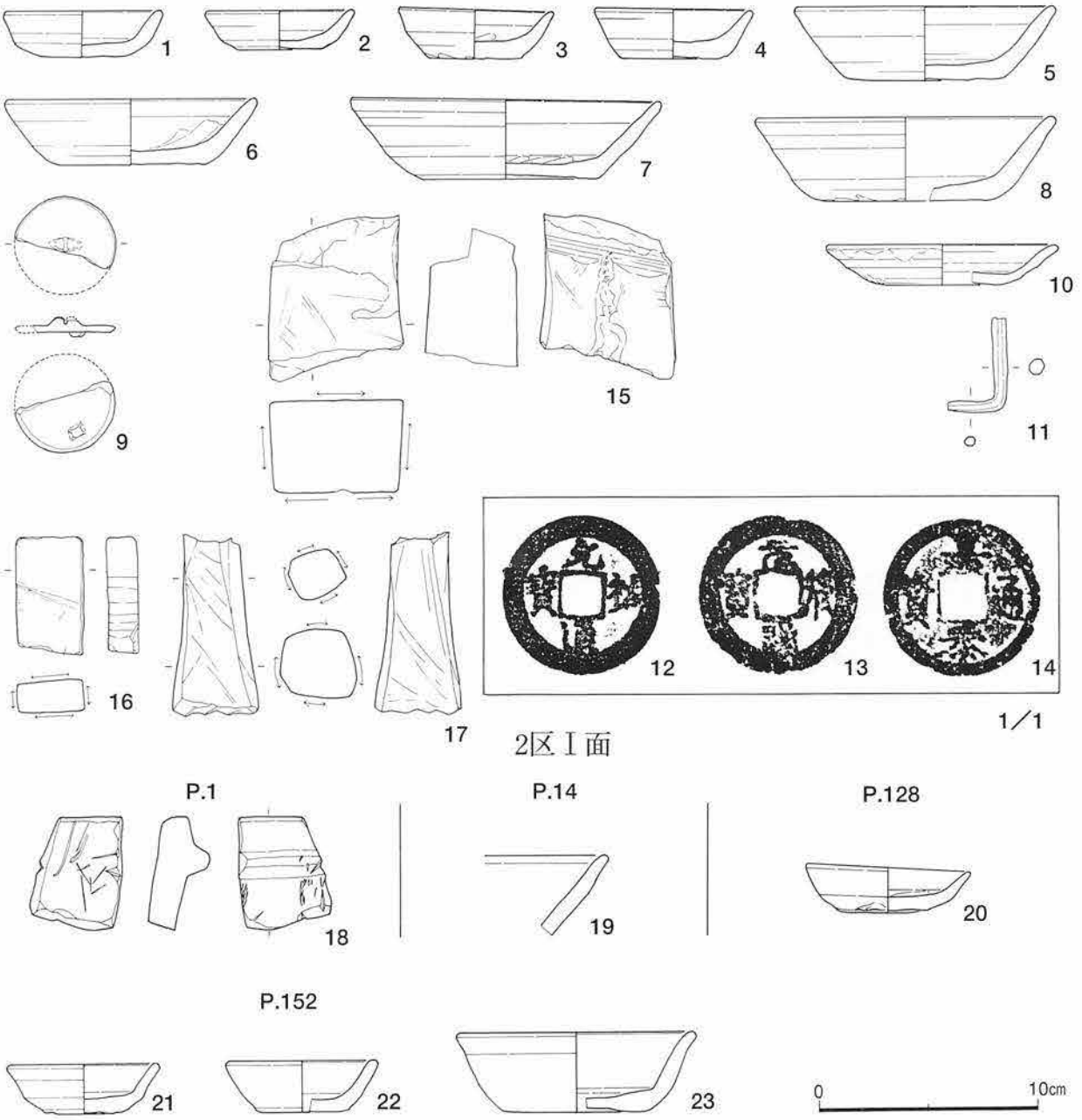


図12　2区Ⅰ面・小穴出土遺物

1	土師器	法量　口径7.3cm　底径3.8cm　器高2.1cm　　成形　ロクロ　外底部板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
2	土師器	法量　口径6.8cm　底径3.8cm　器高1.8cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
3	土師器	法量　口径7.1cm　底径4.3cm　器高2.3cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，赤色小粒，シルト岩粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
4	土師器	法量　口径7.25cm　底径4.5cm　器高2.3cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　淡橙色　　焼成　良好
5	土師器	法量　口径11.9cm　底径7.0cm　器高3.3cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，赤色小粒，雲母，シルト岩粒含む　やや粗い　　色調　橙色　　焼成　良好
6	土師器	法量　口径11.5cm　底径6.6cm　器高3.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，シルト岩粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
7	土師器	法量　口径14.2cm　底径8.0cm　器高3.7cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好　　備考　完形
8	土師器	法量　口径13.75cm　底径7.5cm　器高3.8cm　　成形　ロクロ　内底部ナデ 胎土，砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　淡橙色　　焼成　良好
9	瓦質製品 蓋？	法量　径4.6cm　厚さ0.3cm　　成形　粘土板を削って成形　つまみ，裏面突起部貼り付け　つまみ穿孔有り 胎土　灰色　砂粒含む　きめ細かい　　色調　灰黒色　　焼成　良好
10	瀬　戸 皿	法量　口径10.6cm　底径5.0cm　器高1.85cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り痕 胎土　黄灰色　小石含む　気孔有り　　釉薬　灰緑色不透明　縁部潰け掛け　　焼成　良好
11	鉄製品掛金具	法量　長さ（6.5cm）　径0.65cm
12	銭	元祐通宝　　北宋　初鋳1086　行書
13	銭	元符通宝　　北宋　初鋳1098　篆書
14	銭	嘉泰通宝　　南宋　初鋳1201　楷書
15	砥　石	法量　長さ（7.5cm）　幅6.1cm　厚さ4.2cm　　産地　天草　　色調　黄茶色 備考　中砥　4面が砥面　焼けている
16	砥　石	法量　長さ（5.4cm）　幅3.0cm　厚さ1.4cm　　産地　不明　　色調　灰色　　備考　中砥　4面が砥面
17	砥　石	法量　長さ（8.2cm）　幅2.35～3.4cm　厚さ2.1cm～3.1cm　　色調　灰褐色　　産地　上野 備考　中砥　4面が砥面
18	転用滑石	法量　長さ5.1cm　最大幅4.0cm　厚さ1.4cm　　色調　灰色　外面黒褐色　　備考　鍋の破片　再加工の途中
19	瀬　戸 碗	法量　器高（3.6cm）　　成形　ロクロ　　胎土　淡灰褐色　　釉薬　灰緑色半透明　内外面施釉 焼成　良好　二次焼成を受ける
20	土師器	法量　口径7.5cm　底径3.9cm　器高2.1cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　やや粗い　　色調　灰橙色　　焼成　良好
21	土師器	法量　口径7.0cm　底径3.6cm　器高2.3cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　やや粗い　　色調　橙色　　焼成　良好
22	土師器	法量　口径7.0cm　底径4.2cm　器高2.3cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
23	土師器	法量　口径11.0cm　底径6.7cm　器高3.65cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好

表4　2区Ⅰ面出土遺物観察表

小穴その他

柱穴らしい穴や礎石の入った落込みなど40口余りが検出された。拡張区南壁に沿うかたちでいくつか規則性もうかがえるかにみえるが、深さに統一性がなく、一連のものとはしなかった。

1区Ⅱ面出土遺物

土師器・瀬戸・瓦質製品・砥石・銭などがあるが、15世紀前半～中葉にかけてのものであろう。

b．2区

土壙18

調査区中央寄りにある。103㎝×70㎝、深さ24．5㎝の楕円形土壙。断面は逆台形で、堆積土中にいくつかの15世紀前半代の土師器片を含む。

土壙19

調査区東寄りに北壁にかかって検出された。長さは現況で184㎝ほどあり、浅い逆台形の断面を呈する。堆積土中には大量の半人頭大シルト岩塊とともに、土師器皿9枚が重なって廃棄もしくは埋置されていた。土師器皿の年代は15世紀前半ごろと思われる。

土壙20・21・22

東寄りの南壁に3基が連なって存在する。大きさは20が127㎝以上である以外不明だが、いずれも逆台形の断面を持つ。注目されるのは、どれも底面に粘性の強い赤褐色土が貼られたように堆積していることである。被熱痕跡や鉱滓がないので鋳造などに関わるものではなく、むしろ水分を遮断したり、滲出を防ぐためのものかも知れない。15世紀前半ごろの瀬戸が出土している。

土壙23・24

土壙22などの東側に連なり、これらも先の3基と同様の様相を持つ。23は170㎝以上、24は183㎝以上あり、ともに逆台形の断面を示す。これらも底面に赤～茶褐色粘質土が貼り付いている。

溝2・3・道状遺構1

溝2・3は約3.5 mの間隔を置いて平行し、その間は道のように残るので、全体を道とその側溝と解釈した。溝幅はそれぞれ64㎝と75㎝である。南北方向に走るが、1区に延長は出ていないので、途中で曲折するか、あるいは道ではない可能性もある。

2区Ⅱ面出土遺物

土師器・瓦質製品・瀬戸・常滑・銭などがある。年代は大体15世紀ごろであろう。

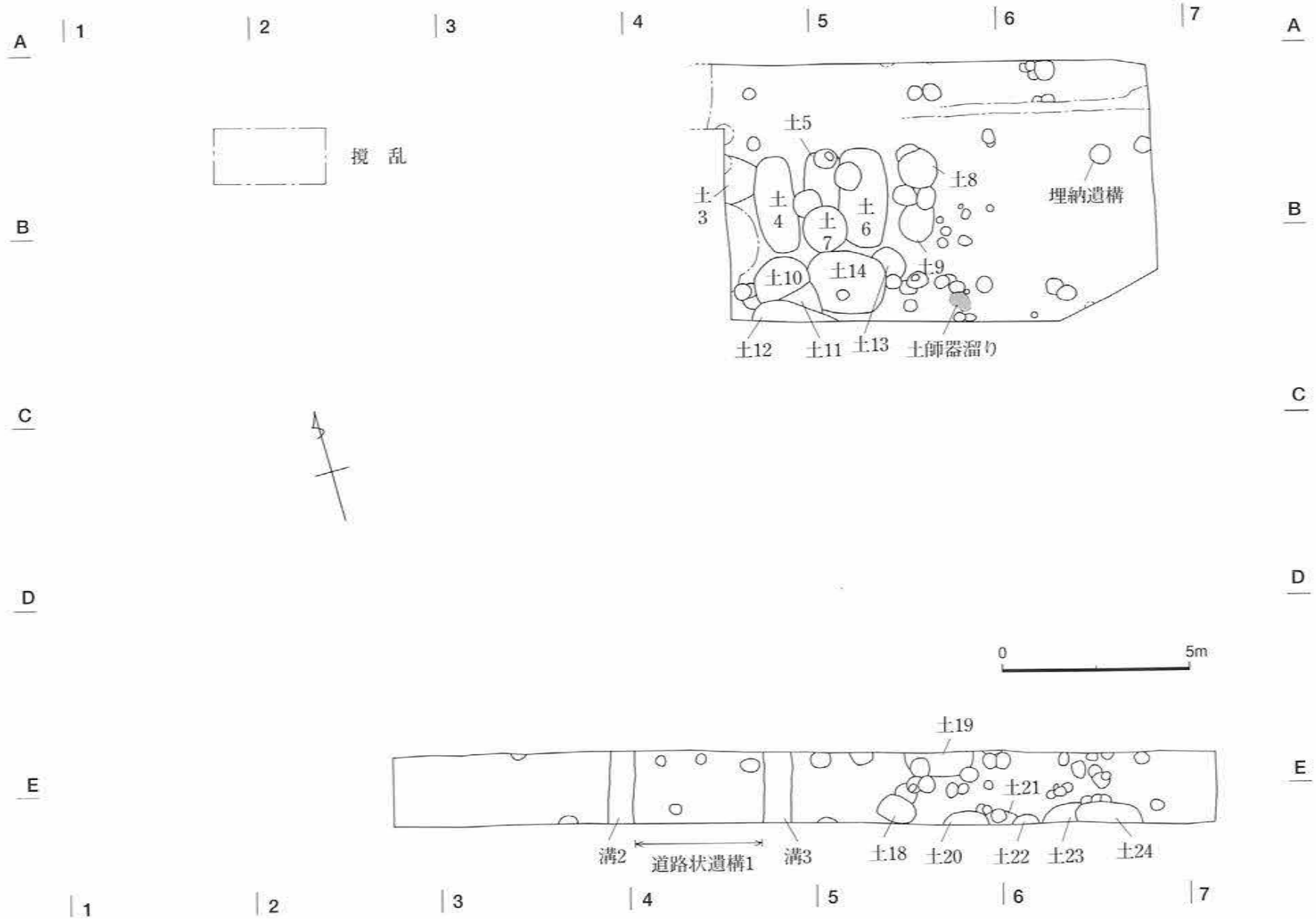


図13 II面遺構配置図

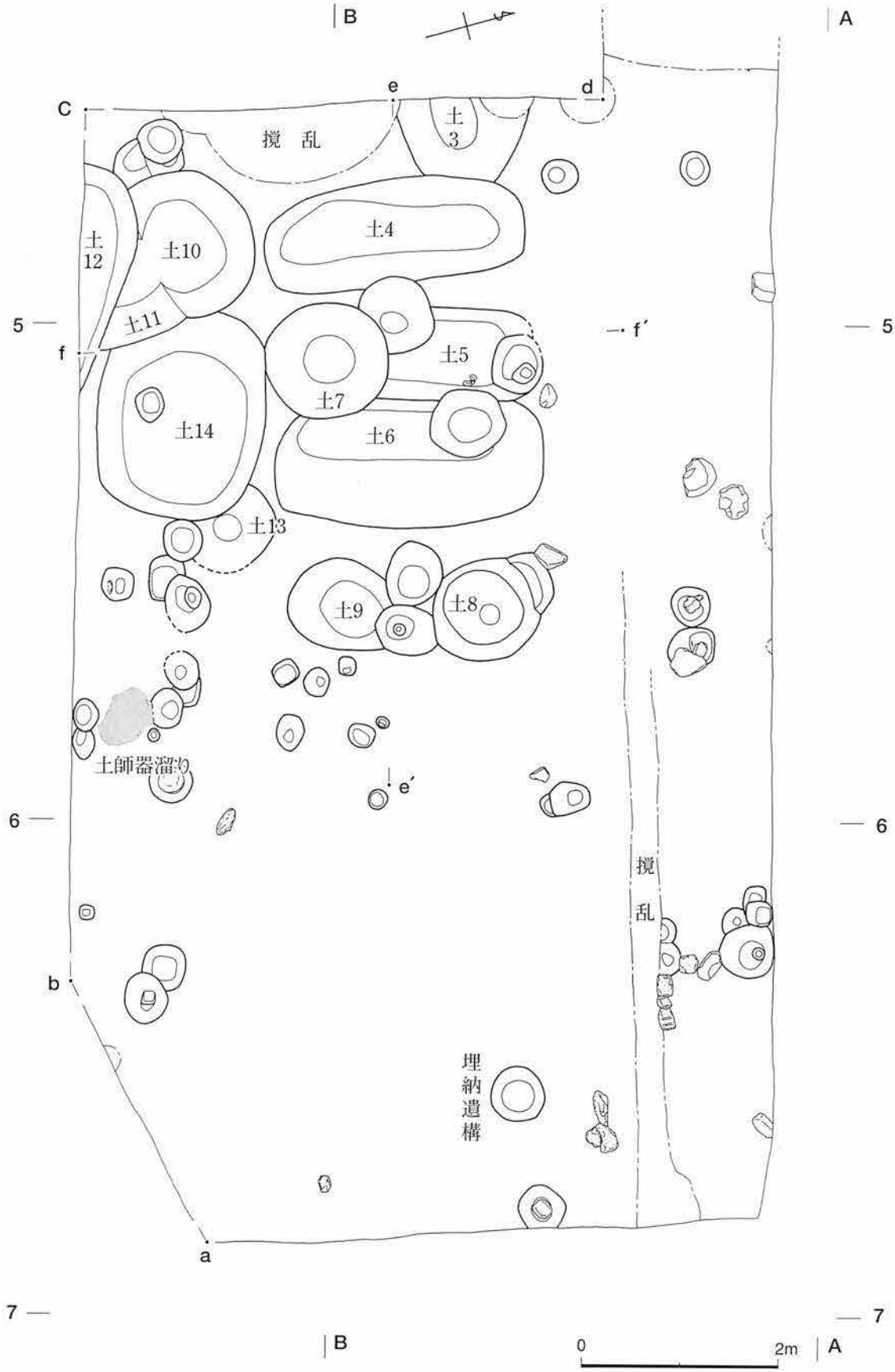
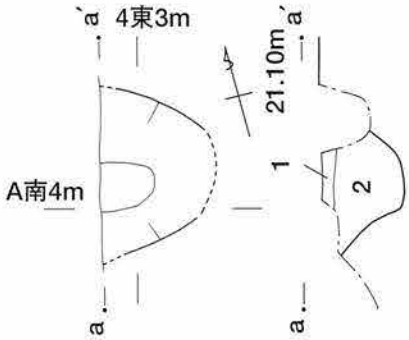
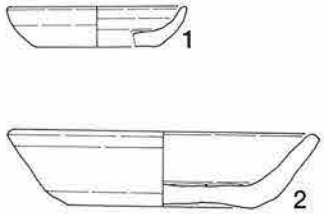

B
A
C
e
d
撹 乱
土3
土4
土10
土12
土11
5
f
f′
5
土5
土7
土14
土6
土13
土9
土8
土師器溜り
e′
6
6
撹
乱
b
埋納遺構
a
7
7
B
0
2m
A

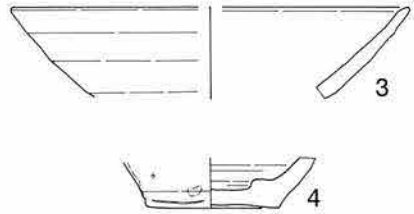
図14　1区Ⅱ面平面図

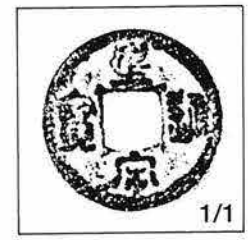


1. シルト岩地業層
2. 灰褐色弱粘質土

位　　置　4−A
平面形状　楕円形？
断面形状　不整逆台形
長　　径　141㎝以上
短　　径　82㎝以上
深　　さ　66㎝
主軸方位　不明

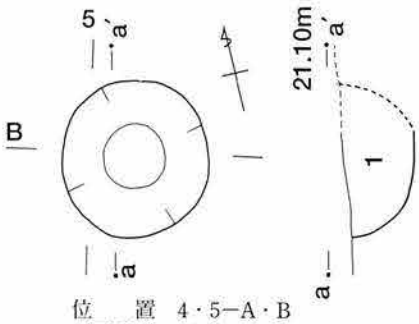






5

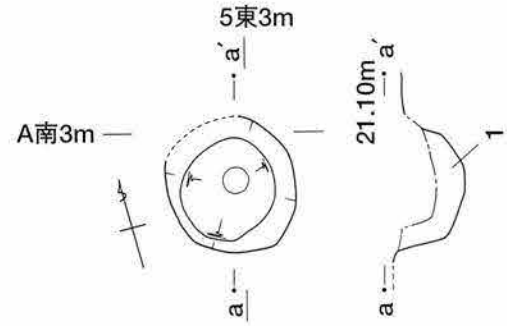
土 壙 3



位　　置　4・5−A・B
平面形状　円形
断面形状　椀型
長　　径　125㎝
短　　径　117㎝
深　　さ　57㎝
主軸方位　N−0°

土 壙 7

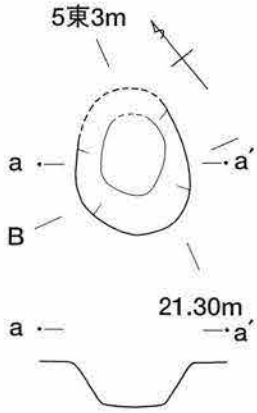
1. 黄灰色弱粘質土、中小シルト岩粒を多量に含む。



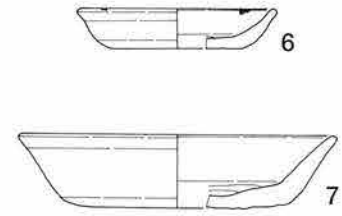
1. 暗茶褐色弱粘質土

位　　置　5−A
平面形状　不整円形
断面形状　U字型
長　　径　113㎝
短　　径　103㎝
深　　さ　51㎝
主軸方位　不明

土 壙 8

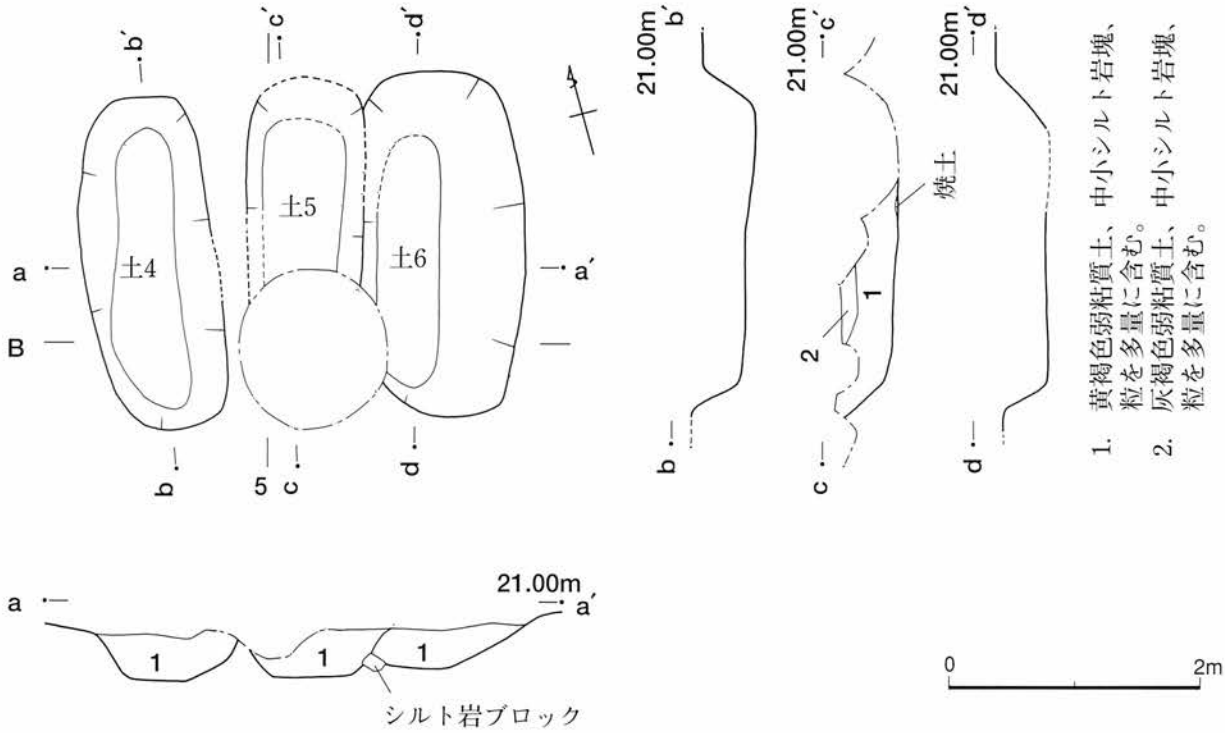


位　　置　5−A・B
平面形状　不整楕円形
断面形状　逆台形
長　　径　117㎝以上
短　　径　91㎝
深　　さ　37㎝
主軸方位　N−35.5°−E



土 壙 9

図15　土壙3・7・8・9、同出土遺物



土壙4
- 位　　置　4−A・B
- 平面形状　長楕円形
- 断面形状　台形
- 長　　径　265cm以上
- 短　　径　106cm以上
- 深　　さ　45cm
- 主軸方位　N−10°−E

土壙5
- 位　　置　4・5−A・B
- 平面形状　長楕円形
- 断面形状　逆台形
- 長　　径　153cm以上
- 短　　径　93cm
- 深　　さ　37cm
- 主軸方位　N−16.5°−E

土壙6
- 位　　置　5−A・B
- 平面形状　長楕円形
- 断面形状　逆台形
- 長　　径　274cm
- 短　　径　131cm以上
- 深　　さ　42cm
- 主軸方位　N−16.5°−E

図16　土壙4・5・6

1	土師器	法量　口径7.2cm　底径4.8cm　器高1.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
2	土師器	法量　口径12.4cm　底径7.4cm　器高3.0cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好
3	瀬戸 平碗	法量　口径（15.9cm）　器高（3.7cm）　成形　ロクロ　胎土　灰色　砂粒含む　ややきめ細かい 釉薬　灰緑色半透明　内外面施釉　二次焼成で失透　焼成　良好　二次焼成を受ける
4	瀬戸 壷	法量　底径5.3cm　器高（2.1cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　淡橙色　砂粒含む　気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　外面に付け掛け　下位，外底部露胎　内面に釉垂れ　焼成　良好
5	銭	皇宋通宝　北宋　初鋳1039　篆書
6	土師器 灯明皿転用か	法量　口径8.0cm　底径5.2cm　器高1.65cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，小石，赤色小粒含む　ややきめ細かい　色調　灰橙色　焼成　良好
7	土師器	法量　口径12.7cm　底径8.5cm　器高3.0cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，小石，針状物質，赤色小粒含む　色調　淡橙色　焼成　良好

表5　土壙3・9出土遺物観察表

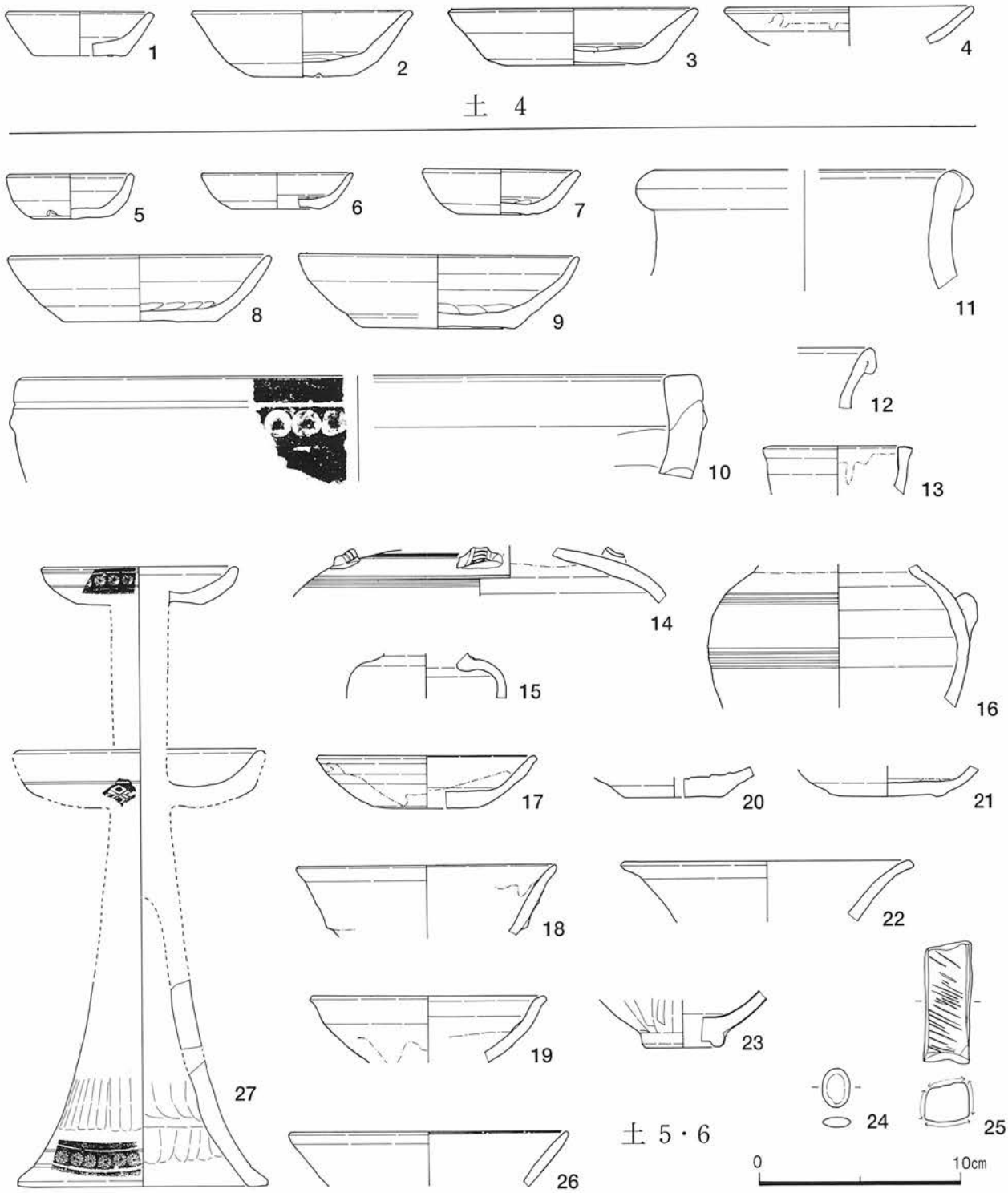


図17　土壙４・５・６出土遺物

土壙4	1	土師器	法量　口径7.4cm　底径4.5cm　器高2.2cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り 胎土　砂粒，針状物質含む　色調　灰橙色　スス付着　焼成　良好
	2	土師器	法量　口径11.0cm　底径5.0cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好
	3	土師器	法量　口径12.4cm　底径7.6cm　器高2.8cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好
	4	瀬戸 皿	法量　口径12.4cm　器高（1.9cm）　成形　ロクロ　胎土　灰褐色　ややきめ細かい 釉薬　灰緑色不透明　白濁する　内面ハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　焼成　良好
土壙5	5	土師器	法量　口径6.3cm　底径3.9cm　器高2.25cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質含む　色調　淡橙色　焼成　良好
	6	土師器	法量　口径7.6cm　底径4.4cm　器高1.8cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　灰橙色　焼成　良好　二次焼成を受ける
	7	土師器	法量　口径7.9cm　底径4.0cm　器高2.25cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好
	8	土師器	法量　口径13.1m　底径7.6cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，雲母，針状物質，赤色小粒含む　色調　淡橙色　焼成　良好
	9	土師器	法量　口径14.0cm　底径7.6cm　器高3.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，雲母，針状物質，赤色小粒含む　きめ細かい　色調　淡橙色　焼成　良好
	10	瓦質 火鉢	法量　口径（34.0cm）　器高（5.2cm）　成形　内面ナデ　口縁部，外面ヘラ磨き　文様　外面上位沈線と連珠文貼り付け　胎土　灰白色　砂粒，小石含む　色調　灰色　焼成　良好　二次焼成を受ける
	11	備前 壷	法量　口径（14.8cm）　器高（5.9cm）　成形　輪積　口縁部ナデ　胎土　灰褐色　小石，長石，黒色小粒含む　微気孔有り　ややきめ細かい　色調　灰色　口縁と肩部に降灰　焼成　普通　二次焼成を受ける
	12	瀬戸 四耳壷	法量　器高（3.0cm）　成形　ロクロ　胎土　茶灰色　砂粒含む　気孔有り 釉薬　灰緑色半透明　ハケ塗り　焼成　良好　軽い二次焼成を受ける
	13	瀬戸 不明	法量　口径7.4cm　器高（2.4cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　砂粒含む　微気孔有り 釉薬　灰緑色透明　口縁部，外面に付け掛け　焼成　良好　軽い二次焼成を受ける
	14	瀬戸 四耳壷	法量　器高（3.0cm）　成形　ロクロ　耳部貼り付け　外面に4重の条線が2段　耳部にも条線有り 胎土　淡灰褐色　砂粒，小石含む　気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　外面に施釉　内面に釉垂れ 焼成　良好　二次焼成を受ける
	15	瀬戸 華瓶	法量　胴部径7.9cm　器高（2.1cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　砂粒含む　微気孔有り　ややきめ細かい　釉薬　灰緑色透明　外面に施釉　焼成　良好　軽い二次焼成を受ける
	16	瀬戸 四耳壷	法量　胴部径13.0cm　器高（7.0cm）　成形　ロクロ　耳部貼り付け　外面に4重の条線が2段 胎土　淡灰褐色　砂粒，小石含む　微気孔有り　ややきめ細かい　釉薬　灰緑褐色透明　外面に施釉　二次焼成で失透　焼成　良好　二次焼成を受ける
	17	瀬戸 皿	法量　口径11.0cm　底径5.0cm　器高2.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　淡灰褐色　小石，砂粒含む　微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　口縁から中位にかけ付け掛け 焼成　良好　二次焼成を受ける　備考　スス付着
	18	瀬戸 皿	法量　口径13.0cm　器高（3.5cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　砂粒含む　微気孔有り 釉薬　灰緑色不透明　内面ハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　二次焼成で失透 焼成　良好　二次焼成を受ける
	19	瀬戸 皿	法量　口径11.8cm　器高（3.3cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　砂粒含む　微気孔有り　きめ細かい 釉薬　灰緑色透明　口縁から中位にかけ付け掛け　焼成　良好
	20	瀬戸 おろし皿	法量　底径4.9cm　器高（1.5cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰褐色　砂粒含む　気孔有り　きめ細かい　焼成　良好　二次焼成を受ける　備考　内外面露胎　釉垂れ有り
	21	瀬戸 皿	法量　底径5.5cm　器高（1.6cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部に目跡有り 胎土　灰褐色　砂粒含む　気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　内面にハケ塗り　焼成　良好
	22	瀬戸 華瓶	法量　口径14.6cm　器高（3.0cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　砂粒含む　微気孔有り 釉薬　灰緑色不透明　内外面施釉　二次焼成で失透　焼成　良好　二次焼成を受ける
	23	青磁 龍泉窯　碗	法量　底径4.1cm　器高（3.0cm）　成形　ロクロ　高台削り出し　文様　外面複蓮弁 素地　灰色　砂粒含む　気孔有り　釉薬　灰青色半透明　高台内露胎　焼成　良好

表6　土壙4・5・6出土遺物観察表（1）

24	碁石	法量　長径1.95cm　短径1.35cm　厚さ0.5cm
25	砥石	法量　長さ6.1cm　最大幅2.35cm　厚さ1.8cm　　産地　不明　　備考　中砥　4面が砥面　上面の使用痕が著しい　軽い二次焼成を受ける
26	素焼き 軟質陶器	法量　口径13.95cm　器高（2.8cm）　　成形　ロクロ　　胎土　砂粒，長石含む　　色調　淡灰橙色 焼成　良好
27	燭台	法量　上段受け皿口径9.8cm　中段受け皿口径（12.6cm）　底径12.5cm　器高不明　　成形　ロクロ引き（？）　後外全面ヘラ磨き　中段の内面はナデ痕を残す　軸部縦方向ヘラ磨き　軸部内面横ナデ　内面下端部ヘラ磨き 文様　上段受け皿外面と軸部外面下位は沈線2本の間に連続菊花文押印　中段受け皿外面は沈線と四つ菱文押印 胎土　砂粒，小石，赤色小粒含む　微気孔有り　　色調　灰橙色　　焼成　良好

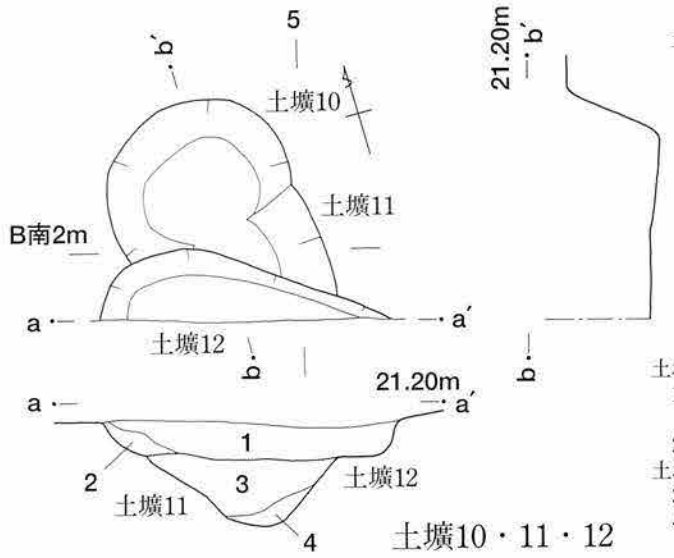
表7　土壙5　出土遺物観察表（2）

1	土師器	法量　口径7.0cm　底径4.0cm　器高1.65cm　　成形　ロクロ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
2	土師器	法量　口径11.5cm　底径5.2cm　器高2.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，シルト岩粒，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
3	土師器	法量　口径12.0cm　底径7.5cm　器高2.8cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
4	備前 こね鉢	法量　器高（4.5cm）　　成形　輪積　口縁部ナデ　　胎土　暗橙色　砂粒，小石，長石含む 色調　暗橙色　口縁部暗茶色　　焼成　良好
5	転用常滑	法量　長さ5.1cm　最大幅4.0cm　厚さ1.0cm　　胎土　灰黒色　砂粒，小石，長石含む 色調　暗茶褐色　片面（内面）に降灰　　焼成　良好　　備考　割れ口に擦り痕有り
6	瀬戸 三足付大平鉢	法量　口径32.6cm　底径14.4cm　器高8.5cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　脚部貼り付け 素地　灰褐色　小石，黒色小粒含む　ややきめ細かい　微気孔有り　　釉薬　灰緑色不透明　内面，口縁部から外面中位にかけハケ塗り　　焼成　良好
7	銭	元豊通宝　　北宋　初鋳1078　行書

表8　土壙14　出土遺物観察表

土器溜まり1	1	土師器 灯明皿	法量　口径7.0cm　底径4.4cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，小石含む　やや粗い　　色調　灰褐色　　焼成　良好
	2	土師器	法量　口径13.4cm　底径8.6cm　器高3.1cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
	3	土師器	法量　口径13.6cm　底径8.5cm　器高3.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　　色調　淡灰橙色　　焼成　良好
	4	土師器	法量　口径15.05cm　底径8.5cm　器高4.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　気孔有り　　色調　灰橙色　　焼成　良好
埋納遺構	5	土師器	法量　口径7.15cm　底径4.4cm　器高2.1cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
	6	土師器	法量　口径7.0cm　底径4.6cm　器高1.95cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，小石，雲母含む　ややきめ細かい　　色調　灰橙色　　焼成　良好
	7	土師器	法量　口径7.9cm　底径5.4cm　器高2.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，小石含む　　色調　暗橙色　　焼成　良好　　備考　完形
	8	土師器	法量　口径7.8cm　底径5.0cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　橙色　　焼成　良好　　備考　完形
	9	土師器	法量　口径7.9cm　底径5.0cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，小石含む　　色調　暗橙色　　焼成　良好　　備考　完形

表9　土師器溜り1・埋納遺構出土遺物観察表（1）



土壙10・11・12

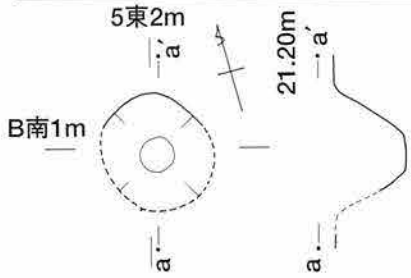
土壙10
位　　置　4－B
平面形状　楕円形？
断面形状　逆台形
長　　径　153cm以上
短　　径　110cm以上
深　　さ　73cm
主軸方位　不明
重複関係　土11・12と切り合う

土壙11
位　　置　4・5－B
平面形状　楕円形？
断面形状　U字形
長　　径　97cm以上
短　　径　不明
深　　さ　66cm以上
主軸方位　不明
重複関係　土10・12と切り合う

土壙12
位　　置　4・5－B
平面形状　楕円形？
断面形状　箱形
長　　径　232cm以上
短　　径　58cm以上
深　　さ　30cm
主軸方位　不明
重複関係　土10・11を切る

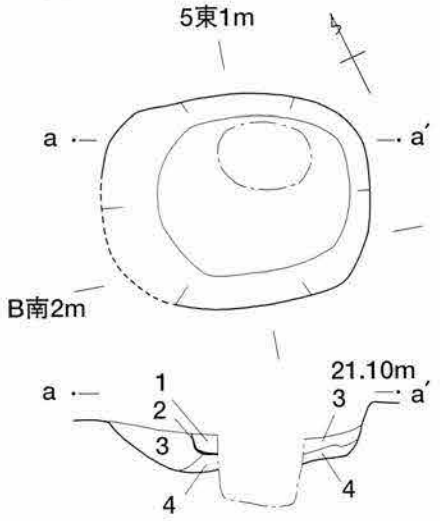
土壙12
1. 暗灰褐色粘質土、炭化物、シルト岩、粒を多量に含む。
2. 黄褐色シルト岩層

土壙11
3. 黄灰色シルト岩層
4. 暗灰褐色粘質土



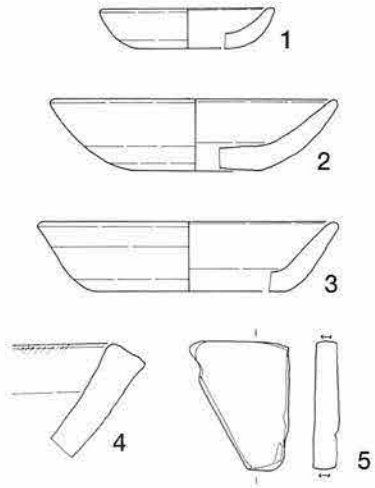
位　　置　5－B
平面形状　円形？
断面形状　U字形
長　　径
短　　径
深　　さ　56cm
主軸方位　不明
重複関係　土14とP64に切られる

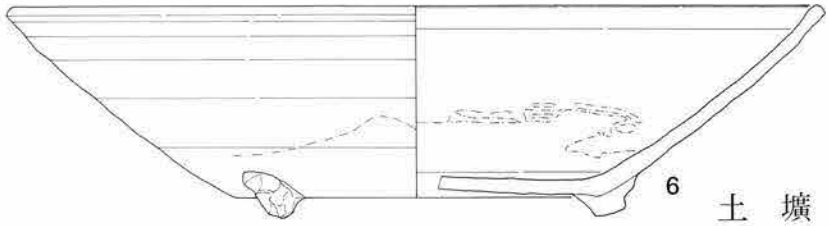
土　壙　13

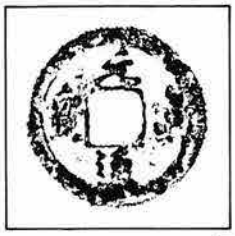


位　　置　4・5－B
平面形状　楕円形
断面形状　不整皿形
長　　径　213cm
短　　径　170cm
深　　さ　42cm
主軸方位　N－68°－W

1. 灰茶褐色弱粘質土、凝灰質砂岩片を含む。
2. 炭化物層
3. 灰茶褐色弱粘質土、土師器片を含む。
4. 灰茶褐色弱粘質土、シルト岩塊粒を多量に含む。



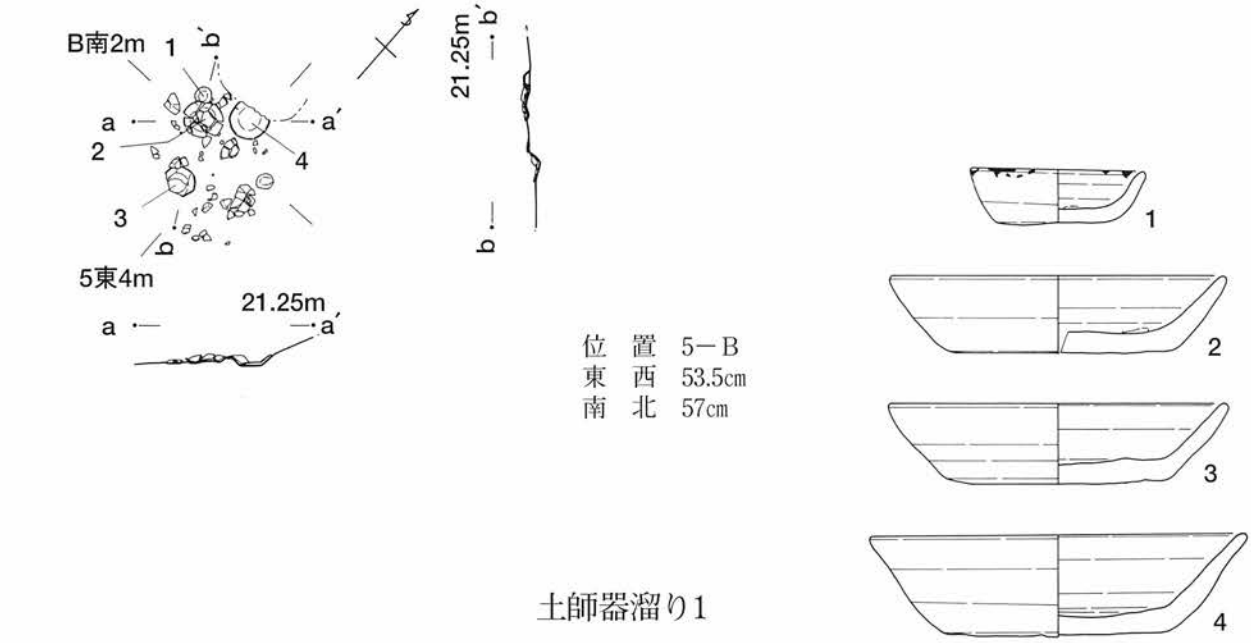




土　壙　14

0　(遺構)　2m
0　(遺物)　10cm

図18　土壙10～14、同出土遺物



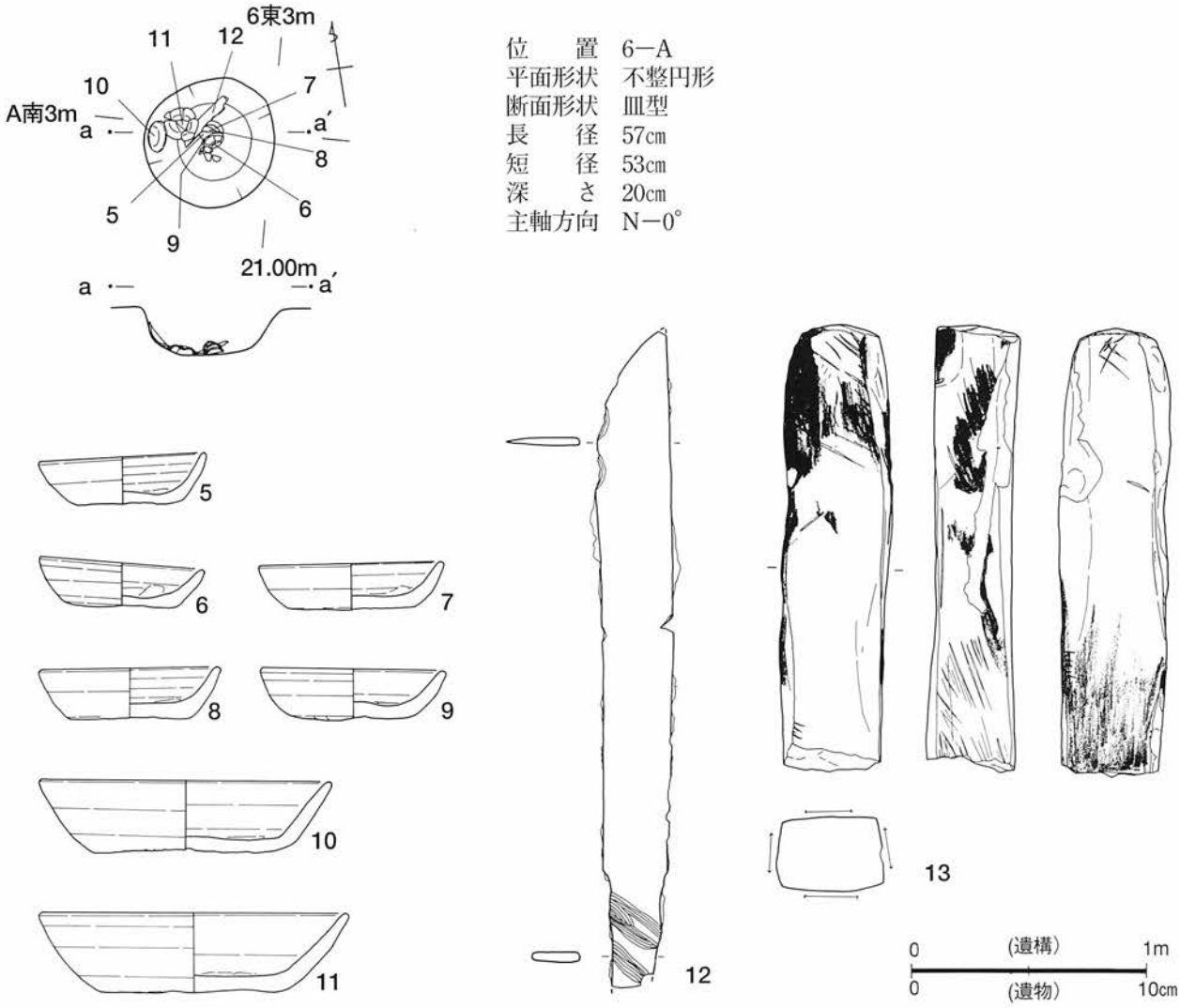


図19　1区Ⅱ面土師器溜り1・土師器埋納遺構、同出土遺物

	10	土師器	法量　口径12.5cm　底径7.6cm　器高3.1cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，小石，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好　　備考　完形
	11	土師器	法量　口径13.2cm　底径7.6cm　器高3.4cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好　　備考　完形
	12	鉄製品 刀子	法量　長さ（27.8cm）　最大幅3.2cm　厚さ0.3cm　　備考　柄の繊維が付着
	13	砥　石	法量　長さ（19.0cm）　幅4.5cm　厚さ3.2cm　　産地　上野系？　　色調　灰色 備考　中砥　4面が砥面　焼けている

表10　埋納遺構出土遺物観察表（2）

1	土師器	法量　口径6.8cm　底径3.9cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　橙色　　焼成　良好
2	土師器	法量　口径10.7cm　底径5.0cm　器高2.9cm　　成形　ロクロ　外底部板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，小石，針状物質，雲母，赤色小粒含む　やや粗い　　色調　灰橙色　　焼成　良好
3	土師器	法量　口径7.1cm　底径4.8cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，小石，雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
4	土師器	法量　口径8.2cm　底径3.5cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
5	土師器	法量　口径12.1cm　底径6.9cm　器高3.25cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
6	土師器	法量　口径14.0cm　底径7.0cm　器高3.65cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
7	転用常滑	法量　長さ13.1cm　幅6.7cm　厚さ1.1cm　　胎土　灰色　小石，長石，黒色小粒含む 色調　灰茶色　　焼成　良好　　備考　輪積成形の甕の破片　外面に叩き目　割れ口に擦り痕有り
8	瓦　質 香　炉	法量　器高（2.9cm）　成形　内面ナデ　口縁部，外面ヘラ磨き　文様　外面2本の沈線の間に菱繋ぎ文押印 胎土　淡灰褐色　砂粒含む　　色調　灰褐色～灰色　　焼成　良好
9	瀬　戸 皿	法量　口径11.0cm　器高（3.0cm）　成形　ロクロ　高台削り出しか　胎土　灰橙色　砂粒含む 釉薬　灰緑色半透明　内面にハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　焼成　良好
10	瀬　戸 入れ子	法量　口径3.2cm　底径2.6cm　器高0.9cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰色　砂粒含む 釉薬　無釉　焼成　良好　　備考　内面に微量の降灰
11	瀬　戸 折縁深皿	法量　器高（2.4cm）　成形　ロクロ　胎土　灰褐色　微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　ハケ塗りか？ 焼成　良好
12	瀬　戸 大平鉢	法量　器高（3.3cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰褐色　気孔有り 釉薬　灰緑色半透明　内面にハケ塗り　焼成　良好
13	瀬　戸 壷	法量　底径6.5cm　器高（4.5cm）　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰褐色　きめ細かい 釉薬　灰緑色透明　ハケ塗り　焼成　良好
14	白　磁 皿	法量　底径4.2cm　器高（1.5cm）　成形　ロクロ　高台削り出し　素地　白色　きめ細かい 釉薬　灰色透明　高台内露胎　貫入有り　焼成　良好
15	銭	祥符元宝　北宋　初鋳1008　楷書
16	銭	紹聖元宝　北宋　初鋳1094　行書
17	砥　石	法量　長さ（9.0cm）　幅2.0cm～3.6cm　厚さ1.9cm～3.1cm　産地　上野　色調　灰緑色 備考　中砥　4面が砥面

表11　1区Ⅱ面出土遺物観察表

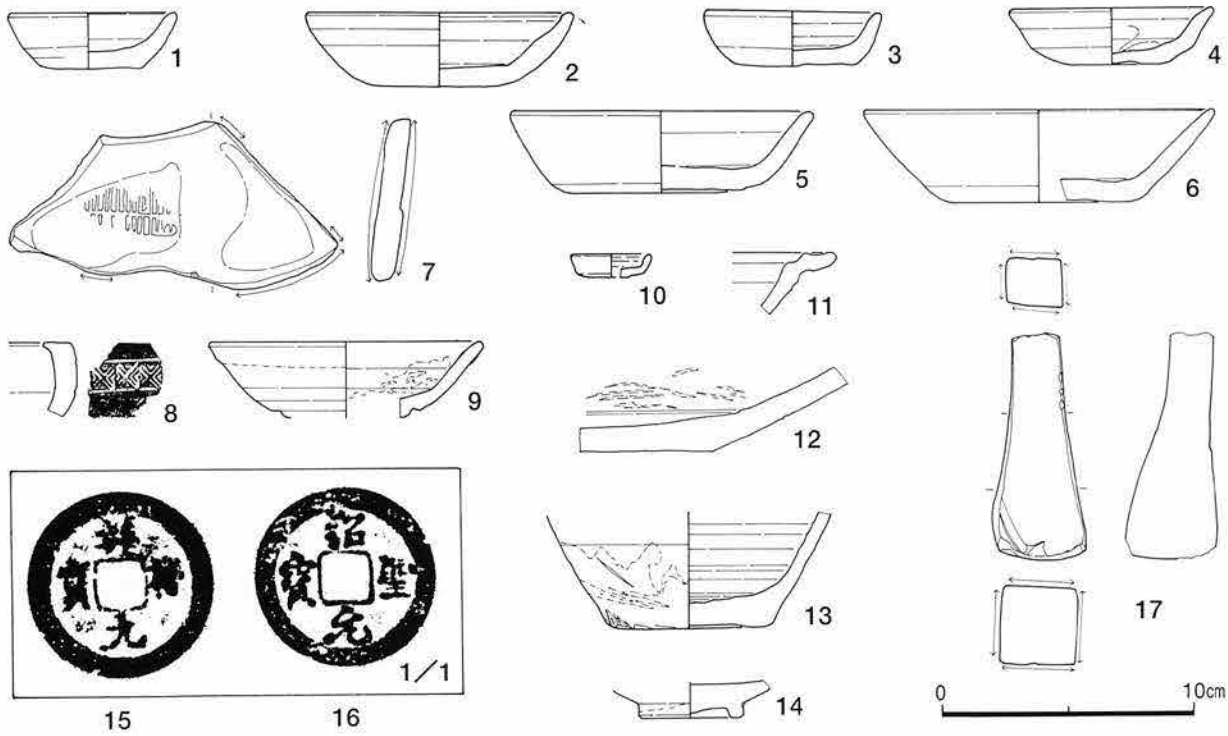


図20　1区Ⅱ面出土遺物

土18	1	土師器	法量　口径12.9cm　底径6.7cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，シルト岩粒含む　やや粗い　色調　橙色　焼成　良好
土壙19	2	土師器	法量　口径12.6cm　底径7.7cm　器高3.5cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	3	土師器	法量　口径13.0cm　底径7.4cm　器高3.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，小石，針状物質，赤色小粒，雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好　備考　完形
	4	土師器	法量　口径12.5cm　底径7.0cm　器高3.35cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒，雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好　備考　完形
	5	土師器	法量　口径12.9cm　底径7.2cm　器高3.5cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒，雲母含む　色調　淡橙色　焼成　良好
土20	6	瀬戸 折縁鉢	法量　口径23.1cm　底径11.0cm　器高5.5cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰褐色　砂粒，小石含む　微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　内面，口縁部から外面下位までハケ塗り

表12　2区Ⅱ面土壙18・19・20出土遺物観察表

1	土師器	法量　口径7.0cm　底径3.6cm　器高2.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　橙色　焼成　良好
2	土師器 灯明皿	法量　口径8.3cm　底径4.4cm　器高2.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　灰橙色　スス付着　焼成　良好　備考　完形
3	土師器	法量　口径10.7cm　底径6.0cm　器高2.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　淡灰橙色　焼成　良好
4	土師器	法量　口径13.5cm　底径6.2cm　器高3.8cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　ややきめ細かい　色調　灰橙色　焼成　良好
5	土師器	法量　口径14.5cm　底径8.8cm　器高3.45cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒，小石含む　色調　橙色　焼成　良好

表13　2区Ⅱ面小穴出土遺物観察表（1）

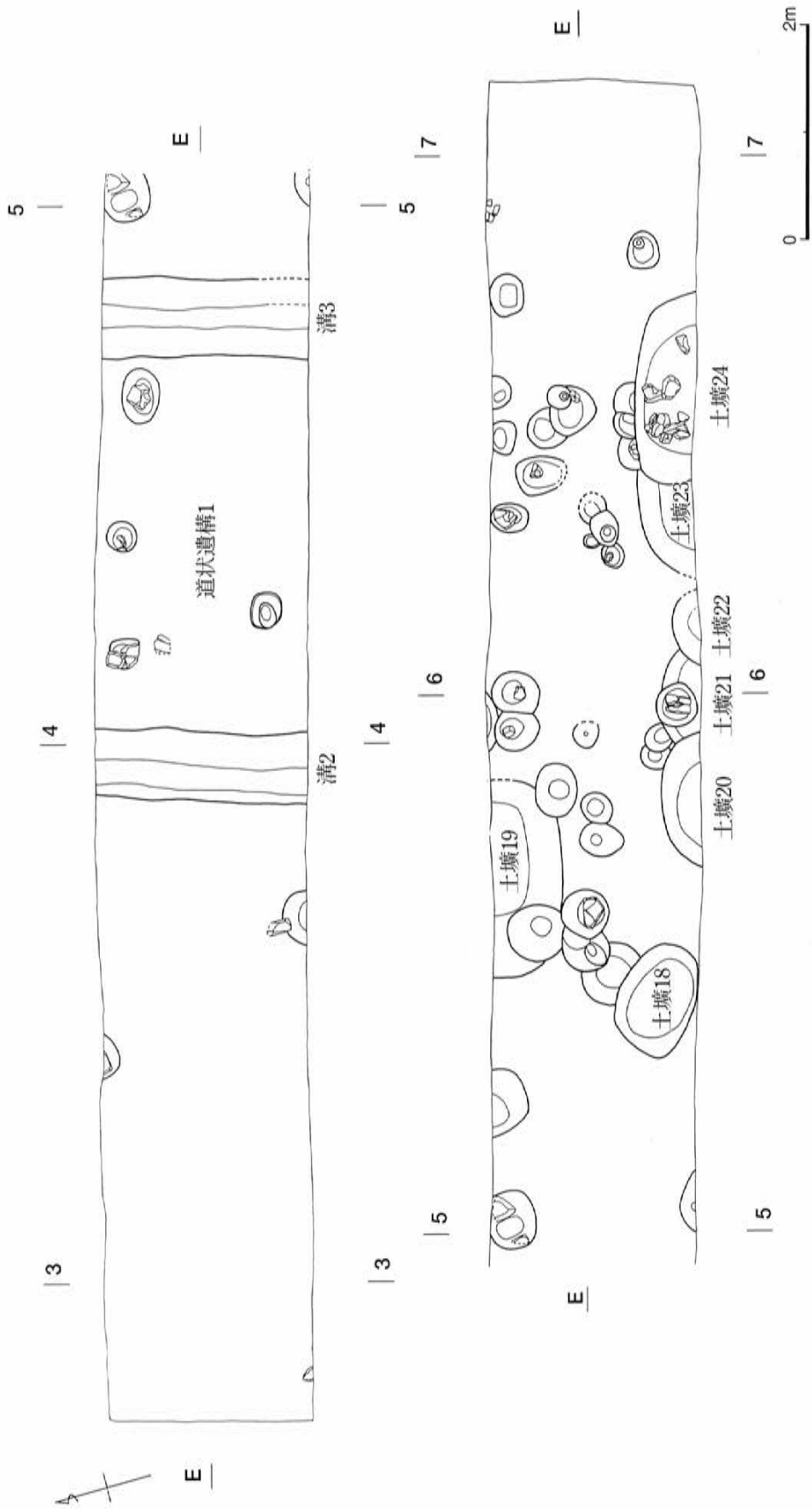
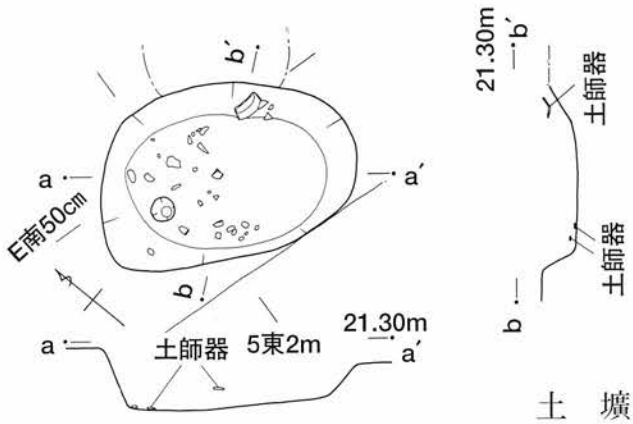
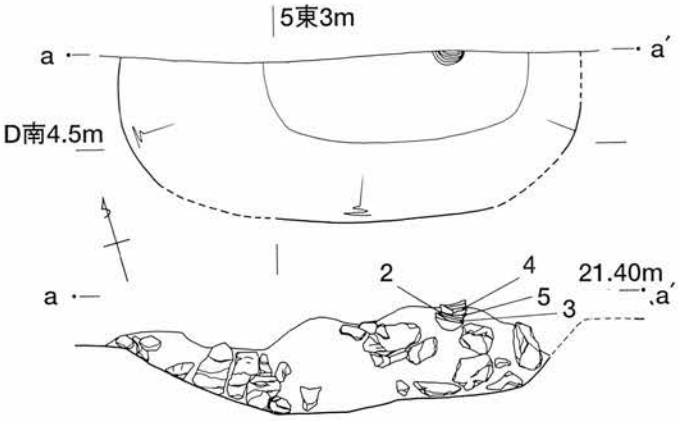


図21　2区Ⅱ面平面図

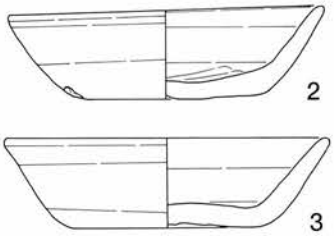


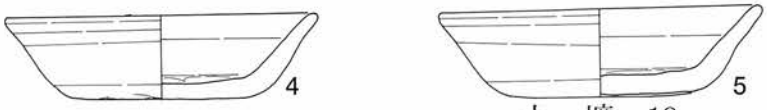
概　　要　底部に小石、土師器が散乱
位　　置　5−E
平面形状　不整楕円形
断面形状　皿形
長　　径　103cm
短　　径　70cm
深　　さ　24.5cm
主軸方位　N−48°−W

土　壙　18



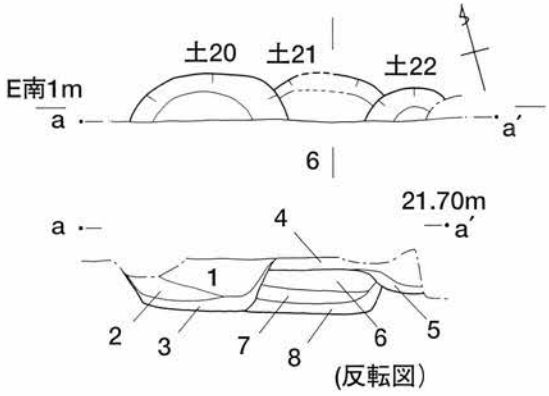
概　　要　9枚重ねの土師器埋納
位　　置　5−E
平面形状　楕円形？
断面形状　皿形
長　　径　184cm以上
短　　径　66cm以上
深　　さ　37cm以上
主軸方位　不明





0　(遺構)　1m
0　(遺物)　10cm

土　壙　19



土20
1. 茶褐色粘質土
2. 黒褐色粘質土、炭化物を多量に含む。
3. 赤褐色粘質土、粘性強い焼土ブロック含む。

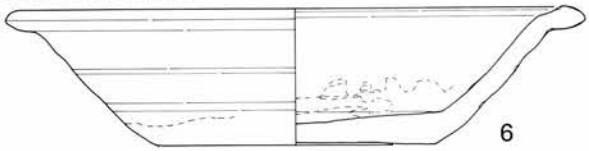
土22
4. 茶褐色弱粘質土、小シルト岩塊を多量に含む。
5. 赤茶褐色粘質土、焼土を多量に含む。

土21
6. 茶褐色粘質土、凝灰質砂岩片含む。
7. 茶褐色粘質土、6より小シルト岩塊を多く含む。
8. 赤褐色粘質土

土壙20
位　　置　5−E
平面形状　楕円形？
断面形状　逆台形
長　　径　127cm以上
短　　径　37cm以上
深　　さ　42cm
主軸方位　不明
重複関係　土壙21を切る

土壙21
位　　置　5・6−E
平面形状　楕円形？
断面形状　逆台形
長　　径　88cm以上
短　　径　38cm以上
深　　さ　34cm
主軸方位　不明
重複関係　土壙20・22に切られる

土壙22
位　　置　6−E
平面形状　楕円形？
断面形状　皿形
長　　径　66cm以上
短　　径　26cm以上
深　　さ　20cm
主軸方位　不明
重複関係　土壙21を切る



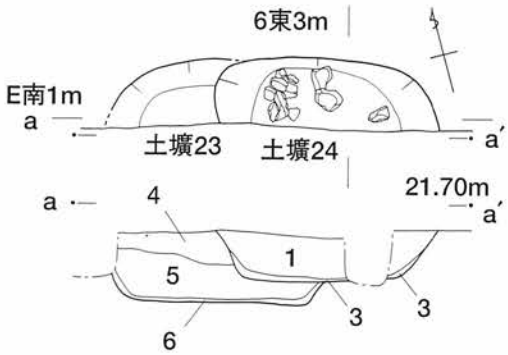
0　(遺構)　2m
0　(遺物)　10cm

土壙20・21・22

図22　2区Ⅱ面土壙18〜22、同出土遺物

6	三足付 香　炉	法量　口径10.1cm　胴部径10.3cm　器高5.05cm　成形　輪積後ロクロ　脚部貼り付け　口縁部，外面，脚部ヘラ磨き 文様　外面上位沈線１本の下に菱繋ぎ文押印　　胎土　瓦質赤灰色　砂粒，小石含む　微気孔有り 色調　黒色　　焼成　良好　　備考　断面を再加工
7	燭　台	法量　底径13.0cm　器高（6.5cm）　　成形　輪積　内面ナデ　外面縦方向ヘラ削り後ヘラ磨き 胎土　灰色瓦質　砂粒含む　　色調　黒色　　焼成　良好
8	常　滑 こね鉢	法量　底径15.9cm　器高（6.8cm）　　成形　輪積　外面指頭痕有り　　胎土，暗橙色　小石，砂粒含む 色調　茶褐色　　焼成　良好　二次焼成を受ける
9	転用常滑	法量　長さ9.2cm　最大幅7.2cm　厚さ1.3cm　　胎土　灰黒色　小石，長石含む 色調　外面暗茶色　降灰有り　内面茶色　　焼成　普通　　備考　割れ口に擦り痕有り
10	瀬　戸 おろし皿	法量　口径14.0cm　器高（3.0cm）　　成形　ロクロ　　胎土　灰褐色　気孔有り 釉薬　灰緑色半透明　口縁と内面と外面下位までハケ塗り　　焼成　良好
11	舶載品 天目茶碗	法量　口径11.95cm　底径4.5cm　器高6.4cm　　成形　ロクロ　高台浅く削り出し　　胎土　灰褐色　微気孔有り 釉薬　黒褐色不透明　内面と外面下位まで付け掛け　　焼成　良好　二次焼成を受ける
12	銭	熙寧元宝　　北宋　初鋳1068　篆書
13	不　明 こね鉢	法量　底径5.6cm　器高（3.3cm）　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　胎土　気孔有り　ややきめ細かい 色調　灰橙色　スス付着　　焼成　不良　二次焼成を受ける
14	火　鉢	法量　器高（3.4cm）　　成形　口縁部横ナデ　外面上位に沈線１本と連続菊花文押印 胎土　赤灰色　砂粒，小石，雲母含む　　色調　灰黒色　　焼成　良好

表14　２区Ⅱ面小穴出土遺物観察表（２）

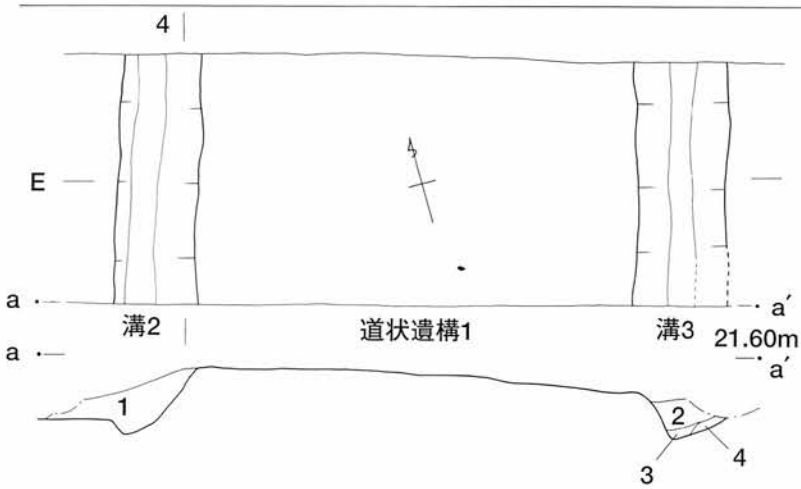


土壙23
位　　置　6−E
平面形状　楕円形？
断面形状　逆台形？
長　　径　170cm以上
短　　径　51cm以上
深　　さ　57cm
主軸方位　不明
重複関係　土壙24に切られる

土壙24
位　　置　6−E
平面形状　不整楕円形？
断面形状　逆台形？
長　　径　183cm以上
短　　径　56cm以上
深　　さ　57cm
主軸方位　不明
重複関係　土壙23を切る

土壙24
1. 褐色粘質土、凝灰質砂岩片、粒、焼土含む。
2. 茶褐色弱粘質土、中シルト岩塊を含む。
3. 赤茶褐色粘質土

土壙23
4. 茶褐色粘質土
5. 茶褐色粘質土、4よりシルト岩粒多い。
6. 茶色粘質土、焼土粒含む。



道状遺構１
位　　置　3・4−D・E

溝２
概　　要　南西から北東へ溝6と共に道状遺構に沿って走る。断面不整逆台形。
位　　置　3・4−D・E
幅　　64cm
深　　さ　43cm
主軸方位　N−18.2°−E

溝３
概　　要　南西から北東へ溝5と共に道状遺構に沿って走る。断面逆台形。
位　　置　4−D・E
幅　　75cm
深　　さ　45cm
主軸方位　N−16.3°−E

溝２
1. 明褐色粘質土、小シルト岩塊、粒を多量に含む。
2. 茶褐色粘質土、中小シルト岩塊を多量、玉砂利、小凝灰質砂岩塊、焼シルト岩粒を含む。

溝３
3. 茶褐色粘質土、玉砂利を小量含む。
4. 赤茶褐色粘質土、小凝灰質砂岩塊を含む。

0　　2m

図23　２区Ⅱ面土壙・道状遺構１

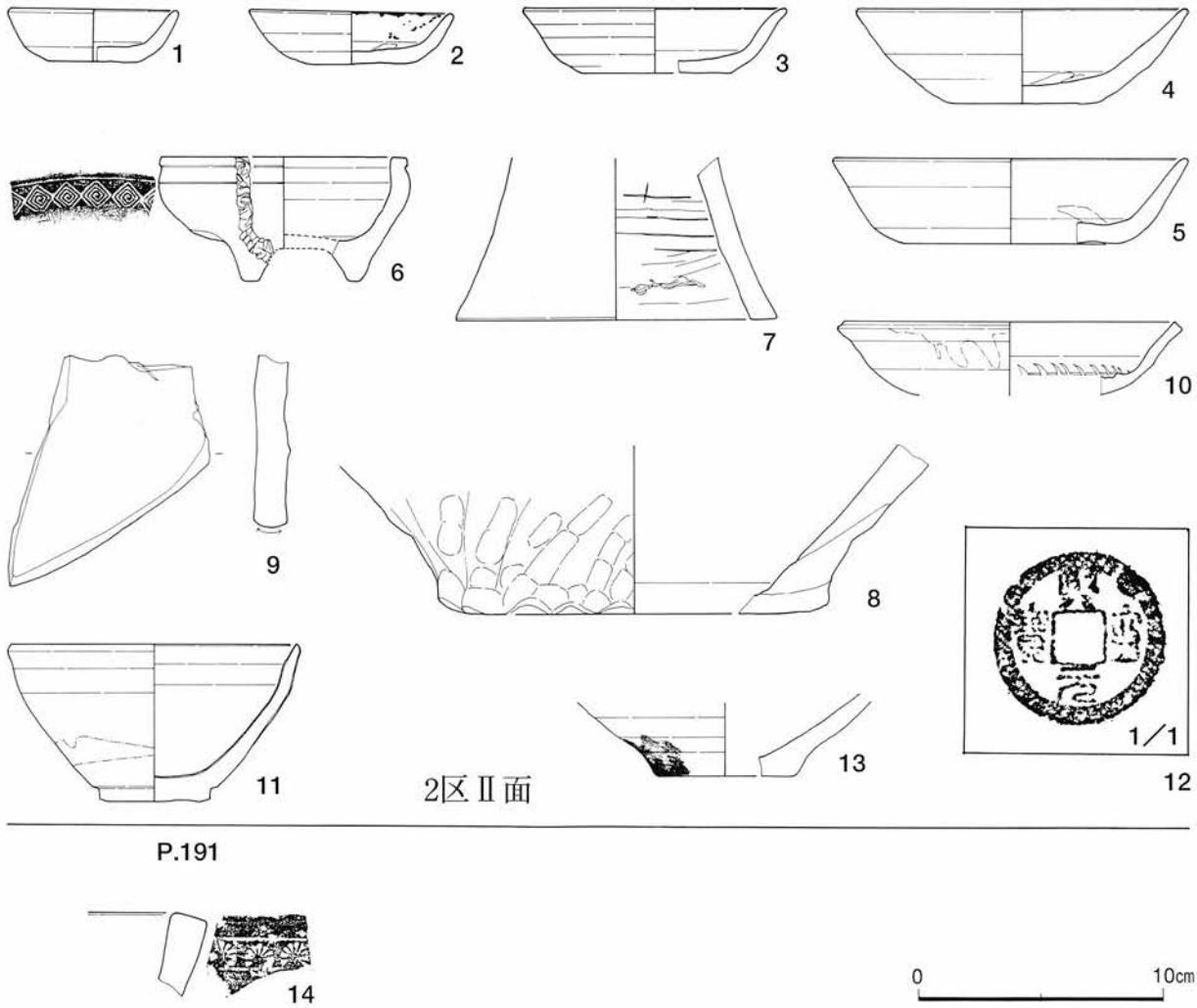


図24　2区Ⅱ面・小穴出土遺物

1	瀬　戸 折縁深皿	法量　口径（21.5cm）　器高（3.4cm）　成形　ロクロ　胎土　灰褐色　小石含む　ややきめ細かい 釉薬　灰緑褐色半透明　外面上位まで付け掛け　焼成　良好
2	瀬　戸 四耳壷	法量　底径10.9cm　器高（2.7cm）　成形　ロクロ　外底部回転ヘラ削り　高台貼り付け　胎土　灰褐色 砂粒，長石含む　きめ細かい　微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　内外面ハケ塗り　焼成　良好
3	瀬　戸 皿	法量　口径12.6cm　器高（1.9cm）　成形　ロクロ　胎土　淡灰褐色　微気孔有り 釉薬　灰緑色半透明　口縁部に付け掛け　焼成　良好　二次焼成を受ける
4	石製品 茶臼	法量　器高（5.4cm）　石材　安山岩　色調　灰黒色　備考　下臼

表15　1区Ⅲ面溝7・井戸1出土遺物観察表

3．Ⅲ面

Ⅱ面を構成するのは、シルト岩を細かく砕いた地業土である。これは30～40㎝の厚みがあり、それを除くと、1区・2区とも炭化物がいちめんに散った層が現れる。もしかするとこれこそが「禅秀の乱」の火災痕跡であるかも知れない。しかし2区は全面掘削したが、1区の方はこの層まで下げると掘削規制深度を越えるため、東側拡張区壁際と西端部の深掘りにとどめざるをえなかった。Ⅲ面はこの炭化層の下にある。

Ⅲ面の確認遺構は次のとおり。

1区……溝2・道状遺構1・井戸2・小穴12

2区……土壙1・溝3・道状遺構1・小穴22

a．1区

溝8

調査区東側、ほぼ6軸上を南北に走る。幅120 ～80㎝、深さ40㎝ほどのV字溝。溝9とともに道状遺構3の側溝をなす。

溝9

東壁沿いにあり、東岸は調査区外にある。幅・深さともに不明。溝8とともに道路側溝をなす。

道状遺構3

溝8と9の間に土を版築状に盛り上げたかまぼこ状の遺構があり、道と考えた。土塁あるいは築地の下部である可能性も消えないが、道であればおそらくこれが往時の犬懸坂であろう。幅約2.9m。

井戸1・2

1は拡張区南壁、2は西端深掘り区で検出されたが、深度規制のため平面の確認のみにとどまる。1は径2.52m以上、2も確実に2mを越えるが、全容はつかめない。1から茶臼の下臼片が出土した。

b．2区

土壙25

調査区西域の南壁際で検出された。長径は現況で130㎝以上、断面は逆台形。底部から土師器が出土しており、年代は15世紀初めごろと思われる。

溝4

中央を南北に走る。幅60㎝、深さ40㎝前後、U字形断面で、溝5とともに道状遺構2の側溝をなす。

溝5

溝4の東約2.5 mを南北に走行する浅いV字溝。道状遺構の側溝と思われる。幅105㎝、深さ27㎝。

道状遺構2

溝4と5の間はかまぼこ状に土が盛り上げられている。両側に溝を持つことから判断すると、土塁や築地というよりも、道である可能性が高い。幅2.5m前後だが、溝4・5まで含めると4.1～4.2mほどになる。1区検出の道状遺構3とは方向が完全にずれている。

Ⅲ面上炭化層出土遺物

土師器・瀬戸・舶載磁器・石製品・鉄釘・銭などがある。年代的には15世紀初め頃が主体をなすと思われる。土師器（47）もこれまで見たような外反器形ではなく、内湾する器壁を持つ。

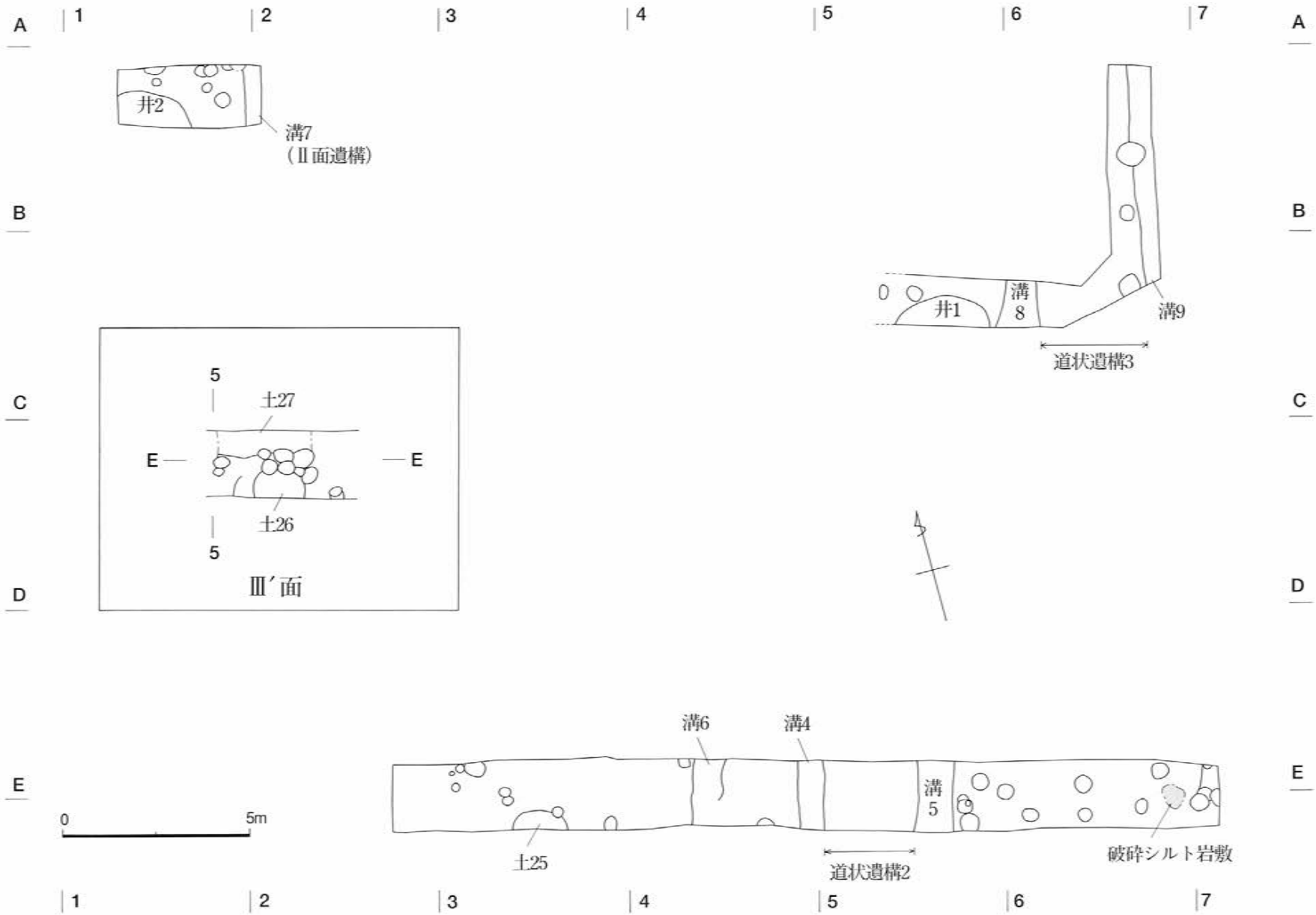

A
B
C
D
E
1
2
3
4
5
6
7
井2
溝7
（Ⅱ面遺構）
井1
溝
8
溝9
道状遺構3
5
土27
E
E
土26
5
Ⅲ′面
溝6
溝4
溝
5
土25
道状遺構2
破砕シルト岩敷
0
5m

図25　Ⅲ面遺構配置図

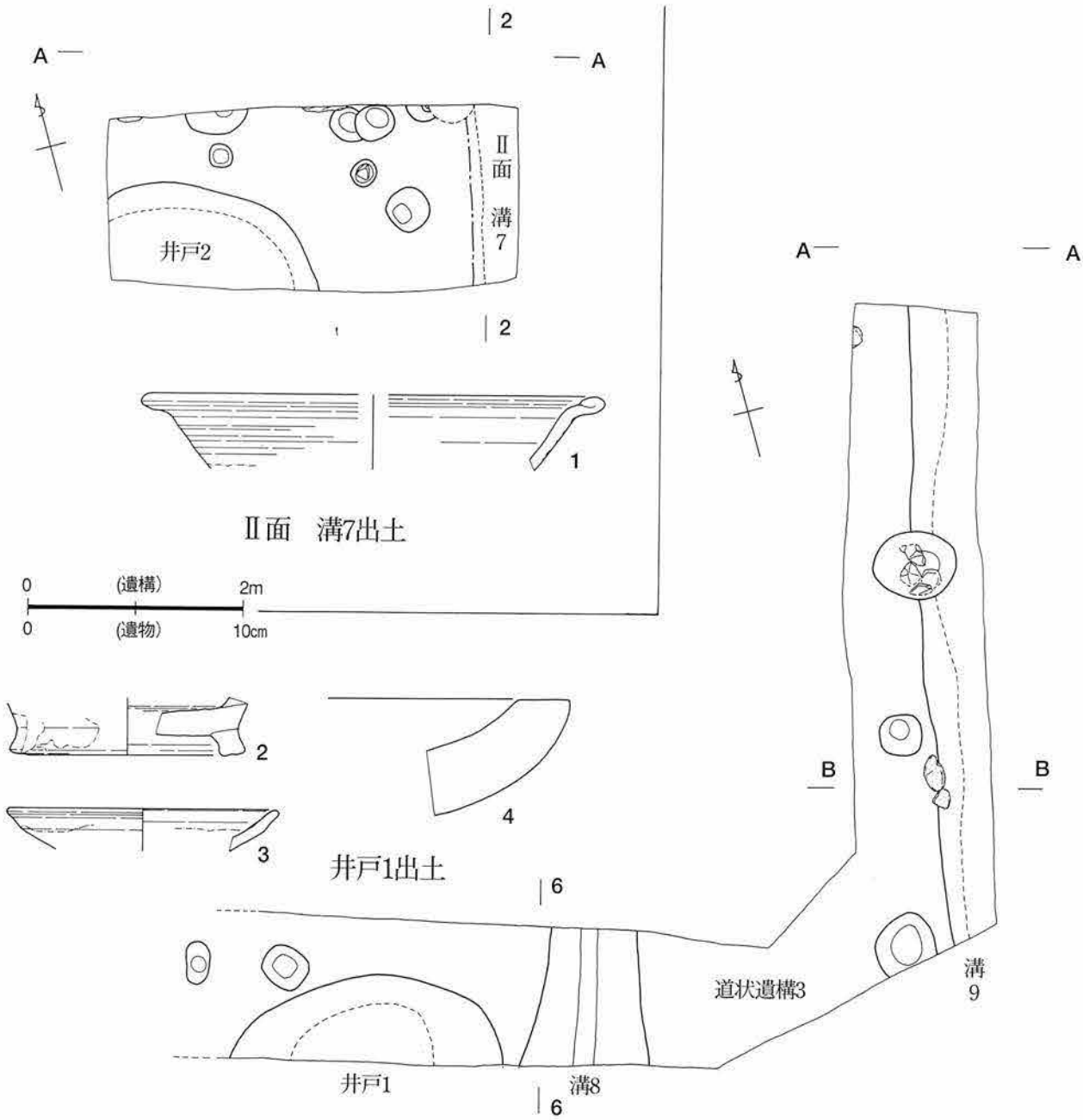


図26　1区Ⅱ面平面図・出土遺物

土25	1	土師器	法量　口径13.5cm　底径8.4cm　器高3.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　橙色　焼成　良好
土26	2	土師器 灯明皿	法量　口径8.1cm　底径4.4cm　器高2.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
	3	常　滑 こね鉢	法量　口径（32.9cm）　器高（5.3cm）　成形　輪積　口縁部ナデ　胎土　暗橙色　砂粒，小石含む 色調　茶色～暗茶色　焼成　良好　二次焼成を受ける
	4	青　磁 天目型碗	法量　器高（2.9cm）　成形　ロクロ　素地　灰白色　微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　内外面施釉 焼成　良好
	5	青　磁 小　皿	法量　底径4.0cm　器高（0.5cm）　成形　ロクロ　高台削り出し　文様　外面単蓮弁 素地　灰白色　きめ細かい　釉薬　灰緑色透明　高台内露胎　焼成　良好

表16　2区Ⅲ面土壙25・26出土遺物観察表

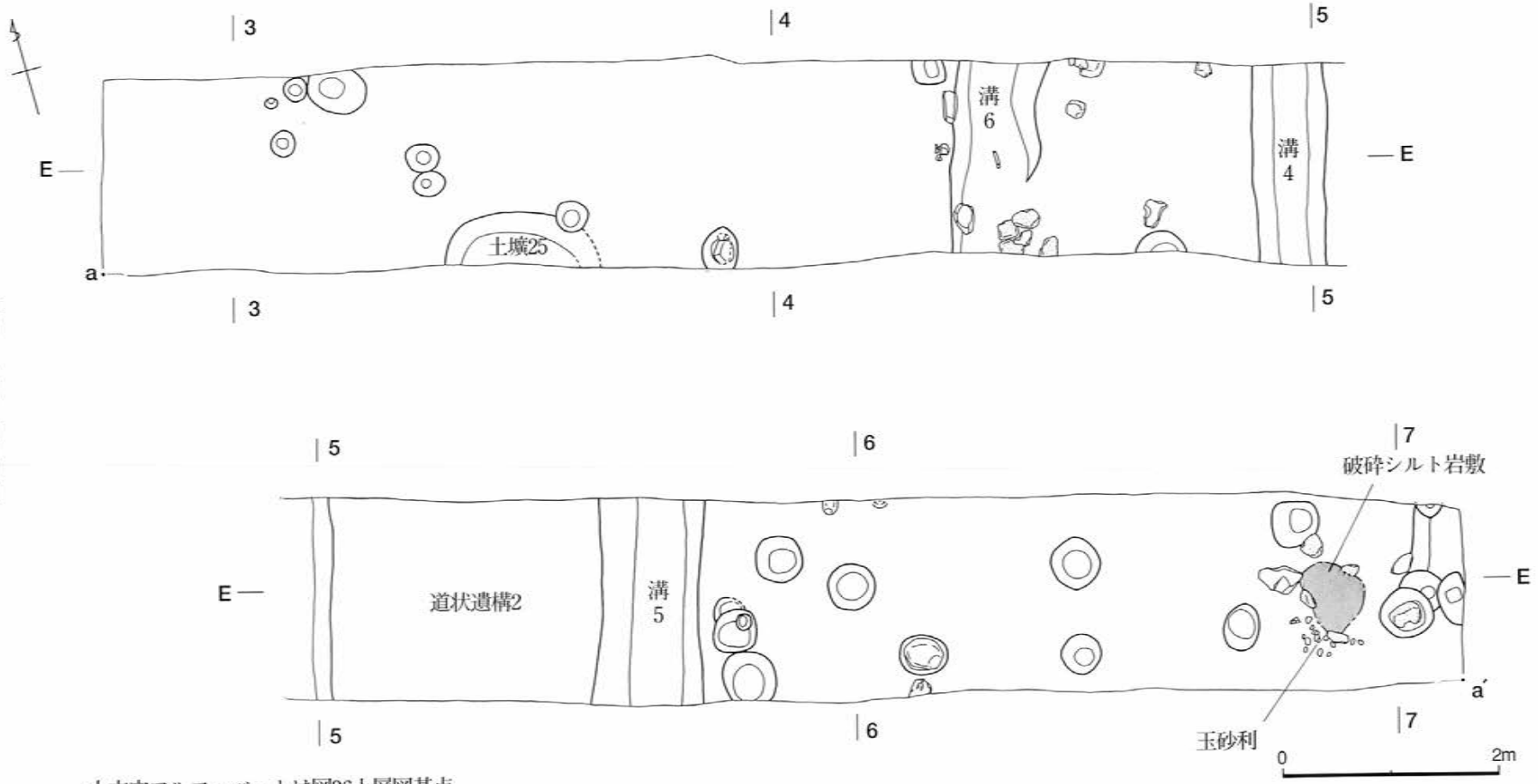
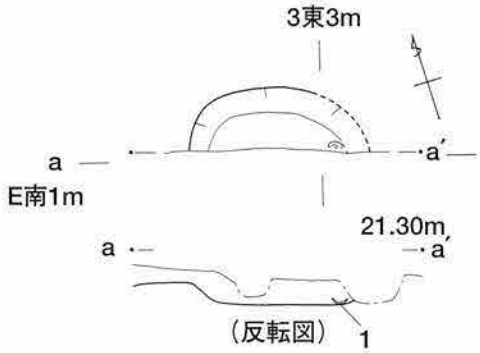
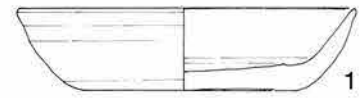


図27　2区Ⅲ面平面図

小文字アルファベットは図36土層図基点。



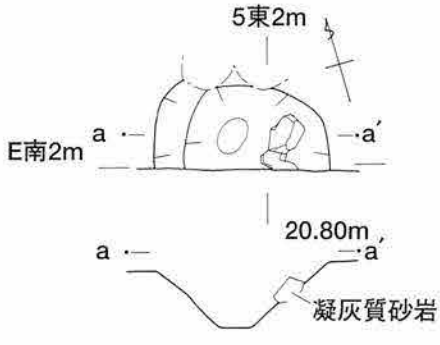
位　　置　3−E
平面形状　楕円形？
断面形状　皿型
長　　径　130cm以上
短　　径　48cm以上
深　　さ　20cm
主軸方位　不明



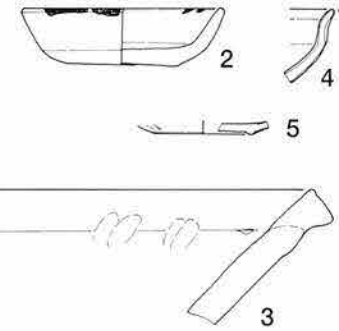
1. 暗茶褐色粘質土　大小シルト岩粒子
炭化物を多量に含む。

土 壙 25

0　(遺構)　2m
0　(遺物)　10cm



位　　置　5−E
平面形状　不整楕円形？
断面形状　逆台形
長　　径　139cm以上
短　　径　66cm以上
深　　さ　50cm
主軸方位　不明

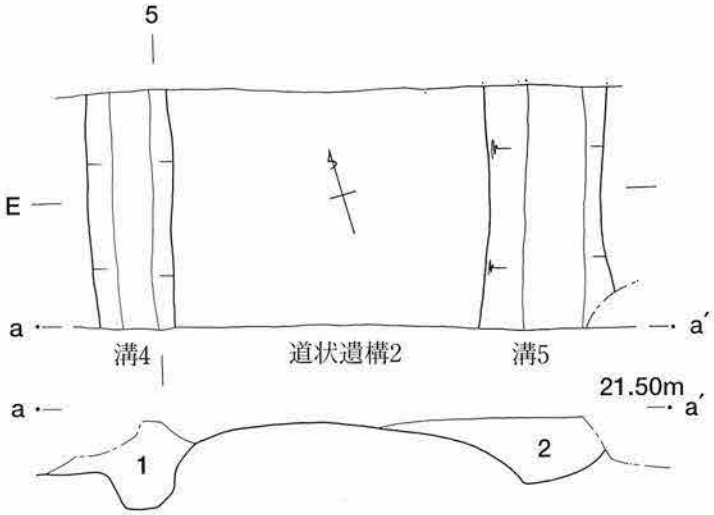


土 壙 26

図28　2区Ⅲ面土壙25・26、同出土遺物

1	瓦　質 火　鉢	法量　器高（8.2cm）　成形　輪積　口縁部，外面ヘラ磨き　鍔部に穿孔１ヵ所 文様　口縁直下沈線１本とその下に連珠文貼り付け　鍔部上面外縁から連続Ｓ字文押印　連続菊花文押印　連続長方形内渦状文押印　連続菊花文押印　外面上から連続四つ丸菱文重ね押印　連続菊花文押印 胎土　灰色　砂粒，小石含む　色調　灰黒色　焼成　良好　備考　隅丸形か？
2	鉄製品	法量　長さ（15.6cm）　最大幅2.1cm　厚さ0.3cm　備考　諸刃　剃刀か？
3	土師器 灯明皿	法量　口径7.7cm　底径4.4cm　器高1.85cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　灰橙色　スス付着　焼成　良好
4	土師器 灯明皿か？	法量　口径8.0cm　底径4.9cm　器高2.2cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質含む　色調　淡橙色　スス付着　焼成　良好　備考　完形
5	土師器 灯明皿	法量　口径7.75cm　底径4.7cm　器高2.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部軽いナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母　赤色小粒含む　色調　灰橙色　スス付着　焼成　良好
6	土師器	法量　口径8.5cm　底径6.1cm　器高2.0cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，雲母，赤色小粒，針状物質含む　粗い　色調　灰橙色　焼成　非常に良好　備考　完形
7	土師器 灯明皿	法量　口径8.4cm　底径4.2cm　器高2.3cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母含む　色調　灰橙色　スス付着　焼成　良好
8	土師器	法量　口径9.0cm　底径4.9cm　器高2.5cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　ややきめ細かい　色調　橙色　焼成　良好　備考　完形
9	土師器	法量　口径11.2cm　底径6.0cm　器高2.95cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好
10	土師器	法量　口径12.6cm　底径8.0cm　器高2.85cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　橙色　焼成　良好　備考　完形
11	土師器	法量　口径13.7cm　底径8.0cm　器高3.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，雲母，赤色小粒，針状物質含む　粗い　色調　淡灰橙色　焼成　非常に良好　備考　完形
12	土師器 ミニチュア	法量　口径5.0cm　底径3.6cm　器高1.1cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質含む　色調　橙色　焼成　良好

表17　2区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（1）



溝4　1.　黄褐色土　大中シルト岩塊を多量に含む。
溝5　2.　黄褐色土　大中シルト岩塊を多量に含む。

溝4
概　　要　南西から北東方向へ溝5と共に道状遺構に沿って走る。断面U字型
位　　置　4・5−D・E
幅　　69cm
深　　さ　34cm
主軸方位　N−16°−E

溝5
概　　要　南西から北東方向へ溝4と共に道状遺構に沿って走る。断面V字型
位　　置　5−D・E
幅　　105cm
深　　さ　27cm
主軸方位　N−18°−E

道状遺構2
位　　置　4・5−D・E

0　2m

図29　2区Ⅲ面溝2・3・道状遺構2

13	土師器 穿孔 底部	成形　ロクロ成形か？　板状圧痕有り　穿孔1ヵ所　胎土　砂粒，赤色小粒含む　やや粗い　色調　淡灰橙色 焼成　非常に良好
14	瓦　質 火　鉢	法量　器高（6.2cm）　成形　輪積　口縁部，外面ヘラ磨き　胎土　灰色　砂粒含む　色調　灰黒色 焼成　良好
15	瓦　質 火　鉢	法量　口径26.9cm　胴部径31.6cm　器高（11.3cm）　成形　輪積　口縁部，外面ヘラ磨き　内面ナデ　指頭痕有り 胎土　灰白色　砂粒含む　色調　内面灰色　外面灰黒色〜灰褐色　焼成　良好
16	瓦　質 脚付き火鉢	法量　口径35.8cm　底径25.4cm　器高14.5cm　成形　輪積　脚部貼り付け　内面ナデ　口縁部，外面ヘラ磨き 脚部外面ヘラ磨き　文様　外面上位2本の沈線の間に連続菊花文押印　その下に連珠文貼り付け　下位連珠文貼り付けの下に沈線1本　胎土　灰橙色　砂粒，小石含む　色調　灰黒色〜灰橙色　焼成　良好
17	常　滑 甕	法量　器高（8.3cm）　成形　輪積
18	瀬　戸 皿	法量　口径11.1cm　底径4.5cm　器高2.75cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　淡灰褐色　砂粒含む 微気孔有り　釉薬　灰緑色半透明　内面ハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　二次焼成で一部失透 焼成　良好　二次焼成を受ける　備考　内底部に目跡有り
19	瀬　戸 皿	法量　口径12.5cm　底径5.5cm　器高2.6cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　淡灰褐色　砂粒含む ややきめ細かい　釉薬　灰緑色半透明　内面ハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　焼成　良好 備考　内底部に目跡有り　外底部にスス付着
20	瀬　戸 皿	法量　口径11.6cm　底径5.5cm　器高2.65cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り 胎土　灰褐色　砂粒含む　釉薬　灰緑色半透明　内面ハケ塗りのうえ口縁部付け掛け　二次焼成で一部失透 焼成　良好　二次焼成を受ける　備考　内底部に目跡有り　スス付着
21	瀬　戸 皿	法量　口径10.0cm　底径6.0cm　器高2.45cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰褐色　微気孔有り 釉薬　灰緑色透明　内面と外面上位に付け掛け　焼成　良好　備考　内底面に重ね痕有り
22	瀬　戸 おろし皿	法量　口径12.0cm　底径6.0cm　器高3.0cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　胎土　灰色　微気孔有り 釉薬　灰緑色透明　口縁部から側面に付け掛け　焼成　良好　備考　スス付着
23	瀬　戸 大平鉢	法量　口径（25.9cm）　器高（6.1cm）　成形　ロクロ　胎土　灰褐色　砂粒含む　微気孔有り 釉薬　灰緑褐色半透明　内外面施釉　焼成　良好

表18　2区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（2）

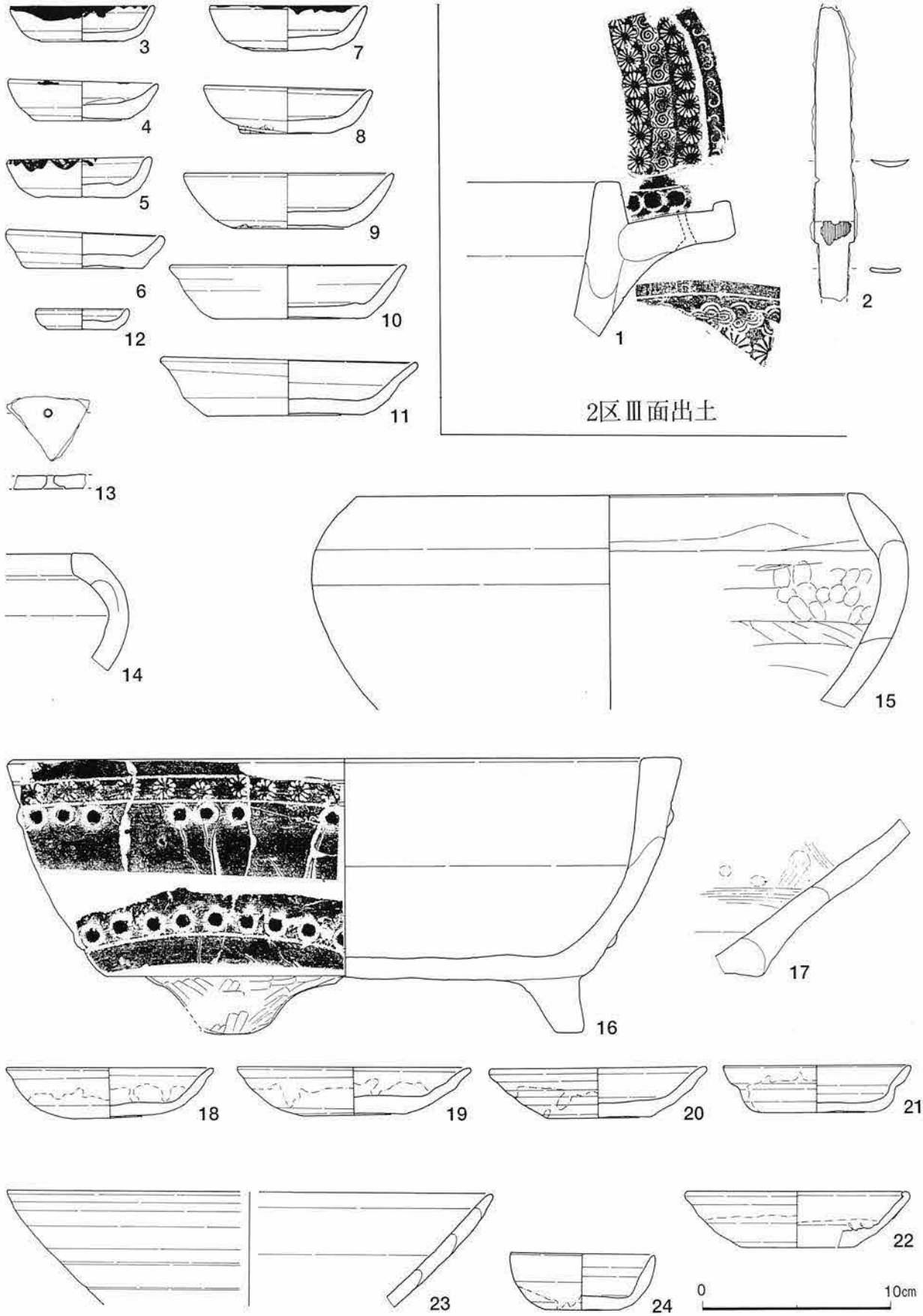
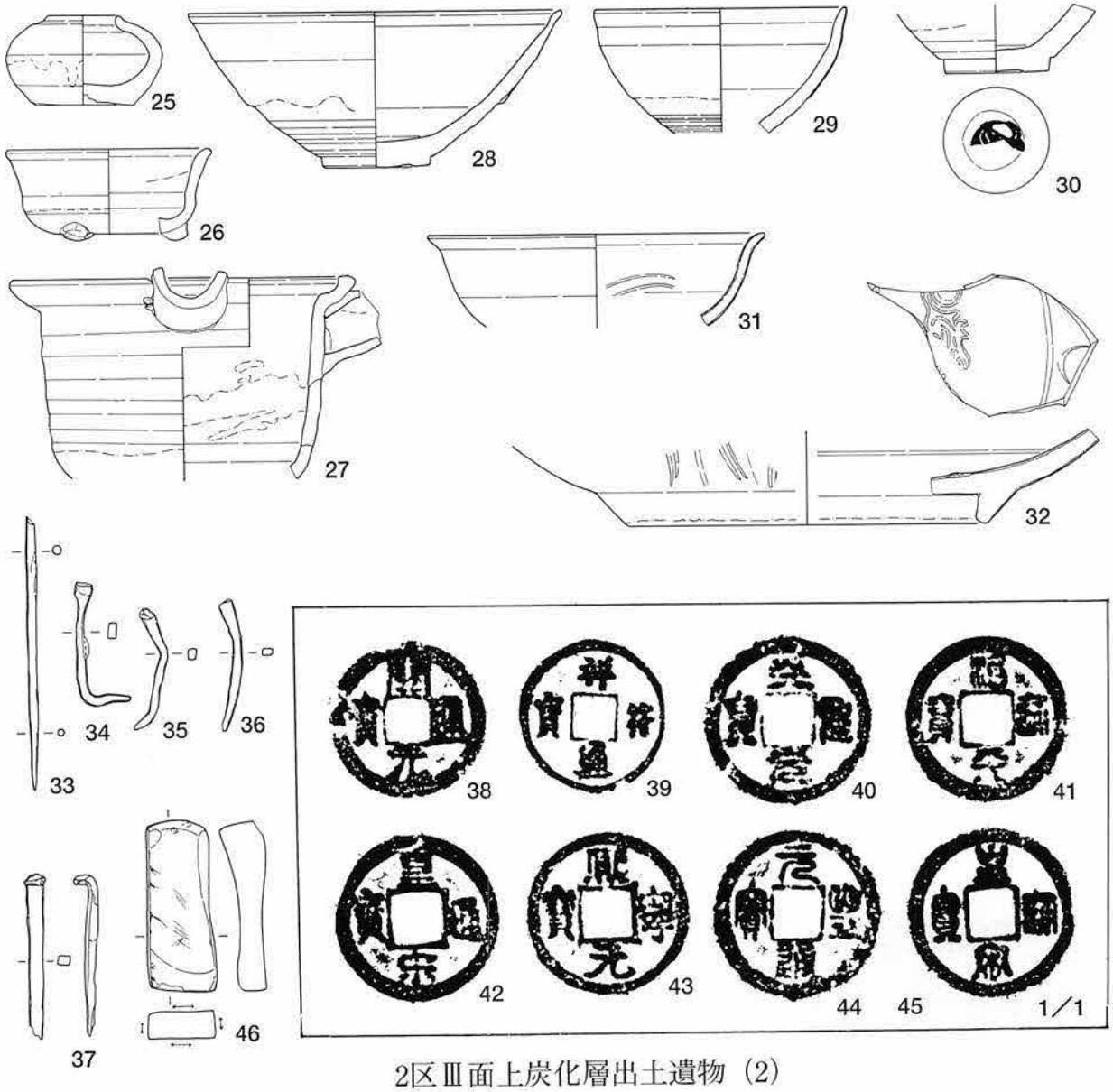


図30　2区Ⅲ面・Ⅲ面上炭化層出土遺物



2区Ⅲ面上炭化層出土遺物（2）

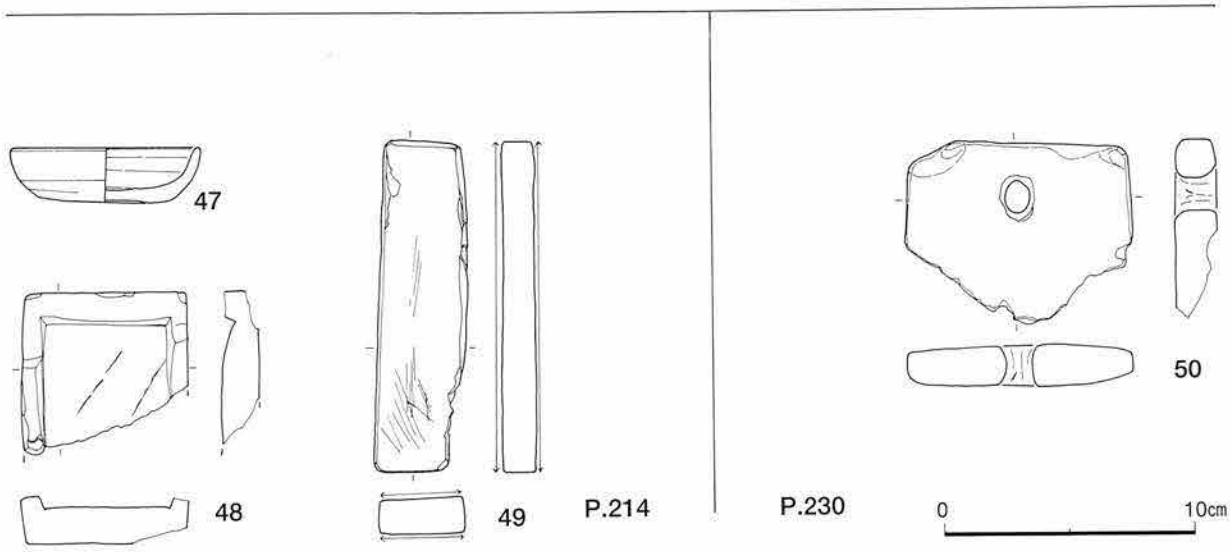


図31　2区Ⅲ面上炭化層・Ⅲ面・小穴出土遺物

24	瀬　戸 小　碗	法量　口径7.75cm　底径3.9cm　器高3.0cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　　胎土　淡灰褐色　小石含む 釉薬　灰緑褐色透明　内面と外面下位まで付け掛け　二次焼成で一部失透　　焼成　良好　軽い二次焼成を受ける
25	瀬　戸 無頸小壷	法量　口径3.4cm　胴部径6.9cm　底径4.4cm　器高4.0cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り 胎土　灰緑色半透明　口縁部から外面中位に施釉　　焼成　良好　　備考　スス付着
26	瀬　戸 三足付香炉	法量　口径9.1cm　底径4.6cm　器高4.1cm　　成形　ロクロ　脚部貼り付け　　胎土　灰色　砂粒含む 釉薬　黒褐色不透明　口縁部から外面中位に施釉　　焼成　良好　二次焼成を受ける
27	瀬　戸 行　平	法量　口径15.3cm　器高（8.9cm）　　成形　ロクロ　把手，注口部貼り付け　　胎土　灰色　砂粒，小石含む 釉薬　灰緑色半透明　内面ハケ塗りのうえ口縁から外面中位に付け掛け　　焼成　良好　二次焼成を受ける
28	瀬　戸 碗	法量　口径16.5cm　底径4.7cm　器高6.8cm　　成形　ロクロ　高台浅く削り出し　　胎土　灰褐色　砂粒，小石含む　微気孔有り　　釉薬　灰緑褐色半透明　内面と外面中位まで付け掛け　　焼成　良好　二次焼成を受ける
29	瀬　戸 天目茶碗	法量　口径11.2cm　器高（5.5cm）　　成形　ロクロ　高台削り出しか？　　胎土　淡灰褐色　砂粒含む 釉薬　黒褐色不透明　内面と外面中位まで付け掛け　　焼成　良好　二次焼成を受ける
30	瀬　戸 天目茶碗	法量　底径4.6cm　器高（3.0cm）　　成形　ロクロ　外底部浅く削り出し　　胎土　灰褐色　砂粒含む 釉薬　黒褐色不透明　内面と外面下位まで付け掛け　　焼成　良好　二次焼成を受ける　　備考　外底部に花押
31	青　磁 龍泉窯　碗	法量　口径14.9cm　器高（4.1cm）　　成形　ロクロ　口縁部やや外反　　文様　内面画花文 素地　灰色　砂粒含む　微気孔有り　　釉薬　灰緑褐色半透明　気泡，貫入有り　　焼成　良好
32	青　磁 鉢	法量　底径15.8cm　器高（4.1cm）　　成形　ロクロ　高台削り出し　　文様　内底面双龍文貼り付け　内面画花文 外面２重線刻蓮弁　　素地　灰白色　砂粒含む　気孔有り　　釉薬　灰緑色半透明　畳付き露胎　　焼成　良好
33	鉄製品　火箸	法量　長さ（12.0cm）　径0.35cm
34	鉄製品　釘	法量　長さ5.5cm　幅0.7cm　厚さ0.4cm
35	鉄製品　釘	法量　長さ（5.3cm）　幅0.5cm　厚さ0.35cm
36	鉄製品　釘	法量　長さ（5.8cm）　幅0.45cm　厚さ0.3cm
37	鉄製品　釘	法量　長さ（7.1cm）　幅0.7cm　厚さ0.5cm
38	銭	開元通宝　　唐　初鋳621　楷書
39	銭	祥符通宝　　北宋　初鋳1008　楷書
40	銭	天聖元宝　　北宋　初鋳1023　篆書
41	銭	熙寧元宝　　北宋　初鋳1068　篆書
42	銭	皇宋通宝　　北宋　初鋳1039　楷書
43	銭	熙寧元宝　　北宋　初鋳1068　楷書
44	銭	元豊通宝　　北宋　初鋳1078　篆書
45	銭	皇宋通宝　　北宋　初鋳1039　篆書
46	砥石	法量　長さ7.5cm　最大幅3.0cm　厚さ1.0～2.0cm　　産地　不明　　色調　灰褐色　　備考　中砥　４面が砥面
47	土師器	法量　口径7.6cm　底径5.2cm　器高2.2cm　　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，雲母，赤色小粒含む　　色調　灰橙色　　焼成　良好
48	硯	法量　長さ（6.5cm）　幅6.6cm　厚さ1.9cm　　石材　粘板岩　　色調　灰黒色　　備考　切り出し痕，ノミ痕有り
49	砥石	法量　長さ13.3cm　幅3.5cm　厚さ1.4cm　　石材　京都系　　色調　赤灰褐色～茶色　　備考　仕上げ砥　切り出し痕有り　焼けている
50	温石	法量　長さ（7.2cm）　幅9.0cm　厚さ1.7cm　　成形　穿孔１ヵ所　　石材　滑石　　色調　赤灰色

表19　２区Ⅲ面炭化層出土遺物観察表（３）

4．Ⅲ′面

２区の道状遺構２の盛り上がりを除いたところ、その下に土壙２基と小穴１２を確認した。

土壙26

南壁にかかって検出された。長径139cm以上のすり鉢状土壙。深さ50cmで、中段に砂岩が置かれている。出土遺物には土師器・常滑こね鉢・舶載磁器などがあり、年代的にいくらか混乱がみられるが、おおむね14世紀前半ではなかろうか。

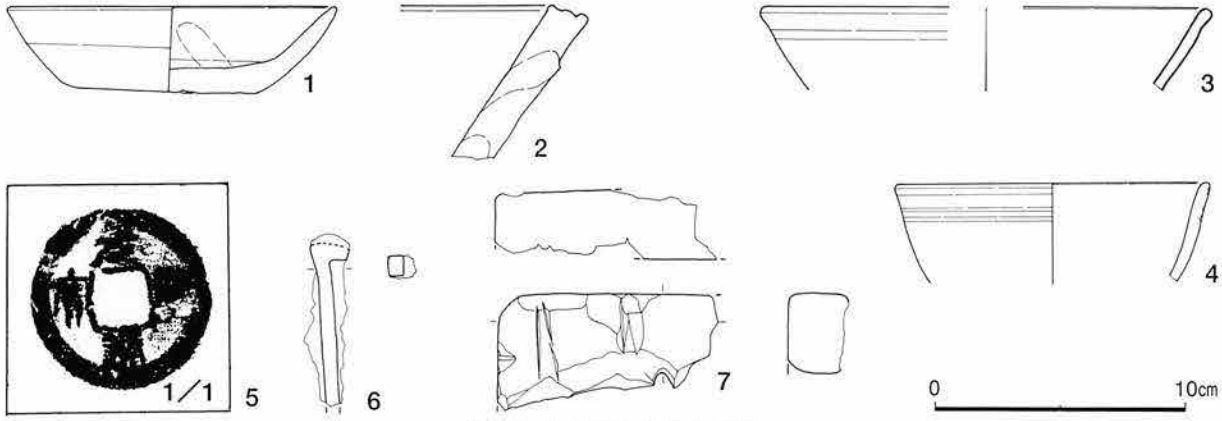


図32　１区Ⅲ′面出土遺物

1	土師器	法量　口径13.2cm　底径7.1cm　器高3.5cm　成形　ロクロ　外底部回転糸切り　板状圧痕有り　内底部ナデ 胎土　砂粒，針状物質，赤色小粒含む　色調　灰橙色　焼成　良好
2	常滑 こね鉢	法量　器高（6.1cm）　成形　輪積　口縁部ナデ　胎土　橙色　砂粒，小石含む　色調　橙色～茶色 焼成　良好　二次焼成を受ける
3	青磁 無文碗	法量　口径（18.0cm）　器高（3.3cm）　成形　ロクロ　素地　灰色　やや粗い 釉薬　灰緑色半透明　少量の貫入有り　内外面施釉　焼成　良好
4	青磁 碗	法量　口径12.6cm　器高（3.9cm）　成形　ロクロ　文様　外面上位に２重の沈線　素地　灰白色 釉薬　灰緑色半透明　少量の貫入有り　内外面施釉　焼成　良好
5	銭	元豊通宝　北宋　初鋳1078　篆書
6	鉄製品　釘	法量　長さ（6.4cm）　幅0.8cm　厚さ0.65cm
7	温石	法量　長さ（8.7cm）　幅（4.5cm）　厚さ2.7cm　成形　穿孔１ヵ所　上面に傷有り　石材　滑石 色調　赤灰色

表20　１区Ⅲ′面出土遺物観察表

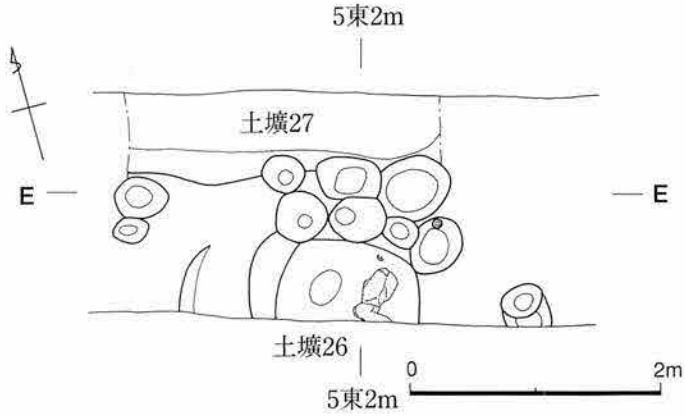
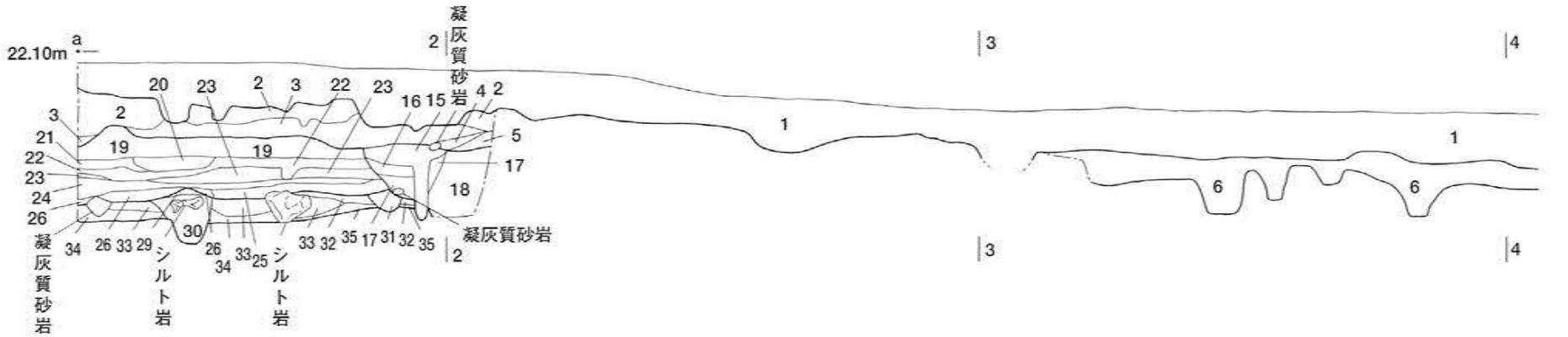


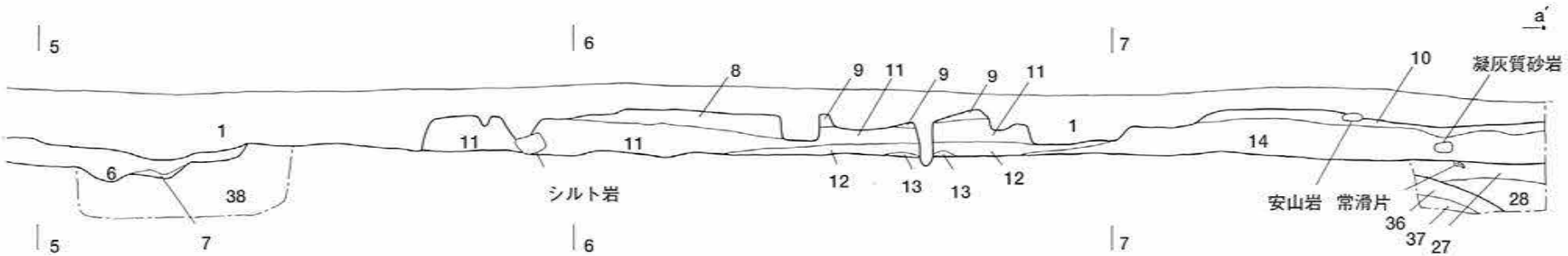
図33　２区Ⅲ′面平面図



Ⅰ
1 表土
2 暗黄褐色粘質土　土師器片、玉砂利を含む
3 赤褐色粘質土　シルト岩粒を多量、土師器片、ブロックでシルト岩塊を含む
4 暗灰褐色粘質土　安山岩、シルト岩塊、多量のシルト岩粒を含む
5 赤褐色粘質土　土師器片、玉砂利を含む
6 灰茶褐色弱粘質土　シルト岩粒、炭化物を多量、土師器片、凝灰質砂岩を含む

Ⅰ
7 暗灰褐色粘質土
8 暗黄褐色粘質土　シルト岩粒、炭化物を多量、小凝灰質砂岩土師器片を含む
9 暗灰褐色弱粘質土　土師器片を含む
10 暗茶褐色土　土師器片、多量のシルト岩粒を含む
11 暗黄褐色粘質土　シルト岩塊を多量に含む
12 灰褐色弱粘質土　土師器片を含む
13 灰褐色粘質土　シルト岩塊、多量のシルト岩粒を含む
14 茶褐色土　シルト岩塊を多量に含む

Ⅱ
15 暗灰褐色粘質土　安山岩、シルト岩塊、多量のシルト岩粒を含む
16 赤褐色粘質土　土師器片、多量のシルト岩塊粒を含む
17 暗灰褐色粘質土　土師器片、凝灰質砂岩、多量のシルト岩粒を含む
18 暗灰褐色粘質土　土師器片を含む
19 灰茶褐色粘質土　土師器片、玉砂利、小凝灰質砂岩塊、多量のシルト岩塊粒を含む
20 黒褐色粘質土　多量の炭化物を含む
21 暗灰褐色粘質土　凝灰質砂岩、多量のシルト岩塊を含む

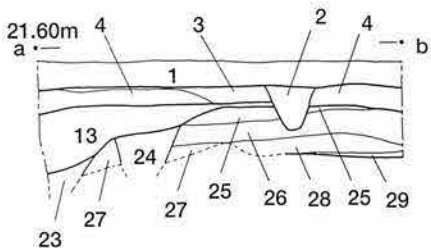


Ⅱ
22 暗灰褐色粘質土　土師器片、多量のシルト岩塊を含む
23 明黄褐色粘質土　土師器片、小凝灰質砂岩塊、多量のシルト岩塊粒を含む
24 暗灰褐色粘質土　多量のシルト岩塊を含む
25 暗灰褐色弱粘質土　多量のシルト岩塊を含む
26 明黄褐色粘質土　多量のシルト岩塊粒を含む
27 暗茶褐色土　土師器片、常滑片、凝灰質砂岩を含む
28 暗灰褐色粘質土　土師器片、多量のシルト岩粒を含む

Ⅲ
29 暗灰褐色粘質土
30 暗褐色弱粘質土　凝灰質砂岩を含む
31 茶褐色粘質土　凝灰質砂岩、多量のシルト岩塊を含む
32 暗黄褐色粘質土　土師器片を含む
33 暗灰褐色弱粘質土　土師器片を含む
34 暗灰褐色粘質土　土師器片を含む
35 炭化物層
36 暗茶褐色粘質土　土師器片を含む
37 灰茶褐色粘質土　土師器片を含む
38 明茶褐色シルト岩層

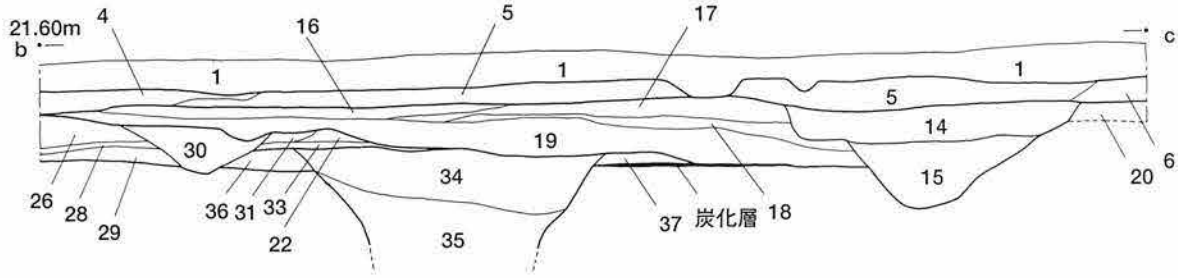
0　2m

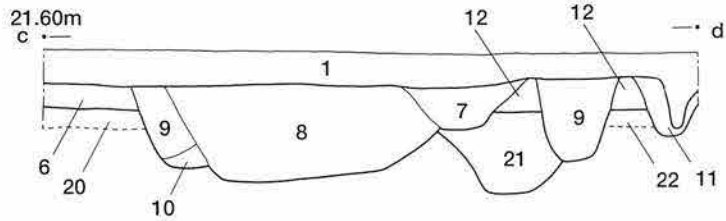
図34　1区北壁土層図



東南、南、西面

Ⅰ
1 表土
2 暗茶褐土
3 灰茶褐色土　土師器片を含む
4 灰褐色土　中小シルト岩塊を多量に含む（北壁土層図10と同一の可能性有）
5 暗茶褐色粘質土　土師器片、多量の炭化物をブロックで含む（北壁土層図8と同一の可能性有）
6 黄灰褐色シルト岩層、地業
7 明灰褐色砂質土
8 土壙1





Ⅰ
9 灰褐色砂質土
10 灰褐色弱粘質土
11 明灰褐色砂質土
12 灰褐色砂質土　（北壁土層図6と同一の可能性有）

Ⅱ
13 灰茶褐色弱粘質土　土師器片を含む　溝9
14 土壙12
15 土壙11
16 灰褐色粘質土　土師器片を含む
17 明黄褐色シルト岩層　土師器片を含む
18 黄灰褐色シルト岩層　地業

Ⅱ
19 明黄褐色シルト岩層　地業
20 明黄褐色シルト岩層　19と同土であるが、つながりは不明
21 土壙3
22 シルト岩地業層

Ⅲ
23 灰茶褐色弱粘質土　土師器片を含む　溝9
24 灰茶褐色弱粘質土　土師器片、多量のシルト岩塊粒を含む
25 明黄褐色シルト岩層　地業
26 暗茶褐色粘質土　土師器片、多量の炭化物を含む
27 灰茶褐色弱粘質土　土師器片、多量のシルト岩塊粒を含む
28 黄茶褐色シルト岩層
29 炭化物層　土師器片を含む
30 暗茶褐色粘質土　溝8、玉砂利、多量のシルト岩粒、ブロックで黄色土を含む
31 炭化物層　粘質、土師器片を含む
32 黄褐色シルト岩層
33 明茶褐色弱粘質土
34 黄褐色シルト岩層　灰茶色粘土が混入、土師器片を含む
35 明灰褐色粘質土　小玉砂利、土師器片を含む
36 炭化物層
37 明茶褐色弱粘質土　多量のシルト岩粒を含む

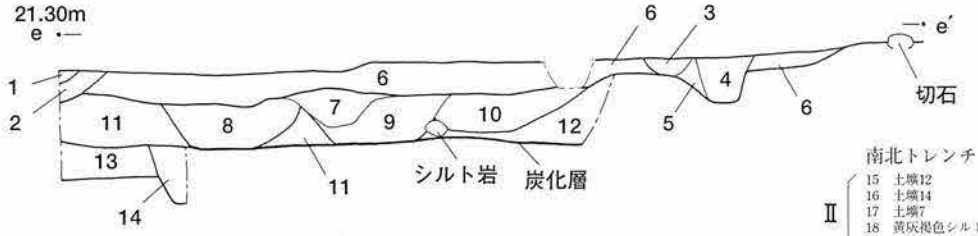
東西トレンチ

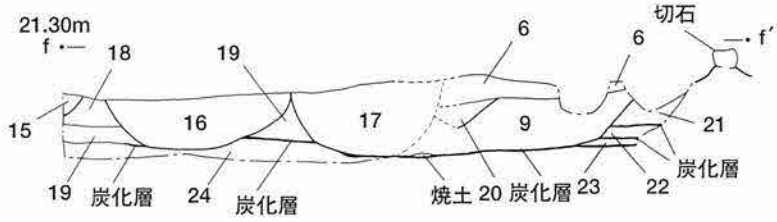
Ⅰ
1 明灰褐色砂質土（西面7と同一）
2 土壙1

Ⅱ
3 黒褐色弱粘質土　シルト岩粒を多量に含む
4 赤褐色粘質土　土師器片を含む
5 黒褐色弱粘質土　土壙9
6 灰褐色弱粘質土　土師器片、多量の中小シルト岩塊粒を含む

Ⅱ'
7 灰黒色弱粘質土　土師器片、非常に多量の炭化物を含む
8 土壙4
9 土壙5
10 土壙6
11 黄褐色弱粘質土　土師器片、多量の中小シルト岩塊粒を含む
12 黄褐色シルト岩層

Ⅲ
13 黒褐色粘質土　褐鉄を含む
14 暗茶褐色弱粘質土　土師器片、褐鉄、玉砂利を含む





南北トレンチ

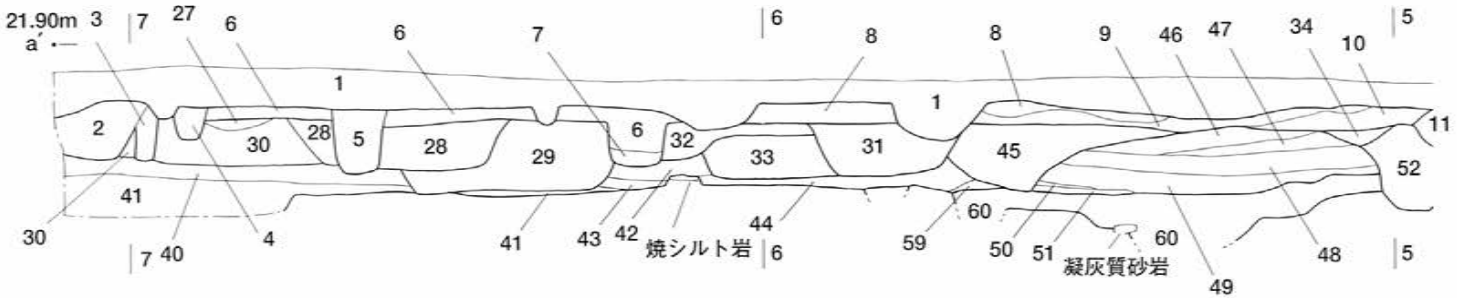
Ⅱ
15 土壙12
16 土壙14
17 土壙7
18 黄灰褐色シルト岩層　地業（南面18と同一）
19 明黄褐色シルト岩層　地業（南面19と同一）
20 灰褐色弱粘質土　多量の中小岩塊粒を含む

Ⅱ'
21 シルト岩層　大シルト岩塊を含む
22 シルト岩層　上部シルト岩が焼けている
23 シルト岩層

Ⅲ
24 シルト岩層　土師器片を含む

0　2m

図35　1区各面土層図

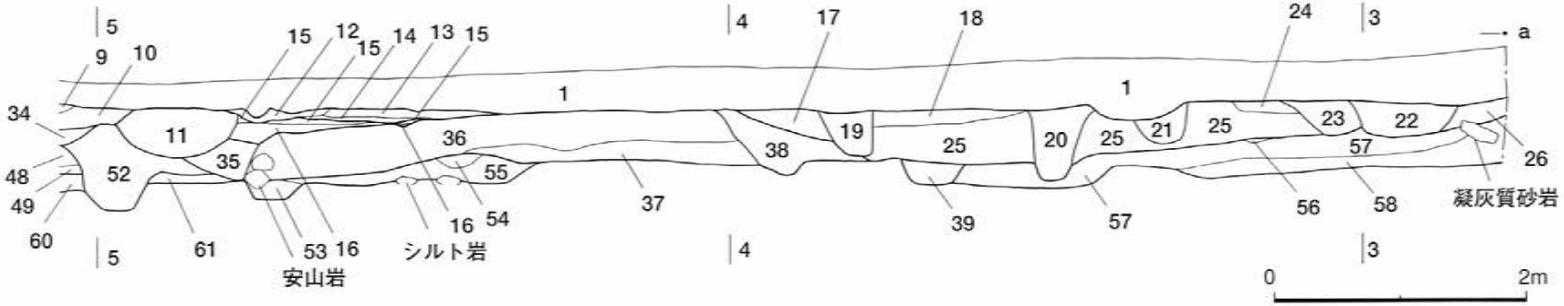


Ⅰ
1 耕作土
2 茶褐色粘質土　中小シルト岩塊を多量に含む
3 茶褐色弱粘質土　小シルト岩塊を多量に含む
4 茶褐色弱粘質土　焼シルト岩塊を含む
5 褐色弱粘質土
6 褐色土　小シルト岩塊を多量に含む、固い。シルト岩版築
7 明茶褐色土　小シルト岩塊を多量に含む、固い。シルト岩版築
8 黄褐色土　中小シルト岩塊粒を多量に含む
9 明褐色粘質土　土師器片、粒、炭化物、多量の小シルト岩塊、粒を含む
10 明褐色粘質土　内容物は9と同じだが、こちらの方がやや多い

Ⅰ
11 土壌15
12 赤褐色粘質土　焼シルト岩粒を多量に含む
13 炭化物層　シルト岩粒を含む
14 茶褐色粘質土　粘性強い
15 炭化物層　茶褐色粘質土ブロックを含む
16 橙褐色弱粘質土　焼シルト岩粒を含む
17 明茶褐色粘質土　小シルト岩塊粒を多量に含む
18 茶褐色弱粘質土　炭化物、土師器片、粒、多量の中小シルト岩塊粒を含む
19 明茶褐色粘質土　中小シルト岩塊、多量のシルト岩粒を含む、上部、小シルト岩塊が集中

Ⅰ
20 明黄褐色弱粘質土　全体的にシルト岩塊粒がつまっている土師器片を含む
21 黄褐色粘質土　炭化物、土師器片、多量の小シルト岩塊粒を含む
22 溝4
23 明褐色粘質土　小シルト岩塊粒を多量、特に下部に含む
24 茶褐色粘質土
25 明黄褐色粘質土　全体的にシルト岩塊粒がつまっている土師器片を含む
26 明褐色粘質土　小シルト岩塊粒を多量、暗褐色粘質土を所々ブロックで含む

Ⅱ
27 赤褐色粘質土
28 土壌24
29 土壌23
30 明褐色弱粘質土　中小シルト岩塊を多量に含む
31 土壌20
32 土壌22
33 土壌21
34 茶褐色粘質土　土師器片、粒、炭化物、多量の小シルト岩塊を含む
35 溝3（道状遺構1側溝）
36 茶褐色弱粘質土　大シルト岩塊を多量、土師器片、凝灰質砂岩、5cm大の玉砂利を含む



Ⅱ
37 暗褐色弱粘質土　土師器片、炭化物を含む
38 溝2（道状遺構1側溝）
39 褐色粘質土

Ⅲ 道状遺構2
40 明褐色弱粘質土　小シルト岩塊粒を多量に含む
41 黒褐色粘質土　小シルト岩塊を一部ブロックで含む
42 黒褐色粘質土
43 明褐色弱粘質土　中シルト岩塊を多量に含む
44 明褐色粘質土
45 溝5
46 赤茶褐色弱粘質土　炭化物を多量、黒色土をブロックで多量に含む
47 赤茶褐色弱粘質土　玉砂利を含む
48 黒褐色弱粘質土　小シルト岩塊粒、炭化物を多量、土師器片玉砂利を含む
49 黄褐色粘質土　中小シルト岩塊粒を多量に含む
50 暗褐色粘質土

Ⅲ 道状遺構2
51 明黄褐色粘質土
52 溝4
53 褐色粘質土　玉砂利を含む
54 茶褐色粘質土　粘性強い
55 茶褐色粘質土　土師器片を含む
56 明黄褐色粘質土
57 暗茶褐色粘質土　大小シルト岩塊粒、炭化物を多量土師器片を含む
58 明褐色粘質土　土師器片、小シルト岩塊、多量のシルト岩塊を含む

Ⅳ
59 赤茶褐色粘土
60 黒褐色粘質土
61 明褐色粘質土　小シルト岩塊粒を多量に含む

図36　2区南壁土層図

第四章　まとめ

本調査には深度規制があり、年代的にも南北朝期以前の層に達することはできなかった。また、調査区の範囲が狭いうえ二つに分かれていたため、満足できる資料が得られたとは言いがたい。しかし室町時代初期の資料として、炭化層の広がりや道路遺構などを確認することができた。ここではいくつか気付いた点を指摘して、まとめとしたい。なお調査した層の年代はいずれも15世紀に属している。

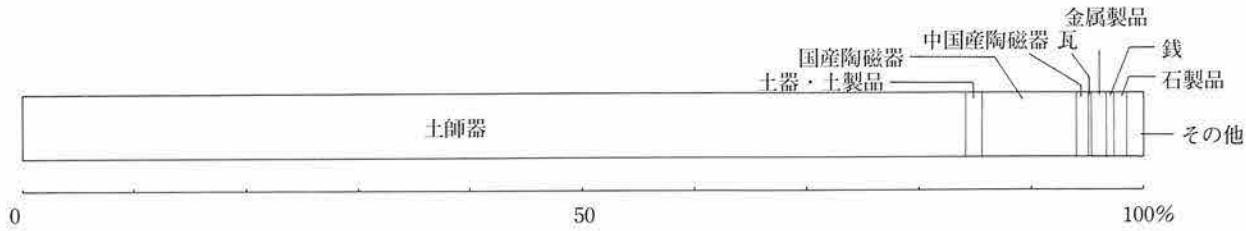
炭化層について

１区２区両方にわたって炭化層が確認された。おそらくこれは火災の痕跡であり、だとすれば全面に広がっている可能性がある。残念ながら、これ以下は規制値を越えるため掘削できず、その前後における遺構の性格差などの検討はできなかった。問題はその炭化層の年代である。

図30をみてみよう。まず土師器だが（３～11)、小型品の主体をなすとみられる４・５・７・８は、やや器肉が厚く、口径／底径／器高の平均はそれぞれ8.3／4.7／2.2㎝となる。７・８で特徴的なことはロクロ糸切部分の径が小さく、体部下半の屈曲部からかなり窄まった形になることである。全体的には南北朝期頃までに普遍的にみられる、内湾する器形を引きずっているといえる。ここには口径11㎝の中型品もあるが（９)、これも器形的には鎌倉後期～南北朝期のものに共通する。大型品（10・11）の器壁はわずかに外反気味になるもののその程度は炭化層より上で出土したものほどではなく、また、上層で一般的であったものに比べると器高が低い。以上を要するに、これらは15世紀に主体をなす一群よりも一段階古式の様相を持つということになる。一方瀬戸を見ると、生産地編年からいって14世紀代に遡らせるのは無理ではないか。とすると、いささか強引な言い方になるが、この一群の遺物は15世紀初頭ごろに主体があると考えるのが妥当であろう。そしてさらに言えば、15世紀初頭にこの谷でおきた火事とは、まず応永二十三年（1416）の「上杉禅秀の乱」であるとみてよいのではないか。当然、この炭化層出土遺物にはきわめて良好な一括性が認められることになる。今後はこれらの遺物が、編年の有力な手掛かりとなりうるだろう。また土師器のなかに、灯明皿に使われたらしい油煤の付着したものの多いことは注目しておきたい。使用形態の変化がそこに示されているかも知れないからである。

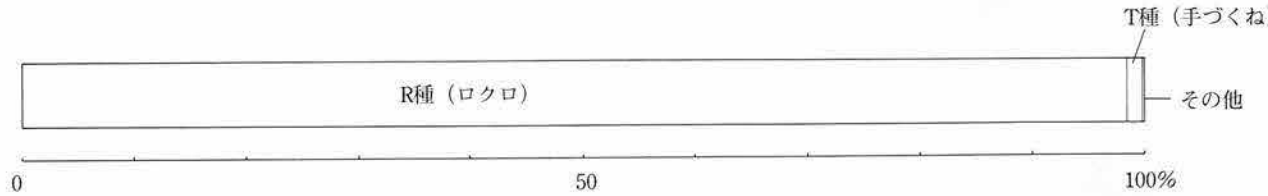
道路について

Ⅲ面で検出された道状遺構を取り上げておきたい。１区と２区双方にあるが直線的にはつながらず、互いの延長が来るべき場所にそれらしきものがないので、両者間の未調査区のどこかで屈曲するか、あるいは虎口のように食い違っている可能性もある。注意しなければいけないのは、２区検出の道を谷奥の平坦面３に向かって延長すると、西側の山裾近くを通ることである。つまり本調査区の平坦面２においては東寄りを通り、次には西寄りに主軸をずらしていることになる。これがもし事実ならば、谷戸占地のあり方として、興味深い例が示されたことになる。



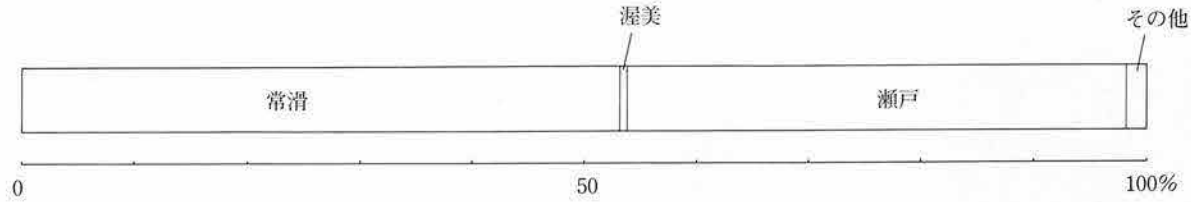
	土師器	土器・土製品	国産陶器	中国陶器	瓦	金属製品	銭	石製品	その他	計
点　数	2907	53	288	36	10	92	25	39	51	3455
百分率	84.14	1.53	8.34	1.04	0.29	4.36	0.72	1.13	1.48	100.00

表21　調査区全体遺物構成



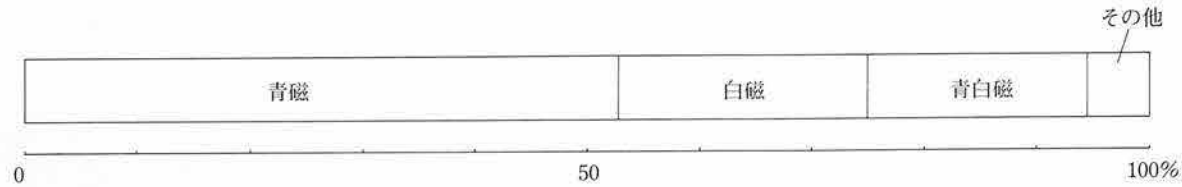
	R	T	その他	計
点　数	2862	39	6	2907
百分率	98.45	1.34	0.21	100.00

表22　土師器技法別構成



	常滑	渥美	瀬戸	その他	計
点　数	153	2	128	5	288
百分率	53.13	0.69	44.44	1.74	100.00

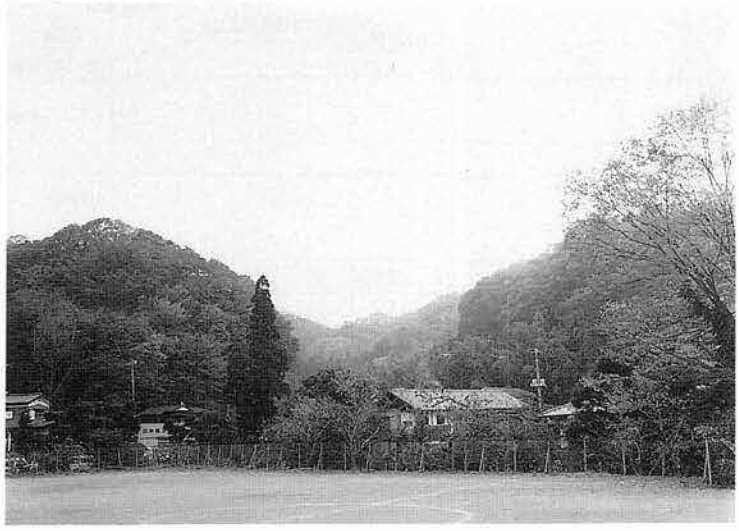
表23　国産陶磁器器種構成



	青磁	白磁	青白磁	その他	計
点　数	19	8	7	2	36
百分率	52.78	22.22	19.44	5.56	100.00

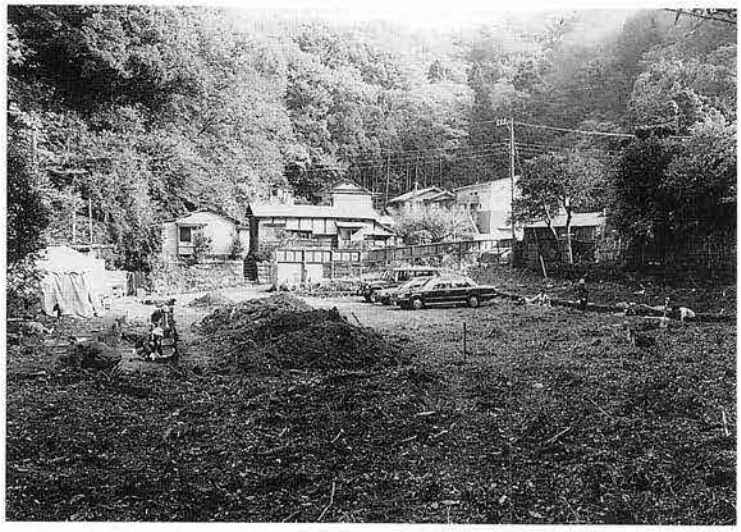
表24　中国産陶磁器器種構成

図版 1

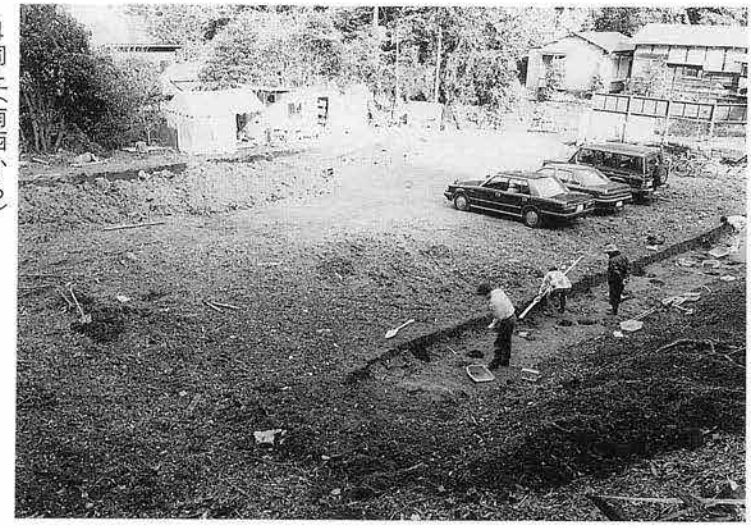


1 犬懸ヶ谷遠望(杉本寺周辺遺跡から)

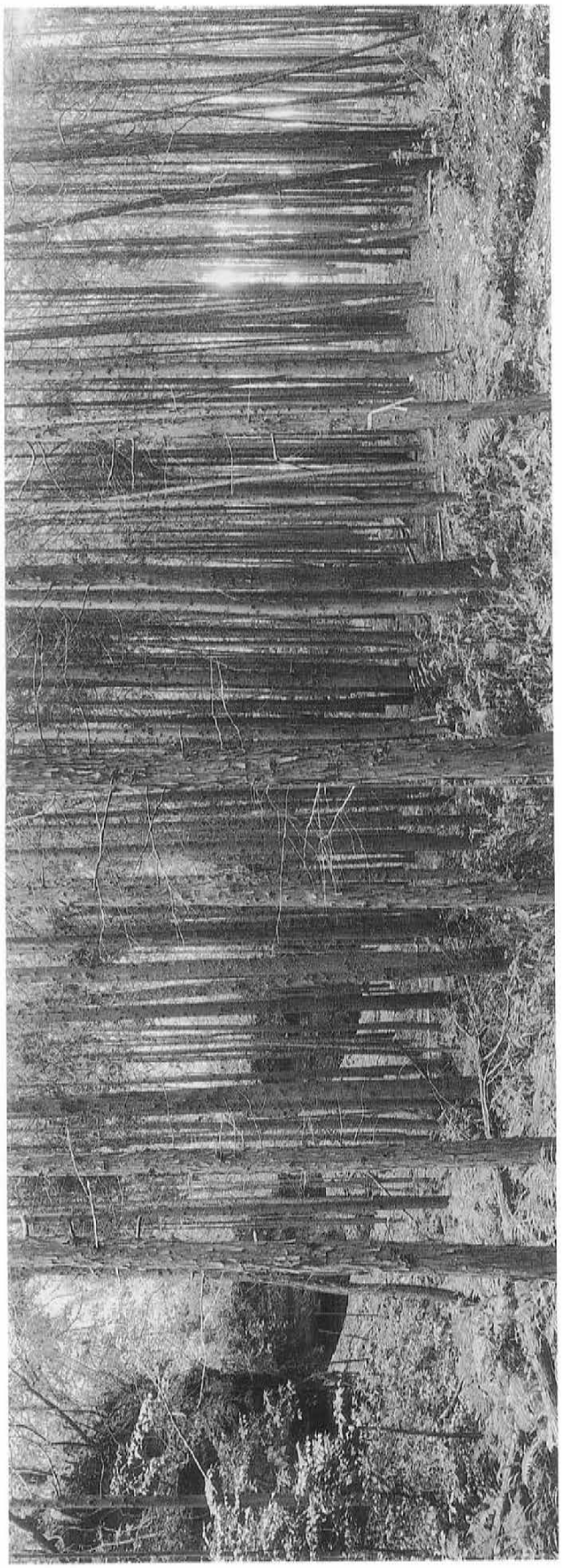
2 犬懸坂(前方カーブ右側が調査地点)



3 調査地点近景(北西から)



4 同上(南西から)



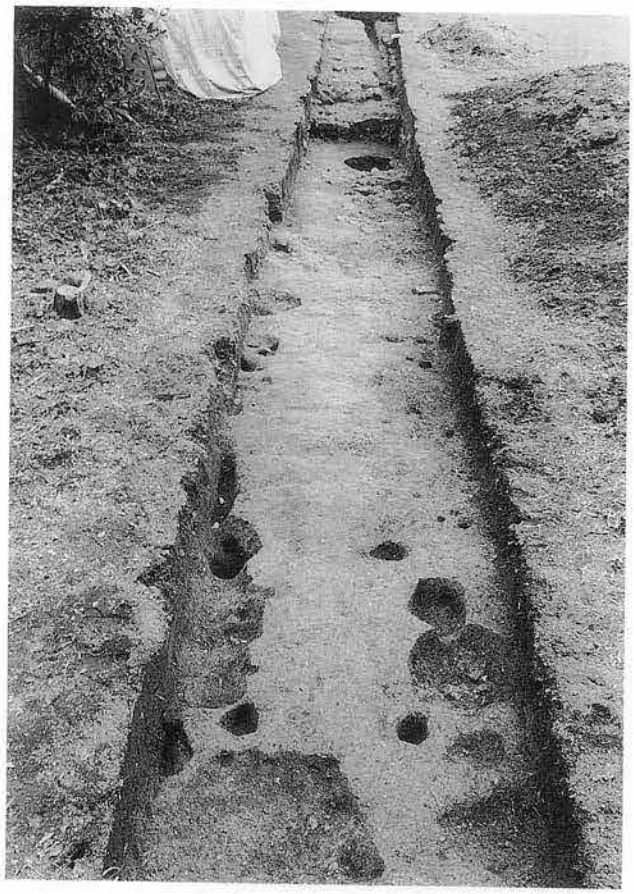
１谷最奥部平垣面５（谷尻から）

２同平垣面５入口のやぐら（西から）

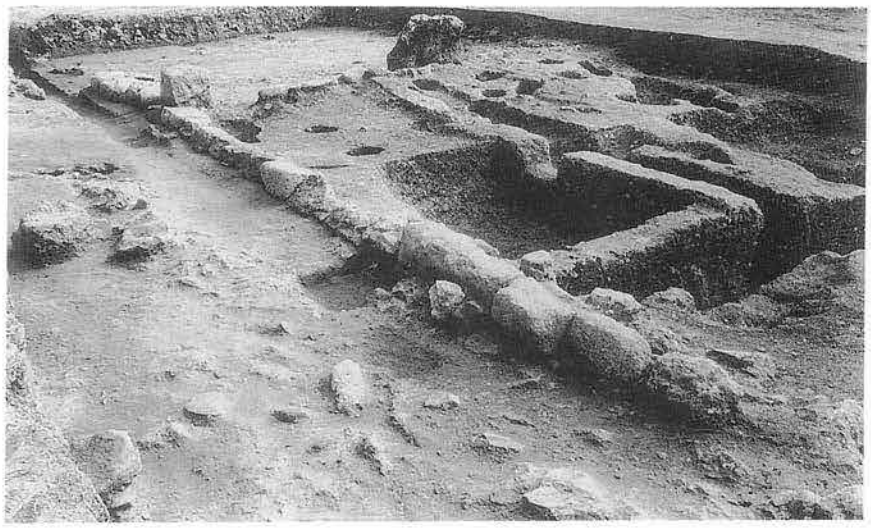
図版３

１区Ⅰ面全景（拡張前東から）

２同上（西から）



３同東半部（西から）



1区Ⅰ面全景（北西から）

21区Ⅰ面切石列（北から）

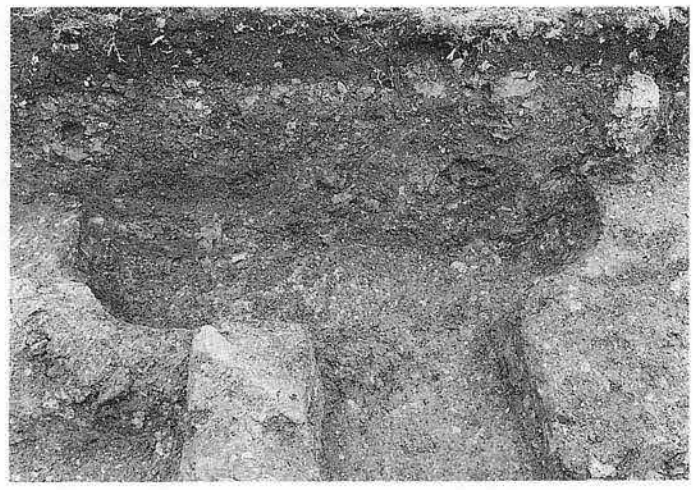
31区Ⅰ面全景（北東から）

図版５

１２区Ⅰ面全景（東から）

２同上（西から）

３２区Ⅰ面下土壙



４２区Ⅰ面下土壙

1区II面土壙群(西から)

2同上(北東から)

3 1区II面土壙

図版７

１２区II面全景(西から)

２同上(東から)

３２区東辺部II面下遺跡出土状況

1・2区Ⅲ面全景(東から)

3同東辺部

2同上西辺部

図版９

12区Ⅲ面道状遺構1（北から）

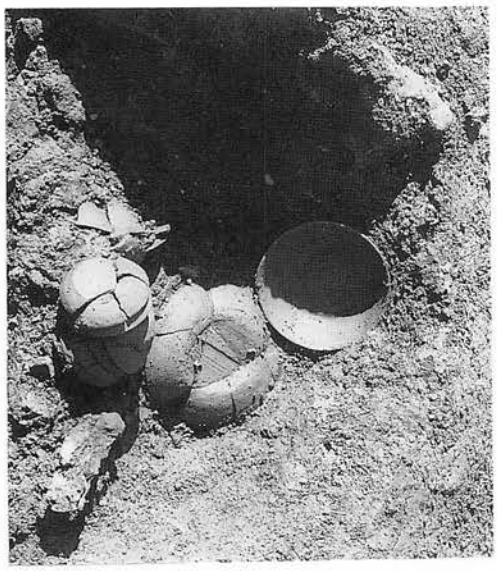
22区Ⅲ面土壙（北から）

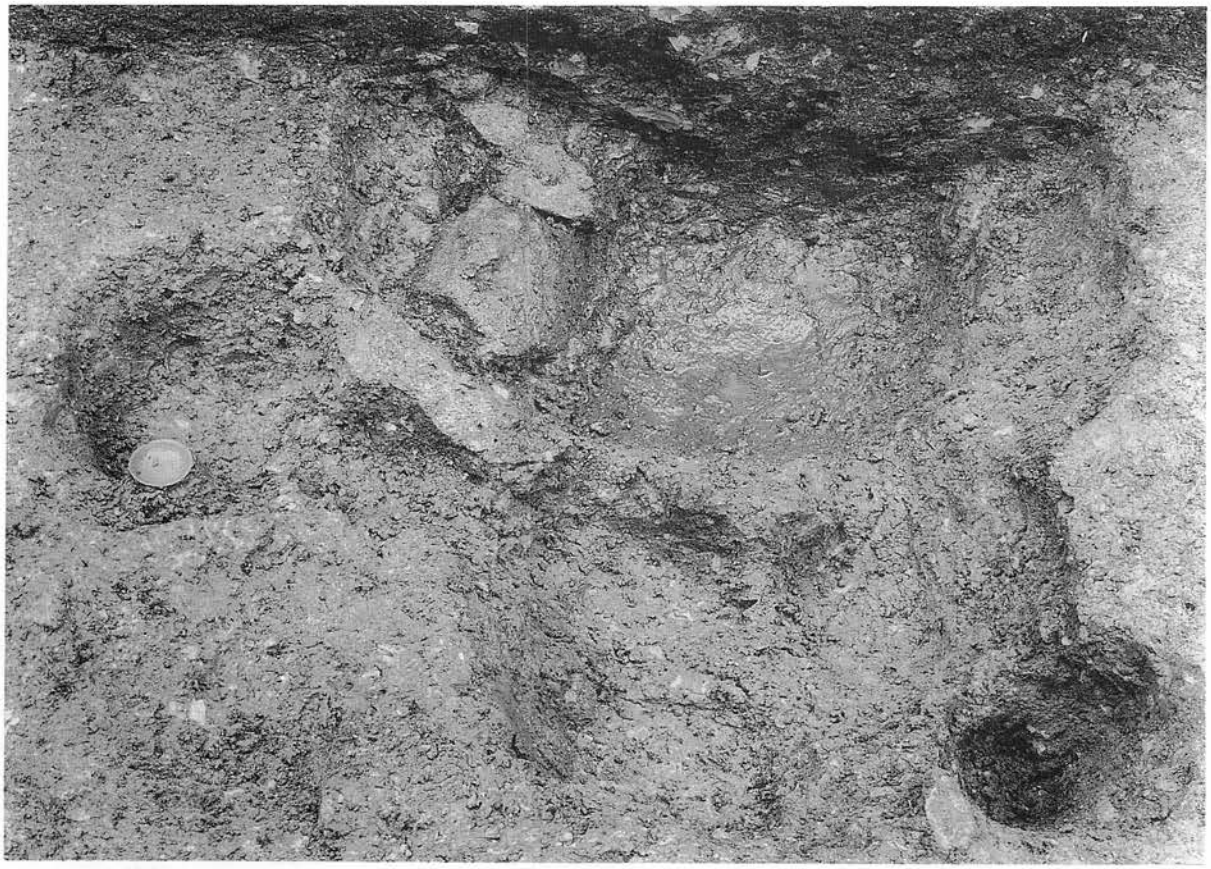
32区Ⅲ面道状遺構2（北から）

１１区西端深掘部(東から)

２１区Ⅲ面下(北から)

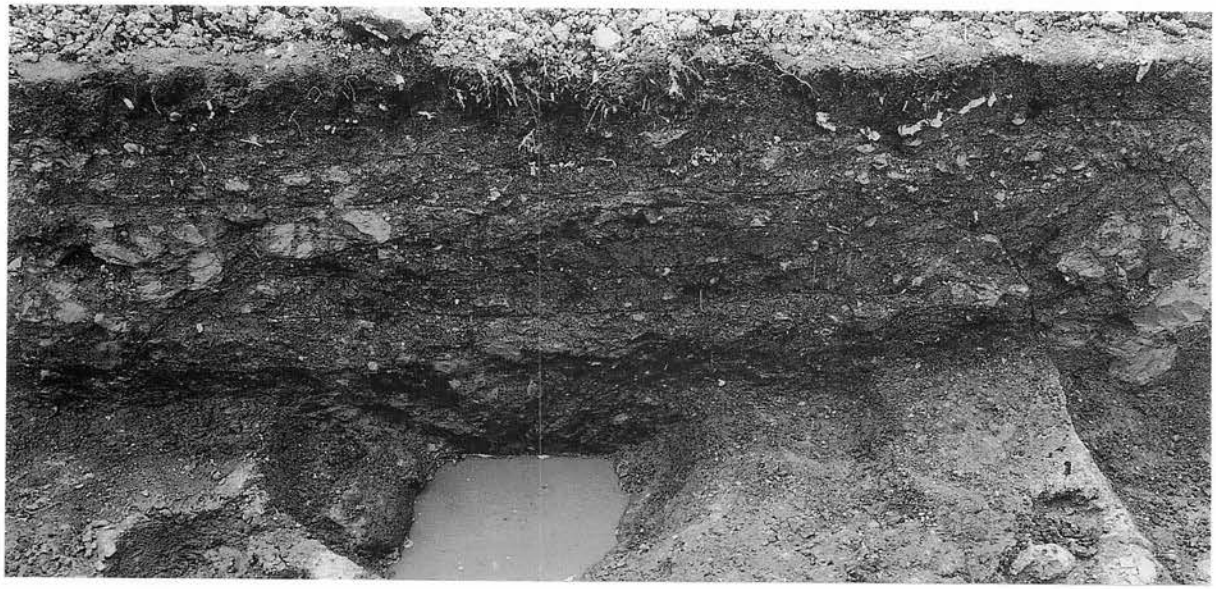
３１区Ⅱ面土師器埋納遺構





１２区Ⅲ面土壙

２２区Ⅲ面道状遺構土層断面

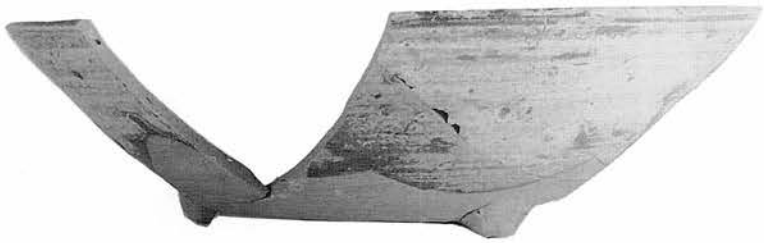


1区Ⅰ面(図19)
2区Ⅰ面(図12)
土壙3(図15)
2区Ⅰ面(図12)
土坪9(図15)

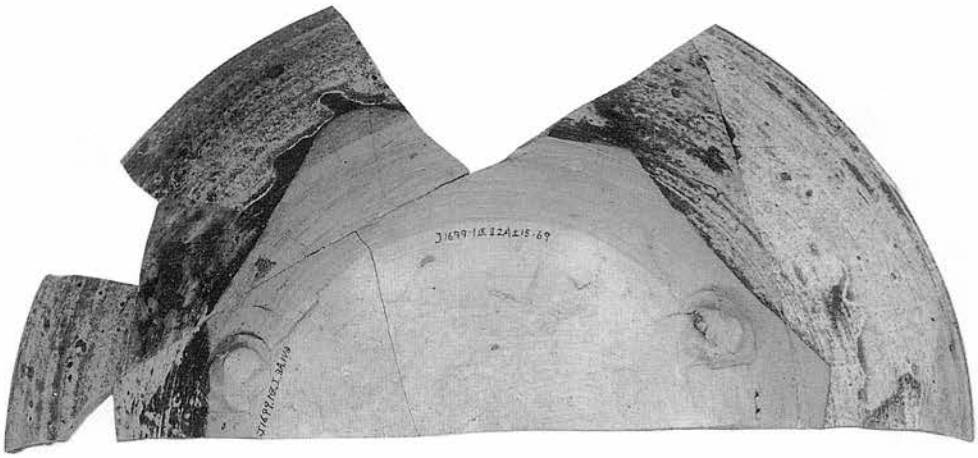
図版13

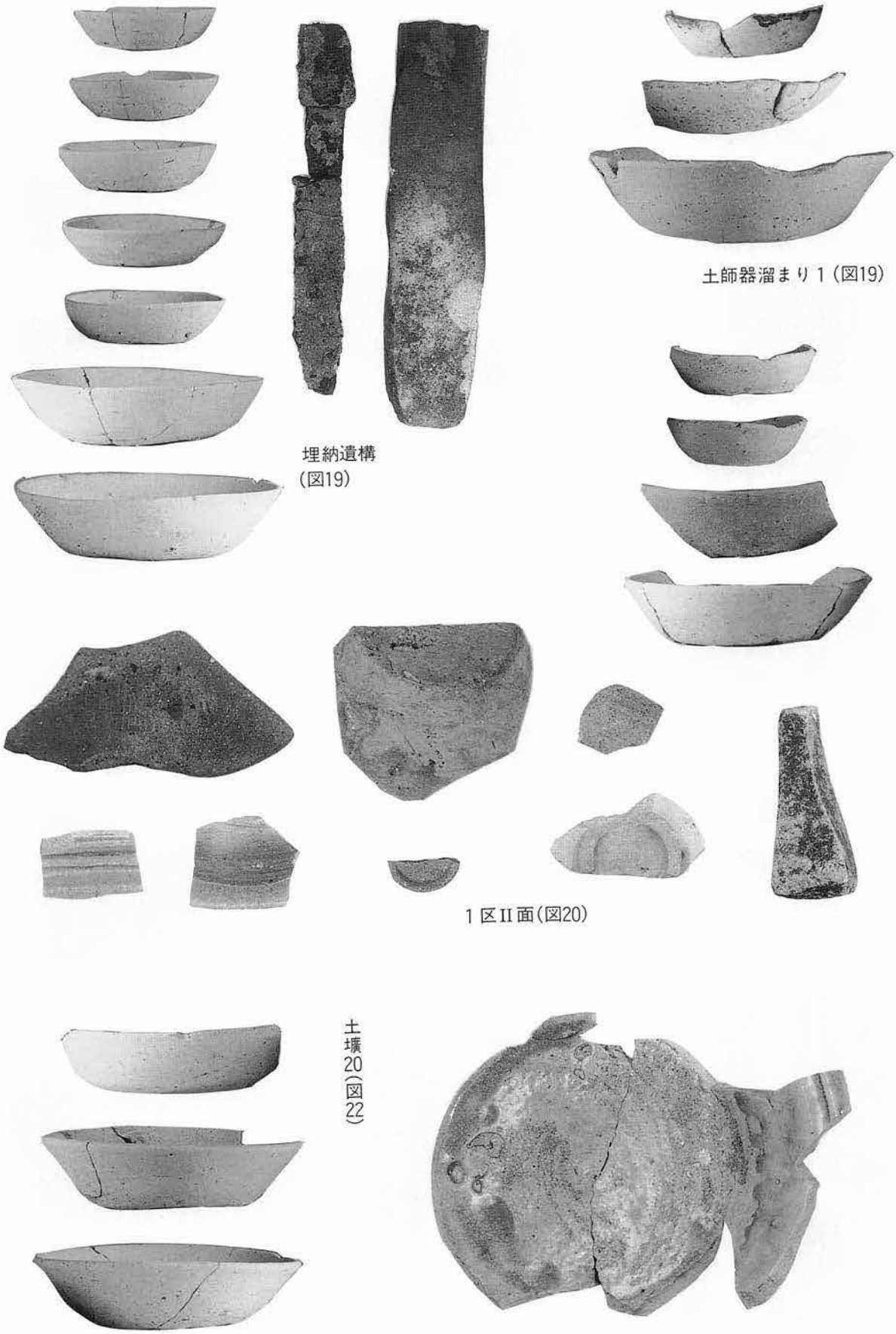
土壙５（図17）

土壙４（図17）

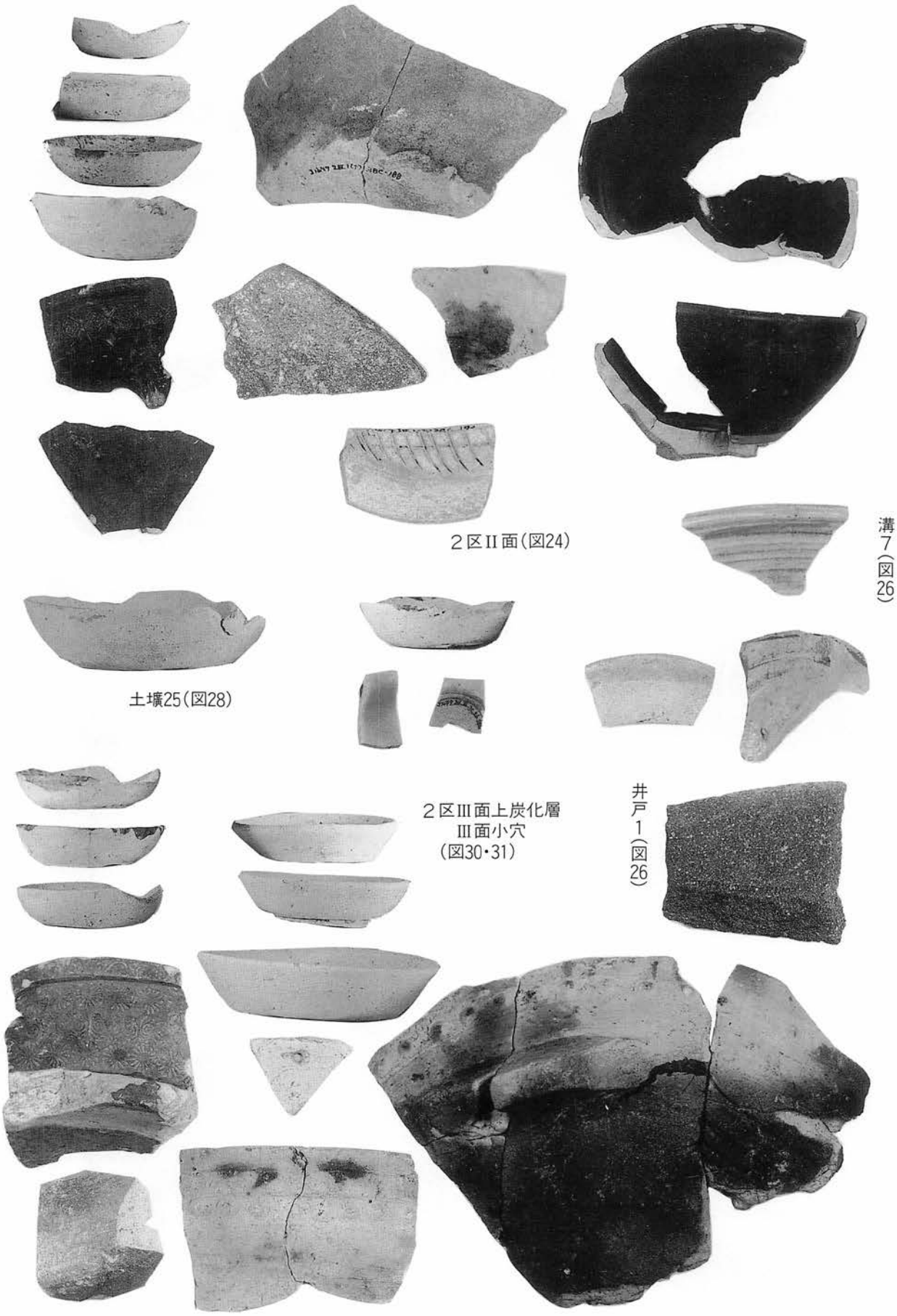


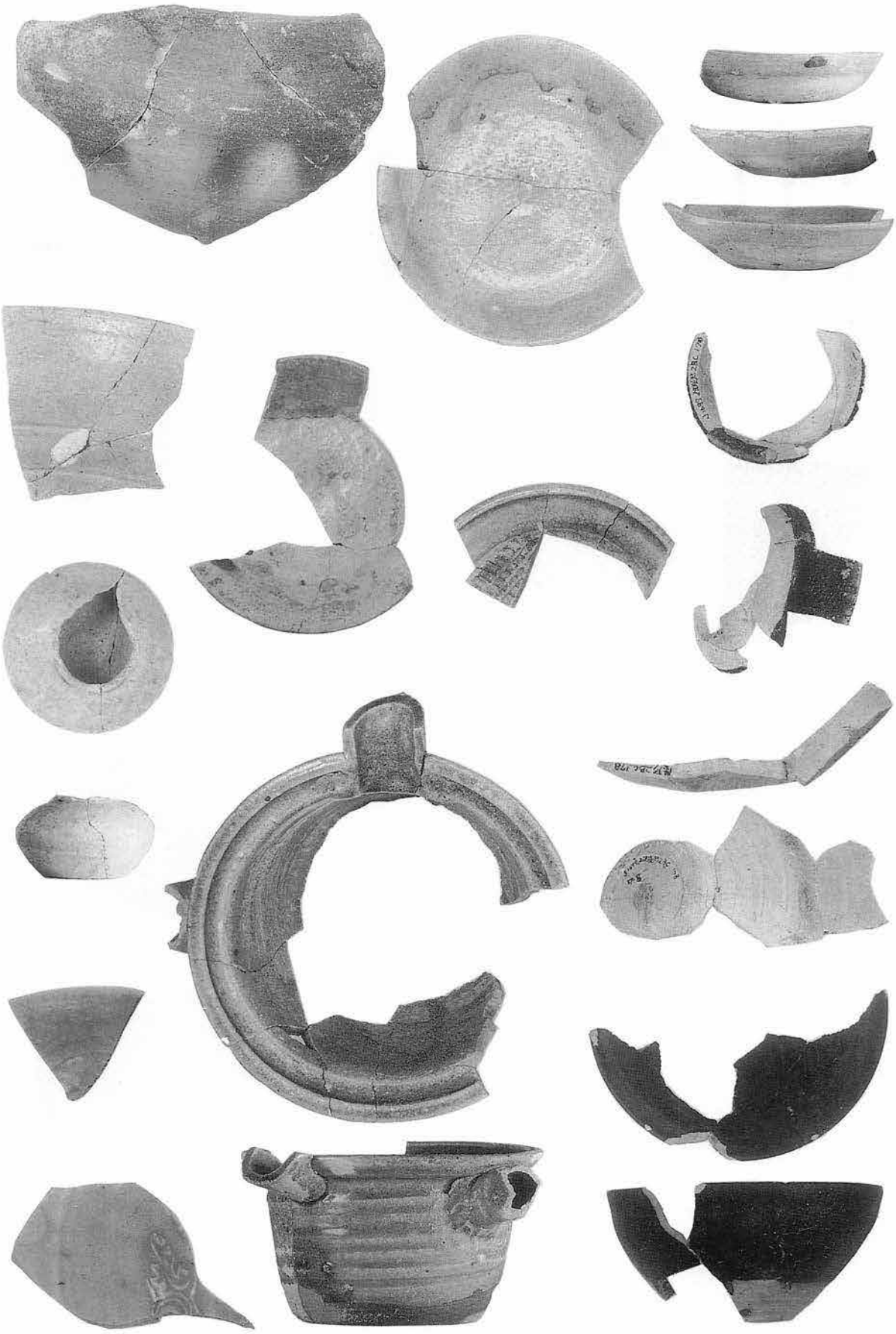
土壙14（図18）



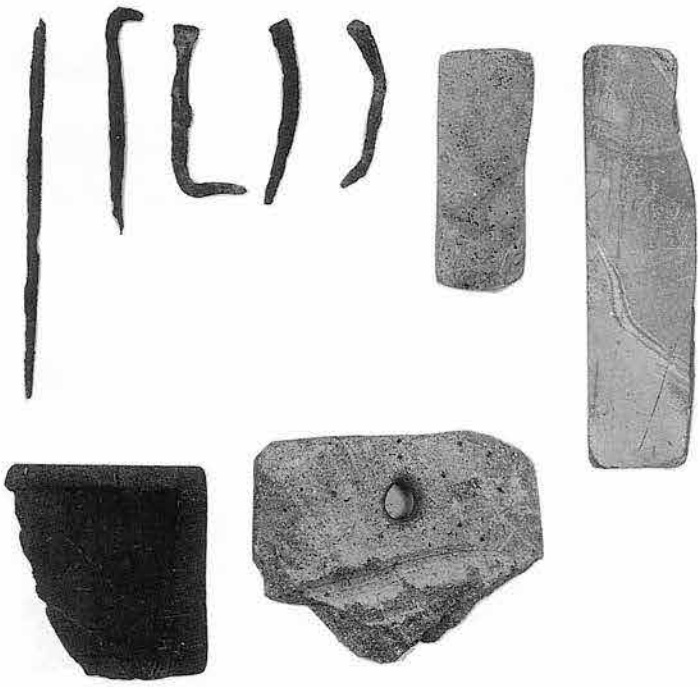

土師器溜まり1(図19)
埋納遺構
(図19)
1区II面(図20)
土壙20(図22)

図版15





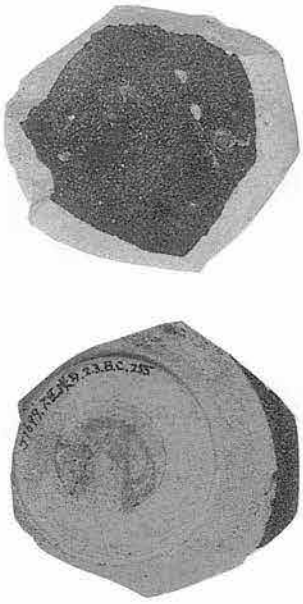
2区Ⅲ面上炭化層・Ⅲ面小穴(図30・31)



2区Ⅲ面上炭化層・Ⅱ面小穴(図30、31)

1区Ⅲ面(図32)

底部12花押のある瀬戸碗



報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちょうさほうこくしょ
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
副書名	
巻次	第2分冊
シリーズ名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書
シリーズ番号	11
編集者名	馬淵和雄
編集機関	鎌倉市教育委員会
所在地	〒248 神奈川県鎌倉市御成町18番10号
発行年月日	西暦1995年3月

ふりがな 所収遺跡	しょざいち 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
うえすぎうじのりていあと 上杉氏憲邸跡	神奈川県鎌倉市浄明寺一丁目	204	258			19931125～ 19931130	30	自己用住宅併用共同住宅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上杉氏憲邸跡	城館跡	15世紀代 (室町時代前半)	道路状遺構 溝・井戸・土壙	かわらけ、常滑、青磁、古瀬戸、石製品、鉄製品等 テンバコ2箱	「上杉禅秀の乱」の火災（1417）と推定される炭化物層を確認。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　11

平成６年度　発掘調査報告（第２分冊）

発 行 日　平成７年３月

編　　集
発　　行　鎌倉市教育委員会

印　　刷　朝日オフセット印刷株式会社